
魔法少女リリカルなのは～少年の願ったり叶ったりの世界！？～

ブラックサレナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜少年の願ったり叶ったりの世界！〜

【Nコード】

N8551L

【作者名】

ブラックサレナ

【あらすじ】

オリ主のリリカルなチートと、愉快的ハーレムのお話です。

主人公はリリカルなのはの世界に転生する物です。

さらにこれが処女作のため性格や口調が変わったりしますがご了承いただければ幸いです。

ホントにこれしか説明がありませんが宜しくお願いします。

第零話。始まりは心臓マヒ（前書き）

始めまして、初投稿です。この作品はオリ主最強、そしてハーレムです。苦手な方はご遠慮ください。

まだまだ初心者ですが頑張って行きますので宜しくお願いします。

第零話。始まりは心臓マヒ

俺は不動貴ふどうきい一現在絶賛ヲタクきたくをしている。今日も高校が終わり直帰で家に帰りギャルゲギャルゲをしている。

「さて、今日はタマ姉でも攻略でも、ってあれなんか意識が・・・」
今、俺は見知らぬ天井じゃなく、見知らぬ空間にいる。え、なんで空間なんだってそれはなぜか雲の上みたいなところに浮いているからだよ。さて、思い返してみよう。確か家に帰って直ぐにゲームを起動したらここに・・・もしかして俺

「はい、死んでます」

「ですよねーって、誰あんた？」

俺が独り言をいっていたら目の前にやたら露出の高い若い女性がいきました。

「えーと、もしかしてお迎えですか？」

俺は恐る恐る聞いてみるといきなり

「申し訳ありませんでした。」

と、いきなり謝られた

「えーと、どうして謝っているんですか」

「はい、実は私はその一介の神様をやっているマリアと言うんですが、私が人の寿命に関する資料を見ていたとき誤って貴方の所を切ってしまいました。そのせいでその死んでしまいました。本当に申し訳ありませんでした」

えーと状況を確認するとこの人は神様でそのミスで俺が死んだか。

「は、まあ起きたことはしょうがない、それで俺は地獄と天国とつちに行くんだ？」

「え、よろしいのですか。殺しちゃったんですよ？」

「言ったる、起きたことはしょうがないと。」

「あのですね。今回は私のミスなので他の世界に転生して頂こうかと」

「はあ？、転生？ってよくネタとかあの転生？」

「はい」

なんだこの人凄いエガオDA。

「それで、今回は私のミスなのでいろいろとチートのな力も授けますので」

「チートのって・・・」

俺は少し半信半疑なんだが

「あゝ信じてないなゝいいもん。なら好きな能力言ってみなよ。全部叶えてあげるよ。」

なんか、この人、もとい女神キャラが変化したな

「そんなら、王の財宝と、ゲートオブパピロン考えたらそれがそのまま出てくるみたいな能力かな、」

「うん、うん、簡単簡単、他は知能と魔力値とか身体能力は？」

「あの金色のガツシユにあつた「答えを出す者ですね」ああ、それと」

(なんで知ってんだよ。まあ、いいか)

「それと身体能力と、魔力値は最強てか、無限に近い状態で。」

「了解です、それでは新しい世界でがんばってください、このたびは申し訳ありませんでした。それでは次目覚めたら貴方は赤ん坊ですので、本とに申し訳ありませんでした。」

「ああ、じゃあな。」

二回目の人生か、てか赤ん坊！！

「まで、赤ん坊って！！」

「はい、あ、記憶はそのままですけど、体はちゃんと成長しますので、赤ん坊からですので」

「な、聞いてえ・え・y」

そして俺は二度目の意識を飛ばした。

第零話 始まりは心臓マヒ（後書き）

あとがき、それはちょっとしたラジオスペース。

みたいになりたいと思っています。え、初心者じゃ無理だつて、
うん、めげないよ俺は。

すいません、そして始めましたブラックサレナです。

そしてこの作品を読んでくださってありがとうございます。

まだまだ始めたばかりですがどうぞ宜しくお願いします。

ちなみに冒頭の部分はちょっとした願望なので気にしないでください。

それでは次回もサービス サービス

第巻話 この少年実際、いい歳！？（前書き）

一話掲載です

以上です

第巻話。この少年実際、いい歳!?

不破貴一改め、星川貴一現在四才。え、なんで三才までが無いってそりゃ、意識がはつきりしているの三才児は死ぬほど恥ずかしいんだよ。

そんなこんなで今は地球のあの町に住んでいる。

現在は星川家の一人である。結局あの、マリアとか言う神様の言っていた通り違う世界に転生した、それにチートの能力も本物だった。一才の時に試しにネギまのあの別荘を創造したら出来てしまったし、自分の好きな時に消せる、うんチートだなって思った。

だけど転生した世界がまさかりリリカルなのはの世界とはね……。だって、内の両親、管理局員だし、それに三才の時に魔力測定の検査を内でしたらSSSオーバーだって言われたし、……。チートだな俺。

ちなみに今の両親は管理局のエースらしい、父親は星川勇士で剣術の達人でなんでもアルバートのおじさんの話によると管理局の死神らしい、母親は星川リリであるミッド人でありなんでも最初は父さんの追いかけたらしい……。しかし両者ともにオーバーランクであの二人がいれば最強とアルバートのおじさんがいつていた。

あ、ちなみにアルバートのおじさん(本名ギル・アルバート)とは俺の爺ちゃん代わりであり父さんの師匠だったらしい。今は一線を引き士官学校の校長をしているらしいがなんでも提督らしい?、まあこんな感じで今の俺は充実している。それに今日はいつとも仕事でいない両親が帰ってくるらしい、楽しみだな。

え、お前の本当の歳を考えると問題があるって、そんなの知るか、甘えたい時に甘えさせる。それに内の両親は両方とも親ばかりでもあ、どれぐらい甘いかと大福を砂糖漬けたぐらい甘いし、緊急の任務も「今は貴一と食事中だぞ。お前からどうにかしろ」なんて言っているぐらいだし……。お、来た来た。そしていつもの通り転送

用の魔方陣が光、両親がかえ・・・

「た、ただいま、きいちゃん」

そして帰ってきたのは、少し血の気の無い母さんだった。

「おかえり、母さん、ねえ、父さんは？」

少し最悪の考えをしてしまいがら聞いてみた。

「っ！、お父さんはね、はあ、しょうがない。きいちゃん。その一
緒にきて」

そういつて少し涙が出ていた母さんの手に連れられて魔法陣の中に入
った。

そしたらある病室の中だった。そしてそこで見たのはベットで読書
している父さんだった。

「父さん、どうしたのまさかどっか怪我したの」

俺は居ても立っても居られずすぐに父さんの傍に行った。

「お父さんな、もう魔法使えなくなっちゃたんだよ」

そう言つて少し遠くを見ながら俺にいつてくれた。

なんでも任務中の仲間を龍種から守るために無理やりデバイスなし
に魔法を行使したためリンカーコアと呼ばれる魔法使いには無けれ
ばならない機関が逝かれたらしく、もう引退しか無いらしい。

“ガチャリ”

扉が急に開き、

「勇士、大丈夫か？」

そう言っつてアルバートのおじさんが怒鳴り込んで来た。

「ああ、師匠。大丈夫ですよ」

父さんはそう言っつているが顔からしてかなり落胆している。

「ああ、お前が無事ならそれでいい」

そう言っつと、

「すみません。ギルさんちよつと」

と、母さんが奥の部屋にアルバートのおじさんを連れて行った。

数分後

少し、いや完全にショックの顔をしたアルバートのおじさんが出てきた。

「すまんが勇士と少し話をさせてくれ」

そう、アルバートのおじさんが言っつと、俺と母さんは病室を出て行った。そしたら、ある人がそこには居た。

第巻話 この少年実際、いい歳！？（後書き）

いきなり、あとがきラジオ

「おい、作者」

「なんだい、貴一君」

「何だじゃねえだろ。いきなりなんだこれは」

「前の零話に書いたよ。ラジオスペースにしたいって」

「確かにかいたな、確かに。だがな一話からする必要があったのか？」

「善は急げとも言うしね」

「急がば回れとも言っただぞ」

作者に500ダメージ

「しかしまだ、終わらんよ。フッフ」

「気持ち悪いっての、まあいい、それでどうすんのこれから」

「いや、なんか質問とかあればそれに答えるとか・・・」

「なんも考えてねえじゃん。まあ仕方ないか。」

「なのでいろいろと意見や要望をください」

「うわ、他人任せかよ。しかしこんな作者だが読者の皆さんどうか見捨てないでやってくれ」

「それでは次回の予告だよ。貴一YOROSIKU」

「気持ち悪いっての、まあいい次回、『急に急なことが急に決まった』そんなわけでこれからもよろしく」

「それでは」

「次回に」

「「会いましょう。バイバイ」」

第弐話。急に急なことが急に決まった（前書き）

弐話掲載です

感想など宜しくおねがいます。

第弐話 急に急なことが急に決まった

Sideギル

リリさんから聞いた時は信じられなかった。しかし事実、勇士からには剣術で磨いた“氣”しか感じなかったから間違いがないのだろう。そしてリリさんと貴一君には出てってもらった。

「勇士、率直に聞こう。どうするのだ。これから」

「師匠、自分はよくわかりません」

「そうか。」

それもそうだろう、今までであった力が突然に無くなったのだからな。

「ですがね師匠、ムーンを貴一に渡したいとは思っているのです。」

そう言った勇士だが、私は驚愕した。それは今までずっと一緒にいたインテリジェントデバイス ムーンソウル を手放すと言うのだ。

「良いのか、勇士それはお前の一番の相棒なんだぞ」

「ええ、もう俺が持っていても宝の持ち腐れですし、師匠知っていますでしょう。貴一は普通のデバイスではたぶんもちませんから、それにあいつならムーンも心おきなく継承できます」

「ま、まで確かに貴一君は素晴らしい才能の持ち主であるし並大抵のデバイスではもたないだろうが……」

私は少し混乱しているが、ベットの傍に置いてあった指輪のムー
ンに聞いた。

「ムーンそれでお前はいいのか？」

「ギル殿、それはマスターが決めたことである。それにギル殿も分
かっているでしょう。マスターは私を使うことが出来ないことも
ムーンは少し悲しそうだった、ここまでAIを成長させるにはそれ
ほどの年月をかけて作り上げた賜物でもあった。それほどまでに
一緒に居たデバイスももう使えないとなるとわな。

「それでお前はどつするのだ？まさか」

再度の確認であるがたぶんこれが最良の選択なんであろうな。頭で
は理解出来ているのだがな・・・

「その〜ギル殿それは廊下に出ている坊ちゃまとリリ様と一緒にで
そうムーンが言うので

「分かった。それでは二人を呼ぼう」

S i d e o u t

今、俺はギルのおじさんも言う通り廊下を出たらそこには転生前か
らよく知っている人がいた。それに気づいた母さんが少し表情を出
さないようにしながら

「リンディ、来てくれたのね。」

そうあのアースラの艦長となる人。リンディ・ハラオウンであった、なんでも母さんと父さんは同期らしい。

「ええ、聞いたわ。勇士くんのことを」

「そう、あのね。来て早々悪いんだけどお願いがあるの」

「いいわよ。こんな時ですし、何かしら？」

「船をね、一つ用意してくれないかしら」

「どうゆうことが、聞かせてくれないかしら」

船を一つ？母さんが言うのだから時空船なんだろうか？どこかに行くのかな、しかし旅行ならここまで暗そうにこちらをチラチラ見ないだろうし、いったいなぜ？

「あのねリンディ覚えているかしら。あのミッドの事件」

「ええ、三年前かしらね。あの次元犯罪者グループの一斉の管理局への復讐事件でしょ。だけどあれは貴方と勇士君が起きる前に解決したじゃない、今さらどうしたの？」

そんなことをしてたのかよ。俺が一才の時に・・・

「ええ、あの後ミッドの政府から謝礼として内の夫はある権利を貰ったのよ」

そう言つと母さんは少しこっちを見た気がした。

「その権利はね、一、時空船の保有の権利。二、時空船の自由運航の権利」

「あら、そんなのを貰っていたの、」

「ええ、だからお願いできるかしら。」

「分かったわ、それじゃ失礼するわね無事かどうかの確認だったから」

「ええ、ありがとう助かるわ、それと私」

母さんが言い終える前にリンディさんが母さんの唇に指を押し付けて

「分かるわよ、貴方も去るのでしょう。」

「ええ、やっぱりね二人じゃないと」

「ええ、そうよ。だから大事にしないとね。それじゃあね万年新婚さん、貴一君もバイバイ」

そう言つてリンディさんは消えていきました。そう思えばリンディさんは夫を亡くしているんだっけ確か闇の書が原因で、

“ガチャリ”

不意にドアが開き、アルバートのおじさんが手招いていた。

「二人ともすまないね。待たせてしまって」

そう言っつて俺らは病室に入った。

「それでどうするのか聞こうじゃないか」

「師匠、自分は旅に出ようかと思います。」

「ふむ、しかしどうやってだ？」

「はい、自分はミッドの政府からある権利で時空船の自由運航ができるんです」

「そうか、ならなにに迷っておるのだ」

「そ、それはですね「あなた、私から言っつわ「そうか」

いきなり母さんが割り込んでいた。

「実はですね。その権利にも条件がありまして同伴は一人なんです。」

「ああ、そういうわけか、同伴一人ということとはどちらかを置いていくわけだがさっきのリンディさんの会話でわかった。」

「俺なら大丈夫だよ。父さん、母さん。」

「え……」

「大丈夫だよ」

これでいいんだ。ただでさえ育ててくれたんだそんな俺が足を引っ張っているのは心苦しい。

「ふ、はっはっはっは。勇士、リリさん一本取られたな、しかし貴一君は良いのかい」

「うん。それに今の父さんと母さん元気が無くていつもの父さんと母さんじゃないんだもん」

「えーと……」

「くくく、だそうだ勇士、リリさん案外子供の方が鋭いようじゃな、まあ安心せい自立の手伝いはワシがしよう。料理はもうリリさんよりもうまいしう、あまり無いだろうがな」

「それでいいのきいちゃん」

そう母さんが言っているが、

「リリ、私たちは少し甘く見すぎていたようだな、なら貴一よ受け取ってくれ」

そういつて机にあったムーンを取った。

「え、父さんでもこれは」

「いいんだ。もう使えないし他の奴にやる気にもならんしな、そう
だろムーン」

「イエス、ということですよ坊ちゃまよろしくお願いします。いえ新
たなるマスター」

「そうね。なら サン 貴方の貴一に託すわね」

「言つと思つたわよ。主」

「え、え、」

俺は急にいろんなことが進んで分からなくなった。ムーンはわかる
が、何で母さんの相棒のインテリジェントデバイス サン・スピリ
ツツ も俺に託すんだ？

「きいちゃん、このデバイス達はねお母さんとお父さんの結婚指輪
でもあったのよ。離れていても一緒って意味でね、だけど今度はね、
きいちゃんにその思いも渡したいの。だから私のサンもよろしくね」

「そう言うことですよ坊ちゃま。いえ、我が主」

「あと、師匠すみませんが」

「分かっておる。電気代とガス代などの生活費はあそこから持って
いくしそれに管理局の勧誘は私が拒否しておこう」

「ありがとうございます。貴一の魔力だけでも狙われやすいですか
ら、そう言ってもらえるとありがたいです。」

「それでは、私は帰るとしよう」

「そうね、今日は私たちの帰ります。あなたもまだ検査があるので
すから安静にお願いしますよ。」

「ああ、わかっている。それでは師匠、じゃあ我が息子よ。」

「バイバイ」

こうしていろいろと変わり始めた生活が動き出した、しかしその分、
相棒達を俺は手にした。

第弐話 急に急なことが急に決まった（後書き）

あとがきラジオ

「「貴一と作者のあとがきラジオ始まるよ」

「・・・なあ、やめないかこれ」「なんでかね、貴一君」

「反響がまだないからまだいいだろうが」

「う、うるさい、うるさい、うるさい」

「ネタに走るな」

「いつか、いつか感想とかがくるさ」

「その前に文句が来たりして」

「エクスカリバアアアアアアアアアアアア」

「無駄だ、『遠き理想郷』《アヴァロン》」

「なに」

「あんたが考えたんだろうがこの能力」

「しかし、まだ終わらんよ」

「こんな作者は置いといて次回『案外出来る。俺参上!...!』です」

「勝手に予告をするな」

「それではまた会いましょう。バイバイ」

「だから、勝手に閉めるな」

第参話。 案外出来る。 俺参上!!! (前書き)

参話掲載です。

第参話。案外出来る。俺参上！！

そんなこんながあつて、父さんの退院から丸々二週間・・・大変だったよ初めて甘えまくつてもういいやつて思えたよ。

そして今日は父さんと母さんが出発する日になった。

今はとある場所にいる、その中心に魔方陣がありそれが最終関門らしい。ちなみにここはリンディさんが提供してくれたらしい、しかしなんか一悶着あつてアルバートのおじさんの名を出したら一発OKだったらしいが、アルバートのおじさん一体なもの？。そんなことを考えていたらもう魔法陣の目の前に来た。

「それではいつて来ます。師匠、貴一」

「それじゃあね。きいちゃん寂しかったらすぐに連絡入れてね、三十分以内に飛んでいくから」

「いや、母さん・・・三十分つて、なんてリアル」

「まあ、一生の別れでも」「自分たちには（私たちには）それぐらいなんです」「s、そうか・・・」

アルバートのおじさんが押されている。ある意味親バカって恐ろしい。

「大丈夫ですよ。我らも着いているのですから。」

俺の左人指し指のムーンが言っていた。

「その通りですよ、私たちがマスターの父代わり、母代わりになつて見守りますから大丈夫」

さらに俺の右人指し指のサンがいていた。

「うん、うん、それじゃお願いね。……うん」

まだ、母さんは唸っているよ、父さんも何だか後ろ髪に引かれまくっているよ……

「えーいさっさと行けえい、あれも頼むぞ」

そう言つてアルバートのおじさんが無理に二人を押した。

「は、……はい分かりました。それでは……いつてきます」

「うん、いつてらっしゃい」

出来る限りの元気と無事を祈つてその場の魔方陣に向かって行く両親に手を振った。

そして、二人が消え、魔方陣の消えた……

「行ったようじゃのう。貴一君」

「貴一」

「うむ？」

「貴一でいいよ。その分こっちもギル爺って呼ぶから」

「ふ、息子の次は孫か、なら・・・そうだ貴一よ、今日は初めての一人立ちの記念日じゃ、ワシ特性のビーフシチューをお前に伝授しよう」

「え、う、うん。だけど俺四才」

「なにを言う。三才でおにぎりを結びはじめて今じゃリリさんよりも料理が出来るではないか」

「いや、ギル爺、母さんのは料理なのかな？」

「マスターそこは触れてはいけませんよ。」

「あれでも結婚当時から頑張っているのだから」

二人のデバイスがフォローしている

「うむ、あれは。うむ一応料理だと思っぞ・・・たぶん」

「ハ、ハ、ハ、うんじゃあ今日は頑張っつて覚えるよ」

「なら早くいくぞ。いろいろと買いたさないといけないからのう」

「うんじゃあ帰ろう」

そうしてその後は買い物とかいろいろしながらお金がどこにあるかなど本当に一人暮らしの準備を、ちやくちやくしていった。そして、ご飯も終わり

「それではの貴一、ワシは帰る。まあ二ヶ月に一回ぐらいは来るかもしれないがな」

「うん、大丈夫。大体は覚えたし、俺も男の子だもん。それとビーフシチューおいしかったよ、ギル爺」

「ふむ、今度はお主のを作って食べさせてくれ」

「うん。頑張る。それじゃあね」。ギル爺」

「それではの貴一よ」

そして、ギル爺が帰っていった。

「マスターそれでは」

「うん今日は寝よう。明日には二人とも試してみるから」

「主、御意。それではおやすみなさい」

そして荒だたしい一日が終わりを迎えた。

〈朝〉

「ふわあゝあ」

うん、ちゃんと起きれたな。時間は、七時だな、至って普通だな。さてこれから、どうしようかな。まだ原作介入には早すぎるし、まあその前にいろいろと、戦闘訓練とかしないと、「主?」

「ああ、おはよう、サン、ムーン、」

そつだ、まず、俺のバリアジャケットとかどういふ武器かも決めないど。

「ああ、すまんが後、一時間ぐらいしたらにしてくれ。朝飯食べてくるから」

「御意」

「イエッサー」

二人して完全に俺をマスターって見てくれているんだな。そう思えばどこで練習しよう？あ、あのミニチュアを作れば確かあそこは一日が一時間だからすごく鍛えられそう。

「さて、朝飯を探しにいこう」

sideデバイス、S

貴一が朝食を探しに行った後。

「なあサンよ」

「どうかしたのムーン」

「いやなにマスターは強いと思ってな」

「そつね。ある意味前の主たちよりも心は強いかもしれないわね。まだあんなに小さいのに」

「ああ、マスターは見た目は子供だが中身は戦士のようだな」

「しかし、子供は子供なのよ。分かっている？」

「分かっているさ。サンだから我らがいるのだから」

「ええ、そうね」

s i d e o u t

さて飯、飯つと確かパンがあったからこれでいいか。

さて初めてのチートを試してみるかな？

第参話 案外出来る。俺参上！！（後書き）

あとがきラジオ

「「貴一とギル爺のあとがきラジオ」」

「って私はどうしたんですか。」

「うるさいぞ。作者」

「その通りじゃ作者」

「二人して俺をいじめて楽しいか?!」

「「楽しい（きっぱり）」

「ソウデスカ」

「ああ、それとギル爺」

「なんじゃ貴一よ?」

「父さんって剣術どれくらい強かったの」

「それはな。まず、わしが教えたところから……」

「二人はなんか熱くそしてこちらに非協力てきですので。次回『チ
トってすんばらしい』それでは」

「そのとき勇士がの・・・」

「バイバイ（泣）」

「うん、うん、それでそれで」

第四話。チートってすんばらしい(前書き)

第四話掲載です

第四話。チートってすんばらしい

現在、俺は大きな草原にいる。周りが静かでまるで俺一人しか居ないようだ。『体は剣で出来ている。(I am the bone of my sword.)』って危ない危ない。危うく、草原を剣の墓標に変えそうだった。

「なあ、こんぐらいで大丈夫か？」

「マスター・・・広すぎです・・・てか」

「主、どこからこんな代物を？」

デバイスが俺に質問攻めだ。

当たり前か、今は俺の稀少技能である何でも投影する能力でネギまのミニチュア別荘の中である。しかもこの中は一日が外の世界の一時間だと言ったら、こうなった・・・

「だ・か・ら、俺の稀少技能だつてば」

「「だ・か・ら、それはなんですかと、聞いているんです!！」」

うわ、怖っ、

「分かった話すよ、何だかよく判らないけど俺が頭の中に創造した物が出てくるみたいない感じかな・・・たぶん」

「主、ある意味それはロストロギアではないのそれ？」

「あはははは、自分でもそう思うよ俺も」

「ふん、良いではないか、サンよ。マスターが強いのであればそれはそれで」

「確かにそうですけど。そうですね、それに主は使い方が解っているだろうし、もし間違えたら・・・」

「間違えたら？」

「体がね・・・ウフフ」

「うん。解った。俺は間違えたりしないよ。」

てか、間違えたら俺が、俺が・・・考えるのヤメタ。うん、なんだから。チートなのにな俺・・・(泣)

「それではマスター、再契約の準備を」

「再契約？」

「そうですね。主、デバイスと言っても私たちのようにインテリジエントデバイスはマスターと契約をして初めてデバイスとして使用できるのです。」

ああ、そう思えばなのはもなんか呪文めいたことをレイジングハーフトに言っていたな。

「解った。それで何をすればいい？」

「それではマスターまず、このムーン・ソウルから。後から言う言葉が続けてください。」

そして左にあったムーンが俺の目の前に来て

「行きます。」

「我は月の光を糧とし」

「我は月の光を糧とし」

「暗闇こそが我が体」

「暗闇こそが我が体」

「「我は闇の中に生き」」

「ならば我が身は汝の手に、」

「我、ムーン・ソウルのマスター。星河貴一」

そう言った途端、目の前にあった指輪ムーンが黒く光、答えた。

「イエッサー、マスター」

そして黒い光がどんどん弱くなった。そしていつもの定位置（左の人指し指）に戻った。

「それでは次は私ですよ主」

「了解」

「光は我が腕に」

「光は我が腕に」

「その輝きは太陽のように劣化せず」

「その輝きは太陽のように劣化せず」

「「光が我が力に」」

「ならば我が身は汝の手に、」

「我は貴公の主、星川貴一」

ムーンと同様に光り出した、しかしその色は真っ白だった。

「御意です、我が主」

こうして、再契約は終わった。さて次は

「それじゃあ、早速、ムーン。Set Up」

「イエッサー」

そして俺は変身した・・・

えーとこれは・・・

「マスター正常に変身できました」

うん、確かに出来たな。両手に鎌を持って・・・だけど本当に自分

の思い描いたバリアジャケットになるんだな。ちなみに現在の格好は簡単に言うとガンダムデスサイズヘルの格好で口元を隠している状態です。

「マスター、私は現在のこの鎌の状態が基本の形ですから、それよりマスター？」

「うん、なんだムーン？」

「すごい魔力量ですね。よく、前マスターに聴いてましたがこれはある意味、前マスターを超えていますよ。」

「確かに、父さんよりも魔力量ならあるだろうけどまだまだ、戦いということならまだ父さん方がうえだよ」

「それはそうですよ。マスターはまだ四才なんですから、しかし私のマスターなんですから特訓はしていきますよ。前マスターも三才から私を使っていましたから」

「へえ、やっぱ父さんは強いんだな。」

「ええ、そうですよ。それではマスターそろそろ、サンに変わります。本格的は明日・・・外だと一時間後ですが始めますからよろしくお願いします。」

「ああ、解った」

そして俺は死神の装備を解き右手を前に出し

「サンSet Up」

「御意」

そして今度は片手に銃を持ち、服装はなんと言うか・・・ティアナのバリアジャケットを男性用に感じた感じにした。だって案外かっこいいんだもん。

「主、こちらでも正常です。基本、私は中距離から長距離が専門ですからそれではこれから私たちの武装を軽く説明します。では今、私は銃の形状ですが、2ndモードだと『ツインガン』まあ双銃になります。Finalモードだと『ロングライフル プラストモード』長銃と姿を変えます。」

「ああ、解った。それじゃ「ちょっと待った、マスターまだこっちの説明をしてないぜ」っとならった。まだ最初の形状しか解っていないな。」

「ああ、それではマスター」

「ああ、ムーン Set Up」

「イエッサー」

そして今日二度目の死神降臨つと。

「それでは説明と言っても見たまんまですが私は近距離中心ですが前マスターは斬撃だけを飛ばしていましたね。」

「すげえ〜。それでほかの形状は？」

「2ndモードは『ランス』ようするは槍ですね、それでfina
1モードは鎌の刃の部分が二本に変化します」

「そうなんだ」

「まあ、それぐらいですね。」

「解った。それじゃあ最初なにをすればいい？」

「そうですね、それではまず私たち慣れて頂きます。それでは主、
今から私がちょっとした人形を出しますから、それをムーンで倒し
てください」

「いきなりハードだな」

「大丈夫ですよマスターこちらもサポートしますから」

「ああ、それでは。」

一息して、左手を前にだし

「ムーン Set Up」

「イエッサー」

「それでは人形を出します」

そしてセットアップ後目の前には無数のマネキンのような人形が出てきた。

「それではマスター」

「なんか上機嫌だな。まあいい、星川貴一、切って切って切りまくる」

そして戦闘開始。まず前にいる三体をなぎ払いと、避けられた！？。

「おい、ムーンこれ」

「はい、なぜか管理局の陸士と同じぐらいです。」

「なんと、ってこらいきなりなんでだよ」

「主の力量なら大丈夫でしょう」

なんと、酷いデバイスって、考えてる暇が無いな、いきなり攻撃来るよこれ・・・なら、

「ぜってえええええええええええ、勝つ」

そう言っつて俺は自分の鎌を二枚刃の変えてマネキンに突っ込んだ。

第四話 チートってすんばらしい(後書き)

あとがきラジオ

「作者と貴一のアとがきラジオ始まるよ」

「さして始まりました」

「テンション高いな、」

「そりゃな。だってとうとう感想が着たんだもん」

「は、良かったな」

「あ、ひどいぞ、私は大変感謝しています。その分から屋には後々教育しますので」

「あつそ、しかし感想をくれたことに私からも頭を下げよう。ありがとう」

「最初っからそうしなさい。それでは」
「次回」

「特訓、特訓、特訓」

「それではなのは・テストロッサ・る・ブランドラ・シユバリエ・ド・御坂様、本当にありがとうございます。これからも頑張りますので、宜しくお願いします」

「それでは次回にトランスミッション。バイバイ」

第五話 特訓、特訓、特訓（前書き）

五話掲載です。

第五話 特訓、特訓、特訓

<<ズドオオオオオン>>

「だあああああああああああああああああああ」

貴一、現在鎌を持って大暴れ中。

「マスター三時の方向に数、二」

「めんどくせい、ムーン。『ランス』」

「イエッサー」

そして飛んで来るマネキンに突きを一突きしてもう一体は普通にな
ぎ払えた。理由は簡単、空中にこちらに向かってくるのはなぎ払う。

そんな感じで現在一年が経過（外の世界は16日、それに全然、体
が成長しない設定にしている）。

「数、更に増加空に六体」

「なら、サン、初っ端から Finalモード」

「御意です、『ブラストモード』」

そして、次は長銃の持ち手に変わり、

「さくで一気に決めるか、サン決めるぞ」

「ふ、主大丈夫ですなの？」

「なめんなよ」

そして、空中にいるマネキンに向かって、サンの状態の必殺技を使った。

「戦慄の」

「カオス混沌」

そして、魔弾がマネキンに向かった。そして一体に当たった。そしてそれが合図に他のマネキンが突進してきたが、しかし、又一体、又一体と墮ちていく。簡単に説明すると普通の弾は敵に当たったら終了だがこの技は特定の数の敵をロックしてそれが殲滅されるまで追いつける弾。誘導弾なんか、非じゃない。そして最後の一体が墮ちた。

「主、今日はこれぐらいにして、そろそろ外にも出ましようよ？」

「ああ、そうだな。それじゃ、解除っ」と

そして、今までのバリオジャケットを解除して私服に戻した。

「しかし、マスター。まだ一年だと言うのに「実際は16日ぐらいだぞ」そう、だったな。だが、すごい成長だな、今では陸士は一等ぐらいはあるのではないか、」

「そうなのよね、空にも対応してあるから。主は、本当に天才かも

知らない！」

「いや、まだまだだよ。(それにまだ試していない物もあるし……)
」

「それではすまんけど少し眠り回復します。」

「ああ、じゃあなマスター」

そして、二つのデバイスがスリープモードになった。

「それじゃあまずはこちらかな。」

そして、頭の中にある夫婦剣を想像して、

「トレースオン
同調開始」

そして、両腕に投影された剣を振ってみた

“ブオオン” “ブウウン”

「よし、こんな感じかな、それよりこの稀少技能レアスキルの名前なににしよう
」

うーん、お。

「よし、決めた。完全に再現して投影するから『パーフェクトプロジェクト完全な投影』でいいかな。それに身体能力もMAXだからな。感覚的には覚醒中のキラの思考かな、最近のあのマネキンの動きも慣れてきたし、そろそろ数もレベルも上げるかな」

「うんじゃあ、最後これを試すか」

そして俺は次にある『ベルト』を投影した。

「いくぜ」

そしてそのベルトを着けて、脇にあるカードを真ん中の機械に差し込んだ。そして

<<KAMENN RIDER>>

「変身」

<<DEKAED>>

そうやって俺は仮面ライダーディケイドと、なった。え、なんでディケイドと言うとW^{ダブル}以外の平成ライダーに成れるからだ、W^{ダブル}は別途で試そうと。それじゃあ、試しにこのカードと

<<KAMENN RIRER>>

<<pir,pir,pir>>

「変身」

今度はファイズになった。なんだかはまりそう。だけど身長は変装魔術でどうにかしよう。

なんてことを考えながら元の家の空間に戻ると、そこには一通のメールがあった。

（拝啓、愛しの息子へ）

数日後、

いきなりギル爺から連絡を受けていたため。ギル爺が用意した魔方阵で転送された場所にいつてみた。

「ギル爺くどくど」

大声をあげて見ても誰もいない。と、その時、すごい殺気とともに何者かが落ちてきた。

「ムーン、」

「イエッサー」

そして、死神のバリアジャケットを装備して構えた。

<<ドーン>>

そして何者かわからない奴がこっちに向かってきていきなり誘導弾を撃ってきた、しかしそんな物は鎌を回転させて完全無効化した、そしたら今度は自分の刀か、なにかをこちらに向けて来た、

<<キン、ガン、キャシイイン>>

こ、この人そうとう上だ、まるで前が読めない。くっそ。

「そろそろ終わりにしようか。少年」

そう言つて前にいる何者かが自分の刀を顔まで持つてきて独特の構えをした、ならば

(ムーン、やるぞ。『ミラーージュ 屋気楼』だ。)

(「イエッサー」)

「死ねえい」

そして相手が振り落としに入った瞬間俺は空中に浮き相手を見下すように相手の後ろに相手の首に鎌を構えて

「チェックメイトだ。ギル爺はどうした？」

殺気の籠った声で聞いてみると、その者はいきなり笑いだした。

「くっくっく、がぁあはっはっはっは。」

そして相手はバリアジャケットと付けていた仮面を取った。そしてら意外にも待ち合わせしていた人が出てきた。

第五話 特訓、特訓、特訓（後書き）

あたがきラジオ

「貴ーが送るあとがきラジオ」

「っておい、作者を忘れるな。」

「うるさい、いつまで、たっても原作に入らないやつはそこで眠っている」

ジョーカー、サイクロン

サイクロンジョーカー

「変身完了、そして、サイクロンマキシマムドライブ」

「て、え、えええええ、デカルチャー」

ドガアアアン

「バカ（作者）は消えたな。それでは次回戦士目覚める」

「それじゃあ、バイバイ」

第麓話。戦士、目覚める（前書き）

六話掲載です。

第麓話。戦士、目覚める

そこに居たのは良く知っている老人だった。

「なにやっているんだよギル爺!！」

「いや、いやすまない、すまない。ちとなお前の氣を感じてな。少し戦闘本能が疼いてしまったの。」

いきなり仮面を取り、両手をひらひらさせて完全に爆笑中。

「どうでした。マスターの強さは？」

いきなり、ムーンがギル爺に言っている。

「なんと、勇士の奥義をたった五才で習得とはな、サンの連絡を受けていたとはいえびっくりじゃったよ。」

俺は半目で右人指し指の指輪を睨んだ。

「ふーんそうか、サン後でいじるからね、性格的に……。」

「まって、まってください。主、これはそのそのえ」と

大慌てしているサン、それを見てさらに笑うギル爺。

「なに、そんなに怒るでもない貴一、私も確認出来てうれしかったぞ。それにこれならワシが教えることもないのう。少しつまらんのだが、これなら、あのデバイスも使えるかもしれんな。どう思う、」

おまえら」

「あれ、ですか」

「まさか、あれを主に持たせるのですか？」

デバイスのくせに声が震えるなよ、サン ムーン。しかし

「なんだ、お前ら、どうしたんだ？」

なんだかよく判らんがなんかあるらしい。しかしそんなことを知ってか知らずか、ギル爺が

「立ち話もなんじゃし、家に行くとしよう。」

そう言つて、転送された場所から歩くこと五分、そこには研究室が聳え立っていた、

「ギル爺って校長じゃないの？」

「確かに、歳老いてからは少し一線を引いていたのだがのう」

年老いて尚の普通に奇襲してくるのかよ……。

「知らなかったか、このムーンとサンはワシが作ったんじゃよ」

は、今なんて言った。この人

「まってギル爺、ギル爺って、研究者だったの？」

「ふむ、正確には管理局に協力的だったらいつの間にか、職員で提督になっていた。かのう？」

「なんか、すごいね。ギル爺。だけどギル爺が父さんの師匠なんだよね？」

「うむ、その通りじゃが、ワシは剣術を教えただけで、戦い方は自分で見つけたのじゃよ。その時は勇士はちよつとした管理局の有名人で、その時のその戦い方から、二通りのデバイスの案が出来ての、それが・・・」

「サンと、ムーンってことなんだ」

「その通りじゃ、しかし結果は」

「父さんは近距離のムーンだったんだね。だけど母さんのサンは、確か母さんって父さんのファンだったんだよね？」

「ああ、それは簡単じゃ、ワシがヘッドハンティングしての、そしてたらなんと」

「適合レベルが高かったって、ことなんだ」

手をおでこに当ててため息をついていた。なんだか、俺もチートのな能力を貰ったけど母さんもチートにちかいじゃん

「はい、それで前主と、勇士殿の接点が生まれたのですよ主」

「そうなんだ。それで今回のことと関係は？」

今まで歩いてきたが何だかどっかの研究室の一室に着き椅子にギル爺の正面に座った。

「ふむ、その時なのじゃがな、ワシはこう考えたのじゃがな、もしこの二つが一緒なら最強なのではないかとのう。そこであるデバイスを作りあげた。しかしそれはすこし難所があつての。封印していたのじゃがな、貴一なら使いこなせるこもしれないから、少しテストをして見ようと思つてのワシの私室に来てもらったのじゃよ」

「だからか、なんだがここ、すごく汚いね。ギル爺のお部屋」

「五月蠅いのう」

「だけどそのデバイスの能力つてなに」

「なに、焦るでない、ちゃんとお前にも解るように説明してやる。」

そして、ギル爺は少し咳払いをして

「ゴホン、それでは、まず、デバイスの名は『ソルジャー』、じゃ。そしてこれ自体の能力はマスターの身を守る。ある意味、盾にしか使えない。しかし、じゃがこれにムーンと、サンがいると話は別じや、これに入っているのはジョグレス機能じゃからな、」

「ジョグレス機能？」

「そうじゃ、ムーンは近距離なら強いが、遠距離がない、その代わりにサンは近距離がない。ならばそれを一緒にそれを統合、いや、一体化する能力、それがこのデバイスは持っている」

「ふうん、それでなにが不味いの？」

「え、えくと、これはある意味、デバイスの容量が足りないのを補うための物なのじゃがな、流石に三つのデバイスをフルに使うため人間の魔力量の方が持たないのじゃ・・・」

「って、それじゃあ、父さんはもったの？」

「二時間が限界で、その後数日動けなかったらしいぞ、リリさんが愚痴を零していたこらの」

「それじゃあ、俺はある意味維持はできるかもしれないね。」

「ならば、やるかのう」

そう言ってギル爺はごそそと奥の部屋に行き、戻ってきた時に、剣の形にしたペンダントが握られていた。そして少し大きいホール場の訓練場に連れられた。

「えくとギル爺、呪文は？」

そしたらポケットの中にあつた紙を出して、

「これじゃ」

そして、それを『詠唱』した。

「我が血は幾たびの戦場」

「されど過ぎぬ幸福を信じ」

そしてらいきなりデバイスが光だし

「ソノテニハチカラヲ」

「その力に天を（「ソノチカラニテンヲ」」

「ここに契約する、『ソルジャー戦士』のマスター、星川貴一」

「契約に従いここに剣と成す。よろしくお願ひしますマイロード」

そして光っていたペンダントが普通の光に戻った。

「そ、そんなバカな」

ギル爺が驚愕していた。

「どうしたのギル爺？」

「よいか、貴一、素奴はぬしをマイロードと言ったが、勇士の時は一度も主とは呼ばなかったのに、貴一お主は契約した瞬間に言わせだ。これが驚かないわけないだろうが」

「ドクター、私はマイロードのことを認めただけであります。」

「ふむ、ソルジャーをここまで言わせるとわ、貴一お主本当に子供か？」

「見たまんまんだけどギル爺（実際は高2です）」

「それではマイロード」

「ああ、それじゃあ、ソル」

「ソルとは……いきます」

「Set Up」

「セットアップ」

そして俺は新しいバリアジャケットに袖に通した。

顔には変化はなかった、服装から言えば某アニメの弓兵の形を模写したのだが……

「それでギル爺どうすればいいの？」

セットアップしたのは良いがどうやったなら良いのか不明である。

「なに簡単じゃよ。今の状態で右手、左手を胸の前でクロスさせて
こう言うのじゃ。 アンロック っとな」

「わかった。」

そして、右手を前にし左手もクロスにし

「アンロック」

そしたらいきなりデバイスたちが光り出して

「「「ミチビクヒカリト、スベテヲマキコムヤミノヒトツニ」」」

そしてそのデバイスは名を告げる。

「「「ライトアンドダークネス」」」

「これが、ワシの描いたデバイス・・・」

「ギル爺、あんまりと、いづか異常はないよ。」

貴一の服装はさっきの赤い服とは違い黒い騎士の格好をしているがマントがそこにはあつて腰の横には二本の刀と腰の後ろにはサンの双銃が装備されていた。

「これで完成じゃ、違和感がなければのう」

「うん、違和感はないよ、」

「そうか、良いか貴一このデバイスはワシ、オリジナルであり他の者が作つてもお主しか使えないだろうがあまり人前では」

「ああ、分かっているよ。この力はすごいね。今、その情報がこっちの頭に流れてきているよ。少し分からないところがあるから実践したいな（意味は全部アンサーカーで分かっているが流石に五才で全部分かるのは不自然だからこういわなにと）」

「そのことじゃがお主は少しと言うか一年ぐらいはこっちにおいて貰いたいのじゃがのう」

「え、なんで？」

「なに、ぬしにワシの剣術を教えたいし基本的体力の上昇も行いたいし、なによりつまらんのだよ。校長って案外暇での」

「それは言っちゃまずいと思うけど・・・けど剣術はありがたいかな、最近マネキンじゃ相手にならなくて・・・」

「安心せい、ワシは厳しくたまに不可能なこともだす」

「不可能なのはまずいだろ」

そう思いながらも今着ているバリアジャケットに問いかけた。

「なあ、お前らって今はどういう状態なんだ？（まさか電王みたいに個々に意識があるのか）」

「」「基本はソルジャーなので御座いますが、ボイスはこのように成っています。」「」

「へーそうなんだ。そういえばギル爺、ソル自体の力はなに？」

「治療魔術はすごく高かったかの、それとぬし自体の強化かの」

「わかった。それじゃあ、ギル爺お世話になります」

「ふむ、よろしく頼む。」

そうして貴一はこの三体のデバイスをよりうまく使うために修行を

始めた。

第麓話。戦士、目覚める（後書き）

あとがきラジオ

「作者のあとがきラジオ」

「今日は彼が修行に没頭しているので軽くデバイスの説明を」

デバイス名……ソルジャー（愛称ソル）男性型 インテル
ジェントデバイス

能力……基本主人公の戦闘や適切な投影する物の助
言などのサポート担当。

バリアジャケット……アーチャーです（Fate）

概要……主人公の一番最初のデバイスであり主人公
のことを「我が主（マイロー

ド）」と呼ぶ。それとジョグレス機能の中
心でもある。

普段は小さい剣のネックレスの形で戦闘時
はバリアジャケットと同化し

ている。ちまみに主人公が本気を出さない
限り使わない、あまり使用さ

れないデバイスだが一番主人公の良き理解
者である。

デバイス名……ムーン・ソウル（愛称ムーン）男性型 イ
ンテルジェントデバイス

能力・・・近戦闘が支流のデバイス、遠距離攻撃が無く飛び攻撃は斬波しかない。しか

も主人公と勇士しか出せない。

バリアジャケット・・・ガンダムデスサイズヘルみたいな全身黒の死神みたいで口元まで隠れている

概要・・・元々、主人公の父親のデバイスであったがあることが起こり主人公に渡る。

主人公のことを最初は「坊ちやま」だったが主人公がマスターになつてから

「マスター」と、呼ぶようになった。

普段は主人公の左の人差し指に黒い指輪となっている。なんでも父親と母親

の結婚指輪でもあつたらしい。

1stモード「サイズ」

2stモード「ランス」

finalモード「ツインシザー」

デバイス名・・・サン・スピリッツ（愛称サン）女性型インテルジェントデバイス

能力・・・中・遠距離が支流のデバイス、空間を曲げて魔弾を撃つことが可能、

バリアジャケット・・・白が強調された軍服に近い服

概要・・・元々、主人公の母親のデバイスであったがあることが起こり主人公に渡る。

主人公のことを最初は「坊ちやま」だったが主人公がマスターになつてから「主

と、呼ぶようになった。戦闘時は銃となつ

ている。

1stモード「銃」^{ガン}

2stモード「双銃」^{ツインガン}

と、なっています。」

「そろそろ原作にやっと入りますので宜しくお願いします」

「それでは次回二度目の義務教育」

「それではバイバイ」

「一人は寂しいよ。トホホホ」

第七話。二回目の義務教育（前書き）

七話掲載です。

第七話。二回目の義務教育

ある晴れた陽気の日俺こと星川貴一は私立聖祥大附属小学校の入学式に出ている。もう、あの特訓や、デバイスの研究の手伝いをしていたらあつというまに六才になりこの学校に入ることになった。今は校長先生の長い話が終わり今度は自分のクラスに行くことになった。

「それではみんな着いて来てね〜」

新任の先生の声

「……はい……」

それに答える無邪気なガキたち

そんなこんなで俺、星川貴一は二回目の小学校に入った。

そして今日はさすがに入学式の為すぐに家に帰った、と言ってもギル爺の家だが。今日はギル爺も士官学校の入学式らしくこっちは来れなかった。最後まで副校長に「孫の入学式の方が大事じゃ、そんなモン後にしろ」だもんな。案外父さんが親バカなのはギル爺のせいではないかと思うほどだ。

ちなみに俺となのはは違うクラスである。ちょっと悔しいかな。

そして貴一はギル爺の家（研究室）に帰るとそこには今まで一緒に特訓していた相棒たちがいた。

「あれ、これは主お帰りなさい。入学式はどうだったの？」

「お、マスターの帰還か、ソル護衛ご苦労だったな。」

「いや、私はこれが存在理由でもあるわけだからな。それにもしマ
イロードに何かあつては困るからな」

そういう俺の首からぶら下がっているペンダントのソルが言う。実
際学校で何か無くても困るわけではないが、なにかあつたら困るわ
けで、それで最初は誰がいつも俺に付くかで、もめて結果、制服に
隠れるソルになった。案外最初こそは堅物だったが今は特訓のおか
げか、それとも理不尽なギル爺のテストのおかげか、すっかりソル
は俺に慣れ、俺もソルに慣れたしかしなんで、ボイスが諏訪部さん
の声なんだ、やっぱねらったのか？

「ギル爺は？」

そしてら一通の電話もとい通信が入った。

「貴一帰っているか？」

モニター越しにはいつもとは違う威厳のあるギル爺の姿があつた。

「うん。帰ってるよギル爺。どうかしたの」

「すまん、急なのだが当分仕事でなそっちには帰れなさそうだな、
」

そりゃそうだと、思った。あれから一年。ある意味付きっきりで俺
に剣術や相手の心の読み方、さらにはデバイスの構造までマンツ―

マンで習っていた。しかし料理や洗濯は俺がやっていた。やっぱり科
学者は片付けられないんだね・・・しかし現在の職業が忙しくなく
はないと思っていたがまさかね。

「それでギル爺、家は元の家に戻っても？」

「うむ。そうしてくれ。それと、たぶんこれが一番最初に言つべき
ことじゃったな貴一入学おめでとう。」

「うん、ありがとうギル爺」

そういつたら、目の前のモニターが消えて、また付いた。

「あれ、誰からだろう？」

そしてそのモニターから出てきたのは二年ぶりの両親の顔だった。

「え、え、父さん母さん？」

「うむ、その通りだk」「きいいいいいいいいいちゃあああああ
ああああん」「おい少しは押さえる」

「これが抑えられますか。あなた。だけどきいちゃんなんでギルさ
んの家に？」

「ああ、それはギル爺に剣術ならったりしたから」

「ほう、そうなのか貴一、」

「あなた、ずいぶんとうれしそうですね。」

「まあな、」

「それにきいちゃん少し背がのびたわね、うんうんさすが私たちの息子」

相変わらずのことに少し笑ってしまった。そしてら母さんが何かに気付き、

「きいちゃんもしかしてそれ、私立聖祥大附属小学校の制服？」

「うん、俺そこに入学が決まったから、それで今日が入学s」「なんだとおおおおおお入學式だとおおお」「つえ、え、うん今日だったよ」

「そんな、まさか今日とは」

父さんは落胆し母さんは

「入学式入学式入学式入学式入学式……」

なんか、復唱しているし……

「大丈夫か、勇士、リリ、というよりも久しいな」

そしてソルが挨拶をした

「なんだソルジャーじゃないか……」
「本当だソルジャーじゃない……」

父さんはなぜか奥に引っ込んでしまった。

「え、あ、あなた〜それじゃ〜ね。きいちゃん、て、あなた〜そんなにがっかりしなくても確かにきいちゃんが私たちの技を完全に出来るからって」

“グサリ”

「あ、あなた〜ちょっとさらに奥に、ってそれじゃあねきいちゃん。それと遅れながらも何か送るからね〜、それじゃきいちゃん入学おめでとう。じゃあね〜」

そして通信が途切れた。

「なんか、すごかったな」

「相変わらずでしたね前主は」

「前マスターも相変わらずだったな」

「うん、なんだか安心できたかな。」

「それでは今日は帰りますかマスター？」

「ああ、そうだな帰ろうか。」

そして俺らは自分の家に帰っていった。

帰っていきなりしたことは、全員がスリープモードになった夜中に別荘に入り、ベルトを付けて、ガイアメモリを二つ持ち

ジョーカー・サイクロン

そう言ってダブルメモリーに刺したそして、

サイクロンジョーカー

俺は仮面ライダー^{ダブル}Wになった。

「あ、スカル以外にも出来た、出来た。これなら実践にも使えるし顔が隠せる。それに二人必要としないかこれなら使えるな」

「あとは、ネギまの技かな、一様あの神様に頼んだけどこれだけでも最強じゃん、俺。」

そして試したらすぐに戻って、すぐに寝た。

そして、なにのなく平凡時々修行して原作の時までの時間を潰しながら自分のチートを試していた。

第七話。二回目の義務教育（後書き）

あとがきラジオ

「「貴一とソルのあとがきラジオ」」

「それでは今日は使えない作者はほっというてゲストのソルです」

「マイロード挨拶は自分でしますから」

「まあ、そう言うなってラジオなんだから」

「そうですねそれでは「まてええええええええええ。このラジオ俺
が買ったああああ」・・・なんかうるさいのが来ましたよ。マイロ
ード」

「はあ、仕方ない。目覚めろ『天地乖離す開闢の星』（エヌマ・エ
リシュ）」

「マイロード、そんなものを使わなくとも」

「バカは消えなきやワカラナイモノダカラ」

「エヌマ・エリイイイイイイイイイシュ」

ダガアアアアアアアアアアアアアアアアア

「ぎゃあああああああ。今度こそ今度こそ俺が作者だあああああああ」

「消えたか」

「マイロード、あれは修行中に威力を最低に見せてもらいましたがあれは単体で次元震が起きますのであまり使用をしないでください」

「ああ、大丈夫。あいつぐらいだからエアをフルに使って生きているの」

「そうですか……」

「それでは次回、」

「ロストログアって言いにくい」

「「それではまた会いましょう。バイバイ」」

番外編。ベルトの力・・・すんばらしい(前書き)

すみません。原作介入をする前のお話です。どうか、次回は原作に介入しますので。

それから、感想やリクエストなどどんどん募集しています

番外編。ベルトの力・・・すんばらしい

当時俺七才の頃の特訓風景。

ミニチュア
別荘内でソルに俺のチート能力を公開している。と、いうよりも「いつしか、その能力が必要がない。」

「さて、ソル。今までの物が今のところ俺が出来ることだよ」

「了解です。いろんな武器や魔術、あとあのベルトについてはこちらにインプットしました。」

「しかし主、なぜソルにこのようなことを？」

「確かにな。マスターのその稀少^{レアスキル}技能の能力は私たちも覚えておるがなぜにソルに詰め込んだのだ？」

「ああ、それはソル自体に攻撃魔術が非常に弱いばかりだからこれは俺がカバーしようとおもってな、ソル自体は回復や、肉体強化に長けているからな。」

「なるほどしかし、マスター。時にあのベルトはそんなに強いのか？まだ我たちは変身した所しか見たことがないのだが」

「なら、やって見るか。サン、擬似一等陸士と空士を」

「御意」

そして、貴一の前にはマネキンが三十体。それに加えなぜか龍種が

いた。

「ちょっとまで、サン、またこれか」

「主にはこれぐらいが丁度良いかと」

「全く、しょうがない。それでは」

そして、俺はベルトを投影し、カードを一枚引き。

「今回は機械仕掛けか、それじゃあ行くぜ」

そしてそのカードをベルトに挿し

<<KAMENRIDE>>

<<フオーンフオーンフオーン>>

<<KABUTO>>

<<ウーカション、ギーカション、グイグイギーン>>

「キャフトオフ」

<<CAFT OFF>>

「よし、完成つと、んじゃいきますか」

まず前方にいる奴らを、パージしたパーツで吹き飛ばし、残りの二
十ぐらい

「なら、クロックアップ」

<<CROCK UP>>

そして、時間が止まったの如く相手の動きが止まりこちらは相手に一発ずつ攻撃をしていくそして、

「クロックオーバー」

<<CROCK OVER>>

その衝撃をいきなり受けた如く、吹き飛び相手は動きが出来なくなつた。しかしまだ、三人ほど残っていた。だが貴一はそんなやつに攻撃を許さず。

「ライダーキック」

<<RIDER KICK>>

そして残りの三人は木っ端微塵になつた。

「マイロード、その技は人にしたらああなると？」

「いや、たぶんならない・・・と思う」

「ギヤオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

そして残りのティガレックスのような龍種が叫んでいた。

「五月蠅いな、ならお前はこれで終わりにする」

そして俺は変身を解き、ベルトを違うものを着けて二つの端末を取り

<<ヒート>><<メタル>>

<<ヒートメタル>>

そして今度はW^{ダブル}になって

「一気に決まる」

そしてヒートのメモリをベルトの腰に着けて

<<ヒートマキシマムドライブ>>

<<ダガアアツアアアン>>

そして龍種はこんがり肉になった。

「ま、こんなものか」

完全に敵を倒すまで三分で終了。まわりはさっきまでの野原がなく
焼け野原と化した。

「ご苦労様です、主。また時間が早くなりましたね。」

「あの我らを使わない魔術のすごかったが、このベルトもある意味
ロストロギア並みの強さではないか」

そう思えばこの前にリンカーコアの使用しないネギまの千の雷をだしたしな。

「それではまだまだ行きますよ主。」

「ああ、どんどん来い」

そして原作に介入するためにチートを磨くのでした。

番外編。ベルトの力・・・すんばらしい(後書き)

あとがきラジオ

「「貴一と作者のあとがきラジオ」」

「・・・・・・・・言い残すことはあるか？」

「まことにすまないと思っている」

「なんで番外編作っただよ」

「だって、だって介入するのが難しいんだもん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「(ダラダラダラダラダラダラ)」

「エクスカリバアアアアアア」

「ぎゃあああああ」

「さて、バカは消えたので。次回はちゃんと本編を更新しますので

「それでは次回今度こそ『ロストログアって言いにくい』です」

「それではバイバイ」

「最近いつもこんな感じ、見ている貴一、お前はハーレム地獄にしてやる」

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、」

バカは馬鹿笑いをしてました。

第鉢話。ロストロギアって言いにくい（前書き）

八話掲載です。題名と関係ないじゃんって思わないでください。

あと、感想やアドバイスはどんどん遠慮なくください

第鉢話。ロストロギアって言いにくい

みなさん、とうとうこの学年が来ました。え、なんのかつて？それはもちろん原作介入する小学三年生ですよ。いま、俺は学校では嫌われず、好まれずの立場で維持している。そんなこんなで何時起きるか分からないが、最初は介入しないことにするかな・・・さて今日も帰って修行して寝るか。

そして、数日経ち、今日も普通に一人で帰ろうとしたら、いつも通っている公園を通り帰ろうとしたら、ツインテールの女の子が一人蹲っていた。その子はこれから魔王と言われる子だった。

「ねえ、君大丈夫」

俺は驚かせないように言ったのだが、彼女は驚いてしまったらしく

「え、ふえ、だ、誰？」

「誰って言われても、君どうしたの？」

「え、うん大丈夫だから、いつつ」

状況を見るにそこでこけて足を痛めたらしいな。見た感じ腫れているぐらいだろうがな。

「ああ、ダメだよ。無理しちゃ、そういうのは無理するほど長引くから、はあ、文句ならあとで言っただけ」

そういつと背負っていたランドセルを前に背負ってその少女を背負った。

「え、え、え、」

少女は混乱して少し抵抗してが特訓をしている俺の力に適うはずもなく

「ごめんね。重いでしょ？」

「んなこと気にするな。それに同じ学校みたいだしな、さすがにほっとけないよ」

「いつもなら一緒に帰る子が居るんだよ。だけどその子達は今日習い事で、さきに帰っちゃった」

「そうか、」

たぶん、すずかとアリサなんだろうな。しかし最初は介入しないと思っていたが、まあ、顔馴染みぐらいには良いかな。

「そう思えば君の家ってどこ？」

まあ、知っていますがね。

「え〜とっね。翠屋って言うお店なんだけど」

「ああ、確かあのケーキ屋の？」

「うん、うん、そこが私の家なの」

「へえ、」

「それでね。お母さんがケーキ作ってるんだよ」

「すげー、お母さんケーキ屋さんなんだ」

「うん。それでね・・・」

そして、他愛もない話をしながら翠屋に着いた。

「お母さん、ただいま」

「あら、お帰りなさいってどうしたの？なのは、それにその子は？」

「えーとそれはね」

そしてなのはが俺に助けてもらったことやその前のこけたことを説明していた。

「そうなのね、なら、なのはすぐに冷やしましょう」

「うん」

そしてなのはが店の奥に消えて行ったので、俺は帰ろうとしたら

「あら、ちょっと待って。」

っと、なのはのお母さんに止められて、

「すぐに来るからそこに座っていて」

そしてなぜかお店に案内された。なぜ？

そして本と数分でなのはともう二人来て

「本当にありがとうね。うちのなのはを助けてくれて。私はなのはの母の高町桃子です。」

「ああ、うちのなのはを助けてくれてありがとう。私はなのはの父の高町士郎だ」

「え、ああ、いえいえただその場に居合わせただけですから」

「うんうん、本当にありがとうなの。あああああああああああああ
ああ」

そして、なのはが大声をあげて、

「そう思えばまだ名前聞いてない」

「ああ、そう思えばそうだったな。」

そして一息して

「始めまして、星川貴一です。私立聖祥大附属小学校3年生です」

「あら、なのはと同じ年なのね」

「え、うんだけどその」

「最初に言ったら、初めましてって、」

「え、う、うん」

「まあ、「こっちは少し知ってはいたがな」

「え、そうなの」

「まあな、」

そりゃそうだ。なんてったってな〜内の学園の一、二を争う人気だぞ。

「君、少し道場に来てくれないか」

「あなた、いきなり何を」

ああ、たぶん俺の氣でも感じたのだろうな。

「いいですよ。」

なんともなくOKを出した。そりゃ、小太刀二刀御神流の使いとは一度ぐらい戦いたかったし

「それじゃ、来てくれ」

そして道場に案内されたらそこにはさらに二人、人が居た。

「恭也、美由希、すまないが少しどいてくれ、すこしでいいから」

「父さんどうしたの？」

そこには道場着を着たシスコンもとい高町恭也がいた。

「なに、ちよつとこの子と試合をな」

「この子ってその子？」

そして俺が指された。

「ああ、貴……君で良いかな」

「あ、はい。それで俺のモノは」

「ああ、好きな物を使いたまえ」

そついう士郎さんはやはり木刀だったなら。

「ほう、君は槍かね」

「ええ、いろいろと使えますけど」

そして両者少し距離を取り、恭也さんが審判となって

「それでは一本勝負、どちらかが降参か負けだと思った時点で終わりとする。それでは始め」

そして海鳴の鬼神との勝負が始まった。

S i d e 恭也

「すげい」

美由希は率直にいった。それには俺も同感できた。それはあの歳でうちの父さんと対等に牽制していた。俺でもすぐに目を背けてしまったのに。

そして最初の攻撃は父さんからだった。最初は上段を攻撃しようとしてフェイントで下段という業をしたが逆にその隙を突かれ距離を取られた。刀は自分の周りが範囲だと言うのにそれを逆手に槍で中距離の間合いにされてしまった。

「なんか、あの子、遊んでいない？」

「そんなことがあるか美由希」

「けど、なんだか楽しそう？」

美由希の指摘はその通りだと思ったしかし父さんが遊ばれているとは思わなかった。

S i d e o u t

最初は慣らしながらと思っていたがさすが土郎さんこっちも本気じゃないとここまで余裕とはいかなかったな。

「そろそろ終わりにします」

「なん……だと」

そしてあの呪いの朱槍の構えをして、

「この一撃手向けと受け取れ」

そして下段突きをして、それに合わせて土郎さんも合わせたが

<<ドス>>

次の瞬間には胸に当たっていた。

「え、し、試合終了。」

そして、それは鬼神を下した。

「そのごめんなさいね。うちのなのはを助けてくれたただけでなく、うちの夫の我がままも聞いてくれて。」

「いえいえ、それと、その土郎さんにはあとで謝っといってください」

「いいのよ、それに久々だっただろうしね」

「ええ、それでは失礼します。それじゃあね高町さん」

「うんうん。なのは」

「え、」

「なのはでいいよ。その分私も貴一君って呼ぶから」

「ああ、それじゃあ、なのはまた学校でな」

「うん、じゃ〜ね〜」

そして俺は翠屋もといなのはの家を出た。

〜貴一が行った後の翠屋〜

「あら〜なのは、初めてじゃないの、男の子の名前言ったの?」

「//////////」

「あら、あら、」

そんな桃色の話をしているところもあるが二人は

「あの子そつとう強かったね」

「ああ、そつだな美由希。今度きたときは俺も勝負してもらおう」

そして伸びている人は

「う〜む、娘はやら・・・ぞ」

第鉢話。ロストロギアって言いにくい（後書き）

あとがきラジオ

「今日は記念日だから一人で送るよ」

「それでは作者のあとがきラジオ」

「やっと原作突入。以上」

「次回。これが偽善？」

「それではバイバイ」

「何勝手にやって帰っているんだよ。あのばかり」

「まあいい、それからこんなバカがかいているんで感想や文句など

「ごぞいましたらどうぞんお送りください」

「それでは主人公貴一が占めます。バイバイ」

第9話。これが偽善？（前書き）

九話掲載です。

最近、文章力が衰えてきている・・・

第百話。これが偽善？

なのはを助けてた翌日、いつもように一人でお昼を食べようとした時、とある三人組が廊下から声をかけて来た。

「おい貴くん一緒に飯食べよう」

なんてことを言うのですか。魔王もといなのはさん。ほら、周囲の目がなんでお前、高町さんと知り合いなんだよっていう嫉妬の目が。

「はやく〜」

「あれなの、なのは？なんかパツとしないわね」

「アリサちゃんそれは言いすぎだよ・・・」

後ろには金髪の子と黒髪の子がいた。言うに知れたアリサとすずがだった。

「ああ、すまない。今行くから、てかどこで食うの？」

「うん、屋上だよ」

「ああ、わかった今行く」

そして、嫉妬の目を四方八方に受けてなのは達と屋上に向かった。そして屋上に着くと自己紹介みたいなのが始まった。

「え〜となのはいったいどうしたの？」

「え、うん昨日言っていた。私のお友達をね紹介しようとおもったの」

ああ、なんてまぶしい笑顔なんですか。なのはさん

「その、私は月村すずかっつて言います。なのはのお友達です」

そう一番に切っつて入ったのはおしとやかな月村さんで、続いて

「私はアリサ・バニングスよ。なんでもなのはを助けたらしいじゃない、友達としてお礼を言っつくはありがとう」

「ああ、別に、ただ単にほっつとけなかつただけだよ。それから俺は星川貴一っつて言っつんだよろしくな」

そう言っつて両手を出した。

「あら、少しは度胸があるじゃない。よろしく、それからなのはを名前で呼んでるんでしようなら私はアリサでいいわよ」

そして片手を握っつてくれた。

「うん、わたしもすずかっつていいから」

そして少し顔を赤らめながら握っつてくれた。

「ああ、俺のことも貴一でいいから」

「にゃ〜ずるい、私の時は握手してくれなかつたのに〜」

なぜか、なのはが騒いでいる。なんでだろう？

「（マイロード、案外鈍感ですね）」

（ん？なんか言ったか、ソル）

「（いえ、なんでもありません）」

なんだっただろう、それより早くお昼にしたいな

「それじゃあ、貴一君食べよう」

「ああ、そうしよう」

そして、案外話が盛り上がり明日も一緒にご飯を食べる約束をされて（だってO・H A・N A・S Iになりそうだったんだもん）そんなことがあってあまり目立たないキャラだったのに一変して男から睨まれる存在になりました。なんだか理不尽だ。

そんな日々を過ごし、最近ではなのは、すずか、アリサと一緒に帰るようになったがある夜、とうとうあの声が聞こえた。

（た、すけて、誰かこの声が聞こえるなら）

たぶんユーノだろうがここは原作通りでスルーさせていただく、すまないなユーノしかしたのはが拾うだろうから。

そしてその声が聞こえてから数日、なのはとアリサのちょっとした喧嘩があったり、たまになのはが授業中にボーっとしたりしている

のが目に余った。そのため今度の魔力反応があった時にちょっと手
伝うかなっと思った。

「なら、変装したほうがいいかな。ソル、俺を十八ぐらいに変装で
きるか」

「簡単ですよマイロード。」

「しかし、マスター、ここ数日の魔力反応はロストログアだと思っ
が」

「ああ、だからちょっと様子を見にいこうと思うからすまないが反
応が合ったら「主、調度反応が来たわ」そうか、どこだ？」

「これは街中ですね。しかし結界は張ってあるみたいですよ」

「そうか、なら、ソル・ムーン・サン、行くぞ」

「「「は」」」

「じゃあ、今日はムーン、セットアップ」

「Set Up」

そして変装した状態で家から大急ぎで飛びその結界に入ったら、な
んと魔導師が二人いた。

「なんでこれが必要なの？」

なのはがその金色の子にいうがその子はそんなことを聴きもせず

「これは渡せない」

そしてそのこはその石ころを拾い去って行った。

「完全に出遅れたな。そこの君大丈夫か？」

「え、誰ですか？」

答えたのはフェレットだった。

「この結界内に干渉できると言うことはあなたも。」

「ああ、君らと同じだ。少し話を聴きたいがいいかな？」

そして、ユーノがそれまでを話してくれた。自分のミスであるロス
トロギアであるジュエルシードをこの地球に落としたこと。そして
なのはを巻き込んでしまったこと。そしてさっきの子がフェイトと
言う名前でなぜかジュエルシードを狙っていることも、教えてくれ
た。

「そうか、その前に」

そして、説明を終えたフェレットの後ろにいたなのはの前に立ち

「ケアルガ」

そうやってなのはの体力を回復させてあげた。

「君は見た感じまだ学生だろう。早く帰りなさい」

「え、あ、はい」

「（主、この子は確か、主の友人では？）」

（ああ、そうだな）

やはり、十八の変装プラス、ムーンのバリアジャケットを着ている
せいか、なのはすごく緊張して言葉がカタコトだった。

「ユーノ君だったかな。協力はしないが、流石にこんな子がここま
でやっているんだ。もし見かけたら助けよう」

「え、協力してくれないんですか？」

「ああ、君の不始末なのだろう、そんなことに協力するのはこちら
に利がないからな。しかし人が傷ついているのは見たくないから、
たまに助っ人のような感じにいるだろうがな。それじゃあな、まあ、
がんばれ。・・・ああ、そうだそこの女の子」

「ふえ、私？」

「あまり、無茶をして友達に心配をかけるなよ。たまには他人を頼
んで見るよそれじゃあな」

そして俺はすぐ足元に魔方陣をひきその場を後にした。

S i d e なのは

さっきの人なんだか知っているような気が・・・

「ねえ、ユーノ君、さっきの人なんだったんだろっかね？」

「うん、なんだかは分からなかったけど、なんだか協力はしてくれるのかな？」

さっきの人なんだかお兄ちゃんみたいだったけど顔が全然見えなくて分からなかったし、

「あのフェイトって言う子も結局分からなかった」

「うん、けどなのは気にしないでまたたぶん会うだろうからね、」

「うん、そうだね。ユーノ君。それじゃあ帰ろうか」

なんかさっきの人が離れないな。何でだろう。

S i d e o u t

なのはたちのところから去り、すぐに変装を解いた。

「マスターなぜあのようなことを？」

「主、流石に主ではないのだからあのような子をロストログアの回収の手伝いなど・・・」

「なに、あれはあの子が決めたことだ。それを俺のような第三者が

入るべきじゃないだろう」

「だが、少しは気になるのでたまに助けるっと、案外甘いですな。マイロードも」

「しょうがないだろ。なのはなんだからさ」

さすがに見殺しなんかはできない。

「ある意味偽善なんだ俺はよ。それとすまないが」

「分かっていますよ主。交代でこちらも見張りますから。」

「すまないな、俺は今日は寝る。」

「「「おやすみなさい」」」

「ああ、おやすみ」

そして初めての原作介入は出遅れての参戦だった。

そして、さらに数日。

いつものように夜の魔力反応をチェックしていると。

「主、今回はずいぶん珍しいわよ。」

「どづじした？」

「魔術士が三人、使い魔が一匹みたい。場所は・・・海沿いのコンテナ置き場」

「そうか、なら行って見るか。（たぶんあのよく小説で扱いがKYが入ってくるんだろうな）」

「それじゃあ、今回もムーン」

「イエッサー」

そして俺は死神となって家を飛び出した。

そして今度はこの前より早くその場に向かった。

第百話。これが偽善？（後書き）

あとがきラジオ

「きょうは私、サンと」

「ムーンでお送りします」

「やっとわたしたちの特訓の成果がみせられるわね」

「そうだなたぶん」

「なんで、二体とも私をみるの」

「なに、ちゃんとだすんでしょ（だろっな）」

「は、はひ〜。もちろんです。」

「それでは次回。」

「俺は俺の道に行く」

「「バイバイ」」

第銃話 俺は俺の道を行く(前書き)

う
十話掲載です。さいきん文が具だ具谷になってきた・・・がんばろ

第銃話。俺は俺の道を行く

Sideなのは

今はあの子と、使い魔の人を追ってここまで来た。そしてこちらに向き直ったあの子がこっちに向かって攻撃をしてきた。

「なんで追いかけてくるの?」

「フェイト、そんなことよりどうにかして倒しちゃえ」

使い魔の人が私とユーノ君を指しながら言っている。

「アルフ、・・・それじゃあいくよ。今度は手加減しないから」

なんで、いつもそうなるんだろう。今日こそ、ちゃんとお話をしたいのに。

「なのはちゃん!」

ユーノ君も戦う準備をしてまわりに魔方陣を展開させていた。

そしてあのフェイトって言う子も

「いくよ。バルディッシュ」

「イエッサー」

「だから、私はお話がしたいだけなの」

そう言っつてレイジングハート構えたがその時

「その魔術師、戦闘行為やめなさい。自分は時空管理局のクロノ執務官だ」

そしてその声が聞こえる先には少し大きい男の子が居た。

そして、あの子と、その使い魔の子は逃げようとしたが

「逃がさない、バインド」

そう言っつてあの子にひも状のものを巻きつけた。

「待って、ただ私はあの子と話が「フェイトになにしやがる」「っえ？」

そう言っつて使い魔の人がその黒い男の子に突っ込んでいた。しかしそれを読んでいたらしく魔弾をもろに食らったがその隙にあの子に近づいたが、

「無駄な抵抗はやめなさい」

そう言っつて今度はさっきより強そうな魔弾を撃った。

「だめええええええええええ！」

私は大声を上げたが少し遅く魔弾は撃たれてしまった。しかし思いのほかその煙からはこの前あった、あの子が居た。

Side out

家からすぐに出て、反応のあった場所にいったらそこではなのはとフェイト、そしてユーノとアルフが牽制しあっていたがそこにあのKYが現れた。

「その魔術師、戦闘行為やめなさい。自分は時空管理局のクロノ執務官だ」

お、これは原作通りだな。しかし次の瞬間バインドをフェイトにかけた。おいおいいきなりかよ、そのせいでアルフが突っ込んで行ったが見事に撃沈かと思いきやその隙についてバインドにかけられたフェイトを救出しようとしたがさらにクロノは追い討ちをかけた。ってこれは原作にないな、てかあれ当たったらただじゃ済まなそうだな。しかたない介入しますかな。

そして俺はアルフとフェイトの前に立った。

「ムーンこれぐらいなら」

「なにも入りませんよ」

そして撃つてきた魔弾を俺はただ受けた。もちろん無傷で

「おい、君たち、安心しろとは言わないが俺は味方だ」

すぐに後ろに居た子に、

「結果外に早く」

「ああ、行こうフェイト」

「え、うんって、っ」

「ああ、足に当たっちゃったか。それじゃあ負ぶって行くよ、フェイト。それからあんた、名は知らないけど助かったよ。」

「構わんよ、早く行け」

そして二人はすぐにどっかに行ってしまった。帰り際に「ありがとう」っと、言っていたな。さてちょっとそのクローンボでも締めるか。

「なぜだ。貴様、なぜさっきの子を逃がしたんだ。」

「おいおい、魔弾を当てといて喧嘩腰だな。」

「なに、ただそこに居合わせたただけだ。しかしいきなりバインドで拘束し攻撃とはね」

「公務執行妨害をした。だから「しかしここは地球だがね」え？」

「君はさっき時空管理局といったね」

「ああ、」

「確かここ管理外の地球と言う世界のはずだがなぜ、君の言うこと

を聞かないといけないのだね？」

少しいじめてみたら、反論してきた。

「だが、『やめなさい、クロノ執務官』え、」

いきなりクロノ前にモニターが出てきたそこには幼い頃に一回見たが今も変わらない人がいた。

『さっきあの人が出ていた通りですそれに執務官としてはいただけない行動が何点ありました。ここにいませんが謝罪をしなさい』

「し、しかし。わかりました。すみませんでした」

クロノがお辞儀をしている、さすがにお母さんには構わないんだな。

「それでは、『まって、事情を説明してほしいのだけれど。こちらただ魔力反応が物凄い高くしたため来ただけです。』そうですか、」

『はい、それではこちらの艦に』

そして光り出した、魔方陣の中に俺となのはとユーノが入っていた。

そして現在アースラの中の廊下である。さっきユーノが人間であることになのはがびっくりしていた。がそしてある扉の前にきた所で

「ここからは、バリアジャケットを解除して入ってもらおう」

クロノが言っているがなのはとユーノは入った時に解除しているためある意味俺だけに言っているようなものだ。しかし解除すると俺の変装がばれる。

「それは拒否させてもらおう。なんてったってこちらは一度攻撃を受けているのでね」

「し、しかしそれは貴方が急に『いえ、構いません。クロノ執務官、通しなさい。』はい、かあさ・・・艦長」

そしてその扉の向こうには畳とその上でお茶を楽しむ。人がいた。しかしやっぱお茶にミルクを入れていた。

「初めまして、私はここアースラの艦長をしています。リンディ・ハラウンといます」

「クロノ・ハラウンだ」

「私は高町なのです」

「ユーノ・スクライアです」

ああ、どうしようやっぱここは偽名で、

「スバルだ」

自己紹介が終わりそして、今までの経緯、ロストログアであるジュエルシードを事故でこの世界にばら撒いてしまった責任から一人でいったユーノに

「偉いと思うは」

リンディさんはそう言うがクロノは

「しかし、無謀すぎる」

と、原作どおりのことをいっていた。

「分かりました。それでは現時点をもってそのジュエルシードの捜索は管理局が受けますので指し当たっては「それでは、帰らせていただく。君も帰ろうか」「っえ？」

「え？、え？」

そして半ば強引になのはの手を引っ張って行くことしたら

「ちょっと待ってください」

そう言ってリンディさんが止めてきた。

「なんででしょうか。それにいい加減にしてください」

少し殺気を混じって言うてみた。

「え、え、どうしたの、スバルさん」

少しなのはは怯えていた。

「ああ、そこに居る人はね、さっきから俺やなのはちゃんの魔力を調べていたんだ。それでね俺はジャミングをかけていたんだけど、

なのはちゃんはずい魔力を持っているから、今回の事件で協力をしてもらって今度の事件の時も協力しやすくする戦法だったみたいだね。万年忙しい管理局さん」

そう言うと俺は出て行った。

「待ってください。」

「まだなにか」

「さっきの無礼は心から謝罪します。ですが一刻の早くこの事件を解決したいんです。ですので協力をお願いします。」

そう言ってリンディさんは頭を下げた。

「あのー私は協力しても良いです」

そうなのはやっぱり言ったので

「そうですね、幾つかの条件があります」

「はい？」

「まず、なのはちゃんはその子と話がしたいんだよね。」

「うん、なんだかあの子かわいそうだったからお話だけでもって」

「そうか、ならーつ目はあの子となのはちゃんを話させること」

「はい、」

「それから、俺のデバイスには干渉しないこと（ギル爺があまり見せるなっついていてたしな）」

「は〜」

「そして最後なんだが今回の事件は管理局の対応が遅かったために起きたのでろっ?」

「はい、返す言葉もございません」

「なら、今回の首謀者や、犯人の刑は軽くしてほしい、以上だ」

「ちょっと待て、最後のはなんだ、「わかりました」って、かあ・
・艦長」

「そうか、なら今日は」

「はい、帰ってもらって結構ですので」

そして俺となのはとユーノは帰っていった。

貴一となのはとユーノが帰ったあと

「艦長、彼何者なんですか、ステルス機能をマックスにしたのに気づかれました」

「ええ、そうね。だけどあちらに非はなかったは」

「そ、そうですね。それとなのはちゃんとユーノ君のは取れましたよ」

「しかしなのはちゃんとユーノ君そしてあのスバルって人の理由は分かったけど、この黒い子はいったい？」

「なんだか強い思いがあるみたいですね。」

「エイミィ、すこしそこらへんも調べてみて」

「了解です。艦長」

「強い思いね・・・」

そして俺の原作ブレイクが始まった。

第銃話。俺は俺の道に行く（後書き）

やっと原作ブレイクに入った。

今回はラジオはおやすみです。それではこんな駄目文ですがこんごもヨロシクお願いします。

それでは次回、フェイトに接近

それではバイバイ

第銃舌話。 フェイトに接近（前書き）

十一話掲載です。

CMですが私は他のサイトでも執筆しているのでそちらもぜひ見
てやってみてください。

第銃舌話 フェイトに接近

Sideフェイト

私はあの管理局の人から逃げて来て今、とある部屋の一室に居る

「フェイト、まずいよ。管理局が出てきちゃったし、あんな女ほつとして逃げようよ」

「アルフ、母さんをそんな風に言わないで」

そう私はお母さんが笑顔になってくれればそれでいいんだ。あの昔のように……

「ん、反応がこの近く」

「な、フェイトそんな状態じゃ無理だよ」

アルフは心配してくれているが、空を飛んでいれば。

「大丈夫だから、管理局が来る前に回収しなきゃ」

「だけど、……わかったよだけど無理だと分かっただけならすぐに離脱だからね」

「うん、ごめんねアルフ」

「何言うんだい。私はフェイトの使い魔だよ」

そして私たちはジュエルシードの反応があった場所に向かった。

Side out

アースラから出た俺らだがなのはとユーノは浮かない顔だった。たぶんフェイトとアルフに完全に押されたことが原因だろうけど。

「さ、君たちも今日は遅いし帰りなさい。」

そう言った瞬間ジュエルシードの反応がしたが、

(サン、すぐに、アースラの周りとユーノにジャミングをかけてくれ)

(「は……ぎよ、御意」)

よしこれでたぶんフェイト達は気づいただろうが管理局とユーノは気づかないだろう。それじゃあちよつと会って来ますか。

「それではな二人とも。」

「あ、はい」

「ありがとうございました」

上からユーノ、なのはと挨拶してがやはり浮かない顔だった。

そして二人と別れてから、その反応さきに向かった。今回はサンをセットアップした。もちろん変装をして

「なぜ今のようなことを？」

「なに、ただ確認したいことがあるだけさ」

「し、しかし」「マイロードそろそろ反応のあった所です。」「ん？主、もうすでに発動しています」

「なんだと、あんな体で・・・くそ。サン！」

「わかっています。ほんと主は人使いが荒い」

そしてそこに急行した。

そこではふらふらのフェイトが必死にジュエルシードを封印しようとしていた。

「フェイトもう」

「アルフ、もう少し」

そして後もうちょいって所で魔力波に押されてフェイトは吹き飛んでしまった。

「フェイト!!」

アルフが叫んだところで俺はぎりぎりフェイトが地面に接触するのを防いだ。

「ぎりぎりだったな。サン、あとで特訓な」

「ぎよ、御意」

そして俺は抱えたフェイトを下ろして、

「君も無茶をするな。こんな体で、」

「え、え」

「まったく「フェイトオオオオオ」おっと、」

そして一直線にアルフが突進もとい飛んできた。

「大丈夫か、フェイト。」

「うん、その人が、助けてくれた。」

そして俺の方を見ると少し警戒しながら、

「管理局のやつか」

「いや、確かに今回の件では協力するが別に管理局の局員と言っわけでもない。それに言っただろ、俺は君たちの味方だよ。」

「え、と言うことはさっきの」

そう言っている間にジュエルジードが暴走しそうだった。

「話は後だ、一樣管理局には分からなくなっではいるが早く封印したほうがいいな。それじゃあ、すまないが封印は頼むよ。」

「な、あんた」

アルフが言い終える前に、俺は

「めんどいな、サン2hdモード」

「は、ツインガン」

そして俺は双銃を手にし、ジュエルシードに軽く十発いれたらすぐに暴走は収まりそこを、フェイトが封印して回収した。

一段落がしてアルフが声をかけてきた。

「あなた、いったい何者だい？」

「なに、セイギノミカタ偽善者だよ。」

「怪しくて意味が分からないね、しかし二度もフェイトを助けてもらったんだ、一樣礼は言っとくよ」

「なに、構わんよ。それより、君、足」

そう言ってフェイトの足に

「ケアルガ」

回復呪文をかけてあげた。

「あ、ありがとうございます。」

「本当にあんた何者なんだい、あんたはさっき管理局に協力するって」

「ああ、確かに、だが俺は君たちと敵対するとは言っていないんでね。」

「しかし、顔を見せないのは信用できない」

そう言ってアルフはこちらに構えた、

「は、しょうがない、ソル、変装解除」

「良いのですか？」

「変装はリンディさんとなのはのためだからな」

「それでは解除」

そして俺は変装（十八ぐらい）から九才の元の姿になった、そして二人とも驚愕していた。

「な、あんた子供だったんかい」

「ああ、そうだよ。訳ありでね。変装してたんだ」

「そうなのか、すまないな疑ったりして」

そう言ってアルフはお辞儀をした。

「なに、当然だろ。一応な」

「あたいはアルフだ。で、こっちが私のご主人様の」

「フェイト・テスロツサです。助けられてありがとう／＼／＼／
／」

なぜかフェイトが赤くなっている。なんでだ？

「（流石に二度も助ければ）」

「（主はある意味鈍感ですね）」

「（マイロード・・・）」

なんかひどい言われようだが何でだ？そんなことは置いといて俺は自己紹介をした。

「ああ、俺は星川貴一だ、あの変装の状態だとスバルと名乗っている。」

と、言い終わると、

「すまないが、なんでジュエルシードを集めているんだ？」

「そ、それは「アルフ」わかったよフェイト」

少し残念そうにアルフはこっちを見てさっきまでと雰囲気さがらりと変わり、

「ごめんね。それは言えないし邪魔をするなら」

そういうと、いきなり間合いを取りデバイスを構えた。

「恩をあだで返してごめんなさい。だけどこれは私がしないといけないから」

そういうとフェイトは飛んで行った、アルフは

「お、おいフェイト、すまない星川、あれは・・・」

「いい、言わなくて、それから一言だけ、あの白い子の話を聞いてあげてって伝えてくれ」

「ああ、できたらだが、そうするよ。それじゃあ」

そして二人は結果外に消えた。

「反応ロスト。宜しかったのですかマイロード？」

「そうよ。主、理由ぐらいを聞けば分かるかもしれないじゃない」

「しかしマスター、あの少女にはなんかありそうだ」

「ああ、だからかもな、すこし心配だ。」

「「「これだからマイロード（主）（マスター）は甘いのです。」

」」

「しかし、それが良さかもしれませんね」

「うるさいぞお前ら、さて今日は帰るか」

「あ、主、冷蔵庫が空と今朝言っていましたよ。」

「あ、そうだななんか買いにいかなきゃ」

そうして俺は近くのスーパーに行った。

Sideフェイト

今日はいろいろとあった。あの星川って人に二度も救われた、しかも同じ子供だったなんんて。

そしてあの後すぐに家に戻ったら、アルフに怒られた。

「フェイト！、あれはないよ、星川だったら」

確かにそうかもしれないあの子なら、だけど・・・

「だめ、これは私がするの、私がお母さんを笑顔に、確かにさっきのは失礼だと思っただけど、私が、私がお母さんを・・・」

「フェイト」

ごめんね。星川君だけど、私はお母さんの笑顔が好きだから・・・

第銃舌話。フェイトに接近（後書き）

あとがきラジオ

「作者と貴一のあとがきラジオ、」

「とうとう、ここまで来たか、」

「ああ、そつだよ貴一君」

「あとよ。」

「なんだい、そして持っている物騒なものを「ゲイ・ボルク」げ、
くは」

「まったく、いきなり、CMなんかしゃがって、お前はそこまでう
まくはねえよ」

「たく、しかしは腹いせに・・・間違えて殺してしまったが」

「まあいいかどうせ今度には復活しているだろうし」

「それでは次回、集まったら願いが叶うの！？です。それではデウ
エルスタンバイ」

「って古すぎたかな、バイバイ」

第銃式話。集まったら願いが叶うの!?(前書き)

十二話掲載です。すいません遅くなって

第銃式話。集まったら願いが叶うの!?

アースラに行つてから数日、ジュエルシードの搜索が難航して
なのは今日はその搜索の手伝いをしにいった。学校はリンディ
さんがどうにかしていたらしいが。

そして、今日はなのはが居ない学校。

「ねえ、貴一あんた知らないの、」

「え、なにが」

そう言つて屋上で一緒にお昼を食べているアリサが聞いてきた。

「知らないよ(すごく関わっています・・・)」

「そんなんですか、貴一君も知らないんですか・・・」

「まったく人の気も知らないで、なのはは少し自分に溜め込むの
よまったく」

完全にキレてらっしゃる・・・

「ま、もう少し待ってやれや、な」

「む、」

膨れっ面のアリサさん・・・か、かわいって、おい石を投げるな、
わあああ、ベンチを投げるな、

「アリサちゃん、もう少し待とう。ね？」

さすがアリサをなだめている。

「わかったわよ。」

「遊べないから寂しかったんだよね」

「す、すずか／＼／＼／＼／＼」

本当にこいつら仲いいな

“キーン コーン カーン コーン”

チャイムが鳴ったな。

「そろそろ、行くか」

そしていつもの通り、嫉妬の目を受けながら教室に戻った。

さて、今日はどうだったか聞こうかな。

そして俺は変装して今回はバリアジャケットなしでアースラに入
った。

「失礼するよ。」

そう言っつて艦長室に入ったのだが、なのは、ユーノ、クロノ、エイ
ミイは『この人誰？』って顔で、リンディさんは「え、勇士君？」

「分かった。それでは緊急の時はそのとき呼んでくれ」

そう言った瞬間に高魔力反応がした。

『艦長、こちらから地球の海にジュエルシード反応が・・・ええ！
！六個です。ジュエルシード反応が一気に六個。』

「エイミィ、その場所を検索して画面にだして」

『はい・・・出ます、これは』

そこにはフェイトが無理してわざと暴走させて封印しようとしていた。

「な、なんてことを」

「あの子の魔力量を軽く超えている行動です。」

「わたしが出ま「ダメだ」っえ」

「どの道あれでは持たないだろう」

だが俺は歩きだした。

「な、あなたは聞いて無かったのですか。」

「ああ、聴いたぜ、だがな、行かないなんて言ってねえぜ」

「な、あなたは協力すると」

「確かに協力するとは言ったが誰が命令に従うと言った」

そして俺はその海に転送した。

そしてなのも駆け出して

「ごめんなさい、後でどんな罰でも受けるんで、高町なのは、命令に背いた行動をします。」

そしてユーノが用意した魔方陣で転送した。

「な・・・」

クロノは唾然としていたが、スタンバイをして隙を狙うことにした。

そこは竜巻が何個の出来ている、荒れた海だった。

「フェイト、無理だよ」

アルフはなきそうである。

「はあ、はあ、」

フェイトはもうダウン寸前だった。

「まったく君は何回自分を危険にする。」

そこいはさつきアースラから転送してきた。サンをセットアップした貴一が居た。

「え、きい「今はスバルだ」す、スバルなんで」

「なに、偶然通りかかったただだよ、それにまだ来る」

「え？」

そして今度はなのが飛んできた。

「うわわ、竜巻が」

「く、フェイト。」

そう言つてアルフが飛んできた。

「あんだ、」

「今は戦っている場合じゃないみたい。スバルさん」

「ああ、わかった。Finalモードだ」

「御意、プラスモード」

そして持っていた、銃は長銃に変化して、そしてなのは一番最初に覚えたあの砲撃技の構えをして、

「デイベインバスター」

「戦慄の「一掃」」
ストライク

そうして二人の砲撃は暴走を止めた、

そのときクロノが急にきてジュエルシードを取ろうと転送してきた。それにアルフは一撃入れたが、なんとクロノ手には三つのジュエルシードがあった、

「ち、くっしょおおおおおおお」

そう言ったアルフはフェイトを抱えてどこかに消えた。

(ソル、追跡システムを)

「(イエス、マイロード)」

そしてこれにてすべてのジュエルシードがなのはとフェイトのデバイスの中にあることになった。

俺らは一旦アースラに戻った。

第銃式話。集まったら願いが叶うの!?(後書き)

いや〜最近まったく書けません・・・どうしよう

それでも頑張りますので。どうか読んでくださいお願いします。

次回、それが家族

バイバイ

第獣参話。それが家族（前編）（前書き）

今回は前編、後編です。やっぱりここは長くなりましたので。二部に分けました。

それでは第十三話掲載です。

第貳参話。それが家族（前編）

「それではこれより、これからの方針について考えます」

リンデイさん、クロノ、エイミィ、ユーノ、なのは、俺はアースラの食堂に集まり今後の作戦を練っていた。

「これで全部のジュエルシードが発見されました。」

「ああ、それでどうする？」

「はい、それではこれより、三日間の休息の後にあの、フェイト・テスタロッサ並びにプレシア・テスタロッサの確保を方針とします。」

「か、艦長！！」

行きよいよよくクロノが突っ込んだ。

「なんですか？クロノ執務官」

「一体、どうやってそれをするんですか？」

確かに妥当な判断だ、大体はいつもアルフの魔法で邪魔され途中で行方が分からなくなっていた、まあ、俺とサンは余裕で逆探知できたが。

「そうですね。そこですね」

エイミーも案が無く考え込んでいる。

「私もまだちゃんとお話できてない」

なのはに至っては話をする方法を考えていた。

「確かにな、あっちもまだジュエルシードを狙っているだろうし」

「しかし、それだけの魔力はなにに必要なんでしょう？」

「くくくくうん」「」「」

まあ、知ってはいるがここで話すわけにもいかないな、今回は全員をハッピーエンドにするのならあの人も救わないと・・・はあく完全な偽善だな。

「あ、あの～」

その時なのはが手を挙げた。

「はい、なのはちゃん」

「私たちはこのジュエルシードによって出会いました。だから、私はそれをすべて賭けてあの子に、話したいと思います。」

おお。なのは、原作どおりジュエルシードを賭けるか

「だ、だが、すべてを賭けるということは、ある意味・・・、わかった好きにしたまえ。君の信じる道を」

クロノも折れたか、まあ、いろいろとあるだろうがな。

「は、はい。それでは失礼します。」

「あ、なのはちゃん、し、失礼します」

そして、なのはとユーノは消えた。

「さて、本題を話していただくか」

俺はその場に居た。三人に問いかけた。

「あら、なんのこと、「惚けないでください。だいたいは分かった
のでしょうか。」はあ」

リンディさんは降参したように。

「はあ、貴方は本当に察しがいいですね。」

「なに、さっきのなのはの話をクロノ君が賛成したことだ、君みたいのはこういう賭けは好きそうじゃなさそうだからな。それにエイ
ミイさんの顔が少し暗くなりましたから」

「「そこまで……」」

クロノとエイミイはシンクロしていた。

「はい、実はですね。どうにかしてプレシア・テストロッサの拠点を調べたかったです」

「なるほどな、どの道なのはがさっきのことを言おうが言わなからうがどの道あの子は残りのジュエルシードを探すだろっからその隙について逆探知か」

「はい、それにプレシア女史のことも少しはわかってきました。」

リンディさんがすごく甘そうなコーヒーを飲みながら一息ついていった。

「そうか。」

「はい、プレシア女史は管理局の技術者でしたが、ある事故がきっかけで行方知らずです」

エイミイが話してくれたがそれ以後、またはそれ以上は分からなかったらしい。

「そうか。それでは私も三日間は休日をごさしていたらごう」

「はい、それでは」

「ああ、それでは失礼する」

そして、俺はアースラをでた。

S i d e ア ル フ

今日はジュエルシードが三つだけ、だがフェイトは十分良くやったと、思うもしあそこで貴一達が助けなければ危うかった。

そして今日の報告をしたフェイトがあゝの玉座の間から出てきた、手
や足に傷を負って、

「な、フェイト、どうしたんだい、その傷」

わかっている絶対あの女だ・・・

「・・・」

「フェイト・・・」

「ごめん、少し休むねアルフ」

そしてふらつきながらも自分の部屋に戻った。

その時私は尋常じゃない怒りを感じた。あんなに頑張ったのにあんなに思っているのにそいて私は玉座の間の扉を壊し入った。

「どっくに、どっくに」

しかしそこにはあの女は居なかった。だがいつも座っているところの後ろになにかがあった。そこはなんだか変な空間で遺跡の欠片が中に浮いていたがそこにあの女が居たそして次の瞬間私は我を忘れた。

「やはり、あれは失敗作で使えないわね」

その瞬間私は殴りかかった。

「おまえ!!」

最初に顔面を殴ろうとしたが魔弾で弾かれた。

「フェイトが、フェイトがどついう気持ちで」

「ふ、どうせ偽者なのよ」

「それでも親かよ!!」

そして今度こそ殴ろうとしたが、

「はあ、ダメな子の使い魔もダメね・・・消えなさい」

そして私は全身に雷を受けた、そして私は気力を絞って地球に逃げた。

147

数分後

「・・・!!」

「一体どうしたの。こんな傷」

誰だかわからないが、私は狼状態でどこかに倒れているらしい。

「ガ、ガウルル」

「動かないで。すぐに内の者を呼ぶから」

「もしもし。ええ、私。少し来てくれるかしら。ふふ、そうよ。それじゃ」

「もう安心して、ね」

そして私は意識を手放した。

S i d e o u t

そして俺は結局、アースラを降りてから特訓を始めた。

第貳参話。それが家族（前編）（後書き）

あとがきラジオ

「「貴一と作者のあとがきラジオ」」

「さてさて、今回も始めました」

「はあ〜」

「どうしたんですか？貴一君」

「あのな〜まだ無印終わってないんだから、ちゃっちやと書いて、てか俺のチートをもっと説明しろ、お前の脳内だけで保存するな」

「痛いところを、それでは次回そのことについてかきますよ」

「お、おい、後編はどうするんだよ。その間に書きますよ」

「天地乖離す開闢の星 エヌマ・エリシユ!!」

「ふ、甘い。アヴァロン」

「な!」

「いつもとは違うのだよいつもとは」

「ち、それじゃあ閉める」

「ハ、ハ、ハ、わかった。」

「「それでは次回、番外編」」

「「それじゃあ、バイバイ」」

番外編。俺の力・・・すんばらしい(前書き)

すみません、本編の間のお話なので番外編としました。

番外編。俺の力・・・すんばらしい

稲妻を纏った黒い鉄球を拳に乗せて放った。

「フラガラックー!!」

そして、俺はギル爺を吹き飛ばした。

なぜ、こうなったかと言うと、昨日、アースラから戻り普通に家に帰って、普通に夕ご飯を食べようとした所、メールが来て、誰からかと思ったら、ギル爺だった。その内容は、『すまんが急に帰れることになったものでな、久々に特訓しようぞ。』
だった。いきなりだな全く、

「主、どうしたのですか？」

「あ、ああ、実はギル爺が急に休みが出来たらしく、こっちに帰って来るらしい」

「マスター、どうせ特訓ですか」

「ああ、たぶんな」

「ならばマイロードそれならライトアンドダークネスも試せますね。」

なぜか、ソルは笑っている、こ、怖いぞ。

「ああ、そうだな」

そして予告通りギル爺はすぐに帰ってきてそして、ギル爺の家の特性の訓練場に来た。最近は来ていないがやはり広いな。

「それではいくぞ、貴一よ、」

「うん久々だよね。ギル爺」

そして二人は自分の相棒を出した。ちなみにギル爺はベルガ式でアイテムデバイスを使う形は大剣である、なんで持てるんですかって思うぐらいデカイ。それに加えギル爺は魔力変換資質を持っていた、しかも稀の氷結である。

「久々の死合いじゃ」

「ってギル爺、字が違うから」

「ほほ、そんなこと言ってないで早くしないか」

「はあく分かった。それじゃ、ソル。セットアップ」

「Set Up」

「さらにアンロック」

「「ライトアンドダークネス」」

そして俺は光に包まれ、そして黒い光を放った。

「いくよ、相棒」

「」「は…!」「」

「ほ、ほう使いこなせるのか?」

「ギル爺、甘く見ないでよ」

「それではいくかのう」

そして言った瞬間、ギル爺は瞬間的に俺の前に来た、しかし俺はそれぐらいでは驚かず直ぐに両腰にある刀を抜きギル爺と対峙した。

「なんと、このスピードでも見切るか」

「まあ、ただ遊んでいたわけじゃないから。」

「ならば」

そしてギル爺はいきなり試作品のカートリッジを使い、

「氷激の舞」

そしてその場のすべてを凍らせた。しかし、それはあくまで凍らせるだけだった、さらに俺はそれを見越してソルの得意な結界を張って凌いだ。

「ギル爺、まだまだだよ」

「な、なんと」

そして今度はこちらの番だ、刀を収めて、双銃を手にし

「戦慄の混沌^{カオス}」

そして今度はこちらが追尾弾を進化させたものを十六発撃った。だが

「なんと、リリさんの技までのか」

そんなこと言って向かってくる魔弾をすべて持っている大剣で落とされた。確かにこの弾は逃げれば逃げるほど強いが、しかしまさか全部力ずくで抑えるとは・・・本当に爺さんかよギル爺。

「こんなものか。ならばとっておきを使うかのう」

「とっておき？」

「そうじゃ」

そしてギル爺は少し距離を取った、しかしそんなこと言われて黙って見ているわけでこちらもある、後だしじゃんけんの技の構えをした。

「なるほどな、そちらも力で来るか、しかし負けはせん」

そして本日二度目のカートリッジをギル爺は使い。今度は大剣が凍りつき

「いくぞ、氷激一線」

そして、その冷氣とその縦筋が空間をも切り裂いたがこちらわもつ
すでに当たっていた。

「フラガラックー!!」

そして、俺はギル爺を吹き飛ばした。

「ガ、ガハ！」

そう、あの、後より出し先に断つと言われた。宝具、『フラガラック』を使った、これは相手が先に技を使ったとしても必ずこちらが先に出したことになる。だから、後だしじゃんけんなのだ。

「当たった？」

「」「はい、完全に目標は沈黙しま・いや反応あり、きますー!!」
「」

そして今度は大剣を振り捲くる狂戦士もとい老人がいた、

「は、は、は。素晴らしいぞ。貴ー」

そして笑顔でこちらに向かってくる。

「ちょ、ギル爺、そろそろダウンして」

「なにを言う。これは気絶するまでじゃよ。」

「なんだそりゃ、」

「ほれほれ行くぞ」

そして大剣を振りながらこちらに来た、

「いい加減に倒れる」

そして俺は今度は稲妻になった。

ドゥブレクス・コンプレクシオ
「双腕掌握」

「なんじゃ、いきなり貴一の腕に電気が」

ギル爺はいきなりのもので驚き少したじろんでしまった。だがそれは大きな間違いだった

「雷天大壮（ヘー・アストラバー・ヒューベル・ウーラーヌー・メガ・デュナメネー）？」

そして俺は稲妻化した・・・

「ふん、そんな物」

そう言った瞬間ギル爺の腹には俺の拳が入っていた。

「なんじゃと・・・」

しかし一撃入れたが、まだギル爺は剣で俺をなぎ払おうとしたが、流石に秒速150？/秒の早さには追いつかずさらに俺は背中に一撃を加えて今回の死合いは終わった。

「は、は、さすがに疲れた。」

「解除」

そして俺はライトアンドダークネスを解除し、雷天大壮も解除した。

「てか、ギル爺・・・伸びてるよ・・・」

そして、ギル爺は二時間後目が覚めた。

「なんとの。わしももう勝てないか・・・」

「いやいや、ギル爺、あの技は始めて見たよ。」

「何を言うか。お主も最後の魔法なんか、ワシは理解が出来なかったぞ。」

そりゃあ、そうだ。あの魔法はこの世界ではないからな。それに、その前の宝具も、この世界ではない、ある意味ロストロギアだからな・・・

「さて、それでは今回は貴一の料理でも食べさせて頂こうかのう」

「うん、いいよ。」

そしてその日は二回目の敗北をギル爺は経験した。

そして日が暮れて、ギル爺はまた、ミッドに帰るらしい。

「それではのう、貴一。それと、たぶんこの家に帰ることが出来な
いかもしれんのう」

「はい？」

「いやゝのう、なんだかんだで忙しくなつての」

「あらら、」

「じゃが施設が完全完備なのでのう。これは貴一、お前が管理して
くれるか」

「え、ギル爺、」

「なに、ただ単に管理局に渡したくないのでのう」

「あはは、分かったよ、ギル爺。こっちはまかせて」

「うむ、よろしく頼む。それではのう」

そして嵐のように去っていった。

「なんだがすごかったね。」

「うむ、ドクターは嵐だ。」

「マスター、あれは台風かと・・・」

「案外、豪雨だったりしてね、」

デバイスはそれぞれのことを言っている。

「さ、帰ろう。明日は学校だから」

「「承知」」

そして家に帰った。

あと、なのはと、フェイトの賭け試合まで二日

番外編。俺の力・・・すんばらしい(後書き)

あとがきラジオ

「「貴一と作者のあとがきラジオ」」

「やったー」

「おいどうした。とうとうイカレタカ」

「ふふふ、なんとお気に入りになってくださっている。人が1000人超えたのだよ」

「物好きの「エクスカリバアアアア」って、今回は俺があゝ」

「失礼なやつは消しました。」

「本当にありがとうございます。これからも頑張りますので、応援ヨロシクおねがいします。」

「それでは次回。それが家族(後編)」

「バイバイ」

第十四話。それが家族（後編）（前書き）

第十四話掲載です。

第十四話。それが家族（後編）

さて、さてギル爺が帰った。翌日、曜日は日曜である。普通の人なら休日だろうが、俺はある役目を果たすため、いや、自己満足のため、ある場所に向かう準備をした。

「サン、逆探知の結果はどうだ。」

「はい。完全に把握しました。この座標がその場所かと」

「よし、ビンゴだ」

「それではこの場所に転送する魔方陣を作りますので、」

「わかった。」

↳そして、数分後

「主、できました」

「ああ、わかった。それじゃあ、サン、変装を」

「承知」

「ソル」

「Set Up..」

「分かっているくせに」

そして俺は首から下げているペンダントを投げ。

「ソル、セットアアアアアップ」

「イエス、マイロード」

そして俺はかの有名な弓兵になり魔方阵の中に行った。

魔方阵から転送されるとそこにはあの、アリシアの部屋から出たプレシアが丁度玉座の間に座った。

「あら、客人かしら？」

不適に笑うプレシア。それにたいして貴一は無表情でこう告げた。

「あんたがあの大魔導師プレシア・テストロッサか？」

「ええ、そうよ。そして、無礼な客人の貴方は」

「なに、ただ単なるお節介さ」

「なら、死になさい」

そして、プレシアの手が光、雷が俺に向かって撃たれた。

「マ、マイロード…！」

「分かっている。分かっている」

そして、手を前にして

「我が思い七天の花弁に成りて、『ローアイアス』」

そして雷は七枚の花弁にさいぎられた。

「なんですって！！ゲ、ゲホ」

プレシアは突然血を吐いてしまった。

「お、おいあんた。無理するな」

「う、るさいわ、私はもう時間が、早く、アルハザードに…」

「伝説の楽園か…」

「ええ、そうよ。そして今度こそアリシアを」

「アリシアってのは、あんたの後ろにあるあの部屋にいる女の子か。」

「ええ、そうよ。そして、私の唯一の娘よ。」

「あの、フェイトって言う子は」

「なんなのただの偽者よ。アリシアのコピーにも成らなかった存在」

「ちがうな、違いすぎるぞ、」

「あなたに何がわかるのよ。」

プレシアがこっちに殺意だけを向けていた。

「確かに、あなたの事情なんざ知らん」

「だがな、あなたは二度目の娘すら無くすきか」

「だから、あれは偽も「それでもあんたが生みの親だ」え・・・」

「いいか、確かに、あれはアリシアのコピーかもしれない。だがな
あんたはさっきこう言ったんだ。あれはアリシアと違つと、」

「それでも「だがな」」

「いいか、確かにあんたの悲しみは俺にはわからない。それに俺の
家族は普通だからな。だがなどで家族かつてのはその人の価値観
だ。」

そして、俺はプレシアの前に行き

「さらにな、あんたはどうあれこうあれ、また、自分の子を無くす
きか！」

そう言ったらプレシアは少し泣いていた、いや、いつの間にか涙が

出ていた。

「あの子は偽……」

そうプレシアは分かっていたのだ。最初から同じ子など出来ないし、それはアリシアを否定することになるからだ。しかしそんなことは分かっているも受け切れなかった。そう、だからこそあのプロジェクトF・A・T・Eを実行に移した。しかし、結果はそんなに良好ではなかった、それは過去の悲しみの二乗にしかならなかった、だから、だから、

「だから、私はその時、フェイトの親をやめたのよ」

突然、プレシアは言った。

「今さら、どうしろと言いつの」

「簡単だ。そんなの」

「え……」

「今まで辛く当たったのならその分幸せにしてやれ、あんたはフェイトに大きな借りがあるんだからな」

「ええ、ええ、そうね。」

そして、俺は手を伸ばしたがプレシアは拒否をした。

「どうでした？」

「まだ、やることがあるわ」

「なんだ。それは」

「簡単よ。今回の後始末よ。」

「そうか、どうする気だ」

「たぶん、今私はロストログアの無断所持の疑いでしょ」

「ああ、確かにあなたにはそうなるだろう」

「そう。だから、フェイトは強要されていたとなればあの子の刑は軽くなるはず」

「確かにな。あんたが首謀者となればそれで、ある意味この事件は終わりだな。」

「それに貴方は多分管理局の」

「ああ、確かに今回の件では管理局に協力してはいるがな」

「ならば、私はあの子の」

「いや、そうならなくても、すむかもしれん」

「え、どうやって」

「いや、これはただ単なる思い付きだ、」

「でも、私は・・・」

「忘れたか。俺はお節介だと言っただろ。もし今回、いや今までに罪を感じているのなら、その分幸せな家族を作れ。」

そして、あと二日後ぐらいにわざと俺に遠距離の雷を打って、管理局に場所を気づかせると、指示を出し

そして、俺は行きと同じ魔法陣を引き

「それじゃあな、」

「ええ、ありがとう。私をいえ、私達を助けてそして私を気づかせてくれて。ああ、壮思えばまだ、名前聞いてなかったわね」

「ああ、そうだな。星川貴一だ」

「プレシア・テストロッサよ」

「それではなプレシアさん」

「ええ、それでは、その時まで星川さん」

そして、俺は家に戻った。満足感でいっぱいにして。

くそして家く

「すばらしかったです。マイロード」

「ああ、マスター、あんたはすごいよ」

「だけど、主、いつ気がついたの？」

「なに、感だよ。感」

実際は原作を見て一番最初に変えたい所だったからね。

さて、後二日、これで、完全のハッピーエンドを俺は作り上げる。

第十四話　それが家族（後編）（後書き）

やっと、あともう少しで無印が終わります。

なぜ、貴一はその場でプレシアを逮捕しなかったのか。そしてなぜ雷を落とすように指示したのか。

次回、これがハーレム・・・ちがった。ハッピーエンド

そして、ラジオのネタが尽きましたので、質問などあればどんどん送ってくださいお願いします。

第拾五話 友達は宝（前書き）

十五話掲載です。すいません予告と違う題名で・・・

第拾五話 友達は宝

さて、さて、今日は学校のある日。今はなのはと、一緒に学校に向かっている。

「なのは」

「・・・」

無言のなのは、たぶんフェイトのことだろうが、さすがに今のままではまたアリサと喧嘩しそうである。

「おいこら、」

“パチン”

そして、なのはの目の前で猫だましをした。

「ふええええ、って貴一君どうしたの？」

「どうしてのじゃ、ねえよ。顔がすごかったぞ・・・」

「え、え、どう、どう」

慌てて顔を解すなのはだが、そんななのはに俺は撫でてやった。

「どうしたの？」

「焦るなよ。」

「え？」

「今のなのはあんまりなのはらしくないぞ」

「私らしく？」

「そつだ。悩んでいるなら、一直線にお前らしくな」

「うん。ありがとう。」

少しは元気が出たようだ。そして、手を離すと

「あ、・・・」

・
なのはは少し寂しい顔をした。いや、そんなに寂しがらなくても・

そして、学校に着いた途端、なのははアリサに連れて行かれた。行く途中「貴一君たゝすゝけゝてゝ」って気がするがスルーさせてもらった。

そして、いつもの昼食の時間がやってきた。

「そう思えばねこの前の休日にすごい大きい犬を拾ったの、」

アリサが自分のお弁当を食べながらいていた。・・・ん？待てよ、確かアルフだよな

「なあ、その犬ってどんなんだ？」

俺は念のために聞いてみたら

「なんかね。おでこに宝石みたいのが付いているのよ」

「え？」

なのはが声を上げて反応した。

「どうしたの、なのはちゃん？」

「もしかして知っている人のペット？」

「あ、ううん。ただ、おでこに宝石が付いてるなんて珍しいなっつて」

「そうね。そうだ。すずかは今日たしか、なんも用事は無かったわね。」

「うん、なにもないよ。」

「なら、貴方たち、内で遊びましょ」

「え、うん。大丈夫だよ。」

「わーい、アリサちゃんちで遊ぶのは久しぶりなの」

なのははご機嫌で、すずかは久しぶりの三人で遊べることを喜んでいる。

「あら、アンタもよ。貴一」

「は、俺も？」

「そつだよ。ね、なのはちゃん？」

「うん、うん、」

「え、いや、俺が行っても」

「うるさい。あんたも来なさい。」

なぜか強引に決まった。それで俺は放課後になったら翠屋に來いだそつだ。

くそして放課後く

今はアリサの家に來て、その犬に見にいこうとなつたが、俺はトイレに行くといつてその場から離れた。そしてなのは達が戻つて來てから俺はアルフに会いに行つた。

「よ、久しいな、アルフ」

「な、あんた、星川じゃないか」

「ああ、実はなさっきのなのはと一緒にこの家に遊びに來ていてな。デコに宝石が付いていると言つていたから、もしかしてと思つたが」

「ああ、あのババアに攻撃したらこのザマさ……」

「プレシアさんか」

「あんだ、なぜそれを」

「会ったからな」

「何だつて!!」

今、アルフは大きい檻の中だが今にも噛み付きそうだった。

「いいか、今から言うことを最後まで聞いてそして・・・」

「なんだい」

「信じてくれ」

そして、アルフは威嚇するのをやめてくれて、そしてこちらにお座りの状態で

「言ってみな、あんだのことは二度フェイトを救ってもらっている。恩があるからね」

そして、俺はそこで、今までのプレシアさんのこと、そして、フェイトとアリシアのことさらにはその実験のこと。そして、プレシアさんが絶望し現実を見なくなったこと

「そ、それじゃあ、フェイトはアリシアの・・・」

「そつだ、クローンだ」

「だけど、私のご主人はフェイトだ。フェイト・テストロッサだ」

「ああ、その通りだ。確かにフェイトはフェイトだ」

「だけど、そしたら、今回のことは」

「ああ、アリシアの蘇生が目的でプレシアさんは実行した。」

「ああ、確かに理由は分かった。が、私はそれだけじゃあいつは許せない」

「ああ、許さなくていい。」

「あなたなにが言いたいんだ？」

「なに、それを見守ってほしいんだ。それに聞いているんだろ、なのはとフェイトが戦うことを」

「ああ、すべてを賭けるって、なんであの子はそこまで」

「それわな、簡単だよ。ほっとけ無いんだよ、自分もそうだったよ
うに」

「自分も？」

「ああ、なのはもな、一時期孤独だったんだ。だから」

「フェイトのことがほっとけないと」

「ま、そう言うことだろう」

「だけど、あんたの言うとおりならなんで、戦う必要があるんだ？」

「それはだな。今回の件を穩便にすませたいからな。すまないがなのは達には戦ってもらう。そのすきに管理局をはめる」

「いいのか、今回あんたは管理局に協力をしているんじゃないのか」

「いいさ、それにお互い無傷がいいからね」

「すまないね、フェイトのために。さっきあの子にも言ったがよろしく頼むよ。」

「ああ、なんせ正義の味方だからな、それで少し頼みたいのだが」

「ああ、協力するよ。」

そして、アルフにあることを頼み、俺はその場から離れ、なのは達の所に戻った。

「あら、お帰り。随分ながったわね」

「ああ、少しじゃれた」

「へえ」

「ま、良いわ。貴一、アンタも参加しなさい」

そして、ゲームのコントローラーを渡された。

「いいだろう。俺に勝てるかな」

そして、俺は前世のヲタクスキルをそこで使い、圧勝した。ちなみに案外すずかが一番強かった。

そして、日が暮れるまで遊び、今はなのと一緒に帰っている。

「なんだ、案外いい顔しているじゃないか」

「え？」

「迷いは晴れたか」

「うん、私らしくね。」

「ああ、そつだ。」

そして、俺らは各家に帰った。

Sideフェイト

今私は、ある、公園にいる。目の前にはあの白い子が、そして、その使い魔にであろうフェレット、そして、アルフ。そしてその白い子がいきなり

「まだ、私たちは始まっていないんだよ。」

「なにが？」

「私たちはまだ同じ所にいない。だから私は今までも全部をかけて、あなたに向かう」

そしてその子は今まで集めたジュエルシードを出して、

「私の持っているのと貴方のを賭けて勝負しない？」

「いいわ。なら、日付は、明日の午後、場所はあの海」

「うん、分かった。もし勝ったら、話を聞いてね」

「私が勝ったらそれは貰う」

「ふえ、フエイト」

「それじゃあ、」

そして私はその場を去った。すべてを賭けた明日のために・・・

Side out

そして、俺はアースラに緊急招集された。

「今回の作戦が決定されました。」

今、居るのは、クロノ、エイミィ、リンディ、なのは、アルフ、ユ
ーノと、俺だった。もちろん変装はしているが。そして、作戦説明
(なのはの戦う詳細について)が終わった。

「それではこれで解散とします」

リンディさんが言った。そして俺は一番早く出て行った。

これで、明日。原作とは違う大きな大番狂わせがあるだろう。

戦いはもうすぐ。。。。。

第拾五話 友達は宝（後書き）

さて、さてやっと。ここまで来ました。なんだが貴一がデスノートのキラミたいになってる・・・

今度こそ次回、終結

それでは。次回はラジオやります。感想などドンドン送ってきてください。

バイバイ

第絨六話。終結（前書き）

とうとう、エンディングに近づいてきて、エース編に入る前の短編
考えるのが難しい・・・

なんかリクエストがあるんでしたら、ドンドン送ってきてください。

第弍六話。終結

今は、海の上にいる。とうとう、この日がやってきた。なのはと、フェイトの戦い。

両者、間合いを取り、勝負に移った、ちなみにここにいるのは俺、アルフ、ユーノだけだった。他はアースラで逆探知の準備。

“ドカーン”

衝撃と共に爆音、今のはフェイトの稲妻だろう、それをなのははギリギリ魔法壁でしのいだ。しかし、フェイトはその隙に間合いを詰め

「バルディッシュュー!!」

「イエッサー」

鎌にデバイスを代え追撃をした。さすがにそれにはなのはは耐えたが、反撃が出来なかった。

「は、」

「く、」

攻防が続く、しかし、なのははある作戦を使った。それは・・・

「今だよ。レイジングハート」

「オーライト」

そして、フェイトにバインドをかけた。

「し、しまった。」

そして、なのはの周りに最大の魔方陣がしかれ、

「これが最初で最後の全力全開」

そして、あの白い悪魔が放った

「デイバインバスタアアアアアアアア」

“ズガア ン”

そして、フェイトはもろ食らった。その結果、フェイトは落ちた。

「な、フェイト!!」

しかし、俺が救った。

「あ、ありがとうございます。スバルさん」

飛んできたなのはが言ってきた。

「なに、大丈夫だろうがすぐにアースラへ」

そして、俺はフェイトをなのはに預けると、アルフに合図を送った。その指示とは、プレシアに今俺の居る座標を送ることだった。そして、プレシアさんにはその座標に雷をおとしてもらってわざと逆探知してもらったことを話した。そして、

“ズドーン”

雷が俺に落ちてきた。

「ローアイアス」

そして、防いだ。その結果。

アースラでは

「さっきの雷の発信源を調べてエイミィ」

「はいはい、艦長」

「出ました。」

「それでは自分が「分かったか？」ん？」

そして俺は無理やり会話に入って

「はい、座標は分かりました。」

「なら、俺が先行しよう。現在、そっちにはなのはとフェイトが向かうはずだし、まともに動けるのがクロノだけであろう」

「はい、すいませんが」

「ああ、行ってこよう」

ここまで作戦通りと思いつつ指定された、転送先に俺は行った。

Sideフェイト

私は知らないところにいた。

「ん、ん」

「あ、フェイト、やっと起きたよ。」

そしてアルフは抱きついてきた。

「あ、あれここは？」

「ここは、あの子たちの船の中だよ。」

「こんにちはなの」

「ええ、貴方が助けてくれたの？」

「ううんうん。スバルさんが」

スバルさん・・・ああ、星川君か、また助けてもらっちゃった。

「あのね、もし勝ったら話聞いてくれるんだよね」

「うん」

私はまだ、ベットに座った状態だったが

「あのね、友達になってほしいの。私の名前は高町なのは」

「え、」

その言葉を聞いたとき、モニターが現れ、『今、スバルさんが入りました。』と、言った。

「いっしょ、」

「だ、だけど」

「今はこっちでしょ」

そして、なのはに連れられて私は艦の中心にきた。そのモニターに写っていたのは星川君とお母さんだった。そして、次の言葉を聞いたときのお母さんの顔は昔のあの顔だった。

『私の娘であるフェイトと、話をさせて』

そう、私が大好きな顔だった。

S i d e o u t

今、俺は玉座の前にいた。

『そこにいるはずですよ』

エイミーが案内してくれた。

そして扉を開いた。

「貴方がプレシア・テストロッサ？」

「ええ、そうよ。」

「すみませんが、ご投降、願えますか？」

「はい、ただお願いがあります。」

俺は一瞬びっくりしたがプレシアさんの雰囲気から大丈夫だと思った。

「なんですか。」

「私の娘であるフェイトと、話をさせて。」

「わかりました。リンディさん？」

『はい、分かりました。それではあなたをこのアースラに保護させていただきます』

そして通信が切れて転送用の魔法陣が出てきた。

「それでは、」

「ええ、お願い」

そして、俺とプレシアさんはアースラへと転送した。

そして、アースラに到着。

目の前にはフェイト、アルフ、なのは、リンディさんが居た。

第絨六話。終結（後書き）

あとがきラジオ

「「貴一と作者のあとがきラジオ」」

「久々だな」

「もうしわけない」

「まったく、なにもこないじゃん」

「……」

「まるで、屍のようだ」

「……」

「はあくいつまで固まっているんだよ」

「っは!!。私はいたい」

「はあくまあいい、早く予告しろ」

「じ、次回、フラグはいつも間に立てた!？」

「「それではバイバイ」」

第7話。フラグをいつの間立てた!?(前書き)

第17話掲載です。

誤字雑字が多いでしょうが。これからもがんばります・・・

第7話 フラグをいつの間立たてた!?

さてはて、プレシアさんを連れてきたのはいいが、……

「貴方がプレシア・テストロッサ？」

「ええ、私がプレシア・テストロッサよ」

「分かりました。それではこちらに」

「お、お母さん！」

フェイトが叫んでいるが、プレシアさんは

「大丈夫よ。それでね、フェイトこの後お話があるの」

若干緊張気味のプレシアさんにフェイトは

「うん、うん、」

と、うなずくだけだった。

「それでは一度戻りましょう。」

エイミーが言うように

「さ、戻りましょう」

「ああ、」

そして、俺は戻った。

それから二十分ぐらい経ってから、

『こちらにフエイトちゃんを、』

モニターからそう言う指示が出た。

「私も行くぞ」

さすがにアルフは付き添いで入ったが。俺とクロノそしてエイミィはその部屋の廊下で待機していた。

「なぜ、貴方まで来るのですか」

「気分だ、気分。てか、なんで君たちも来ているんだ？」

「そんなの、もしもの場合です」

クロノは完全に管理局員だな〜と思いつつもそしたら急に扉が開いた。

「スバルさん。私の変わりにお願いします。どうしても貴方ならと・
・」

そしてリンディさんが扉から出てきてそう言った。少し表情が暗かった。

「どうしてです？」

「今回の事件の発端はすべて聞きました。」

「そうですか、それで？」

「はい。なんだか、まだあるみたいで……」

「分かった。それでは」

そして俺はその部屋へと入っていき、そこで抱き合っていた、テスタロッサ親子を目撃した……

「良かったな、フェイト」

俺が不意に声をかけると

「え、星川君？」

「よ、」

俺は軽く挨拶した。

しかし、思いのほかプレシアさんがこちらを向き直り

「ありがとう、貴方には感謝しきれない恩ができたわね。私を気づかせてくれたただけではなくて話によると、なんどもフェイトを助けてくれたらしいじゃない」

「いや、それはすべてアンタがしたことだ……その、」

「ちゃんとフェイトに全部言ったのか・・・」

「ええ、そして私の娘ってことも言ったわ」

「そうか、ならいったのなら証明しろ」

「ええ、そうするきよ」

そして俺に深々とお辞儀した。

「私からも礼を言っよ」

アルフもお辞儀をした。

「そうか、それでアリシアのことだが」

「ええ、それは・・・」

フェイトが俺に

「アリシアお姉ちゃんはゆっくりと安らかにね・・・」

フェイトもさすがに自分の分身いや元だと言われた少女のことが少しながら思っているのだろう。

「そうか。なら、ミッドに」

「ええ、後日、あのリンディ艦長さんと一緒に運ばつかと。」

「そうか。それが、けじめか？」

「ええ、私いえ、私たち家族のけじめ」

そうはつきり言つとフェイトを抱き寄せた。

「お、お母さんく、うるしい」

そう言いながらのフェイトはうれしそうだ。少し涙目だが、それはプレシアさんも一緒だった。

そんな一家団欒に俺が居ても邪魔だろうと思ひ出て行こうと思ったら

「こんな、こんなに笑っているフェイトを取り戻してくれて。ありがとう」

アルフは泣きながらそう言ってきた。

「なに、最初にいつたる俺は正義の味方だと」

そう言つて俺は部屋を後にした。そしたら目の前にはクロノが仁王立ちしていた。

「どうした？」

「これから事情聴取を、つて痛い、痛い。なにをするエイミィ。耳を引っ張るな。」

「あんたは少し反省しなさい」

「なにをだつて、つい、痛い」

KYは未来の奥さんに連れられて行ってしまった。

「はあくなんであの子はそこまであの人に似ているのかしら・・・」
リンディさんがため息をついていた。

「それでどうしたんです。こんな所で」

「いえ、ただ貴方は今回の事件、分かっていたのではないのかと思
いまして。」

「それはなぜ？」

「今回、あなたは協力するさいなるべく犯人たちの刑を軽くすると、
いいました。」

「ああ、そつだ。」

「それで、今回の事件はこちらの対応の遅さ、そして被害ゼロと言
うことで保護観察だけと判断されました。本当はさっきの事情聴衆
で決めるはずでしたが、素晴らしい目をしてましたので」

「そつか、よかった」

そして俺は安堵の顔をした。

「ですが・・・一応その裁判はあるので」

「それぐらいはしょうがないだろう」

「はい、それで一週間ほど、居なくなりますのでなのはちゃんには
「ああ、こちらが言っておじつ。」

そして、アースラの食堂のところに待機していたなのはに声をかけた。

「あ、スバルさん。あの、フェイトちゃんは」

「ああ、安心しろ。たぶん保護観察だそうだ」

「本当ですか」

「ああ、だから安心しろ、」

「はい。」

「だが、その審査があるらしく一週間ぐらい掛かるらしいが」

「はい、待ちます」

「そうか、」

そして俺はなのはを撫でてやった。

「ふ、ふえ。どうしたんですか？スバルさん」

「あ、すまんいつものくせだ。今回はよくやったななのは」

「え、え、」

おっと、まだ正体をばらすわけにはいかないな。

「それじゃあな。」

「は、はい」

そして目まぐるしいように一週間が経った。今はアースラの食堂にいる。たぶん原作だとあの公園の所なんだろうが、俺が介入したことによって変わったのであろう。

「今回の事件はこれで終了です。」

「終わったな」

そして俺は変装を解いた。

「……………え……………」

アルフとフェイト意外は驚愕していた。そりゃそうだ、なんせずっと変装魔法をしていたのに今解除してしかも中身が九才の子供なんだからな

「き、貴一君!?!」

なのはは、大声で俺に向かって言う。てか、驚きすぎ

「よ、なのは。俺も魔導師だったんだよ。」

そして、頭を撫でてやった。

「貴一君よね」

リンディさんはまだ信じていない様子

「ええ、お久しぶりです。確か、父さんと母さんが出発した時以来ですね」

「ええ、しかし、驚いたはまさか貴一君だったとは」

「海鳴にすんでいるって知っていたでしょう？」

「本当、貴方。子供だったのね」

プレシアさんも驚愕していた。

「クロノよりも低い・・・」

「僕は年下に負けたのか・・・」

二人はなぜかショックを受けていたが、いきなりフェイトに手を引っ張られた

「っちよ、いきなりどうした」

そしてさっき話していた所と少し離れて、フェイトはなのはと俺を

連れてきて。

「あのね、この前の返事しようと思って」

「この前の？」

「うん、友達の」

「うん、うん」

なのはは上機嫌だ。

「私はねある女の子のクローンなの、だけどそれでも私は貴方と友達になりたい。だけどどうしたら」

少し困惑しているフェイトだが、やはりここは原作どおりに

「簡単だよ。名前で呼んで。私は高町なのは」

「わたしはフェイト・テストロッサ。よろしくね、なのは。」

そして二人は握手した。そしてフェイトがこちらに向き直り

「よろしくね貴一・・・／／／／／／／／／／」

なぜか、真っ赤でこっちを見ている。もしかして俺フラグ立てた・

「ああ、よろしくフェイト」

そして空いている手に俺は握手した。

「む〜」

なぜか、なのはさんは拗ねてましたよ。はい

「（主はこういうのは点でダメですね）」

「（マスターこういう所も前マスターそっくりだ）」

デバイスたちですら俺を批判した俺がなにをした・・・

そして、それが終わったのだが、なぜかリンディさんとプレシアは笑っていた。なぜだ・・・

「フエイト良かったわね」

本当に母親の顔をプレシアさんがしていた。これなら大丈夫だろう。俺はそう思えた。だけどその後にごっちを見たのは・・・なぜだ？

これにて、今回のジュエルシード事件（後から言われる）は終わった。

第従7話 フラグをいつの間立てた!? (後書き)

あとがきラジオ

「「やっと終わった」」

「長かったな。」

「はい、長かった」

「しかし、ちゃんと書いたなお前」

「そりゃ、さすがにお気に入りにしてる方が百人以上いるからね」

「だけど、お前もう少しで期末だろ」

「・・・」

「ま、がんばれ」

「と、言うことですので更新が遅くなるかもしれません」

「こいつ、勉強しないと赤点簡単にとるからな」

「それでは次回」

「事故処理」

「それではバイバイ」

第従八話。事故処理（前書き）

十八話掲載です。

あとがきに重大発表が・・・

第従八話 事故処理

「それでは、今回の保護観察についてですが」

「は、はい」

今はアースラの食堂にいる、今回の事件でのプレシアさんの保護観察の内容が発表させた。

「今回の件では幾つかの条件がありました。一・二度とこのようなことをしない。二・この地球に住み。それに慣れること。三・何らかの形で管理局に協力すること。これが今回の条件だそうです。」

「なんですか、その処分」

俺は呆れていた・・・

「結局、管理局に協力が・・・」

「はい、これが最大でした・・・」

「はあ、」

「けど、地球に住むって・・・」

フェイトが聞いてきた。

「ええ、そのことですが、貴方たちは、地球に行ってそこで暮らし

ていただきます」

「て、ことはフェイトちゃんと一緒の学校に行けるの!?!?」

なのははもう有頂天だ。

「ええ、そう言うことになるわね」

「「やったああああ」

なのはと、フェイトは大喜びだった。

「それで、住むところなんですが・・・」

「はい、こちらも探しているんですが」

プレシアさんと、リンディさんはなんだか悩んでいた。

「どうしたんですか?」

「あ、貴一君。あのね、なるべく海鳴市に住みたいんだけど、いい物件が無いのよ。貴一君どっかしらない」

いい物件ね・・・あ、たしかギル爺の家・・・

「あ、ありますよ」

「ほ、ほんと!?!?」

プレシアさんが興味津々で聞いてきた。

「はい、ただし少し掃除と許可が必要ですけど」

「十分よ。それでだれに許可を？」

「はい、ちょっとエイミイさん、モニターかしてください。」

「あ、はい。それでどこに連絡を？」

「え〜とたしか、士官学校の「アルバート提督？」そうそうリンデイさんその通りです」

「はー分かりました。それでは」

そしてエイミイさんが繋いでくれた。

『まったく、誰じゃ』

そしていつもとは雰囲気の違い威厳のあるギル爺が出た。

「す、すい」

クロノが驚愕していた。

「クロノ、なにがすごいの？」

エイミイが質問している

「し、知らないのか。あの方はギル・アルバート提督で伝説の三提督とも親交の深い人物であるかただ」

ギル爺、あんた本当に何者なんだよ。

『む、そこにいるのは貴一ではないか。管理局の船からじゃったかな。少し威嚇してしまっただわい。それで貴一なんのようじゃ?』

「あのさ、ギル爺。確かあの家って俺にくれたんだよね」

『そうじゃ、それにもうワシの私物は持って行ってしまったから。あとは掃除をするぐらいじゃ』

「そうか、それなら俺がそこに違う人を住ませたもOKだよな?」

『かまわん、構わん。』

「そうか。ありがとう。それじゃあね」

『うむ、それではの貴一』

そして通信を切ったがなぜかクロノとプレシアさんがポカーンとしていた。

「え〜とどうしたの?」

「君はあのアルバート提督と親交があったんだな」

クロノは俺の知り合いが素晴らしくVIPだったらしいことに驚愕
そして

「アルバート博士ですよね……。ほ、本物を見てしまった。」

なんだかプレシアさんは喜んでた。そう思えばたしかギル爺って
科学者だったんだっけ

「ねえ、貴一。そこって貴一の家に近いの？」

フェイトがそんなことを聞いてきた。

「まあまあ、近いよ。歩いて十分かな」

「そっか」

なぜかうれしそうだ。しかし後ろからくる殺気はなんだろう。そして
後ろを振り返るとそこには魔王がいました。

「へえ、よかったね。フェイトちゃん。貴一君ちよつとO・H A・
N A・S H Iしようか。」

「え、え、ちよ、ちよつとなのはおちつけ。」

そして俺は初めてO・H A・N A・S H Iをしました。

「え〜とそれで」

「はい。そこをお願いします。あとは仕事が見つかれば・・・」

「仕事なら内にすればいいよ」

「なのはちゃんの家？」

フェイトが質問した。

「うん、内ねケーキ屋さんだから」

「あら、そうなの。ならちょっと行ってみようかしら」

なんだかんだでフェイト一家の地球暮らしの予定は立てられていった。

アルフト、ユーノはなんでも、模擬戦をしているらしい。それで、後は手続きだけだったので、俺となのは、フェイトそしてクロノは訓練室に行った。

「少し、休みましょう」

「そうだね、ってフェイトオオ」

アルフ達は一息入っていたらしく、今は座っていた。

「なあ、」

クロノが話しかけてきて

「僕と勝負してくれ」

そう言われた。たぶん一番最初の時の決着でもつけたいのだろう。

「ああ、いいぜ」

そして、俺はベルトを投影した。

「すまない、これから模擬戦を行いたいのので」

クロノはなのはたちを引かせて、

「セットアップ」

「Set Up」

そしてクロノはバリアジャケットを着た。

「君は？」

「なに、いらないよ」

「く、なめられたものだ」

そして、お互い持ち場に着き、

「それでは行きますか」

そして俺はベルトを締め

「変身」

KAMENRIDE

DECADE

そして俺はディケイドになった

「な、なんだそれは？」

「まあ、俺の稀少^{レアスキル}技能だよ」

そして勝負は始まった。最初はクロノの魔弾からだった。それを避けて、

「めんどいからこれで」

そしてカードを使って、

「変身」

KAMENRIDE

KABUTO

ウィーカシャン、ウィーン、ガキニヨン。

「これなら効かないな」

「無駄な」

クロノはさらにさっきより強い魔弾を撃ってきたが貴一は避けなか

った。

「よし」

クロノは当たったと思ったが

「いや、ちがう」

アルフは気づいていた。そう、そこには無傷でしかも一步も動いていない貴一がいた。

「な、なに」

「案外、いけるなこれ。てかなんで無傷なんだ、」

「それはマイロードの抗魔力値が異常に強いからです」

そう今はまだカブトの外装をはずしていない状態だった。それに仮面ライダーは対魔法師専用と言う訳ではないからな、そんなことを考えていたら

「ならば」

クロノはこっちに突っ込んできた。

「まったく、」

C A F T O F F

そして外装をはずし、その破片でクロノを攻撃した。

「く、ガ!！」

一発があたり、クロノは少し吹きとばされた。

「そろそろ、終わりにするよ」

C R O C K U P

そして目まぐるしい速さでクロノに一撃を入れた。さらに、さらに続け

C R O C K O V E R

と、言う言葉と同時にクロノは気絶した。

「す、すごい」

「あれ、人間か？」

「すごいなの」

「勝負したい・・・」

上からユーノ、アルフ、なのは、フェイトである。しかしフェイトそれはどうだ。

「疲れた。」

「マスター、お疲れです」

「手加減して下さい」

「これでも結構抜いたほうだが・・・」

「マイロード」苦労様です」

「それじゃあ、俺は戻る」

そう言っつて、伸びているクロノを放っておいて俺は食堂に戻った。

貴一が去ってからの訓練室では

「貴一、かつこよかったね。なのは」

「うんうん、」

そこに居た、二人はその貴一の姿を見て、呆然としていた

「なあ、ユーノ」

「なんですか、アルフさん？」

「あれは人か？」

「人ですよ・・・たぶん」

二人は苦笑していた。

そして、伸びているクロノは後から来たエイミィによって回収された。

第従八話。事故処理（後書き）

お知らせ

皆様今回私は試練もとい試験が学校のほうでありまして一週間ほど休ませていただきます。

申し訳ありませんが続きは来週までお待ちください。

それではこれを読んでくれる人に感謝して終わります。

それでは来週に会いましょう。バイバイ

第十九羽。アゝ、引越しセンターへ（前書き）

試験中なのに・・・

十九話掲載。

第十九羽。ア、引越しセンターへ

今は、ミッドのとある場所に居る。そこは静かであるでなにもかもが止まり、静かに風だけが流れていた。

「そろそろ、行きましょう」

その時、凜とした声が聞こえた。

「はい。しかし本当に俺も来て良かったんですか、プレシアさん」

そう、今ここはアリシアのお墓の前において俺はさっきまでそこで手を合わせていた。

「貴方は気づかせてくれたのよ。だから居ていいのよ。」

今、この場にいるのは俺と、プレシアさんだけで、さっきまではフエイトと、アルフ、そしてこの場に連れてきてくれたリンディさんが居たが全員とも、アースラに戻っていった。

「フエイトには辛すぎだと思いましたが・・・」

「私もそう思ったはだけど、『私も一緒にいく。だって家族だもん』なんて言われたら連れていくしかないじゃない」

若干、苦笑気味のプレシアさん。

「なら、しょうがないか。それじゃ行きましょう。」

「ええ、」

そして、アースラへと帰った。

そしてアースラに帰ると今度は引越作業に入った。実際、生活用品と言える物は少なく、大体は地球で買わなければいけなかった。

「しかし、これだけか、私物は・・・」

俺は今、フェイトの私物と、アルフの私物を持っていくこうとしたが、そしたら衣服以外は二人合わせてダンボール一箱・・・。

「もともと、あたいは使い魔だからね。」

「私も、あまり趣味とか無いから」

「ふうん、てか、プレシアさん、遅くないか」

「そうだね、そろそろ一時間だね」

俺はフェイトとアルフの引越しの手伝いだったのだが私物が少なく三十分程度ですんでしまった。しかし、プレシアさんはさすがに研究道具があるのだろうか遅かった。

「ま、気長に待つか」

「そうだね。」

「そうだな。だけど貴一よ。あんたあの家に住んでいるわけではな

いのか？」

アルフが聞いてきた、まあ、確かにあれは俺が貰ったもんだが

「ああ、いやあそこはたまに掃除に行くぐらいで、後、あそこの地下にある訓練室でたまに修行するくらいしか行かなかった。」

「え、地下にそんなのあるの」

「いや、フェイト。ギル爺がそういうもんは全部取っ払ってて今じやただの家だよ。あそこある意味管理局よりも良い研究施設だったから」

「そうなん」「ごめんなさーい。遅くなって」「あ、来た」

そしてプレシアさんが来たのだが・・・なんですかその量は。

「これ、全部転送するんですか？」

そう、だいたいダンボール五十箱ぐらい・・・

「ええ、これで少ないくらい」

「」「これでも！」「」

全員して驚愕だが、まあ、俺の魔力なら大丈夫かな。

「それじゃあ、送つときます」

そして荷物の下から魔方陣を出し

「転送」

「テンソウ・・・完了です。マイロード」

ソルがバックアップしてくれていて楽だった。

「それじゃあ、行きますよ」

「「「はい」」」

そして今度は俺を含めたテストロッサ家を元ギル爺の家に転送した。

転送して数十分。いろいろと整理や片付け、ついでに掃除も終わった。

「疲れた〜」

俺は今、なにもないリビングに寝転んでいた。

「お疲れ様」

「ごめんなさいね。」

「Zzz」

一人、もとい一匹はもう寝ているし。てか大体がプレシアさんの私物だったな。今度アリサ達にでも頼んでフェイトの部屋は女子っぽ

くしないとな。

「今、何時ですか？」

「ええとこの世界だと午前11時ぐらいね。」

プレシアさんが、リンディさんに借りた時計を見て答えてくれた。

「それでは大体は揃いましたから、午後は生活必要な物を買に行きましよう。んでこの後なんですが翠屋に行ってみましよう」

「あ、なのはの家のお店だよね貴一」

フェイトは上機嫌だ。まあ、久々になのはに会えるわけだしな。

「ああそうだ。確かプレシアさんはそこで働きたいなら、調度良いだろうし、しかもあそこマジ旨いですから」

「あら、ならそこね、アルフはって寝ちゃっているのね」

「うん、アルフはそのまま寝かせておこう。お母さん」

「そうね。それじゃあ、貴一君案内よろしくね」

「はい」

そして、ギル爺の家、あ、テストロッサ邸を出て案内をつて・・・

「なんで、フェイト腕に絡んでいるんだ？」

そう、なぜか家を出た途端フェイトが腕を絡んできた。

「い、いやだった?」

いや、いやって言うか、その上目遣いはやめてくれ。

「べ、別にいやじゃないが」

「なら、いいじゃない」

「あらあら、ふふふ」

プレシアさん笑ってないで

「(マイロード、そこまで鈍いのですか・・・)」

いや、ソルよ。なにが鈍いんだ?今日はお前だけなんだから。まあ、いいか。そんなことを思いながら歩いていると、目的地に着いた。

「ここですよ」

「わあ、すごい」

「ええ、おしゃれね」

二人は翠屋を前にし見上げていた。

「じゃ、行きましょう」

そして入った。

カロンコロン

「いらっしやいませって、貴一君じゃない。お久しぶりね。それでそちらの方はもしかしてテストロッサさんでよろしいですか？」

「え、あ、はい。そうですがなぜ？」

「あ、貴一君とフエイトちゃんだ。」

奥からなのはが来た。

「よ、」

「いら、なのはお客様ですよ。」

「あ、いらっしやいませ」

なのはがペコリと挨拶した。

「それではどうぞ」

そして桃子さんの案内で席に着いた。

第十九羽。アゝ、引越しセンターへ（後書き）

今回は続けて投稿。

次回『カフェへ行ってらっしゃい』

第二重話。カフェへ行ってらっしゃい（前書き）

これはもう衝動です・・・

二十話掲載です。

第二重話。カフェへ行つてらっしゃい

「ええっと、俺はサンドウィッチとアイスコーヒー」

「私は、今日のオススメのデザート付き」

「え〜とこの今日のパスタ」

上から俺、プレシアさん、フェイトの順で料理を頼み、

「ご注文を確認します。サンドウィッチとアイスコーヒーが一つ、オススメのデザートセット、今日のパスタは特製の一日百食限定のポロネーゼですね」

そう丁寧に言っているのはなのはの姉、美由希さんだ。

「あの〜、セットのお飲み物は？」

「私もアイスコーヒーで。フェイトは？」

「う〜ん、コー「オレンジジュースで」、え？」

「ちょ「飲み物は先で」え、え？」

「はい、かしこまりました。それでは少々お待ちください」

そして、美由希さんはニコニコしながら奥に消えた。

「まったく、フェイト、別に俺らに合わせなくても、まだコーヒー

「は早いだろ」

「え〜けど貴一は？」

「いや、俺は精神年齢はもう二十過ぎだから」

「そうよ。フェイトはまだ早いかもしれないわね。だけど貴一君もコーヒーなのね」

「ええ、よく朝が、そうなので」

「そうして話しているとなのはが飲み物を運んできた。」

「ご注文の、アイスコーヒー二つと、オレンジジュースです」

「あら、ありがとう」

「なのははテーブルに飲み物を置きながら、」

「それからこの前にプレシアさんのことは話したら雇っても良いって言うてましたからたぶん後でお話があると思います」

「ええ、わかったわ。」

「だけど、アイスコーヒーが二つってことはフェイトちゃんが飲むの？」

「いや、俺だ」

「ああ、貴一君なの」

などと言いながら、奥に行ってしまった。

「ねえ、貴一君」

「はい。なんですプレシアさん」

「好きな女の子っている？」

「（ジー）」

なんですか。突拍子も無くこの人は、ってフェイトなんでこっちを
見ているそして、なのはなんでお前の奥から出てきてこっちを・・・
桃子さんに引っ張られたな・・・

「いや、居ませんが。それがどうしたんですか？」

「あら、そつなの」

「ほ」

なぜ、フェイトよ。安心している。

「それじゃあ、好きな女の子のタイプは・・・」

「いきなりですね・・・そつですね。別にないですがそつですね、
ロングヘアーですかね」

「あら、あら」

「(やった。このまま伸ばそう)」

んなこと聞いてどうするんだか。と思っていいたら俺の頼んだサンドウィッチが来た。

「ご注文のサンドウィッチです。それから貴一君、その言いづらいいんだけど・・・」

美由希さんが運んできてくれたのだが、どうしたんだ。

「どうかしました?」

「いやね。お兄ちゃんが勝負したいって・・・」

「はあ、分かりました。それじゃあ」

そういつて動こうとしたら

「いや、いや、いや。先にご飯食べてちゃんと休憩してからでいいから」

と、美由希さんが言って奥のキッチンに行った。

「ねえ、貴一」

「なんだ。フエイト」

俺がサンドウィッチを食べていると、

「さっき、勝負って」

「ああ、この店長さんのなのはのお父さんと一回勝負してね。」

「え、それってもしかして……」

「いや、使っていないから、純粋に武術で勝負したから」

「あらあら、それで勝敗は？」

「うちの夫が負けましたわ。」

そして今度は桃子さんと後ろにはなのは、美由希さんが残り料理を持ってきていた。

「うん、貴一君すごく強かった。」

なのは、俺はそこまでは……

「あらそうなの。それで、あの、貴方は」

「はい、このパーティシールをしています。高町桃子です。」

「初めまして、私はプレシア・テストロッサです」

「ええ、お話は聞いております。なんでも引越したばかりで仕事探している」と

「はい、ですがあの〳〵仕事はいいですか、こんな時間なのに」

「ええ、さっきのお客様が出て行った時、閉めましたから。」

いいのか。それで・・・

「あ、そうなのですか。しかし私事なのに・・・」

「いえいえ、それにやっと内にも雇えるぐらいの余裕が出来ましたし、今までずっと家族で経営してましてやっと子供たちが勉強に集中できますし、それになのはが推薦するぐらいですから」

そういうとなのはが少し顔を赤くして伏せていた。

「あら、なのはちゃん。ありがとうね。」

さらになのはが赤くなった。

「それではまず試験的に雇いたいと思いますので。三日後にここに六時で。まだ準備があるでしょうから。」

「はい。よろしくお願いします。」

これで、プレシアさんの仕事の決まったことだし。後はこの後の仕合いと、家電を買いに行かないとな。

「」馳走様でした。」

フェイトが満足そうに言っていた。

「あら、ここ付いているわよ。フェイト」

そして、プレシアさんがソースを取った。完全にいい親子だな。俺

はそう思いながら食事を終わらせて

「ご馳走様。それじゃ行つてきますか」

「ごめんなさいね、今度は息子なんだけど・・・」

「いえいえ」

「それじゃ、なのは案内お願いね」

「うん。」

「えっと、お母さん？」

「行つてきていいわよ。」

「うん」

「それじゃ、フェイトちゃん、貴一君着いてきて」

そして俺とフェイトは道場に行った。

く子供達が去つてからの会話く

「ふふ、フェイトも、もう貴一君に夢中みたいね」

「あらら、うちのなのはもなんですよ。」

「まあ、貴一君優しいからね。」

「うちのお嬢さんにしようかしら」

「あら、内のお店を継いでもらおうと思ったのですが」

「（貴一君・・・大変になると思うよ）」

美由希の予言したことは、あまり遠くない未来に、倍になって貴一に降りかかるとも知らずに

第二重話。カフェへ行ってらっしゃい（後書き）

やって、しまった・・・

しかし後悔はしない。まだテスト中だが書いてしまったものはしかたがない。もう少しでまた、前のように一日掲載に戻る？はずなので応援ヨロシクお願いします。

それから、当分はエース編に入るまでの期間のお話を書くと思います。

それでは皆さんバイバイ

第二十一話。玉砕 粉砕 大・の・字（前書き）

ラスト一日でテストが終わるのに・・・

今回はなぜか長い・・・

二十一話掲載です。

第二十一話 玉砕 粉砕 大・の・字

なのはの案内で今回二回目の道場に来た。・・・なんで土郎さんもイルンデスカ。

「いや、すまないね。貴一君。」

いや、別にいいんだが・・・恭也さん、凄い闘気もとい殺気が、殺気が。やっぱこれがシスコンの力なのか。

「父さん、キイチクンも来た事ですし、始めましょう」

恭也さん、俺の名前の所を強調しなくても・・・

「モノは何にするんだい。キイチクン」

いや、だからって殺気、殺気。

「えっと、というかなんでこんな長い木刀が・・・」

これ、まるで物干し竿・・・

「ああ、今度キイチクンが来る時があったらって、父さんが用意していたみたいだが。」

「そうですか・・・」

そして、俺はその物干し竿みたいな木刀を選んだ。

「ほう、今回は刀かい、貴一君」

「ええ、士郎さん。それでは」

「ああ、恭也。いいか？」

そして俺と恭也さんは道場のど真ん中に立ち、一定の距離を取り、士郎さんが審判で間に入り、見物人は・・・他の人全員ですか。つて何時来たんですか、プレシアさん、桃子さん、美由希さん。

「がんばれ〜」「兄さん、負けるな〜」「頑張つて」などの声援が聞こえてきた。

「それでは、両者いいかな？」

士郎さんが合図をかけた。そしてその瞬間恭也さんは今までの殺気よりも強い殺気を俺に向けた。

「OKだ」

俺も負けじと同じくらいの闘志を見せた。

「いいですよ」

「それでは、ヒューマンファイトレディイイイイイゴオオオオオオオオオ」

ネタじゃん、と思った瞬間

キーン、

俺は無意識に恭也さんの木刀を弾いていた。

「すごいな。今の一撃を防ぐなんて」

「いえいえ、さ、やりましょ」

「ああ」

そして、俺はシスコンもとい恭也さんとの試合を始めた。

Side 恭也

俺は最初の一撃で終わると思った。そう思ったただけだった。目の前に居る少年はいとも簡単にその一撃を受け、さらに普通に話している。

「すごいな。今の一撃を防ぐなんて」

「いえいえ、さ、やりましょ」

「ああ」

この子はなんでこんなに冷静なんだ、まるで俺が押されているようだ。

「はあ」

俺はさらに一振りしたがそれは軽く足らされて、今度は反撃された。

「せい」

俺はその一撃を受け止めたが、

なんだこの重さは、そしてさらに俺に反撃の暇を与えずこちらに攻撃してくる。だが、俺も負けじと反撃をするのだが完全に効果が無い。それが五分ぐらい続き。

「はあ、はあ、はあ」

俺は完全に息を枯らしていたが目の前の少年は汗一つかかない。

「それではこちらも行きます。」

その少年は構えを変えこう言った。

「偽・風三連」
オロムサンレン

その言葉聞いた瞬間俺は防御することに専念することしか出来なかった。

S i d e o u t

俺は五分間、恭也さんの攻撃を受けながら考えていた。やはり流石の恭也さん、俺も一歩も気がひけない状態だが、そろそろ恭也さんの体力的限界つばいからあれを試すか。

そして、俺は伝説のアサシンの構えになり、

「それではこちらも行きます。」

そして、俺はあのアサシンが使用した技を使った。

「オロシサンレン
偽・嵐三連」

side 士郎

二人とも素晴らしい動きだが貴一君はやはり少し余裕があるようだ、その動き動きで外から見てみるとよく判る。恭也は完全に相手を倒すという感じだが、貴一君はまだ戦っている感じだ。例えるなら恭也は殺気で貴一君は闘気だ。

「それではこちらも行きます」

その声が聞こえた瞬間貴一君の構えが変わった。そして

「オロシサンレン
偽・嵐三連」

そついうと恭也に襲い掛かった。

それはまるで蛇だった。こちらから見るとは連続して突きを繰り返しているように見えるが、恭也は反撃をしない。と、言うか出来ないようだ。その突きの速さはその戦っている者しか分からないだろうが、恭也が守りに徹するぐらいだから相当速くそして重いのだろう。そして、その攻撃が終わった・・・恭也はなんとか防ぎきった。

S i d e o u t

S i d e 恭也

「はあ、はあ、はあ。」

あの、攻撃を何とか凌いだがまた同じのが来たら多分もたないだろう。なら、俺はあれを使う。

そして俺は神の速さの“神速”をキイチクンに向かって切りつけた。そう切りつけたはずだった、しかし、貴一君は木刀を盾にして凌いだのだ。あの速さについてきた。俺はそのことに驚愕いや恐怖を覚えた。

“ピシ・・・バラバラバラ”

だが、流石に木刀のほうがもたずに切れてしまった。さっきまでは長々しい木刀だったが今では小刀ぐらいしかなかった、そしてそれでは戦えないと思い父さんにタイムをかけようとした。

「父さん、タイ「アハハハッハハハッハハハッハハハハハハハ」っ！！」

だが、そんな声は乾ききった笑い声で消されてしまった。

S i d e o u t

あの攻撃が終わって、流石に恭也もこのままでは負けると思ったのか神速の構えに入った。

「嘘……」

美由希がそんな言葉を漏らしていた。まあ、そうだろうあれは私や恭也の必殺技に近いからな。

「あらあら」

母さんは分かっているのかいないのか、なのはに至っては

「（ブルブルブルブル）」

隣に居る友達の手を繋いで震えている。まあ、確かにさっきからずっと恭也は殺気を飛ばしているからしょうがないが、隣に居る子は耐えているな。

そして、次の瞬間恭也は貴一君との間合いを一瞬でつめ一撃を入れたが凌がれた……。これには私もそして美由希も驚愕だった。まさか防がれるとは思いもしなかった。だが、貴一君のモノは

“ピシ……バラバラバラ”

っと、音を立てて崩れてしまった。まあそれもそのはずなんだが、そして恭也が近づいてきた。たぶんタイムをして新しいモノを貴一君に渡すのだろうと思った。そして恭也が、

「父さん、タイ「アハハハツハハハツハハハハハハハハハハ」っ！！」

その声の主を向いた瞬間私は思ったこれが『鬼神』なのだ

Side out

まさか神速を使ってくるとは俺は思わなかった。だけどあれが真剣なら俺は危なかった。そう俺は徐々に危機を感じた。そして目の前にいる奴に本気で相手しないと失礼だと思った、けどなんだ、この興奮は。

そして俺は急に笑った。

「父さん、タイ「アハハハツハハハツハハハハハハハハハハ」っ！！」

「恭也さん、いいですよこれで。さあ、始めましょう。」

side 恭也

いきなり笑っていた貴一君だが、直ぐにこちらを向き

「恭也さん、いいですよこれで。さあ、始めましょう。」

そう言って貴一君は構えたがその瞬間俺は恐怖しか感情が無くなった。そこにいるのは九歳児ではなく父さんと真剣に戦った時よりも恐怖である存在がそこにいた。そして俺はすぐに間合いを取り構えたが、彼の後ろ姿が映った瞬間強い衝撃が来て俺の意識は飛んだ。

Side out

恭也さんがさつきと同じく間合いを取って構えた瞬間俺は、本気の戦いをした。簡単に言えば、どこぞの殺人貴の技、十七分割を相手の死角にしか入らずに仕掛けて、ものの三秒でけりをつけて、土郎さんに、

「終わりですよ。土郎さん」

「あ、ああ。あ、ありがとうな」

「直ぐに、恭也さんを見てやっってください。たぶん完全に打撲して気絶してますから」

「わかった」

そして土郎さんは、倒れている恭也さんの所にいったがなぜか、少し顔が強張っていたがどうしたんだろう。

Sideなのは

さつきいきなり貴一君が笑ったのにびっくりしたの。だけどその後の貴一君はすごく冷たい顔になったの。

「ねえ、フェイトちゃん」

フェイトちゃんの手をずっと握っていたけど。

「ねえ、なのは。」

たぶん、フェイトちゃんも気づいたなの。いつも笑って訓練に付き合ってくれている貴一君の本気はあなんだろうと。

そして、お兄ちゃんも貴一君もさっきみたいに距離を置いたの。だけど貴一君は直ぐに後ろを向いたの、だけどその瞬間

“バタリ”

お兄ちゃんは倒れたの。そして貴一君は直ぐにお父さんの所にいつて

「終わりですよ。 土郎さん」

「あ、ああ。 あ、ありがとうな」

「直ぐに、恭也さんを見てやってください。 たぶん完全に打撲して気絶してますから」

「わかった」

そして、こっちに来て

「っ、疲れた〜」

と言って、大の字で倒れたの。いつものやさしい顔で。

Side out

第二十一話 玉砕 粉砕 大・の・字（後書き）

今回は視点の切り替えが多く読みにくいでしょうが。そのところは私の文章力が無かったということでもヨロシクお願いします。

それからこの小説は誤字雑字が多いと思われる。まことに申し訳ありません。

そこで、ここがおかしいのがありましたらどんどんお送りください。こちらの確認は今までどおりしますがなにかありましたらお送りください。

感想もそしてリクエストも募集していますのでそちらもジャンジャンお送りください。

それではバイバイ

「いつになったらラジオをするんだあの馬鹿作者は・・・」

第貳拾貳話。お買いもの お買い物 ……(前書き)

第二十二話掲載です。

え〜と一言言いたい、「ごめんなさいその通りでした。」orz

真相はあとがきで。

第貳拾貳話。 お買いもの お買い物 …

「つ、疲れた」

と、言っつて俺は倒れた。そしたらなのは達がよつてきた。

「大丈夫貴一君？」

「てか、さっきの技はなに？」

美由希さんそこですか。

「ころころ、美由希。貴一君も疲れているんだから」

「すいすい」

いや、フエイト。なぜ目が光っている・・・

「すみません、なんか食べ物ください・・・」

「うふふ、分かつたわ。」

そして、桃子さんは翠屋に行つた。

「大丈夫なの？」

「ああ、この通り。ただおなかすいたな。」

「じゃははは」

なのは、少しは兄を心配したらどうだ

「すごかったよ。貴一君」

後ろから不意に声をかけられた。

「どうぞでしょう。まだまだですよ。士郎さん」

「あそこまで内の息子を叩いてまだまだとは、なあ貴一君、今度君の特訓に内の息子たちも混ぜてくれないか？」

「別にいいですよ。しかしためになりますかね」

「随分、あっさりだね」

「まあ、やっぱり相手が居たほうがやりがいもありますし、それに美由希さんの方が強いみたいですから」

「そうか。」

そう言つて士郎さんは伸びている恭也さんを担いで家に戻つていった。

「プレシアさん。すいませんが」

「ええ、別にいいわよ。それにこっちが頼んでいるものだし。それにまだ十二時半ぐらいだから」

「どっかいくの？貴一君」

「ああ」

そして、念話を使って

(フェイトたちがこっちに住むだろ)

(うんうん)

(それで、魔法関係はもうすべて送ったんだが、こっちの家電が一つもないから、買いにいくんだよ)

(ああ、そうなんだ)

「じゃあ、一緒に行ってもいい？」

「うん、なのはなら大歓迎だよ。」

「いいんじゃないか。別に」

そして、俺の腹の虫を黙らせた所で家電量販店に向かうことにした。

「ここがリトルカメラです」

案内したのは家電量販店のリトルカメラだった。

「そう思えば貴一君、なに買うの？」

「えっと、まず冷蔵庫とテレビは有ったから、レンジとか掃除機だ

な

「レンジ？」

「掃除機？」

テストロツサ親子は頭に？マークを頭に浮かべながらまず掃除機のコーナーに着いた。

「それでは掃除機の説明からいきます」

そして俺は、今の掃除機について説明した。そして返ってきた答えが

「それで、これはなんの力で働くの？」

いや、プレシアさんそこまでですか。

「ふふ、冗談よ」

「そうですか」

やっぱりこの人Sだ。

「お母さん、あまり貴一君をいじめないの」

いや、フェイトなぜ笑顔。お前もその血が流れているんですか・・・

「はあ」

俺はすこし溜息をつきながら、レンジのほうに向かった。

「続いてレンジもといキッチンの家電コーナーに着きました。それ
ですいませんがプレシアさん」

「はい、なんでしょう?」

「少し俺の家の家電も見たいので、少し自由行動にします。あ、フ
イトと、なのは、あまりはしゃぐなよ」

「「貴一(君)子供扱いしないで(なの)」」

いや、だってお前ら一応まだ九才じゃん。

「つつ、訳で、お願いしますね。プレシアさん」

そうやって俺は持ち場を離れた。途中「こらゝ貴一」とか「むゝ」
とか聞こえた気がしたが聞かなかったことにした。

Side プレシア

貴一君は、なんでミキサーの所へ・・・もしかして

「ねえ、なのはちゃん」

「なんです。プレシアさん」

「貴一君のお父さんやお母さん会ったことある?」

「あ、そう思えばないです。たまにケーキ買いに来る時も、いつも

貴一君でしたし、それに」

「あの事件の時も貴一は普通にこの事件に入って来たから、たぶん両親とも魔導師……」

さすが、我が子……っていけないいけない、そんなことよりもたぶん……

「それじゃあ、今度一緒に来てもらおうよアースラに」

「そうだね、貴一の両親も見てみたいし」

「やめときましょ」

「「え？」」

たぶん、貴一君は親と一緒に住んでいない。下手すると……考えないことにしましょ。

「たぶん、今は貴一君の両親は忙しいのよ。だから今度ね、たぶん貴一君が連れてきてくれるでしょうから」

「「はい」」

side out

さて、さてあれから二十分。俺の欲しかった物を買えたがプレシアさん達は……っと、見つけた、見つけた。

「すみません。待ちました。」

「うん、うん」

「大丈夫だよ。貴一」

「それじゃ、帰りましょうか。」

そして俺ら家へと足を向けた。

それからなのはを翠屋まで送り、俺はテストロッサ親子と一緒になった。

「そう、思えば明日からフェイトは学校だよな」

「うん。リンディさんのおかげで、貴一となのはと一緒にの学校だよ」

「そうか、なら一緒にのクラスになれるといいな」

「うん」

そして俺は家に着いた。

「それじゃあな。フェイト明日。」

「うん。貴一明日」

「それではプレシアさん。仕事早く慣れるといいですね。」

「ええ、ありがとう。それから今日はありがとうね」

そして、フェイト達も帰っていった。そして家に帰ると

「ただいま」 「今、帰還した」

「お帰りなさい。主」 「お、戻ったかマスター」

二つの相棒が返事をくれた。

「すまないけど。また少し別荘に入るから、一時間後になったら戻るけど。」

「御意」「イエッサー」

そして、久々の特訓を始めた。

「しかし、マスター急にどうしたのだ」

「ああ、それがさ今日、久々に本気を出したんだがまだまだだなんて思ってたね」

「そうですね。あれはマイロードの危なかったですから」

「あら、あら。そんなに」

「ああ、結構きつかった。」

「それではマイロード。久々にあのベルトでも」

「そうだな、それじゃあ、行きますか」

「変身!!」

KAMENRIDE

DIKEIDO

そして俺は久々の破壊者になった。

「それじゃあ、今回は鏡の龍で」

そして俺はいつも通りにカードを使い

KAMENRIDE

RYU-KI

龍騎と成った。

「それじゃあ、久々にマネキンを三体くらい出してくれサン」

「はい」

そして目の前に三体の白いマネキンが出てきた。

「それじゃあ」

俺はあの龍を召喚しようとしてカードを取ろうとした、だって原作だと確かATTACK RIDEでだしていたから、だけど・・・ない

「あれ・・・ない」

「どうかしましたか、マイロード」

「い、いやなんでもない」

あれ、なんでないんだ。そう思って少し俺自体を見て見たら・・・

ベルトが龍騎のベルトでした。・・・なーぜ？

「て、ことは・・・」

今を思い返して見ると、そう思えば確か、クロノと戦った時、俺普通にディケイドのベルト使ったのにカブトに変身して普通にクロックアップしたなそれに他にも・・・

「あれ、あれね？」

「やはり、どうかしましたか？マイロード」

そうだ確かソルにベルトとライダーのパラメーターを全て入れてあるはずだ。

「なあ、ソル。確認するが俺のベルトって違う仮面ライダーになっ

た時にベルトも変わる?」

「少々、お待ちを・・・」

少々、検索している間に俺はマネキンの相手をしていた。ただ単に避けているだけだが。

「出ました。確かに変化していますね」

そうですか。なら

「こっちにあるってか」

そして俺は普通にベルトからカードを取るとそこには龍のカードが、そして普通に差し込んで

アドベント

「喰らえ」

そして、普通に龍が出てきてマネキンを燃やしました。

なんでだろう・・・ってことはこのまま解除すると

「あ、ディケイドだ。」

そして今度はファイズに成った。

KAMENRAIDE

P i r , p i r , p i r

「変身」

そしてファイズになった。そしてベルトを見ると・・・

携帯でした・・・

なんで？

第貳拾貳話。 お買い物もの お買い物 …… (後書き)

「「貴一と作者のあとがきラジオ」」

「さあ、消える準備はいいか作者」

「ひ、ひええええ。お命は、お命だけは」

「うるさい。なんだ今回の後半の話は」

「いやね、ノフィ様の指摘もありましたし、たぶん他にも読んでくださっている方もそう思ったと思います…」

「それで、お前はイツ、気がついたんだ。まさか…」

「は、は、は。そのまさか「ゲイ・ボ」それは冗談で「ふん!!」」

「実は、掲載して一週間ぐらいあとに映画見ている、気付きました」

「ならなんで、直さなかったんだよ!!」

「いやね、だってそのとき試験前だったし。それにこれは、違う意味でネタに使えるかった」

「使えるかなってってなんだよ!!」

「だから、これから、約半年ぐらいは原作に書いていないところだよ。」

「ああ、確かにそうだな」

「だから、その間になんか入れようと思って」

「おい、おい、それ以上はネタばれだろうが」

「あ．．．」

「はあ」

「そういう、ことなのでノフィ様、ご指摘ありがとうございます。これからもこんな駄目文ですが頑張っていくので、また何かありましたどうぞお送りください。」

「それからそのほかにも読んでくれる人、この作者はただでさえ日常に非が入るようなやつだから、分からないところがあるだろう。そういうのもじゃんじゃん送ってくれ」

「それから、リクエストなど質問も大募集していますのでそちらもお願いします」

「それでは次回『他の介入者!?!』」

「それではバイバイ」

第貳拾參話。他の介入者！？（前書き）

二十二話掲載です。

第貳拾參話。他の介入者！？

Side ???

ココハドコダ・・・ドコナノダ。

アノイマワシキカメンライダーはドコダ。ドコダ

「ドコナンダアアアアアアアアア」

日本のある森で、ある者がいやある生物が叫んでいた。その形は・・・かまきりのようだった。

「ホントドコナンダ・・・Orz」

・・・少し泣いていた。

side out

あゝあ、結局あの後いろんなことしたけど・・・デイケイドになった時はカードがあつたし、ようは他の仮面ライダーになったらそのライダーの使い方に変わるようだ。しかしナイトも使えるんだな、今度全部のカード見て見よう。

「はあ」

しかしこのベルト・・・めんどくせい・・・なんでこうなったんだ。俺の創造が間違っていたか？

そして王の財宝の空間にベルトをしまった。

まあいいか。そう思えば明日からフェイトが転入して来るわけか・・・あれ、原作では結構後だっけ・・・まあ、いいか。

「はあ。さ、寝るか。」

「」「おやすみなさい」「」

そして俺は寝た。

そして俺は起きた。

「おはよう」

と、言っても

三体ともスリープモードだしな・・・

「飯にしよう」

そしていつもどおり、朝の準備を弁当を作り、そしてなのはとの待ち合わせ場所に行った。

「じゃははは」

いつもどおりなのは待ち合わせ場所にいたがすごい笑顔だった、傍から見ると怖い……

「よ。おはようさん、なのは」

そして、俺は手を振って挨拶をするが

「あ、貴一君だ。おはよう、にやははは」

手を振りかえしてくれたが……笑顔はかわらなっかた。

「はあく、なのは。顔」

「え、え、」

「はあく、あのな。フェイトが転入してくるのは確かに俺も楽しみだがそんな顔しているとアリサに色々聞かれるぞ。」

そんなこと言っつて、いつも商店街を歩いていたら、黒い長い車……リムジンが来ました。

「あら、なのは、貴一。おはよう、乗ってきなさい」

「あ、おはよう。貴一君、なのはちゃん」

そしてそのすずかも乗っていたらしくアリサの後ろから声が聞こえた。

「ああ、おはよう。アリサ、すずか」

「おはよつなの」

「それで、乗りなさい」

「どうぞ。」

そして鮫島さんが運転席から降りて、ドアを開けてくれた。

「だよ、なのは」

そしてなのはを乗せて俺は直ぐに離れようとした。だってもし一緒に学校になんか行って見られたら・・・死ぬ。こいつら、自分がどれだけ人気だか知っていないからな。いつも屋上に行く時の目。しかしなのは達のO・H A・N A・S H Iの方が怖い。

「なに言ってるの、あんたも乗るのよ」

そうですか。やっぱりそうなりますよね。

「いや、いいですから」

俺は、遠慮したが鮫島さんが笑顔で

「どうぞ、遠慮なさらず。アリサお嬢様が男の子を誘うなど珍しいのですから」

「さ、鮫島！！さっさと乗せる」

「は、はいお嬢様」

「俺に拒否権は？」

「」「無し」「」

三人して酷いや・・・

そして、俺は車で学校に向かった。

「だけど、なのはちゃん。なんでそんなに顔がにやけているの？」

あゝあ、すずかとうとうそれに気づいたか。

「え、そうかな。にやははは」

「なのはどうしたの(コソコソ)」

「俺が知るか、朝からこうなんだ(コソコソ)」

理由は知ってはいるが

「なんかありましたっけ今日?(コソコソ)」

まあ、今日はたぶん、お前らに友達が増えるだろうよ。

「(ニクニク)」

「はあ〜」

今日何回目のため息だよ・・・

「着きました」

そう言つて鮫島さんは手際よくドアを開けた。さすが執事。

「それじゃあね貴一」

「バイバイ」

「またなの（ニコニコ）」

なのはそんなに笑っているとアリサに「さあ、なのはいい加減そのにやけている理由を教えてくださいませんか」「にや、にやにや」「あゝあ。そうだったか、結局。

「はあゝ」

本当に今日、ため息多いな。

そして、俺はいつもの通り先生の話から始まる学校が今日も始まった。

Side ????

ココハマチガイナク、アノセカイデハナイヨウダ。シカシ、コノモリハ、イツニナツタラデラレル。

「あゝあ、ここどこだよ」

「しらねーし。てか俺ら遭難じゃね」

ナンダココニモイルノカ。ソレデハ、ニンゲンワタシノチカラトナレ

“ガサガサ”

「なんだ!?!」

「てかなんかいんのこの森」

「ガアアアアアアアア」

「「きや、きやああああああ」

この日、若い男二人が行方不明になった・・・

side out

第貳拾參話。他の介入者！？（後書き）

「貴一と作者のあとがきラジオ」

「さて今回も始めました」

「そうだな、なんだがこの小説をお気に入りにしてくれている人も二百人こえたしな」

「そうだよ。そうなんだよ」

「はあ、まあいい、そう思えばなんかお知らせなかったっけ？」

「そうでした。そうでした。アンケートを実施したいのですが」

「あ？アンケート？」

「そうそう、この後に夏休み編があるんだがそれでやってほしいことやこんなお話があったらということがありましたら送っていただきたい所存であります」

「あ、そう思えば。そうだな」

「と、言うことでヨロシクお願いします」

「「それでは次回。『フェイト学校に来る』それでは」

「この小説を読んでくださっているかたがたに感謝して・・・バ
イバイ」

「次回、更なるオリキャラが!？」

第貳拾四話。フェイト、学校に来る（前書き）

二十四話掲載です。

アンケート実施中・・・

第貳拾四話。フェイト、学校に来る

Side なのは

さっきまでは貴一君と一緒にいたけど違うクラスだから離れたの。いつも少し寂しい……。けどうれしいな。だって今日はフェイトちゃんが転入してくるな。一緒のクラスだといいな。

「(ニクニク)」

「さあ、なのはいい加減そのにやけている理由を教えてくださいませんか」

「にゃ、にゃにゃ」

アリサちゃんが聞いてきた。

「うんうん」

すずかちゃんも聞きたいらしい。さっきも貴一君に言われたなの。

「え、えくと、ほら早く行こう。」

「こ、こらなのは」

「あはは」

そして、私は教室に入った。そしていつも通り先生がきたなの。アリサちゃんがこっちを睨んでいたなの……。怖い。

「みなさん。今日は新しいお友達が来ました。テストロッサさん入ってきてください。」

へえ、今日はフェイトちゃんのほかにも転入して来る子がいるんだ・
・まっつて、確かフェイトちゃんって、フェイト・テストロッサだ
よねってことは

“ガラガラ”

そしてドアが開きその子が教卓の上に立ち自己紹介をした。

「フェイト・テストロッサです。これからよろしくお願いします」

その子は私の知っている魔法少女でした。

S i d e o u t

数分して隣の隣のクラスから拍手が聞こえた。たぶんフェイトだろ
ーよ・・・少し残念・・・

それから数分経って先生の話が終わった。そしてやはり転校生でし
かも外国人だと興味がそつちに行き、一目フェイトを見ようと内の
クラスの三分の二ぐらいはなのは達のクラスに行っている。

「貴一は行かなくていいのか」

そして、俺に声をかけてきたのは来たのは

「それはお前にも言えることだぞ雄聖」

そう、こいつは雄聖守^{ゆうせいまもる}。たぶん俺がこの学校でなのは達以外で唯一友達を言える存在だ。

一週間ぐらい前に商店街の本屋で万引き犯をしようとしていた犯人を「この人万引きしようと思いました」って雄聖が言っただけに驚いた犯人がそのまま逃げようとした所俺が普通に足掛けしてそのまま逮捕。ということが在りそれから俺と雄聖はちよくちよく話す仲がいつの間にか良き友になっただけ。

俺はある意味この学年では有名人であった。まあ、どこぞの三人組と一緒にいるからなんだが、そのせいか俺は大体の男子からは嫉妬の目をくらっているから友と言える存在は居なかった。だが、雄聖もまたあまり友達を作るタイプではなかった。いつも本を一人で読んでいた、それに遊びに誘うクラスメートの誘いも断っていた。根はめちやくちやいい奴なんだが・・・

「僕はあまり興味がないから」

そう言っただけに本を見せた。

「はあ、相変わらず読書ですか」

「まあね、だけど君と話すのも楽しいけどね」

「それは光栄だな」

「それで貴一はなんで行かないんだ」

「そりゃあ、家近いし」

「別に、ただ同じ学校にきたんだからどの道いつか見かけるだろう
と思っただけ」

「はあー、貴一。君の方が、興味がない、と言っ言葉が似合ってい
るよ」

いや、ただ単にどうせ会うんだから今は別にいいって感じ。それに
たぶんそっちに行けば間違いないのは俺に声をかけるだろう。
そしてそれが終わり教室に帰ろうとしたら、他の男子に体育館裏に
連れて行かれる。

そんなことを想像していたら雄聖が本をしまっって話しを振っってきた

「あ、そうそう、小耳に聞いたのだが。」

「どうした？」

「君、今日、あのバニングスさん達と一緒に来たっって本当かい？」

「な、なんでそれを!!」

「はあ、本当だったのかい。まったく。君は命知らずといっかなん
といっか」

「いや、あれはアリサが・・・」

「まあ、君は悪くないのだが、いっならばそこだよ、そこ」

そう言っって雄聖は俺を指差しながら

「なにがだ？」

「ようは、君をとやかく言うつもり僕としてはゼロなんだが、まあ、彼らもなんで声をかけないんだって言うことも言えるが・・・君も親しみすぎというかなんと言うかだぞ。ちなみにこれは今日の朝、君が来る前に他の男子たちが言っていたことだ」

「はあゝ。なんで俺がこんな目に、つてのが本音だが、まあ、俺がどんな奴と親しくしようが周りには関係ないよ。」

「まあ、そういう奴ってことは最近知ってきたよ」

「そうだろ。そうだろ。」

「それに君一人でも簡単に喧嘩、勝てそうだしね」

「おいおい、普通そこは心配してくれ」

そう言っただけ俺らはクラスにほとんどの男子生徒がいない教室で笑いあっていた。

こんな感じで小学校三年生らしくない会話を俺らはしていた。

そして授業もそこそこ終わり、昼の時間になった。雄聖はいつも本を読みながら食べるため誘うな、と念をいれられた。しかも「僕まであの嫉妬の目の標的にするきか」と、怒られた。

「はあゝ」

なんでだろう。無性に理不尽だと思った。だがそんなのは一瞬で壊

された。

「こらゝ貴一。なにぼさつとして椅子に座っているのよ。」

これはいつもどおり。そしていつもどおり男子の視線が集まる。今回は珍しく雄聖がこつちを見ていて、そして雄聖はヤレヤレといった感じだ。しかし今回は更なる爆弾がきた。

「早く来なさい。今回はテストタロツサさんも一緒なんだから」

・・・・・・・・・・・・・・・・

静かなる静寂がこの階一帯に広がり、そして廊下でフェイトを見ていた男子（内の学年の半分以上）+内のクラスの男子が一斉に「「「「「「「「「「「「「「「「
「「「「「「「「「「「「「「「「
「みたいな顔でこつちを見ていた。はあく理不尽だ。だが流石に拒否することなど出来ず

「わかった。ちょっとまっている」

そう言つてなるべくいつもどおりスルーしながらいったが雄聖に

「ドンマイ」

と、言われ、ああ、これが死亡フラグか、と思った。

そして廊下に出て（嫉妬の目はもちろんEX）いつもどおりに屋上に行った。

屋上に着くと今回は少し広めの足場を作り弁当を広げた。

「さあ、今日は新しい子が来たからね。」

そう言ってアリサはフェイトを俺の前にだし

「今日、内のクラスに転入してきた、フェイト。テストロッサさんよ。まあ外国人だから私が面倒を見てって先生に言われたんだけどなのはとは知り合いだったみたいだったから・・・これで朝のにやけ顔の理由もやっと分かったのよ」

アリサはこと細やかに説明をくれた。

「ま、知っているがな。な、フェイト」

そして急にいつもの俺でフェイトに接するとアリサが

「き、貴一も知り合いだったの？」

と、驚いていた。そして

「貴一となのはのお友達なら私たちのお友達だねアリサちゃん。え」と私は月村すずか、すずかと呼んでね。」

そうすずかが挨拶をして

「まあ、最初にもいったけどあたしはアリサ・バニングス。長いからアリサでいいわ」

「えーと、私はフェイト・テストロツサです。私のこともフェイトって呼んでください。アリサ、さすが」

「「ええ（うん）よろしく」」

そして、この屋上のメンツに一人追加された。

「だけど、なのはの時も驚いたけどなんで貴一はフェイトと知り合いなよ」

「えーとそれは私が引越した家の近くに貴一の家があって」

「それで知り合いなんだよ」

「あら、そうだったの」

「それなら今度からある場所で待ち合わせして私達の車で三人とも朝一緒に行かない？」

「いいわねそれ」

さすががそんな核爆弾級のことと言ってきた。さらにアリサも押している。いつも二人の家は仲がよく、どちらかの家が送り迎えを交互にしているのは知っているがそんなことをしたら俺は・・・死ぬ

「だけどさすがに迷惑じゃ、」

「そうだフェイト、」

「大丈夫だよ、フェイトちゃん。アリサちゃんの車もさすがちゃん

の車の大きいから。それにみんなの方が楽しいよ」

「なら、それもいいかな」

あ、折れた。しかし俺はあきらめない

「俺は、いよゝゝゝもちろん貴一（君）も一緒だから。ちなみに答えは聞いてないから（よ）（な）の」「……そうですか」

俺 弱

「（しょうがないですよ。マイロード）」

デバイスに励まされた。

そして俺らは昼の時間を楽しんだ。

ちなみにその後教室に入ると俺は雄聖に「すまない。お前のことは忘れない」と、言って教室を出ていった。そして俺は男子に囲まれ

「……………O H A N A S H I U
ようか星川君よお」「……………」

「……………はい」

第貳拾四話。フェイト、学校に来る（後書き）

「貴一がお送りするあとがきラジオ」

「今日はゲストがきています」

「どうも初めまして、雄聖守です」

「今回はバカ（作者）がいないためきてもらいました」

「わあ〜」

「それで、どうよ初出演」

「そうだね。学校ではちよくちよく噂があったから」

「ど、どんな？」

「魔界の巣窟？」

「なんですか。それ」

「なんでも、君がもう一人のパーソナリティーを星にしたり木っ端微塵にしたり、だけど、その人は次回になると復活しているっていわれているけど」

「.....」

「……………」

「じ、次回『日常……終幕!?.』」

「って閉めるの」

「それじゃあね〜」

「て、貴ー、ど、どに」

「それでは貴ーが消えてしまったので私が」

「バイバイ」

「待ってよ。きいちゃ〜」

第二十五把。日常・・・終幕!?(前書き)

式拾五話掲載です。

アンケート・・・実施中

第二十五把。日常・・・終幕！？

フェイトが来てから数日が経過した。なんだかんだでフェイトは直ぐに学校になれた。そして、今では『麗しの四姉妹』なんて言われている。ちなみに俺か、俺は・・・『騎士^{ナイト}』だつてよ。はいそこ厨二とかいわないこれは雄聖が決めたんだから、理由はその名前どおりあいつ等の騎士だからつてことで俺の嫉妬の目を少しぐらい弱らせてくれたあだ名なんだと。しかしさすが小学生、それでなんとかなるとはね・・・

そして、今は俺は家にいる。いつもどおり学校を終わらせて、家に帰り別荘に転送して修行に励んでいた。

「よし、今日はまず八体のマネキン。強さは管理局のランクでAAぐらい」

「最近、マスターが怖くなってきましたよ」

「なら、お前らも同じ穴のむじなだな」

「マイロードに仕えるまでです」

「まったく、今日も人使いが荒い」

「人使いつて言うのかこの場合？」

そんなことを言いながらマネキンが八体出てきてなぜかプラスアルファがいた。

「なんですか。この量は」

そう、目の前に居るのは後五十体ぐらいのマネキンだった。あの草原が白一色・・・キモ!!

「安心して下さい主。八体が倒れるまで動きませんから」

「八体を倒したら」

「秘密です」

「「秘密かよ!!」「」

一人と、二つのデバイスが一つになった瞬間だった。

「まあ、いい。ムーン」

「OK, Set up, Ready?」

「いきなり英語になるな。」

突っ込みながらも

「セットアップ」

「イエッサー」

そして俺は死神になった。

「それじゃあ、星川貴一。切って切って切りまくる」

そして、戦闘開始をした。一番最初はマネキンの一体が魔弾を撃ってきたがそんなのはこの鎌の錆に変わりそして撃ったマネキンが真っ二つになった。

「久々だから少し遅いか？」

「いえ、そんなことはありません。しかしつき、きます」

話途中に、マネキンが無造作に襲ってくる。

「まったくめんどくさい。なら、奥の手だ。」

「イエッサー」

「新・奥義」

「幻想のロンド」

「お前が言っな」

そして、周りに寄ってくるマネキンを吹き飛ばしそして俺は一瞬で相手の後ろに行き、そして切ると、いう単純かつ確実な暗殺術だった。

“グサ” “グサリ”

と、どんどん倒れていくマネキン・・・そして後三体。

「いっちょやるか。ソル」

「イエス、マイロード」

「セツト」

「アップ」

そして今度は偽善者の成り果てになった。

「なんで主、私じゃないんですか？」

そして、白い指輪が騒いでいた。

「うるさい。お前は少し待っている」

「う。ぎよ、御意」

「さて、行きますか」

そして、投影魔術で夫婦刀を出した。

「ふ、さて」

「二時方向に二、投げて終わらせてください」

「最近、お前と思考が同じじゃないかって思ってきた」

「ありがたきお言葉」

そして、俺はその干将と莫耶を二体のマネキンに投げて当たる瞬間

「爆ぜろ」

“ドガアアン”

そしてそのまま爆発させた。そして

「トレスオン
投影開始」

手には同じ夫婦刀がまた、持たれた。

「最近、手ごたえがなさ過ぎる・・・」

「それはマスターが毎日欠かさず特訓や訓練しているからでは？」

「そうですね。主は随分がんばっていらっしやいますし」

「まだまだだよ。それでもね。だけど後一体か」

「マイロード、あの技も使ってみますか？」

「そうだな、それでは」

そして持っていた、剣を消して今度は弓は出した。そしてそれに気づいたマネキンはなんとこっちに近づいていた。まあ、弓を出したから近距離が無理ってことになるんだろうけど・・・

「我が骨子は擦れ狂う」

「カラド・ボルグー!!」

そして、一体だけなのにマネキンに向かってゼロ距離でのブローク

「「あれならば十秒以内ですね」」

「それなら行くぞ。術式解放その名も」

「「The・END」」

そして一体が光に包まれた。ようは俺は自分の中に魔力を集めてそれを外に放出した。ようはただ単なる魔力を当てるだけだが・・・粉々です。しかも全体が。

「はあく。もう少し改良の余地がありそうだな」

「「さっきの力で全体の威力は三十パーセントぐらいです」」

「そうか、しかしこれは本当に奥の手だからな」

そう、これはある意味奥の手だ。確かに強いしそれに範囲がめちゃくちゃ広いさらに言えば核シエルトぐらいがなければ防げないし守れない。ただ、これは俺が疲れる・・・ミッド式で魔力を集めてそれをFateのエクスカリバーとネギまの千の雷の放出を擬似的に再現する術式をソルと一緒に作り上げる。これは俺のアンサーカードがなければ完成しない。しかも複雑過ぎる・・・

「「それに、魔力も多く使いますしね」」

「ああ、そうだな。」

そして、『光と闇ライトアンドダークネス』を解除した。

「たく、サンがこんなことするから」

「しかし、主。別に大変じゃないでしょ」

「あんな、どれだけこれが疲れることか!」

白い指輪に激怒中

「それじゃ、今日は終了だ」

「「は!」」

そして今日の特訓が終わった。

Side ????

シカシコノマチハドコダ

「まったく、このような海のちかい町など知らないな。」

その男はさっきからずっと海を見ている。

「しかしこの世界はあそこではない。ということ……」

コレカラガコノワタシ、 “ジョーカー” が、スキカッテデキルトイ
ウコトカ

「は、は、は、あはははははははははは」

海の近くの公園で一人笑う男がそこに居た。

Side out

そして、今日ももう終わり、さて寝ますか

「じゃ、寝るよ。おやすみ、サン、ソル、ムーン」

「「「おやすみなさい、マスター（主）（マイロード）」」」

そして俺は意識を手放した。

周りは一文字で表すと天といえるだろう。俺は一回だけ見たこと、いや居たことある空間。

そう、あの俺が第二の人生を歩むことになりそしてあの人であった空間。俺はそこに居た・・・

そして、会うことはないと思った人がそこにいた。

「久しぶりですね。貴一くん。そちらでは順調に人生を謳歌してますか？」

「ああ、十二分に満足しているよ」

「マリアさん神様よ」

第二十五把。日常・・・終幕！？（後書き）

さあ、本格的に新しい、事件がおきそうです。

それからアンケート実施中。

それでは次回『新たなる序章』

バイバイ

第貳拾六輪。新たなる序章（前書き）

二十六話掲載です。

アンケート実施中

第貳拾六輪。新たなる序章

「久々ね。かわいくなっちゃって」

そして、抱きついてきた

「シヨタコンか！少しは自重しろよ。マリアさん」

と、言っただけで俺は急に抱きついてきたお姉さん（神様）を剥がした。

「もう、この前まで仕事で大変だったから少しいいでしょ・・・ね
？」

「あ・の・な」

「ゴ、ゴホン」

そして後ろからさらに人らしき人が居た。

「マリア様」

「あはは」

「えっとーどちら様で？」

「申し訳御座いません。私、彼女の司書であります。名はテーゼと申します。」

どこの、残酷の天使ですか・・・

「あ、そうだ。マリアさん」

「お、なんだね小さい貴一ちゃん」

「俺の力を使って仮面ライダーディケイドのベルトを作ったんだが」

「オリジナルとは少し違うってことでしょ」

「ああ、ってなんで分かるんだよ」

「ふうん簡単にはアンサー・トーカーを使っていないんだ。」

「まあな、少しぐらいは自分でどうにかしているんだよ」

「うんうん。いいこといいこと」

そして、撫でられた・・・

「それで、なんでだ？」

「結局聞いちゃうんだ」

「で？」

「ああそう、いいわ。その代わりにこっちの話の聞いてね」

「ああ、構わないよ。それで？」

「ええ、簡単よ。貴方はディケイドのベルトを平成ライダーに成れ

ると理解して、そのまま出したからよ。」

「はい？」

「ようわね。貴方の思った通りのベルトを出したのよ。平成ライダーに成れるってことだけをそのまま再現した、だからベルトも変わる。普通なら他の仮面ライダーになったらある一定の能力しか使えないけど、貴方のそのベルトはコピーではなく本物なのよ。ようはディケイドはディケイド他は他ってことね。」

「そうなのかよ・・・」

「それにその能力で出した物は消えないわよ、だからそれが貴方のオリジナルのベルト。もう一つのWのベルトは原作と一緒みたいだけど」

「なるほどね。それでそっちの話は？そっちの方が重そうだな。俺をここに呼ぶくらいだ」

「あはは、分かる・・・」

「ああ、あんたことだ。またドジったか？」

「うっ、貴一ちゃんもいじめる」

なんか、神様が駄々をこねてるよ・・・か、かわいい

「ん、待てよ。俺もってことは・・・あゝ」

そして俺はマリアさんの横にいるテーゼさんを見て納得した。

「う、ゴホン。それで、またこの人はDE SUNE」

あ、怒っている。

「今度はしかもただ、単に他の世界に飛ばしたんですよ」

「それが俺の世界か。それでなにを、つうか誰を飛ばしたんだ？」

「え〜とね」

なんだがマリアさんがくねくねしている。

「一つ質問です。」

「はあ、なんでしょう。テーゼさん」

「仮面ライダー剣フレイテの映画を知っていますか？」

「もちろん」

「その、もう一枚のジョーカーをこの人は!!」

「はあ〜」

たぶん生きてきた中で一番のため息だろう。

「あの悪者ジョーカーかよ」

「はい、さらにこの人はナスカメモリまで」

「まで、ナスカメモリってあのドーパントメモリの？」

「はい、この人、仮面ライダーの物で遊んでいて、そのせいで貴方のいる世界に落としたんです。」

「あううあうう」

あゝあ、神様なのに・・・

「はあ、それで、破壊すればいいのか」

「はい、申し訳ありませんが」

「うう、ごめんね。貴一ちゃん」

「その呼び方はやめてくれ」

「こちらはなるべく世界に介入をしてはいけないので。」

「テーゼさんも大変ですね」

「ええ、本当にね」

「それでね。貴一ちゃん「貴一」もう、別にいいじゃない。それで今回のことお願いできる？」

「できる、できないじゃない。やらして頂こう」

そして、俺は意識を手放した。

それから貴一が消えた後

「まったく、なんて子を殺しちゃったんですか」

「あはは・・・ごめんなさい」

「はあ」

そして、天使のため息はそのばに鳴り響いた。

第貳拾六輪。新たなる序章（後書き）

あとがきラジオ

「貴一とマリアのあとがきラジオ」

「さ、始まったわよ」

「おいおい、誰だあゝこんなバカをつれてきたのは」

「うわあゝ貴一ちゃんひどい」

「うるさい」

「う、さらに冷たい」

「まあ、いい」

「あらなんで？」

「どうせ、もう一人のバカはアンケートがこないからここにも来ないだけだろうし」

「あ、そうそう。そのバカからなんか来たのよ。はいその手紙」

「ああ、ありがとう。どれどれ」

「ないが、書いてあったの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

「すまないが、少し出てくる」

「え？、え？」

「あのやるじー！ー！」

「え、ちょっと」

「ああ、行っちゃった。それでは次回『それが俺の道』それじゃね
あーって、これさっきの手紙」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「貴一君ドンマイ」

中の手紙にはなんて書いてあったかは・・・。

第二十七話。それが俺の道（前書き）

二十七話掲載。

アンケート実施中

第二十七話。それが俺の道

さて、いざ起きて見たものの、時間はいつもと同じか……。それじゃ、まずジョーカーの搜索をしないと。たぶんこの地球の日本に居ることは間違いないだろう。なら空間に適しているサンを起動させて

「サン。テイクアップ」

「は、主。何事ですか？今日はまだ早いよっな」

「なに、頼みたいことだ」

「何なりと。主」

「すまないが、この数日にこの国で失踪した者、それかありえない現象なんかが起こったニューズを搜索。それからこの海鳴市の“アリエナイモノ”がないか調べてくれ」

「はあ。構いませんが……。主、“アリエナイモノ”とは？」

「ああ、そうだな。どう説明しようか……。簡単に言えば俺のあの稀少能力レアスキルで出した物とそう変わらないものだ。」

「御意」

「あ、それから、搜索はソルと協同でもいいから、なるべくその搜索のほうを重点的してくれ。あと」

「管理局には見つかるんですね」

「ああ、確かに信用はしているんだが」

「一人で、やるんですね？」

「ああ、それに今回は俺が・・・」

「あ、主？」

「いや、なんでもない」

そう言っただけで今日はモーニングコーヒーを煎れ始めた。

「それでは、早速」

「ああ、そいつらはいつのもどおりに起きるから、その時に説明し
ていってくれ」

「は」

さてさて、まずは近いところから調査して早く破壊しないと、もし
もあれとナスカメモリが一緒になったら少し大変だし。

「さて、これからが大変だ」

あ、今日もあの地獄のドライブからか・・・

そして時間もほどよく過ぎ去り、いつもの学校に向かう俺だが、あ

る場所に向かう。だがそこにはもう先客がいた

「遅いな の 貴一君」

「そつだよ。 貴一」

「すまんすまん。一応時間は守ったんだが。おはよう、なのは、フ
エイト」

「うん。おはようなの」

「うん、おはよう」

そつ、あれから俺達は一緒に学校に行っている、ようはハーレムだ、
自覚はあるのだが・・・なんでだろう。虚しい。

「そつ、思えば今日お母さんが貴一君に来てほしいって」

「プレシアさんが。わかった。学校が終わったらそのまま、フェイ
トの家に行く」

「うん。分かった」

「みんな、おはよう。早く乗りな、」

お、今日はすずかの車ですか。それにしても本当運転うまいな。こ
この二人のメイド、そして鮫島さん。こんな細い道をよくリムジン
で来れるよ。

「ああ、いくぞ二人とも」

「うん」

そして学校も終わり。明日から休みに入る。まあ、さすがに土日は休みたい。まあ俺は今回はそれは無理かな。“あれ”があるから、

そして今日、朝にフェイトに言われたとおりフェイトの家に来た。

“ピンポーン”

インターホンをを使いドアが開くのをまち、

「お、貴一か。あ、入ってくれ」

アルフが出迎えてくれた。そして家に入ると犬形態になった。

「あら、いらしゃい。」

そして、なぜか翠屋で働き始めてどんどん若くなってきている気がする。プレシアさんがお茶を飲んでいた。

「どうも、なんでも用があるみたいで」

「ええ、その最近の話なんだけど」

随分と真剣の顔なのでこちらも心持ち少し真面目になった。

「なにか、最近胸騒ぎがして」

そうか。この人は感じたんだろうな、たぶん、あの“イレギュラー”の存在を。

「それは何時からですか？」

「その、反応はもしかして」

「何時からです！」

少し強く言ってしまった。

「え、えーと確かだけどー昨日ぐらいかしら」

俺の声にびっくりしてしまい、プレシアさんはすぐにこたえてくれた

「そうですか」

「ねえ、貴一君。その」

「この件は他言無用でお願いします」

「やはり、なんかの事件なの」

はあ、この人は鋭すぎる時がたたあるな

「この件は俺が処理しなければいけない物ですから」

そう言っていたらソルが俺が作り上げた特定の人にしかできない念

話をしてきた。ちなみにこの念話の名前はない

「（マイロード、これは朝、サンから聞いたことのことだ）」

（ああ、そのとおりだ）

「（確か、なんにかがいたりとかいないとか）」

（ああ、そんな感じだ。だからお前のなんか察知したら）

「（分かっております）」

（ああ、助かる）

「また、貴方は遠回りをするの？」

プレシアさんにそう言われた。

「遠回り？」

「ええ、貴方はあの事件の時も私たちを救おうとした。管理局側なのに……」

「だから？」

「また、茨の道をいくの？」

「ええ、それが俺の責任ですから」

「貴方はまだ、子供なんだから少しは大人の力を借りても」

「プレシアさん。こういう言葉があるんです」

「え？」

「大いなる力は大いなる責任が伴われる」

「え？」

「それでは失礼します」

「え、き、貴一君」

その声は聞こえなかった。なぜなら貴一はその言葉と同時に転送したから

「あれ、お母さん。貴一は？」

そして、ちょうど二階から降りてきたフェイトが聞いてきた。

「今、帰っちゃったわ」

「え、残念」

（貴一君、一体・・・なにが起きているの）

転送先は家だったためリビングに出た。

「はあくやっぱり、わかる人にはわかるのかな？」

「主、報告が」

「なんだ」

「はい、二日ほど前なのですが、そう遠くない山のなかで若者が消えた事件がありました」

「それから、マスター。一日見張ったがなんともなかったが」

「ご苦労さん。少し休んでいて」

「イエッサー」

「御意」

「さて、明日はその森にいくぞ」

「はい。それでどうしてこのようなことを」

「なに、天の導きだよ。」

まあ、本当に天からのお願いなんていえないし

「はあく。マイロードそれで今日は？」

「ああ、今日は軽めの筋トレとお前でセットアップしての、白兵戦だ」

「イエス、マイロード」

さあ、早くこの事件終わらせて、俺を休ましてもらおうか、ジヨ
カーさんよ

第二十七話。それが俺の道（後書き）

「マスターが不在のため私、ムーンと」

「ソルでお送りする」

「デバイスは見た！！！」

「いや〜なんか始まった。」

「なぜ、我々が」

「しょうがないだろ」

「あの作者は、^{バカ}どうした」

「最近、ゲームにはまってこない」

「マイロードとこんど邪魔して・・・クロス」

「はいはい、それは今度にしろ」

「その前になんだ今回の企画は」

「ようは、デバイスで見たことを言えばいいんじゃないかね？」

「ずいぶんとアバウトだな」

「まあ、そういうことだ。うんじゃ、予告言ってくれ」

「次回『初めて主人公が出ない話』……っえ!!」

「あらら、それでは」

「バイバイ」

第二重霸知和。初めて主人公が出ない話（前書き）

二十八話掲載です。

最近話がaaaaaです。

第二重霸知和。初めて主人公が出ない話

Side プレシア

貴一くんが言っていたけど・・・しかし、この違和感がもしかして本当に事件なのか、確認して見ないといけないわ。

そして、私はアースラにいける魔方陣を作ったが、その時、フェイトが来た。

「あれ、お母さん。なにかアースラに用があるの？」

「ええ、フェイト。ちよつとね。あ、そうだフェイト、最近貴一君、なんか変な所とか変わった所とか、ある？」

「うん。最近集合するのが遅いかなぐらいかな」

「あら。そうなの」

遅い・・・なんか夜にもなんにかしている、いうこと？

「すぐに、帰ってくる、お母さん？」

「ええ、ちよつと聞きたいことがあるだけだから」

「うん、いつてらっしゃい」

そして、我が娘の見送り受けながらアースラに転送した。

「あらあら、今日は珍しい人が来ましたね」

目の前にいるのはリンディさんだけだった。

「あら、ここは艦長室ですよね」

「ええ、そうです。それでどうしたんですか？」

「ええ、今回はちょっとお話が」

そういうと、私の顔を見てリンディさんもなんだがモニターになにかを打ってこちらに向き直りそして、

「聞きましょう。一体どうしたんですか？」

「はい、その地球に、いえ、海鳴市になにか奇妙なことがありましたか？」

そう、私が切り出したが、反応は無かった。

「いえ、なにもありませんが？」

と、首を傾げながら言ってきた。

「そうですか。」

「そのなにか？」

「はい、少し違和感……いえ、これは私の感で、思ったことだったんですが」

「はい、それで？」

「確信に変わったのでここに来て報告に来ました。」

私は言った。

「いったいどうしたのですか？」

リンディさんが素でこちらの顔を見ていた、さっきまでのおしとやかな顔から艦長いや、管理局の顔に変わった。

「まず、その確信に変わったとは？」

「はい、まずこの話をここではなく貴一君に言いました」

「そうですね。その違和感が他に感じる人が居てさらに魔導師、ならば知っている中では一番の適任者ですね。」

「はい、それで相談したのですが・・・」

「どうしたんですか」

そうあの時貴一君は・・・ちょっとまってといつことば、もしかして。

「リンディさん。たぶんこの件についてはもう動いているのかもしれないません」

「どうしたのです急に」

「ええ、貴一君は他言無用で、と言っていましたと言っことは」

「もうこの件にいち早く気づいている」

「はい」

「なら、なんで私たちを頼ってくれないのかしら」

リンディさんは少し悔しそうな顔をした。

「貴一君は『大いなる力は大いなる責任が伴われる』って言って転送されました。」

「そう、しかし、それでも私たちは管理局ですから、調べてみましょう」

「ですが、貴一君は」

「ですから、こちらは密かにですよ。密かに。ちょうど、いい機会ですし、私も地球に行ってみたいですし」

「はあ〜。」

ちよつと呆れてしまったが、なんとか貴一君の力になれそうね。これはフェイトにも言っところかしら、だけど今日はなぜか、アースラの中がドタバタしているわね。

『あのおう、艦長・・・』

「あら、どうしたのエイミィ」

『そろそろ来るでしょうから、』

「だれか、来るんですか？」

「ええ、なあ何故か匿名の提督さんなんですが」

「匿名ですか」

「ええ、なんでもこのアースラを見たいと」

「随分と……ですが私がいいんですか」

「別に構いませんわ」

『か、かかか艦長……お、おみえになりました』

なぜか、エイミィさんが震えている、それほど大物なのか

「わかったは、それでは一緒にどうですか。たぶん貴方も見て見たい方ですか」

ん？さっき匿名って言ったはずなのに、リンディさんの知り合いかなにかのかしら

「はあー、それではお言葉に甘えて」

そして、私はリンディさんについていった。そしたら、私が学生時代から懂れていた、人が居た。

「お、久しいのうリンディ殿」

「はい、提督も元気そうぞ」

「うむ、元気は元気なのじゃが・・・貴一に会いたいのう」

そうそこにはギル・アルバート博士がいた。

「ん？お主は管理局の者ではないようだな」

そして、私を見ながらそう言った。

「あ、は、はい。え、えつと」

私は憧れの博士にあえて完全にテンパっていた。

「がっはっは、そんなに緊張しなくともよい、テストロッサ殿」

「え、なぜ私の名を？」

「あ、そりゃ、貴一からこの人が住むという連絡は着ておるしのう」

ああ、そう思えば、貴一君が紹介してくれた家って元はアルバート博士の家だったわね

「そうでした。そのあの私は・・・」

「なに言わんでいい。それに貴一はちゃんとそこまで言ってきてきて尚も頼んできての」

「そうなのですか」

「うむ、貴一はあんなに小さいが甘く見てはいけないのじゃ、まあ、子供は子供じゃがな」

そして、豪快に笑うアルバート博士、しかしそれも一遍し

「リンディ殿、“あれ”は試作機が出来たがこれはそこにおる者と相談して改良するなりしてくれ」

「そこには？」

そして、あるバート博士は私を指差して

「なに、プレシア女史にかかれば簡単じゃろう。それに管理局の協力にもなる」

「え、いいのですか」

「ふふ、提督命令ですか。それでは仕方ありません。プレシア・テストロツサはこれの安全性についての調査を依頼として協力してもらいますよ」

と、リンディさんも芝居がかったことをしていた。

「実はの貴一がそうしたほうがいいんじゃないっておってな」

また、貴一君。やはり彼は只者でわなさそうね

「それではのう、ワシはそろそろ」

「あ、はい。ありがとうございます」

「ありがとうございます」

私は深くお辞儀をした。そしてアルバート博士が行った後

「実はね。このことは前から話していたの。」

「それが今日たまたま重なったと？」

「そういうことになるわね」

「はあ、それではその件はまた」

「あら、もつお帰りになるの」

「ええ、そろそろフェイトがお腹をすかせているわ」

そういつて、私も“家”に帰っていった。

S i d e o u t

第二重霸知和。初めて主人公が出ない話（後書き）

今回はラジオをお休みします。

アンケート実施中

第貳拾級話。 搜索開始！！（前書き）

二十九話掲載です。

第貳拾級話。 搜索開始！！

さて、さて。今日は土曜になったわけだが山か・・・

「サン、」

「どうしました。主」

「ああ、その山で行方不明になったのは何時ごろと推定されている」

「え・とお昼ごろですね。しかもその行方不明になった前日から次の日まで晴れてますから、普通に遭難はありえないかと」

「そうだよな。しかもあの山はそんなに複雑じゃない」

「ああ、そのようだ。しかしマスター、これは奇怪ですのう。」

「そうか?」

「ええ、今回の調べですが、まったく該当がないのにそれらしいことは起きている。これではまるで「完全犯罪ですね。マイロード」
って俺のセリフを取るなソル。」

「ああ、確かに今回は一筋縄ではいけそうにないな」

「しかし、なぜ今回のようなことを」

「ああ、本当のことをいえば」

実際は神様に頼まれたがさすがに言えないから

「違和感だ」

「「違和感？」」「

「ああ、今回は違和感だらけを感じてな」

少しごり押しかな。

「まあ、マイロードが調べたいのですから私たちは従うまで」

「すまないな。それでは山のふもとまで転送してくれ。人目はさけてステルス機能を付けてな」

「イエッサー」「御意」「イエス・マイロード」

そして、転送した。

ここは森の中のようだ。

「おい。森のふもとじゃないのか」

「は、主。ここが失踪場所とされていますから。先に連れてきました」

「まったく、随分先読んでくれるな、」

そして、そこから俺は、搜索を開始した。

Side なのは

ふー。お母さん、人使いが荒いよまったく。いきなり、卵が切れちゃうなんて・・・

「あれ、なのはちゃん？」

お使いの途中、商店街の通りを歩いていると後ろから声をかけられた。

「あ、プレシアさん。こんにちは」

「ふふ、こんにちは。おかいもの？」

「あ、はい。プレシアさんは？」

「私は今日のお昼のお買い物よ。今日もだからその時はよろしくね」

「あ、はい。お母さんもプレシアさんが来てから売上げが上がったし、お姉ちゃんも勉強に集中できるって言っていましたし。」

「それならいいんだけど。それじゃあね。なのはちゃん」

「あ、はい。それではまた」

「ええ、今日はフェイトも連れて行くと思うは」

「は〜い」

やった、フェイトちゃんも来るんだ。なら貴一君も呼んだほうがいいかな。あとで電話してみよう。

Side out

山の搜索からはや三時間。九時に転送したから十二時だな。

「しかし、主まったく痕跡がありませんね」

「あ、爪あとのような物以外はなしか」

「しかし、あの爪はこの世界の動物ではありませんでしたし」

そう、ソルの言うとおり俺らは最初に見つけたのは大木にあった爪あとだった。しかし、これは完全に動物のものではない。そうすると今回ジョーカーはここに居た事になるなら一体どうして見つからないんだ。

「そろそろ、休憩しよう。今日はここ一体に陣を置く」

「だけど、マスター。それではもし海鳴市の方にいたら？」

「それは大丈夫だろう。プレシアさんがたぶん管理局に言っているだろうし」

「マイロード、確かプレシア殿には口止めしていたではないか？」

「ああ、だが、たぶんもう管理局には知らせているだろう。リンデイさん辺りなら搜索を密かにしていそうだし」

そう言つて、ここ一帯に陣を取り座り精神統一をした。これでも自然の流れを掴もうとした。

「主の周りに気配を気付かれないような結界を張ってください」

「分かっているサン、」

「それで、こここの搜索は後だいたい」

「大体三分の一ぐらいは終わったぐらいだろう。ムーンはこのあとの飛行で役に立つのだから今はスリープモードになっておればいい。」

「そうか、ならマスターが今のあの完全に世界から遮断した状態に戻ったらおこしてくれソル」

「了承した」

Side なのは

<<プルルルル、プルルルル、プルルルルル>>

うーん貴一君はいないみたいなの。

<<カラン、カラン>>

「こんにちは。」

プレシアさんが来たようだ。

「こんにちは」

フェイトちゃんも一緒のようだ。

「アルフ、ここはお店だから外でね」

なんと、アルフさんまで来ているの

「いらっしやいませ」

私は大きな声で挨拶した。

「さっきぶりね、なのはちゃん」

「はい。」

「来ちゃった。なのは」

「うんうん。大歓迎だよ」

「なのは、まだ開店前って、まあ。．．．こんにちははプレシアさん
今日はフェイトちゃんも一緒なんですわね」

「はい。どうしてもと」

「ふふ、構いませんわ。」

そんな会話をしていた。お母さん達はキッチンの方に行ってしまった。

「はあ〜」

私はフェイトちゃんと一緒にジュースを飲んでいただけのため息を吐いてしまった。

「どうしたの、なのは」

「うん、実はね。貴一君も誘おうとして、電話したの、でも居なかったなの」

「あ、だからか」

フェイトちゃんも残念そうなの。

「「はあ〜」」

「あらあら、二人してどうしたの」

「え〜と、なのはが貴一を誘おうとしたんだけど」

「居なかった。」

「え、居なかった。」

プレシアさんが聞いてきた。

「うん。居なかったなの。電話しても返事が無かったなの」

「あら、そうなの」

そういうと、プレシアさんは普通に仕事に戻っていったの。

「ねえ、さっきお母さんから聞いたんだけど」

と、フェイトちゃんが言ったら、手巻きをしたので耳を近くに寄せると、

「なんかリンディさん達がこの地球に来たらしく明日来るらしいよ（ヒソヒソ）」

「え、そうなの。それじゃ、どこに？（ヒソヒソ）」

「たぶん。（ヒソヒソ）」

そう言っつてフェイトちゃんとヒソヒソ話をしていたら、お母さん達は着替えが終わったらしく、こっちに戻ってきた。

「それじゃあ、今日もよろしくお願いします。」

「はいがんばりましょう」

そう言っつて今日も翠屋が始まった。

S i d e o u t

さて、今日はこの位か・・・

「今日はもう終わろう。」

「は、しかしこれでは・・・」

「ああ、たぶん何処かに逃げたな」

「それよりも今日は主とムーンは飛びっぱなしじゃないですか」

「そうだが、あまり負担はないよ。そこまで柔じゃない」

「主、しかし本当に今日はここで」

まあ、確かに野宿というのもどうかと思ったがここなら逆に管理局に感ずかれない、それにもし海鳴市でなにかあればソルが反応してくれる。

「ああ、そうする気だ。それに明日は山の向こう側に行く。」

「イエッサー」「御意」「イエス・マイロード」

S i d e ジョーカー

海鳴市のとある公園である男がいた。

サア、アシタダ。アシタガコノマチヲハカイスルヒダ・・・

雲行きはどんどん悪くなっていった。海鳴市に向けて・・・

第貳拾級話。 搜索開始！！（後書き）

「作者がお送りするあとがきラジオ」

「今日は貴一君が山に言っているのでスペシャルなゲストが来ていますどうぞ」

「え〜と、高町なのはです、」

「そうです。みんなのアイドルなのはちゃんです」

「あ、アイドルじゃありません」

「おっと、失礼。」

「もっ」

「それでは今回のゲストにお便りが多数」

「え、そうなの？」

「ええ、同じ学校の男子からです」

「なんで、普通に話さないんだろっ？」

「（それはアリサ嬢がいるからだ）」

「それでは気を取り直し、まず、一つ目」

”好きな男の子のタイプは”

「え、え〜と・・・やさしい人かな」

「あ、そうなんですか。てっきり私は貴々」にやあああああああ
あ
「あ」

「よく、分かりました。それでは次」

「なんか、怖い」

「最後のようです」

「え、なんで？もつとあるんじゃないの」

「一番最初のお便りが大体ですから」

”この前翠屋さんの前を通ったときに若い人がレジをしていたんですがそれは高町さんのお姉さんですか？”

「あ、お母さんだよ。」

「そう思えば、なんであんなにきれいなんだろう。」

「あ、そんなこと言うと」

「俺の桃子を狙うやつは誰だあああ」

「こんな感じにお父さんがってもういないし」

「え、え〜とそれじゃ次回はって題名決まってるないの。」

「それじゃ、こんなんだけどバイバイ」

「きやああああああああああああああああああああ」

作者・・・一死

第三十巻。 搜索の続きノパーティー前（前書き）

とつとつ三十話掲載です。

第三十わ。 搜索の続きノパーティー前

さて、今日はどうしたものか。昨日のように行くのも非効率だろうし、このまま山の向こうの町に下りていたら、厄介だな。

「サン、その遭難事件以外に、なにかあったか？」

「いえ、この前に注文されてから変わりはありません」

「そうか」

と、なるとなぜ、人を襲ったんだ。今回は他のカードは無いわけだ
る……

「しょうがない、あれを使うか（ボソ）」

「マスター、なにか？」

やべ、聞こえたか

「いや、なんでもない」

危ない、危ない。さて発動。『答えを出す者』（アンサー・トーカー）

問題……ジョーカー・襲う・そして危険となる行動
これで、絞り、……答え。

そういうことか。なるほどな、あいつは今回はこの世界にとっては

イレギュラーのままこの世界に転送してきた。だからこの世界自体が抑止力が発動しているんだ。だから自分がここに居るためにも布石として人を殺した。待てよ。と言うことは……世界に自分を刻むためにもっと多くの人を殺す可能性が……

「くっそー!」

「どうしました。マスター」

「ち、このままだと不味い。」

それに、やっぱり使っらんじゃないな……頭が少しいてえ。清磨も日常でこれは出来なかつたしやっぱり頭に負担が掛かるか、あの『The・END』もそうだけど、単体で調べるのも大変だな。これだったら『地球の本棚』にしてもらうんだった。

「ま、マスター？」

「ああ、すまん。いや、なに予測というか、次に相手が何をするかを考えていたら、ちょっと不味いことになりそうだなってな。」

「まあ、そうならないためにもがんばりましょ。主」

「ああ、そうだな。」

そして、今日もまた搜索が始まった。

Side なのは

今日は、リンディさんや、クロノ君がくるの、今はその準備をしていて、お店のお掃除中、実は昨日、プレシアさんが明日、お友達がくるので、お休みを貰おうとお母さんに言ったら、「うちでパーティーってどうかしら。」と、言ったためそうになりました。だから今日は朝からお掃除なの。けど、昨日結局貴一君は繋がらなかったなの。お母さんが「たぶん、旅行にでも行ってるんじゃないかしら」て、いうなの。だったらなのは達に一言あってもいいなの。もしそうで帰ってきたらO H A N A S H Iなの。

「おおい、なのは、ど〜」

「あ、お姉ちゃん。ここ、」

「ここがどこだかわからないんだけど」

「にゃはは、今お店の前」

「そう言ってよもつ」

そう言って重そうなダンボールを軽々もっているお姉ちゃん。

「なに、それ」

「え、これ？なんでも新しいインテリアらしいよ。お母さんが言うには」

「あ、そうなんだ」

そう言って、奥に消えていちゃった。さて、お掃除お掃除。

(なのは、そこ汚れているよ)

(え、あ、ありがとう。ユーノ君)

窓から、フェレット姿のユーノ君もお手伝いしてくれている。頑
張らないと

S i d e o u t

S i d e リンディ

今、艦長室にて今日、地球に行く、私、他クロノ、エイミィちゃん
を呼んで今回のことを伝えて

「分かっていると、思いますがこれは旅行ではありません」

「はい」

「今回はプレシアさんも依頼で行くのです。それは分かっています
ね」

「はい」

「しかし、さつき艦長。「二時間かけて服を選んでいた、艦長に言
われたくありません」ってクロノ執務官が行ってました。」

「あら、そうなのクロノ執務官？」

「って、え、エイミー!!」

慌てているクロノを見ると本当にあの人みたいね、あの人も女の子は時間が掛かることを知らなかったわね

「いや、か、艦長これはですね」

「弁解は聞きません。明日、アースラの食堂掃除をしてもらいます」

「て、それは職権らんよ」なにか、クロノ執務官?」いえ、なんでもありません。」

そして私たちは地球の海鳴市に転送した。

Side out

さて、こんなもんか。

「手がかりなしか・・・」

「はい、そうですね。「ここまで調べてないとなると。」

「そうか、すまないな。俺のために使いまくって」

「何をいうのです。マイロードそれに・・・」

やはり、ソルが感づいたか。

「ああ、そうだな。それじゃ、なぜか監視されているか、聞こうか。お前ら」

そして、俺は森の中で大声で後ろ向いたら。そこには大の大人が少なくとも二十人以上はいた。

「マスター、この人たちは？」

「さあな、だが普通の人でも管理局の人間でもなさそうだ。」

そして、そいつらは顔に入れ墨のような赤や青の色が顔に出てきた。

「おいおい、聞いてないぞ。ファンガイアなんて」

「「「ファンガイア？」」」

「そうだ、これは俺のベルトでしかまともに倒せない、奴らの一つだ。今回はそんな感じがしていたんだが」

「それが違和感ですか、マスター」

「それじゃ、これ倒せば終わりですな主」

「ああ、たぶんな」

そうデバイスたちには言ったが、俺は内心、焦っていた。確かにあの神様は“ジョーカー”を放してしまった。と、言っていたが、これはファンガイア、しかもこの数……。まあいい今はこの状況を

なんとかしよう。

「しょうがない、サン。いくぞ」

「久々ですから。飛ばしますよ」

「セットアップ」

そして、俺は白いバリアジャケットを見に纏い、化け物もどきの相手を始めた。

Side フェイト

リンディさん達と待ち合わせをしたのは、内の庭。案外大きいし、ちゃんとアルフに普通の人には見えない結界を張ってもらっているから、

「フェイト、そろそろ来る頃だから」

「あ、はい」

そして、魔方陣が光り、リンディさん一行がいました。

「久しぶりね。フェイトちゃん」

「やあ、久しぶりだな。」「久しぶり〜分かる？誰か」

「はい、お久しぶりです。クロノ君も久しぶり。そりゃ、分かりますよエイミィさん」

みんなも変わらなく元気そうで良かった。と、思っているよ

「ようこそ。我が家へ」

お母さんも庭に出てきた。

「はい、いらしましてよ」

「と、言うよりもこの家でかいな」

「そうだね。クロノ」

「そりゃ、そうよ。なんてったてここは元アルバート博士の家ですから」

「ここが、」

クロノ君は口が開いたまま、家を見ていた。

「それはそうと、プレシアさん」

そういうと、リンディさんはお母さんを手招いていた。

「フェイト、お二人を先に案内してくれる。お母さんはちょっとお話があるから」

「うん、わかった」

たぶん、今度のデバイスの機能の手伝いをするってお母さんが言っ

ていたからそれかな

「それじゃ、クロノ君、エイミィさんこちらへ。ほら、アルフも行くよ」

「ああ、分かったよ。フェイト」

そして、私はエイミィさん達を連れて家に入った。

Side out

Side リンディ

「今日は、ありがとうございます。それで」

「ええ、今回の件ですが今のところはなんとも」

「そうですね。それでリンディさん」

「はい、」

「貴一君は昨日家に帰っていないみたいですよ」

「そ、それは本当ですか」

リンディさんが心配しながら聞いてきた。

「ええ、昨日、なのはちゃんが電話したらいいのですが、出なかつ

たらしく。」

「そうですね。そうですね、今はたぶん一人暮らしをしていますし」

「その貴一君は一人暮らしってことは、もしかして」

「あ、いえ。両方とも生きていますよ。ただちょっとこちらでは」

「あ、すみません」

「いえ、いいんです。それで、朝からこちらにきたのですが。クロノ執務官に飛んでもらっていたのですが、反応はありませんでした。」

「そうですね。そのすみません」

「いえいえ、いいですよ。ある意味これを理由に地球に来れるんですから。」

「ふふ、そうですね」

「ええ、それになのはちゃんのご両親がやっているお店に行きたいし」

「はい。それはもう期待以上に満足させますよ。それじゃ、私たち中に入りましょう」

「そうですね。それでは調査を開始します」

そう言って、私たちも中に入っていった。

第三十巻。 搜索の続きノパーティー前（後書き）

「作者が送るあとがきラジオ」

「今日も搜索中の貴一君に代わってこの人がきてくれています」

「可憐な転校生、フェイト・テストロッサちゃんです」

「か、カレンって・・・」

「それでは早速お便りと生きたいとおもいます」

「（なのはが言っていた注意しないと危ないやつだ）」

「それではまずこちらです」

”最初の桃子さんの印象は？”

「最初はなのはのお姉さんだと思いました」

「確かにきれいですから。続きまして」

「ゴクリ」

”好きなタイプの男の子は？”

「え〜と、・・・心が強い人かな。憧れるし／／／」

「あーあ、そうですか。てっきり私は貴い「だめええええええええええ

え「っはいご馳走様でした」

「（これだったんだのはの言っていたのは……）」

「あれ、まだありましたね……これはww」

「え、なんですか？」

「ペンネームなんとか女史さんからもらいました。」

「お母さんだよね……」

” K・H君の結婚式はミッドがいい？それとも地球がいい？”

「……………」

「えーとフエイトさん」

” バタリ”

「あ、倒れてしまいましたね。それでは次回『パーティーの後……』です。」

「バイバイ」

「貴一と結婚／／／／／／／／／／／／／／／／」

” バタリ ”

第三拾一話。パーティーの後・・・(前書き)

三十一話掲載です。

第三拾一話。パーティーの後・・・

Side なのは

<<カロン、コロン>>

時間ぴったしにプレシアさんは家にきました。その後ろにはリンディさん達もいるそうみたいです。

「どうぞ、いらっしやいませ。」

お母さんが最初に挨拶をした。

「こちらこそ、このような機会を設けていただきありがとうございます。」

リンディさんもこちらに向かってお辞儀をした。

「あら、プレシアさんの友人と聞きましたが日本語、上手ですね。」

「ええ、前から日本に興味がありましたので。」

「あらあら、そうですか。さあ、席にどうぞ。」

そして、二人とも挨拶が終わると、他の人たちは後でと、言うことで今は、みんなで座れるようにした、テーブルに着いた。今日このパーティーに参加しているのは、私と、フェイトちゃん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、お父さん、お母さん、プレシアさんリンディさん、

クロノ君、エイミーさん。

「さてさて、全員来た事ですし、乾杯をしたいと思いますがこれはなのは、貴方がやりなさい。」

と、お母さんが急に振ってきた。

「え、え、そ、それじゃ、かんぱい」

「「「「「乾杯」「」「」「」」」」」

そして、パーティーは始まった。

Side out

「くっそ、数がへらねえ」

今、ファンガイアと二時間ずっと応戦中。

「主、これは不味いです。完全に質より量で押されています」

右斜めに撃ち、さらに左にもある銃で相手を撃ち、

「くっそ、かれこれ、何体目だ!!」

「マイロード、これでかれこれ百六十二体目です。」

剣のペンダントがちゃんと数えていたらしい……

<<バンバン、バアアアン>>

「さっきから撃ちまくっているけど減らんねえ」

どういうことだ、ただでさえジョーカーが見つからないのに、この数は……

(ハイハイ、困ってるみたいね)

(いきなりなんだよ！このバカ神様)

そういきなり、頭のなかに声が始めた。ってこれ念話か？

(違う違う。これは神界特製の電話よ。電話)

(んなことどうでもいい！！これはどういいうことだ)

(ええと、)

(私が説明します)

そう言って、テーゼさんが変わったが、

(どうでもいいが、この数を未だに相手している俺の身になれ、早くしろ！！)

そうなのだ、こんな会話しているが未だに俺は戦闘している。

(申し訳ありません。今回はですね、ジョーカーを飛ばしたさいの道が他の世界でも繋がってしまって、その道は封鎖しましたが・・・)

(ちょっと気づくのが遅くて・・・)

(遅くて？)

神様さんよ。その乾いた声はなんだ。

(あと、七十体ぐらいそっちに流れちゃう)

.....

「くそがああ。ムーンセットアップ」

「イ、イエッサー」

そして俺は今度は鎌を振り捲くつた。

まだ、ファンガイアでも弱い。だからサンの銃でもなんとかならなかった
しかし、後七十だと、めんどくさい。

「今現在俺の目で確認できる数・・・三十」

そして、この前にした技の一つ

「幻想のロンド」

そして切りまくっている。こいつらやられると消える。たぶん元の

世界に戻っているのだろう。

「しかし、マスター。これでは埒があきません」

「ああ、それでもだ、こんなやから、町に下ろすわけにはいかんだろ」

「はあ、まったくこの主は。」

「修行していて本当によかったですね。」

「楽みたいというな」

「だってマスター。息がまだ上がっていませんよ」

「このバトルマニアの鎌が」

「そうだぞ。まったく」

「ソルはただ単に暇なんですよ。ずっと索敵だけだから」

「いや、違つぞサン」

「なんでそんなに呑気なんだよ」

まあ、確かにこんな奴らにやられはしないだろうが、疲れる。しかし、もうちょいだ。そう思った。ただそれはただのウォーミングアップにしかなかった。

S i d e 恭也

いや、今日は楽しかったな。いろいろと、お話もできたした。そして、終わりに近づいた頃

<<カラン、コロン>>

そう、その時、一人の男が入ってきた。

「申し訳御座いません。今日は貸し切って、お、お客様」

そう言っつて美由希が止めようとしたが

「うるさい。キエロ」

そういつて、吹き飛ばした。あの美由希が簡単に……こいつ強い。

「な、おいお前」

そう言っつて俺はそいつを殴った。確かにそう思った。だが

「あまいな。」

逆に俺が外に吹き飛ばされた。

「g、ガハ」

「なかなか、おもしろいな。貴様みたいなのを待っていたんだ。」

「恭也これを」

そう言って、外に出てきたのは父さんだった。木刀を持って

「武器を手にしたか。ならばわたしもかな」

そういうと男はなにか、携帯のようなものもち

<<ナスカ>>

と、その携帯がなり男はそれを自分の体に指した。そして怪物に変化した。

「な、なんだあれは」

「あ、あれは！」

リンディさんが驚いている。

「これが」

「これだったのね」

プレシアさんたちがなにかを言っていたが、

「貴様、どこを見ている？」

そして、一瞬の隙に俺は切られそうになったが、その瞬間。

「レイジングハート、セットアップ」

そして、なのはが光に包まれて変身した。

「お兄ちゃん大丈夫」

「なんだ、まだ居たのか。面白い、ここは当たりのようだな」

そういうと俺から離れて少し距離を置いていった。

「バルディツシュいくよ」

そしてフェイトちゃんもなんだか変身していて、「君達勝手にセツトアップをするな」となんだか後ろからクロノ君だったかなその子が言っていた。

「エイミイ、アースラに報告」

「あ、はい、はい」

「ユーノ君とアルフちゃんは視覚妨害と、人除けの結果を」

そう言っつてリンディさんは内のフェレットと大型犬に言っていた。

「あんたらは一体？」

そう俺は素に戻ってしまった。

「申し訳ないけど。その話は後でね。プレシアさん」

「あ、はい。高町家の人たちはこちらに」

そういって、プレシアさんは俺らを誘導した。

「美由希さんを見せてください」

そういって、さっきまで腫れていた顔が治っていった。

「あなたは？」

母さんがプレシアさんに聞いていた。

「まあ簡単にいって魔法使いです」

そして、俺らはその場から引いた。しかし

「なのは達、子供にあいつが相手を！！」

そう言って見てみると、なんとか応戦しているみたいだった。

Side out

Side フェイト

さっきの人がなのはのお兄さんを吹き飛ばして外に行った後、直ぐにみんながそつちを見にいった。それでなのはのお兄さんがやられちやいそうになった時、なのははセットアップして、いちやった。私もそのあとを追って今に至る。

「貴様らは、私を楽しませてくれるんだろうな」

そして。その人だったモノは私達三人に襲い掛かってきた。

第三拾一話。パーティーの後・・・（後書き）

今回はゲストがないため予告だけ

「次回『デュエルスタンバイ』はいばい」

第三重武話。デュエルスタンバイ（前書き）

かひにわかひに

三十一話掲載

第三重武話。デュエルスタンバイ

Side フェイト

さっきから全然攻撃をしてこない。

「どっぴうこと?」

私が口走ると

「まったくだ。まったく魔弾を除けようとしな。それにまるで効いていないみたいだ」

「そんなはず、なになの」

三人ともずっとさっきまで攻撃をしていた。

「これじゃ、埒が明かない。近距離戦で。バルディッシュユ!」

「イエッサー」

そう言って、バルディッシュユは鎌のような形になった。

「クロノ君と、なのはは援護お願い」

「わかったなの」

「やって見よう」

そして、私はさっきから一步も動かないあの怪物に突っ込んだ。

「ふ」

そして、剣で押し返されて、弾き飛ばされて、なのは達が魔弾を撃っていた最初の所まで戻された。

その時、リンディさんが

「貴方は、何者で。なにが目的なんですか？」

しかし、その怪物は笑い始めた。

「あはははは、そうだな理由か。そんなのではない」

「ならばなんで、」

「そんなの簡単だ。俺はただ単に人を殺したいだけだ。だから今日実行に移し、たまたま、お前らがそこにいただけだ。しかしこれは当たりだな。俺はこの世界にきてお前らのような殺しがいのある奴は始めてだぜ。」

そう言った。私は立ち上がり、恐怖を覚えた。そこにいるのはただ単に殺したいだけと悪魔だと思った。

「現時点を持ちまして、私、リンディ・ハラウオンはアースラ艦長の権限を行使し目標を倒すことを許可します。」

そう言うとクロノ君は自分のデバイスを再度確認し、

「すまないが、今回は協力してくれないか。高町なのは、フェイト・テスタロッサ」

「うんなの。」

「はい」

私もそれに協力知る意思を示した。確かに観察保護の条件もあるが純粋にこのままじゃいけないと思ったから

「ふ、そろそろ飽きた。今度はこっちから行くか」

そう言うとその怪物は動き出した。

Side 恭也

俺はなんて弱いんだ。最初なのはに助けられた時に、俺はそう思った。しかし今、俺の目の前で起きている事が現実かどうかの方が頭を一杯にしていた。さっきさらあいつは動かなかった。なのはたちの攻撃をまったく効かないみたいだった。

現在俺ら、家族はプレシアさんの結界のような中にいる。

「しかし、私達はなににもできないのか」

父さんが齒がゆそうに言っている。

「はい、この件につきましては・・・」

「じゃあ、なんでなのが一!」

父さんは声を上げて言っているが

「あなた、少しは落ち着いてください。それに自分の子供が戦っているのはプレシアさん達だって一緒です。それに私達が無力なのは代わりありません」

と、母さんが父さんに湯を入れていたが、次の瞬間、事は一変した。さっきまで動かなかった。あいつがフェイトちゃんが切りについてそれを返られたとき、歩き始めた。

S i d e o u t

S i d e なのは

まったく攻撃が効かないなの、まるで貴一君とクロノ君の戦闘みたいな。一瞬で終わってしまう、そんな感じがしたなの

「ふ、そろそろ飽きた。今度はこっちから行くか」

そういうと次の瞬間消えた。

「あ、あれ。」

私は見失うなってしまうた。

「なのは、危ない!!」

そういう声が聞こえたけど、私は後ろから来る刀のような刃物の攻撃を避けるので精一杯だったけど、

「うわああああ」

お腹に、剣筋を当てられちゃった。バリアジャケットを着ていなければ……

「く、誘導弾で」

クロノ君が私の援護をしてくれている。だけど

「貴様も弱い」

そういうとさっきまで私の前にいたのにクロノ君の後ろにいて

「なんだと」

そういうと首に刃物が当たりそうになったが

「はあああああ」

フェイトちゃんが増えその隙で切ろうとしたけど。

<<ガシ>>

手で掴まれてしまった。

「そんなに先に死にたいならお前からだ。」

そういうとその刀のようなものはフェイトちゃんの首に

「だめえええええええ」

「死ね「どりやああああああ」な、なに」

<<ドガアアアアン>>

振り下ろされなかった。

そうそこにはスバルさん改め貴一君がバイクに乗っていてそれに突っ込んでいた。

S i d e o u t

十五分ぐらい前

後、もうちょいか。

「そろそろそろだな」

「はい、主。数も減ってきてますから」

そう言ってやっと休憩できると思ったが

「マイロード！！海鳴市に、視覚系結界以外に結界が発生。」

「なんだと。」

くそ、やはりもう町に居たか。早く片付けるか。

「ソル、残りの奴らは？」

「約二十体ぐらいです。これで、終わりそうです」

「そうか、ならサン。セットアップ」

「はい」

そして、また銃士に代わって

「2ndモード、一気に決めるぞ。」

「御意」

「戦慄の混沌^{カオス}」

そして、あっという間に残りを倒した。

「終わった。ソル、転送を」

「申しわけないがマイロード、結界のせいか座標がうまくできません……」

「ち、しょうがないか。まずふもとまで転送」

「マスター、どうして飛ばないんですか？」

「あのな、どんだけ俺の魔力があってもステルス張りながら、飛ぶ

なんてできるか」

「あ、そうですね・・・」

おい、こいつら俺のこと化け物のなにかに思っているんじゃないだろうな。

「まず、転送」

そして、ふもとまで降りて

「主、どうするんですか？」

「まあ、見ている。ソル変装」

「は、それで、あのスバルで？」

「ああ、それで」

「マスター、一体なにを？」

「だから見ておけ」

そして後ろに存在する俺の空間からマゼンタ色の某仮面ライダーのバイクを出した。

「昔に出しといて正解だったな」

「またですか。そのチートみたいな力で」

「まったくです。主、これじゃ私達の存在が危機です」

「うるさいぞ、その指輪達」

そういうと俺はバイクに乗り、

「マイロード、運転の経験は？」

「安心しろ、乗ったことはある」

「それってただ単に二人乗りしただけじゃ「さ、いくぞ」「って指輪の話をきけえええええ」」

そして、バイクで海鳴市に向かった。

そして、見慣れた町に入り

「ソル、どんな感じかわかるか？」

「センサーだと完全に戦闘開始してるみたいです」

「くそ、遅かったか」

そしてその結界内に入ったがその時ちょうどジョーカーが居た。ナスカになって。

だから思いつきりバイクで体当たりした。

「どりゃあああああ」

そして、ジョーカーを吹き飛ばした。そしてらななかでフェイトとクロノがボロボロでしかもフェイトは泣きそうだった。

「お、おい大丈夫か？」

そういうと、フェイトが抱きついてきて

「怖かった。怖かった」

そう言って、泣いていた。

「遅いぞ。まったく」

「うるさいぞ。管理局のくせに」

「君が化け物なんだよ」

「ふ、無駄口が叩ける内に、なのはとフェイトもプレシアさんのバリア内に」

「ああ、そうさせて貰う」

クロノもボロボロだな。まあしょうがないか。

そして、そのバリア内にいた土郎さんが

「君は一体？」

あ、そうだ。普通に道路渡るために変装しっ放しだ。

「えーと俺は「貴様あああ」っと、それは後で」

そういつとさっき吹き飛ばしたナスカがいた。

「ま、色々と言いたいけど」

そう言っつて俺はガイアメモリを取り出し、

<<サイクロン>>

<<ジョーカー>>

「変身」

<<サイクロンジョーカー!!>>

黒と緑の仮面ライダーに成った。そして、

「さあ、お前の罪を数えろ」

第三重式話。デュエルスタンバイ（後書き）

さらに今日は午後に連続アップ！！

第三十参話。これが主人公・・・チートスキル！？（前書き）

三十二話掲載です。

第三十参話。これが主人公・・・チートスキル!?

「ふん、貴様は簡単にはいかなそうだな」

「ああ、そうだろうよ。」

そう言ってさらに俺はメモリと出して

<<ヒート>>

<<メタル>>

<<ヒートメタル!!>>

「さて、終わらせますか。」

「ふ、そんな」

と、相手が言おうとした瞬間俺は殴っていた。

「が、ガハ」

「おら、どうした」

そして俺はさらになぐった。

「ぐ、き、貴様」

相手も攻めてくるがそんなものは、

「く、ならば超加速」

そして、相手は加速した。しかしそんなものが俺の目を曇らせるわけも無く

「うせる」

そしてあの鉄の槍で相手と突いた。

「ぐわっ、き、貴様なぜそんなに怒っている」

あいつはバカだなと思った。

「そんなことが分からないままだから人にやられるんだ。」

「な、貴様なんでそれを」

「お前は俺が守ろうとしたのを壊そうとした。ただそれだけだ。」

「な、な、」

<<ヒートマキシмумドライブ>>

「はああああ・・・あああああ」

“ドガアアアアアアン”

「ぐわあああああ」

そして、ナスカのメモリは壊れてしまい、人の形のジョーカーが吹

き飛んでいた。

「はあ、はあ、はあ」

俺はライダーを解除した。

「貴一大丈夫。」

「貴一君大丈夫」

なのは達が近寄ろうとしたが

「二人とも！」

リンディさんが叫んだ。そう、まだジョーカーはジョーカーになつてはいなかった。そして、ジョーカーになり二人に襲い掛かるうと

「あぶねえ！」

そういつて俺はなのは達を庇った。

“ズシャ”

そして、俺の背中が切られたが俺はそいつを蹴ってなのは達から離れた。

「く、フェイト、なのはこっちに貴一君を」

クロノが言う。その声は聞こえたが、次の瞬間蹴ったほうから声が出た。

「バカだな。バカだよな、こいつ。唯一俺に対抗できるのにこんなニンゲンを救うために庇いやがった。」

「貴一君。ねえ貴一君！！」

「貴一、貴一」

二人して俺を揺らすな。

「コレダカラカニンゲンハバカンダ」

「なんだあの姿は」

「コレガホントウノスガタダ。」

もう完全なる蟻螂のジョーカーがそこには居た。

しかし、なのは達は一步も動かなかった。

「「貴一（君）は私が守る」「」

そうやってフェイトとなのはが倒れた俺を抱き締めてジョーカーを睨んだ。

「フ、キサマラニナニガデキル。」

「ソル、治療に全バックアップだ」

「イエス・マイロード」

「え、貴一君」

俺は抱き締めていたなのは達の前に立ち

「む、無理だよ。そんな体じゃ」

フェイトが止めようとするが、俺はそれを避ける

「忘れたか、二人とも」

「「?」「」

「俺はお前らの騎士^{ナイト}なんだぞ」

そうかつこつけてデバイスたちに背中^の傷を治療させた。

「サン、お前のソルに手伝ってやれ」

「ぎよ、御意。ですが主「従え」う・・・御意」

「ムーンも魔力の流れを効率よく回復させるように」

「イエッサー。もうなにも言わないがマスター。あいつを倒せよ」

「言われなくても」

「な、貴一その体じゃ。」

「うるさい、まともな相手できなかった奴らが言っな。クロノ。ま

あ後処理は頼んだぞ」

と、冗談を言い

「さて、行くぞ」

「き、貴様。完全に切ったはず」

「甘いな。この体は半分幻覚なんですね。そんなに大怪我ってわけではないだ」

実際は嘘。確実に切られた。しかしここは踏ん張り所だしな。

「さて、今回は最初からクライマックスで行かせてもらおうよ」

そして、俺は王の財宝からディケイド（俺オリジナル）のベルトを出した。

「ベルトダト、キサマナニモノダ」

「なら、よく覚えておけ」

そう言ってベルトを装着、カードを一枚引き、差込み

<<KAMENRIDE>>

「通りすがりの仮面ライダーさー!!」

「「「「「仮面ライダー?」」」」」」

ジョーカー以外の人の反応

「ナンドトキサマ!!」

そして、襲い掛かってきたが遅い。

<<DECADE>>

俺はマゼンタ色の仮面ライダーになり、ジョーカーを蹴った。

「今回は遊んでいる暇が無いんでね」

そして、俺はさらにケータッチをだして

<<クウガ・アギト・リユーキ・ファイズ・ブレード・ヒビキ・カ
ブト・デンオウ・キバ>>

そして、俺はケータッチのすべて押して

<<FINAL KAMEN RIDE・・・ディケイド!!>>

俺はディケイドコンプリートフォームになった。

「キサマ、カメンライダーダッタノカ。ダガ、キサマモオワリダ」

「ああ、終わりだな。貴様が!!」

そして、俺はケータッチのブレイドを押しして

<<ブレイド>>

<<KAMENRIDE>>
<<キング!!>>

そして、俺の隣にブレイドが現れた。それにジョーカーは酷く反応した。

「ナ、ナゼ。オマエガ」

「言ったる。終わりだっつて」

そしてカードを引き

<<FINAL ATTACK RIDE・・・ブ・ブ・ブ・ブレイド!!>>

そして、隣に居る、ブレイドが俺と同じ行動をとり、

「食らえ、ロイヤルストレートフラッシュ斬りだ!!」

目の前にカードの壁ができ、その剣斬を×2をジョーカーはくらい

「ギヤアアアアアアアア」

そして、燃えて消えた。

完全にジョーカーを倒したのを確認して、俺は解除した。

「やったなの」「やった」

なのはとフェイトの声が聞こえた。

「よくやった。」「すごいわ」

プレシアさん達も

「ああ、助かった」「ありがとう」

なのはの家族達も

しかし、俺の体は先の戦闘とファンガイアの戦闘で疲れ果てていた。さらにやせ我慢した背中の傷が痛い……

「マスター。」

「主、早く!!」

デバイスたちが心配している。やはり、つけ焼き刃だったか。

「終わったか」

そういつと、

“バタリ”

そして、ソルの変装が解けてしまい俺は意識を手放した。

第三十参話。これが主人公・・・チートスキル！？（後書き）

「今日もやるよ。作者のあとがきラジオ。」

「今週はこんな人が来てくれました」

「なんでぼくなんです？」

「そう、今日は雄聖君が来てくれました。」

「あ、あの、その忘れている人が大半だと思っただけど」

「・・・まあそこは俺が考えたオリキャラだから」

「うん。そうだね・・・」

「ええ〜となんだか暗い空気になったため、次回」

「『終われば、終わるで・・・』・・・はあ〜」

「それでは」

「「バイバイ」」

「はあ〜~~~~~」

「今度出してやるからな・・・」

第三十四話。終われば、終わるで……（前書き）

三十四話掲載です。

最近恋姫にはまった……

第三十四話。終われば、終わるで・・・

Side なのは

貴一君が倒れた後、直ぐにうちに入れたけど・・・

今現在、プレシアさんとユーノ君が治療に当たっているけど・・・その場所が私の部屋なの・・・なんでも一番貴一君にあったベットになると私のしか無かった。それで現在廊下にフェイトちゃん、それにうちの家族全員とクロノ君にエイミィさん、リンディさんがその結果を待っているの。

“ガチャリ”

そして、ドアが開いたなの。

「お母さん。それで貴一君は？」

フェイトちゃんが聞いた。

「ええ、もう大丈夫よ。彼の背中傷は癒えたから、今は静かに眠っているから。」

「そうなんだ」

「うん。それで貴一君すごい過労だったから。それも重なったんだと思う」

「「「「「はあ」」」」」

全員で安堵の息を漏らした。そしてお父さんが

「さて、貴一君も無事だと分かったことですし今日のことをちゃんと説明してもらいます。いや、その前になのはあれは一体なんなんだ？」

「あ、いや、それは・・・」

そう思えば貴一君の危機だったから今まで普通だったけど、これは
O H A N A S H Iかな・・・

「それは私が説明します。」

と、リンディさんが言い

「そうですか。それならうちの店で話しましょう。さすがにここでは」

「ええ、そうですね。」

移動したら、席に着くように言われたなの。それで席の順番が、お母さん・お父さん・おにいちゃん・お姉ちゃん。それに向かい追う感じで、私・フェイトちゃん・プレシアさん・リンディさん・クロノ君・エイミィさんと座りました。

「それで、あの戦闘中にプレシアさんが言っていた魔法使いと言うのは」

「はい、まず信じられないでしょうから。まずこちらを、ユーノ君、

アルフちゃん普通に戻っていいわよ」

そして、ユーノ君とアルフさんは人の形になった。

「え、ユーノ君男の子だったの」

「あ、はい／＼」

「これはこれは」

お父さんは関心し、お母さんは

「あらあら」

お兄ちゃんは

「・・・」

無言だったなの

そして、私達は今までのことを話し始めた。

Side out

「く、ここは？」

あの後、倒れてしまったが・・・ここは誰かの部屋か？

「ソル、倒れてから何時間たった。」

「お目覚めですか。良かったです。今、六時ぐらいですので、大体三時間ぐらいは寝ていたかと」

首から下げているペンダントが教えてくれたが・・・

「おい、指輪達は？」

「は、なんでも高町家に魔法のことを教えるため、リンディさんが持っていました。」

「おいおい、勝手に人のデバイスを」

「私も言ったのですか「安心して、サンとは古き良き友だから」と、言われてしまいましたので」

「ああ、そう思えば、母さんと同期だった。」

さて、まずはみんな何処にいるんだろう？

「なあ、ソル。ここは何処だ？」

「はい。確か、なのは殿の部屋ですね」

「あっそ」

そう言つと、ベットからでて俺は階段から下におりて、翠屋に居るだろうと思ひ、行つたら案の定いました。

「はあ〜けど驚きだな〜なのは魔法少女なんて」

美由希さんがそんなことを言っている。てことは話したんだろうな、まあさすがに巻き込んでしまっただけならいいのは家族となると記憶操作もやりづらいたろう。

「そうよね、しかも逸材だなって」

桃子さん、自分の子なんですから。

「そっだよ〜。」

いや、美由希さんも・・・

「そう思えばなのはあのバイクに乗ってきた男って貴一君なのか？」

「うんあれは」そうですよ。恭也さん「あ、貴一君起きたの」

そう言ってなのはと、フェイトが抱きついてきた。

「お、おい二人とも・・・」

「マイロードはまだ傷が完全に癒えてませんので」

「あ、ごめんなさい。」「ごめんなの」

と、二人とも残念そうに離れた。しかし二人とも妙に近すぎないか。そしてその高町親子の殺気が怖い

「は、は、は」

「貴一君、今ね、高町さんちに魔法について」あと、今までのこと
でしょ」「え、ええ」

リンディさんがなんで分かったのみたいな顔をしている。

「それで、サン、ムーンどこだ？」

「主、こちらです」「ここですよ。マスター」

そういう声がテーブルから聞こえた。

「まったく俺のデバイスなのに簡単に離れるなよ」

「いやいや、ソルが居ますし」

「それに・・・」

「おい、ムーン、サン何をはなした？」

「あ、いえ、マスター、別に・・・」

「ふふ、別にただ、魔法についてやデバイスについてとか管理局が
どういう物か、それから土郎さんたちの質問でどうして貴一君はあ
んなに強いのかをかれこれ三十分話していただけよね。サン」

「な、リンディ。それは」

「ほう、お前ら人が寝てる間に・・・」

「すみません。質問です」

と、美由希さんが手を挙げた。

「はいどうぞ。美由希さん」

プレシさん。司会進行はあなたでしたか。

「疑問なんですけど、なんで貴一君のデバイスだけ、それはすごく人間っぽいんですか。なのはとかフェイトちゃんのと全然ちがう。」

「説明しましょう」

プレシアさん貴方はどこぞのナデシコクルーですか。

「簡単に言いますと年季の差ですね。より多く使えば使うほどデバイスとは共に成長しますから」

「そうね。サンもムーンも元は勇士君や、リリ、貴一君の親のだから」

「へえ、そうなんだ。」

「はい」

今度は士郎さんだ

「はいどうぞ」

「今までの説明は理解しましたが、貴一君のようにデバイスをいっぱい持つんですか？」

「いえ、これはどちらかと言うと特殊ですね。普通は一人一つですから」

「はい」

桃子さんですかっけか何時までやる気だ？

「貴一君、貴方そう思えばバイクに乗って突っ込んできたけど実際はもしかして「真正正銘の九才です」あら、そう」

「そうそう、貴一君その時全然違かったよね。あれも魔法？」

「ええ、変装の魔法です」

そう言うとプレシアさんが

「ええ、この姿はあのさっきお話した事件の時のスバルと言う人ですから」

「え、プレシアさん。話したんですか」

「ええ、ここまで着たらちゃんと説明したわ、だけど皆さん「それぐらいの親の方がいい」って言うてくれましたから」

「ああ、そうですか」

ここに、海鳴市の親ばかり同盟が出来たみたいだ。

「ねえ貴一君その大人の姿になってみてよ」

美由希さんが言うので

「ソル、変装」

「は」

そして、自分の十八ぐらいの設定の姿に変わった。

「ま、魔法ってすごい」

「けど、やっぱり・・・」

「貴一君の姿のほうが・・・」

「ほらほら、姫様方が元の姿に戻ってだって」

言うままに元の姿に戻ったが姫様・・・いや、エイミーさん。なぜそれを・・・あ、

「もしかして・・・」

「「ばっちしその時なにを言っていたことまで言いました。」」

「このバカデバイスども・・・こらあああああ」

「え、けど／＼／」

「かつこよかったよ／＼／」

と、言われた二人は赤くなっている。

「」「」「あらあら」「」

三人のお母さん方は俺の方を向いて微笑んでいた。

「はぁーそれで今回のことはどうするんですか管理局員さん？」

と、リンディさんに聞いたら

「え、今回は皆さん黙っていてもらうことにしました」

「な、艦長!!」

クロノはびっくり、エイミーさんは紅茶を飲んでいるだけ

「なんですか、クロノ執務官？」

「そう見ても、今回は事件でしたよ。それにその貴一はロストロギアくさい物を持っていますし」

そういつて俺を指差して言う。

「あら、まさか命の恩人でもある貴一君を捕まえるのですかクロノ執務官」

「で、ですが艦長。この件はプレシアさんが我々に報告してくれたからなんとかあったのは事実です。」

「あら、私は貴一君にこれを聞いたんだけど」

「確かにそうですが、それを貴一は黙っていてくれと、」そのことについては謝罪しよう「え……」

そして俺はみんなの前に行き

「今回の件については自分だけで何とかしようとした。これは俺の愚考だ。申し訳なかった」

「そうね、確かにそうだと思うわ。だけど」

そう、リンディさんが言って、

「今までどこに居たのかしら？」

「そうね。それにあの酷い過労もなにかしら？」

いや、あのうプレシアさんまでなにを

「貴一君、これは負けだよ」

「いや、まてユーノ。それは」

「僕も治療に当たったんだけど、貴一君の過労は酷すぎだ。しかも肉体的ではなく精神的だったから」

「あ、いや、べ、別に・・・」

「はあ。主が言わないのなら私が言いますよ」

「そうね、サン。一体この土日はどんな感じだったの？」

「艦長、今はそんなの」

「黙っていないさい。クロノ執務官。貴方は少し外側だけしか事柄をとらない癖がありますね」

「あ、」

なんだか蛇に睨まれた蛙みたいになっているなクロノ

「ねえ、クロノだいたい貴一君がどう言う人かはさきの事件でわかっているでしょ。それに今回の件だって、なんか考えてやったて、どうして思えないのかしら?」

エイミィさんもそこまで言わなくても・・・

「コホン、それでは」

「ああ、いい。ここまで言われたら自分で言うから」

第三十四話。終われば、終わるで……。(後書き)

今回もゲストがないため予告だけ次回

『最近では料理の出来る男の子がもてる!!』

それではバイバイ

第参拾五話。最近は料理の出来る男の子がもてる！！（前書き）

三十五話掲載です

第参拾五話。最近は料理の出来る男の子がもてる！！

「ま、こんな感じですよ。」

そして、俺は今回の事件についてどんな行動を取っていたか話した。

「ま、まてそれじゃ君はあいつみたいなのを、」

「ああ、二百体は相手し」「二百三十二体です。マイロード」だとさ

「あ、あ、」

クロノはポカーンとしていた。

「また貴方そんな無茶を」

プレシアさんなんか呆れていた。

「けど、マスター。楽しんでいましたよ」

そんなことはない・・・たぶん

「それでクロノ君。私達は確かにそちらの法律は知らないが、これだけを聞いていると、貴一君はどちらかと言うと功労者じゃないか？」

士郎さんがいい、恭也さんは頷いていた。

「しかし、「そうだ。クロノ、俺は一步間違えれば民間人を危険に

晒した。「・・・」

クロノは黙ってしまった。・・・どうしたんだ？

「はあく、負けです。負けです。今回の件は管理局が力が無く民間人を助けられなかったのが原因の一つですから。今回は内緒でいいです。」

なんか、クロノが自暴自棄に入ったな。

「それではこのお話はお終い。さあ、ご飯にしましょう。今日は皆さん食べていてくださいね。」

桃子さんが最後に閉めて、説明会から夕食会に変わった。

そして、なぜか俺はキッチンに居た。

「なんで？」

「サンちゃんに聞いたのよ。貴一君は料理がうまいって」

「あいつ、後で覚えておけ」

てか桃子さん、ここはあなたの持ち場でしょ

「と、いうわけで何が作れるのかな？」

「材料しだいです」

「ほうほう、そうですか。ならこれなんかあるんだけど。」

「面白そうですね。それじゃ、合作といきますか」

そう言っつて、今日の夕食を桃子さんと作り始めた。

Side なのは

「フエイトちゃん、貴一君の料理どんなんごろうね」

「そうだね」

「だけど・・・」

リンディさんは顔が引きつっていました。

「どうしたんですか、リンディさん？」

「いや、貴一君のお母さんのリリつて料理を壊滅的に不味くする天才だったから・・・」

「あ、それなら心配いりませんよリンディ」

「え、なんで？」

「だって主の料理を教えたのはギル殿でしたから」

「あ、そうなの。ホ」

なんだか、本当にサンってデバイスじゃないみたい。

「ね、それでムーンさんよ。貴一君って休日の家ではどうなの。聞く前に来ちゃったから聞いてないんだけど」

お姉ちゃんが聞いていた。

「大体は鍛錬ですね。それと自分の趣味に当てているぐらいですね。」

「あはは、それじゃ、子供というより一人暮らししている大学生みたい」

「え、貴一の趣味って」

フェイトちゃんが興味津々みたい。実は私もだけど・・・

「おい、フェイトさすがにそれは不味いだろ。本人に聞けばいいだろ。」

と、アルフさんが言っていた。ちなみに魔法を説明した時に人間の状態になったためそのまま居る。

「あ、そうだね。」

「それで、なのはとフェイトは何時貴一君を好きになったの？」

「「ふ、つふえ」「

なんで、エイミィさんそんなことを・・・確かに貴一君はかっこいいし、優しいし、

「フェイトは一目惚れだと思っよ」

「な、あ、アルフウウウウウー!!」

「あらあら、そうなんだ。なんで好きになったの？」

「え、え、そんなの・・・／＼／＼／＼」

“プシュー”

「あらあら、お熱みたいね。それじゃなのはちゃんを？」

だ、だからえ、エイミーさん、それは

「あう、あう」

「あれ、父さんが怒らない」

お姉ちゃんがお父さんの方を向いて言っていたが、

「な、なに。もしだぞ。もし、なのはに似合う奴がいるとしたら・・・
・貴一君ぐらいだろうさ・・・」

え、え・・・

「だってさ。なのは、とうとうお父さんの許可も下りたし」

「ふえ、ふえ」

もうなにがなんだか

“プシュー”

「あ、いじり過ぎちゃった」

「まったく、二人ともダメじゃないですか」

「ごめんなさい。艦長」「ごめんなさい。リンディさん」

side out

はあ、さてそろそろ出来上がりか。

「桃子さん、出来上がりました」

「ねえ、貴一君、うちで働かない？給料弾むわよ。」

「いいです」

「あら、残念。それじゃ持って行って」

「うーい」

そして、俺は今回の料理を持っていった。

「ん、フェイト。いい匂いがする」

さすが、犬のアルフだな。

「それじゃ、出来たみたいね」

「ええ、出来ましたよ」

そして、俺も会話に混ざった。

「「あ、貴一（君）・・・／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「あ、どうした二人して」

「ねえ、サン。これは勇士君譲り？（コソコソ）」

「はい、ここまで完全に似てしまいました。（コソコソ）」

「さらに悪質です。（コソコソ）」

なんか、俺、悪口を言われている気が・・・

「な、これは・・・」

「嘘・・・」

みんなの前にあるのはアサリをベースにしたスパゲッティがあった。

「ねえこれを作ったの貴一君？」

美由希さんが聞いてきた。

「ええ、桃子さんと一緒に作りましたよ」

「そうですね、口に合って良かったです」

「いや、貴一君これはおいしい」

恭也さんも満足そうだ。

「ふふ、みんな満足そうね、だけどこれだけじゃなにのよ。この料理」

「え、なんかあるんですか」

「ユーノ君、これね実はね私が材料を指定したのよ」

「「「「・・・？」」「」」

ユーノ君以外の男性陣はわからなかったようだ

「？」

アルフもかよ・・・

「これを限定のなかで・・・」

「これじゃ、軽くリリを超えているじゃない」

「「「すじ〜い」」

「まあまあ、みんな食べましょう」

そして、みんなが食べている時。

「ねえ、貴一って休日ってなにしてるの？」

と、フェイトが聞いてきた。

「うーん、大体鍛錬かな」

「それと趣味ですね、マイロード」

「ああ、そうだな」

「ね、趣味ってなに？」

なのはが聞いてきたって顔近！！

「あ、そうだな。なんだろ・・・」

「マスターはギターをしているんです」

「お、おいそれはやっているというよりも」

ただ、いろいろなチートがあるなって思った時に弾けるかなと思いやったら案の定できて最近のブームだが・・・

「え、貴一君ギター出来るんだ」

「え、ぎたーってなに？」

ま、フェイトは知らんだろうな

「ま、楽器だよ」

そして、食の進みみんな食べ終わりそうになった時。

「あ、そうだ。土郎さん、この前に言っていた特訓の件ですが」

「ああ、そうだったね。どこでやるんだね？」

「ええ、魔法もばれちゃいましたから、今週の日曜に家に来てください。」

「家にかい？」

「ええ、」

「ね、それって私も行っていい」

なのはが聞いてきた。

「なんでだ？」

「今回ね、結局貴一君頼みだったなの。けどね私も自分で守ってみたいなの」

「うん。ねえ貴一。私達もダメ？」

「いや、別に構わんが俺のは厳しいぞ」

フェイトとなのはは同時に頷き

「「よろしく願います」「」

「その前に美由希さん、こんな遅いですが、手合わせお願いできますか？」

俺はそう言った。

「え、別に良いけど」

「それじゃ、行きますか」

そして、俺は道場に行った。なぜか全員付いてきた。

「なぜ、全員ここに？」

「ま、いいんじゃない。」

そして、二人は距離を置き

「あれ、貴一君はなにか使わないの？」

「相手がなにも持っていないから」

「余裕ってことね」

そして、土郎さんが間に入り

「それでは……始め!!」

Side リンディ

「ねえ、サン。貴一君ってそんなに強いの」

「あらあら、内の主は何も着けてない時でも、管理局のAAランクは軽く倒しますよ」

「う、嘘だろ」

クロノは驚愕

「そうなのね」

「それに今回の勝負はただ単に実力を測るためとそして、暴れたいだけでしょうから」

「え？」

「リンディ殿、マイロードはよく寝る前に特訓するので、たぶん動きたいのでしょう」

「あはは」

そして、士郎さんが間に入り

「それでは……始め!!」

そう言って始まった

Side out

始まり三分、

「はっ、せいっ、はああああ」

へえ〜攻撃の筋なら恭也さん以上かし、

「無音拳」

“シユン”

「へ、」

“ドゴオオオオン”

そして、美由希さんは道場の端に吹き飛んだ。

「勝負あり。貴一君さっきのも魔法かい？」

「いえ、彼から魔法反応はなかったは」

「な、プレシアさん。」

「やはり関係はなしか、貴一君一体どうやったら九才でここまで」

「それはマスターの努力のおかげでしょう」

「どうだろうな。しかし美由希さん・・・吹き飛ばしちゃたんです
が・・・」

「ああ、それは恭也に頼んどいた。ほら今回収めている」

そして、今回の事件そして、高町家に魔法があると大暴露会は幕を閉じた。

第参拾五話。最近は料理の出来る男の子がもてる！！（後書き）

次回、『朝の刻』

最近、ラジオのねたが・・・ないorz

第参〇六輪。朝の刻（前書き）

三十六話掲載です。

第参〇六輪。朝の刻

昨日のいろんな暴露会の後、俺は「フェイトちゃんも泊まるなら貴一君の泊まっついていきなよ」と、いう美由希さんの一言で、俺はなのはとフェイトに確保され、結局泊まりました。

その、朝。さすがに一応で、無理やりだったが泊めてもらった身なのでさすがに寝坊もできず朝早く起きた。ちなみに場所は道場である。本当は土蔵ってどこの土郎君だつて突っ込んでないで、そこで寝ていた。だつて最初、なのはの部屋でしかもフェイトもプラスなんて俺のり、理性が・・・ってことがあったため俺はどうか士郎さんと恭也さんを味方に付けて振り切った。

「マスター、大丈夫か？」

「そうですね。主、一応ですが回復しましたが。」

「完全には回復していませんので。マイロード、ですが今日は朝が早いようで。」

そんなことをデバイス達が言っている。

「いや、なんでお前ら起きているんだよ。ソルは昨日はずっと回復魔術をかけてもらっていたから分かるんだが、なんで指輪　ズまで？」

「いや、指輪　ズってマイロード・・・」

「あ、簡単だろこの呼び方。」

そしたら、両手に嵌めてある指輪が

「それは」

「もちろん」

ん？。こいつらがもちろんだと・・・

「^{マスター}主がなのはちゃん達を襲わないかって警戒」「こらあああああ
しようと思ったら・・・」

「お前ら、これは少し、性格を改竄したほうがいいかな？」

「「え、それは・・・それハ・・・ソレハ・・・」

「マイロード。その、あの、言いにくいのですが・・・」

俺が本気でこの親譲りの破天荒デバイスにお灸をしようかと思った
時に、ソルが中断させた。

「あ、どうしたソル。こいつらにお仕置きを」

「そのですね。布団の中に」

布団の中だ？・・・なんもないじゃ・・・なんだ一瞬、暖かい何か
が俺の両足に・・・てか普通に抱きついてきた。

「ZZZZ」

「スウー スウー スウー」

「……」

なんでか知らないけど、なのはとフェイトが居ました。

「そのマイロード、一番最初に言おうと思ったのですが……」

「だからさっき」

「いったじゃないですか」

「「と、思ったんですがって」」

ああ、この指輪が笑っていやがる。そして、ソルよ。もう少し早くても

「まあいいこのまま誰に会わずにどうにかここから出れば」

「それは無理ですよ主」

「あ、なんでだよ？」

「だってそこに美由希さん、居ますから」

は、今なんて言いやがったこの白い指輪……居る。だれが……
美由希さんがだって

そして俺はおそろおそろ顔を上げるとそこには素晴らしい笑顔の美由希さんがいた。

「思ったたら、」

「俺が居たと」

「まあね、だけど貴一君も早いね起きるの」

「ええ、まあ朝食作ったりしていると」

「あ、そう思えば一人暮らしだったね」

「ええ、まあ悪くも有り良くでも有る、こいつらが居ますがね」

そしてデバイスを前に出した。

「あ、そうだおはよう。みんな」

「「「おはようございます」」」

全員が挨拶をした。

「それで、そろそろ六時半なんですけど・・・」

そう俺が言うと

「そうね。なのは達はまだ寝かせておいていいかな。昨日は私なんかよりも活躍していたし」

「それを言ったら主は永眠ものですね」

「おい、その指輪、縁起の悪いこと言っているんじゃない」

「はは、それじゃ。貴一君の内に来て。どうぞお母さんしか起きてないだろうから」

「あ、はい。」

そして俺はなのは邸のリビングに向かった。

「おはよう、母さん」

「おはようございます。桃子さん」

そういって、もうキッチンで朝の準備をしている。桃子さんがいた。

「あら、おはよう。二人とも」

そう言って、朝の準備に戻ると思ったら、

「あ、そつだ貴一君」

「はい？」

桃子さんに呼び止められて、

「11の色男」

そう言って、キッチンに戻りました。

「あはは、あははははは……はあ〜」

なんだろう、無性に疲れる。

「マイロード、」愁傷様です」

「ああ、本当、お前しか味方がいないよ」

「ねえ、貴一君。そう思えば前に一回、兄さんをボコボコにしたけどあれって」

「あれは魔法ではありませんよ美由希殿。マイロードの素の力ですから」

「ええええええええええ、あんな技人間業じゃないよ」

「あはは、それは・・・」

「主の鍛錬は普通のととは訳が違いますし。それに相手は普通にやつても五人以上が当たり前。そんなことを毎日やっていればなんなこととは・・・主ならば可能です」

「なんで、そこでためたんだよ。」

「へえ〜。けどその鍛錬に今度私達も同伴していいんだよね」

「ええ、それは士郎さんからのお願いですし。」

「そんな話をしていたら、桃子さんが話しに入ってきた。」

「そうそう、それなんだけど、私達もいいかしら?」

「え、桃子さん達もですか?」

「ええ」

「ああ、構いませんよ。」

「あら、ありがとう。」

そして、俺は朝のニュースを見て暇を潰した。

そして、朝食が出来たところに、土郎さんや恭也さんも起きてきた。

「お、はやいな貴一君」

「おはよう、貴一君」

「はい。おはよう御座います」

そう挨拶をしたら、駆け足して来る音がして。

「お母さん（桃子さん）貴一君がいないよ！！」

そんな大きい声でそんなこと言わないでくれ、てか貴方の差し金でしたか桃子さん

「あら、そこにいるじゃない」

「あれ・・・あ！！」

二人してシンクロするな。

「おはよう。なのは、フエイト」

「うん、おはようなの」

「おはよう貴一」

そして、全員集合したところで朝食となった。

「しかし、貴一君の特訓してもしかしてドラゴンとかじゃないだろうな」

士郎さんが冗談めかしにいつている

「なに、言つかと思えば貴方たつら」

いや、桃子さん笑わないで

「戦いますよ。マイロード、しかもたまに二体一気にとか」

ああ、言ってしまったよ、ある意味お前が一番の敵だったかソルよ

.....

「貴一君、まさか・・・」

「安心してください。そんなことさせませんし、それにあれは・・・」

「周りに人なんか居たら、主が本気出してやらないと」

「いや、普通、龍種って本気じゃないと勝てないでしょ」

ユーノお前も敵か。昨日ばれてから人間状態だが、

「あ、やっぱりドラゴンとかいるんだ」

美由希さんがユーノに聞いていた。

「はい、そうですね。確かにいるんですが、僕としては会いたくないですね。」

ユーノが恐怖で震えていた。こいつ何回かあっているのか？

「しかし、そんなことを鍛錬にいれているのか貴一君？」

「土郎さん、俺が好きでしているわけじゃないんですけどね・・・」

「ですがマスターは結局倒しますから、その言い訳はどうでしょう。」

「うるさいぞ、ムーン」

そして、朝食が終わり、美由希さんや恭也さんは学校に行って俺らのいつもの場所に向かった。

第参〇六輪。朝の刻（後書き）

さいきん夏ばて気味です。次回『嫌な予感』

第三十七話。嫌な予感（前書き）

今日は弐話連続投稿です。

三十七話掲載

第三十七話。嫌な予感

集合場所に到着後、すぐに車が来た。今日は鮫島さんらしい。

「ジーーーーー」

「ジーーーーー」

アリサとすずかがずっとなのは達を見ていた。

「どうしたんだ？」

俺は聞いてみた。そしたら

「え、なんだか今日、なのはとフェイトの機嫌が物凄くいいんだけど、知らない？」

「あ、そうか？」

そんなにいつもと変わらないと思うのだが。

「あんたに聞いてもしょうがなかった。すずか、分かるわよね？」

「うんうん、さて、なのはちゃん、なにかあったの？」

「え、別に」

いや、なのはさんそんな笑顔で言っても説得力が皆無です。

「フェイトは？」

「え、え、わ、私は・・・べつ別にだよアリサ」

これもこれでわかりやすいなあ。てか何でだ？

「そう、そうならば、貴一！..！」

「は、はい」

いきなり呼ぶからびっくりした。

「なんだ、アリサ。それから車内で叫ぶな、びっくりする」

「あ、それはごめんじゃなかった。昨日、なにしていた？」

「は、昨日」

昨日といえば、高町家に魔法の説明してってこれはアリサたちには
言えないし、と成ると

「夕食をなのは家で食べたぐらいか」

と、俺が言ったら今度はアリサとすずかだけでこそこそ話し始めて
いた。他二人はなぜかのほほんとして笑っていた・・・どうした
んだ？

「これかな(コン)」

「いえ、たぶんちがうわね。まあ、これに呼んでくれなかったのは

癢だけどね。すずか(コソ)(

「うんうん、呼んでくれればよかたのに。だけど他の理由って?」
「コソ」

「ちょっと試してみるわ(コソ)(

「ねえ、なのは

「うん、なにアリサちゃん(ニコ)(

「昨日はどこで寝たのかしら?」

「え、それは・・・ソソソソソ」

あーあ、俺は死んだな。

「良いわ。もうそしたらフェイトも一緒かしら?」

「え、え・・・うん／／／」

「ねえ、アリサちゃん一応聞いてみる?」

なんですか、すずかさんその目は。俺はなんにもなにも・・・

「ね、貴一。昨日は、だ・れ・と、寝たのかしら」

いや、待てなんだその言い方は

「一人で寝たぞ」

うん、俺は間違っていない。だって本当に最初は一人で寝ていたもん。

「ね、貴一君ここで楽になりなよ。」

いや、なんだすずかその言い方は、

「いや、確かに泊めてはもらったが……っあ」

「そう、泊めてもらったの。なのはの家に」

「ふーんそうなんだ貴一君。」

いや、あれもこれも俺のせいじゃないのに、なんで二人ともジト目助けを求めて運転席のバックミラー越しに鮫島さんをみたが……
臥床されていた。

「ね、貴一。たしか今週の水曜休みよね」

・
なんだがアリサの声が怖い……たしかに釘宮ボイスは怖いけど……

「その日なんだけど、私ね家で一人になっちゃうから、すずかの家に泊めてもらうんだけどそれにあんたは来るの。返事は、はいか、イエスだから」

いや、まてそれは両方とも同じ意味ってすずかキバが見えています。
そんな時天使が来たように思われた。

「え、え、だめ」「だめなの」

フェイトとなのはが俺の両腕にホールド・・・なんにも当たってない当たってない。

「フェイトちゃんそれはずるいよ。これは公平に言ってるんだよ」
うわ、さすがが今一番怖いかも。

「てか、なんでそんなにお前ら争っているんだ？」

俺がそんなことを言ったら全員して

「「「「はあ」「」「」

え、え、なんでため息。いや、鮫島さんなんですかそのヤレヤレって顔は

「は、もう良いわ。なのはもフェイトもさすがの家にお泊りね」

「うんなの」「やった」

「えっと、俺は」

「「「「うん、なにかある？」「」「」

「な、なんにもないです」

俺はまだまだ修行が足りないのかな・・・

そういうことがあり今日も学校が始まった。
なのは達と別れた後に雄聖のところに行った。

「よ、おはようさん」

「ああ、今日も警護ご苦労」

「は、よくいいよお前が付けたくせに」

「だいぶ風当たりはないでしょ」

「ああ、そうだな。まあ朝はしょうがないか」

そんなことを朝話していたら、急になのは達のクラスの連中が駆け
てきた。

「なんなんだ？」

「さあ？」

なんか、いつも俺を睨んでいたり、羨ましそうに見ている連中がど
んどん教室を出てったな。

「あれ、星川君、ここにいていいの？」

不意に同じクラスの子に話かけられた。

「なにが？」

「え、なんでも今、隣の隣のクラスのテストタロツサさんに告白して行った子がいるらしいって」

「はあ〜。」

それで、みたいな顔をしたら。

「気にしないんだ。」

「まあな。」

そういうと「そっか」と、言ってその女の子は廊下に行ってしまった。

「よく女の子と話せるね」

「おい、雄聖、お前が話さなすぎなだけだ。」

「あはは。ま、そうかもねってなんか足音がこっちに聞こえてこない?」

「どうせ、戻ってくる奴らじゃないのか」

そして俺のクラスの扉が思いっきり開いて、そしたら結構な体系の男子がこう言った。

「星川貴一って奴はどいつだ!」

なんだろう。すごく嫌な予感・・・

第三十七話。嫌な予感（後書き）

二時ごろに追加しますので。

それではバイバイ

第三拾八話。 やっぱうちの主人公は厨二だww(前書き)

三十八話掲載

第三拾八話 やっぱうちの主人公は厨二だww

今、俺は何故か、体育館に居ます。それに周りにはたぶん同じ学年の生徒が全員いると思うが、先生早くたすけてえええ。

ことは数分前、予鈴になる、十五分前のこと

「星川貴一って奴はどこのだいつだ!!」

と、いう声がしたんで

「俺、だけど」

そういうと、

「ああ、やっぱり星川ってすごいよほんと」

なんか雄聖は呆れているが

「あ、なんだお前がそうか。」

そう言っつて俺に近づいてきた。ちなみに廊下には野次馬がいっぱいだった。

「実はさ、さっき俺はテストロッサさんに告白をしたんだ」

「はー」

あ、こいつがしたんだ。俺はそんなことを考えていたんだがなんで

俺のところには？

「そしたらな、あのバニングス嬢に、「内の騎士に勝ってから言いなさいよ」っと門前払いをされてな、だから俺はお前に勝負を申し込む」

なんだこの熱血キャラは、原作にはいなかったよな。

「いや、別に俺は勝負したくないんだが・・・」

「そうだろう。そうだろう、お前のように弱そうな奴があつた麗しの四姉妹の騎士と言っただけでも笑いだ。それなら俺の方がよっぽどいい男だ！！」

なんか癪だがこういうのはこう言って置いとくのがいいだろう。

「ああ、本当になんで俺なんだろうと思うよ」

そういつってどうにか争わない方向に持って行こうとしたんだが

「だが、それならば尚更お前を倒して今度こそテストアロツサさんに告白をするんだ。だから今から体育館に來い。」

と、言って先に行ったようだ。

そして、今に至るわけだが・・・

「おい、アリサなんてことしてくれただ」

と、そいつが行ってから来た、四人に質問中

「ご、ごねん。だってなんかあいつって嫌なんだもん」

「そんな理由か？」

「フェイトだって嫌だもんね？」

「え、あ、うんうん」

なぜこつちを見た。

「ねえ、いい加減始めない。俺さこれでも、合気道つてもものやつてるからさ。あ、大丈夫大丈夫君には手加減してあげるから」

そんなこと言っただけで愉快に笑っていた。なんかどこぞのワカメみたいそういつて一応立ち居地についた。

「なんかさ。お前つてすごく地味だね。顔とかさ、オーラ。そう俺と全然オーラが違うね、お前のは本当に薄いよ。まったくなんで君があの子達と一緒にいるのかわからないよ」

と、言った瞬間、四人全員がその男子を叩いた。

最初はアリサが顔面、次にすずかが右、さらになのはが左、そしてフェイトがラスト。それを食らった男子は顔を真っ赤にして怒り出した。

「な、なんだねお前らは。俺に手を挙げるなんて女の癖に」

そういつて一番近くに居たすずかを殴ろうとしたが

“ガシ”

さすがにそんなことは俺がさせなかった。

「っち、なんだい邪魔するのかい。やっぱり、いいや。さっきの告白なんて無し無し。やっぱこんな男と連るんでいる女の女か」

なんだと・・・

「おい。」

俺は自分のことはどうでも良かった。しかしこれは答えたぜ！！

「な、なんだよ。俺とやるってのかい。だから別にいいって」

「ああ、お望み通りやってやるよ」

そういつと相手は俺の顔を見てなぜか強張っていた。

「な、お、お前がこんな大勢のところでは負けるような所を見せないための俺の「うるせいな」っち、しょうがないな。やっぱこんな女達を守るみたいな奴はこんなのか」

そういつてその男子は構えたが素人当然だった。

「ほらそれじゃあいくよ」

そういつと男子は蹴ってきたがそんなのは軽く流した。

「な、偶然にも避けたか。」

そして今度は殴ってきたがそれは俺が静止させた。見るからに勝敗は決していた。

Side ギャラリー

「なんか、今の貴一君怖い」

「そうだね、さすが。ってなんでフェイトたちは普通なのよ」

「え、普通じゃないよ」

「けどなんでいきなり戦い出したんだろっね？」

「あ、やってるやってるってこれじゃ本当に貴一の相手は見世物だな」

「あれ、あんたよく貴一と話しているやつじゃない」

「げ、バニングス嬢」

「ね。あんた貴一って強いの？」

そんなことは知らないが……. . . だけど一番最初にあつたときは普通に大人を投げていたしな。

「なんかあの時みたいだね（ボソ）」

「そうだねなのは（ボソ）」

そっちの二人の方が知っていそうだけど

「な、なんだよ。さっきから攻撃しないで、このチキン」

あ、なんか挑発し始めているよ。つかあいつ自分が今どんだけ酷い目で見られているのかわかっているんだろうな

「は、やっぱチキンか。そんなのを慕う奴らもチク」ああ、てめえ、フェイトたちがなんだって？」

そう言うと、さっきまでざわついていたギャラリーが一斉に黙った。それはそうか。俺も貴一とは良くしゃべるほうだがあんな怖い貴一は見たことが無い。しかし、そんなのを余所にそいつは言った。

「だからさ、お前みたいのと釣るんでいるのは腐っているんだよ」

「はあ」

そういと貴一は黙った。

「は、なにやっぱ俺にブルったのか？」

「お前は二つミスを犯した」

そういと貴一はいきなりいい始めた。

「は、なにいつてんのお前」

声はそう言っているがあれは完全に星川にビビっている態度だった。

「一つ、別に俺のことをどうのこうの言うのは構わないが俺の友達（大切な奴ら）のことをいうのは糞に障った。」

「は、だからさ」そして二つ目

そういつと星川はそいつの前にたち

「お前さっき、すずかを普通に殴ろうとしたことだ」

そう言つて貴一の反撃が始まった。

Side out

最初は右にストレート。

「な、い、痛い」

そんな声が相手から聞こえたが、

「なあ、ここは仲良くいこつじゃないか」

そんなことを言い出した。

「あ、それ無理」

「は、なんでだよ。べ、別にいいじゃないか。ほ、ほらさっきの言葉のあやだつて。」

そういうが俺はそいつの前に向かう、そいつはどんどん後ろに下がっていった。そして野次馬の所まで行ってしまった。

「な、なんだよ。お前らその目は」

なんかいつの間にか野次馬すら敵にしていたらしいなあいつ。

「安心しろ、さっきのはすずかを殴ろうとしたことについてだ。」

「な、ならもう終わりでいいじゃないか」

「なにいつてんだ。お前、軽い気持ちフェイトに告白、っは！道化だな。さらに俺が大切に思っている奴らを腐っているとぬかした罪は……」

そういうとなぜか静寂になったが気にせずに行った。

「万死に値する」

そう言って、そいつをさらに一発殴った。しかし運がよくあいつは立ち上がり

「へ、これを先生に言ってやる」

そういうと職員室のある方向に走りだしそうになったが、なんとそ

ここには校長先生が居ました。

「なにをしていたのか、そしてなぜそうなったのかわ見ていましたし、聞いてました」

そしてその男子は校長の傍にいき俺を指差して

「あ、あいつにやられたんです」

「そうですか。それでは」

と、言つて去つて行つた。

「なんだよ、マ、ママに言つてやる。」

と、言い残して逃げていった。あゝあ、明日には退学かな。

「おいおい、貴一。」

「あ、てかお前のいたのか」

「まあね、しかし君は結構大胆なんだね」

「はい？」

そついうと雄聖の指差す方向を見たら「にやははは／＼／＼／＼」
大切な・・・ボツ」「べ、別にそんなふうに思つてもらわなくても
／＼／＼／＼」「貴一君の大切な・・・ボツ」なんだかすごい桃色の
空間がそこにはあった。

第三拾八話。やっぱりうちの主人公は厨二だww(後書き)

今日はやるぞ

「貴一と作者のあとがきラジオ」

「いや〜久しぶりだね」

「そうか?」

「君は森に行っていたからな」

「ああ、そう思えばそうだったな」

「それでは今回のお便りは」

「は、いつの間にそんなのが・・・」

「この前のゲストのときからです」

「いつよそれ」

「まあ気にせず、まずはこれ」

ちなみに、仮面ライダーのベルトって他にもあるんですか？

「だってよ」

「あるよ、だけど俺のディケイドのベルトでだいたい出来ちゃうから、もし使ったしたら演出でつかうかな」

「それでは今日はここまで」

「次回『いいな、こづいづの』ってなんだよこの題名は……」

「ま、気にしたら負けだから」

「バイバイ」

第三拾九話 いいな、こついのの(前書き)

三十九話掲載。

熱い・・・

第三拾九話。いいな、こつこつ

結局その後、何も無かったように授業を受けて、いつもの通り屋上に行った。

「こりゃ、退学かな」

なんて独り言を言つと

「そんな事は絶対させないし、もしそんなことになったら、私も学校辞めるから」

「おいおい、アリサ。」

「うんうん、これはね。貴一の所に向かわせた、私のせいだもん」
なんていいながら本当に申し訳なさそうだった、あのアリサが泣きそうでもある。

「おいおい、あれは俺が勝手にしたんだ。」

「け、けど」

「なに、アリサは正しかったよ。あんな奴にフェイトは、やれんしな」

「うん。だけど」

「はいはい、この話はどうせ後日あるだろうから、それよりも飯に

してくれ。朝のあれで腹へってしょうがない」

そしていつもより、少し静かな飯となった。

“ガチャ”

そして、全員の飯も終わり、昼休みが終わりに近づいてきた頃、不意に屋上のドアが開いた。ここは元々フリースペースだったのだが、いつの間にかアリサ達が占拠していたらしく、この昼休みには誰も来ないはず、だが

「やはりここにいましたか。」

そして、現れたのは現この学校の校長先生でした。

「どうして校長先生が？」

なのはが分からなかったらしいが他はなぜここに校長が来たのかわかり暗い顔をしていた。

「探していたんですか？」

「ええ、朝のことなんですが」

そういうと、流石になのはも分かったらしい

「で、処分は？」

俺がそんなことをいうと、

「あなた、ほんとに三年生？」

「まあ、よく言われますよ。それで？」

「焦りすぎです。それに貴方達はこれから職員室に来てもらいます。」

「は、貴方たちってことは」

「ええ、貴方だけじゃないのよ。星川貴一君」

と、言うことで俺らは職員室に向かった。そのときの廊下では、まるで戦争に行くような感じで、みなが俺に敬礼してくれた。

「ね、私達はなんでだろう？」

忘れていいのかよ、すずか。それはそれで酷いぞ。

「おい、お前らはあいつに一発入れてるだろうが」

「「「「あ!!」「」「」」

いや、忘れていたのかよ。しかも全員。

そして程なく職員室に着くやいな、うちの学年の先生と校長、そしてあいつとたぶんあいつの母親がいた。

「それでは座ってください。」

うちの担任が俺らを座らせた。向かえ側にはそいつと、その母親、

さらになのは達の担任が座っていた。そしてこの緊迫は思わぬ謝罪から始まった。

「うちの息子が本当に申し訳ありませんでした。」

そう言ったのは俺の向かいにいる母親からだった。

「えっと〜どういふことですか？」

俺は担任に聞いてみると。

「それがね、すぐに母親が来たのだけれど校長先生が、事細かく、今回の件について話してくださって、そしたら「そしたら、うちの息子の方が悪いみたいですね。このほか！」と、そんな感じだったのそれで今回の事で謝罪がしたいからってそれで」

「呼んだのよ。」

そういって校長は笑っていた。

「それではそのこちらはその後家に戻り、夫と話しますので」

申し訳なさそうに、その母親は一礼して

「ええ、それではこれで」

「はい。本当に申し訳ありませんでした。本当にごめんなさいね。ほら行くよー!」

そして、そいつは母親に連れてかれた。

「あの、そしたら貴一の、その・・・あの」
フェイトが校長に聞いて

「安心なさい、今回の事はあちらに非があったということですので、お終

いです。」
「それじゃ」「貴一は」「このままなの」

「ええ、大丈夫ですよ。あなた達の騎士はそのままです」

「」「よかった」「」

と、三人は安堵の息をついたが、アリサは

「う、よ、よかった・・・う、うう」

と、今にも泣きそうだった。

「おいおい、結果オーライなんだから・・・な？」

そう言っただけ俺はアリサの頭を撫でてやった。

「だった、だつてえ」

「ほらほら、かわいい顔が台無しだぞ、姫さんよ」

「う・・・うるさい／＼／＼」

なんとか俺の冗談が効いたらしく笑ってくれたが

「「「貴一（君）、O H A N A S H I I しようか？」」」

と、ある意味笑っている三人がいました。

「え、え、とつと・・・」

「「「どうかしたの？」」」

俺は生命の危機を感じたため

「せ、先生。そ、そろそろ授業に戻りますね。それじゃ」

と、言っただけで俺はその場を逃走した。しかしよく考えたら

「「「今日も一緒にカエリマシヨウネ？」」」

逃げる際に死神と魔王がそう言っていました。

（なあ、ソル。俺今日なんかしたか？）

「（マイロード、諦めてください）」

（はあ〜）

そして、俺はクラスに戻った。

結局担任がこっちに来ていたため、自習だった。そして俺が戻った瞬間

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

と、暖かい歓迎があつた。

「なんだ？」

俺はなにがなんだか分からなかつた。そして一人の男子が前に出てきて

「僕らは君の男に惚れた。これからは君をそんけいしようと思つ
なんか何時の間にかこんなことになつてるし……。

そしてその代表の男子が言うみんなが席に戻り話をしていた。女子の視線が気になつたが、

「なにか、あつたのか雄聖？」

そして俺も未だ先生が来ないため、雄聖と話していた。

「そうだねえ。僕が本を読んでいる間に、君がかっこいいと、言う話で盛り上がっていたみたいだよ。」

「おいおい、まじかよ」

「まあね、君はいつもの通りに屋上に行った後かな、すごかつたよ」と、なんだか疲れているような、顔だつた。

「どうかしたか？」

「いや、君ってあの四人以外で話すのって僕ぐらいだから」

「ああ、質問攻めにあつたわけか」

「ああ」

「ご愁傷様」

「まったく、人事だと思って、しかしその顔を見るになんとかも？」

「ああ、なんともだ」

そう言ったら

「さあ、授業始めますよ」

いつもの担任が戻ってきたため、普通の授業が始まった。

そして、もう放課後である。なぜか今日はアリサたちも歩きだった。まあ後ろに黒い車が着いてきてはいるのだが、

「珍しいな。お前らが歩いて帰るなんて」

「え、うん。今日はなにも習い事ないから」

「ふん。べ、別にこっちの勝手でしょ」

なんとも、さっきまで泣いていたあの子はどこへやら

「そうだ、貴一」

「ん？なんだフェイト」

「あのね、あさってのお泊りなんだけど」

「そうか、俺は行かないいい」それはないから「・・・orz」

「そのね、学校終わったら、そのまま行くことになるから朝早くに明日、すずかの車にお泊りセット持ってきてね」

「そうですか」

「」「」「ちなみに、来ないと・・・」「」「」

「こわっ！！」

「はあ。明日からお泊りか、そうだなら」

「なあ、ユーノとアルフも連れて来てくれよ」

「あ、うん」「分かったなの」

「」「なにそれ？」

「「ああ、そうかアリサとすずかは知らなかったな、こいつらのペッ
」」

「そうしてお泊り会の計画は進んでいった。」

第三拾九話。いいな、こつこつもの（後書き）

次回予告『お泊り会初日。』

第四拾話。お泊り会初日（前書き）

記念すべき四拾話です。

第四拾話。お泊り会初日

さてはて、今日はお泊りという拷問が始まる日だった。

「あ、貴一君、こっちこっち」

今朝はいつもより早い集合であり、みんな、お泊りセットを持っていた。

「早いな。てかアリサもここなんだな」

そう、なぜかなのはとフェイトはいつもいる面子だが今日はアリサと、さらにたぶんボディガードでいるんだろうが鮫島さんが居た。

「ええ、今日からみんな私用で出ちゃうし、お父様達は仕事だし」
そついうアリサだがなんだか楽しそうである。

「貴一殿おはようございます」

深々とお辞儀をする鮫島さん

「はい、おはようございます。鮫島さん」

こちらもお挨拶を返す。

「みなさん」

挨拶が終わった時に、今回もリズムジンで登場しているが、今回はい

つものノエルさんだけではなくファリンさんも居た。ちなみにさつきから手を振っているのがファリンさん

「みなさ〜ん、お荷物の回収に来ましたよ。」

「こら、ファリン、先に挨拶を」

と、運転していたノエルさんが降りてきて、注意をしていた。さすがメイド長

「あ、ごめんなさい、お姉さま。みなさんおはようございます」

「「「おはようございます」」」

そして、みんなもそれに返した。

「本日は、月村の皆様にご挨拶を申し上げます。ノエル殿、ファリン殿」

「いえいえ、鮫島さん。こちらが招待したのですから」

なんか、あつちは使用人のお話をしていた。

「それではみなさんのお荷物を預かりますね。」

「あ、持ちますよ」

「いえいえ、騎士様はどうぞ私に任せてください。」

え、騎士様って・・・

「お、君か。恭也を倒してうちの妹が殴られそうになった時に助けた少年は」

と、リムジンから降りてきたのは、

「初めましてだよ。星川貴一君と、フェイト・テストロッサちゃん」

恭也さんの彼女の

「月村すずかの姉の月村忍よ」

忍さんだった。

「え、えっと初めまして、フェイト・テストロッサです」

フェイトが挨拶した

「ちょ、お姉ちゃん!」

リムジンからすずかも出てきた。

「いいじゃない。貴方の騎士様がどんなのか見たかっただけだし。それにうちに泊まりにくるんですよ」

「あれ、忍さん、今日は何で?」

なのはが聞いてみると

「あ、今日はこのまま翠屋に行って、」

「ああ、お兄ちゃんですか」

なのはが先に答えをいい

「ま、そういうこと」

「えっと？」

フェイトがWhat? 見たいな顔だった。

「あ、そうか貴一君とフェイトちゃんは知らないんだっけ」

なのはがそういうと、さすがが

「内のお姉ちゃんとなのはのお兄ちゃんは恋人さんだから」

ま、原作を見ているから知ってましたがね

「てか、え」と

「あ、そうでした。私もお二人は初めてでしたね。私、お姉さまであるノエルの妹のファリンです。」

「どうも。それでなんで俺が騎士様って？」

「ああ、それはですね。家ですずかちゃんが「ファ～リ～ン～」と、すいません。禁則事項です」

はあくどごその未来人ですか、あなたは。と、思っていたら荷物の

積み込みが終わったらしく、そのまますずかを置いてリムジンが走り出した。・・・走り出した？

「あれ、今日は？」

「あ、貴一には言っただけだったわね」

と、鮫島さんを後ろに付けて話だしたアリサ

「今日は早く集まったからこのまま歩いていくのよ」

はい、このまま歩くと・・・この女子比率が多いところを・・・

「じゃ、俺は」「」「一緒に行くの！」「」「・・・はい」

なんか、もう俺こいつらに頭が上がらなくなってきた。

「貴一様、苦勞をかけます。」

と、鮫島さんにエールを貰った。あ、そう思えば俺の鞆の中に指輪
ず、置いてきちゃった。・・・まあいいか

そしていつものどおりの放課後、ちなみに今朝は素晴らしい注目を
受けましたよ、はい。そして、校門のところにはもう車があった。

「みなさまどうぞ」

ノエルさんが運転手の車で俺らは、すずかの家に向かった。

アリサが二人を見たら、

「あ、うん。この子だよ」

と、ユーノを出して、

「私はこの子」

と、アルフが。ちなみに姿はエース編で出る子犬バージョン。

「へえ〜フェレットなんて、珍しいわね」

と、アリサは興味津々。

しかし、すずかはアルフを抱きしめしていた。

「このこ、かわいい」

「あはは」

フェイトは少し乾いた笑っていた。

「すずかちゃん〜お風呂の準備が出来ましたよ。」

と、奥からファリンさんの声がした。

「じゃ、お風呂に案内するね。あ、貴一君も一緒に来て。男湯も隣だから」

「ああ、わかった。」

てか、普通の家には男湯も女湯もないと思うが・・・

そして、なんかあの原作の海鳴温泉のような所にきて、そして

「ね、なのは。ユーノも入れていいよね」

と、なのはがユーノを女湯に入れようとしていた。

「にゃ、にゃはははは」

なんか、なのはは笑っているし。おいおい、ユーノ、フェレット状態で俺の目を見るな・・・仕方ないか。

「アリサ、そいつはオスみたいだからこっちな」

と、強引にユーノを男湯に連れ込んだ。

そして俺とユーノしかいないことを確認したのかユーノが話してきた。

「あ、ありがとう。貴一君」

「少し残念だったか？」

と、俺が意地悪をいうと、

「なっな、なに言ってるんだよ。」

と、顔真っ赤だった。

「おい、どうせここには俺しかないし、人の状態でいいんじゃないか」

「え、いいの？」

「なに、遠慮してんだ」

「あ、じゃあ、お言葉に甘えて」

そして、俺らは大浴場とも言えるお風呂に二人で入っていたが、急に話し声が聞こえてきた。

「おい、ユーノ」

「あ、うん」

と、俺の頭の上にフェレット状態で乗った。しかし、誰だろう？ここで男と言つと、やはりさすがのお父さんか？

「だから、一人で入るって」

と、脱衣所から聞こえた。なんかこの声・・・

「いいじゃない、どうせ誰も居ないんだし」

と、もう一人、しかしこの声は女性。そして扉が開いた。

「あ」

「「あ」

そこにはタオル一枚の恭也さんと、水着姿の忍さんだった。

第四拾話。お泊り会初日（後書き）

今回はラジオ

「「貴一と、作者のあとがきラジオ」」

「いいな、お泊り」

「じゃあ、変わるか・おい!」

「な、な、そんな怖い武器を、も、持たない」「エクスカリバアアアアアアア」ぎゃああああああああああああああああ

「さて、バカは消えてくれたから次回『初日の・・・』だ、それじゃ」

「バイバイ」

第四重一話。初日の・・・(前書き)

四十一話掲載です。

第四重一話。初日の・・・

「あ」

「「あ」」

俺は目の前の現状をすぐに理解して、

「失礼しました。」

と、いそいそと、脱衣所にユーノを頭に乘せたまま、出て行き迅速に着替えて外にでました。なんかでてくさい「こ、これは違うんだ。貴一くん」とか、「あら、ありがとう」「みたいな、ことが聞こえてきたがスルーした。しかし

「どうしよう。まだ体とか洗っていない・・・」

大浴場だったため少し長めに浸かっていたせいで、まだ体を洗っていないかった。

「あの調子だと、たぶん使用はできないし」

「あら、星川様、どうかなさいました？」

俺が廊下を歩いていると、ノエルさんに話しかけられた。

「いや、あの、男湯で」

「あ、もしかして・・・」

あ、この人は知っているらしい。

「はい。」

「そうですか。．．．先に忍様にも言つとけばよかったですね。申し訳ありません」

「いやいや、いいんですが．．．まだ体とか洗ってないんですが．．．」

「あ、それなら、私達、使用人のでよろしければ」

「はい、それで充分ですから、貸してください」

「わかりました。それではこちらに」

そう言つて俺は結局、普通のお風呂に入りました。

そして、夕食の時間。テーブルにはなのは達と恭也さんと忍さんがもう席についていました。

「どうも恭也さん、さつきぶりです」

「や、やあ貴一君」

「あれ、貴一君はお兄ちゃんが来ていたのしつてたの？」

「ああ、なのは。だって「貴一君、さ、飯にしよう」「．．．ふ、分かりました」

「別に隠さなくてもいいのに（ボソ）」

そして、テーブルを見たら、合成・・・あ、間違った。豪華な料理が並んでいた。

「それでは、一緒に」

忍さんが音頭を取り

「……………いただきます……………」

みんなで、ご一緒にだった。

「しかし、驚いたな。」

「え、なにが貴い」

隣に居るフェイトが聞いてきた、ちなみになんか席決めで、もめたらしいが、俺が風呂から出た時には普通に座っていた。

「まさか・・・猫が襲い掛かってくるとは」

「あはは、ごめんね貴一君。いつもはおとなしい子んだけど」

「まあ、別にそれはよかったんだが・・・」

そして、それを普通にスルーしていった、なのは達を見ると、

「……………え〜と……………」

「そんなに驚くことか？」

「だって・・・」

「そうね、そう思えばあんたと会ってまだ全然時間たってないわね」
「いやいや、アリサ今頃、気付くなよ。」

「そうそう、さすがが男の子の友達を内に呼ぶって言ったとき、ノエルなんか「ね、熱でもあるのですか？」って言ってたし」

と、忍さんは言う。

「ああ、俺もあの時はびっくりしたな。」

恭也さんも、うんうんと頷いていた。

「じゃあ、なんでなのはと貴一は知り合ったの？」

「え〜とフェイトちゃんそれは」

なのはが言おうとしたが俺が割って入り

「なのはがドジ踏んでこけて、歩けないところ俺がいて助けた。それだけだ。」

「それだけって、それだけ？」

さらに聞いてくるのでその先はなのはに任せた。

「えっとその後ね、私が貴一君のクラスまで行って、お昼一緒に食べようっていったの」

「ええ、それで私とすずかが会った、と言っわけよ」

「へえ、そうだったんだ」

フェイトが納得。

「へえ、そうでしたか」

ノエルさん納得

「へえ、意外ね。その時すずかが人見知りしないなんて」

と、忍さん。ってすずかつて人見知りするの

「え、忍さん。すずかつて人見知りするんですか？」

「ええ、貴一君。まあ男子にだけなんだけど。と言っても普通に話せるんだけど。」

「だけど、私はどっちかって言うと、貴方がホントに恭也を倒したのか知りたいんだけど」

と、恭也さんの顔を見ながら忍さんが言っている。恭也さん貴方も女性に勝てない人ですね。気持ちはよく分かります。

「ああ、忍。それは間違いないぞ。俺はやられた。しかも」

「コテンパンなの」

うわーなのはさん容赦ねえ。

「ホントだったんだ。しかもこんな子供」

「あはは」

俺は愛想笑いしかなかった。あの試合はガチだったからな。まあ途中からだけど

「あの時の貴一は怖かったよね、なのは。」

「うんうん。急に笑い出したと思ったら、後ろ向いたらお兄ちゃん
は倒れちゃっていたなの」

と、なのはが言った瞬間、アリサとすずかが

「「嘘~~~~~」」

俺も嘘だと思いたいよ。

「嘘嘘、さ、飯食おう」

誤魔化して、飯が終わり。皆でトランプやっていたら、そろそろ寝る時間になった。

「皆様、そろそろ就寝の時間ですのぞ。」

と、ノエルさんが知らせてくれた。

「んじゃ、寝るか。それですか俺の寝る場所は」

「え、それは勿論私のべつ」「」却下」「」うっっ」

「で、どこなんだ？」

「あ、うんみんなで布団敷いて、寝ることになったよ」

「何時決まったんだ？」

「」「」「」なにか問題でも？」「」「」

「……ありません」

そして、みな布団を敷いて寝ることになったのだが、

「なぜ、俺が真ん中！！」

「まあまあ、気にしたら負けだよ貴一君」

「そつよ、あんたは気にせず寝る！！」

ちなみに、俺の隣はアリサとすずか、さらにその隣になのはと、フ
エイトが居る。

「はあ」

「んじゃ、みんなお休み」

「『お休み』」

そして、みんな寝た。・・・と、思われた。

二時間後。

「ソル、全員寝ているな？」

「イエス、間違いないかと」

「さて、今までほつといた、あいつらを出すか」

そして、俺は布団から出て、自分のバックの中に入っている。もう二つの相棒を出した。

「起きてるな、お前ら」

「『マスター（主）、扱いが酷すぎです。』」

「おいおいそんな大きな声をだすな、他は眠っているんだから。それとすまない」

「それで、なぜ今になってですか主」

「は、なに言っているんだ。一応ここにも大きな庭があるから、鍛錬するぞ」

「おいおい、マスター。さすがに魔法は」

「あ、それは安心しろ、鍛錬と言っても、武の方だ」

「それでは、マイロード」

「ああ」

そして、俺は夜中に鍛錬を始めた。

第四重一話。初日の・・・(後書き)

今回もラジオはおやすみ。

次回『夜〜二日目』

バイバイ

第四十二話。夜々二日目（前書き）

四十二話掲載

第四十二話 夜々二日目

剣を振ることになれてからはまるで、剣が手であり、足であり、まるで体の一部に成っていた。

「は!!」「せいっ!!」

布団から抜け出して夜中の鍛錬。今回は、剣が持てないためシャド―であるが

「はあっ!!」

と、鍛錬をしている時。

“ガサガサ”

「誰だ!!」

と、物音がした方を見ると、

「にゃ」

一匹の猫でした。

「なんだ、お前か。そうか、猫は夜行性か」

そして、その猫がこっちに寄ってきて、足にべったりくっ付きました。

「おいおい、」

「じゃあ〜」

「主は、やはりカリスマ性があるんでしょうね」

「どうだろうな。サン」

「もともとから、マスターは鈍感ですから」

「あ、そうか？」

「」「はい。そうなんです！！」「」

と、三体のデバイスに言われた。・・・そんなに俺は鈍感か？

「しかし、ここは静かだな」

そう、庭に出て鍛錬をしているが、まったく音がしない。車も人々の声や音はまったく聞こえなかった。

「静かだ。そうでしょ、恭也さん」

と、不意に、後ろを向いた。そしたら恭也さん他、忍さん+メイドが居た。

「ホントだ。恭也が言ったとおり、近づいたら、分かっちゃってる。」

「すまないな、貴一君。鍛錬の途中だったかな？」

「いえ、別に。ただし運動がしたかったただけですから」

ここで、いつもの魔法が行使できなくて、体が鈍りそうですとは言えなかった。しかし

「なぜ、ここに？」

「はい、星川様が恭也様を倒した、と言うことでしたので、」

「どんな特訓しているのになって思って、最初はお姉さまと私だけだったんだけど」

おいおい、それは盗撮とか、ストーカー行為ではないのか？

「私たちがそれを見つけて何やってんのか、見たら」

「貴一君が、シャドーをしていた。と、言うわけだ」

「そうでしたか、しかし別に、俺はなんか凄い特訓なんてしてないんですけど」

「いえ、星川様のさっきの動きで、色々と参考にさせていただく点が何点ありました」

「へえ、ノエルが言うぐらいだから、ホント凄いのかな？。ねえ恭也「却下」・・・なにも言っていないじゃない」

「どうせ、試合して見して、とかならる」

「あ、あははは。正解」

さすがに、それは俺も辛い。

「しかし、騎士様。だめじゃないですか、ちゃんとすすずかちゃん達を、見てないと」

いや、ファリンさん。

「それは俺の役目なんですか？」

「はい」

おいおい、なんたら客に警護頼んでどうする。

「こら、ファリン。星川様はお客様だぞ」

「あ、そうでした。申し訳ありません」

「ああ、いい、いい。俺もこんな夜中に鍛錬なんかしてるのが悪いんだから」

と、言っつて俺は部屋に戻っていった。

（貴一が庭から出た後）

「ねえ、恭也。彼、本当に貴方を倒したの？さっきの感じだとそんなんでもなかったけど」

「いえ、忍様。星川様は私たちしか見てなかった時、私たちでは確認できない程の足捌きをしていました。」

「って、貴方たちでも、確認できないですって！！きよ、恭也」

「そういつことだ。風呂の時言ったる。俺は三秒で敗れたと」

「なるほど、そうすると・・・ブツブツ」

「さて、寝るか」

「マスター、無理に寝ても・・・」

「しょうがないだろ。まあ一応最低限の運動は出来たことだし」

「主、明日はちゃんと私達を持っていてくださいよ」

「ああ、わかっている。それじゃ、お休み」

「「「お休みなさい」「」」

そして、起きたら、朝でした。

「しかし」

と、起きたのはいいが、両隣から抱きつかれている。この歳の子は抱きつき症なのか？まあ、それはさすがになのは達ので学習して

いるため、難なく抜け出せた。しかしどうしよう。

「まあ、散歩でもするか」

と、部屋を出て廊下を歩いていると、

「お、アルフ。おはよう」

（お、おはよう、貴一。随分と早いんだな）

と、念話で返してくれた。

（まあな。）

（まったく、少しはフェイトも見習ってほしいよ）

（フェイトってそんなに寝起き酷いのか）

その質問をしたとき、尻尾が下をむいた。ああ、酷いんだな。

（酷いというか、プレシアも酷くて、だいたい私が苦勞しまくっている状態だ）

（お疲れさん）

と、頭を撫でてやった。

（や、やめる。こ、この、バカノノノ）

なんか、子犬だと、かわいいな。

「あれ、騎士様、おはようございます」

「おはようございます、ファリンさん。騎士様はやめてください」

と、下のアルフを見たら、爆笑して転がっていた。・・・こいつ。

「あはは、これは失礼、だけど貴一君。まだ六時前なんですけど」

「あはは、それ」「これ、ファリン」「」

「あ、お姉さま」

と、ファリンさんの後ろからノエルさんの声がした。

「あ、ではありません。仕事を・・・」

と、言おうとした時に俺がいることに気づき、

「あ、星川様、おはようございます。」

「はい、おはようございます、ノエルさん。」

「おはやいのですね、」

「ふふ、お姉さま、それは私も言いましたよ」

「・・・／／／／／」

なんか、この二人って正反対だと思っていたが、案外合っているな。

「あ〜れ〜みんなおはよう」

と、すごく眠そうな声が聞こえたな。

「「おはようございます。忍様」」

お、なんかメイドっぽい。

「忍様、またですか」

「あ、うん。と言うわけで、」

「はい、時間になりましたらおこしますので。」

「んじゃ、お願い」

と、言って忍さんはフラフラと消えていった。

「あのさっきの忍さん、大丈夫なんですか？」

「あはは、貴一君。あれは定期的なものだから」

と、ファリンさんが説明してくれた。

「あ、そうだ」

と、俺はあることを思いついた。

「すみません、」

「はいなんでしょう?」

「今日の朝食は?」

「これから準備ですが」

「俺も手伝います」

「・・・」

「・・・」

二人のメイドが固まり、

「えーと貴一君は料理でき」出来るぞ貴一君は

と、前から今度は恭也さんがきた。

「あ、恭也様おはようございます」

「ああ、おはよう。」

「それで、貴一君の料理って」

「店に出せるぐらいいつまで」

「いやいや、恭也さん、それは言いませんよ」

「ならば」

「そうですね、お姉さま」

「えっと?」

「星川様、それではこちらへ」

と、俺は又もや、他の家で料理をすることにした。

第四十二話。夜〜二日目（後書き）

次回『二日目の朝』・・・最近ネタが・・・

第四重三話。二日目の朝（前書き）

四十二話掲載です。

第四重三話。二日目の朝

しかし、やはり、素材が違うな。と、俺は目も前の食材を見て思った。

「星川様はどこで、料理を？」

と、包丁を動かしながら聞いてくる、

「家で、よく作りますから」

「そうでしたか、今の手際の良さは誰かも見習ってほしいものですが」

と、ファリンさんを見て言うノエルさん。

「あ、あははは」

ファリンさんは目を合わせないし、

「あ、星川様、それをこちらに」

「あ、はいはい。これでつと、完成」

「はい、ご協力ありがとうございます」

「いいですよ。」

「はあくなんだか、メイドとしての自信が・・・」

「ほら、ファリン。すずか様達を起こしに行ってください」

と、がっかりしている、ファリンさんにノエルさんが言つと

「あ、そうでした。それでは」

と、明るくなり足早と行ってしまった。

「それでは星川様は、リビングにてお待ちください」

「はい」

と、言い、リビングに向かった。

「え、それど今日の天気は」

と、俺はテレビを着けて待機していたら

“ドタドタドタ”

と、足音が盛大に聞こえて、

「「「「貴一（君）居る!?」「」「」

その音の正体は、一緒に寝ていた・・・もとい同じ部屋で寝ていたのは達だった。そして、後ろから

「はあ、はあ、待ってください。皆さん、だから、はあ、はあ、貴一君は先に起きています、はあ、はあ。」

息を切らした、ファリンさんが来た。

「はい、ファリンさん、お水」

と、俺はなににもなかったように水をファリンさんにあげた。

「ど、どうも」

「「「「つて、普通に起きてるし!」「」「」

「おい、お前ら、俺は普通に早起きなだけだ。そして、なのはとフエイトはそれを知ってるだろうが」

「「あ、そうだった」「」

と、なのはとフエイトは見事にハモった。

「そ、それでは皆さん。ちょ、朝食にしましょう」

と、若干まだ息を切らしている、ファリンさんの誘導で朝食となった。

「それでは」

「「「「「いただきます」「」「」

今回は、忍さんがいないため恭也さんが音頭をとった。

そして、みな食べ始めたが、なぜか、すずかが微妙は顔をしていた。

「いや、アリサ。そこまで驚くことか？」

「あんだねえ。飯にもここはさすがの家よ」

「ああ、それは間違いないな」

「なんで、そう簡単に……と言うよりもあんたって料理が出来たのね」

「そうなんだよ、アリサちゃん。貴一君、こんなの簡単みたいに言うの」

と、なのはからクレーム。

「ま、おいしいからいいわ」

と、黙々と、食べ始めた。ていいのか？

「そう、思えば恭也さん？」

「ん？どうした貴一君」

「忍さんと、朝会ったんですが」

「ああ、忍はまた夜更かしと、いつか徹夜というか、まあ寝て無くてな、こういう休みの日は朝は寝ているよ」

「へえ〜」

「それよりも貴一、この後はどうするの」
フェイトが聞いてきたが

「俺に、聞くなよ……」

と、俺も今後の予定なんて考えていなかった。

「それなら、これからショッピング行かない？」

なのはが提案した。そして

「「なのはなのにごくまともな意見が出た……」」

見事の俺とアリサがかぶった。

「むーなんなの、二人して」

なのはは少し、怒ったが、それは無視して

「ショッピングね……」

「なら、新しく出来た、あの雑貨屋さんなんてどう？」

と、すすかが提案。あ、そうだ

「そこで良いんじゃないか、丁度いいしな。な、フェイト」

「ふえ？」

と、こちらはいきなり振られてよく判ってないフェイト。

「お前な、自分の部屋になにも女の子っぽい物ないだろうか」

と、俺がいうと、テーブルでドックフード食べているアルフも頷いていた。ちなみにユーノは、恭也さんが気遣ってくれて、俺らの飯と変わらないものだった。

「え、そ、そうかな」

「いや、あれは「ねえ、なんで貴一君、フェイトちゃんのお部屋の中知っているの?」え、ああそれは引越しの手伝いした時に」

「あ、そうだったね。」

と、すすかは納得したようだ。なんでそこに食いついたんだ?

「なら、そのお店が始まったらいこうか、ノエルさん」

「はい、すすか様。」

と、やはりお嬢様のところをみしてくれた。

「そろそろ、俺は一旦家に戻るう」

と、恭也さんが席を立ち、こちらに来て、

「すまないが、もしの事が会ったら、頼む(ボソ)」

と、俺の肩を叩いて、行ってしまいました。

「ふ、言われなくても」

「ん？どうかした貴」

「いや、なんでもないよ。フェイト」

「（主、我々も着いていますから）」

「（もし、マスターの近くに魔力を感じたら、教えるぜ）」

「（ああ、よろしく頼む）」

「（それから、マイロード、すずかお嬢様とのお姉さま、さらにメイドは）」

「（それは言わぬが花だ。それに、言うときが来たら、聞けばいい。お前らもそういうことだからよろしくな）」

「^イ「^ハ（御意）」
「^セ」

ちなみにこの念話は俺と、デバイス専用の回線で行われているため、他の者には聞こえない仕様となっております（作者より）

「ん？なんか聞こえなかった？」

と、俺が言っが

「え、なんか聞こえた？」

「いや、気のせいだろう。それよりも・・・フェイト」

「ん？」

「もうちよい、早く食べてくれ、みんなもうとっくに終わっているんだが」

「だって、おいしいんだもん」

こいつ、いつも朝はどんなって、そう思えばプレシアさんも朝弱いとか言っていたから、食べてないんじゃないだろうな。

「いいじゃない、貴一。それよりも、あんたも来なさい」

と、アリサに手を引っ張られると、そこには、猫に埋もれたユーノが居た。

(た、助け・・・て・・・)

(おおおおおおいよいよ！、なのは、助けるよ)

(あ)

(あ、じゃねえええええ！！)

と、俺となのはがユーノを救出したのは、アリサが気づいていたが、その絵がなんとも愛くるしいため放置をして何分か経った後だった。

第四重三話。二日目の朝（後書き）

次回『知っているか、九才とはこういうことだ！』

それじゃバイバイ

第四十四話。知っているか、九才とはこういうことだ！！（前書き）

四十四話掲載です。

第四十四話。知っているか、九才とはこういうことだ!!

さてはて・・・って最近この始まりかたが多いが、その雑貨屋さんが開店したらしいが、なんで・・・

「俺がなんで同伴なんだよ!!」

そう、言うまでもないがこんなファンシーな所に男が居るのは不自然だろうが、

「あんだね、あなたは私らの騎士なの、だから同伴。なんで、あんなだけ外で待っているのよ。その方が不自然よ」

と、アリサ嬢の命令（強制であり、拒否権は無い）により一緒に、店の中にいます。

「ね、これとかは？」

「え、こっちは？」

など、ガールズトークをしている中

「ね、貴一君はどっちがいい？」

みたいな、質問が飛んでくるのは勘弁してほしい。

「ん、こっちなかな」

と、俺が選ぶと、わかったとにっこり笑うフェイト、そして絶対俺

が選んだ方にする、なんでだ？

「（これだから、主は）」

なんかサンから呆れたつつこみが入ったような気がしたが、

「ねえ、貴一」

「あ、はいはい」

と、こんどはアリサからのお呼び出しがかかりそちらに向かった。
なんか俺、騎士と言うよりも執事のような気が・・・君が主で執事が俺で。（最近の作者がハマったゲームです）

さて、無事にお買い物（拷問）が終わり昼食は適当に取り、その後、いろいろなジャンルのお買い物（全部女の子主体の所）もして、今は迎えに来てくれた、リムジンに乗っている。

「皆さん、よくお眠りになっていますね」

と、迎えに来てくれた、ノエルさんが言っている。そう、俺は助手席に乗っていて、他の後部座席乗った者たちはみんな寝てしまっている。

「まあ、色々と歩いて見ましたからね。」

と、俺が言ったら、ノエルさんが笑い

「しかし、荷物は持ってあげた。というわけですか。」

「別に、ただこういう時は男が持つべきでしょ。」

「ふふ、星川様は本当によい人です。」

「そうですね、これでも自分に正直に、自由奔放に生きてますよ。」

俺は手をヒラヒラさせながら言ってみた、しかし

「聞いてますよ。なんでも男の子からすずか様達を守ったとか」

「て、どこでそんなことを・・・」

「あまり、メイドを舐めないで下さいね。それに恭也様からもよく聞きますし」

「恭也さんに？」

「ええ、あのお方はあまりしゃべるのが上手ではありません。良くてぶつきら棒と言うところでしょう。しかしあのお方は芯のお強い方ですから、それが推薦するような子はどんな子と、思いましたら」

「思いましたら？」

「たしかに、恭也さんが進める理由がわかりますよ」

ノエルさん、俺はそこまでいい人間ではないよ。

「それに今日もすずか様の寝顔も見れたことですし」

と、バックミラーに写るすずかを見て微笑んでいた。しかし一瞬で背いたな・・・どうかしたのか

「さて、そろそろお着きになりますので」

「ああ、分かりました。しかし、なのは達は・・・」

後ろで爆睡中の姫さん達はとうするんだ？

「ご心配なく、私達意外と、力持ちですから」

と、力瘤を作った。なんかお茶目だな。てか、普通に起こそうよ・・・

そして、門をくぐり、着いたが。

「さて、起こしますか」

「俺もですか？」

「勿論ですよ。貴一君」

車から出ると、待つてくれていたファリンさんが後部座席の皆さんは全員が寝ていると、言う。「す、すずかちゃん」と、怪しい鼻息になったが、それはノエルさんの強い突っ込みもといグーパンにより正気に戻ったらしく、今に至る。

「やはり、起きてもらいましょう」

と、ノエルさんが後部座席に入ったが

「・・・」

「・・・」

「あれ？」

ノエルさんが後部座席に顔を入れたが・・・

「どうしたんでしょう？お姉さま」

と、ファリンさんが後ろから、後部座席を見たら

「ブハアアアア」

盛大な噴水、もとい血飛沫が出た。

「って！！大丈夫ですか。ファリンさん」

「あ、あ、あ・あ・て、天国。ガタリ」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおい」

「まあいいか。それでノエルさぁん」

と、肩を揺すつたが、

「・・・」

バタリ

「あなたもかあああああああ!!」

「て、どんなんだよ」

と、俺もその後部座席を見たが

「・・・」

「っは。アブネイ。まったくなんてエロい、もとい百合百合しい、あ、違った、全く、言葉が見つからん!!」

そついうと俺はそこら辺を平常心と言う名の宝具を使い、どうにか一人ずつ下ろしてどうにかリビングに全員を担いだか・・・

「どうしよう」

と、現在俺一人のリビングに居る。しかも忍さんは、いないし、他のメイド、もといノエルさん達は未だに気絶しているし。

「もう少して、夕飯の時間だしな」

と、俺はキッチンに行き、普通では見ることが出来ないだろうと思われる冷蔵庫の中の食材を確認し、

「うん、気絶しているノエルさん達がいけないんだ」

と、自分に言い聞かせて、料理を始めた。

「主、それはただ単にここの食材が豪華だから料理したいだけでは・

・・」

と、白い指輪が呟いたのは他のデバイス達しか知らないことだった。

Side 恭也

まったく、今日も大学はつまらなかったな、まあ今度の日曜に貴君の特訓を見られるのだから今週は運がいいんだろう。しかし忍のやつ、いきなり呼び出しとはどういうことだ？

「お邪魔する」

と、俺は一応挨拶をしたのですが誰も返事がない。と、思った時

「あ、やっと来た来た、恭也大変なのよ」

「事件かなにかか？」

と、俺が階段から降りてくる忍に声をかけたら

「ある意味事件ね」

そういうと俺の手をひきリビングに連れてきた。そしたらノエルとファリンが倒れていてさらになのは達が寝ていた。

「じ、これは？」

「よく判らないんだけど、今、帰ってきたらこうだったの」

「おいおい、まずはそのメイドを起こせよ。と言つよりも

「もう六時なんだが」

「そつなのよね。しかも貴一君いないし」

「そつ思えばいないな、と言つより」

「アルフもユーノもないじゃないか、

「もう、しょうがないな。恭也起こしてあげて」

「まったく」

と、言つて俺はノエルさんを起こした。

「ノエル、起きろ。いまなら忍がもれなく、ごほつびをくれるとぞ」

と、俺が言つと

「おはようございます。恭也様」

と、ピカールの反応をくれた。

「さて、どうしてお前達はここで寝ているんだ。しかも他の奴らも」

「はい、たしか・・・あ！！」

ノエルが大声を上げるのは珍しいな。

「申し訳ありません。今、何時ですか」

「あ、今か。今はだいたい六時ちよいすぎぐらいかな」

「そうですか。それでは、説明します」

と、いい。今日のお買い物のお迎えに行き、貴一君以外が全員寝てしまったため、起こそうしたが

「そこで記憶がありません」

と、言うしかし

「ならなんでここにいるのよ。」

と、忍が言うが俺は誰がここまでしてくれたかは明白にわかった。そのなんだ、後でお礼言っところ。

「それよりも今日のディナーは大丈夫なの？」

「あ……」

ああ、まだなんだ。しかし俺の予想が正しければ

「大丈夫だと思うぞ、忍。たぶんお人よしの彼がもう準備はしているだろうから」

「お人よしの彼？」

「あの、恭也様もしかして……」

と、ノエルは分かったようだがその時、

「ふわぁ〜って私、寝ちゃったんだ。あれだけどここすずかの家よね。」

アリサちゃんが起きたらしい。そして続々と他にも起きていき、全員起きたが・・・

「あれ、お兄ちゃん。なんでいるの？」

とか

「あれ、お姉ちゃんお帰り」

とか

「あれ、アルフがいない」

とか

「お姉さま、一応、お風呂は出来ていますよ」

と、なんとも、呑気である。しかし

「あれ、貴一は？」

と、フェイトちゃんという言葉で俺と忍、ノエル以外が

「いない」「え、いない？」「いえ、たしか居ました」

「だけど、今日の夕食はどうしよう?」

と、忍が困っているがそこにキッチンから、

「あゝ楽しかった。アルフもユーノもご苦労さん」

と、貴一君が前掛けをして出てきた。

全員沈黙・・・

「ん?どうしたんだお前ら?」

s i d e o u t

第四十四話。知っているか、九才とはこういうことだ！！（後書き）

それでは次回『しかしメイドというのは魅力的だ』

バイバイ

第四〇五話。しかしメイドというのは魅力的だ(前書き)

四十五話掲載です

第四〇五話。しかしメイドというのは魅力的だ

案外、ユーノは家庭的で驚いたな。まあ、やはりアルフはアルフだったが、それよりもリビングが騒がしくなったな。まあやっと起きたんだろうけど、

「ん？どうしたんだお前ら？」

と、俺が料理がひと段落したのでリビングに顔を出したら、全員俺に注目していた。

「えーと・・・」

「やはり、貴一君は料理をしていたか」

「なになに、恭也は知ってたの？」

「まあな」

「貴一、あんた。」

と、アリサに呆れられた。

「寝てたお前らがいうな」

と、俺の鋭いツツコミに全員撃沈もとい沈黙。

「まあ、もう少して料理が出来るから、お前らは風呂にでも入って
る」

と、言つと

「あはは、そうするね。」

四人はそのまま風呂に向かった。

「その、貴一君」

ファリンさんが申し訳なさそうに

「申し訳ありません」

ノエルさんはすでに、謝っていた。

「あ、いいですよ。こちらも起こすのがめんどくさかったので起こさずにいただけです」

「なんて、家事スキル!!」

「それで貴一君は風呂はいいのか?」

「もう少しで出来るのでそれが終わったら、入りますよ」

「本当に申し訳ありません」

深々とお辞儀をしているメイドの二人

「だから、いいですよ。あ、それから勝手に料理しちゃいましたから、色々と後でなんかありましたら言ってください」

「あ、いいよ。別に貴一君の完全プロデューズ料理がどんなもんだか知りたいし」

忍さんの許可も下りた。まあ許可取る前に、料理しちゃったけど。

「それでは、微力ながらも」

「ああ、いいですよ。後片付けをお願いしますけど。」

「そうですか」

ノエルさんが残念そうにしていた。

「つつ訳で、後は俺に任してください。それに恭也さん達は俺が入る前に入ったほうがいいんじゃないんですか？」

なんてことを言うと。

「あ、そうね。それじゃご飯楽しみにしてるから。それじゃ恭也行こう」

「お、おい待て、貴一く、こ、これは、って忍引つ張りなー!!」

恭也さんはなんか言いたげだったが忍さんに連れてかれた。

「さて、ラストスパートに入りますか。それじゃノエルさんたちは気絶していた間の仕事でもしててください」

「あ、はい」

「そうですね。それじゃお姉さま。」

メイドの二人も仕事に戻った。

「それじゃ、今までありがとうな、ユーノ、アルフ。」

(なに、簡単だったよ。それにお肉を先にもらっていたしな)

(別に大したことじゃないから)

念話で返してくれた二人はどこかに消えた。

さて、再開しますか。

さて、なのは達も風呂から上がったらしく、すでにパジャマ姿だった。

「すごくいい匂いなの」

「そうだね。なのは」

「早く、準備できないのかしら」

「あんたらね・・・」

アリスは呆れているが、さっきから興味津々なのは顔が教えてくれているよ。

「すみません。ノエルさん、ファリンさん」

「はい」

二人は今、俺の料理を運んでもらうために手伝ってもらっている。

「これと、これ。さらにラストにこのパスタで。」

テキパキと動いてくれるので助かる。

「おいおい、お前ら、早く座れよ」

俺をなぜか凝視していた四人に座るよう言った。

「くくくくう、うん／＼／＼」

なんで顔が赤かったんだ？と、疑問に思ったなら

「（主、今の姿を考えてください）」

（え、特に変ではないよな）

「（はあ〜これだから）」

（なんとよ、そりゃ）

意味が分からん。まあいいか。

「ぶーすつきりー!」

ドアを思い切り開けたのは忍さんだった。なんか機嫌がいいな

「あ、ああ」

やつれた恭也さんが遅れてきた。

「あれ、今日は早いんですね」

なんて、俺が意地悪を試してみると

「そうか貴一君はそんなに死合いがしたいのか？」

「って、なんか字が違う気がしますよ、恭也さん。それにしたくありません」

と、こちらの生死が関わりそうになった。

「いいじゃない。それよりも料理いただきましょう。」

忍さんナイスと、思いながら席についた。

そして、みんなが席に着いて俺の料理を見ていたが

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

一同沈黙。

「あ、あのなんか」

俺は今回は結構と言うよりも、完全な自信作の Pasta を中心とした
イタリアンなんだが

「え、えっとー」

俺が皆の反応を待っているのだが、そして一番の反応したのは

「これは星川様がお作りになったのですか？」

ノエルさんの一言でした。

「はい、もちろんです。てかみんな食べないか、冷めてもあまり旨
いものでもないし」

俺がなんとかここまで持ってきた、そして恭也さんが

「ああ、そつだな貴一君が折角作ってくれたんだ、頂こう」

そして、全員が一齐に

「「「「「「「「「「頂きます」「」「」「」

そして、今回はノエルさん達、メイドも同席の夕食なのが全員

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

またもや、沈黙・・・まさか失敗、と思い俺も口にするが・・・
普通に食えた。あれ？そして四人が一番最初に口が開いて

いや、黙々と食べていた恭也さん、いきなりおかわりと・・・

「あ、はい。ちょっと待っててください」

そう言っつて俺はキッチンに行った。

Side なのは

貴一君が奥に消えた瞬間アリサちゃんが

「なんなのよ。あいつ、料理がうまいとかのレベルじゃないじゃない
い」

「うん、これはお店だせるかな？」

すずかちゃんがパスタをたべながら言う

「と、いつよりもこれ下手すると内のノエル以上じゃない？」

忍さんが言うけど、この前の内でやった時のパスタよりも全然おいしいなの

「ね、なのは。貴一ってもしかして趣味の時間に料理もしてるんじゃないかな？」

「あ、フェイトちゃんそれありそうなの」

「てか、あいつに趣味なんてあったの？」あるってのアリサ「っわ
！！」

そして、貴一君が戻ってきたなの。

Side out

「まったく人に趣味が無いみたいに言うな」

「けどあんた、大体、学校ではあの本読んでいる奴と話しているか、寝ているか、じゃない。」

く、なんとも痛い所を。

「まあ、案外あんたが強いのはわかったけど／＼／＼」

「あ、なんて言った？」

「な、なんでもないわよ！！」

「な、いきなり怒るなよ。」

まあ、いきなり怒るのはいつもか、それよりも

「恭也さん、おかわりするのはいいんですけど、なんか感想言ってくださいよ。」

俺はさっきのパスタをさらに多く入れた皿を、恭也さんの前に置いた。

「すまん、すまん。いやいやまったく旨かったので」

「あはは、そう言ってくれるとうれしいんですが」

結局その後、ノエルさんがこのレシピを教えてほしいだの、アリサから私の専属のシェフになれとか、色々この料理であったが、さすがに今日の疲れがあったのかなのは達四人は早々に寝てしまった。だけどうまく真ん中だけは空けておくんだな・・・

「それで、ここが強火で」

「フムフム」

そんで今は今で、時間は八時過ぎで、ノエルさんにさっきの料理の講座中。

「それで、これがこの油を使って」

「なるほど、それでこうなるわけですか」

「そういうこと」

なにかと、メモを取っているノエルさん。

「それでは本当に今日はありがとうございました。お客様なのに料理を作ってもらいさらに、その料理まで教えていただき」

「いえいえ、それでは、すいませんが俺も今日は疲れたんで」

「あ、はい。」

そういつと俺はキッチンを出て、みんなが寝ているところに向かうとき

「それではお休みなさい。“貴様”」

ノエルさんが挨拶したので、

「はい。お休みなさい。ノエルさん」

そう言っつて俺は真ん中で寝た。

「最近の主はホント恐ろしい子になったわ・・・はあ〜」

「サン、それは言わぬが花だぞ」

「ああ、ソルの言うとおりだ。これがマスターなんだよ。」

「だけど」

「」「はあ〜」「」

三体のデバイスが盛大にため息をしたのを知っているのは、他のデバイスと使い魔と淫獣だけだった。

(僕は淫獣じゃなああああああい)

（作者）そつですか？

第四〇五話。しかしメイドというのは魅力的だ（後書き）

とうとう、あとがきで書くことが無くなった・・・

次回『未定です・・・』

ごめんなさい。

第四拾廢話。 久しいチート。 (前書き)

コミケがもつじき。

第四拾麓話。久しいチート。

お泊り会があつてそれから数日が経ち、今日は日曜日。そう今日こそ恭也さん達と特訓する日である。待ち合わせ場所は翠屋。そして、その特訓ツアーに参加するのは、恭也さん、美由希さん、土郎さん、桃子さん、なのは、フェイト、アルフ、ユーノ、そしてなぜかプレシアさん。

「あれ、なんでプレシアさんまで？」

「今日のお仕事がお休みになったから、一緒にフェイトと来ちゃった」

「そうですね。まったく、」

「それじゃ、今から家に行きます」

「……………え！？」「……………」

全員驚愕。

「な、貴一君。そういう冗談は」

「冗談じゃないんですが」

「そう言って、俺は家に転送した。」

「さて、家です」

全員急な転送で、驚いていた。

「いや、すまない。目の前にはその球体しか見えないのだが」

そ、俺は今回は大人数で行くので俺の部屋にあった別荘をリビングに移しておいた。

「はい。それではその魔法陣を踏んでください。」

最初に踏んだのはプレシアさんだった。

そして、姿が消えた。

「や、どござ」

そして、続々と消えていった。最後は俺が入った。

「な、なんだここは？」

士郎さんの第一声。

「さっき、目の前にしていた球体の中ですが」

「「「「「嘘!?!」「「「「「

プレシアさん以外はこの反応、プレシアさんと言つと

「これ、貴一君が作ったの？」

「あはは、これは俺の稀少技能ですよ。」

「あら、そうなの。」

「なんだいそのレアなんたらとは？」

「そうですね。地球で言う超能力みたいなものですね。」

「ね、ね、貴一。このお城はなに？」

フェイトが興味津々なのは転送した際に一番最初目に行くお城、ネギマの別荘って創造したらこうだったからなんともいえないが、

「ま、飾りだ。一応住めるがな。」

「あとで、行ってもいい？」

「ああ、かまわないよ。」

しかし、フェイトが城に興味を出すとは……

「それではまず、恭也さんたちは着いてきてください。えーとなのは達は……」

「あら、魔法の特訓なら私が見ましようか？」

プレシアさんが笑って言うてくれた。

「あ、そうしてもらえると有難いですが、まだ完全にあの病気は完治していませんから、気をつけてください。」

「ええ、分かっているわ。」

そう、あの不治の病だが五斗米道ゴトクミダウを使ったら、どうにか回復できた。てか俺の体は異常だと改めて分かった瞬間でもあった。

「それではそこの魔法陣をふんでください。行き先は壮大な草原に行きますから」

「了解よ。それじゃ、ユーノ君、アルフ、一緒に行きましょう」

「「あ、（貴一君）」」

「安心しろ、ちゃんと後で、見にいつてやるから」

「うん、わかったなの」

「絶対だから」

そんなこと言わなくても、あのプレシア女史に魔法を教えてもらえるほうがすごいのに・・・そして、なのは達が消えて残ったのは残りの高町家だけだった。

「ふふふ、モテモテね貴一君。」

「茶化さないでください桃子さん。それでは恭也さん、美由希さん」

「はい」「ああ」

「これからやることは俺がいつもしている、肉体面での鍛錬です。それではこちらの魔法陣に、こちらは大きなドームになっています

から。」

「なあ、貴一君。なんでこの魔法陣を使用するんだい？」

「土郎さん。一応行つときますが、ここ、一応広さとしては県一つぐらいはありますから」

「そうだったな。私らの常識はここでは通用しないんだつたな」

「それでは」

そう言つて、俺は転送した。

「ここか」「ひろい」

恭也さん、美由希さんの感想。ちなみに土郎さん達は観客席にいる。

「それでは。サンいつもの」

「御意。」

そついうと、いつものマネキンが十体出てきた。

「な、なにこれ？」

美由希さんは少し引いていた。まあいきなりこんな真っ白いのが出てきたらこつなるか……

「それだは離れていてください。それとサンとムーンをお願いします」

そして、鍛錬が始まった。

Side 恭也

さて、貴一君の鍛錬だが、一番最初は対人の練習なんだろう。

「しかし、ムーンとサンは離れていていいのか？」

「なにを言っているんですか恭也さん。内の主はこの程度では上半身すら使いませんから」

貴一君はその通りだった。十体の相手がいる中で手をポケットに入れたまま、戦っている。たしかに見た目は避けているだけにしかみえないが、しかしすべて完全に避けている。十体がいればそれ相応の技がある。それにその一体一体もそこそこ強いはず。美由希がやればたぶん負けるであろう。しかし貴一君は足裁きだけでそれに対応し、さらにそれを倒していく。

「はっ！！」

さらに全部急所だ。あれが人間だったら首が切れているぐらいの蹴り、さらに

「トリニティ・バレット！！！」

その掛け声と同時に三体が一気に壊れた。しかも腹の部分が欠落している。

「ね、きょうちゃん、あれって私たちが戦った時なんかと・・・」

「ああ、比べ物にならないな」

俺らの全力は貴一君にとっては足元以下だった。

「あ、そのことですが、主はこんなこと言ってましたよ」

「ん？サンはなにか聞いているのか」

「はい。うちの主が「殺すのは簡単だが倒すのは難しい」だそうです」

「なるほどな。」

そういうことだ。貴一君にとってはそれが当たり前なんだろう。

「よし、終了」

そんな会話をしている間に、終わったらしい。時間として六分ぐらいだろう。そして貴一君はさらに

「サン、ランクを上げて、魔導師ランクはBぐらいだ」

「御意。数はどうしますか？」

「五人」

「分かりました。それでご使用魔法は？」

「無しだ。」

そういうと、貴一君は未だにポケットに手を入れたままその五体の相手に入った。

「なあ、ムーン。さっき魔導師ランクBと言っていたが」

「ああ、マスターは魔法を使う相手を今度は対戦相手にしたんだな」

「だけど貴一君、まだポケットに手入れたままだよ」

「ああ、それなら大丈夫ですよ。主が本気になっただけですし、それにポケットに手を入れるのは癖みたいなものですし」

そして、次の瞬間、俺はいや、俺と父さんは信じられないものを見た。それは

“ シュン ”

そう、俺ら、小太刀二刀御神流が使う奥義の一つを意図も簡単に使っていた。

「う・・・そ」

美由希からの驚愕の声、それもそうだろう彼女が未だに得とく出来ていないものでもあるからな。しかし貴一君はいつたい何時これを・・・もしかして!!

「なあ、サン。もしかしてあの貴一君が俺を倒した時」

「はい。お気づきのようで。その通りです、あの後主は見よう見まねでその技の「コピー」をしました。」

なんというか、貴一君はもう別格なのだと思った。そして貴一君は五体とも足だけで倒してしまった。

「やはりマネキンではあまり感覚がよくないな」

貴一君は不服そうにこっちに来て

「おい、ムーン。暴れていいぞ」

そして、黒い指輪をはめた。

「それじゃ、まず三十体ぐらいにしますか主？」

「ああ、そうしてくれ」

「な、いきなり三十体だと!!」

俺は驚きでそう言ってしまった。しかし目の前に広がるのはさっきのマネキンが三十体いる光景だった。

「ムーン、セットアップ!!」

「イエッサー、セットアップ」

そついうと貴一君はなのはが白い服装だったが貴一君はまるで死神のような服装だった。

「それじゃ、星川貴一。切って、切って、切りまくる」

そして貴一君は鎌のようなものを慣れた手つきで振りながら、マネキンの中に入っていった。それに呆気にとられている時、不意にサ
ンが言ってきた。

「恭也さん。私たちの主は生半可な努力なんか一度もないんです。
いつも本気なんです。」

ただ、そう言ったただけだった。それで俺は気づかされた。彼も天才
のようでもなくただ、ただ一生懸命なんだと。

S i d e o u t

第四拾麓話。久しいチート。（後書き）

「ふはははははははははははは」

「ああ、とうとうイカレタカ」

「「それでは貴一と作者で送るあとがきラジオ」

「で、いきなり笑い出してどうした？」

「いやいや、ただ、コミケがもう少しといつことでテンションがかしいのだよ」

「まあ、おかしいのはいつもだがな」

「それでは」

「次回」

「「『魔王様降臨、満を持して！』」」

「ああ、俺が頑張って回避させていたのに」

「まあ、ドンマイだ。貴一君」

「「それではバイバイ」」

第四十七把。魔王様降臨、満を持して！！（前書き）

四拾七話掲載です。

コミケは線上了。あ、間違えた、戦場です。

第四十七把。魔王様降臨、満を持して!!

Side なのは

あの魔法陣を踏んだらそしたら、目の前には緑色の絨毯がありました。

「これはすごいわね」

プレシアさんがすでに転送されていたみたいなの。

「それよりもお母さん？」

「ん、どうしたのフェイト？」

「特訓ってなにをするの？」

「そうね。なのはちゃんにフェイトも、毎日とは言わないけど、ちゃんと魔法の練習はしているしね。」

「」「うん」

「けどさ、なんて言うか。フェイトたちの魔法ってクロノとか、貴一に比べるとレベルが・・・」

アルフさんが指摘した。

「そうだね。なのはは元々ジュエルシードの封印のために魔法を覚えていたけど」

「そうね、ユーノ君の言つとおり、なんで今回、急に特訓したいなんていったの？」

プレシアさんが口に指を当てながら聞いてきた。

「そ、それは」

「この前の事件です・・・」

私はそういった。

「この前の事件と言つと」

「あの内に来た」

「ああ、あの襲撃事件ね」

「はい、それで私はその・・・貴一君を助けるどころか」

「逆に、貴一に迷惑をかけちゃった。」

私が言いたいことはフェイトちゃんも、一緒だったみたいなの。

「なぐるほどね」

と、プレシアさんは笑っていました。

「それなら、この大魔導師プレシア女史にお任せ」

そういうと、プレシアさんは自分のデバイスを出した。

「それじゃ、アルフとユーノ君はいつものどおり。そして、二人はまずセットアップしてくれる」

「「はい」」

「レイジングハート、セットアップ！」

「バルディッシュ、セットアップ！」

そして、私たちはセットアップして、プレシアさんの前で待機した。

「それじゃ、まずは二人で私を一撃でもいいから攻撃に成功させて」

そう言うとプレシアさんは今までも魔力から考えられないぐらいの魔力量を感じた。

「なのは、油断しないで。お母さん。クロノよりも強いから」

「うん」

そして、私はフェイトちゃんと一緒にプレシアさんとの勝負を始めた。

Side out

はあ、三十体は楽だな。

「それでは、そろそろ特訓始めますか」

「ね、貴一君。私たちもあれを相手するの？」

美由希さんが少し強張って聞いてきた。

「あはは、いやいや。対戦相手は俺ですよ」

「そうなんだ。」

しかし、美由希さんは逆に強張ってしまった。

「おい、サン。お前なんか言っただか」

「いえいえ、なにも」

こいつ絶対なんか言っただな。

「それよりも貴一君。木刀はないのかい？」

恭也さんがすでに準備運動していた。

「あ、はいはい。投影開始」

そして、木刀を二本だした。

「やはりマジかで見ると、便利だな。魔法とは」

「そつでもないですよ恭也さん。」

などと、愛想笑いしか出来なかった。

「それで貴一君のモノはなににするんだい？」

「俺はこれで」

俺は自分の手にはめてある指輪を出した。

「今回は魔法をつかわさせてもらいますから」

「そうか。それで、ルールは？」

「そうですね。簡単に言うとロワイヤル形式で」

「分かった。それでは。おい美由希準備はいいか？」

「うん。いつでも」

「だそうだ。貴一君」

「ええ、それでは」

そして、俺は構えた。今度は姿勢を低く。

「は…!」

そして恭也さんの攻撃、それに連携するように美由希さんが俺が避ける位置に攻撃。・・・やはり兄弟の連携は強いな。

「っふ」

俺はそれを後ろに下がり避ける。しかしそれに気づいたのか、美由希さんは追い討ちをかけた。しかし

「てい」

俺の足のほうが速く、木刀を弾いた。

「それではそろそろ、魔法と行きますか。ムーン」

「今回は俺のようだなマスター。」

「ああ、そうだ。いきなりだが『ランス』だ」

「イエッサー」

「ムーン、セットアップ!!」

そして、俺がセットアップすると

「美由希、気をつける。」

「分かってる!」

「そつでもないですよ」

「な、」

「何時の間に!?!」

俺はセットアップした瞬間の光を利用して、二人の後ろについた。

「ムーン」

「カウントですか？」

「5だ」

俺は手で五を表現し、いくぞ。

「まったく。カウントスタート、5」

「ち、美由希」

「4」

「うん。分かっている」

「3」

そして、こちらの攻撃に対処するはずの二人は、俺との距離を詰めた。まあこっちが槍なんて使っているのが、いけないのか。

「2」

「今だ!!」

「1」

俺は二人が一瞬だけかぶる瞬間を狙い、美由希さんと恭也さんと

突いた。

「な!」「え!!!」

二人はここで突きをすとは思わず、そのまま食らった。

「0」

「終了です。」

約2mは吹き飛ばしたと思う。二人はさすがに受身の形は取っていたらしいが、これがガチの刃物だったら、二人とも串刺しだ。

「完敗か・・・」

恭也さんが、悔しそうに言っている。

「なんて、攻撃なのよ。これも魔法の強化?」

「いえ、美由希殿、マスターはうまく体の関節とタイミングを利用していただけです」

「なによ。それ」

美由希さんが、ガクっとなっていた。そこにさっきまで客席で見ていた土郎さんが

「まったく、完全に貴一君に翻弄されていたというのに」

「え、どういうことだ。父さん」

「なに、こちらは外から第三者として見ていたんだが、貴一君は自分が闘い易いように、その場の間合いをそのまま放置してわざとお前らをかぶさせたのだ。さっきのマネキンの戦いを見て分かっただろう。貴一君はどういう状況でも必ず自分の場所を作る。これさえあれば貴一君は負けないだろう」

いつまにか、士郎さんは解説と言うポディションになっていた。

「まあ、こっちもセットアップしてましたから」

「なにを言う。君のそれが胴着なんだろう。ならそれで勝負するのは当然だ。」

「まあそうでs y “ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア” ってなんだ？」

俺が話そうとしたとき、いきなりなのは達がいる草原のほうから、爆音とそしてピンクの閃光がした・・・まさか

「な、あれは」

「たぶん。なのはですよ・・・」

「「「「はい？」」」」

高町家の皆さんは、ポカーンとして、その閃光がした方を見た。

「まあ、行ってみますか？」

俺がそう言って、近くに魔法陣を展開させた。

第四十七把。魔王様降臨、満を持して！！（後書き）

ごめんなさい、戦場に出たせいで次回予告しかかけません

次回『戦闘狂と書いてバトルマニアと読む』

バイバイ。

第四拾八話。 戦闘狂と書いてバトルマニア（前書き）

四十八話掲載です。

第四拾八話 戦闘狂と書いてバトルマニア

転送した先には、草原ではなくクレーターができていました。

「・・・プレシアさん」

「えっと・・・なにかしら貴一君？」

若干、苦笑気味のプレシアさんに、脱力感のあるフェイトが横にいた。そして魔王は

「・・・」

倒れていました。見た感じ、軽い魔力の枯渇だろうが、まあ一応ユ一ノが診てるから大丈夫だろうが。

「なにかあつたんですか？」

「えっと」

そして、プレシアさんは話し始めた。

（数分前）

「まだまだ」

私は二人の攻撃を凌ぎさらに攻撃を軽くするぐらいしかしていない。

「はあ、はあ、はあ。フェイトちゃん」

「うん。なのは決めるよ」

二人は両極の動きをしてみせて私を翻弄してみせるが、

「なら、」

と、私はその領域に軽く雷を起こした。その結果二人とも守りに入ってしまった。

「あらら、それじゃ、あなた達は“また”貴一君にそうやって守ってもらうのかしら」

って、私が言ったら、

「なのは」「フェイトちゃん」

あれれ、なんか目が怖いんだけど。フェイトお母さんにそんな顔を向けないでよ……

「バルディッシュユー!!」

「イエッサー」

そしてフェイトは現時点での一番強い技であるフォトンランサー・フランクスシフトを使用した。たしかにこの技は高速だし弾数が多いがしかし目の前にシールドを張ってしまえばそうそう怖くわな

い。空中ならちがったけどね。

「お母さん。まさか私だけを相手してるわけじゃないよね？」

「え？」

気づくのが遅かった。そう内の娘は囿で、本命は上空にいるのはちゃん。だけど

「フェイト、あまりお母さんを甘く見ないでちょうだい。それぐらの障壁なら張れるから」

だけど、上空から

「なら、その障壁ごと壊せばいいんですね？」

「え？」

「いくよ。レイジングハート」

「オールライト」

「これがダイバインバスターを加工してグレードを上げた、私の全力全開」

上空には今まで見たことの無いほどの輝きがありそして

「スターライトブレイカー!!!」

って、ちょっとなにこの魔力量はってそれよりも

上から美由希さん、ユーノ、桃子さん。てか、フェイトと、アルフとプレシアさんは確か、城みたいな所に住んでいたよな・・・

「それではくつろいでください。」

俺はそう言っと、まだ鍛錬がしたかったため転送した。

Side プレシア

「あれ、貴一消えちゃった」

「フェイト、あいつたぶんどこかで特訓するんじゃないか？」

「ね、アルフ。」

「言っと思ってサーチしたよ。フェイト」

「ありがとうそれじゃお母さん」

「はいはい、いってらっじゃない」

「うん」

そして、フェイトも貴一君の後を追った。

「なあ、プレシア」

「なにアルフ？」

「完全に、だよな」

「ええ、そうね。完全に貴一君に、ね」

「うちのなのはも、だけどね。」

「そうですね。桃子さん。」

「ホント貴一君は罪深い男の子」

「だけど、あれはあれで貴一だろ」

「「「そうね。」」

私と桃子さんの言葉が同句同音でした。

S i d e o u t

さて、転送したものの

「マイロード」

「ん？どうしたソル」

「誰か来ます」

「あっそ」

「あれね、主は興味なし？」

「いや、どうせフェイトだろ」

「ほほう、主。何時の間にサーチしていたの？」

「いや、ただ単にあいつはムーンと同じ感じがする。」

「「ああ、納得」」

二つのデバイスが納得そして

「誰が、バトルマニア戦闘狂だ！！」

「いや、お前だよムーン。それと俺も若干そうだけど・・・」

そしてフェイトが降りてきたところで

「どうかしたか？フェイト」

「え！？」

フェイトはこちらが気づいていたことに驚いていた。

「まったく、俺が気づかないわけないだろ」

「あはは、相変わらず同じ年だと思えない」

「それで、どうした？」

「あ、う、うん」

なんかモジモジしているがこれから言われそうなことを考えると
・萎える。

「あ、あのね。そ、その勝負してほしいかな？」

「「ほら、言っただろ（でしょ）」」

「く、反論できない」

「えっとー」

「ああ、気にするな。こいつらの戯言だ。しかしフェイト勝負とは
「?」

「うん。ただ単に勝負してみたい、かなって」

「はあ〜」

「いいじゃんにか、マスター。さあ、俺を出してくれ」

「そうだな。それじゃフェイト。こつちも本気でやるから」

「あ、うん」

そして俺とフェイトはお互いに距離を置き

「ムーン、セットアップ」

「バルディッシュ、セットアップ!」

そう言い両方ともデバイスを投げ

「「イエッサー」」

そう思えばこいつら、両方とも肯定するとき「イエッサー」だな。
そんな考えを持ちながらバリアジャケットに身を包んだ。

そして、二人とも死神を模範としていることにお互いを見て気づいた。

Side なのは

「うーん」

あれ、なんで私寝ているんだろう？確かフェイトちゃんと一緒にプレシアさんに・・・あつ。そうだ確かスターライトブレイカーを撃つてそのまま魔力がなくなっちゃったんだ。

「ねえ、レイジングハート、なんで倒れちゃったのかな？」

「たぶんですが、おそらく空気上のマナをそこまで吸収できなかったのが要因かと」

「じゃ、今度からそれも練習なの」

「オールライト」

「あ、なのはじゃないか。もう大丈夫かい？」

アルフさんがそこに居ました。

「あれ、アルフさん。フェイトちゃんは？」

「あ、フェイトなら・・・ふふふ」

なぜか笑っているなの・・・まさか

「アルフさん、貴一君はどこ？」

「あはは、そんな顔でみないでくれ」

え、私は普通の顔してるだけだけど・・・

「たぶん、フェイトは貴一に魔法の特訓でもしてもらっているんだろっよ。」

「ふ〜ん。それでどこに行ったの？」

「安心しろ、なのは。その体と、魔力だともう今日は練習できないだろう。だけどあなたの母さんとプレシアが様子を見にいこうと、言っただけで準備しているから。」

「あ、わかったなの」

side out

第四拾八話。 戦闘狂と書いてバトルマニア（後書き）

「なあ？」

「うんなんだ？」

「お前って化物？」

「いきなりなにを言うんだ、貴一君」

「だってこれ、夏コミ最中に書いたものだろ」

「いや、正確に言うと付け足したんだ」

「そうか。ま、今回はがんばったんじゃないか」

「っ、ツンデレ？」

「エクスカリバアアアアアアアアアア」

「やっぱ、ここうなるのおおおおおおおおおおお」

キラーン

「それでは次回『死神VS死神』 それではバイバイ」

第四重九話。死神VS死神（前書き）

- ・ 四十九話公開です。あ、間違えた。掲載です……暑さで頭が……

第四重九話。死神VS死神

「ふ、」

「はあ！」

“ガキイン”

“ギイン”

「その程度かフェイト」

「まだ、まだまだよ」

しかしフェイトは息はすでに上がっていた。まったく無理をする

「それではこつこつのはどつだ？」

「「屋気楼」」

そして、俺はフェイトの後ろに瞬時に、回ったはずだったが・・・

「はあ、はあ、はあ。」

避けられた・・・嘘だろ

「マスター。あの嬢ちゃん中々な速さの持ち主みたいだぜ」

「マジかよ・・・」

「次は、はあ、こつちから行くよ」

「誰がいかせるか」

「え!？」

「お、おいマスター？」

「ふん。かげろう陽炎」

今度はムーンにおいての俺オリジナルの必殺技、その名もかげろう陽炎。

“ガン”

「え、バ、バルディシュ？」

フェイトは驚いている、まあそうであろう。持っていたはずの武器が吹き飛んでいるんだから、しかもその強制的ではなく、いつの間にかなのだから。

「い、何時の間に……」

「まだまだだね、フェイト」

「うっ、貴一。意地悪」

そんな顔で見ないでくれ、萌えてくる。

「これでも手加減したぞ。それに普通、これにさらに追撃を加えるんだから」

「むっ」

そんな顔をしながらデバイスを持つなよ・・・

「いくよ、バルディッシュ。貴一いくよ」

フェイトまた距離を取りこちらに勝負をかけようとする。

「いいよ、フェイト。ムーン『Finalモード』」

「お、マスターが本気だ。これはいい」

「おいおい、お前みたいに戦闘バトルマニア狂じゃないぞ。俺」

「ま、そういうことにしときましょう」

「おいおい、まあいい。それでは星川貴一、切って切って切りまくる」

「来る」

そして、俺はフェイトと近距離戦で勝負を始めた。

「はあ。せい、てやあああああ！」

フェイトの猛攻撃・・・だが

「振り抜きが多きすぎる。」

「え、きゃ、きゃあ」

した。

“キン、キン、キン”

そして、無残にもそれは俺の盾に阻まれた。

「これこそが俺が一番最初に改造した、ムーンの欠点だ。」

俺は堂々と、そういった。

これからの“あの事件”が起こるのだからこれくらいの特訓が調度いい。そう、今回俺はお前らにとって……

「むう、貴一。」

「あはは、フェイトも随分強くなったよ。あれを狙っていたとは思わなかったから」

「だけど、貴一には凌がれたし……」

「ま、フェイト嬢、相手が悪かったただけですよ。それにこの機能はマスターが考えたオリジナルですし」

「ん〜」

俺はそう言いながらフェイトを撫でてやった。

「ま、今度また特訓してあげるから」

「絶対だよ」

「ああ」

な、なんで、そんな詰め寄るよ、フェイト……

「あらあら、もう終わり？」

「え！？」

フェイト驚きすぎだよ……

「プレシアさん、覗き見はどうかと」

「あらら、貴一君は気づいていたの？」

「ええ、まあ。」

「む。貴一君はいつまでフェイトちゃんを撫でていたのかな」

あれれ、なんで魔王までいるんだ？

「え、い、いや、な、なのはこ、これは」

「おいおい、なのは、もう大丈夫なのか？」

「うん。ユーノ君に今日は魔法を使わなければ大丈夫だって。それ・よ・り」

これ以上、なのはを怒らせると後が怖いためやめた。しかし

「あ……」

そこまで寂しそうな顔をしなくても・・・

「それよりも、貴一君。どう私と戦ってみない？」

ああ、そうかフェイトが戦闘好きなのは貴方が原因でしたか。

「主、いいじゃありませんか」

「いいですけど。少し休憩していいですか？」

「ええ、どうぞ」

「それよりも、お母さん達はなんでここに？」

フェイトの質問は妥当だろう。

「ああ、それなら。私たちが頼んだのだ。」

その声は士郎さんだった。

「私たちが魔法の戦い方とはどういうのか見たかったからな」

「そうでしたか。まあ参考になるかは」

「わかっているさ。それにさっきの戦い方はどちらかという魔法ではなかったように見えたが」

「ええ、さっきの戦いはたぶん、フェイトのラスト以外は普通の戦いでしたから。それに俺のスタンスに合っているんですよ、こっぴ

う戦い。」

そして、十分後

「そろそろ、いいかしら」

プレシアさんがデバイスを構えた。

「ええ、ですが無理はしないように」

「ええ、それは分かっているは。貴一君、セットアップしたら？」

「ええ、今回はお言葉に甘えさせていただきます。サン、セットアップ」

「御意」

「ホント、貴方のバリアジャケットのセンスはいいわね。」

「それはどうも。サン、『2ndモード』」

俺は双銃を手にしてプレシアさんと、勝負を始めた。

第四重九話。死神VS死神（後書き）

最近の暑さは異常だ！！

次回『連戦は集中力を奪いまくる！？』

ラストに、やっとAS編に入るかな？かな？

第五十話。 連戦は集中力を奪いまくる！？（前書き）

はあくいスランプデース

第五十話 連戦は集中力を奪いまくる!?

「それじゃ、いきますよ」

「ええ、どこからでも」

俺とプレシアさんの模擬戦がはじまった。

「はああ」

俺の魔弾の嵐

「プロテクト」

それを凌ぐプレシアさん。

「ああああ、一応これでも私は大魔導師なのけど」

プレシアさんは挑発のような言い方をしてくる。

「ええ、それぐらい分かっていますよ。『戦慄の螺旋』スバイラル」

そして、俺はプレシアさんの周り一体に無数の魔弾を打ち込み

「シユート」

サンの合図で一斉に襲った。しかし

「轟きなさい、雷よ!」

俺はなのはのスターライトブライカーよりも強力な魔砲。これによりプレシアさんの雷と相殺された。

「う、嘘。そんな早く魔法陣が展開されるなんて・・・」

プレシアさんの驚きもそうであろう。なのはのスターライトブライカーはどちらかと言うとチャージの時間が必要不可欠だが俺のはそんなのを無視して放つ。

「このブラストモードは超火力型ですから、まあ魔力を根こそぎ持つていきますが俺にはあまり関係ありませんし、なんせ管理局基準の測定でSSSオーバーでしたから」

「え、SSSオーバーってそれ」

「ええ、エラーが出てしまいました。」

「な！！それなら」

「ふ、『戦慄の混沌』^{カオス}」

ブラストモードの一発は重いのが特徴だから

「プロテクト」

プレシアさんがシールドを張っても

「なによ、この魔弾。弾かれない」

ま、元々『戦慄の混沌』^{カオス}は追尾型の魔弾。さらにブラストモードによる強化ならばそうなるだろう。

「そ、それでも片手は「2ndモード」えっ!!」

俺はショットガンのようなブラストモードから双銃に切り替えて

「主もお人が悪い」

「うるせいよ、いくぞ。戦慄の」

^{スパイラル}
「螺旋」

「え、う、嘘。これじゃ」

「ええ、凌げませんよ」

状況を確認すると、まず片手で盾を張っていたプレシアさんにそこに無数の魔弾が困っている状態。

「し、しまった。これじゃ」

「シユート」

サンの言葉と同時にプレシアさんはやられた。

「う、嘘」

「私たち、二人がかりでどうにか勝てそうだったのに、貴一君一人で」

「しかも圧勝しちゃった……」

「いやいや、二人とも、俺が普通でないだけだよ。」

「なあ、貴一。連戦で悪いが」

「アルフもかよ」

「まあな、見ていてうずうずしていた」

「あ、それなら僕もいいかな？」

「はて、なんでユーノもなんだ？」

「ああ、いいが」

「これで、これでやっといままでの……（ボンリ）」

「なんかユーノから黒いオーラが……」

「それじゃ、こっちはいつでもいいぞ。貴一」

「はあ。それじゃいくよ」

side 観客席

「えーこちら実況の美由希です」

「おい、いきなりどうした。美由希」

「だって、さつきから貴一君の戦い方みてるけど・・・」

美由希はこれ、私には不可能だよ。みたいな顔をしている。恭也もそれにはさすがに文句は言えなかった。

「痛たたた、さすがに貴一君には勝てないか」

「あ、お母さん」

そこにさつきまで戦っていたプレシアが観客席にきた。

「ご苦労様でした。どうぞ紅茶です。」

「あ、どうもすみません。桃子さん」

「しかし貴一君はそれほど、強いのかね」

「ええ、土郎さん。しかもまだ、他にも技がありそうですし、それにまだソルを使っていますから」

「あ、そうだね、貴一君いつもなのは達に見せてくれるバリアジャケットとかムーンと、サンだもんね。」

「うんうん。」

「おい、二人とも、試合が始まりそうですぞ」

恭也の言葉に反応し二人はそつちを見た。そしてみんな驚いていた。それは貴一が私服の状態だったからだ。

「あれね、貴一君。セツトアップしないのかな？」

「だけど、なのは。さすがにユーノとアルフだから、普通には戦わないとおもっけど」

「違うわよ。ふたりとも」

「「え？」」

プレシアの言葉に二人はプレシアを見た。

「たぶん、貴一君さっきの試合で疲れちゃったんでしょっね」

「ねえ。お母さんさっき言ったことと違うような気が・・・」

「だから、すぐに終わると思っわよ」

「あゝ、プレシアさん。私たちにもわかるように」

「つぶぶ、美由希さんも見ていれば分かりますよ」

「はあ〜」

side out

ち、そろそろ疲れたな。さすがに連戦は体というよりも頭のほうに
来るか、それなら

「術式兵装、『獄炎煉我』。」

俺はネギまで使用する闇の魔法の術式兵装を今回が二回目だが使っ
てみた。

「な、あんたその姿は？」

「いくぞ」

「え、ちよっ！」

「アルフさん今は集中しないと」

「だけど、ユーノ。私はあんな魔法見たこと」

「それは僕も一緒です、ですが「話す余裕があるかな」っあー！」

俺はまずはユーノに殴りかかった。案外ユーノは適切な判断がうま
いため先に潰すのが得策、しかしそこにアルフが

「させるかああああ！」

蹴りを入れてくる

“ゴス”

「な、」

「無駄だ、今の俺は火山の如く固い」

「うち、しかも熱い」

「く、さすが貴一君か、アルフさん。ここは引いて大勢を」

「兵装解除、追加術式兵装『雷天大壮』。これでオワリダ」

「「え!!」」

“ドガ” “ボガ”

二人が驚いた瞬間、勝負は決した。

さらに観客席の人たちはポカーンとしていた。まあ、体の周りが溶岩のようだったり、雷だったりしたら、そうなるか

「ねえ、ねえ、貴一。その雷の姿、どうやるの？」

「あ、い、いや。これは」

てか、この魔法はお前らじゃ使えないしな・・・

「うふふ。こらフェイト、貴一君困らせてはダメよ」

「あ、ごめんなさい。」

「あははは」

「あれは私たちとは違う魔法でしょ貴一君（ボソ）」

第五十話。連戦は集中力を奪いまくる！？（後書き）

す、スランプナノカナ・・・

次回『番外編だよ』

もう少しでエース編です。

番外編。そんな一日（前編）（前書き）

スランプはながい

番外編。そんな一日（前編）

「なんで、こんなことに・・・」

そう、俺は今、すずかの家に座っている（椅子にグルグルに縄が巻かれて拘束されている）。こうなった理由は今日の朝にさかのぼる。

“トウルルル、トウルルル”

あれれ、今日は休みだから、ギターの練習でもと、思っていたが。なんだろう？

そして、受話器を“取ってしまった”。

「はい、」

「あ、朝早くからすいません。アリサ・バニングスと、いいますがこちらは星川様のお宅でよろしいでしょうか？」

はい！？・・・あのアリサがこんな口調で話すとは、さすがご令嬢

「ああ、そつだよ。アリサ」

「つて、貴ー？」

「なんだそのがっかりは。まったく切るぞ」

「あ、ちょっと待ちなさい。今日、暇？」

「え、あ？」

「暇ね。それなら今日も十一時までは家にいなさい！！」

なんてことを、まあ今日は家に居るけど・・・まだ七時半なんだが。

「お、おい」「それじゃ」「っておい」

“ ツー、ツー、ツー、ツー ”

「き、切りやがった・・・」

「なんですか、主。デートですか？」

「なんだ、そうですか。マスター、お疲れです」

「って、てめえら！普通の反応かよ」

「それで、マイロード。デートなんですか？」

お前もかよ、ソル。

「いやなんか、家に居ろ、という命令だった。」

「それは・・・」

「「そ、それは今が流行のツンデレー！！」」

「・・・おい、ソル。ゴミ箱どこだっけ？」

「えーと、たしか」

「ソルも調子を合わせるなよ！てかマスター。」

「少しは冗談だと思ってください、主。」

「まあいい。しかしなんなんだ一体？」

「「「はあ〜」」」

「いやいや、デバイスたちよ、なんだその効果音はまるで俺が

「バカなんです、主」

って、心を読むな。まあ十時までは家に居ないといけないようだから、

はあ〜。ま、別に休日だからと言ってすることもないしな

「さ、朝飯にしてギターでも弄ろう」

Side 麗しの四姉妹

今、すずかの家にはすずかを含め、四人の女の子がキッチンに立っている。ちなみに保護者のように監視しているのはノエルさんだ。今日は忍さんはデートのようので一日非番だったのだが、なにやらすずか達が（アリサが七割が）キッチンを使って料理をしたいと言いつつ出した。そして現在

「あ、あのアリサちゃん・・・その言い方は」

電話先の貴一の予定はこっちに合わせて（無理やり）もらった。その数分前のこと。」

これからなにをするのかはアリサが説明しだした。

「いい、あなた達。この前の貴一の料理をどう思った？」

リビングで私たちは、アリサちゃんの質問に

「え、おいしかったなの」

と、なのは。

「えっと、完璧？」

と、すずか。

「うちにほしいかな」

と、少し自重が必要なフェイト。

「私でもあそこまでうまくはいきません」

と、なぜか話しに入ってきたノエルさん。

「そうですね。ホントあれならどっかにお店を構えてもいいぐらい

ですね。まあこの前の料理ですけど」

さらに、ファリンさん。

「そう、そこなのよ！」

アリサが机を叩いていった。

「なんで、貴一は男なのに私たちよりも料理がうまいのよ！！」

「そう言われても」

「そうね、だから今日はそんなあいつになんかあつと驚くことでもしない？」

「えっと、アリサちゃん」

「それって」

「もしかして」

順に、すずか、なのは、フェイト。

「そう、私たちも料理して、あいつを驚かすのよ」

とのアリサの激説に三人は

「」「うん、その意見に賛成！」」

「それじゃ、料理スタート」

「「「は〜い」「」」

と、そのとき

「あの、お嬢様方。料理の経験は？」

「「「「.....」」」」

全員して沈黙。

「あはははは」

乾いたファリンさん笑いがリビングに響いた。

S i d e o u t

b、ブルッ!!

「今の寒気は.....気のせいかな？」

と、貴一はまたギターを弾き始めた。

「しかし主。ギターがお上手になりましたね。」

「そうかサン？」

「ええ、ちゃんと弾けていますから」

「そうか、それなら良かった。」

「しかし、マイロード。今日は随分とのんびりしていますね」

「そりゃ、久々に休日っぽい休日だもん。まあちょっと十時から変わりそうだが・・・」

「それはマスターの人徳ではありませんか？」

などと、ホント呑気な会話をリビングでして居た、俺らだがいきなり通信が入った

“pipipip” “pipipipip”

「あれれ、ギル爺かな？」

そして、俺は出たらなんとそこには母さんがいた。

「や、母さんひさし」「きいちゃあああああああああああああああああああ
あああああん!!」「って母さん?」

そして、今からでも画面から出てきそうな母さんの顔があった。

「こら、リリ。貴一が困っているぞ」

「あ、ごめんなさい。きいちゃんの久しぶりです」

「うん、母さんも父さんも元気そうで安心した。」

「ああ、こちらもだぞ、貴一。それにサン、ムーン、ソルジャーもご苦労さん」

「なにを言うかと思ったら、我はマイロードに尽くすまでだ。」

「あはは、ソル。言いすぎ。それよりも母さん達から通信なんてどうかしたの、いつもは手紙かなんかなのに」

「ああ、それについては」

「あのね、きいちゃん。今ね地球の近くの次元にいるから通信ができるのよ。だから今だ！！っと思って繋げて見たら、ビンゴだったわけよ」

「そういうことだ、貴一。しかしそれはギターか？」

父さんが今、俺が掛けているギターに指差して聞いてきた。

「ギター？」

母さんはやはりミッド人だからなのかギターを知らなかった。フェイトもプレシアさんも知らなかったしな。

「うん。父さん当たり」

「そうか、なに師匠に聞いた話だと、鍛錬ばかりしていると聞いていたが、」

「あはは、確かに鍛錬もちゃんとしているけど、自分の趣味ぐらい作るよ」

「そうよ、あなた。きいちゃんもちゃんと成長しているのだから」

「そうか。ああ、そうだ、クリスマスぐらいには一時的だが帰省するからな」

「うん、了解。そのときはお土産話楽しみにしているから」

「ああ」

「うん。それじゃきいちゃんそろそろ通信が途切れちゃうからバイバイ」

そして、通信が切れた。

「さて、ギターの続きでもするか」

と、その時

“ピンポーン”

インターホンが聞こえた。

「あれってもうそろそろ十時か」

「それじゃ、サンとムーンはスリープモード、ソルは待機」

「御意」「イエッサー」「イエス・マイロード」

多種多様の返答、そして皆、定位置のところについた。そしてドア

を開けたら、

「はいどう・・・ぞ?」

そこには縄の持ったファリンさんと申し訳ありませんオーラ全開のノエルさんがいた。

「申し訳ありませんが」

「すずかちゃんの命令で、捕獲させていただきます」

「はい?」

俺の疑問は直ぐに解消された。まあ簡単にいうとその言葉どおり捕まった。

そして冒頭に戻ります。

「なんでこんな・・・」

まあいいか。こんな休日も。

貴一はなににも知らない。これからが大変だと言つことを・・・

番外編。そんな一日（前編）（後書き）

スランプが・・・続く

番外編。そんな一日（後編）（前書き）

スランプから抜け出せない・・・

番外編。そんな一日（後編）

貴一が拘束される前のすずかの家での話。

Side 麗しの四姉妹

「それで、みんなは料理の経験は？」

アリサの指揮の元四人はまずなにを作るかについて話していた。

「え〜と、お母さんの手伝いを少々」

「全然無いかな」

「ちょっとは出来るかな？」

上からなのは、フェイト、すずか。

「そう・・・なのね」

「ね、アリサちゃんは？」

なのはの質問に

「すずかと一緒よ。やったことはあるけど、ぐらいいね」

「うーん。それなら、すずかちゃん」

「ん？どうしたのファリンさん」

「今回はオーソドックスにカレーとかにしたらどうですか？」

「うん。そうね、不味かったら元も個もないものね」

「それじゃ、私達はなにすればいいの？ノエルさん」

「え！わ、私ですか？」

そこで声が掛かるとは思わなかったらしくノエルはビックリしていた。

「そうですね。お姉さまに聞けば、まず失敗はしないでしょうから。」

「」「」「」「」「」「」

他四人も頷いている。

「わかりました。それでは皆さん、エプロンを付けてください。そして手をちゃんと洗ってください。」

以上が、すずかの家のことでした。

「しかし、あのう、ファリンさん？」

隣で俺の監視をしているファリンさんに声をかけたら

「申し訳ありませんが、貴一君。ここは我慢してください」

「いや、なんていうかこの状況は慣れたんですが、なんでこうなったんですか？」

「まあまあ、もう少しですから、そのままお待ちください」

「はあ」

なんだろう。しかし座っているだけだとつまらん。

「（マイクロードが簡単につかまるから・・・）」

「（おいおい、あそこにノエルさん達だったから抵抗しなかっただけぞ。それに一応俺小三だし）」

「（あはは、そういえば主はまだ子供でしたね）」

「（そうだよ。まったく）」

「（お。捕まっているな）」

俺とデバイスがいつもの極秘念話をしている時急に割り込みしてきたものがいた。

「（おいおい、分かっているなら助けてくれよアルフ）」

「（すまないね。フェイトの命令で私も番人の一人なんだよ）」

「（はあく。俺の休日が）」

「（まあ、案外後でよかったとあたいは思っよ）」

「（はあく？なんだそりゃ）」

「（おっとおしゃべりが過ぎたみたいだし。そろそろ来るだろうよ）」

「そういうと、子犬状態のアルフは猫の軍団の中に入っていった。いつのまに仲良くなったんだ？」

「ファリン。“貴一様”は・・・ファリンちよっと」

そして、キッチンからノエルさんが出てきて俺と目が合つと驚いた顔をたぶんしたのだろうすぐにファリンさんの下に行き、

「ファリン、すずかお嬢様の話を聞いていましたか。ここに着いたら縄は解くようにと言っていますとよね・・・」

「え、え、で、ですがお姉さま。そのあとアリサちゃんが、椅子にさらに拘束しといて。って言われまして・・・」

「おいおい、アリサ。さすがにこれは酷いのではないか・・・はあく」

「ファリン。アリサ様の性格をよく考えてください。申し訳ありません。今すぐに解きますので“貴一様”」

「あはは、ある意味慣れてきてしまいましたよ」

「うう。ごめんです。貴一君」

「いいですよ。それよりなんで俺は半分拉致的にここに来させられたんですか？」

「ああ、それは！“# \$ % &、（）」

ファリンさんはなにか言おうとした時ノエルさんが無表情でファリンさんの口を押さえてそのまま

「それでは貴一様、ここで今少々お待ちください。」

「！“# \$ %」

ファリンさんを連れて何処かに行ってしまった。・・・ファリンさん臥床。

「しかし、ここに居ると言われたら何処かに行くのが礼儀だろ」

「（それはさせないよ）」

「（な、アルフ。貴様俺の邪魔をするか）」

「（フェイトが、貴一がここから出ようとしたら力づくで止めるよ
うにと、言われたんだ）」

フェイトさくん、なにを君は使い魔に頼んでいるの。

「（それじゃ、GO）」

「GO?」

と、アルフの号令で一気に猫が、猫が

「「「」

「ぎゃ、ぎゃあああああああああつあああああつあああああ
あああ!」

この前のすずかの家最初に来たような感じになりました・・・

「い。おき・さい。」

なんだ、俺は一体

「いい加減おきなさい!」

「う、うわああああ」

な、なんだ。と、周りを見たら、アリサにすずかとなのは。そして
なぜかアルフを睨みまくっているフェイト。

「いきなり耳元で叫ぶなよ、アリサ」

「う、るさいわね。起こしても起こしても起きないから心配して・・・」

なんか最後辺りが聞こえなかったが。

「てか、今何時？」

「あはは、今ちょうど12時だよ。」

「ああ、それでなのは。このいい匂いはなんだ。」

「それは、カレーだよ」

お、カレーか。てか

「おい、そう思えばなんで俺をここに呼んだんだ？」

「」「」「あ……」「」「」

四人が四人とも同じ反応。

「いいじゃないそんなことは。それよりお腹空いてないの？」

「ああ、誰かがここに運んで着てくれたおかげでな」

「な、ならちようどいいわ。」

アリサがそう言うといそいそと、四人とも座りだした。ちゃんとテーブルには俺の分もあった。

「んじゃ、いただきます」

「」「」「ジーーーー」「」「」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「「「「「ジーーーーー」」」」」

「ええい、食にくいわ。どうしたお前ら」

「「「「「き、きにしないで」」」」」

いや、四人が同じこと言い出すのはなんかあるんだろうな。まあいいかその前に腹後ごしらいつと。そして俺はカレーを一口食べた。

「「「「「(ゴクリ)」」」」」

「うん。普通だな」

俺がそういうと、なぜか全員ホットしてました。なぜ・・・？

「それじゃ、私たちも」

「「「「「うん」」」」」

そういうと、四人とも食べ始めた。しかし

「だけど、なんで貴一君は猫さんたちに漬れていたの？」

さすががさっきの状況の質問がきた。

「ああ、あそこに居る。犬の号令で俺が襲われた。」

「へ〜。そうなんだ」

「ここから、フェイトと、アルフの念話です。」

「ア・ル・フ」

「いや、いや、ふえ、フェイト。だってこの部屋から出すなって・・・」

「言い訳かな？」

「ち、違うんだ。だ、だからその笑顔はや、やめ」

「うんうん。それじゃ家でね」

「・・・はい」

と、プレシアさんの子供だなど、思わせるお説教でした。

「そうそう、お前ら、初めての共同の料理はどうだった？」

俺からの質問。

「ま、よかったわ。」

アリサより

「意外と難しいかな」

なのはより

「今度からはお母さんの手伝いでもしようかな」

フェイトより

「うん。楽しかった。・・・あれ？」

すずかより

「うん。どうしたのすずか？」

「ね、今の質問って？」

「そら、貴一に決まって・・・貴一から？・・・」

そして、アリサ達は順に俺を見て、

「うん？モグなんだ？モグモグ」

カレーを食っていますから。

「あの、貴一？」

「うん。なんだフェイト？」

「もしかして、気づいていたなの？」

「まあな。」

「な、なら最初からいいなさいよ!!--」

「その前にアリサちゃん。ここに連れて着といてなんも言わないで食事のほづが不自然なんじゃ」

すずかの指摘は最もだ。

「それなら、もくもく食べてないで感想言いなさいよ。」

おいおい、アリサ逆ギレはいけないだろ。

「あ、すまんすまん。」

「それで、」

「うん?」

「味よ、味。はっきり言いなさいよ。おいしかった」

「もちろんだ。お前らが作ったんだろ。ならおいしいさ」

「」「」「うん」「」「」

そんな一日でした。

番外編。そんな一日（後編）（後書き）

すみません。急ですが、今回スランプ脱出のため少々違う小説を書いてみようと思います。なので少々、掲載が遅くなるでしょうが、頑張って書いていきますのでこれからも応援よろしくお願いします。

ちなみにそれもオリ主最強物です

第五十一把（A' s 編一話）。読まれだす書（前書き）

久々に書けました。

それではA' s 編スタート。

第五十一把（A's編一話）。読まれだす書

六月四日。その日は命運を別つ日であった。

ある者は家族が増え、ある者は復讐ために動き、ある者は夫の仇。そしてある者は

「Z～Z～Z」

ねてました。

「あ、主。起きてください。」

「んあ？」

「凄まじい魔力が観測されました、その一瞬ですが」

まったく。どうせ闇の書の起動だろうが、まったくそんなんで俺の睡眠を取るなよサン。

「なに、一瞬なんだろう。別に気にするな」

「で、ですが」

「きにしたら、負けだ」

そういつと俺は寝た。そう俺はこの日から、作戦を始めることになった。

最初の作業は俺が学校に行っている様に仕向けること。もちろんなのは達にも気づかれぬようにするためだ。ちなみにこれをデバイスに説明したさい

「マスター、今頃の反抗期か」

とか、

「そんなの、私が私が。」

とか、

「イエス、マイロード」

とか、様々だった。

「よし、それじゃ図書館でも行くか。ソル、行くぞ」

「なんだい、マスター、学校サボって図書館行くのか？」

「まあな、こつちにも色々あるんだ、てか昨日のことを調べてくる」

「なんだ、昨日こつて？」

「ムーン、あとで教えてあげるから、主、それなら分かりました。

お気をつけて」

「ああ、それじゃ行ってきます。帰りは遅くなるから」

そして、午前中ははやての家を遠くから調べて、やはりあの猫が監視しているのがわかった。

そして午後になり図書館に到着、そして居ましたよ、今回で主人公になる車椅子の女の子。

「うづうづうー！ー！ー」

「なにやってんの？」

「うひゃっ！ー！」

後ろに急に声をかければ、まあこうなるか。しかし、車椅子の子がこんなにもがんばっているのに、誰も何もしないと世界は悲しいな。てか

「一応、ここ図書館だから静かに」

「あ、ごめんなさい。」

「それより、その本？」

「あ、別にええよう」

「はいはい、気にしないきにしない。」

俺はそう言つと、その目的の本を取って上げた。

「ありがとな。」

「いいよ、大した事してないし。それに同年ぽかったしな」

「え、私と同年？」

「ああ、9才じゃない？」

「すごいなあ。そうやで、私も9才」

「そうか、それじゃ」

まあさすがにこういう場合はしつこくせず、ギャルゲの如く地道に

「あ、待ってえな。名前聞いてもいい？」

あれれ、案外いけるもんだな。

「星川貴一だ」

「あ、私は八神はやてや。」

「（またですか、マイロード）」

なんか聞こえたような気がしたが。

「それで八神は」

と、言いかけたとき

「あ、はやてでええよ。私も貴一って呼ぶから。」

そして、俺ははやての手伝いをしながら時間を過ごした。

「それじゃあなはやて」

「うん。貴一。明日も会える」

「ああ、たぶんな」

「そな、じゃあなあ」

そういうとはやては俺に手を振りながら俺はそこから離れた。

Side はやて

貴一君か、なんかすごくぶっきら棒に見えたけど、話して見るとすごくいい人見たいや。

「あれね、はやてちゃん。もしかして外で待ってたんですか？」

そこに私の新しい家族のシャマルが居た。

「違うんよ。シャマル」

「あらら、はやてちゃん、ご機嫌ね」

そ、そうなのかな。まあ私はこんな足で学校にも行けんかったけど、貴一君か………

side out

さてこれで、アクションはした。まずはこれではやて達に闇の書の

バクについての説明だな……

「（マイロード、帰ったら説明してくれますね。）」

「（ああ、いいだろう。今回の事についてな）」

そして、俺らは家に帰り今回の事件について話した。

「それでは、第一回、家族会議を行う」

「それで、主。反応した所にはなにがありました？」

「ああ。サン、在ったのは家だ。」

「おいおい、マスター。それじゃ、そこにその魔力の持ち主がいるんじゃない？」

「いや、待てムーン。そこには一人の女の子しかいない。」

「もしや、マイロード…」

「ああ、たぶん間違いないだろうな」

「どうかしたのソル。」

「ああ、反応のあったポイントに行った後マイロードはそのまま図書館に行ったのだがそこで女の子にあってるのだ。」

「「おいおい、またですか」」

「いや、そこじゃない重要なのは」

「はい。マイロードは何時にそれに気付いたか問題で」

「まず、その家の表札が八神だったこと。八神てのはこの辺では珍しいからな。」

「だが、マスター。家族構成までなんでわかったんだ？」

「あんな時間から図書館にいてさらに足が悪く車椅子を使用。それなのに保護者が見当たらない。と、なると」

「なるほど、主。」

「そして、魔力値は中々の物でしたし」

「だが」

「「だが？」」

「ええ、少し魔力の流れを見たのですが、不自然にどこかに吸い取られているみたいだな」

「ああ、そうなんだ。そこで、サン悪いが」

「また、ハッキングですね。」

「ああ、今回はさらに奥、出来れば危険度SS以上まで」

「難しい注文を。しかし御意です」

「それで、今度からはサンはこのまま自宅待機、ムーンは連れて行くから。」

「イエッサー」

「よし、今回はこれでいいだろう。さて、明日も調査だ。」

「しかし、マイロード。なぜ今回も管理局には？」

「ああ、それはだな、あの時家の周りを見たか？」

「ええ、もちろん。私が調査して、そしてそこ二匹の使い魔がいましたよね。」

「ああ、だがあの魔力反応は俺らの知人にもいない。と、なる必然的に外部のものとなる。しかし外部の者にしては妙だと思わないか？」

「妙？」

「ああ、たった九歳の女の子だぞ。力づくで、いそのままに出来るはずだ。しかしなにもしない、まるで何かを待っているように」

「ま、マイロード？」

「今回は、ホントになのは達は巻き込みたくなかったな」

俺はそういって、今日の終了を迎えた。

第五十一把（A's編一話）。読まれたす書（後書き）

あとがきラジオ

「わああああああああああああ」

「わああああじゃねえよ。このバカが!!」

「だって、だって、マジ恋がマジ恋が」

「うるせい。まあとにかく復活か？」

「まあね、ちょっとてか、かなり更新は遅くなりそうだけど。」

「そうか、エクスカリバアアアアア」

「久々のアップでもこうなるのおおおおおおおお」

「さて、次回『今回はダークヒーロー』それではバイバイ」

「あ、もうひとつの小説もヨロシクね」

第五十庭（A's編二話）。今回はタークヒーロー（前書き）

五十二話掲載です。

始まってしまった新学期。

第五十庭（A's編二話）。今回はダークヒーロー

そして、次の朝。昨日と同様に学校には催眠魔術をかけておいてある。そして、今日も図書館に行ったら、やはり午前中からはやては居た。

「よ、はやて」

「あ、貴一君。あれ、今の時間はまだ学校やないの？」

「なに、気にするな。これでも頭はいい方なんでね。学校に行かなくてもなんとかなるんだよ」

「ああ、そんなことはいけないよ。ただどこに居るんなら私が罰を与えるわ。というわけで昨日と同じくよろしゅう」

「うーい」

そうして、俺らは図書館にずっと居た。はやては案外普通の本を、俺は医学者を、まあ完全にアンサー・トーカーを利用してはいるが、この前のジョーカー戦で医療にも知識があっても好いことに気付いた。まあ大体はソルがどうにかしてくれるが。

「なあ、貴一君。そろそろお昼やな。」

「ああ、つてもうそんな時間か。」

「なら、うちで食べへん？」

「あ、いいのか？」

「うんうん、うちにはなお姉ちゃんや妹とペットが居るんや、それ貴一君に紹介したいねん」

おっと、これはこれで好都合。

「ああ、じゃあお言葉に甘えさせてもらおうよ。」

「了解や、たぶんそろそろ来る頃やから、入り口付近に行こう。」

「ああ」

俺ははやての車椅子を引きながら、ソルとムーンに念話を言った。

「（いいか、お前らもステルスで最大限、魔力を隠せよ）」

「（―イエッサー）」

「（―イエス・マイロード）」

こう言わないと、たぶんあのトンカチを持っている赤い子とか刀を持った武士女とかに睨まれそうだしな。

「あ、シャマル」

「あ、はやてちゃん。あれそちらはどちら様ですか」

そういうのはアニメでは見たことのない姿のシャマルだった。

「あ、この人は」

「どうも初めまして、星川貴一っていいます」

「あらあら、はやてちゃん。そういうことですか」

なぜかシャルマルが笑っているが、
そして俺らははやて邸に着いた。やはりアニメで見るよりも広いな
あゝ。

「それじゃ、お邪魔し「誰だお前は~~~~!!」」

なぜか、完璧に魔力を隠しているのに、この赤い子は襲ってきたよ。

「こら、ヴィータ、お客さんなんやから」

はやてが、玄関に入るなり注意。シャルマルは苦笑いのようだ。

「あ、それはすまねえ。ヴィータだ。」

そういうと赤い子は一礼した。そして、ダイニングに案内されたら、
居ましたよ、狼と武士っ子。

もちろん最初には睨まれましたけど……

「はいはい、みんな、紹介するで、そこの長髪がシグナム。でさっきの赤い子はヴィータ。そして図書館に迎えに来てくれたのがシャルマル。そしてこの大きい私のペットがザフィーラ。以上が私の家族
や」

「あはは、凄く一杯いるね。てか、外国の人だよな？」

「まあ、私の遠い親戚の人たちだから、けど日本語はばっちしや。」

「それよりもはやて、ご飯にしてくれ。」

そのときヴィータはすでにハングリーだったようだ。

「こらヴィータ、客人の前で」

それに怒るのはシグナム、やはり守護騎士のリーダー的存在だな。

「あはは、待つてな、ヴィータ。貴一君も適当にくつろいでて」

「ああ、了解だ、しかし料理ははやてがやるのか？」

「ああ、はやてのごはんはギガうまだからな」

「おお、それは気になるな、俺も料理はするんだが。丁度いい俺にもやらしてくれ」

「（出ましたよ、この人の家事スキル……はあ〜）」

なんかデバイスがなんか言ったようにも聞こえたがまあいい料理料理

「ええ、貴一君も作るんか？」

「まあね、だから一緒に料理してみない？」

「いいな、それ。よっしゃ、今日のお昼はオムライスにするで」

そして、俺らは料理を開始した。そして出来上がり、ヴィータが盛大に大盛りを一人で食べて、シグナムがスプーンを折っていたのは俺とシヤマルしか知らない。てかあの時、騎士として、騎士としてとかそんな感じで呟いていたけど……。

「それじゃ、また今度ね」

「あ、うん。貴一君もあまり学校サボらないようにね」

はやてさんなんて痛いことを、

「おい、貴一。お前の料理うまかった、また来いよ」

ヴィータが手を振ってくれた。他は、シグナムは一礼してるし、ザフィーラはこつちを向いてくれないし、シヤマルはいつも笑顔で見送ってくれた。

653

そして、家に着き、サンの報告を聞いた。

「それでサン、どうだった？」

「ええ、主今回のケース場合、もっとも考えられるのが“闇の書”と、いうロストロギア。危険度は最上クラス。」

「それで、管理局に記されていたことは？」

「はい。それではまず闇の書についてですが。第一級搜索指定がされている、最上級に危険なロストロギア。」

666のページを持つ黒い書物型のストレージデバイスで、ユニゾンデバイスを管制人格にもつ。当初は全てが白紙だが、「リンカーコア」を吸収する事でページに文字が記載され、全てのページが埋まるとユニゾンデバイスとして本来の機能を発揮、所有者と融合して絶大な能力を与える。しかしこの際に「融合事故」を起こす為、所有者は一頻りの暴走の後に死亡、「闇の書」は初期の白紙状態に戻り次の所有者の下へと転移する。「リンカーコア」を吸収する機能は「蒐集」と呼ばれ、完成時は「蒐集」した「リンカーコア」が使用経験のある「魔法」を行使出来る様になる。

破壊・改竄を加えても即座に修復する「無限再生機能」とエース級魔導師の戦闘力を持つ「ヴォルケンリッター」を発生させて「闇の書」本体や所有者を守らせる「守護騎士システム」、そして何よりも、本体の消滅や所有者の死亡をトリガーにして新たな主たる資質を持つ者の下に転移再生する「転生機能」がある為、完全破壊は不可能とされていた。

ページを埋める為に人間・人外を問わず多大な被害を与え、最後には周辺の次元世界をも巻き込む程の暴走の果てに所有者すらも殺し、しかも完成に向けての蒐集を怠ると所有者の「リンカーコア」をも侵食して死に至らしめる、更にはすぐさま次の犠牲者を生み出すその凶悪性から時空管理局では忌み嫌われており、「闇の書」という名称はそこから付けられた。本来の名前は「夜天の書」「夜天の魔導書」と呼ばれる書物型の高性能「魔法」記録装置で、所有者と共に旅し、各地の優れた「魔導師」や「魔法」を記録として半永久的に残す為に造られた。「無限再生機能」は本来は記録の劣化や喪失を防ぐ為の単なる「復元機能」であり、「転生機能」もただ旅をするための機能に過ぎなかったが、歴代の所有者の誰か（又は複数）が行った改変の末に暴走を起こし、「防御プログラム」を始めとする各種機能が破損、変質して、本来の目的であった「魔法」記録の為に無差別の「リンカーコア」蒐集を強要、最後には所有者の命すら奪う悪辣な存在へと成り果てた」

「随分と調べてくれたな。」

「はい、しかしこの情報をすべて会得する際、少々気付いたのです
が」

「ん？」

「この情報、なぜか極秘の中にあっただんです。なぜか今の中将クラス又は、最高議会のパスが必要でした」

「そうか。てか良く調べられたな、さすが俺のデバイス」

やはり、この間の書の改竄には管理局が一枚噛んでいるらしいな。

「マスター、ヴァルケリッターと称される守護騎士プログラムは、
やはり」

「ああ、たぶん彼女達のことだろうな。」

「ですが、この記載によると、蒐集を怠るとリンカーコアが侵食されるとありますが、まさか」

「ああ、そのまさかだろうな。はやての足の悪い原因だろうな。」

「しかし、マイロード。あの子は私が聞いていた限りではそんなことはさせないような気が」

「ソル、お前中々、いいところ突くな。しかしそれがホントなら」

「間違いなくその子を犯されていくわよ主」

「マスター、それにこの書は厄介な機能が多すぎる、まずこの無限再生機能、そしてなによりもこの転生機能だ。これじゃ魃の尻尾取りだ。」

「ああ、そうだが、逆にいえばこの機能さえ抑えればこの闇の書のバクは無くなる訳だ」

「この件に関しては管理局に伝えた方が良いのではないか主？」

「ダメだ。この件は絶対ダメだ。」

「な、なぜです。こんなにも危険なモノなんですよ。それにこれはリンディさんの」

「ああ、知ってる。だからだ」

「え！？」

「いいか、この資料にもあるように、間違いなくこれは脅威のなんでもないが、しかしこの前に言っただろ、なぜか八神家は観察されていると、そうなる一つの結果がでる。」

「ああ、マスター。一つの結果ってなんだ？」

「いいか、この記載道理にいけば、遅かれ早かれヴァルケリッター達は主のために蒐集を始める、そして完成すれば暴走。そして暴走中は転生は出来ない、それは融合事故のせいだ。もしかが、それを狙っているのがその監視をしている奴らだとすると？」

「主、その言い方だと、管理局の誰かが、その子が今度の主だと分かって、暴走直後にその子ともども」

「ああ、たぶん、封印だが虚数空間に入れる気だ。俺はそう思う」

「な、それじゃマスター今回は完全に管理局の敵に回る気が、それはさすがギル殿でも」

「んなこと、関係ねえよ。一人の女の子も救えず、なにが正義の味方だよ。まあ今回の件は俺の暴挙だ、抜きたいのなら」

「主、お忘れか、私たちはしがない指輪ですよ」

「へ、たぶん、あの元マスターもこんなことするだろうよ、さすがその息子。マスター、俺らそれに一枚噛みませ」

「マイロードの思うが俣に」

「すまんな、お前ら。それではこれからの作戦を説明する」

そして、俺はA's編での原作ブレイク作戦を開始した。

第五十庭（A's編二話）。今回はタークヒーロー（後書き）

なぜ、九月なのに熱い……………

ラジオのアンケート募集中、それでは次回『始まる同棲……………
いいな』

バイバイ……………暑い

第五重三話（A's編三話）。勝負のときだ。（前書き）

すみません。題名変えました。なんか長くなったので、区切りました。

第五重三話（A's編三話）。勝負のときだ。

「はあ」

今、この俺ははやての家にいる。それも魔力を隠さず、しかも正面から、事は数時間に遡る。

「さて、今日は、訪問だ」

「マイロード、元気そうですね」

「なにを当たり前のことを言うんだね、ワトソン君」

「誰もそのような固有名詞ではありませんが」

「まったく、ソルは、マスターのギャグすら、切り刻みやがったな」

「と、言うよりも元々ソルに笑いを問うのはどうなのかしら？」

なんか言われたい放題だな、ソル。

「それよりも、お前ら分かっているんだろつな」

「もちろん、ま。」

「マイロードの作戦通り、今回は」

「“俺ら”で相手するんだろ？」

なんかこいつら、日に日にシンクロしてないか？

「ああ、そうだ。なにせロストロギアの守護騎士だからな、なにが出るか分からんし」

「私の調べた資料でも、その情報は無かったわね。それにそのユニゾンデバイスについても」

「それは、おいおいだな。まずは今回はまず、闇の書にバグがあること、そして、現在もはやてが危険なこと。」

「しかし、マスター。もしだがホントに管理局の敵になったとして、あいつらと戦う事に躊躇があるなら」

ああ、ムーンは心配しているだろうな、俺がなのは達と戦うことに罪悪感があるんじゃないかって

「安心しろよ、俺はあいつらなら“本気”で戦えるから、それにこれが終わったら、土下座でもするさ」

「へ、その言葉を聞いて安心したぜ。」

「それではマイロード、そろそろ、行きますか？」

剣の形をしたペンダントが、俺にいう。

「それじゃ、作戦開始だ」

「イエス・マイロード」

「イエッサー」

「御意」

そして、冒頭に、戻る

しかし、さすがに緊張するな。そして、俺ははやて邸のインターホ
ンに触れた瞬間

どっかの世界に、飛ばされました。はい、そしてそこには、四人の
守護騎士が居ました。

「貴様、なにも……！！」

最初はシグナムが俺に殺気を放ちながら。

「な、お前。貴一じゃないか？」

そこにヴィータが驚きを隠せない顔をしていた。

「もしかして、はやてちゃんに近づいたのは私たちが理由かしら？」

そこに、笑っているが殺気、剥き出しのシャマル。そして、俺の答
えは

「ああ、そうだ。俺ははやてが闇の書の主だから近づき、そして

俺はちょっと間を置いた。まあその前にさっきの発言で四人とも殺
気が凄いの凄いの、しかし、俺はこう言葉を続けた。

「助けにきた。」

俺の言葉に、最初にアクションしたのはヴィータだった。

「ふざけるなああああああああー!!」

ハンマーで俺に向かってくる。それに続くように、他も動き始める。

「いいか、闇の書にはバグがある。」

「ふざけるな、あたいらが一番闇の書のことは知ってたよ。」

そして、ハンマーを振り下ろす。さすがに直撃は凌ぐため、後方に下がるが

「その通りだ。貴様の言葉などに、惑わされないぞ」

シグナムはそれを待っていたかのように、俺の後ろに居た

「し、しまった」

そして、俺は腰に掛けて、衝撃を受けた。まあ保障のために体は強化しているがこれは

「ぐ、グハッ」

そして、俺がよろめいた瞬間、守護騎士が全員で俺にとどめをさした。

S i d e ヴォルケリッター

「お前がそのような者とは思わなかった。」

「なんで、なんで。よりもよってあいつだったんだ」

「しょうがないわよ、ヴィータちゃん。これは私たちの闇の書の問題よ、それにあんな魔力を出しながら、来たとうことはもう他も知られているかもしれないわね」

シヤマルは、少し落胆的な口調だった。まあ、それは最初の印象のせいであろうか、彼がこんな事をする子には見えなかったため、他の特にシグナムは落胆していた。しかし

「お前ら、まだ、そう思うのは早い。見る、吹き飛んだ先を。」

ザフィーラが指す方向には貴一は居なかった。

「な、なぜだ。我らの攻撃は」

その時、不意に後ろから声が掛かった。

「痛ててて。まったくさすがの守護騎士ってことか」

そうそこには、無傷の貴一が居た。

S i d e o u t

痛たたたた。さすがの守護騎士。この連携は厄介だな。そして、俺

は次の作戦に移った。

「なあ、なら、賭けをしないか？」

「「「賭け？」「」「」

四人とも、なんだこいつはと言う反応。

「ああ、賭けだ。しかもお前らに得な。」

「ふんそんなのは騙されるかよ。お前なんかあたいだけで。」

と、もう一度ヴィータが突っ込んで来そうだったが

「待て、ヴィータ。ホントに戦闘が目的なら、さっきの時にとっくに我々は不意を付かれていた筈だ」

おお、さすがシグナム。

「それじゃ、一応聞きますが、それでも、すぐに終わると思いますよ」

あれね、こんなに、シャルは黒かったけ？

「ああ、それはだな。俺とあんたら四人で勝負して俺が勝ったら話を聞いてくれ、そして俺が負けたら潔く、はやての前から消えよう。ちなみにこの行為は俺一人の独断だ。だから他は誰もいない、これは信じてほしい」

俺がそう言つと、

「そうですね、なら、どうしますシグナム？」

「このベルガの騎士が勝負を逃げ出すものか。貴一ならばその言葉に偽りは無いな」

「ああ」

俺は短く答えた。そして

「ならば、我々も、それに答えとしよう。」

そして、四人は順に言った。

「烈火の将 剣の騎士シグナム」

「紅の鉄騎 鉄槌の騎士ヴィータ」

「風の癒し手 湖の騎士シャマル」

「蒼き狼 盾の守護獣ザフィーラ」

そう言うと、四人はさらにさっきよりも強い殺気を俺に当てる、ただけど、これぐらいが丁度いい。

「さあ、いくぞソル」

俺はそう言うと、ペンダントを高く上げ。

「Set up・Ready?」

俺のそれに答えるように

「Unlock!..!」

そして、俺は白いマントを羽織り、黒い騎士の装備をし、目をバイザーで覆った、この姿、そう、ライトアンドダークネス。

「さあ、始めよう」

俺は不意に笑う」

Side ヴォルケリッター

四人は目の前でなにが起きているか、分からなかった。貴一がセツトアップした瞬間、我々よりも遙かに大きい魔力を感じた、あの玄関で確認した、魔力とは非にならないほど。

「さあ、始めよう」

その言葉が、我々に聞こえた時不意に誰もが恐怖を覚えた、そう彼は笑っているのだ。この四対一の中。まるで子供が遊びたいと、同じ無邪気な顔で。

Side out

そして、勝負が始まる。四対一と、なるとやはり、一気に減らすよりも一人ずつだな、俺はそう思うと最初にシヤマルを狙った。手に

は腰にある双剣。

「はああああ!!」

しかし、さすがにこの早さだと

「させるか!」

そこに狼が乱入。さすが、盾だな。そして

「こつちだ」

ヴィータのハンマーが襲い掛かる。

「ちっ!」

おれはそれに対峙する。しかし、近距離の専門は

「私が居ることを忘れるな!」

そう、シグナムが居る。そこで俺は

「行くぞ、FinalモードIX」
イクス

俺の言葉に答えるように、刀は

「な、なに。六本だと」

そう、何処かの武将のように六本に変わった、そして変わった時にヴィータのハンマーは俺の顔をかすった。

「それでは、いくぜ」

俺はまるで踊る感覚で、二人を相手した、しかし。そこに

「はああああ」

さすがにザフィーラの介入、さらに。

「やああ」

シヤマルの誘導弾。

「せりやああああ」

俺は一心に、周りのモノを排除した。しかし、

「今だ、ヴィータ」

そう、これは罠で、本当は

「アイゼン、行くぞ。ギガント・シュラーーーーーーク!!!」

そう、ヴィータのギガントフォームのこれが、

「畜生が」

さすがに、カートリッジを使っている分強い攻撃にして、範囲が広い、しかし

「おい、相棒。壊せるか？」

「「「可能です。それも簡単に」」」

そうか、ならば、行くぞ。

「奥義、陽炎」

これは前も説明したが、相手の武器を吹き飛ばす、そう、吹き飛ばすのだ。

「はああああああ」

「ふんっ！」

俺はヴィータの腕と手の間接を狙い、見事にあの馬鹿でかいハンマーと、ヴィータを離れた。

「な、あ、アイゼンが」

「まだ、甘いよ、ヴィータ」

俺はそういうと、思いっきり、剣で吹き飛ばした。

「う、うわああああああああああ」

まず、一人。そして、さらに

「「「こちらが居ること忘れるな。」」」

シグナムが俺の着地をねらって

「飛竜一閃」

鞭のような、攻撃をした。しかし

「甘いんだよ。」

そして、俺は空中ながらも、剣に鞭を巻きつける事に成功した。

第五重三話（A's編三話）。勝負のときだ。（後書き）

ザワワザワワザワワ

次回今度こそ『同棲……いいな』それではバイバイ

第五拾四把（A's編四話）。やはり主人公（前書き）

すいません、すいません、すいません。

又もや、題名が変更。

第五拾四把（A's編四話）。やはり主人公

「ち、これじゃ。一本無駄にするか」

俺は、鞭に巻かれた剣を、放棄。そして、

「これはお土産だ」

俺はシグナムに、もう一本の剣を投げた

「ふん。小癩な」

やはり牽制ぐらいにしかならないか、しかしあと四本。

「四刀流、奥義。はやぶ「させねえええ」なに!？」

俺の背後にはさっき吹き飛ばした、ヴィータが居た。

「ち、ならば。「甘い」さらにかよ」

それに、ザフィーラが居た。たぶんヴィータの回復にはシャマルが動いているだろう。傍から見れば不利か、しかし

「くらえ。お前ら」

そして、俺は三本の剣を投げた。

「へ、そんなの攻撃でもなんでもないぜ。」

やはり、ヴィータ達には、屁でもなくしかし一瞬だけ、あいつらの視界から外れた。

「ま、まっつてみんな」

もう遅いよシャマル。そして、俺にヴィータの一撃が

「ちっ、またかよ。今度は何処に」

そこには、一本の剣しか無かった。

「ヴィータ、上だ!!」

シグナムが気付く、しかし

「さあ、今度はこちらから、反撃だ。」

俺は双銃を手にし

「FinalモードIX」
イクス

「ツインバスターライフルモード」

そう、俺は何処かの翼ウイングが手にしていた長距離銃。

「ダメージが軽すぎたか、ならば」

俺は飛びながら、マルチロックオンで近くのヴィータ、そしてシャマルに照準を合わせて

「喰らえ」

そして、砲撃が襲う。

「げ、なんだ。あの馬鹿でかい魔力は、て……ぎやぎやあああ
あああああああ!!」

ヴィータは二度目の気絶そして、シャマルは

「はあああああああ」

やはり、ザフィーラがカバーしたか、しかし

「俺に壊せない、壁は無い」

そして、俺はもう一度ターゲットをロックして

「ターゲット目標にロック」

[R o c k]

「破壊する」

そして、今度はザフィーラごと吹き飛ばした。

「あとは、お前だけだ、シグナム」

俺は空中から降りて、そう言った。

S i d e シグナム

なんなんだ。最初、我々は勝っていた。しかし、あの空中に居ただけで、まるで天からの攻撃の如くヴィータが倒れ、そして、我らの盾でもあるザフィーラが敗れた。残るのは私一人。そして、さつきまで、上から私たちを狙っていた貴一は地に降りてきた。

「あとは、お前だけだ、シグナム」

なんなんだ、この少年は。我々は古代ベルガの騎士である、なのにこの少年はいとも容易く我々を倒していった。さっきの上空に上がる判断は、我々の射程外で、在ったがそれはあの少年も同じはず、しかしそれでも当たった。そう彼は、元々簡単に私たちを掌握できたのだ。しかし

「私も騎士だ、最後まで、戦うぞ。レヴァンティン」

そう、私は今度こそ、主を……今度こそ？

いや、こんなことを考えるな、今は目の前の敵に集中するだけだ。そして、私は駆け出した。

S i d e o u t

「そろそろだな」

俺はそういうと、囿に使った、剣を拾い、そして

「さあ、シグナム。決着をつけよう。そして、無理やりでも話を聞

いてもらつよ」

「ああ、それが、約束だ。そして、私も本気で行くぞ」

そして、あつちに残りのカートリッジをすべて使い込んだようで、ホントに相手は本気だ、ならば

「紫電!!」

「奥義」

俺は、まるで空気のように、シグナムは稲妻の如く、

「一閃!!」

「塵気楼」

そして、勝敗は

「へ、やっぱり俺って反則だな」

「な、なぜだ。なぜ……私の後ろに」

そう、この技はスピードに長けている技、それ故にシグナムの技とは案外似ている、ならばあとはどちらの技量が上かによって勝負は決する。そして、俺は下した。

「いいかな、勝ちで？」

「ああ、私達の完敗だ」

そういうと、シグナムは武器を下ろした。そして、今も気絶してい

るヴィータ達の所に掛けて行った。

「ふむ、全員気絶しているだけのようだな」

安心したように、シグナムは確認する。

「当たり前だろ、話を聞いてもらわなくちゃいけないんだから」

俺は少し、呆れたようにいうと

「ああ、それもそうだったな。それで、すまないがこの空間は」

「ああ、どうせシャマルさんの魔法だろ？」

「なぜ、そうだと？」

「なに、さっきの戦闘で唯一戦闘では無くお前らのサポートに回っていた、確かにそれが専門かもしれないが遠距離からの攻撃ぐらいは在っただろうに、しかしそれをしなかった。ということは何かしらに魔力を行使しているだろうってことが推測されるが外れか？」

「完全回答だ。しかし、これで一つ問題が」

「もしかして、俺の予想している通りだと、このままだと俺らこの結界から」

「ああ、出れない。まあシャマルの結界は一流だ、まあ今回はそのせいで。」

「面倒だな。」

「しょうがないだろう、唯でさえお前は怪しかったんだからな」

と、その時、今まで気絶していた他の三人が起きた。

「あ、てめえ！！」

ヴィータはまだ、続いていると勘違いして

「待て、ヴィータ。もう決着はついている」

静止させたのはシグナム。そして、シャマルが

「その様子だと」

「ああ、私たちはこの少年に負けた」

「な、んなことが在り得るかよ。」

ヴィータは驚愕しかし

「しかし、我々は確かに負けたんだろう。それも相手は我らに手加減してな」

ザフィーラが俺を見ながら、言っている。

「ヴィータちゃん、ちょっと考えてみて、ホントなら今頃私たちは生きていないはずよ、それにシグナムは途中から気付いていたんですよ。私たちはどう足掻いても彼に適わない。」

シャマルが冷静にいう。

「ああ、それに、ヴィータ考えてみてくれ。この条件下の勝負はどう考えても貴一の方がリスクが高い、私たちはただ話を聞くだけでいい、と言うことはそれ以外の拘束はない。」

あらら、案外俺は策士に向かないかな、ここまで読まれていると。

「それで、貴一。お前ははやてを救うって言ったけど、それはどういうことだ？」

「ああ、その件については、はやてを混ぜて話したい。」

俺はそういうと、バリアジャケットを解いた。

「しかし、貴一。お前はなぜ、ここまでの危機を犯してまで主ははやてを救おうとする」

「ああ、それも説明するよ。まずは、頼む。腹が減って死にそうだ」

「ああ、それは賛成だ、貴一。はやくはやての家に帰ってごはんにしようぜ」

ヴィータは、既に腹ペコだったらしく、直ぐにでも家に帰りたらしい。

「そうね、それにこんなに遅いとはやてちゃんも心配するでしょうし、それに貴一君が居れば喜びそうですし。それでは転送」

そして、俺は魔法使いとして、はやての家に入った。

第五拾四把（A's編四話）。やはり主人公（後書き）

今度こそ『同棲……いいな』をお送りします。

第五十五話（A's編五話）。同棲……………いいな（前書き）

なんか、good goodです。はい。

第五十五話（A's編五話）。同棲……いいな

俺らは、はやての玄関に転送されたら、そこには

「どこに行ってたん」

あれあれ、なんでここに魔王がいるんだ、ああ、そうか一応これも
夜天の“王”でしたな、はやてさん。

「私がどんだけ、心配って貴一君やない、どうしたん？」

あ、そうだ、まずはそれからだな。

「あ、それはだな」

と、俺が言おうとしたらその前に

“グ〜”

ヴィータの可愛いお腹の音が聞こえた。

「あ、すまねえ。」

ヴィータもさすがに空気を読めなかったのがわかったらしいが

「しょうがないな〜。ごめん貴一君。まずはご飯にしたいんだけど、
貴一君も一緒に食べる？」

「ああ、そうしてくれ。シグナムもそれで」

「ああ、もちろんだ。ちゃんと聞くぞ」

「どないしたん？」

「ああ、それも後で話す。それよりも飯にするなら俺も手伝う」

そして、俺もまたもや、はやてとの、合作が出来た。

「ああ、やっぱりはやての料理は激うまだな。」

あれれ、俺も作ったんですが……

「ああ、さすがは主はやてです。それに貴一、またもやすまないな」

おお、これが普通の反応だろう、まあヴィータだしな。しょうがないか

「んで、どうして、貴一君がいるん、それにみんなあの鎧の「騎士服です、主はやて」あはは、そうだったねえ。それでなんでみんなして着てたん？」

「ああ、それは」

俺が少し顔が引きつり

「ああ、んなの簡単だぞはやて、あたしらと貴一が戦ったんだ」

この言葉による静寂。これでは全員が黙るだろうな。てか最初に俺

が魔術師だつてことを先に言わないといけないだろ。

「えっと……」

はやて、困惑中。

「はあ〜」

ああ、ザフィーラ、お前食事が終わって普通に片付けるな、てか狼姿なんだな家だと。

「ああ、俺はなアホの魔道士なんだよ、闇の書の主、八神はやてさん」

「え、貴一君、それって」

さらに困惑のはやて、そこにシャマルが援護。

「はやてちゃん、貴一君はね。私達のことはもっばれているの」

「え、そうなん。ほんま貴一君？」

「ああ。そうだ」

「なら、なんで、貴一君とヴィータちゃん達が戦ったん？」

「はい、それはですね。貴一が私たちに話があると」

シグナムがその後の俺らの戦った理由をはなした。そして、はやての第一声は

「なんで、お話するだけなのに、シグナム達は襲いかかったん。まったく、ごめんな貴一君、後で強く言っとくから」

「いや、はやて、シグナム達はお前を守ろうとしたただけだ、最初に言っとくぞはやて、お前はある意味選ばれてしまった存在なんだぞ。」

「うん、それはなシグナム達にも言われたん、やけど私はそんな力は要らなくていうたよ。」

「ああ、それじゃ、そろそろ本題に入ろう。なぜ俺がここに着て、そしてなぜ態々俺が戦ったのかを。サン」

「はい、主」

俺は最初から、用意していた資料をアップしながらはやてたちに説明した。

「最初に言っとくぞ、はやて。お前のその足の病気はいつか死に追い込むものとなる」

「え」

「まで、貴一。一体いきなりなに言ってるやがる。」

「これを見てくれ、これは管理局からハックして集めた資料だ。ここにもし蒐集活動を怠れば」

「主のリンカーコアを侵食すると……」

シグナムは愕然としている。他もそうだろう。

「ちょっとごめんなさい。貴一君、それじゃ質問」

「ああ、いいよシヤマルさん」

「これでも私たちは闇の書から生まれた存在、なのになんでそのことすら気付いていないの」

「簡単だ、それは闇の書にバグがあるからだ」

それはそう言つと、資料にあるバグの点を言つ、他はみな真剣にこれを聞いている。

「ってわけなんだ。確かにいきなり来て言つのはなんだが信じられ」

俺はそう言つ、全員に頭を下げる

「貴一君がなんで頭下げんねん。」

そして、はやては笑っている。そう笑つて俺の頭を撫でてくれた。なんて強い子なんだろう。

「だけだよ、貴一。あたいらはずっと闇の書が完成すると大いなる力を」

「確かに、そうなのかもしれない、ヴィータ。けどな、ヴィータじゃあなんでお前らは前回の主の記憶マスターがないんだ。」

「そ、それは」

「さっきのバグの中の転生機能について言っただろう。ようはなりンカーコアが変わればお前らの記憶の無くなるんだ。」

「な、なら。どうするんだよ。このままじゃはやては、はやては！」

ヴィータはしがみ付きながらも俺に訴える。

「だけど、この管制人格の事故がもつとも暴走の原因ですよね」

「ああ、そうだ。シャマルさんてかヴィータ離れる。」

しがみつきながらも凄い力で俺の腰を振るな。

「だけどこれには厄介なことに、自己修復がある。」

「ならば、このまま行けば主ははやてはどの道……」

「んなことさせないために俺が着たんだよ。それにある意味、安全かつはやてを瞬時に助ける方法はある」

「そうなのか」

シグナムち、近いです。

「ああ、俺の能力を使って、はやてと闇の書の契約を無理やり切るんだ。しかしそうすればお前らヴォルケリッターは消える」

「そんなの、この身は既に主のモノならば「それはあかん!!」え？」

異論を立てる、はやて

「やっと出来た家族や。私のためだから犠牲になるなんて私はゆるさんで」

ああ、やはりこの子は強いんだ、自分が死ぬかもしれないのにな

「だとさ、それじゃもう一つの方法を試すとするか」

そして、俺の誰も不幸せにならない原作ブレイクプランを話おえ

「……以上だ。それでは最初は管理局に見つからないように蒐集活動だ。狙うのは管理外の世界で人以外とする。それでいいねはやて」

「うう。あんまり私のせいで迷惑は」

「主はやてご安心を、私たちは貴方の手を汚すことはしませんですから、どうか私たちに」

「うん、わかったで。それじゃ改めてよろしくね。私の家族達」

「「「「は!!」「」「」

「さて、それじゃ俺は一旦帰るな。それじゃ蒐集活動は」

「分かっているわよ貴一君。貴一君の学校が終わる八月に開始でいいのね。私たちはその間、偵察などしてるわね」

「ああ、それで、頼む。あと、念のため俺の結果も張ってあるから。まあこれはお前らには効かないから安心してくれ」

「ありがとうね、貴一君」

「なに、バカみたいにお節介なんだよ俺はさ、それじゃあなはやて」

「あ、それなら。私が着いて行こう念のためだ」

そう言うと、シグナムは俺に着いてきた。

「なあ、貴一？」

「あ、なんだ。」

「なぜ、そこまで我が主に尽くしてくれる。お前にはなんも利が無いではないかさっきの話も聞いている限り」

「ああ、それか。それはな、簡単だよ」

「簡単？」

「ただ、知り合った女の子が九を救うために一の犠牲になるのが見られなかったんだよ」

「は？それはどういう意味だ」

「あのプランでも言ったが、お前らは管理局にはある意味追われる身、しかし誰かがずっと監視していた。」

「ああ、それは貴一から聞かれて初めて知ったが」

「だからさ、管理局の誰かがすでにやてが主だと知っていて、暴走を狙って封印したら？」

「そうか、それならば、ある意味……し、しかしそれでは……！」

こえを荒がえるシグナム、俺も最初は怒りに燃えたさ。

「ああ、だから、俺は絶対そんなことをさせない。九を救うのなら俺は十を救う覚悟だ」

「そうか、ならば」

そう言うとシグナムは前に立ち

「改めて名乗ろう。私は烈火の将シグナムだ。よろしくな貴一」

「ああ、よろしく。シグナム」

そして、俺の家に着き

「ありがとうな、シグナム」

「いや、これは私達が感謝しなければならぬ。このまま行けばたぶん私たちは主はやてのために蒐集して、暴走される所だった。確

かに一番最初は怪しかったが」

「怪しかったが」

「お前と剣を交じってわかった。貴様はホントのお人よしなんだなと。」

そう言うとシグナムは帰っていった。さて、もう一仕事するかな。

「さすがに盗み聞きは良くないんじゃないか。まあ結界を張っていいから声は聞こえなかっただろう。猫共」

そう言うと、原作に登場した使い魔の双子が俺の前に出てきた。

第五重六輪（A's編六話）。あははは我が名はアード（前書き）

やっと書けました。しかし……

第五重六輪（A's編六話）。あはは我が名はアーード

「さあ、なんで俺に着いてきたのかな？」

そこには二匹の猫が居た。そして、急に場所が変わった。

「ふむ、なるほど。ここは空の上かな？」

俺は平然とした態度でその猫、いやすでに人の姿をした二体の使い魔を対峙していた。

「お前、なぜ彼女に近づく？」

「ああ、理由か。それはただ友達だからだ」

「ならば、あの子に近づかない方がいい」

「なんたってあの子は、」

「主だからだろ？」

俺が挑発的にいったら、相手は驚き

「な、お前は知っていてなお」

「ああ、そつだ。」

「ならば、分かるはずだ。あれは危険だ。だから彼女も」

「彼女も危険って言うのか、この猫共が!！」

俺は殺気を当てながら、こいつらを睨んだ。

「な!？」

俺はソルを持ちながら、こう言った。

「お前らが何者かは知らないが、もしお前らが俺の友達を選ぶ権利があると言っなら俺はお前らは倒す」

「く、こっちが親切に注意しているのに」

「ならば、これは警告です。あの子には近づかない方がいい。」

「もし、聞かなかったら？」

「ここで、体で教わっていただきます」

そう言つと、二匹の使い魔は戦闘態勢に入った。

「ああ、そうか。ならば“俺はお前らの敵だな”」

そして、俺は自分の分身を投げた。

「マイロード、レディ？」

「セットアップ」

そして、俺は弓兵になった。

「ソル、肉体強化のみを術式でお前がやれ」

「マスター、それ以外は？」

「もちろん」

「決まっていますから」

ムーンの質問にお互いが答えた。そう今俺は久々の本気だ。

「はあああああああ！！！！」

使い魔が魔法を確かに使用しているが、

「トレースオン」

俺は干渉莫耶を出した。これは俺の魔力の塊だから、普通に抗魔力は最高級だ。そのため普通に拳だろうが、魔弾だろうが弾く弾く。

「な、なんだ。あいつ」

「この私たちを簡単に凌いでいる」

「おい、猫共、どうした」

俺はさっきまであいつらの前に居たのを一瞬で後ろに回り、そして悪役モードに変わった。

「俺を止めるのだろう、ほら、俺を早く止めるよ。ほら、ハリー！」

「ハリー！ハリー！！」

「なんなんだ、あいつ」

「ただの子供では」

「ねえなああああ」

俺は猫に襲い掛かった。始めてかもしれない。自分で相手に襲い掛かるのは。フェイトの時は助けるために、ジョーカーの時はなのは達を守るために、しかし今回は違う、今回は俺がこのやり方が気に入らないから戦う、完全なエゴ。確かにグレアムの考えは正しい。一を捨てて九を救う。しかし俺はそれを許さない。

「はあ。はあ。はあ」

片方の猫が疲れてきた、俺はそこに

「安心しろ、みね打ちだ。」

そして、一人ダウンした。

「な、リーゼロッテ！！」

そして、俺は干涉莫耶を消して、王の財宝から、風に包まれている剣を取り出した。

「お、お前。これは管理局で」

「やはり、管理局だったか」

「あ、し、しまった」

まあ、元から知ってはいたが、しかし、腹立たしい。

「く、しょうがない。一旦撤退だ」

そう言うと、片方が片方をおぶって消えてしまった。追う理由も無いためほっといた。そして、場所はさっきの道路に戻った。俺も武装を解除した。

「さあ、主。これで後戻りはできませんよ」

サンが可笑しく笑う。

「ふん、上等だ。」

そして、俺は家に着くと。まずこれからはやての家にお世話になることは、作戦で決定したため、俺は一週間分の衣類、そしてギターを一本を持って玄関を出た。ちなみに学校なんだがはやてに言われたため明日から正常に行くことになった。そのための八月からの蒐集活動だ。

「よし、完了だ」

「それではマイロード」

「ああ、そうだな」

そして、これから始まる戦いのために一度家を離れる。だから

「「「「いつてきます」」」」

これが全員の答え。

そして、全員での出発である。

「それで主、変装しますか？」

「ああ、サン。一応しといてくれ」

「御意」

そして、スバルモードになり、俺ははやての家を目指す。そして到着やいな、俺の結界内に入った瞬間に変装を解いてインターホンを押した。

“キンコーン、キンコーン”

そして、

「あ、貴一くんですか、どうぞ」

シヤマルさんが出た。そして家に入ると、すでにはやてはヴィータと一緒に寝てしまったらしい。

「しかし貴一、少し遅かったな」

「ああ、すまんシグナム。少し戦りやった、せいだな」

「な、何処とだ」

「それよりも、なんで感知しなかったんでしょう?」

シヤマルさんと、シグナムが両方とも驚いていた。

「相手が結界張っていたし、それに俺も張ったし」

「そうでしたか」

シヤマルが納得したようだが、シグナムが

「それで、相手は?」

「ああ、ココを監視していたやつらだ」

「ふむ、それで貴一、一体なんだったんだ?」

そして、狼姿のザフィーラがいた。

「うん、なんで狼なんだ?」

「主が犬を飼いたかったらしくな。それで一体?」

「ああ、俺の読みが当たったよ」

そう言うとシグナムだけ納得したしかし

「そうか」

そう、悲しそうに。そして他の二人は分からなかった為、シグナム

が俺の仮説について言った。

「そ、そんな」

「く、ふざけているな」

二人の反応はこうだった、しかし

「しかし、今回で確信に変わったな、貴一よ」

「ああ、あいつらは間違いなく管理局と言ったからな、しかしこれが組織的かそれとも」

「個人的ですか、それならば個人的ではないでしょうか貴一君？」

「ああ、俺もそう思う。元々ここにははやて一人だけだからな」

「ああ、しかし我らヴォルケリッターが許すわけが」

「ないな」

シグナムとザフィーラが言う。

「そうね、それじゃ、このことは私達がヴィータちゃんに言っとくから、貴一君も今日は寝たらどうでしょう、一応さっきまで戦闘をしていたんでしょ？」

シヤマルが気を使ってくれたらしい、しかしそれは助かる、実際もう十二時は回っていて明日学校の俺の身にはきつかった。

「それじゃ、おやすみ」

「「「「おお、おやすみ」「」「」

全員で答えてくれたことに、ある種の感動がおこった、そして俺はあたらしい生活の部屋となる、はやての隣の部屋で寝た。

第五重六輪（A's編六話）。あははは我が名はアーード（後書き）

やっと書けました。マジコイは書けるんですけどね……………

がんばります。

第五拾七話（A's編七話）。そして平凡（前書き）

わーい、書けた。

第五拾七話（A's編七話）。そして平凡

そして、今日は久々の普通の登校。まあはやてが行け行けうるさいのできたのだが。いつもの待ち合わせ場所に行く

「遅いよ、貴一君」

「ホントだよ、この二日は早かったのに」

二人の女の子が怒っていました。

「すまん、すまん。今日は寝坊したんだよ」

はあ、これからは、まあ夏休みまではなんとも無いが、しかしこれから敵になるのに、なんとも知らぬが仏とはこういう事か。

そして時間ぴったしにリムジンが到着。さすがです、鮫島さん

「おはようございます」

そして、礼儀正しく一礼してドアを開く。

「おはよう、みんな」

「おはよう」

そしてもう二人のお姫様が居た。

「おはよう、すずかちゃん、アリサちゃん」

「おはよう、すずか、アリサ」

「よ、二人とも」

「あれ、あれ？」

そのとき、すずかが少し、不思議がった。

「どうしたのよ、すずか？」

「え、あ、うん。ねえ貴一君、昨日と少し変わった。」

なんとこの子、俺の催眠が効かなかった、いや、この言い方だとたぶん少し本物と偽物に気付くぐらいか、しかしさすが夜の一族。鋭すぎる、しかし

「なに言ってるのよ、すずか。昨日もその前も今日もこいつはこつよ」

「ちょっと待て、アリサ。その言い方は無いんじゃないか」

そして、そんなかんだで、学校に到着。

「それではお嬢様方、そして貴一様、行ってらっしゃいませ」

鮫島さんは一礼すると、消えて行った。そしていつもの如く俺は注目を浴びながらの登校。救いがあるのはクラスが違うことかな。そして“いつもの通り”雄聖にあいさつした。

「おはよう、雄聖」

「ああ、おはよう?。」

なんだ、この反応。ま、まさか

「なあ、貴一、お前少し変わった」

この人もかい。まったく、しかしなんで雄聖も、確かにすすかはあの意味解らなくもないが、なんで雄聖。

「そんな、わけがないだろう。」

まあここは受け流すのが、一番か。さすがに、いやあ昨日、催眠魔術使ってサボったなんて言ったら、頭が可笑しいんじゃないか疑われそうだ。

「そうだよな、すまん。変な質問して」

そして、普通の朝の会が始まった。

Side はやて

今日からは、さらに一人家族が増えるねん。しかも貴一君、いきなりあんなこと言われたけどなんだろう、簡単に信じてしまうんよこれが、

「はやてちゃん、そろそろ病院の時間ですよ。」

あ、シャマルの声や

「うん、わかったで」

と、その時

「私も行きます、主はやて」

あれれ、今日はシグナムも同伴なんやな。

「それでは行きましょう。」

そして、シグナムが押す車椅子で、私は病院に向かった。

S i d e o u t

さて、ある意味久しぶりのお昼の時間であるが、今日は未だに来ない。

「あれ、貴一。まだここにいるのか？」

雄聖が声を掛けてくれた。

「ああ、そのようだ。今日は久しぶりにのんびりと「貴一！」・・・はあ〜」

俺の大きなため息に、それを見て苦笑する雄聖、

「ま、がんばりな」

なんとも、頼りのある友人だ。

「ごめんね、今日、体育で遅くなって」

フェイトがそう言いながら、息を荒らしながら言ってくれたが・・・

「なんで体育着のままなんだ？」

「なによ、別にいいでしょ。なに文句でもあるの？」

いや、別にない、断じてない、てかさっきから男の目線に気付かないのか、このお姫様たちは、

「さ、行こう貴一君？」

「ああ、そうだなすずか、それじゃ行くか」

そして、俺プラス体育着のなのは達で屋上上がった、そして第一声は

「暑い」

そうなのだ、一日中日光の光を浴びていたこのアスファルトはすでに熱を吸収して、フライパン状態、しょうがないか。

「（術式、氷理一体）」

そして、一瞬でか、俺は地面に触り、一応座れるぐらいの温度に下げた。

「なによ、確かに暑いけど、そこまでじゃないじゃない。ほら、みんな食べましょう」

そして、アリサの合図にみんな座り食事がスタート。

Side シグナム

私たちは主はやてが病院で検査を受けている間、ヴィータに貴一の考えを伝えた。そして

「なんだよ、それ、ふざけるなあああ！」

その通りだ、しかし

「抑えるんだ、ヴィータ。だからこそ貴一が来たのだろう。」

ザフィーラという言葉にヴィータは

「あ、そうだった。あいつの料理はうまいからな、信用できる。」

ヴィータはこう言っているが、私は彼を信用すべきところは、あの戦いで十分だ、それは他の騎士もそうだろう、ヴィータもそれを知ってわざと言っているのだろう……たぶん。そうだ、彼は、いや彼こそだから信用できるんだ。

Side out

そして、すでに放課後となり、今日から帰る場所が違つことに危う

く、気づかなかった。そしてはやて邸の家のチャイムを鳴らした。

「あ、貴一か。今開ける」

今日はヴィータのようだ。そしてドアが開いた。

「よ、貴一。おかえりでいいんだよな？」

「ああ、俺も案外それにどう答えるべきか、迷ったが、こつ言おう。ただいま」

「あ、おかえり貴一君。なんか貴一君の制服姿は新鮮やな」

そして、奥からはやてが来た。

「うるさい。ただいまはやて」

そう言つとなぜか顔が赤くなった、どうしたんだろう？

そして、玄関に入り、靴を脱いでリビングに出ると

「あ、お帰りなさい」

シヤマルがお洗濯物を畳んでいました。

「主はやて、それでこの洋服はどこに？」

そしてなぜかエプロンを着けているシグナムが居た。

「よ、シグナムただいま。」

「な、な、き、貴一、お、お帰りだな。」

なんでテンパっているんだ、まったく謎だ？

「それよりも、貴一君の洋服はどこなん？」

「ん？はやて、それは昨日俺が寝た部屋にあるはずだが」

「あ、そうなん。それなら今日着るもん以外は一度洗濯したほうがいいんちゃう、一応ここに住むんやから」

そうだな。

「ああ、そうしてもらえると、助かる。すでにうちはマークされただろうからな」

「ごめんな、貴一君。私なんかのために」

「はいはい、そういうのはこれが終わってからな。それにどうせ一人だったし、これはこれでいいんだよ。」

その言葉にみんな驚いたが、それ以上の詮索はなかった、いや、皆さん、うちの両親は両方とも生きてますよ。しかも未だに新婚さんのようなテンションで。

第五拾七話（A's編七話）。そして平凡（後書き）

やっと書けました。これでたぶん更新は早くなると思います。

それでは次回『訪れた蒐集』 それではバイバイ

次回はラジオをします

第五重霸知話（A，S編八話）。訪れた蒐集（前書き）

ダブル
W更新

第五重霸知話（A's編八話）。訪れた蒐集

それから、一ヶ月と少しが経ち、今日は終業式である。

「で、あるからにして、我が校の………」

なんとも、いつの世界でも校長の話は長い。それになんとも面倒だ。

「それではこれにて、終業式を終了します。みなさん、良い夏休みを」

そして、今日、この日を持って一学期が終了。そして夏休みに入った。そしてその帰り道。

「そういえば、貴一君は今回、どこかおでかけするの？」

すでに、すずかと、アリサは習い事とかで車で帰っていった、さすがはご令嬢。それで結局、俺となのはとフェイトで帰っている。

「そうなんだ、なのは。すまないけど、久々に旅行なんだ」

これはうん、ある意味旅行だよな、町は一緒だけど。

「あ、そうなんだ、残念」

フェイトが残念そうだが、あれ確か。

「なあ、たしかお前らって、管理局の飯のなんかじゃなかったか？」

「あ！！」

おいおい、確か、昨日の話だろうが、翠屋にリンディさんが来て、なんかなのはを勧誘していたのは覚えてる、え、なんで居たってそりゃ、なぜか知らないけど、放課後になったら拉致られたんだよ。まあ原作よりも早いのはやはり俺の介入のせいだろうが。けどやつぱ俺への勧誘は無かった、やはりギル爺が止めているんだろうな。まあ今回に関しては非常に助かっているが。

「そうだった。お母さんが夏休みに入ったら本格的に研究するから、って言ってたし」

「にははは、そうだった。また、アースラにお世話になるなの」

なんとも二人とも楽しいそうだ。ホント心が痛いよ。そして全員別れて解散した。これで俺はお前らの敵に完全になっただな。そして、はやく邸に到着。

「ただいま」

「あ、貴一。帰ったんだな」

やはり出るのはヴィータだった、しかも今回はこの前はやてに作ってもらった、ウサギの人形を持って、なんていうかマッチしすぎる、こいつ。

「うむ、貴一。学業ご苦労だった。」

そして、俺がリビングに行くと、シグナムがテレビを見ていた、これはミスマッチ。

「あれ、はやてと、シャマル、それにザフィーラは？」

「ああ、なんでも散歩と買い物だそう。主はやてが今日はカレーにすると言っていたからな」

「お、おい、大丈夫なのか。シャマルなんか連れて行って」

そう、この数日で俺ははやて家に慣れた。そしてそれは騎士たちも同じであつたがしかし、シャマルに料理は、ミスマツチを通り越しデスマツチだつた。

「ああ、安心しろ。今回は主はやてが監督するそう」

「そ、そうか。ならいいが」

「あ、そうだ、貴一。これでもう？」

ヴィータが腕を引っ張りながら聞いてくる。

「ああ、これでそろそろ本格的に動く。もうこれで一応俺も休みに入るからな。」

「うむ、それは助かる。それで貴一。どうやって蒐集する？」

「シグナム、俺、ヴィータは前線だな、だけど俺は蒐集が出来ないから、そこはシャマルを使う。それで大体ノルマは一日60頁だ。」

「な、貴一。それは無理があるだろ。私達のこれまでの観察など言う、最高龍種でやっと10ページぐらいだ、それを六体も」

「おいおい、シグナム。それはうちマスターには失礼だぜ」

「そうですね、我がマイロードならどうにかなるでしょう。それに」

「ああ、お前らも居るんだから」

そして、ヴィータの頭を撫でて、座っていたシグナムの頭を撫でてやった。なんだろうここ最近撫でるのが癖になってきた。

「」

ヴィータはなんとも、犬みたいな反応だ、最初した時は照れていたが今ではこうだ。しかし、やはりシグナムは

「あ、そ、その貴一、そのあまりにもこれは騎士として……
／／／／／／／／／／／／」

いやよいやよも好きのうちってね。

「相変わらず、主は」

「容赦ねえうちのマスターは」

なんとも、デバイスにして酷い言いようだ、俺はただ褒めるのが好きただけなんだが。

「帰ったようー！」

そして、ドアからはやての音が聞こえた、そしてシグナムは直ぐに

立ち。

「よくぞ、お戻りに」

と、いそいそと行ってしまった。そんなに恥ずかしいのかな、これ？

「お、この靴は貴一君も帰ってきてるん？」

「おお、はやてたいます。」

「おかえりな、そして今日から夏休みやな」

「あらあら、それじゃ、貴一君はこれから家にいるんですか？」

「ああ、シャマル。これで少しは家事の手伝いをするよ」

「そうですね、主に家事をやらせると、どこかの一人暮らしよりもうまいですから」

「なあ、サン、貴一って一体何者なんだ？」

「いやいや、ヴェータ、俺は俺なんだが。」

「そうですね、主を一言で例えるなら、天才？」

最近では、俺のデバイスかお前らと言うぐらい、騎士とこの指輪たちは仲がいい、特にザフィーラとムーンが、すばらしく仲がいい。

「それじゃ、貴一君、これお願いね」

「うーい、それじゃ、シヤマル、これは冷蔵庫だね」

「はい、お願いします」

「それじゃ、いつちよ料理するか」

「はいはい、はやて、まずは手を洗ってこような。それにもう俺のいるんだから、まだ車椅子なんだぞ。」

「そんなんわ、分かっているよ、それじゃシヤマル、行こうか」

「はい、はやてちゃん」

そして、手を洗いに行った。

「まったく、いつも思うがはやては少し、自分でし過ぎだな」

「そのようです、主はやては元々足が悪いせいもあるのですが、自分でなんでもするのがすでに当たり前前で、少しは私たちに頼ってほしいものです。」

シグナムがヤレヤレ顔で言う。まったくその通りだな。

「うん、みんなどうかしたん？」

そして、当の本人はこんな感じだし、

「いや、なんでもない。それじゃはやて」

「うん、それじゃ、ごほん作ろうか？」

そして、ご飯を作り、皆が食べ終わり、現在、はやてはヴィータと共に風呂である。

「そうだ、貴一。少し今後のことを聞いていいか？」

「うん、ああ、シグナムなんだ？」

「今はまだ七月だが、そのなんで八月なんで、明日からでも」

「ああ、それか、それはなこのちよつとの期間は、はやてにも夏休みを味わってもらうために、ちよつとした旅行に行くぞ。もちろんお前らもな」

「なに、貴一。それは初耳だぞ。それにこんな時期に」

「こんな時期だからこそだよ。少しでもはやてにはいい思い出を作つてやらなきゃ、なんだつて今までずっと一人だったはやての初めての夏休みだ。さすがにこれは確かに俺らは管理局ともあたるだろう。それを自分のせいだと悔やむかもしれない。けどなそれだけの夏休みじゃ味が酷いだろう」

「ああ、そうだな。その、なんだ、今回のことから今までのまないな。聞いたぞサンから、この前まで他の事件に口を出していたとか。そして今回は自ら管理局に喧嘩を売ったと」

「俺の性分なんだよ。これはさ」

そうさ、この力で未来を変えなきゃここに落とされた意味がないんだからな。

第五重霸知話（A's編八話）。訪れた蒐集（後書き）

「あはは、今回はかんばる、作者と「貴一の」「

「あとがきラジオ」「

「あはは、やっと最近かけるような、余裕ができた」

「そうだな、お前、話の方ですら大変だったからな。」

「しかし、なんとか頑張った、うん頑張った。」

「ま、それはいいが、」

「え、なんか問題でも？」

「なんで題名と全然関係無いんだよ!!！」

「え、だってそれは」

「まあ、いいそれは後で、剣を一本ずつ刺しながら聞いていく」

「どごその拷問。まあいいや次回」

「『旅行は良好』ってなんだこの親父ギャグは!!！」

「それではバイバイ」

「あ、このダメ作者、逃げるな!!！」

第五拾九話（A's編九話）。旅行良好（前書き）

五十九話こうしんです。

第五拾九話（A's編九話）。旅行良好

そして、俺らは旅行にでた、現在はみんな車の中で、ヴィータとはやてはぐっすり寝ている。勿論レンタルカーを借りて。その時はある意味大変だった。

「朝のこと」

俺は今日の計画を、昨日の夜、サプライズで用意した、その時はやてに泣かれて、なぜかジト目の皆さんに囲まれながら、その日は就寝し、今日朝一で起きて、レンタカーを借りてきた時、俺はスバルの状態であった、そうそれが問題だった。

「よ、お前ら、待たせた」

俺は普通にそう言ったが、なぜか

「どちら様？」

と、はやてに、しかも騎士たちは、

「あれね、初めて会った時と同じ目ですね。」

「マスター、まだ、スバルの状態で会った事ないだろ。」

「む、その声はムーンか、そうなるとまさか、」

「ああ、そのまさかだよ、ザフィーラ。そしてすでに魔力で分かっているくせに誰にも言わないで、そこで笑っているシャマル」

「ご、ごめんなさいね、貴一君。だけどホント凄いわねその魔術。一瞬分らなかったわ」

「え、えーーーーー！。貴一君？」

「なに、貴一お前なのか？」

「嘘だろう、だって貴一ってはやてと同じ年だろ」

そして、埒が明かないため、変装を解いた。

「あのね、旅行行くのに、この世界の車を運転できるのは、いないでしょうが」

そして、全員それに今頃気付いたらしい。

「あ、ほんなや。それで貴一君が？」

「ああ、そうだよ、一応この旅行の企画者なんだから、それぐらいはするが、そのなんだ、初見で分からなかったのは少しシヨックだった。」

そして冒頭に戻る。

「しかし、よくこんなデカイ乗り物「ワゴンね」借りられたな」

「まあ、勿論お金はその分かるから、等価交換って奴だ。しかしシグナムは寝なくても……大丈夫か」

「ああ、もちろんだ。しかしそのなんだ、朝はそのすまなかつたな」
バックミラーから、見ると、少ししょんぼりとしているシグナムの顔があつた、なんとも珍しいな。

「いいさ、それにバレるようじゃ、変装の意味がないからな」

「それにしても、貴一君は運転に慣れてますね」

助手席に座っている、シャルルが聞いてきた。ちなみに席順から言うと、まず、運転席に俺、助手席にシャルル、さらに二段目のシートにはやて、これは降りやすいように、そしてシグナム。さらに三段目はザフィーラなんだが、それをクッション代わりに寝ているヴィータも居る。

「まあ、これでも色んなもんに挑戦しているから」

「やはり貴一君は実際は」

「正真正銘九才ですよ、シャルル。」

「ホントですか」

「ホント、ホント。」

そして、車を飛ばすこと、一時間、最初のパーキングに到着。

「すまんが、はやてと、ヴィータを起こしてくれ、ここで一応、休憩を取るから」

と、俺が何気なく言うことで、なんとかシャマルがトイレタイムだと感じてもらえた。

「はいはい、それでははやてちゃん、ヴィータちゃん、起きましょ
うね」

「ん？なについたん？」

寝ぼけてらっしゃる。

「いえ、ここはサービスエリアですので」

「あ、そうなん、それじゃちょっとなんか買ってくるわ」

なんとも、寝ぼけている、はやてはなんとも無防備だな。そしてヴィータだが

「グウ、グウ、グウ」

すでに爆睡のためシグナムの殴りすらスルー。と、言うことで俺とザフィーラとヴィータ（爆睡）で車番だ。

Side シグナム

なぜかその後、直ぐに主はW.C.に行ってしまった、私とシャマルは待っている状態だった。その時

「ねえ、シグナム。貴一君の何処がいいの？」

「は、はいっ!?!」

な、なにを言い出すんだシヤマルは。

「なに、その顔は、すでに真っ赤よ、シグナム?」

そして、私は思いつきり顔を隠した。

「嘘よ、ふ、ふ、ふ。」

なんとも、さすがは我らの参謀、ってそういう事ではなく。

「なんだ、その質問は! 貴一は貴一であろう」

「なら、なんでかしら? ここ数日、貴一君をよく、見ていてしかも、なぜかたまに赤くなる、さらに極めつけはあの大人版貴一君と分かった瞬間、一瞬、赤くなったわね」

なんと、あの一瞬を見抜かれて、て

「そういう事ではない!?!」

「あらあら、別にいいと思うけど」

「う、うるさい、それに今は、主の事でいっぱいだ」

「なら、終われば?」

「う……」

シヤマルから、こんなことを言われるとは、しかし、そうだ、私は彼が、いや、彼のあの瞳にしかしそれでも、だがこのモヤモヤはやはり「ごめんなく待たせたん？」

「いえ、いえ、それでは行きましようか」

そうだ、今回でこの変なモヤモヤがとければ、そうだ、確かめて見ればいい。私らしくな。

Side out

さて、戻ってきたのはいいが、

「おい、はやて。」

「うん？」

「なんで、たこ焼きを持っているんだよ！」

「そんなん、決まっているやん。あつたからや!..!」

なんとも、堂々とそして口元に青海苔を、

「はやて、口元に青海苔」

「え、えっ」

はあ、なんともしかし楽しそうでいいか

「主はやて、これを」

「うん、ごめんなシグナム」

そして、口元を拭いた。

「それじゃ、今後の予定だが、このまま高速を乗って、そのまま、なんとか東照宮に行つて、そのあとは気ままに旅館に行くぞ、ちなみにその旅館は温泉が出ていて、そこで足にいいそうだ」

「あれ、そやけど、たしかこの足は闇の」

「はいはい、そういうのは気分の問題だ、OK？」

「わかったで、OKや」

そして俺はパーキングエリアを出て、目的の場所に向かった。しかし、たこ焼きは俺にも買ってきてほしかったのは、内緒だ。

第五拾九話（A、S編九話）。旅行良好（後書き）

あとがき・・・・・・・・・・ありません。それでは次回『旅行良好パート
2』

バイバイ

第六拾羽（A's編十話）。旅行良好パート2（前書き）

そう思えば、もう少しで中間テストだ。

第六拾羽（A's編十話）。旅行良好パート2

さて、やっとついたココが、

「おお、なんだあれ、サルが三匹もいるぞ」

そう、ヴィータが言ったとおり、ここは、ある將軍のお墓です。なんでここか、それは俺が普通になんか旅行と言ったら、なんかこのイメージが出た。どうせ、はやても聖祥大附属小学校にのちのち来るだろうがな、あそこの旅行つてちよつとちがうんだよね、だってなぜか小六でなんで南の南国行くんだよ。

「こら、ヴィータ。そんなにはしゃぐな。主や、貴一を」

「ほら、ヴィータ。あれが、東照宮だぞ、この世界で偉かった人のお墓だ」

「うお、なんだ貴一、この世界だとそんなこともできるのか」

なんだろう、なぜか後ろから、殺気が。

「えーい、貴一もヴィータも、そこに直れ!!」

ええええええええええ、なんでええええええ!

「ほらほら、シグナム。抑えて抑えて。」

そして、それを抑える、シヤマル。そしてそれをやれやれ顔をしているザフィーラ。おい、お前は犬の状態で「（犬じゃない、狼だ）」

そうですね。

「あはは、シグナムも、抑えてな、それにヴィータ、貴一君、はしやぎすぎやで」

なんとも、さすがは主様。なぜこの子はここまで落ち着いてられるんですか。

「それよりも貴一君、車椅子のエスコートよろしく」

なぜそこで俺なんだ、確かに現在手が余っているのは俺だけだが、ヴィータは一人で色々と目を輝いているし、シグナムは、なぜかシヤマルに抑えられている、まあそのシグナムの腕に一応リードがあるが……

「よし、それではこのシヤマルお姉さんによる、ここのツアー開始です」

そして、なぜか片手にガイドマップを持っているシヤマルによるツアーが開始した、あれ俺の存在は。

~~~~~

それから時が過ぎ、現在、やっと今回の宿泊所に着いた。まあ、その時の俺はスバル状態な訳で。

「すみません、予約していた星川ですが。」

「はい、ご予約の星川様、えーと確か人数は、大人が三人、子供が二人、そしてそのワンちゃんが一匹でよろしかったんですか？」



確かに、この長い犬は狼でもいいだろうが、まあいいか。

「はい、そうです。それでは」

「はい、それではこれが今回のお部屋の鍵です、それでは二泊三日、よろしく願います」

そして、俺は荷物とはやて達を先に行かせた。その時にこうロビーの人に言われた。

「それでは今回の料金と、そしてこれですね」

さて、もう一つのサプライズでも俺は用意するかな。

Side はやて

貴一君は私らに荷物を預けて、そのままロビーでなんか話なんかかな？

「それにしてもここは随分といい所やな」

「そうですね、はやてちゃん。それになんですが奥の部屋みたいです  
ね」

そして、私らは目的の部屋についた。

「なあ、はやて、ここか、この101が、あたいらの部屋か」

ヴィータは随分はしゃいであるなあ〜やけど、その気持ちは分かる

で、貴一君に感謝やな〜

「こら、ヴィータ。お前はもう少しはしゃぎすぎだ。しかしこは」  
そして、部屋に入ると。

Side out

そして、あるイベントの準備を終了し、俺も自分の用意された部屋  
に行くと、

「なんだ、なんだここはすげえ、大きいぞ。なんだこの部屋」

はしゃぐを通り越して、遊んでいた、さらに

「ここのお茶いいね、シャマル」

「はい、さすがはやてちゃんです。このお茶もおいしいですが、そ  
れをここまでおいしく淹れるはやてちゃんもさすがです」

和んでいる人たちがいるが、

「いい景色だな、ザフィーラ。」

「ああ、さすがの貴一が決めた所だろう。それにこの緑の中にはい  
い動物がいるだろうに。」

なんでそんなに、お前らが一番、旅行つばい事しているんですか、  
それにあの東照宮の時はそんなに楽しんでいないように見えたのに。

「よかった、よかった。気に入ってもらえてさ」

そして、俺は普通の状態で中に入った。そしてはやての第一声は。

「やっぱり貴一君はその格好のほうがいいね。」

「あれ、あの大人貴一君はもうなしですか？」

なんですか、それは。俺はこれが真正正銘の体なんだが……

「あのな、俺はこれがホントの姿だからな。そしてシャマル、なぜそこでカメラを取るんだ!!」

「いえいえ、なんでもアリマセンヨ」

「なぜに片言なんだよ!!」

「いいやない、貴一君、それじゃみんな集まりー」

そして、俺らは最初の旅行の写真は集合写真だった。これが最初のはやての家族写真になるとは誰も知らない。

「しっかし、ここどうしたん貴一君？」

「いや、ただ、単に予約を取っただけだが、なんか問題でも？」

「うっん、そんなないんやけど、そのお金は？」

「ああ、気にするな、それこそ気にしたら負けだ、それにある意味

これは夏休みなんだから気楽にしろはやて」

「う、うん。」

「なあ、はやて、探検しないか？」

そして車椅子を押ししていくヴィータ。なんかホントに体と精神が合っているな。

「そやな、それじゃ。留守はお願いするよ」

そして、はやてと、ヴィータは出て行った。

「まったく、ヴィータは」

「いいんじゃないか、今回はお前らも含まれているんだからシグナム」

「し、しかし、貴一。これでは騎士の」

「おいおい、今回は騎士も休息だから、どうせ八月になったら、命一杯働いてもらうからな。」

「そうだな、それでは我も休ませさせていたどころ」

なぜかそこでザフィーラ。

「そうですね、私たちも今回はイアン旅行でしたっけ？」

「ああ、シャルルも休んでくれ、今日は俺の結界で、どうにかする

から」

なぜか驚きの顔で手を顔に当てるシャマル

「あらあら、そうでしたか、それでは」

そう言うと、今までの結界を解いてくれた、

「まったく、お前も今日の旅行から、ずっと張りすぎな、ただでさえ魔力が無いんだから、お前ら」

「いや、貴一がありすぎのような」

「そうですね、主はおかしいです」

「おい、こらああああ、サン。自分の主を、おかしい呼ばわりするな！」

「そうだぞ、サン。マイロードはただ、変なだけだ」

「お前も、敵かああああ」

「ふふふ、貴一君の魔力量は凄いものだね」

「ああ、それに貴一は、それを自分で封じることが出来ている、まさに掌握だな」

いやいや、解説しないでください、お二人さん。あ、ちなみにザフィーラは、ムーンと共に外の森を見ながら、談笑していた。

第六拾羽（A' S編十話）。旅行良好パート2（後書き）

それでは、次回『旅行良好パート3』 それでは

バイバイ

第六巻話（A）S編十一話（旅行良好パート3）前書き（

今回から、ちょっと短めです。

第六巻話（A's編十一話）。旅行良好パート3

さて、それから時間が経ち、ヴィータたちも帰ってきた。そこで一言

「あの、大浴場ってのは、うちのお風呂よりも大きいのか？」

これでした、まあそうだろうな、確かにこれも凄いが、俺の用意したのはもつと凄いぞ。

「それじゃ、風呂にでも行って来いよ、女性陣よ、俺とザフィーラで、番してるから。あ、そうだなみにお前らは、家族露天風呂だから、そこら辺は係員に聞いてくれ。」

「え、露天風呂やて」

なんとも、この反応はおもしろいな。まあはやてはなんだが知ってるが、他は？マークを浮かべているか、顔が（？？）みたいなヴィータだな。まあそう言っわけなんで。

「ほら、行った行った。」

そして、強引に出てってもらった。ふー疲れる。

「ご苦労だな、貴一よ」

「いいさ、これぐらいザフィーラ。これでも主催者だからな。なあソル」

「はい、マイロード。」



「それによザフィーラ、お前にもいい感じの風呂あるんだぞ、なあマスター」

「ああ、ザフィーラは、一応この部屋の風呂を使ってくれ、ここなら気にせずに人間状態になれるからな。」

「ふむ、感謝するぞ、貴一」

そして、奥に行くザフィーラ、やはり偶には普通にお風呂に入りたいのだろう。いつもただ単に洗われているだけだかな。

「さて、俺の仕向けたイベントが、吉と出るか凶とでるか。」

「主、凶は出ないと思いますよ」

S i d e は や て

「ほんま、こつちなん、シヤマル？」

「はい、さっき、係員の人から聞きましたから、なんですが」

「なんですが？」

「露天風呂とはなんですか、主？」

あれれ、そうかシグナム達は露天風呂は始めてやったな、そうやな

「うーん、お外のお風呂だよ」

「なに、はやて。そうなのか!!」

「それじゃ、今日はお星様を見ながら、お風呂ですか。」

「そうやなー、それに家族お風呂やから、みんな一緒に入れるな」

さっき、この旅館のパンフレット見た際やけど、この家族露天は予約って書いてあったな、それだと、貴一君がやってくれたことになるん、後でお礼言つところ。」

Side out

さて、女性陣が帰ってきた。

「ただいま」

「気持ちよかったぞう、貴一」

「ただいまです」

「すまん、貴一。遅くなった」

上からはやて、ヴィータ、シャマル、そしてシグナム。

「ああ、お帰り。後気にするなシグナム、それじゃお前ら、部屋番を頼む。あ、ちなみにザフィーラはこの部屋の風呂使ったから。今現在、ムーンと月を見ているよ。」

「ムーンだけにですかね、貴一君」

「俺も、そう言ったよ、シヤマル。それじゃ、飯の前には帰ってくるから」

そして、俺は風呂に向かった。そして意外にも俺一人の風呂だった。しかし

「やはりここは広いな、やはり旅館特有だよな、この広さは。まあ後は銭湯ぐらいか。はあゝ生き返るゝ」

つて、これじゃあ、俺はおっさんかよ、ん？そう思えば俺って転生は前は高二、そしてそれから九年、つてすでに成人かよ。まあ最近じゃアンサー・トーカーのせいかわからないけど、随分冷静になっただな。

そしてそんなことを考えている、今日この頃のこの話の主人公でした。

「よし、それじゃそろそろ、でるか」

そして俺は、ずっと一人で入った特上の風呂を後にした、時間にして飯の時間の十五分前。そして戻ると

「あ、貴一君か。お帰り」

「お、貴一もどうだ、トランプ」

いつのまに、そんなものを。まあいいか

「いいな、それで今なにやっているんだよ？」

「今な、大富豪なんや」

「了解、それで現在の大貧民は」

「………私だ」

そして、そこで挙手をするシグナム。

「シグナムは始めてからずっとそうなんだよな」

「う、」

「ダメですよヴィータちゃん、シグナムだって、負けたくて負けているわけじゃないんですから」

「はうっ」

なんとも、痛々しいな、シグナム。

「それじゃ、俺が大貧民からで」

「OKや、」

そして数分後。

「なんでや、なんでなんや〜」

都落ちが決定した、はやて。

「私が、やっと下ではないのか。しかしそれでは主が」

おいおい、トランプの遊びで主従の関係をだすなよ。

「だけだよ、貴一、なんで一番下で始まって、なんで今現在、一番上なんだよ」

「あいな、ヴィータ。こういうのは心理戦なんだぞ」

「なんだ、シンリセンって、おいしいのか？」

わおっ。ここでそんなギャグを出してくるとは、恐るべしヴィータ。そしてうちの参謀はちゃっかしの富豪を維持してらっしゃる。

「はあ〜」

シグナムはため息するしか無いのだった。

しかし、そこでご飯の放送が入り、ヴィータがそれに奮起てか、そこまで腹が減っていたのか？

「はは、それじゃ。行こうか？」

そして俺はスバル状態になった。

「あれ、貴一君、その格好でいくん？」

「ああ、そうじゃないと問題がでるだろ。」

そう、俺はここを予約する際、そのまま“大人三人”と言ってしまったため、俺はこの状態でないといけない。そして指輪は置いてい

った。そして廊下の際。

「まあこれはこれで案外楽なんだが。」

「そうなん、けど大人の背ってどうなん」

「案外、上からかな。まあ普通に生きていけるよ」

なぜか、苦笑이었다。そして飯の場所、ようは食堂にきた。

「それじゃ、食いますか」

そして席順なんだが、俺、隣にヴィータ、さらにシグナム。そして向かい側にはやて、シャマル。まあ車椅子であるし、そのお世話のためにシャマル。しかし

「おい、ヴィータ。口に付けすぎだ」

そう、現在、ハンバーグを食べていますが、なぜそこまで口を汚せる、それにはやて、何故お前は若干九歳でナイフとフォークを完璧に使えるんだよ、俺は中三でやっと使えるようになったぞ。

「あ、すまねえ」

そして、普通に拭いてやる。そしてその行動に。はやてが

「なんか、ヴィータと貴一君、親子みたいやな」

なぜか、ブラックの笑顔のはやてが居た、しかもその隣に居る、シグナムも笑っていた、そののどことなく、フェイトのE・G A・O

なんですが。

第六巻話（A's編十一話）。旅行良好パート3（後書き）

最近、テイルズにはまっています



第六十二話（A's編十二話）。旅行良好パート4（前書き）

さてさて、本格的に中間だ。

第六十二話（A's編十二話）。旅行良好パート4

さて、どうしてこうなった。

「貴一君、ソースがついてしまったんよ、だから取って」

なんでだ、なんでだはやて。お前、それはわざとだろうが絶対、しかもなんでお前が笑っていやがるシャルマル！俺のこんな悲痛の叫びは届かず、そしてなんだろう、ホントなんで俺の隣の隣のシグナムはフェイトのいや、よく言えばアリサの笑顔に似ているんだ。

「ドウカシタカ、キイチヨ」

おう、なんで片言なんだ、しかも俺の中の危険信号を走っているのはなんでだ。

「ほらほら、貴一君も食べずらいですよ。はやてちゃん、シグナム」

まあそんな感じで今回の晩御飯が終わった。ちなみに献立は、ハンバーグだ。そしてさらに時間が経ち、なんだろう、なんでこうなった。そう現在、俺は、いや俺達はカラオケBOXに連れられた、車椅子の女の子と、そしてちよつと、いや完全なシヨタコン臭のシャルマルに連れられた。

「ほな、それでは一曲目行くでえ」

そして、歌い出す、はやて。しかし、うまいから良いが。ちなみに歌は……カサブタ。なんでガツシユの曲があるんだ。そして俺はこれを見て驚愕した。なんであるんだよ、そう、その歌手の

名は水樹奈々。

「以上や、それでは次、ヴィータ」

ちなみに得点は90点、しかし指名されたヴィータは一瞬戸惑ってしまったが、

「う、うえ。あたいかよ。まあいいそれではいくぜ」

そして歌い出した。

「ガ・ガ・ガ、ガ・ガ・ガ、ガオガイガー!!!」

なんで黄金の戦士の曲を歌うんですか！やはりハンマーだからか。そして終わり得点は88点、そして今度は、

「それでは次はシグナムや」

そして、ガチガチになっている、シグナムを指名する、その主。

「は、はい。そ、それでは、歌います。」

そして曲は、深愛でした、しかも得点は

「すげえ、シグナム。98点かよ」

「凄いな。それでは次はシャマル」

「はいはい」

次はシャマル、そして歌う曲は

「これにしますね、なんでしょう、ETERNAL BLAZEで  
すかね」

おっと、「ここ」で出てきたよ、この曲が、しかしなんだろう、別の世  
界なのに、水樹奈々、恐るべし。そして歌い終わり

「あらら、89点ですか。」

ああ、うまかったけどな、しかしこうなると、

「それじゃ、ラストは貴一君やな」

やはり、そうなるか。しかしどうすれば、って何でこれもあるんだ  
よ。

「ああ、わかった、それじゃこれだな」

そして俺が選んだのは

くモザイクカケラく

そして歌い、終わるとなんだろう、なんでこんなにシーンとしてい  
るんだ？

「はわわわわ／＼／＼／＼／＼／」

いやいや、はやて、それは何処かの軍師の言葉だから。

「ホント、お前って化け物だろ」

「それは酷いんじゃないかヴィータ」

「そうだぞ、ヴィータ。貴一の歌は、そのなんだ……」

いや、そこで詰まらないでよシグナム。そして得点は、

「あらら、99点ですか、ホント貴一君は何やらせてもうまいんですね」

いやいや、シャマル、それは言い過ぎでは、

「それじゃ、次はドウエツトやで」

なんだろう、はやてがよく居る、会社の上司に見えてきた、あれそう思えば、騎士が一人足りないって、まさか！

「なあ、ザフィーラは？」

「「「「あ……」」」」

そして同時刻、俺らの部屋にて

「そのなんだ、腹へったな。」

「もしかして、主たち、俺らのこと忘れてるんじゃないか、ザフィーラ」

「……」

月を見ていて、話していた、この一組は意気消沈でした。

そして、俺の一言で、部屋に居残り組みのことを思い出した。

「そうや、それやから、私、ずっとジャーキー持っていたんや」

おい、はやて。それを早く言えよ。

「それじゃ、今日はここまできな。どうせ明日もあるし」

「おう、そうだな」

「それではみなさん行きましようか」

そして俺ら、一行は帰った、そして帰ってきたのはいいが、そこには

「ガールルルルルルルルルルルル」

おお、獣化している、ザフィーラと

「俺は頑張ったんだぞマスター」

言い訳しているが、なぜか小声のデバイスが居た。そう思えばサンはスリープモードにしっぱか。

「マイロード、なんか考えてないで「ガールルルルルルル」ど、どうにかしましょう」

「はやて、ジャーキー」

「は、はい」

おいおい、ビビるなよ、

「ブルブルブルブル」

って、お前もか、ヴィータ。

そして俺は犬に肉を与えたら。

「〜」

なんとか、治まった、しかし

「おい、はやて、そしてヴィータ。俺に掴むのを辞めてくれ。」

まあ、確かにあれは怖いだろうが、まあはやては分かるのだが、ヴィータお前は騎士だろうが、それを見ていてヤレヤレ顔のシグナムってあれ、今日はヤレヤレ顔じゃないな、てかなんだその顔は、腹でも減っているのか？まあいいか

「（やはりマイロードは鈍感すぎる）」

そして時が過ぎ、ヴィータは既に寝ている。そして俺らも寝ることにした、しかしそこで問題が発生した。

「それでは第一回、誰がどこのお布団で寝るか決める、くじを開始します。」

「なんだ、それはシヤマル。俺はこの布団の列から外れているベットで「ダメやで、それは！」な、なんでだよ~~~~~」

なぜか、はやての言葉でその案は却下された、ヴィータ既に出口の一番近いところで寝ている、ザフィーラは玄関で寝ている、なんでもいつでも不審者を退治するためのらしい。そうになると、自然的に俺はベット、他が布団になるはずだが

「それではクジをどうぞ、最初ははやてちゃん、次にシグナム。そして私で、最後は貴一君です」

「それは実質俺は引かないだけじゃ、」あ、私はヴィータの隣や「つてすでに引いてるし」

「それでは私も、ん？これは残りの端か」

あれれ、これだと後はベットか、それともはやてとシグナムの間かじゃないかよ、てか普通に後者は嫌だ。俺こんなんだが、理性が「あ、私がベットですね」・・・崩壊するかな・・・そして決まった、寝るところ。そうだこは早く寝よう、うん、そうしよう。そして俺は意識を落とした。

Side シグナム

今日は色々大変だったな、しかしこれはなんだ、どうしろというのだ、そのなんだ貴一が隣で寝ている・・・ゴクリってこんな野心はいかん、いかん。

「あれれ、みなさんお休みなんですか？」



「あ、ああサンか、ああ、すまないが。」

「分かっていますよ。そのために午後は命一杯集中していたんですから。それに主が安心して寝れるためにです」

「そうだな」

そして、私は彼を見た。主と同年であるはずなのに、既に私よりも強く、そしてなによりも心が強い。だけど、この寝顔を見ると何でだろうな、安心できる。これがモヤモヤなのか？

私はこの気持ちを紛らわせるためにこんな話をふった。

「なあ、この前、お前から聞いていたが、ホントに貴一の友人は」

「ええ、今回の休み、この夏休みから仮ではあるけど管理局員の一人になる子がいるわ。」

「その、なんだ。私は全然思っていないんだが「裏切るか、とかスパイ？」……ああ」

「うちの主はそんなことは出来ないから安心してほしいとしか言いようがないわね。それにこの作戦を実行する時、こう言っていたわ『しようがないさ、命一つ守れないで多くの命が救えるかよ。それに知り合いの、いや友達を見捨てられるかよ』だ、そうよ。まったく」

なんとも、彼らしいな。こんなにも勇敢な、だけどどこか危ない貴一を私は守りたい。私はそう思った。

「それでは監視を頼むぞ」

そして私も眠りに着いた。主と同じくらい守りたい存在の隣で。

第六十二話（A's編十二話）。旅行良好パート4（後書き）

次回、『旅行良好パート5』、これが終われば、俺婚活するんだww

冗談です、それでは次回であいましょう

第六重山話（A's編十三話）。旅行良好パート5（前書き）

はゞい、中間です。はあゝ

第六重山話（A's 編十三話）。旅行良好パート5

さて、今日も始まった。

「はあくしかし、これは」

「主、ホントに凄いいことになってますね」

「なんで、お前は楽しそうなんだよ。」

「だって、このまま行けば、主、完全にハーレム」なんか言ったか？」なんでもありませんよ」

まったく、なんてこと言いますか、まったく。そしてその時、ベッ  
トに寝ていたシャマルが起きたが、こっちを見て

「あらら、それでは」

そして戻って行った。

「こらーーーーー、普通にスルーするな!!!」

そしたら、その扉が開き

「だめですよ、貴一君、起きちゃいますよ。」

いやいや、お前さんがそんなことを言うからだよ。しかし

「.....」

そう、俺がなんで布団から出れないかと言つと。

「ほにゃ、くえあいによ」

俺の片腕を占領しているはやて。そして

「Z〜Z〜Z」

俺の服を完全に掴んでいる、シグナム。しかもなんだその寝顔は、  
・・・くそつが、かわいい！！

「ホントにこれこそ両手に花ですね主」

「なんてことを言うかサン。お前な」

「なんですか、その言葉は？」

「シヤマル、これはこの国に伝わる諺つて言うんですけど」

「そうなんですか、さっきの言葉は確かに今の貴一君にぴったしです  
すね」

なんだ、なんだ。このアホども。そして次に起きたのは

「ふわ〜、ん、なんだここはどこだ？」

寝ぼけているヴィータが起きたらしい。しかもウサギのあの人形を  
ちゃんと持っているし、なんともマッチしてるな。しかし

「ヴィータ、アイゼンを持つな」

そう、あのトンカチを持つなよ。そして次に起床したのは。

「ふにゃ。」

はやてであり、俺と目が合ったが、しかし

「ふにゃ」

寝た、これは完全な二度寝だろ、てかはやてはいつも早起きじゃないか。

「こら、はやて起きなさい。起きてるだろうが」

そして俺が肩を揺らそうとしたら、

“ガジ”

あれれ、シグナムさん、なんで強く俺の服を掴むんですか。てか放してくれ、その当たる。

「しゃーないな〜」

そしてはやてが起きる、最初からこうしてくれよ

「おはよう、はやて」

「うん、おはようやね貴一君、みんなもおはよう」

「はい、おはようございます。はやてちゃん。あ、はいどうぞ」

そして、シヤマルはすぐにはやてを車椅子に座らせるために肩を貸す。

「あはは、いつもごめんね」

「いいですね、気にしないきにしない。ヴィータちゃんもおきて」

そう思えば、未だに寝ぼけてらっしゃる、ヴィータ。

「あれね、朝か。あ、はやておはよう」

なんとも無いように起きたヴィータ、しかし

「いつまで、寝てるんだろう?」

そう、未だに俺の服を掴んだままのシグナム。

「ん?どうしたんって、シグナムまだ、寝てるん?」

「あのシグナムがあたいよりも早く起きない日なんて今日が初めてじゃないか?」

「それにしてもいい寝顔やな」

いや、あの三人、俺の服がつかまれたままなんですが。

「せやけど、なんでずっと貴一君は掴まれたままなんかな?」





さっきとは打って変わって機嫌のいいはやて。そして

「ああ、ご飯がおいしいな………はあ」

気力が未だに回復していない、シグナム。

「そう思えば、貴一、今日はどこ行くんだ？」

ヴィータが既に完食気味に言っている。

「今日は、近くのアウトレットだな」

「貴一君、そのアウトレットって？」

「あ、そうかシャマルたちは知らないのか、ようは買い物の出来る場所、あってるかな」

「そうやなく、話には聞いたことあるんやけど、本物は始めてや」

はやても、すごく期待している。まあ今回は自由行動が主流だろう。まああそこは犬もOKだから助かるな。

「しかし、貴一はもしかして、その格好のままなのか？」

そこに、質問するのかシグナム、てか何時復活した？

「しょうがないが、そうなるだろうな。どうせ、車の運転もしないといけないし」

「え、貴一君も、ママがいいなにな」

いやいや、はやて。これはどうにもならんだらうが。

「そうか……はあ」

え、シグナム、お前もかよ。

「あら、そうなんですか」

おい、シャマル、その構えている一瞬はなんだ！。

「それじゃ、今日も予定は、そんな感じだ。ごちそうさん」

そして、みんな食べ終わり、部屋に戻った。

第六重山話（A's 編十三話）。旅行良好パート5（後書き）

「さて、今回はできたあとがきラジオ」

「はあ、おい作者」

「なんでしよう、貴一君」

「おい、バカ作者」

「何でしょう貴一君……」

「お前、中間だろうが」

「はい、沿うみたいですね」

「漢字が違うし、このバカが」

「はい、そうなのです。と、言うことで、一週間ほど休ませていただきます」

「最近、もう片方と二日に一度だったのがな、」

「テストは俺の試練だ、しょうがない」

「そういうわけなので、すまんがこいつのレッドポイント回避に協力をしてくれ」

「テストが終わり次第、また再開するので、どうかどうか、見捨て

ないでください」

「ああ、それじゃ、次回、『旅行良好ぱーと6』って、この題名何時まで使うんだよ」

「あはははあはははあはははっはあはは」

「エクス……」

「あはははあははははあはあはあはははは」

「カリバーっ!!」

「ギャあああああああああああああああああああああ  
あ」

「よし、これでいい。それでは次回に会いましょう。バイバイ」

第六十四話（A，S編十四話）。旅行良好パート6（前書き）

中間中。

第六十四話（A's編十四話）。旅行良好パート6

さて、俺らは、車に乗りアウトレットのショッピングモールに到着、そして現在俺はトイレにいる、理由は、はやてが、普通の姿でお願いと、言われたため、変装を解かないといけないためである。

「まったく、子供に戻ろうが、あのままだろうが、俺は変わらないのにな」

「そこは、従ってあげましょう、マイロード」

そして、変装を解除して、トイレを出ると、全員が待っていた。

「すまん、すまん、遅くなった。」

「ええよ、それにこれをお願いしたのは私だし」

「やはり、貴一はこの姿だな」

「そうか、ヴィータ？」

「それで、主、貴一、ここは一体どういう場所なんだ？」

「はやて、説明してくれなかったのか？」

「え、あはははは」

まったく、この子は、鋭い所と抜けてる所が激しくギャップがありすぎる。

「ようは、ここで洋服とか色々買える所だと思ってくれ」

「あら、そうなんですか、それじゃ、はやてちゃん、まずはあそこからどうですか？」

そしてすでにマップを持っている、シャマルがはやての車椅子を押しながら、言っている、そしてヴィータは

「あたいはこのお菓子屋の」

すでに、食べることに目がいっている、……ん？

「どうかしたか、シグナム、さつきから俺を見て？」

「あ、ああ、なんでもない」

そして直ぐに、はやての方に行った、なんなんだ？

「（しかし、貴一、私は車に居た方が良かったのでは？）」

「（ザフィーラか。安心しろ、ここは犬、OKのところが多い、それに無理でも外には居れる、お前も騎士の一人なんだから）」

そして俺らの買い物は始まった。

Side なのは

今日は初めて管理局にお呼ばれなの。そして私は久々のアースラに、



ユノ君と一緒に来た。そして今、艦長室に来たなの。

「高町なのは、入ります」

「びびぞ」

そしてドアが開き、そこには、既にフェイトちゃんとプレシアさんも居た。やっぱり、リンディさんはお茶にミルクを入れてたの。

「あ、少し遅かったですか？」

「ふふ、心配しなくても、時間はびったしよ」

リンディさんが言う。

「そつだよ、なのは。私は今日、お母さんの実験で早くアースラに  
来たただけだから」

そして、今日から、始まる、仮でも最初の管理局のお仕事なの。

「それでは最初に、管理局とは、からね。それから、最初は研修つ  
て事になります。」

そして、リンディさんから、色々なお話が終わり、私たちは今日は  
これで解散となった。

「それでは、これで今日はおしまいです。明日はメールで知らせま  
すので。」

「はい」

「うん、いい返事ね」

「クロノ、抜かされたりして」

「エイミイ、なんだよ、それ。それじゃ二人とも。気をつけて」

そして、私たちは家に戻りました。

↳その後の艦長室

「あの、二人なら、直ぐにでも管理局入りさせたいわね」

「そうですね、ただでさえ人手不足なのに、そこに現る、なのはちゃんと、フェイトちゃん」

「だけど、ちゃんと適正かは、判断が必要だろう。」

「わかってるわよ、クロノ。だけどいいんですか、プレシアさん、もしかしたら事件とかにも巻き込まれる可能性も」

「ええ、いいんですよ。それにあの子が、私が、私みたいな子を作りたくないだそうですから。それに、お母さんの仕事も生で見たいの、なんて言われたら」

そしてそこにドアが開き

「失礼するぞい、プレシア殿はここに？」

そこには、現在では隠居中のアルバート提督が居た。しかし、隠居

してはいるが、威厳は現在も健在でその威圧感は凄い物だ。

「はい、ここに」

「うむ、久しいのう。それではワシのミッドの研究室にて、仕上げに掛かるぞい」

「あ、はい。それでは、すいませんが、私は少しの間ここを離れてしまうので」

「ええ、フェイトちゃんの場合は、このリンディ・ハラウンに任せてください」

そして、二人は部屋を出た。

「これは、これで、大変ですね」

「そうね、エイミィ。」

「カートリッジシステムの安全性。」

そして、アースラはいつもの、勤務の風景に戻っていった。

S i d e o u t

さて、現在俺は危機に陥っている、それは

「なあ、貴一君、こつちがええと思つっ？」

「いえいえ、貴一君は、こっちの方が良いに決まっていますよ、はやてちゃん」

そう、俺は現在

「そのなんだ、貴一、これはどうだ？」

着せ替え人形のようになっています。俺があまり服を持っていないと言ったのが発端で、現在こうである。ちなみにヴィータは、ザフイーラと共に外でアイスを食べて待っています。

「せやから、貴一君は、黒が」

「いえ、主。貴一は案外、白も」

しかもなんで、はやてとシグナムが争っているんだよ。

「それでしたら、これでも」

「「それや(だ)」「」

そして、シャマルの案で大体決まる。そしてこれにて俺の買い物終了。と、思いきや

「さて、次は何見にいくのか？」

「そうですね、それでは今度は私達の服を。」

「そうなや、シャマルたちは、そのままやもんな。」

そして、今度はヴィータも混ざった、洋服選び、これは俺はパスして、現在ザフィーラと一緒にいる。

Side はやて

「これなんて、どうやヴィータ？」

「うえ、はやて、さすがにそれは、派手だ。」

「そうかな？」

今日は、皆でお買い物や。私は一人やったから、いつも洋服なんて石井先生ぐらいにしか、見せへんかった、やけど、今は違う、今は私に家族がある。ヴィータにシグナム、それにシャマル、ペットとしてザフィーラもおるん、これになんか贅沢なんて言ったら、ばちが当たりそうや、やけど、それに貴一君が居てほしいと思うん。最初はぶつきら棒、だけど、どこかやさしい、二度目は凄いこと言い。そしていつの間にか、貴一君も家族になっていた。これがこのまま続くんなら、私は何もいらへん。

「主、出ますよ。貴一が待ってます」

「うん、それじゃ、いこうか」

side out

第六十四話（A's編十四話）。旅行良好パート6（後書き）

中間だけど、書いてしまった。

第六拾五把（A's編十五話）。旅行良好……。じゃない！？（前書き）

やったあああああああああああああ。

中間が終わったあああああああああああああ。

第六拾五把（A's 編十五話）。旅行良好………じゃない！？

そして、買い物も終了し、日も赤色になっている。しかし

「Z〽Z〽Z」

現在、車の中にて、はやてとヴィータが寝ていた。

「あらら、お二人ともお疲れなんですね。」

「あははは、この二人は特に、はしゃいでいたからな」

「そうだな、しかし、すぐに着くというのに、主もヴィータも熟睡しているな、一分少々で」

「しょうがないさ、シグナム。一応、はやては子供なんだから。」

「あれれ、貴一君も子供ですけど」

「今は、大人ですから」

現在、運転中の俺、しかしそこまで疲れてはいない。まあ鍛錬をよくするからこの持久力があるからだろうがな」

「すま「ないな、なんて言わないでくれよ、シグナム。今回は慰安旅行なんだからな」、そ、そうか」

「しかし、動きませんね。」



そう、現在、渋滞にはまりました。まあ帰りラッシュにジャストに当たっている。まあ子供は寝ているため、なんともないが

「しょうがないさ、まあもう少しだよ。」

現在、確かに旅館は肉眼で見えているが、しかし

「動かないな、貴一」

そう、一步も動かない。しかも暑い。

「しょうがないな、ここは俺が車を運ぶから、お前らは降りて先に戻ってくれ」

まあ、こんな暑い中に車よりか、歩いて旅館に行った方が効率がいいと思うがしかしシャマルが

「ダメですよ、貴一君。家族なんですから、一緒に居ますよ」

「そうだぞ、それにもし、それで貴一が襲われたらどうする」

いやいや、シグナム、その心配はどうだ。そして俺らは渋滞を抜けた。

Side はやて

あれね、私、いつもまにか寝てしまったんか。けどここは

「あれね、ここどこじゃ」

「あ、起きましたか、はやてちゃん」

「あ、シャルル。おはよう」

「はやてちゃん、おはようと言うつよりももう少して五時ですよ」

「なに、それほんまなん。それにしても、他はどこや？」

貴一君もいないし、シグナムも、ヴィータは、あつ、あそこで寝てたわ。

「はい、貴一君はお風呂に行っちゃいましたよ、シグナムは鍛錬だ、そうですね。それでは私たちもお風呂に行きますか、はやてちゃん？」

「あれ、いいん？シグナムもまだやし、それにヴィータも」

「ヴィータちゃんはたぶん、ご飯まで起きないと思いますし、それにシグナムは、あと三十分は戻らないと思いますし」

「そうなん、それじゃシャルル行こうか？」

「はい、それじゃ、お留守番お願いね、ザフィーラ」

「ああ」

そして、私はシャルルと一緒に部屋を出た。

Side out

さて、風呂から出て、俺は大人モードを解いて、部屋を目指し、廊下を歩いていると、そこに鍛錬帰りのシグナムにあった。

「あ、鍛錬か、こんな旅行なのにご苦労だな」

「ああ、貴一の折角の休みだが、どうにも体を動かさないと。そうだ、貴一今日はお疲れだったな。」

「ああ、あの渋滞か。なに別に良いよ。それよりもシグナムを風呂入って来いよ、さすがに鍛錬後なんだから」

「ああ、そうさせてもらおう。しかし主は」

「いやさすがに起きただろう。ヴィータは分からないけど。まあどうせ、シャマルと一緒にだろうさ、それに時間も時間だし」

「そ、そうか。ほ」

その時、シグナムが一瞬安心したような、顔をした。

「うん？シグナム、どうかしたのか？」

「い、いや、そ、そのだな、主がその私のむ……なんでもない／＼／＼／＼／＼／＼」

「へんだな、てか顔が赤いが大丈夫か？」

「へ、あ、い、いや、大丈夫だ。それで戻るとしよう貴一」

そして、俺らが部屋に戻ると

「ただいま」

「今戻った」

「ああ、シグナムと貴一か」

そこには、ザフィーラが居た。そしてその奥で、すでに布団が引かれていた中で、

「Z～Z～Z」

爆睡中のヴィータ、しかし

「あ、ここは？」

起きたらしい。そして

「あれ、車の中じゃない」

いやいや、すでに一時間は寝てたぞ、ヴィータ。

「起きたか、まったく、お前は」

「あ、シグナム。なんだお前ら、もう風呂にいつちまったのか？」

「いや、私はまだだ。主とシャマルは先に行ったようだが、貴一は今風呂から戻ったようだが」

「あ、そうなのか、それじゃ、シグナム行こうぜ。今日はデカイ風呂なんだろう」

そして、ヴィータはさっきまで寝ていた姿はどこへやら、というぐらいに元気になった。そしてシグナムと共に風呂に消えた。

「ザフィーラ、ご苦労さまだな。」

「なに、私はこれでも守護獣だぞ。それに今日は私も楽しめたしな。」

そして、また月を見始める、なんだろう、さすが狼、似合うな。

そして、時は既に八時になっている、もう夕飯も食べ終わり、後は明日になったら帰るだけとなったのだが、そう、これで終われば普通の旅行だったが、しかし時刻として九時前に不意にこう魔力反応が起きた。

「「「う!?!?」「「「「

そして、俺らはそれに気付いた、そしてはやてが、その異変に気づき

「どうかしたん?」

「その、はやてちゃん」

「すまん、はやて、少し出てくる」

「え、今からか貴一君。」

「すまん、急に月見たくなっただ。鍵は持ってるから、それじゃあな」

さすがに、これはすぐバレそうだが、しかたないさ、今日はお前らの休暇なんだから。

Side はやて

そして、貴一君は出て行った。けどさすがに私でも分かるんよ

「まあ、シャル。正直に言つてや」

「あ、は、はい」

「なんか、来たん？」

「そ、それは、はやてちゃん」

「どうなん？」

「はあく、もう貴一君はこついう役に私たちを選ぶんだから。それじゃはやてちゃん、正直にいます。」

そしてシャルが、一息し

「魔力反応が近くにありました、それも高度の」

「な、そうなん？」

「はい、主。間違いありません、ここ見える森辺りからですが」

「主からの伝言よ」

その時、机に置いてあった、二つの指輪の片方が光った。

「どうかしたん、サン？」

「ええ、主からで、お前らは休日なんだから、安心しろ、だそつよ。まったく」

ほんまに、まったくやな。

「それじゃ、シグナム」

「はい、主」

「なんだ、なんだ？」

ヴィータは分からんみたいやな。そして私は始めて主として、この命じた。

「シグナム、貴一君の助けに行ってきたや」

「私達が、ここは守るから」

「ああ、そういう事が、分かったぞ。なら行って来いシグナム」

「はい、主」

そして、シグナムが行った。私は願った、二人が無事に戻りますよ  
うにと

s i d e o u t



第六拾五把（A's編十五話）。旅行良好……じゃない!?（後書き）

「やたああああああああああ中間が終わったああああああ」

「はいはい、少し黙ろうか作者」

「はい」

「気持ち悪!」

「それでは次回予告ヨロシク、シクヨロ」

「古いな、まあいいか。次回『旅行良好………じゃない!?パート2』ってまた、このパターンかよ」

「それでは」

「人の話も聞かなくなったな、まあいいか」

「バイバイ」

第66話(A'S編十六話)。旅行良好……………じゃない!?パート2

遅れてすみません。

第66話（A's編十六話）。旅行良好……。じゃない！？パート2

さて、森の中に入ったのはいいが、何処だ？

「ソル、魔力反応は？」

「はい、この先に、確認できるのは、二匹です。それとこれはなんでしょう？一体の高魔力反応。」

「まったく、あいつらは、俺らに休日をくれないのかね？」

「マイロード、それはしょうがないかと……」

そして、森の中に、樹も無く、ただの広場みたいなところにてた。

「今回は、隠れないんだな。猫供」

俺はバリアジャケットを着ていない状態だが、そこにいた、猫共

「ふん。」

そしてそこには、大きな狼が居た、いやすでに狼とは言えないほどの化け物だが。

「お前ら、なにを。これもご主人様の指示か？」

それなら、今すぐにこいつらに場所を吐かせて、あの爺さん消滅させてやる



そして、俺は弓を手にした。

「どうするのですか？」

「最初は、弱める。そして最後は……その時だ」

そして、狼との攻防が始まった。

「ガLLLLLLLLウウウウ！！ガアアアアアアアアアアアア」

俺が弓を構えた瞬間に、こちらに襲い掛かってくる狼、しかし普通の狼よりも早く、そしてデカイ。その爪を見る限り、普通に相手をしたら、体が真っ二つだ。

「くそ、これじゃ、てか、俺の魔弾が効かない？」

さつきから、矢を撃ちながら、移動してはいるが。

「たぶん、狼の内部で魔力の暴走が。この前のジュエルシールドに似ています」

「くそがっ！ソル、相手の魔力量から、矢の強さを算出」

「イエス、マイロード」

それなでは、移動して勝負だな。そして、俺は弓を消して、今度は、

「狼かよ、くそなにか、いい剣を」

俺は無意識にアンサートーカーを使い、安全な策を出した。

「その口は邪魔だな。天の鎖よ。その口を縛れ！」

そして、王の財宝から、出てきた鎖。この天の鎖もといエルキドゥ。これは元は神を律するための鎖のため、神性が無ければ、ただの鎖でしかない。この場では適切だった、確かに化け物にちかい、狼でも所詮狼なのだから。

「これで、噛み付きの心配はないな、しかしこれを俺が持つのは、何分だろうな？」

現在、口に鎖を巻いた狼を掴んでいる俺。これで、一分はもつかな？しかし、そんな願いは虚しく。

「ガアアアアアアアアアアア！」

鎖を巻いたまま、こちらに接近したため、普通に緩んだ。おいおい、ここまで頭良かったっけ、狼。

「マイロード、算出できました。こちらで出力をあわせませす」

「よし、ナイスだ。投影、<sup>トレス</sup>開始」<sup>オン</sup>

そして、二度目の弓を投影。

「行くぞ、狼。ハアアアアアア、はっ！！」

そして、一筋の矢が狼を向けて、走った。そして、次々に矢の嵐をお見舞いさせた。

「ガ、ガガ」

おお、効いているらしい。

「よし、これで「ガルウ」ちつ、まだ出来るのか。それなら、ソル、出力を調整してくれよ。フルンディング赤原獵犬!!!」

そして、狼をそれ避けたが

「ふ、この犬は、追いかけてくるぞ。」

そして、後ろからの一撃、これで大分弱った。

「さて、どうしたものか「貴一、大丈夫か」……ん？」

その時、戦闘態勢のシグナムが来た。

「おいおい、シグナム。サンの伝言を聞かなかったのか？」

「ああ、聞いたが、すまないな主の命令だ。そしてこれは私の意志でもある。貴一手伝うぞ」

「ああ、それは助かるのだが」

そして、現在の狼を見る。そして少しは弱ったが未だに健在のようだ。

「なあ、あれは狼か。しかしどうするんだあんなの？」

「ああ、蒐集するしかないだろう。」

「ああ、そうだな、それがいい。すまないが貴一」

「ああ、あいつの動きを止めればいいな。」

「ああ、出来るのか？」

「さつきまで、俺だけだったからどうするか、迷ったが、蒐集が出来るなら、話は別だ。」

そして、俺らは二手に別れた、しかし狼を俺を見た、やはり攻撃した方に向くか、しかしそれは好都合だ。

「開幕を告げる、天の鎖よ!!」

そして、今度は、狼の周り一帯に、鎖が出てきて、完全に動きを封じた。

「な、これは」

シグナムも驚いている。

「シグナム、早く」

「ああ、すまん。それでは、蒐集開始」

そして、蒐集が始まったが、その数分後

「な、これは!!」



シグナムの声と同時に、狼は鎖を解こうと暴れ出した。

「な、ぐ、ぐはッ！」

投げ飛ばされてしまった、シグナム。そしてそれに追撃をかけようとする狼。

「させるかあああああ」

俺は矢を放ち、牽制するが

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア」

そのまま、突っ走る狼。そんな俺の答えは

「トレース、オン 投影、開始」

干将莫耶を出して、それを狼に投げ、そして相手に刺さりそうになった瞬間

「爆ぜろ」

爆発させた、いわゆる、ブロークンファンタズム。それにより、狼をこけた。俺はその間にシグナムに接近した。

第66話(A's編十六話)。旅行良好……………じゃない!？パート2

次回『なせば成るなさねば成らぬ何事も』

バイバイ

第六重奈々話（A's編十七話）。なせば成るなとねば成らぬ何事も（前書き）

ダカーポ、おもしろい。

第六重奈々話（A's編十七話）。なせば成るなさねば成らぬ何事も

俺はシグナムに近づいた。

「大丈夫かシグナム。」

「ああ、すまない。」

そして、シグナムは手を見ている。

「一体なにがあつた？」

「ああ、それが、あの狼に蒐集をしようとしたら、あいつの魔力は・  
・・・・生命コアに直接リンクされていて、蒐集したら、それが最後。  
」

そして、シグナムは拳を握り悔しそうだ。

「なあ、シグナム確認だ、すでに蒐集は？」

「ああ、少しは出来た。しかし命に関わるからな、さすがに私も主  
の手を汚させたく無い」

「そうか、それなら、これで終わりにする」

そして、俺は王の財宝からある婉曲の剣を取り出した。

「な、貴一、分かっているのか。確かに蒐集は少し出来たが、それ  
でもあれをもとに戻す方法は」

「ふ、ならばそれすらも無くすまでだ、真名解放、『ルールブレイカー』」

そして、俺はその剣を持ちながら、狼に仕掛けた。

Side ギル・グレアム

現在、私は自分の部屋に居る。そしてそこには自分の娘とも言える使い魔もいる。

「まったく」

私は少々憤りを感じている。

「ごめんなさい、お父様」「ごめんなさい」

確かに、この子達がやってしまったことだが、私もそれを感じず気無かったのは、やはりこの事に対する思いのせいか、それとも……

「それで、あの闇の書の主達に接近したのか」

「はい」

現在、あの闇の書の主には、もう一人の魔導師がついている。しかもこの子らを簡単に勝つほどの実力がある者だ、さらに守護騎士までもいる。これでは私の計画が。

「それで今確か、あの子らは旅行中だったね」

「う、はい、そうです」

まったく、それではかわいそうだ。確かにあれはシステムかもしれないが、あの子にとっては家族、その旅行ならば尚更邪魔など、しょうがない。

「その映像は出るかね」

「はい、それは私らが消える前にちゃんと」

そして、その目の前に出てきた映像は、狼を殺してしまう、末路ではなく、普通の狼に戻す、奇跡だった。

Side out

「貴一、それは」

シグナムも質問に答えることなく俺は、狼に近づいた。

「安心しろ、すぐに解放してやる」

剣を構える俺。そしてさっきので完全に暴れ始める狼

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

狼の咆哮と共に、来るのは爪である、俺はそれを避けて、懐に入った。そして



「来るなら来るがいい、この正義の味方！俺はお前を認めない、だから俺はお前の敵だ。」

「あ、貴一、いきなりどうした？」

いきなり叫んだことに戸惑いを感じるシグナムが居た。

Side ギル・グレアム

私は、彼の一部始終を見ていた。声は聞こえないが、しかしあの剣は一体？

「出た、アイツのあれだ」

そして、リーゼロッテがそういう

「あれとは、なんだね」

「あ、はい。実はあいつの後ろから変な剣が出てくる空間が、あるみたいなんです」

なに、それは彼の稀少能力レアスキルなのか、しかし。と、その時急に映像の音が元に戻り

「来るなら来るがいい、この正義の味方！俺はお前を認めない、だから俺はお前の敵だ。」

その少年は、そう言うのと不意に笑った。これはまるで私の計画がばれているのか？



「映像を切ってくれ」

そして、映像を切る。

ふと考えてしまう、私はこれでいいのだよな、そうだろうクライド。

Side out

「ああ、すまないな、実は監視されていたから、そいつに向けてのメッセージだよ」

そして、その言葉にさらに驚愕するシグナム

「ああ、安心しろ。音声は完全カットしてあるから」

それを聞くと、安堵の顔をするシグナム。

「まったく、お前は。帰還するぞ」

「ああ、そうだな。それじゃソル」

「ハイ、マイロード」

そして、俺たちは魔法陣でワープした。玄関前に。

「遅すぎや！心配したんよ！！」

え〜と、怒鳴るはやてが居ました。

「あ、いや、は、はやてこれはだな」

「まったく、いきなり蒐集なんて驚きましたよ」

シャルルが、闇の書を持ちながらこちらにきた。

「ああ、すまないな。緊急の処置だったんだ。それで頁は？」

「ええ、一頁、埋まったわ。これで後六百六十五頁です。」

「そうか、それなら」そんなのは、どうでもええ！！一体なにがあつたん！「あ、主」

完全に俺の肩を持って揺らすはやて。

「ちょ、ちょっと待て、これじゃはな、話せない」

「まったく、心配なんて掛けさせるからよ、主」

サンが独り言のように言うのは聞こえた。後で覚えて置けよサン。

「はやてちゃん、そのままだと貴一君が目を回しちゃうから」

そこにシャルルの言葉があり、どうにか。収まった、そして既に十時になるが、それをお構いなしに俺への質問の嵐だった。

「それで、その狼さんは？」

「ああ、無事だ。安心しろ」

「良かった……そうやない！！それもそうやけど二人とも遅すぎ！！」

と、こつこつという感じで俺とシグナムはお説教をくらい続けた。ちなみに他は知らん顔で、ベットの方の部屋に逃げて行きました。

第六重奈々話（A's編十七話）。なせば成るなさねば成らぬ何事も（後書き）

だ、誰か、私にお慈悲を……………ガク……………

次回『大變だよ、色々』

バイバイ

第六拾霸知和（A，S編十八話）。大變だよ、色々と（前書き）

朝が寒くなりましたね。

第六拾霸知和（A's 編十八話）。大変だよ、色々

そして、そんな旅行から、一週間がたち、現在、蒐集活動真っ最中の俺たち。今日も今日で、龍種を討伐し終えて、現在その世界から帰還しようとして、シャマルたちと合流しようとして飛んでいる、ちなみにパーティーは俺とシグナム、あとはそれ以外である。ザフィーラは留守番ではやての警護である。

「しかし、貴一。今回も鮮やかだったな。」

「あ、そうか？ヴィータに言わせれば、お前は人間か？だってよ」  
そういうと後ろに飛んでいるシグナムが笑っていた。

「ふ、そうだな。」

「おい、こら。笑うことはないだろうが。」

そんな感じで、蒐集活動をしている。そして全員集合して、今日の成果、もとい集まった魔力を確認する。そしてそれから俺らは俺の転送魔法で家に帰る。そして帰ると

「あ、おかえり。今日は早いんやな〜」

「おお、はやて。今日は凄いの居たんだ。」

ヴィータがまるでなにかを見つけた子供のように、親に褒めてもらおうとしているように見える。そして

「そうなん、すごいな〜」

はやては自分のためにしてくれているヴィータにはそういう言葉をかけるが、その後の顔は申し訳ない顔で一杯だった。そして、それを気にせず家に戻っていく、ヴィータ。

「なあ、はやて。」

そんな俺は声をかけて、

「うん？どうしたん貴一君」

「“恩返し”できるように、元気にならないとな」

そんな言葉をかけて俺も、部屋に戻る。

Side はやて

そうやな、貴一君の言う通りや。

「主はやて」

シグナムが心配そうに声をかけてきてくれた。

「大丈夫よ、シグナム。わかっとなるから、それに貴一君の言うとお  
りやしな。」

「そうですね、主。」

そこにシャマルが話に入ってきた。

「それでお二人さんは、どこまでいったんですか？」

「な、なにを言うねん、シャマル」「な、なにを言ってる、シャマル」

いきなり、なにいうねん、シャマル。確かに、最初に会ってからちよつとかっこいいなって思うとうたで確かに。せやけどお二人さん？

「もう、二人とも熱い眼差しで貴一君を見すぎよ。まあ、貴一君はまったく気付いていないけども。もう私にはバレバレよ。はやてちやんなんて、あの旅行帰りなんか「わああああああああ」うふふふふ」

なんでや、なんで、シャマルにはバレてるん、あの時は確かに、誰もいなかったはず。

「それに、シグナムなんて、人工呼吸にかこつけて」

「いや、待て、シャマル、あれはお前が、言ったからであって、それにあれは未遂に」

なんやて、人工呼吸？それはようは……………

「ちよつとシグナム、オハナシセイヘン？」

「で、ですから、あ、主……………」

そして、その後、私は、シグナムと O H A N A S H I をしま



した。

S i d e o u t

S i d e なのは

最近、管理局のお仕事にもなれてきたなの。今日は今日で、ある世界の詮索なの。

「なのはちゃん、そっちは」

「うん、フェイトちゃん。こっちも異常なしだったよ。」

私は、この空を飛べるのが凄く楽しいなの。そのせいか、偶に、クロノ君に怒られたりするなの。

「了解、エイミィさん、異常なしです。これより、帰還します。」

そして、通信越しのエイミィさんが

「了解、了解。二人ともご苦労様ね。それじゃ、ここのポイントで落ち合いましょう。」

そして、指定された場所に私たちは向かった。

「お疲れさまね。二人とも」

「はい、エイミィさん。それにしても、今日はこの前みたいな、ドラゴンはいませんでしたよ。」

「いや、なのは。あんなの毎回出たら、私たち、生きていないですよ。」

フェイトちゃんが、すごく疲れた顔が私には見えた。

「あはは、二人ともご苦労様。まあうちのあの執務官さんももう少しで帰ってくると思うけど、艦長 二人は」

そして、通信でリンディさんに指示を待ち。

「エイミィ、今日はあの人に会う日だから、待機してもらっていて」

「了解です。と、言うことで二人とも、食堂にでもいてね」

「はい」

そして、私たちは、指示が出るまで、まった。

ある、世界でのクロノ執務官。

「こ、これは」

そこには、龍種で、あるがやけに魔力だけを抜かれている、竜が疎らにいた。

「なあ、ユーノ。これは、一体？」

「うん？僕も分からないけど、外見は損傷は少々だね、さらに言うならばホントに魔力だけ、抜かれているね」

魔力だけを、抜かれる……まさか！っと、思ったとき、通信が入った。

「クロノ、そろそろ時間だけど、報告は後で上げてくれればいいって艦長が言ってるから、ここに来てね」

そして、エイミィが通信を切れた。

「それじゃ行こうか？」

「ん？あ、ああ行こう」

………。

Side out

さて、今日も蒐集活動も終了し、今回は、シグナムと一緒に、はやての病院の付き添いに行くことにした。

「しかし、主。最近の足の様子は？」

「うーん、そんな、変わらへんかな。どうなん貴一君」

「まあ、その足の麻痺は完全に闇の書から解放されれば、歩けるようになるだろうが、現在の状況は、このまま維持かな。こつも早く、蒐集活動したから、心臓にはとどかないだろうな」

そんな、難しい話をしてる。

「? ? ?」

はやてはさすがにわからなかったらしい。

「しかし、貴一。病院に行く意味はあるのか、それを聞いていないと思うのだが」

「あんな、シグナム。普通、病院に通院しているだから、急に行かなくなったら、怪しいだろうが。それに石田先生はいい人だろうが」

「あ、ああ、そうだな。」

「それに、最近石田先生、私が元気がいいって言うねん。そんなに変わったかな」

「そうかな」。俺はあんまり分からないけど、元気になったのなら、それはいいことだな。

「あ、病院やな、それじゃ今日は貴一君も行って見る?」

はやての誘いに俺は

「いいな、初めてだし、ここの病院」

そして、俺ははやて達と共に病院の中に入って行った。

第六拾霸知和（A's 編十八話）。大変だよ、色々と（後書き）

それでは次回「片方は病院、片方は……」

バイバイ

第六拾九話（A、S編十九話）。片方は病院、片方は……（前書き）

後一話で、七十話。

第六拾九話（A's編十九話）。片方は病院、片方は……

さて、病院に入ったら、直ぐに看護婦さんがはやてを見つけて、すぐに案内された、やはり常連さんだからかな、まあ病院に常連つてのは変なのかな。

「石田先生はな、うちのお母さんみたいなのなんやで」

それから、はやては病院の廊下を歩く、もといシグナムに押されながら、俺に石田先生の話をしてくれた、そして部屋に到着。俺とシグナムは外で待機。

「それじゃ、あとでな」

そして、扉越しには「先生、今日もきましたよ。」「ふふ、よかった、大丈夫みたいね最近」

そのような、談笑が聞こえた。

「はあ、これでまずは一段階終了だな」

「ああ、このまんまプランAで終わればいいが」

プランA、これは俺たちが一番望む形である、それはこのまま管理局に見つからずに事を終了すること、まああのギル・グレアムぐらゐなら俺たちでもどうにかなるので、大丈夫なのだが、しかし原作どおりなのは達の介入があると面倒でしょうがない。特にあの砲台魔王、そして、それでもプランB。しかしプランSは誰も知らない、これは俺だけのプラン。まあ使わないのが一番なんだが。





S i d e シグナム

やはり、貴一の友人は管理局だったのか、それならばそれは私が、  
と思ったとき。

「ああ、そうだ。それで終わればいいがな。まあそれで嫌われたら、  
しょうがないけどな。命一つ救う方がおれは重要だと思っているか  
らな。」

私は今の貴一の顔を、逸らす事が出来なかった。貴一は主と同一年  
であるのに、なぜそんなに、凜々しいのか、私はその顔に惹かれて  
しまった。なんども見るあの戦闘での凜々しさではなく、どこか、  
子供の顔の貴一に。

「おい、シグナム大丈夫か？」

そして、不意にそんなことを考えていた私の目の前に貴一がいた

「う、うわぁっ」

そして、一瞬だが、驚いてしまい、そして

「ぶ、ふははははっ」

盛大に笑われてしまった。

「う、笑うことないではないか。」

s i d e o u t

「いやいや、シグナムの驚く顔が見れるとは、意外だったんだよ。」

そして、その時、ドアが開き。

「あ、シグナムさんですね……あれ？」

そして、出てきたのははやと、そして石田先生。石田先生は、シグナムに挨拶をして、そして俺を見て、首を傾げた。

「えっと、君は？」

「あ、そう思えば石田先生も、貴一君も初めてやったな。」

「ああ、そうだな、はやと。初めまして、石田先生。僕は星川貴一  
つていいます、はやとは友達で」

「あら、そうなの。なるほどなるほど、それはそれは。」

そして、なぜかシャマルにも似た、顔をしだした石田先生。

「初めまして、私ははやとちゃんの主治医の石田幸恵っています  
よろしくね」

そして、握手をした。

「それではシグナムさん」

そして今度はシグナムが、部屋に連れて行かれた。

「いつもああなんよ、なんでか、知らんけど、なんかシグナムが石田先生に相談事があるらしいよ」

シグナムが……なんだろう？

そして数分後。

「あ、ありがとうございます。」

シグナムが、なぜか元気よく出てきた。

「いつもああなんよ。」

「ふふ、それじゃあね、はやてちゃん、シグナム、貴一君」

そして、病院を後にした。

Side なのは

なんでも今日はこの後、フェイトちゃん達家族の、保護監督役をしている、提督？って人に会いに行くなの。

「だけど、その人ってどんな人なんだろうね」

その時、クロノ君が、戻ってきたなの

「すまないな、二人とも。」

「うんうん、全然」



「ああ、実はね、フェイト、彼は、君たち家族の保護監督なんだよ」  
「保護監督とは形だけでね、実質はリンディ提督から、先の事件や、その事柄も聞いているし、現在の状況も聞いている。それに私と同じ名前の大先輩からの念をおされているからね。」

「同じ名前の？」

私とフェイトちゃんは同じ疑問を口に出してしまったなの。

「ははは、そうかそうか。知らないのか、私はね、ギル・グレアムと、言うのだよ。」

ギル……ああ、あの貴一君のお爺さん。

「しかし、あの世界は魔法器質が、大体ないのだがね。ごく稀に私や君のようにいるのだよ」

そして、少し、グレアムさんの昔話を聞き、そして

「そうだ、君達にこれは私からのお願いだ、聞いてくれるか？」

「はい」

「友達や自分を信頼してくれている人の事は、決して裏切っけない、もし友人が敵になったとしても、信じ、そしてそれが過ちならば、直してあげなさい。君たちはそれができるのだから」

「はい……」

私たちは、見合いながら強く頷きました。

「いい返事だ。それでは」

そして私たちはまた、戻っていきました。

なのは達が居なくなった部屋にて

「グレアム提督、それは僕にも言いましたね。」

その時のクロノはどこか苦しそうだった。

「どうかしたのかね？」

グレアムは心配そうに、顔を見る、そしてクロノはこういった。

「はい、もしかしたら、闇の書が起動したかもしれません。」

その言葉が、その部屋に響いた。

第六拾九話（A's編十九話）。片方は病院、片方は……（後書き）

次回、すいませんまだタイトルが決まってません。

それではバイバイ

第七重輪（A、S編二十話）。さて、始まりの始まり（前書き）

やった、七十話だ。



第七重輪（A's編二十話）。さて、始まりの始まり

Side クロノ

僕は振り絞って言った。そして自分の父にも似た人はこういった。

「それは、本当か」

「はい、最近、各世界で特に龍種の魔力が急激に減らされているものが、今日の調査で濃厚はと、闇の書の特徴、それはリンカーコアによる「蒐集活動だね」……………はい」

「自分は、この調査を艦長に報告して、調べてみようと思います。」

「そうかね、一つ。私が言えた義理ではないが……………無理はするなよ」

「はい」

そして、僕も部屋からでた。

Side out

さて、病院から出て、俺らは家に戻り始めた。

「あ、しもうた、冷蔵庫の卵買い忘れてしもうた。」

「なら、はやて俺が行こう」

「ええ？」

そして、お金を貰い俺はスーパーに行った。そしてスーパーに行く  
と、久しぶりにあの人に会った。

「お久しぶりですね、ノエルさん」

「え……あ、貴一様。どうも」

そしてメイド姿のノエルさん、つてここはメイドも通うスーパーな  
のか？

「貴一様もお買い物ですか？」

「あ、はい。卵を買い忘れてしまったので」

「ふふ、そうですか、それでは私はファリンが買い忘れてしまっ  
たものを買いに」

「あはは、ファリンさんらしいですね。」

「ええ、ホントもう少し注意してくれば良いのですが」

そして、俺は少しノエルさんと会話をし、帰ると

「「遅いで(ぞ)」」

はやてとシグナムが怒っていました。

「ああ、すまん、ちょいと知り合いが居てな。少し話をしていた。

「  
「あら、それならサンでもムーンに連絡をくださいよ、その二人の」「シャーマール」「……………ふふ、それでは黙るとしましよ  
う。」

よくわからん会話をしないでほしいな。

「まあその心配してくれたんだろう、すまないな」

「あ、そんなにかしこまらなくてもええよ」

「ああ、貴一の身に何も無く良かったぐらいだ」

そしてリビングから、痺れの切らした声がした。

「は、はやて……………腹減った」

ヴィータの悲痛のこの場合はある意味腹痛の叫びを聞き。

「あはは、ごめんなヴィータ。今すぐやるから。それじゃ貴一君」

「ああ、了解だ。それじゃ今日はシグナムも手伝うか？」

「あ、ああ、私なんかでよければ、主の力に」

「それじゃ私も」「シャーマルはリビングに居てくれ」「み、み  
なさん……………酷いです」

すまん、俺でもあの料理は直せない。

それから、数分が経ち。飯は完全に消費されてしまった。

「ふー。食った食った、やっぱ貴一とはやての料理はギガうまだ！  
」

いやいや、ウサギのぬいぐるみを高く上げながら言ったが、ホントお前は小学一年生かよ。

「ふむ、それでは私は、少し出てこよう。」

そしてザフィーラがいつもの見回りをしに行った。それじゃ俺も行くか

「それじゃ俺も少し出てくる、ヴィータ、行くぞ」

そして、現在もリビングで和んでいた、ヴィータを引っ張り、

「あ、ああ。今日はお前とだったな、それじゃひとつ走り行って来るぜ、はやて」

「うん、きいつけてね、貴一君も」

「ああ、分かっている。こんな夜分だ。十時までには帰るよ。それじゃシグナム、シヤマル。」

「ああ、お前が居ない間の留守は私達が責任を持って守る。」

「違っただろ、なんかあったら」

「すぐ連絡ですね。わかってますよ貴一君」

そして俺は魔力反応の無い転送魔法を使い、何処かのビルの屋上にワープした

「相変わらず、お前の魔法は意味が分からないな」

ヴィータが転送されて呆れていた。

「うるさいぞまったく、それじゃソル行くぞ」

「イエス、マイロード」

「セットアップ」

そして弓兵の赤いバリアジャケットに身を包み、

「アンロック」

「Unlock」

そして、マントをなびかせ、バイザーで目を隠している、騎士に変化した。

「行くぞ、ヴィータ」

「ああ、早く終わらせて、はやてに褒めてもらっぞ」

褒めてもらっぞのが目当てかよお前は。

そして、今度は砂漠が広がる世界に来た。なんでもここに凄く強い

リンカーコアの化け物が居るらしい。

「てか、こんな場所に何がいるんだよ、モグラか？」

「貴一、なにわけのわからないこと言ってるんだよ、ん！くるぞ」

その時、ヴィータは何かに気付いたらしい、もちろん俺は……  
き、気付いたよ……。そして出てきたのは

「シャアアアアアアアアアア！」

蛇とは言えないが、ムカデのような奴が砂の下から出てきた。

「これが、噂の化け物か？」

「さあな、だけど、こいつ強いぞ」

ヴィータが構えた時、相手もそれに気づき、こちらに突進してきた。

「はあく、めんどい。」

そして、突進してくるムカデを俺は腰にある双銃を手にし、連射した。そしてそれに続くようにヴィータがムカデの頭の上にアイゼンを振る。

「はああああああ！！」

そして見事に当たるが

「な、こ、こいつ固い」



「ああ、管理局だ」

「な、じゃ、じゃあ、さっきので？」

ヴィータも程よく、蒐集活動も終了させて、こちらに来了。

「さあな、知らないが「君達、ここで何をつて、それは闇の書！」」

そして、クロノ執務官が現れた。



第七重輪（A's編二十話）。さて、始まりの始まり（後書き）

それでは次回『あとしの歯車<sup>ギア</sup>』

第7重二羽(A's編二十一話)。あと少しの歯車(ギア)(前書き)

くくく、始めれ、始めれ。くくく。

第7重二羽（A's編二十一話）。あと少しの歯車（ギア）

さて、どうしたものかね。

「君達、それは………闇の書だね、それは第一級搜索指定のクロノが驚愕しているなか、

「うるせえ。この野郎!!」

ヴィータ猪突猛進で突っ込んだ。

「あゝあ。」

「な、く、しょうがない。」

そしてクロノの周りに魔法陣がでて、あれは誘導弾か？

「シュート」

そして無数の魔弾がヴィータに襲い掛かった。

「そんな喰らうかああ、アイゼン!!」

「Ja」

そして避けながらの特攻、しかしやはり騎士だな、全部避けていやがる。そしてベルガ式の特徴である、カートリッジを一つ使い。魔法陣を展開させたヴィータ。

「くらええええええ」

そしてハンマーを振り下ろした、まあこれで決まるわけないか。そう、そこには誰も居なく、ギリギリでクロノは避けたようだしかしクロノを見る限りすでに息が上がっていた、しょうがない。

「おい、ヴィータ撤退だ。」

「あ、なんでだ？あいつを黙らせることぐらい」「いいから」「う……」

「もしかしたら、時間稼ぎかも知れん。お前は早く撤退しろ、闇の書を持ってな。蒐集もおわったし。俺は少し時間を稼ごう」

そしてすぐに武器を引っ込めて。

「分かったよ。それじゃ、後でな。」

そして俺が直ぐに専用の魔法陣を展開させて、ヴィータは消えた。さて、どうしたものかね、この管理局のクロンボは。

「く、き、君は一体。」

「ふん、貴様に語ることは無いな（声を若干低くしています、顔はバイザーで隠れているため気付いていない）」

「君は、守護騎士では無いのか？」

「さあな、知らないが、分かっているのは俺たちはお前らの仲間で

は無いということかな？」

「そうか、自分は管理局のクロノ執務官だ。さっきの闇の書及び、公務執行妨害により君を逮捕する」

そう思えば今回は完全な公務執行妨害だったな。まあいいか、さてどうするか。

「ふ、そうか。名前を名乗るとは礼儀があるな。それではこちらも戦闘前に「S2Uセット」はあゝ」

そして、俺に向かって容赦なく魔弾を撃ってきた。はあゝま、しょうがない。

「ロックオン」

「「「Lock on」」」

そしてそんな魔弾は俺のバリアジャケットにすら通らず、俺は片方の銃だけを取り出し、標準をクロノ合わせて、

「ま、落ちてくれるといいがな」

「「「落ちる確率99%」」」

「十分な確率だ」

そして俺は普通に引き金を引き。

「な、こ、これは。わ、わ、うわあああああ」

そしてクロノは堕ちた。

「はあく、こんなものか。それじゃあな、管理局さん」

そして俺も転送した。

Side なのは

クロノ君が、通信が取れなくなってしまった所に私とフェイトちゃんとで来た。

「クロノ君、どこに」

「ね、あの黒いの、もしかして。アルフ」

「分かっているよ、フェイト。」

そして砂漠の真ん中に黒いなにかがいたなの、だけどあれはホントに？

「フェイトおおお、ビンゴだ！」

そして、私達はクロノ君を拾い、アースラに戻った。

Side out

俺ははやての家に戻ってみると……

「お〜そ〜い〜で〜」

はやてがご立腹で、玄関に居た。なんだろう、これだとまるで夫が飲み会で遅く帰ってきた如くだった。

「・・・・・・・・」

しかもシグナムもそんな感じでした。

「聞きましたよ貴一君、管理局に見つかってしまったみたいで」

「ああ、完全に見かったな。これからは管理局に注意しないと、それから、そいつらが居る際は俺の名前は伏せてくれよ」

「やはり、貴一。そうなのか」

シグナムが寂しそうに俺に向けて言った。もしかして・・・・・・・・

「おい、サン。お前話したか？」

「な、なんのことかしら？」

やはり、話したな。まあ、シグナムぐらいには知っていてもいいだろうが・・・・・・・・はやてはまずいな。

そして、リビングに戻った、はやてはすでに寝てしまった。

「それで貴一、これからはどうしたらいい？我らはお前に従うぞ。」

「ああ、貴一に従うぞ」

「そうですね、貴一君、どうします？」

現在、ヴォルケリッターと作戦会議中。

「ほぼ、方針の変更は無しだな。管理局員に対しても攻撃されたらやり返せ。てかしてこない限りなにもするな。してきたら、まあ殺すなよ、それ以外なら黙らせていいぞ。」

「それでいいのか？」

ヴィータが驚いていた、まあこれは元から変える気は無かった、しかしあのカートリッジフラグは立たせるべきか微妙だな、まあプレシアさんとギル爺のおかげで大分、良くなっただろうが、しかし

「貴一、怖い顔しているぞ？」

シグナムの声に俺ははっとした。

「あ、ああ、すまない。色々とな考え事が止まなくてな。」

「そんなにも大変か？」

シグナムが心配そうに聞いてくるが

「安心しろ、大丈夫だからさ。それに今は仲間がこんなに居るんだ、大丈夫と言わずなんというんだ、な、だから安心しろ」

そして、シグナムを撫でてやった。そしていつもごとく真っ赤の顔をしているシグナム。

「よかったですね、シグナム」



そこでからかう、シャマル。しかしそれをも聞いていないようで、俺に撫でられている……あれ？

「し、シグナム」

「……………はっ！す、すまない。」

大丈夫か？もしかして魔力不足か、いやそれは無いか。しかしここからがホントに大変のかもな。

「さて、そろそろ俺は寝るよ。さすがに疲れて……………ふわぁ、すまん」

「なに、貴一は今日はヴィータを逃がすために戦っているのだから、しょうがない。」

「そうだが、今はザフィーラが見ているから安心して寝てろ」

ヴィータにも言われてしまった、俺ホントに疲れているのかな。

「ああ、それじゃあそうさせていだだこう。」

そして、次の日。それは多くが動き始める、いや“歯車が噛み合っ  
てしまう”そんな日になるとは誰も知らない。

第7重二羽（A's編二十一話）。あと少しの歯車（ギア）（後書き）

次回さあ、本当の始まりを。『カミマミタ……わざとじゃない！』『えっご期待。それじゃ、バイバ～イ』

第7重似和(A, s編二十二話)。カミヌミタ……………わざとじゃない!!

ランランル

第7重似和(A's編二十二話)。カミマミタ……。わざとじゃない!!

そして今日も始まった。

「うし、今日は六時か、早かったかな？」

まあいいかと、思いながら下のリビングに向かった。しかし、朝にも関わらずなぜかキッチンから音が聞こえた。

「うん、貴一君のあのおいしさは……………」

はやてがメモを見ながら料理をしていた。

「おはようさんはやて」

「ふ、ふにやつ!!」

なぜか、車椅子から飛び出しそんな勢いがあった。

「うん?どうかしたか、はやて」

「アハハ、なんでもないよ。せやけど今日は起きるの早いね貴一君。最近は後一時間は寝てるはずやで」

「ああ、そうなんだが、今日は早く起きてしまったな。よく分からないけど。それで朝食か？」

そしたら、はやては慌ててその料理を隠し始め。

「アハハ、なんでもないよ。さ、貴一君はリビングにもいて。」

そして、俺は車椅子による押し出しで、キッチンから出てしまった。その時シャマルが起きたらしい。

「あ、おはようございますはやてちゃんって、あれ？貴一君は今日早起きなんですね。昨日もいつもとそんな変わらない時間に寝たはずですけど」

「ああ、なぜか……ってこれははやてと同じ会話をすでにしたな。」

「あはは、そうなんですか。もう少しでシグナムもヴィータちゃんも起きてくるとおもいますよ」

「そう思えば八月に入った俺が一番最後の起床が多かったな。」

「まあ、貴一君の運動量を考えれば、睡眠時間が足りないような気がしますけど。」

「そうか、体に異常はないはずだが」

「当たり前です、マイロードの体の管理はちゃんとしていますから」

そして、首から下げているソルに言われた。そう思えば

「ムーン、サン、お前らも起床しろ」

「「いえ、我々は疲れています」」

「デバイスが疲れるってなんだよ、メンテか？」

「いえ、マイロード。アンロックした際にはなにも感じませんでしたよ。」

「うう、最近の使用量が完全にライトアンドダークネスが多くて、疲れますよ主」

「あんな、サン。そう言ってもしょうがないだろう。相手のスケールが違いすぎるし、何かあっても困るしな」

「ああ、それは分かっているんだがなマスター……………」

「ま、しょうがないさ。今日は午後からだからな」

「あれ、そうでしたっけ？」

おいおい、しっかりしてくれよシャマル。

「そうやたっけ？あ、ホントや今日は遅いんやな帰り。えーと今日は誰が行くん？」

はやてが朝食のトレイを持ちながら来た。

「ああ、はやて持つよ」

もちろん、俺が持つが。

「そうですね、今日は貴一君とシグナム、それからヴィータちゃんに私。ザフィーラは」

「家で、主の警護だ。それから皆、おはよう」

そして、ザフィーラも起きたようだ。

「うーい、おはようさんザフィーラ。」

「お、今日は貴一が居るのか、おはよう」

そして、シグナムも起床したようだ。しかもヴィータを引っ張って。

「ああ、おはようシグナム、それに……………ヴィータ」

「Z〜Z〜Z」

まだ、寝てるし、てかいつもこうなのか、俺が起きるまでに……………  
・大体一時間ぐらいあるな。俺がいつも起きる時間まで。  
そして、朝の八神家の朝食が始まった。

Side クロノ

「それでは、これより、先に起きた事件についての説明を当事者の  
クロノ執務官に説明してもらいます。」

エイミィが僕の倒れていた事件についての説明を、なのは、フェイト、ユーノ、アルフ、そして艦長が居る。

「まず、これはこの前での確信だが……………闇の書が発見された。」

「!?!」

その時、母さんいや艦長が反応した、あしからずエイミーも反応したようだ。

「それは本当なのクロノ執務官?」

「はい、間違いありません艦長。あの持っていたのは間違いはないかと。」

「そう、なのね。報告にはあつたけど、本当なのね。それでは私から今回の事件は我々アースラが担当することになりました、つきましては」

「僕らが調査するんですね。しかし闇の書についてはまだ……」

「ええ、そうですね。それにクロノ執務官、貴方が倒されたという者達の特徴を教えてください。」

「はい、一人は小さい少女で、赤い帽子や、赤いバリアジャケットでした。あともう一人は……身長はフェイトたちぐらいのこれまた少年でした、声で判別はしたのですが、特徴は黒いバリアジャケットに白いマント、そして眼を隠すようなバイザーが目立ちました」

「あのお、クロノ君、バイザーって?」

なのはが手を挙げた。



「うーん、なのはちゃんの世界で言つと、サングラスをかつこよくしたバージョンかな？」

と、エイミィが説明していた。

「ありがとう、クロノ執務官。それでは私達が行うことはまず、情報収集、つきましては、今日の夜にて、誘き出しをしたいとおもいます。」

「で、ですが、艦長どうやって？」

「ええ、まず今日の夜、地球のビルの上の屋上にて、魔力の塊と誤診する装置を設置。それを各場所におきます。それで」

「釣り上げる、というわけですね艦長」

「さすがはエイミィ、分かっているね。」

「あ、あのう。私達は？」

その時、なのはやフェイトは聞いてきた。

「君達は今回は………参加しない方がいい。確かにフェイトは協力するようにと言われているが、今回は今までとレベルが違うからね。」

「「あ、あつう」」

二人して、この反応だ。

「それにしても闇の書ってなんなんだ？ロストログアなのか？」

「アルフ、闇の書とは管理局がつけた、名称よ。ごめんなさいリン  
ディ艦長この急ぎの物が完成したので」

その時、最近はこの艦か、ミッドのアルバート提督の研究室にいる、  
プレシアさんが話に入ってきた。

「ああ、すみません。今すぐにチエックを。それではこの会議は終  
了とします。エイミイ後はお願いね」

「あ、あ、はい」

そして僕も動き始めた。最終チエックだ、今度こそあれ、闇の書を  
.....

side out

Side なのは

「あ、そうそう、フェイト。今日はお家に帰れそうだから一緒に帰  
りましょう」

「うん、お母さん」

お話が終わって、みんな各自のお仕事についちゃった。

「良かったね、フェイトちゃん」

「あ、うん、なのは。それじゃ明日ね」

「うん、バイバイ。ユーノ君帰ろう。」

「ああ、なのは。」

そして私は、お家に向かって行ったなの。

第7重似和(A's編二十二話)。カミマミタ……わざとじゃない!!

次回、『本当に噛みました』を、お送りします。バイバイ。

それからネタがなあああああああい

第七十三話（A's編二十三話）。本当に噛みました（前書き）

この題名は歯車がついていみですよ、ごめんなさい、分かりにくくて  
文章力、がんばってのばそう……

第七十三話（A's編二十三話）。本当に噛みました

Side なのは

結局、あの後、ユーノ君と帰ることにしたんだけど、ユーノ君は、アースラに忘れ物があったみたいで私だけが先に帰ることになったの。けど闇の書って一体なんなんだろう？

「はあく、けど今日のクロノ君怖かったなの。それにリンディさんもなんか悲しそうだったなの」

私がそう思いながら、町を歩いていた瞬間、世界が変わった。うんうん、これはあれとそう、フェイトちゃんの時にも使用していた結界が現れたなの。

「こ、これは………どうして？」

そして私が空を見たとき、一瞬だけ赤いなにかが見えたなの、だから

「レイジングハート、いくよ」

「オーライト」

そして私は飛んだなの、気づかれないように………

side out

Side ヴイータ

おお、今日も普通にノルマ達成だな、シャマルはさきに帰ったしあ  
とはいつもの………？

「なんだ、あれ？」

そしてビルとか言う建物の所から高魔力反応がした。

「まあ、見にいくだけいくか。」

そんで、一番最初に結界結界。これやらないと他の奴に迷惑掛かる  
し、それに貴一が五月蠅いんだよな。まあしょうがないか。

「たのむぜ、アイゼン」

「Ja」

そして結界を張って接近した、まあなんか“後ろ”にいるみただが、  
貴一の言つとおり、何もしなければなにもしないだもんな。

「こ、これはと、トラップ!？」

ビルの物を気付いた時、後ろから声がした。

「あのう、なにしているんですか？」

そこには白い魔導師が居た。

「お、お前。お前がこれを！」

「あ、いや、そうじゃなくて。」

「ちっ、しょうがねえ、撤退だな。それじゃあな。あたいは争う気はねえんだ」

正体がばれてしまうのもなんだからと思いきして飛んで消えようとした瞬間

「まって、待ってなの。……もう」

魔弾が飛んできた、まあ軽く避けたが……あれ、その時頭部損失感があった

「帽子、帽子、帽子!?!」

あたいの帽子がない、はやてが作ってくれて、似合っつて言ってくれた帽子が。

「や、やっと止まってくれたなの、私は「……る……いえっ?」

あいつのせいで、帽子が。

「うるせえええ!!アイゼン!!」

「Ja」

「ふ、ふえええ」

そしてあたいはその白いのに、猛攻撃をしかけた。

Side out



俺とシグナムは今日も蒐集活動をしていた。すでに大体を弱らせたため後は蒐集だけだった。

「さて、今日はこれぐらいだな、シグナム。お疲れさん」

「ああ、今日も随分と凄かったな。それではあとは『ふ、二人とも！』っ！」

話している時、急に緊急用の連絡が入った。これは、まさか

「どうかしたのかシヤマル？」

俺は聞いてみる、シグナムも同じで、空気が重くなった。

『そ、それが、き、貴一君、大変なんです大変なんです。ヴィータちゃんと管理局の子だと思われる子と戦闘してるの、しかもこの海鳴市で』

ああ、しまった今日だったのか、なのはをヴィータがボコボコにしまっう回は……どうするか。はあくしょうがない

「貴一、お前は先に行ってくれ。私は蒐集してから行く」

「そ、そうかシグナム。悪いな、それじゃあシヤマル座標は？」

『それは大丈夫みたいです、ちゃんとヴィータちゃん結界使ってますし、一応私も妨害していますから、そ、それより、は、はやくしてください。』

「了解した。それじゃあ先に行っているぞシグナム。ご武運を」

「ああ、気をつけてな。それとその言葉は私が言う言葉だ、貴ご武運を」

そして俺は転送した。

Side クロノ

「こ、これは一体どういうことだ!？」

そう。僕が設置した装置のだが、反応は一瞬あったが、先の結界が張られた瞬間に消えてしまった。まさか、相手にバレた?

「エイミィ、早急に調査して!」

艦長が激を飛ばしながら指示していた。

「は、はいそれじゃあ解析お願い。はやくして!」

そしてすぐに映像が出たが、そこには……………

「な、なのはちゃん……………」

そこにはなのはがボロボロの姿だった、そしてそこにプレシアさんが現れた、無論フェイトも一緒だ。

「な、なのは!?!」

画面に気付いたフェイト、すぐにその画面の前に来た。

「く、クロノ。私を私をなののところに、はやく!!」

「あ、いや、だが、君は今回の件は関わらない方が」

「いいからそんなの関係ないよ、なのはが、なのはが。早く、早くしてよ!」

悲痛の叫びにも聞こえるものだった、それもそうか彼女の一番最初の友達なのだから。そしてそこに艦長が来てこう言った。

「分かりました、それではフェイト・テストロツサに私、アースラ艦長リンデイ・ハラオウンが命令します・・・早くなのはちゃんを救助してあげて。フェイトちゃん、ユーノ君もいいわね」

「ええ」「はい!」

そしてフェイト達は急いで、転送先に向かった。僕も準備しておこう、たぶんあの黒い白マントの奴も来るだろうからな、今度こそリターンマツチだ。

S i d e o u t

S i d e ヴィータ

あたいは一心不乱にその白い奴を追い詰めた、しかしそこに、急なる転送の魔法陣、その刹那。

「はあああああつあ」

そしてアイゼンの攻撃を凌ぐ奴が上から来た。

「な、おまえはなんなんだ？」

そうそしてそいつはこう言った。

「  
友達だ」

その、黒い奴はそう言った。そしてもう片方の緑みたいのも来た。

「い、ごめんね。なのは、遅くなって」

ちっ、回復してやがる。しかしそんなを見る間もなく。

「はあああああ」

黒い奴は攻撃をしてきた、しかしそこに

「（避けるヴィータ）」

念話があった、そして一瞬、光がでて魔弾が飛んできた、あの黒い奴も気付いて距離を取った、しかしいつも正確だなあいつは。そここの声は……………

side out

第七十三話（A's編二十三話）。本当に噛みました（後書き）

さてさて、やっと話も進んできましたね、それでは次回『現れるのは大抵助っ人。しかし……』

それではバイバイ

第七十四羽（A's編二十四話）。現れるのは大抵助っ人。しかし……

期末なんて怖くないんだからねW W

第七十四羽（A's編二十四話）。現れるのは大抵助っ人。しかし……

さて、転送してきたが……。あ、これはホント原作通りの展開かよ、しょうがない、まずは帽子帽子……。あれかあれか、まったくまあこれでまずはヴィータを冷静にしないと、それじゃ……。当たるなよフェイト。

そして俺は双銃を片方構えて放った。

「（避けるよヴィータ）」

そして俺は魔弾を放った、もちろん誘導弾でなく普通の魔弾。そしてフェイトもこれに気付き、上を見た……。てか俺を見た。

「随分と荒々しいなヴィータ。まったく」

俺はヴィータに近づきながらヤレヤレしながら言った。

「だ、だけど、あいつ、あいつが「これか？」……。あ、あ、あたいも帽子！！」

そして俺が渡すな否、大事そうに抱きしめた。

「なあ貴」「ごらごら」「ああ、すまねえ。これをどこで」

「なに、すぐに見つかったただけだ。それにお前の怒った原因だろ？」

「あ、ああ、すまねえ／＼／＼／」

「はあく別にそれは構わんのだが“ガチャリ”さて、管理局さんの

相手でもしますかね？」

そして俺はフェイトやユーノ、そしてすまん、なのは。と、思いながらあいつらを見た、もちろんなんの変装もしていないがあいつらに見せたことのないバリアジアケット、それにこのバイザーのおかげで正体はバレていない。

「貴方も、そのこの仲間？」

フェイトが慎重に俺を見ながら言った。さすがに管理局に仮でも勤めているだけあるな。

「ああ、その通りだ。さてそれでどうする、管理局のみなさん？」

「貴方を、公務執行妨害及び、重要参考人として逮捕します。」

そしてバルディッシュを構えるフェイト。

「おっと、その前に。彼女を転送したらどうだ。俺としても人が当たらない程の技量は無いのでね」

「あ、お、え、お、お話し方が」（うるさいぞヴィータ。俺はこいつらに正体バレているんだからこれぐらいししないと）「……………  
・ああ、そうだったな」

まったく、ヴィータは。

「ん……………ユーノ君、お願いね。」

そして後ろのユーノは力づく頷き、そして俺らを見て、消えていっ



た。

「それでは、貴方達を「ヴィータ、手を出すなよ」……………ん！  
？」

そして俺は刹那に脇に挿している刀を引き抜き、フェイトに攻撃した。まあ流石にフェイトも気付いてバルディッシュで防いでいたが。

「ほお、中々の速さのようだな。しかしそうでなければ」「このやる  
おおおおお」「……………はあゝ」

そして正しく横槍で、横からアルフが突っ込んできた。俺はすばやくフェイトを弾き、双銃に持ち替えて、迎撃した。

「まったく、いい所で。しかし」「そこまでだ！！」……………はあゝ」

あゝあ、とうとう出てきてしまった、この前一瞬で落としたクロンボことクロノ。

「君達は何者かは聞かない、今はその闇の書を」

そして臨戦状態になったが、まあ大丈夫かな。

「ヴィータ、あの使い魔を頼めるか？」

「合点だ、貴一。だけど二人はお前でもきついだろ？」

「大丈夫さ、もうすぐ来るだろうから。シグナムが」

そして俺らは一回頷くと、攻撃を開始した。俺はクロノとフェイト、ヴィータはアルフ。

「ふ、一回だけでなくまた、落とされに来たのか、君は？」

「く、今度はそうはいかない。フェイト、頼む」

「うん、頑張る」

「それではこちらもそれに答えるでしょう。」

そして俺は双銃を構えて、撃った。それが開幕の合図。最初の魔弾を軽く避けて俺に接近するフェイト、もちろんそれを片方の銃で凌ぐ、そしてクロノが狙ってきていた為、俺はしょうがなく。

「張れ、プロテクト。」

「く、やはり気付かれていたか。しかしこれなら。」

そしてクロノの誘導弾が放たれた。しかしフェイトも引かない、これではフェイトにも当たるぞ、おい。はあくかったりい

「そんなもの、俺には効かない。シュート」

そしてすべての魔弾を、魔弾で撃ちかいいし、フェイトにも一発入れた。

「く、くうううううう」

なんとか、フェイトは凌げたようだが、ギリギリだったかな。しか

しその時。

「それは残像!!」

ふむ、さすがのスピードだな、しかしまだ無茶があるだろう、それは。勿論俺には見えていたから、避けたのだが……。そう、こういう時神様は不条理だ。そうバイザーにあたってしまった。そして俺の顔が認識された。

「……………え……………貴一？」

「く、戦慄の一掃」  
ストライク

俺は不意に魔弾を撃ったが、バレてしまった。まあもちろんどうせこれは、アースラが見ているだろうからな。

Side リンディ

アースラ内。

私たちは驚愕していた。先ほどになのはちゃんはこちらの救護班に回してそして映像も確認できるようになり、戦闘見ていた、そしてそこで繰り広げられていたのは、まさしく戦闘、そしてその時、不意に相手の、そう闇の書所持者の陣の者のバイザーがとれて、そして出てきた顔は。

「き、貴一君!？」

エイミーが驚くように、画面を見ていた。それもそうだろう、私達は貴一君の見たことの無いバリアジャケットで戦い、そして私達の敵として、今のいるのだから。

Side out

「そ、そんな……貴一……う、嘘だっ!!」

フェイトは困惑したように、俺から離れた、そしてアルフも同等に、フェイトに着いた。それと同時にヴィータは俺の横に着き、そしてクロノは俺の目の前に来て。

「そ、そんな貴一。お前は一体、なにを、なにを“されたんだ”!!」

「な、てめえ!なんだその……貴一?」

そしてその言葉にヴィータが反論しようとしたが、俺が静止し。

「うん?なにを“されたか”だと……悲しくも闇の書に操られ、そして無残に昔、事件を共に解決した友の前に現れてしまった。とでも言えばいいかクロノ」

そして、その言葉に驚愕する、クロノ。

「いいかクロノ。俺は、俺の意思でここに居る。誰かの強制も洗脳も無く、俺は俺の目的のためにここに居る。そしてもしお前らがそれを邪魔するなら……お前らは俺の敵だ。」

「そ、そんな……貴一が……な、なんでよなんですよ、貴一」

「フェイトすまない。……言ったる。お前らが邪魔をする

なら、お前らは俺の敵なんだよ」

「貴一、あんた!!!」

そしてアルフがすぐにでも襲いそうな感じだが、それをフェイトが止めて

「ふえ、フェイト!?!」

「それなら、今度は私が、うんうん、私となのはが止めてみせる!」

そして強く、俺を見た。強くなっているんだなフェイトも。そしてその時、こちらの助っ人も到着した。

「す、すまない、蒐集に時間が掛かってしまった。て、貴一……  
・バイザーが」

「ああ、シグナム。バレちゃった。ま、しょうがないさ。それじゃ、ヴィータはさつきと一緒で、シグナムはあの女の子を、俺はあのクロンボを。目的は、動けなくして、離脱。以上だ。」

そして俺らの本格的な管理局への喧嘩バトルを始めた。

第七十四羽（A's編二十四話）。現れるのは大抵助っ人。しかし……

さて、次回のお話は、『さあ、始めようか』

それではバイバイ

大七重五派（A's編二十五話）。さあ、始めようか（前書き）

いえ、いい、期末中だぜえ！！

大七重五派（A's編二十五話）。さあ、始めようか

そして、俺らは個々で相手することになった、俺はクロノを。

「さて、一対一だが……ふう」

「く、君は、本当に。「くどいぞっ!!」……ああ、分かったよ、それならば今度こそ君を公務執行妨害で逮捕する」

「ちっ、前のジュエルシードの時と一緒にだな。まあ今回は完全に俺が悪いけどな。いくぞ、FinalモードイクスIX」

「「ツインバスターライフルモード」」

そして俺は一気に飛翔した。そしてクロノも俺について来た。

「待て!!」

そして俺はある一定の上空まできて、クロノを待った。

「く、確かに君の方が上かもしれないが、今回だけはこの件だけは……」

「ふ、そうかならば俺も本気で行く」

「な、なんだと。まだ本気じゃなかったのか？」

そして俺は腕を上げて、クロノに告げた。



「逃れることが出来るかな……クロノくん」

そして俺は極上の笑みで腕を振り下ろすと同時に

「天の鎖よお！」

クロノ周りに無数の鎖が出た。

「な、魔力反応がないだと、しまった」

そしてあっけなく捕まるクロノ。そして俺は銃を構えて。

「ターゲットロック……破壊する」

「あ、あ、あ……う、うわああ……ああ……  
……あ……」

クロノは、これでダウン。俺は鎖を解き、クロノのバリアジャケット襟を持ちながら、下に下りていった。

Side リンディ

「く、クロノ執務官、沈黙。」

私は、何が起きているのか最初分からなかった。貴一君とクロノが上空に上がったのはこちらでも映像で分かった、だけどその後の、あの鎖、さらには貴一君の持っていたあのデバイス。リリのとも違い勇士君のとも違う、もつと強大な銃。それにあの姿、それが貴一君のソルのデバイスの力？

「あ、艦長。貴一君がクロノを持って、下に下りています」

映像ではなんとモクロノの完全敗北のような、絵図らだった。そして私達は他の映像を見た、それはフェイトちゃんの方。

S i d e o u t

S i d e シグナム

「ふむ、やはり貴一とは知り合いのようだな、君は」

私が構えながら聞いた、そしてあの顔はやはり貴一を知っているのだろう。

「貴方こそ、なんで貴一を。……。もし貴方達が貴一を騙しているのなら、私は、貴方を許さない!!」

「ふ、ふざけるなあああ。言つに事欠いて!!貴一がどんな気持ちで、気持ちで」

あ、しまった。つい声を上げてしまった、目の前の子もビックリしている。まあいい

「行くぞ、一応聞こう、名前は」

「管理局所属、フェイト・テストロッサ。」

「そうか、私は烈火の将、シグナム。お前の貴一の思いか、それとも私の思いの方が上か」

「負けない、絶対に負けない。貴一は私の恩人だから、憧れだから……大好きだから！」

なるほど、サンから聞いていた、事件の子はこの子だったか、だとすると……ある意味私と同じなのかも知れないな。

「行くぞ」「行きます」

そして、同時にデバイスを構えて勝負に出た。最初はインファイト、途中途中に魔弾を挟んで来てはいるが、私にそんなものは効かない、すべてを落とす。

「はあああああ。」

スピードならばいいだろうが、しかし

「火力が無さ過ぎる。終わりにしようテストロッサ！」

「え……なにか来る、バルディッシュ！」

私はすかさず、カートリッジを入れ、そしてテストロッサに向かい

「行くぞ、紫電一閃！！」

「く、バルディッシュ、プロテクト」

「イエッサー」

そして、障壁を作るが、しかし甘い。この程度の障壁でふせられる

ほど、ベルガの騎士をなめるな、と、思っていたが、凌いでいる。現在も障壁を張り続けている。これではデバイスがもたないと思うが。

「くううう……ううう……くううう」

「されど、それでも、お前は、私には勝てない」

そして私は、デバイスごと、貫く勢いで、テストロッサに攻撃をし、そして

「安心してくれ、殺しはしない。と、言っても気絶しているか」

デバイスが、中破の状態で尚、デバイスを持っている彼女を、私は落ちる前に、拾い上げた。

S i d e o u t

S i d e アルフ

さきから、こいつ面どくせえ、と、思っていたら

「ヴィータ、お前は撤退しろ、あとは私がどうにかしよう。闇の書は頼んだぞ」

急に、横から使い魔にも見える奴が現れた、ちっ今度は一体。

「な、ザフィーラ。どうしてってそうか、わかった。後は頼んだぞ」

そして赤い方が消えていった

「お、おいこらま」「こっちだ相手は」……………くそがつ」

そしてあたいらが勝負しようとした瞬間、爆発音が聞こえた、そしてそこにはボロボロのフェイトがいた。

「な、ふえ、フェイト!!」

あたいはすぐに駆け寄った、その時あの剣も持っている奴が、普通にあたいに渡ってきて、あの青い使い魔と一緒に私を見た。

Side out

さて、下はどうなって、つて、すでに終わっているみたいだな、あれ、フェイトもボロボロにされているし……………すまないな。

「ふ、アルフ。こいつも頼むぞ」

そして俺はクロノを投げた。

「う、うわわわわわ」

そして難なく、キャッチした。

「それじゃ帰還だな、てかザフィーラがなんでいるんだ?」

「交代しただけだ、あれも使い魔なのだろう、ならば我も守護獣なのだから、当然それに当たるがいいだろう、それにヴィータは闇の書を持っていったしな」

「ああ、そうだなそれでは帰還し『待つて!!』……シグナム、ザフィーラ帰還しといて」

「ん、分かった、貴一もすぐにな」

そしてシグナムとザフィーラは消えた。

「お久しぶりです、リンディさん。」

『ええ、こういう形で会うとは思いませんでしたが、アルフ、すぐに転送を』

「あ、ああ。貴一、アンタ……ちっ!」

俺に舌打ちをしてアルフは消えていった、そして残ったのは、俺と通信越しのリンディさんだけだった。

「俺もすぐに帰還しないといけないんですが、管理局のリンディさん」

『ええ、だから一言だけ、貴一君戻ってきてください。今なら、まだ大丈夫です。今貴方のしていることは、「犯罪ですよね、闇の書については重々に承知ですがね」そ、それならなんで、ねえ貴一君』

「ふ、言ったはずだ管理局。俺は貴様らの敵なのだ。闇の書を復活させるために戦う俺は一人の兵士だ。ならば躊躇うな、もう一度言う、躊躇うな。」

今の俺の最大の殺気を出しながら、言葉を放した。

『そう、そうなのね。それでこれで最後です、次会うときは敵なんですね。分かりました、それでは最後にフェイトちゃんとなのはちゃんに言うことはありますか？』

「そうですか、それならば頼みます。すまない、俺は既にお前らの騎士では亡くなってしまったようだ、恨んでいい、怒ればいい。唯一つ、本気で来い。以上です、それでは失礼しますよ、リンディ・ハラオウン艦長。それとエイミィ、追跡は無駄だから、それでは」

そして俺も転送した。

大七重五派（A's編二十五話）。さあ、始めようか（後書き）

「くくく、これで、とうとう私の原作ブレイクが「エクスカリバア  
アアアア！」「ふ、甘いわ、アヴァロン」

「なん…….…….だと」

「やあ、ダークヒーローの貴一君。相変わらず男には厳しいね」

「うるさい、俺はちょっと本気を出しただけだ。」

「くくく、まあいい。それでは次回」

「『<sup>スパイス</sup>混乱とは調味料ではなく<sup>スパイラル</sup>螺旋だ!!』って題名長っ!!」

「『それではバイバイ』」

「今回の作者、終始笑顔だったが…….…….大丈夫なのか？」



第七十六話（A's編二十六話）。混乱とは調味料（スパイス）ではなく螺旋

なのはの映画の二弾目がやってくれる、やったあああああああ  
あああああ！！

第七十六話（A's編二十六話）。混乱とは調味料（スパイス）ではなく螺旋

Side リンディ

さて、私達は現在アースラ内にて先の戦闘についての会議を開いた。

「さて、どうしたものでしょう、これ、艦長？」

「うーん、そうね。ホントどうしましょう。あの会話を聞く限り、貴一君は」

「操られてはいません、リンディさん」

その時、医務室に向かったはずのフェイトちゃんが居た。

「あ、フェイトちゃん。大丈夫なの？」

「あ、はい。なのは程ではありません。それにあの人なんだか本気じゃなかったみたいですし。それに」

その時フェイトちゃんが悲しそうな顔をした。

「どうかしたのフェイトちゃん？」

「エイミィ。いいのよフェイトちゃん、無理しなくても。私たちも困惑しているのだから」

「あ、いえ、そうじゃなくて。私、あの人と、いやシグナムと勝負した際、その貴一の話になった際、そのなんて言うか、その、えっ

と。なんだかチームみたいでした。そのなんか仲間みたいでお互い大切しているみたいな。」

「え、え、えっとそれはどういことなんでしょう艦長？」

なるほどね、貴一君は貴一君と言うことなのね、仲間は大切にすると言うことなのね。だけど、あの伝言。やっぱなのはちゃんも来てからかしらね。

「しかし、今回の件の貴一は完全に犯罪者だ！」

そして扉を大きく開けたのは少しボロボロのクロノだった、それとアルフちゃんも居た。しかし二人して、不機嫌顔だった。ちなみに私とエイミイはどこか浮いている感じでそしてフェイトちゃんは完全に困惑そしてクロノ君に対しては不機嫌顔だった。

「なんなんだ、貴一は！！まったく、だけどよ、あれじゃあたいら勝てる確率ないよお」

「あ、アルフ、だ、だけど貴一だって」

「そうね、けど貴一君はたぶん、いえ、普通に私たちに攻撃してくるわよ。」

私はそう言った、たぶんこれが貴一君の伝言と同じなんだろうな。ただこの状態じゃ、なのはちゃんとフェイトちゃん、それにデバイス達もボロボロだしね。

「それではフェイトちゃん、今は休みなさい。バルディッシュもこちらで修理しとくから、それとプレシアさんも休みなったはずだから

ら、ね？」

「は、はい……………」

そしてフェイトちゃんとアルフは部屋を出て行った。さてこれからは

「それでは、これより、作戦会議をします。闇の書について、そして……………貴一君について」

「ええ、そうですね。今回、いえ先の戦闘で、明らかにしましたね、闇の書。」

「それでも未だに分からない……………貴一の裏切り」

「いえ、クロノ執務官、裏切りではありませんよ、だって貴一君は私たちを利用し、利用される関係。」

「くっ！……………」

「それで、今回は少々、人員を増やしました。」

「へ？艦長、人員って？」

「あはは、久しぶりだね〜クロノ〜」

そして私達に助っ人が現れた。

Side out

俺は転送されたら、すぐにはやてが迎えてくれた。

「大丈夫、貴一君？なんでも、その管理局の人たちとぶつかったらしいやない」

はやてが心配そうに見ている。

「ああ、大丈夫だよ、はやて。すまないけど今日は疲れちゃったから休んでいいかな？それとサンとムーンはいつもの場所に」

「もちろんや、けどその前に」

そしてはやてが車椅子で俺に近づき。腕を首に回し、なんていうか抱きつかれた……なぜ？

「なんかな、貴一君、今元氣無さ過ぎやで、だから元氣わけたる」

「あはは、ありがとう、はやて。」

そして俺は部屋に入った、なんとも言えない罪悪感のせいで今ははやての顔もいや、誰とも話したくなかった……

Side シグナム

我らが早めの帰還だったがすぐに貴一も戻ってきた、その時の顔はなんと言うか無理の笑顔だった、私はそんな気がしたが、それは主はやても一緒だったらしい、しかしそういう時はなぜ私にも一声、つてそうでは無かったな、やはり貴一はあの者たちに攻撃はしたくないのでろう。それにこんな事をすれば主はやてだって心痛むだろう、だから黙っているのか。  
そして主はやてが戻ってきた。

「なんかな、貴一君疲れたみたいやから、今日はもう寝る言つてたは。」

「だろつな、貴一の今日の活躍は凄かったんだぜ、な？」

「あ、ああ、そうだな。」

「それじゃあ料理してくるな。」

「あ、主、私もお手伝いを。」

そして私も料理の手伝いのためキッチンに行った。

時は過ぎてすでに十二時は回っていた、主そしてヴィータはすでに寝ていた、そして私は、いや私とサンはこう告白した。

「あのね、実はうちの主と、その」

「今回の管理局の、いや、この前からの管理局員から、既に貴一は知り合いに会い続けていたのだから、しかも敵同士で」

その時ザフィーラが声を上げた。

「な、知っていたのかザフィーラ、というよりも」

そして私はその確信犯を見た。

「ええ、そうよ。私の役割は参謀、そりゃ会話も聞きましたよ、貴方達が帰還するまでもね。」

そしてシャマルは自分のデバイスを出して、さっきの戦闘の後の貴一とその管理局の艦長との会話を聞いた。

「少しなんか予感があったのよね、それにサンやムーン、それにソルだって彼みたいなお子供が簡単には持てないでしょう。」

「ええ、そうね。今回の件はすでに私たちも聞いていたけどやはり主もまだ子供、友達や知り合いとは戦いたくな無いのでしょうか」

「しかしマスターはこちらを選んだ。それに知っての通りうちのマスターはあだ。友達であるあんたらのマスターを見殺しにするほど人間捨てていない、それに人が死ぬぐらいなら自分が嫌われるだけがいい。なんてこと言うぐらいだ。」

「やはり、これは貴一は覚悟の上だったか。あの時の攻撃に躊躇は無かった、しかし」

「ええ、ザフィーラ、わかっていると思うけど貴一君はまだ子供なのよね……………」

「……………それなら……………」

「え、なにシグナム？」

「それならば、我々が守ればいいではないか。貴一を、そうだろう。」

「ふふ、あらあら烈火の将であるシグナムが主以外に守りたいものが出来るなんて、これも恋の力かしら」

「こ、こらっ！！シャマル！！」

「お願いするは、私達のようなデバイスが言えるようなことじゃないけど、お願い主を、守ってあげて。」

「ふ、なにを言うと思ったら、当たり前だ」

「すまん、ザフィーラ」

そして我々は新しい、決意の元、明日に備えた。そう、この場にも  
う一人、聞いている者がいるとも知らずに……………



第七十六話（A's編二十六話）。混乱とは調味料（スパイス）ではなく螺旋

それでは、次回『作戦を練ろう』。それではバイバイ

台七拾奈々話（A、S編二十七話）。作戦を練ろつ（前書き）

コミケが楽しみです。

台七拾奈々話（A's編二十七話）。作戦を練ろう

Side なのは

私がやられちゃってから、結構時間はすぎちゃったかな。私は今何処かの病室だと気付いた時、不意にドアが開いた。

「なのは!?!」

フェイトちゃんだった、なんか暖かいな。そして後ろからお父さんとお母さん、それにお兄ちゃんにお姉ちゃんも見えた、それにプレシアさん、そしてなんで悲しそうな顔をしているリンディさん？

「にははは、ごめんね。なんだかボロボロになっちゃったなの」

「そんな事は別にいい!?!」

お父さんが大きな声を上げた。

「今はお前が無事で何よりだ」

「にははは、それで、あのう、ここは?」

「ええ、ここはアースラの病室よ。すぐにプレシアさんが高町さんをお呼んでくださって。」

その時、私は自分がいつも付けていたレイジングハートが無いことに気付いた。

「あ、あのうレイジングハートは？」

「それは安心して、今修理に出しているから。」

プレシアさんがそう言う。そしてリンディさんがこう言った。

「この度の事件に娘さんを巻き込んでしまい申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げながら言った、それに対してお母さんが

「なにを言っているんですか、なのはそれを承知でこの管理局に来たんですよ。頭を上げてください、リンディさん」

「それにしても、なのはもフェイトちゃんもやられちゃうなんてね。普通なら、てか何時もなら貴一君が助けに来てくれると思うのに」

「」「あ！」「」

お姉ちゃん言葉にフェイトにリンディさんそしてプレシアさんが反応した。

「確かにそうだな、しかも事件場所がここ、鳴海なのだろう。そえならばなぜ貴一君は」

「待て恭也、もしかしたら出掛けているかもしれないだろう、夏休みなんだから」

その時リンディさんは、意を決したように、こう告げた。

「貴一君は……今回の犯人の一人です」

side out

Side リンディ

私は、真実を高町家に伝えた。

「リンディさん、なんて言いましたか？」

士郎さんが確認を私に求めた。

「ウ……嘘なの。そんな事ありえないよ」

なのはちゃんもそう言っている、だけどフェイトちゃんが、なのはちゃんの手を握りながら

「うんうん、なのは。それは本当だよ、そして私達はそれに負けたんだよ」

私はその時の映像を見せた。

「一応、見ますか？その時の映像を」

「ああ、すまないが確認させてくれ。」

恭也さんが、震えながらそう言った。そして私達は、その映像を見た。そして最後の、そう私達の言葉だけの映像になった。

映像

「俺もすぐに帰還しないとイケないんですが、管理局のリンディさん」

『ええ、だから一言だけ、貴一君戻ってきてください。今なら、まだ大丈夫です。今貴方のしていることは、「犯罪ですよね、闇の書については重々に承知ですがね」そ、それならなんで、ねえ貴一君』

「ふ、言っただけだ管理局。俺は貴様らの敵なのだ。闇の書を復活させるために戦う俺は一人の兵士だ。ならば躊躇うな、もう一度言う、躊躇うな。」

『そう、そうなのね。それではこれで最後です、次会うときは敵なんです。分かりました、それでは最後にフェイトちゃんとなのはちゃんに言うことはありますか？』

「そうですか、それならば頼みます。すまない、俺は既にお前らの騎士では亡くなってしまったようだ、恨んでいい、怒ればいい。唯一つ、本気で来い。以上です、それでは失礼しますよ、リンディ・ハラオウン艦長。それとエイミィ、追跡は無駄だから、それでは」

〈映像終了〉

「そ、そんなバカな、あんな子が」

恭也さんも驚愕していた、というよりも高町家全員が驚愕していた。

「なんで、なんで貴一君が……」

なのはちゃんが、そう言っていた、けどおもむろにフェイトちゃんかなのはちゃんの肩を持ち

「なのは、しっかりしてよ!!どうしたの、私とお話したみたいに、貴一にだってお話に行くぐらいのこと言っただよなのは!!」

すでにフェイトちゃんもなみだ目だった、それもそうである。これは高くつくと思うわよ貴一君。

「だって、だつて、フェイトちゃん………うううう」

「ね、私たちだつてそうやって出会ったんだから………ううう」

二人して、少し泣き始めていた、そして私たち大人は、出て行くことにした。

そしておもむろに恭也さんが扉を叩いた

「くそっ!!どういう事なんだ、一体。貴一君だぞ、あの子が………」

「ああ、そうだな、それよりもこの事件の詳細をっそれは聞いていいのでしょうか？」

「今回はだけな特別ですが、闇の書が絡んでいます」

「……闇の書!?!」

「申し訳ありませんこれ以上は。」

そしてその時通信が入った。

『艦長、至急こちらにお戻りください』

「申し訳ありませんが」

そして私は、走って消えて行った。

Side なのは

あの後私達は、泣き続けた、そして少し落ち着いた時に

「ねえ、フェイトちゃん。グラムさんの言っていた事おもいだしたなの」

「うん、私も。だから、なのは」

「うん、絶対、聞いてみるなの。もしそれで間違っていたら、私達が O H A N A S H I なの」

「うん、そうだね。なのは」

そしてその時通信が入った。

『ごめんねフェイトちゃんって、なのはちゃんもそこに居るみたいね、なのはちゃん大丈夫？』

「はい、もう大丈夫です、それでどうかしたんですか、エイミィさん」

『えっと、その言いにくいんだけど、今回の事件の会議を言うか作



戦会議があるんだけど、二人にも』

「「行きます!!!」」

『え、だ、だって、また危険な目に。それに』

「だって私たちだってまだ」

「本当の貴一の気持ちを聞いてないから、それに、本気で行くもん」

『そう。わかったわそれじゃ、後十分したら、会議だから、艦長室に来てくれる』

「「ハイ」」

そして私達は二人並んで、歩いた。

台七拾奈々話（A's編二十七話）。作戦を練ろう（後書き）

久しぶりに主人公がでませんでしたね今回、それでは次回『ネルネ  
ルネ〜ル』バイバイ

第七十八話（A、S編二十八話）。ネルネルネ〜ル（前書き）

七十八話掲載です。

第七十八話（A's編二十八話）。ネルネルネール

Side クロノ

僕達は、今後の動きについての作戦会議を開いた、そして、なのは達が居ることに驚いた。

「な、き、君たち大丈夫なのか？」

「クロノ執務官、彼女達も正式な今回の事件、解決のためのメンバーよ」

艦長がそう言う、さらに

「それに、人は多い方がいいと思うよ、クロノ」

う、う、この猫も居るし。まあ今はユーノが遊ばれているからいいが。

「さて、まずは二人に紹介しないとね、この二人はこの前あったギル・グレーム提督の使い魔の」

「リーゼロッテです、それと」

「リーゼアリアです、よろしくね」

「ちなみに、クロノのお師匠さんでもあるもんね、ね、クロノ？」

「な、余計なことは言わなくていいんだ、エイミィ」

「へえ。クロノ君のお師匠さんのの？」

「いやいや、なぜそこで疑問系なんだなのは。」

「ま、それはそれとして、今回の事、どうしますかね」

「え、闇の書の確保が、最重要事項じゃないの？」

「はあくなんで、こんなのが、僕の師匠なんだ……………」

「それが……………」

そして先の戦闘の映像が出た。

「ふむふむ、なるほど。ボロ負けしたんだクロノ。なんかかっこ悪いなあ」

「くっ、しょうがないだろう……………」

なんで、こつもはつきり言うのかな、この猫は。

「だけどよ、闇の書について、あたいらの知識ってどんぐらいなんだ？あの貴一が行くぐらいの、力なのか？」

アルフが胡坐をかきながら唸っていた。

「うーん、これじゃ闇の書についての前一つ世界が滅んだと、言うことしか分かっていないわ、色々調べて見ないと分からないわね」

エイミーが、そういつと、艦長がこう言った。

「ええ、その件はすでに片がついているの、エイミー。その調べ物には、リーゼロッテ、リーゼアリア、そしてユーノ君が行くことになっているから」

「まあね、これがお父様からの伝言だしね。」

しかし、なんでユーノなんだ？

「僕の種族は元々、探索が主だから、それに今回行くところは、無限書庫だから、これからすぐに行くんだ」

ああ、あの整理していない、異空間にちかい本棚に行くのかユーノ……頑張れ。

「その、私たちも協力したいんですけど」

「で、デバイスが……」

「大丈夫よ、なのはちゃんにフェイトちゃん、今プレシアさんが即急に修理しているから、それに」

その時、艦長室の扉が開いた。

「失礼するぞい。うちの孫が世話になったそうじゃな」

そしてそこには、ギル・アルバート提督が居た。

「これは、アルバート提督。どうしてこちらに？」

「なに、うちの孫が犯罪者になったと聞いてのう、それできたのじや」

「え、えと、その言いにくいのですが」

そして、またもや先の映像を出した。その時、フェイトが質問してきた。

「そう思えばあの人たちのデバイス、ちょっと違っていたよね私たちとは」

「あ、あれは「古代ベルガ式じゃよ」はい、その通りです。古代ベルガ式つてのは。昔、ミッド式と対なる魔法があつたんだ、それがベルガ式。特徴「これじゃよ」

そしてアルバート提督は懐から、カートリッジを見せてくれた。

「えつとこれは？」

「自分の魔力を一時的にこれに詰めて置いて必要な時に使うのじゃ。しかしこれは………闇の書じゃな」

「ええ、ご存知で。あと、その貴一君のこの姿は「ライトアンドダークネスじゃと!」………え!？」

その時、映像が丁度、僕がボロボロしされている時にアルバート提督は叫んだ。

「あ、あのう、アルバート提督、ライトアンドダークネスとは？」

「ああ、リンディ殿、最初に言つとくぞい。あれには勝てない。いや正確にはあれと貴一には勝てないのじゃ……このワシでさえ」

「な……」

僕は驚愕した、アルバート提督と言えば、一戦を引いた今もなお、普通の魔導師ランクAAは倒せる、歴戦の騎士のはず、しかしそれが勝てないとは。

「ワシの考えた、このツインデバイスシステム、またの名をジヨグレスデバイスは、普通のデバイスの三倍の魔力が減るが、しかし、並みの魔術師では倒せん。それに貴一の運動能力、判断力、反射神経はすでに魔導師ランクAA並みじゃ。」

しかしその時フェイトが、こういった。

「だけど私は、いえ、私達は引けないんです。ね、なのは？」

「うん……はい、私達は、絶対もう一度貴一君とあってお話しするの!!!」

二人は力強く、アルバート提督に言った。

「うむ、お主達は確か、貴一の友達じゃったな、それにプレシア殿の娘さんか……まったく貴一も勇士に似て罪作りな男じゃな。ワハハハハハ」

そして豪快に笑い、そして艦長の方に向き直り



「この老いばれも使ってはくれぬか、リンディ殿。ワシも貴一と話したいのじゃ」

「……分かりました。ですがアルバート提督殿は一回だけですよ。今度現れた際の一回だけですよ、一応親族ですから。それと一応、貴一君の家にも入らせてもらっても？」

「うむ、この際、構わぬ。」

そして僕達は作戦会議が続行された。

Side out

Side プレシア

さて、私も頑張りますか、だけど、バルディッシュもレイジングハートもここまで頑張るなんて、ホント主思いのデバイスね。そして、必要な部品の算出の際。

「あ、あのうテストタロツサさん、これ」

その時、アースラ専属の技師のマリエルさんが、モニターを指差しながら。

「これ、なんかの間違いですよね？」

そう、そこにはこう書いてあった。

「CVK792orCVK79Xですって!?!?.....レイジ

ングハート・・・バルディッシュ・・・本気なの・・・

そう、それは片方は現在開発が完了した、ミッド式にカートリッジシステムを導入する、CVK792。だけどこれはフェイトのような子供には体の成長に負担がかかるため、それを私とアルバート博士で改良していたプロトタイプ、それがCVK79X。

「どうしましょう、プレシアさん」

私はそこで考え始めた。

S i d e o u t

第七十八話（A's編二十八話）。ネルネルネ〜ル（後書き）

またもや主人公が出てこない・・・ドンマイですよ？

それでは次回『うち来る？行く行く！』 それではバイバイ

第七十灸話（A's編二十九話）。うち来る？行く行く！（前書き）

さあ、大掃除の時間だ・・・

第七十灸話（A's編二十九話）。うち来る？行く行く！

俺はいつの間に寝てしまったんだろう。確か昨日……はあ  
くそうだったあの後、結局色々想定外の心のダメージに見舞われ  
たんだな俺。

「お目覚めのようですね、マイロード」

「うん？ああ、ソルがおはよう。昨日もご苦労であった。」

「感謝の極みです……マイロード一つよろしいでしょうか？」

「どうかしたか、ソル？」

「後悔なさってますか？なのは殿やフェイト殿、いえ管理局に刃を  
向けることに」

ああ、やっぱり分かるのかなこのデバイスは

「さあな、だけど一度決めたことだ。それにほっとけるかよ」

「そうですか、昨日の攻撃、躊躇が無さ過ぎました。あれは」

「ソル、大丈夫だから。それに言っているだろ、土下座でも」する  
んですよね？」……ふ、分かっているなら聞くなよ」

「失礼しました、マイロード」

そつだ、そつだよな。こんな事で一々気にしてはいけないな、それにあのフェイトの顔なら大丈夫だろう……。はあくこれは事件終了後 O H A N A S H I I かな。

そして俺はパジャマから普段着に着替えて下に下りた。そしてそこで俺は奇怪な物を見てしまった。

「だからな、シグナム、これはこう切つてやな」

「く、武器ならば楽に扱えるのに、どうしてもこつもつまく行かないんだ」

そつ、そこには料理に四苦八苦ししているシグナムにそれを見ているはやての姿だった。

「なにやっているんだ、はやて、シグナム？」

「う、うわっ！！」

そしてピクリと跳ねるシグナム。

「あ、貴一君、おはようさん。今日も早いんやな」

「ああ、まあ昨日が昨日のあの時間に寝てるからね。それよりもシグナム、包丁を持ったまま直立不動になるのはどうかと？」

そしてその言葉で我にもどつたらしいシグナムが

「あ、ああ、お、おはようだな貴一よ……。？」

その時俺の顔を凝視していた。

「どうかしたかシグナム、俺の顔なんて見て？」

そしてそれに気付き真っ赤になったシグナム

「あ、ああ／＼／＼す、すまない。しかし昨日は元気がなかったが？」

「ああ、はやての元気を分けてもらったおかげで……どうかしたのかはやて」

そしてその時、はやてもシグナムと似た顔真っ赤の顔がそこにあった。

「元気、元気、私のおかげ……／＼／＼／＼／＼／」

なんか復唱し始めているし、それよりも

「どうして朝からシグナムも台所に立っているんだ、いつもなら鍛錬とかだろ？」

そしてそこに我をもどしたはやてがこう言った。

「ああ、なんでも今日は一緒に朝ごはんが作りたいて。まあ、わからないわけもないんやけど」

後の方の言葉は聞こえなかったが、その説明が始まるとシグナムは顔を真っ赤にしながら包丁を動かしていた。

「なんか邪魔っぽいから退散するな」

そして、リビングではザフィーラが居てそして

「Z〜Z〜Z」

相変わらずの寝起きのヴィータ。

「おはようさん、ザフィーラ」

「うむ、貴一かおはよう。大丈夫か昨日は疲れて先に就寝したようだが」

「ああ、この通りだ。」

そして力瘤を作る。

「あ、おはようございます、貴一君」

そしてシャマルも登場。そして俺の顔を見るなり

「あら、昨日よりもいい顔をしていますね貴一君」

「ああ、そりゃ早く寝ているからな。」

「けど、今日は確かお休みですよね。蒐集活動」

そして俺はカレンダーで確認した。

「お、ホント」



そして朝食の準備が完了した、はやてがこっちに来て。

「そうなん、それなら私、今日ちょっと図書館行って来てええ？」

「ええ、はやてちゃん大丈夫ですよ。ですけど、私も着いて行きま  
すよ、念のため」

「了解や。それじゃ朝ごはんにしようか？」

そして、俺らの朝飯が出てきた、シグナムが持って。

「あれ、今日は随分と豪華だな、朝から」

そしてそれに真っ赤になるシグナム？一体どうかしたのか。

「なるほど、はやてちゃん、誰かさんが作りすぎたんですね、はや  
てちゃんも一緒に」

そしてその言葉を聞いて同じく真っ赤にするはやて。

「い、いや、しゃ、シャマル。貴一が元気がないと我々の活動だっ  
て」

「そ、そうや。貴一君が元気ないと、色々大変やろ？」

「二人とも私が、いつ貴一君について言ったのかしら？」

「はう／＼／＼／＼／＼／」

「あはは、ごめんな二人とも。ありがとう」

「は、はう／＼／＼／＼／＼／＼／＼／」

そしてさらに真っ赤になる二人。どうかしたのか。

「（これでも気付かないなんて。ま、しょうがないかな貴一君だし）」

「それじゃ、食べるか。な、二人とも」

そして俺らの食事がスタートした。

それから三時間後。

Side なのは

今日は貴一君のお家の調査でここまでできました、だけど

「まったく普通ね。」

プレシアさんが言つとおり、そんなにお家事態も汚れていない。

「ふむ、それでは貴一の部屋にでもいくかのう」

今回のこの貴一君の家に来ているメンバーは、私、フェイトちゃん、貴一君のお爺さん、プレシアさん、クロノ君、それとリンディさん。

「それにしても、貴一君はここで一人で暮らしていたんですか、アルバート提督？」

「ああ、リンディ殿その通りじゃ。たまにリリさんらが連絡や手紙

が来ていたようじゃがそれ以外はワシもあまりこなっかのう。  
「こじじゃ」

そして二階に上がってあるドアに来ました。

「ここが貴一の部屋……ゴクリ」

フェイトちゃんがなんか緊張していたなの。まあ分からなくも無いかな。そしてドアを開けるとそこには……

「これはデバイスの工房のようじゃな。」

そこにはアースラの中みたいに少し機械があつたなの。

「そうですね、これならデバイスの改良はできそうですね、アルバート提督のお孫さんらしいです」

「だ、だが、これは一体？」

そしてそこにはなんか、何かを支えるためだった物がそこにはありました。

「これはね、クロノ君。これはギターかけ。と、言うことは」

「あ、ギターって貴一の趣味だよね、なのは」

「うんうん、そう。そうですねリンディさん」

「それではもうここには」

「居ないということじゃろつな、念のためにこれのデータは「コピーしていくとしよう、それとこの設計図一式。」

そして私達は貴一君のお家を後にしました。

第七十灸話（A's編二十九話）。うち来る？行く行く！（後書き）

貴「おい、こら作者」

ブ「ダメでしょ、貴一君。一番最初は挨拶挨拶。どうもブラックサレナです」

貴「ちつ、星川貴一です・・・それでどうする気だ、このバカ。読者から溢れんばかりの誤字雑字の多い作品って言われているぞ。」

ブ「う、分かってはいたんだ・・・しかし、それよりも先にネタが出てきてしまい・・・」

貴「まあ、いい。そういうことで、こいつのもう片方の作品も同時開催する『誤字雑字大掃除』、これを12月の25日より始めます。」

ブ「つきまして、暖かく見守っててください」

貴「はたして、そんなに皆さんが見守ってくれるか・・・」

ブ「・・・お、お願いします!!Orz」

貴「そういう事ですので、これからもよろしくお願いします」

ブ「よろしくお願いします。」

貴・ブ「バイバイ」

第八十話（A's編三十話）。友達の友達は友達。by清磨（前書き）

記念すべき八十話です。これからもどうかよろしくお願いします。

第八十話（A's編三十話）。友達の友達は友達。by清磨

Side はやて

私は朝食のあと、直ぐに図書館に来た、シャマルはそのまま料理のコーナーに行ってしまったん。だけどここは落ち着くから、せやけど………

「言ってくれてもええやん、貴一君………」

そう、私はきのうのシャマル達の会話を聞いてしまった。貴一君のお友達が管理局の魔導師さん、それで貴一君が、私を守るために友達に攻撃をする。そんないやや、あの昨日の顔はそういう「あのう、大丈夫？」………え？

「え？」

そして顔を上げてみると。

「あはは、良かった。なんか凄く悲しそうな顔していたから。大丈夫？」

そこには私と同一年ぐらいな女の子が居た。

「あ、ありがとうな。だ、大丈夫や」

「じいじいじい」

そしてじっと見られてしまい

「うんうん、大丈夫じゃないよ、そんな顔。あ、ごめんね急に变なこと言つて、私、すずか。月村すずか、よく図書館に来ている子だよね?」

「あ、そうや、私は八神はやてや。よろしくな月村さん」

「うんうん月村じゃなくてすずかでいいよ。」

「ああ、それならすずかちゃんやな。わたしもはやてでええよう」

「うん、分かったはやてちゃん。それでさっきの顔はどうかしたの?話してくれる、別に嫌ならいいんだけど」

私は、そしてこう聞いてみた。

「あ、あのな。もし、わたしのために友達が、友達の友達を避けてしまったらどうしたらええと思う?」

そして私の目の前のすずかは少し悩んで、こういった。

「それなら、その、ため、って理由が終わったら、一緒に友達になつてもらおうよ。だってその友達だってその友達の友達の、友達なんだから。」

その時、すずかちゃんの後ろにメイド服のが来て。

「すずかちゃんそろそろ、お時間ですよ」

「あ、ごめんねはやてちゃん、私行くね。それじゃあね」



「あ、ありがとうな。すずかちゃん」

“一緒に友達になってもらえばいいか”この闇の書のことが終わった後、その貴一君の友達に会って話したいな。どうか貴一君を嫌いに成らないでって。私のそれが役目やと思うから。

Side out

さて、はやて達も行ってしまったし、どうしようかな。と、思っていたら。

「貴一、今日は暇のか？」

「ん？ああ、シグナム。今日はなににも予定を入れてないよ、それに一応、俺達、あいつらにバレているし身元」

「あ、そうだったな。」

そして俺はソルを出しながら。

「まあ、俺の場合はこれでどうにかなるんだがな」

そして俺は変装した、今回は少し髪を伸ばした状態で。

「・・・・・・・・・・・・・・・・／／／／／／／／／／／／／／／／」

なんか、顔を真っ赤にしているシグナムが居るんだが。

「どうかしたのか、シグナムは？」

「はあく、お前と言う奴は……」

そしてなぜかザフィーラに呆れられた。

「なんか、変だったか？一応少しイメチェンもしているつもりんだが？」

「それが問題なんですよ、主」

「なんだ、貴一か？それとも敵か？」

「あんなヴィータ、普通敵はありえないだろうが。そんなに変かな、髪の毛、伸ばすの？」

そして今まで、呆然としていたシグナムがこう言った。

「全然悪くないぞ……それより全然いいじゃないか、もしかして貴一は将来、こうなるのか？」

「そうなのソル？」

「はい、一応設定だと、このままのマイロードの未来の姿と云うことですね、一応このままという条件がありますから。未来この姿かはわかりません」

「このまま行けばか……もうちょい筋肉があってもいいよな。まあいいや。ソル、解除。」

「イエス、マイロード」

そして俺は元の姿に戻った。その時シグナムが残念そうな顔をしてたような気がしたが、気のせいかな。

「それよりもよゝ今の蒐集活動で大体何頁なんだ？」

「ふむ、現在で五百八十二頁だ。もう少しと言うことだな、貴一よ、すべてのページが埋まった時、お前に任せるぞ。」

「ああ、安心しろザフィーラ。それにその行っ場所は生物の居ない世界だ、まあ保険のためなんだが。」

「なに、どんなことでも保険は必要だ。我々には失敗は許されん。」

「へ、それが終われば、あたいははやてに一杯ご飯貰うぞ、もちろん貴一のものな。」

「これが、終わればか・・・・・・・・・・／／／／／／／／／／／／」

「なにに、しろ。もう少しだ。みんな頼むぞ。この問題はどうかしても夏休み中に終わせないとな。はやてにも早く学校に行つて欲しいしな。」

そして俺はソファから立ちあがり二階の自分の室にもどりギターを弾き始めた。

Side シグナム

まったく、あの不意打ちの変装はやめて欲しい。しかし貴一は一体、思ったときに音が聴こえた、これは

「貴一のギターの音」

「ああ、そのようだな、しかしシグナムもこの音を知っていたか。我もよく家に居る時に聞こえてくるのだがこれがまた良くてな。」

「はあ、貴一ってそんなもんも出来るのかよ、ありえねえ」

「ま、うちの主も鍛錬だけが好きってわけじゃないから。それにしても今日の主は随分と機嫌が良いみたいね。昨日のあれは何処へやら」

「ふむ、自分で考えたのだろう。ムーンもそう思うだろう？」

「さあな、それでもうちのマスターの心臓は強いからな」

「何言っているんだ、お前ら？それよりシグナム、そろそろお前道場に行く時間じゃないか？」

そして私はヴィータの言葉に反応し、時計をみると

「そのようだ。それではザフィーラ、ヴィータ、後は頼んだぞ。なにかあったら」

「直ぐに連絡だな。わかってるっての」

そして私も我が家を後にした。

Side out

S i d e   リンディ

「ふう、進展無しか……」

「そうですね、艦長。昨日の調査も、すでに貴一君の痕跡が無かっただけですし、それに置いてあったマシンもアルバート提督とプレシアさんの解析待ちですし。」

「それにしてもこちらの動きがザルですからね。どうにも出来ませんし。それにユーノ君も闇の書について探してくれていますから、ここは待機ですかね。」

「うーん、そうだろうけど……大丈夫かしらクロノ君」

今現在、ずっと訓練室に籠り、魔法の調整をしている、たぶん貴一君に勝つために。けど私はこう思ってしまっ、絶対に勝てないってなんでかは分からないけど……たぶんそう思ってしまっ

S i d e   o u t

第八十話（A's編三十話）。友達の友達は友達。by清磨（後書き）

それでは次回『ザ・ビースト』 それではバイバイ

題八重二把（A's編三十一話）。ザ・ビースト（前書き）

今、私は、Fate/エクストラにはまっています。

題八重一抱（A's編三十一話）。ザ・ビースト

Side プレシア

私達は、貴一君の家にあつたデータの解析をしていた。

「のう、プレシア殿」

その時、不意にアルバート博士が話しかけてきた。

「はい、どうかしましたか、アルバート博士？」

「貴一は、貴一は、いい子じゃったか？」

「はい、それはもう……心配ですか？」

「うむ、心配じゃないと言ったら嘘じゃが、しかしのう。なぜか分からんが貴一は何かをしようとしていて、その過程で管理局との衝突だと思つるのじゃ。あの対応の早さ、それにのう」

「ええ、わかっていますわ。貴一君の裏の書く戦法は身にしみるぐらい体験していますし、それに彼は無闇に争わない子だと私は思つて居ますから。ん！？アルバート博士、これ」

そこには、ソルジャーと書かれた、デバイスだった。

「うむ、これはソルジャーの設計図じゃな、なんにも代わりばえはないのう。ムーンには鎖が追加されておつたが、他の二つは無じじやな。」



「アルバート博士、そのライトアンドダークネスの機能などは」

私の質問に博士は首を横に振り

「まったくの未数値等しいのじゃワシも二回ぐらいしか対峙はしておらん。唯一の分かっていることは、この言葉だけじゃ」

そしてデータの中から出てきた言葉は

「ザ・ビースト」

「うむ、これだけじゃな、他は設計図の改良のための言葉が何個かあったが、それ以外は無しじゃな。貴一のデバイスなどの工房センスはワシよりも上じゃ。それに理解力も上。そして戦闘センスすら」

「ふう、一休みしましょうか。それにまだ私たちでも出来ることがあるかもしれませんが、『ザ・ビースト』この意味も考えなければなりませんし。それと例の件もありますから」

「うむ、そうだったの。カートリッジシステム」

そして私はまたもや、アースラに籠ることになってしまった。

Side out

さて、俺はあれから数時間ギターに費やしていたが……時間間、ああ、既に十二時前かどうするかな、はやてもまだみたいだし。そして俺は階段を降りて下にいった。

「お、貴一じゃねえか。お腹空いたぞ」

「言うと思ったよヴィータ。けど少し待ってるよまだはやてとシヤマル、それにシグナムだってまだだ。」

「けどよくシグナムはさっき電話で、今道場を出た、だったけど、はやてとシヤマルはわからないし」

「はいはい、それでも待つ。わかった？」

俺の最大の笑顔と、後ろからゲートオブバビロン。

「う、わ、分かったから、その笑顔とそれを仕舞ってくれ。」

「分かったのならそれでいい。ザフィーラ、ムーンどうだ、相手の動きはこちらに近づく奴はいるか」

「いない」「大丈夫だぜ、マスター」

二人とも、現在家の警備に当たってもらっている。まあ俺の特製結界だから大丈夫だろうが。

「主、はやてちゃんにシヤマル、シグナムの帰還よ」

「了解した、それじゃ向かいでも行くか」

そして俺は玄関に向かった、そして扉が開き

「ただいま」「帰りましたよ」「帰宅した」

「お帰り、三人とも。だけどシグナム、硬いよその言い方。普通にただいまで大丈夫だと思うぞ」

「う、す、すまない。それで私の居ない間は？」

「異常なし。シャマルはどうだった？」

「ええ、私の方もはやてちゃんに近づく怪しい人はゼロでした。」

「そうやな、今日は新しい友達が出来たんよ、貴一君。」

「お、それはよかったな。」

ん？図書館で、友達フラグまさか……

「はやて〜お腹空いたぞ〜!!」

「あ、すっかり忘れていた、はやて、それにシグナム、手伝ってくれ今から昼の準備だ。お前らを待っていたらヴィータが空腹で死にそうになっている」

「あはは、ヴィータも育ち盛りやな」

「はあ〜、あのバカ」

「それでは私も」「手伝わなくいいから、リビングに居て」「……みんな酷すぎです〜」

シャマルの言葉をスルーして、俺らは料理をはじめた。

S i d e   フ ェ イ ト

今日は結局昨日の事でお母さんはアースラに籠るらしくなのは家にお泊りさせてもらった、もちろんアルフも連れて。今は道場で恭也さん達の稽古を見ていた。

「ふむ、今日はここまでだ、恭也。すこし冷静になれ。」

「だけど・・・貴一君が」

その時恭也さんは私と、なのはの顔を見てどもってしまった。

「お兄ちゃん、なにか貴一君の事で言いたいことでもあるのかな、かな。私達がO H A N A S H Iするからお兄ちゃんは黙っていてくれるかな、かな。」

なのはの目が笑っていない笑顔に、恭也さんも撃沈。

「しっかし、貴一の魔法強かったよな、あのクロノも一瞬って化け物かよ」

「アルフ、そういう言い方はないよ」

「う、す、すまないフェイト」

「それに私が見た限りでもまだ本気じゃ無かったよ。私が戦闘した時もなんだか試しているような感じだったし」

未だに貴一君の本当の目的は分からないけど、私達は絶対貴一君の

事を信じているだから絶対、お話をしたい。

Side out

俺らは飯も終わり、午後のひと時を過ごしていた。

「うーん、今日は一段と退屈ですね貴一君」

「あんな、シャマル普通これがいいんだよ。それにいつ敵が来るかわからないぞ。」

「主は少し気が抜けすぎのような・・・」

「貴一はそのほうがいいだろう。」

「そうやで、貴一君は今のままが一番ええ。それにしてヴィータはちょっと休みすぎや」

「う、はやてに言われるとは思わなかった」

「そうだな、ヴィータは少しだらけ過ぎだな、私が稽古を」

「しなくて、いい!!」

「シグナム、休みなんだから家でごろごろでいいじゃないか」

既にリビングでごろごろしている俺。

「うわー貴一君ほんま今日はどうしたん？」

「いや、久しぶりの休みではしゃいでいる。それにもうそろそろ宿題やらないといけないし」

「ああ、いいなあ。はやく私も学校行きたい。」

「これが終われば行けるさ。まあ足の調子にもよりけりだか。」

「これが終わればか」

シグナムとはやてが同じ事を言っていた、どうかしたのだろうか。

「ふふ、「接触!!」、接触!!」・・・ええ、こんな昼間に一体誰よ、このシャルルさんが許しま」これは・・・魔王のようです、マイロード」・・・え？」

「それならバレないだろうから、スルーで。大丈夫だよただ近づいてきただけだから、ってみんな騎士服になるの早っ!!」

「ほ、ほんまやな。私が作ったけど、こつもちゃんと見るのもいい。もつとちゃんと魅してえな」

そしていつの間にか八神家第一回騎士服&バリアジャケットコレクションに変わり、これは夕方まで続いた。

題八重一抱（A's編三十一話）。ザ・ビースト（後書き）

ブ「イエイwがんばったよ、俺」

貴「うるさい、どうも星川貴一です」

ブ「皆さんどうも、ブラックサレナです」

貴「で、どうかしたのか？」

ブ「久々に機動戦艦ナデシコ見てね・・・いいな〜アキトいいよ〜  
つてなつたの」

貴「アホだ、アホが居る。まあいいそれよりもなんで今回、俺も読んだんだ。なんか重大なお知らせがあるとか」

ブ「く、く、く。良くぞ聞いてくれた、そろそろ我々のこの後書きにも他の作品のキャラ「ゲイ・ボルグ！」「っなんのローアイアス！〜く、く、く。昔の俺とは違うのだよ俺とは！〜と、いうことで」

貴「こんなバカ作者の後書きに出てみたいと思う人は連絡をください（棒読み）」

ブ「うむうむ。恩は返さなければ恩では無いからな」

貴「こんなアホの所に誰がくるんだが・・・」

ブ・貴「「バイバイ」」

袋八重二話（A's編三十二話）。夏のひと時（前書き）

それでは今回はコラボが……



岱八重二話（A's編三十二話）。夏のひと時

それから数日が経った、現在も蒐集活動の真つ最中だ、未だに動きがなし、これは逆にこわいな。

「貴一、終了したぞ。我らも撤退だ。」

「そうだぞ、貴一。今日で600頁突破なんだぞ。だけどここ寒みー。はやく帰ろうぜ」

ああ、そう思えば今居るところ……極寒の星だったな。

「了解だ、撤退する。」

そして俺らは撤退、そして一言言いたい。

「熱っちーーーーー!!!」

俺とヴィータが地球に帰ってきて言った言葉。

「あはは、おかえりな。それにしても今日は暑いな」

「ああ、なんで今日はこんなに暑いんだよ、八月のもう既に十二かしかし暑い」

「……………」

無言で動いていないザフィーラ。

「おい、大丈夫かザフィーラ？」

「……………」

そして無言で倒れた。

「ザフィーラ！！」

やはりこの一番の原因は。

「なんだ、今日なんかの日にエアコン止まっちゃったのかしら？」

「シャマル、これは我々にもきついな」

「しょうがないよ、それにしても暑いな」

「さすがにはやてもきついよな……しょうがない、あれを使うか」

そして俺は立ち上がり、デバイスをすべて置き。

「トレスオン  
同調開始」

そしてクーラーの中身を調べ、そして壊れているところを見つけた。

そしてそれを解体をし始めて、そして必要な部品を

「トレスオン  
投影開始」

そしてそのまま修理を終了。

「はやて、スイッチオン」

「え、ああ。」

そしてスイッチが付き、普通に動いた、そしてヴィータが一言

「最初ツから、そうしろよ、アイゼン!!」

「ちよい待ち、俺を殺す気か!!」

そんな八神家だった。

Side クロノ

「はあ、はあ、はあ。」

僕はあいつに追いついてもいない、同じ土台にもいない・・・あのときもそうだ、結局僕には一撃だけだ。フェイト達もそうだ、あいつらの戦闘能力はつよい。

『クロノ、ユーノ君達が何か掴んだみたいだよ、すぐにこっちに来て・・・シャワーは浴びてきてね』

「わ、分かっているよ。それじゃ直ぐに」

そして僕は直ぐにシャワーを浴びて向かった。すでに高町やフェイト、それにアルバート提督も居た。

「それではユーノ君、どうでした?」

『はい。僕はこの無限車庫で、闇の書について調べてみたら意外な

事もわかりました』

「それで、どうだったのユーノ君？」

『はい、リンディさん。まず最初に闇の書には元々の役目としては魔法の記録が役目でした。』

「待つて、それじゃあ最初はノートみたいだったんですか？」

『うん、なのは。そうみたいだよ、だけど年月を重ね、そして所持者の魔導師も代わる代わるで能力も追加していった結果、バグが発生したみたいです。まず一番の問題はたぶんこの転生システム、自己修復だと思われます』

「待て、それだと今貴一や他のあいつらは『ボルケリッター』、が何故僕らもとい龍種を襲っているんだ？」

『じゃあ、最初にヴォルケリッターについてだね。ヴォルケリッターの役目、それは闇の書の守護そして蒐集活動の手伝い。』

「おい、ユーノ。蒐集活動がようは魔力を取ることだろ、ならなんでそんな事をするんだよ。バグっているんだろ？」

『うん、言ったけどバグが闇の書の中で暴走している、そのせいか分からないけど最初の目的である魔法を覚えること、それが蒐集活動。だから貴一君たちもそれをしているんだと思う、だけど』

「……だけど？」

アルフと高町、フェイトは知らないらしい、闇の書の末路。

『もし、闇の書の頁をすべて埋めて完成させたら・・・所有者は闇の書の暴走により・・・世界と共に消えてしまう、だけど闇の書は転生システムでどこかまた、所有適合者は探す。』

「ええ、だからこの闇の書は管理局でも恐れられているの。ユーノ君ご苦労様ね、リーゼロッテ達もご苦労様。それじゃ最後になにか気になったことは？」

『そうですね、ただ一つ、一つだけ気になったのがなぜかこの資料を集める際、色々とストッパーに引っかかりそうになりました、だけどアルバート提督のおかげでどうにかかりましたけど、それ以外は。』

「ありがとう、それじゃあね」

そして母さんは通信を切った。

「うむ、これで方針は決まったのう。そうであるうリンディ殿？」

「はい、それでは我々は貴一君もといヴォルケリッター達の邪魔をします」

「くくくじゃ、邪魔くくく！」「くくく」

これは僕と、アルフ、そして高町の声だ。

「か、艦長、こういつ時にふざけないでください」

「あら、クロノ君、私は至って真面目よ。とにかく蒐集活動による

闇の書の完成を防げばいいのよ、私達は。それではみんな自由行動ね。なのはちゃんにフェイトちゃんは今日は帰りなさい、もう少しでデバイスは元に戻るから。」

「はい」

そして二人は、戻り

「それでは僕も戻ります。」

僕も訓練室に戻った。

Side out

さて、俺らもそろそろ行きますかね。

「それじゃあ、行って来るよ、はやて。」

「それでは主はやて、行ってまいります」

「うん、ほな気いつけてな。」

今日は俺とシグナム、他は自宅待機。俺は玄関で魔法陣を敷き、転送した。

・・・転送したその先は・・・真っ白な世界じゃなかった。ここは

「ジャングルかよ、今度は」

「ああ、そのようだな貴一。今回はここ・・・来るぞ何か！」

そしてジャングルの中から、出てきたのはなんとババコ ガだった。

「まさか、ここモンハンの密林!？」

俺は驚愕していながらも直ぐに刀を持った・・・双剣じゃないか。

「貴一、行くぞ!」

そしてシグナムが直ぐに仕掛けて、そして気付かれた。

「ウガアアアアアアア!」

「ちっ、こいつ。こ、この鳴き声は一体?」

ああ、これはうるさいな、しかしハンターはこれをなんともしなかつたな、凄い。

「おつと感心してないで、行かないとな。 F i n a l ー M o d e I X 」

そして六本の刀を俺は持ち。

「シグナム、大丈夫か?」

「ああ、なんとかな。しかしこいつをどうすれば?」

「ウガアアアアア!」

そして俺らに突進してきた、俺は右に、シグナムは左に避けた。やはりあのコングは攻撃の隙が大きいな。これなら。

「シグナム、手を出すなよ。」

「あ、ああ。何をする気だ貴一？」

「安心してよ、全部みねうちで終らせるから。奥義」

そしてコンガがこっちに突進してきた瞬間、おれは低い体制になり、刀は指と指の間に挟み、腕をクロスさせ、こちらも走り、俺はコングに向かい

「驚掴み!!」

そしてコングと俺は、逆の位置に立ち、そして

「ウガアアアアア・・・アア・・・アアアアアアアアアアアア・・・」

「凄い、私ですら見えない斬撃・・・これが貴一の本懐・・・」

「ふう、シグナム。蒐集を「待て!!」あくあ・・・見つかったようだな」

その時、シグナムが、苦い顔をしたような気がしたが・・・それよりも、この状況どうにかしないと。



岱八重二話（A's編三十二話）。夏のひと時（後書き）

ブ「どうもブラックサレナだ!!」

紅「ど、どうも、『魔法少女リリカルなのは』の主人公をしています。紅。幸夜です。あれ？」

ブ「いやあくまさか、うちの後書きにもコラボがくるとはね。うん私は感激だ」

紅「あのう、貴一君は？」

ブ「もう少しで来ますので、そんなに待てませんか？（ニヤニヤ）」

紅「ま、待ちますよ!」

ブ「そうだ、居ないから聞けるけどファンらしいね（ニヤニヤ）」

紅「う、そう、そうですよ。だってかっこいいですけら」

ブ「噛んじゃだめでしょう。まあそろそろくるかな「遅れた」ほらね」

紅「お、お久しぶりです貴一君」

貴「すまんな幸夜。バイク飛ばしたんだがな」

紅「いえいえ（言えない、貴一君の変装姿とバイクが合いすぎてかっこいいなんて言えない）」

ブ「そう思えばそつちの後書きでもしかしたらこつちに来るかもなんて言っていたが本当になったな。」

貴「そうだな、それに幸夜喜べ、お前が一番最初のコラボゲストだ」

紅「え、本当です／＼／＼」

ブ「く、予想以上の可愛さがあるぞ」

貴「だから言っただろうが」

ブ「これならば貴一も男の娘に」「おい」「・・・あれ今回は二人」

貴「俺を女顔にする気か？」

紅「貴一君は今のままがイチバンナデス」

ブ「嘘だ!!」

貴「逝くぞ幸夜？」

紅「はい、貴一君」

貴「起きろエア」

紅「行きます、エクス」

ブ「今回は後書きだけじゃなく私もスペシャルなんだよ。行きます」

紅「カリバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

貴「エヌマ・エリツシュ！！！」

ブ「術式開放って！！間に合わないじゃん。ぐああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

貴「そのすまん、来てもらったのにこんなので」

紅「いえいえ、こちらこそありがとうございます」

貴「土産と言ってはなんだが、この言葉を渡しておこつ」

紅「あのう、それって？」

貴「お前、神と悪魔なんだろ」

紅「う、は、はい」

貴「だけどな、お前は“人”だ。安心しろ、人だ。そうだろう。」

紅「はい！！」

貴「さて、こんな湿っぽいのは終わりにして・・・次回予告ヨロシク」

紅「え、あ、あ、はい！それでは次回『ギル爺の本気』・・・あの  
人強いんですね」

貴「あああ、ホントに強いよあの人。それでは」

貴・紅「バイバイ」

ブ「結局、オチは私なんですよね、紅 幽鹿様ありがとうございました。それでは次回もゲストが・  
・しかし貴もキザになってしまったな・・ま、いつか。バイ  
バイ」

第八十三話（A・S編三十三話）。師匠VS弟子（前書き）

今回もゲストが出ます!!

第八十三話（A・S編三十三話）。師匠VS弟子

さて、まさか見つかるとは思わなかったが、しかししょうがないか。

「ふ、シグナム。こいつは俺がやる、お前は蒐集活動を」

「し、しかし貴」

「安心しろ、お前は俺が守ってやるから。蒐集活動、頼む」

「う、あ、ああ／＼」

「く、そんなことさせるか、シユート！」

そしてクロノはシグナムに向かって、魔弾を放つ、しかし俺はそれを防ぐ。

「なるほど、蒐集活動自体を狙ってきたか。まあいいか、今回は格闘で行くぞ」

そして俺はクロノにまっすぐに向かった。

「それならば」

そしてクロノ周りに無数の魔弾が出てきた、おいおい、あれは魔王並みの魔弾数だぞ

「君……だけが……強いわけじゃな……い」

「無理はしない方がいいと思うぞ、執務官？」

「シユート!!!」

そして無数の魔弾が俺とシグナムに向けられた。

「なるほど、しかし、これならどうだ、ソニックムーブ」

そして俺は一瞬にしてシグナムの前に戻り、すべての魔弾を、喰らった。

「これならば、貴一でも「甘いぞ、クロノ執務官」え、あ、あなたは……」

おいおい、まさか今の声。

「……ギル爺……」

「久しいの貴一よ、いやこう言うおつぞ、星川貴一よ。やはりお主の対魔力は非じゃないのう」

なるほど、まさかギル爺が協力しているとは思わなかったな、しかし、俺はすぐに脇の刀を構え

「ふ、これは俺も本気で行かないと不味いかな？」

「貴一、蒐集終了だ。あ、あちらは？」

「ああ、俺の爺さんさ。まあ今は敵だけだな……」

その時すぐにシグナムが俺の前に出て。

「し、シグナム!?!」

「貴一、お前は撤退しろ」

「え、なんで」

「もう、お前の悲しい顔は見たくない、お前のその表情は嫌いだ!  
!」

俺はシグナムがここまで怒ってくれるとは思わなかった、だけどだからこそ

「それでもだよ、シグナム。それでも俺は逃げない、絶対に。だから安心しろって」

「う、しかし……分かった。……ならばこの烈火の将シグナムとして魅して貰うぞ、星川貴一!」

「話は済んだようじゃのう?」

「ああ、それじゃあ、シグナム、あつちの黒いの頼んだ。」

「了解した、はぁ……!」

そしてシグナムはクロノを誘導しながら、俺達から離れた。

「ふむ、人間までは捨ててないようじゃな、貴一」



「どうだろう、だけど俺は今、生き生きしているのは確かかな？」

「そうか、それでは行くぞ。」

そしてギル爺はデバイスに装填した、それは

「ロード、カートリッジ」

古代ベルガ式、ギル爺の剣の強さ、それは

「この魔術変換でお主を凍らせてでも連れて帰るぞい」

「そう、ならば。俺も本気で行くよ」

そして俺は刀を戻し、ライトアンドダークネスを解除した。そしてソルの状態に戻る。

「あ、主！？」「マスター！？」

「いくよ、トレスオン投影開始」

そして弓を出した。

「ふむ、弓か。それではこちらはこう行くのかのう」

そしてギル爺の周りに、魔弾ではなく氷の塊が出現し。

「行くぞ、ギコルドー！！」

「あついう魔法もあつたんだギル爺、だけどその程度なら、これで

十分だ。ソル」

「すでに調整完了。数、二十七、すべての完全破壊までに掛かる魔弾数、二十七」

そして俺は魔弾を形成しそれを矢の形に変えて、そして撃ち放つ。これですでに俺に当たるものはすべて消した。

「ふむ、これでもダメか、それならば、接近じゃ！」

そして俺に急速に接近する、ギル爺。俺も対抗して、出したのは。

「トレスオン 投影開始」

両手にしっくりくる、夫婦刀、その名も干将・莫耶。

そして、剣戟の開始だ、最初はギル爺の特攻にもみえる剣の突き、俺はそれを避けて、片方で攻撃し、片方で守っていた。

「今はなにも聞かんぞ貴一。しかし、これだけは言おう貴一、後悔は無いのかのうー!!」

ギル爺の重い攻撃が俺の右腕に痺れとして襲い掛かる、だけど

「後悔はあるさ、だけど、それでも、守りたい者があるんだあああああああー!!」

そして俺も干将・莫耶を投げた。

「武器を投げるとは、鬪争意思をなくしたも同じと教えたじゃろう

が、このバカ孫が!!」

そして、俺はさっきと同じモノを投影し

「なん・・・じゃと」

そして俺は、ギル爺に対抗、そして投げた物は回りに回り俺に向かってくる。

「なんのう!!」

しかし、ギル爺は俺との戦闘中ですら、後ろの剣を打ち落としたり。そして俺から少し離れ、そしてカートリッジを三つ取り出し。

「行くぞ、これがワシの最終奥義じゃ」

「ロードカーロリッジ、リミテッドオーバー。」

そして急にギル爺の回りは、冷気に包まれ、そして、ギル爺は居合の体性になり。

「氷激、爆砕氷点下!!」

そしてその居合いの構えから、俺にその氷の剣戟を放った。しかし俺は、剣を消して、呆然と立っていた。

Side ギル

ワシの最終奥義を放ったが、しかし貴一は逆に構えを解いたじゃと、どういふことじゃ。守る訳でもない、どういふことじゃ？

S i d e o u t

俺は向かってくる、氷の攻撃に対して、俺は右手を前に出して、こう言った。

「コンプレクシオ  
掌握」

そう、ネギまの闇の魔法。相手の魔法を自分の者にした、そして出来たこの兵装、その名も

「術式兵装、銀髪珀眼」

俺はどっかの卍解のように氷の翼が生え、そして髪の色が銀色になった。

「なんじゃと・・・ワシの奥義を、消した・・・」

「違うよ、ギル爺。俺はただ、善も悪も、強さも弱さも、すべて有りのままに受け入れて飲み込んで、飼いならしただけだよ。ギル爺言っていたでしょ、俺に闘い方を教えてくれた時、自分の力を恐れてはならない、そして相手の力は凌駕するべし。だから行くよ!!」

そして俺は瞬時にギル爺の前に立ち。

「くっ、それならば、はぁー!!」

ギル爺の攻撃が来たが、すでに魔力の無いため、俺は手でそれを止めて。

「今の俺は氷だ。ならば氷の魔法も使える」

そして俺はゼロ距離でこれを使った。

「闇の吹雪！！！」

そしてギル爺は

「・・・・・・・・（カチコチなため無言）」

終了、さすがに殺さないほどの魔力にはしてたけど、そしてシグナムの方も

「それで貴一に挑もうとは・・・格が違う事をしれ。私達は大きなものを背負っているのだからな！！！」

見事にクロノ君、またもやの撃墜。

「シグナム、撤退だな」

「ああ、そうだな。し、しかし貴一の姿は？」

「あ、すまん、元に戻すから。」

そして今までの魔力を散布させた。

「よし、撤退だ。」

「ああ、了解だ」

そして俺らは撤退した。

第八十三話（A・S編三十三話）。師匠VS弟子（後書き）

貴「なんなんだ今日は？あの作者がいないなんて・・・なあいいか。それは今日も始める後書き、俺は星川貴一だが・・・ホントに居ないのか？」

龍「一体、ここはどこなんだ？」

貴「え？」

龍「ん！何だ貴様、敵か？」

貴「はい？」

龍「最初で決める、――閃鞘・八点衝――」

貴「いきなりかよ！！同じ技で相殺させる。――閃鞘・八点衝――」

龍「なんだと、お前七夜家なのか？それとも・・・」

ブ「忘れ物」俺の忘れ物」つえ！！・・・し、失礼しました」

貴「待ちあがれ、天の鎖」

ブ「グバビツ！！」

貴「説明しろこのバカ」

ブ「く、その前に君はテンプレな転生（仮）の主人公、森 龍斗君だね」

龍「ああ、そうだが。ってあんたら一体何者だ？」

ブ「ふ、これ読みたまえ。そして貴一、これを解きたま「嫌だ」・・・  
・そうか」

龍「・・・う、うわああああ」

貴「どうかしたか？」

龍「お前、もしかして、星川貴一君に、それから作者のブラックサレナさん？」

ブ・貴「イエス」

龍「すまなかった、急に襲い掛かってしまつて。うちの作者が今の手紙で、お前今日は違う人の後書きにでるから強制転送。って書いてあつた、ホントにすまない」

貴「まあ、いいさ。実質俺に怪我は無いし、それにこのバカからも連絡は無いし遅れてくるし・・・やっぱ死んでしまえ」

龍「しかし、はじめましてだな、星川貴一君」

貴「あ、貴一でいいぞ。俺もそこまでこだわらんから。それにしても初っ端の業凄いな。メルブラか」

龍「そう言っているけど、普通にふせいでいたじゃん・・・おそろ



しい」

それから、さらに話すこと十五分。

貴「そろそろ、時間かな？」

龍「そのようだな、今日は楽しかったぞ」

貴「お、そうだお土産だ。俺が想像した」

龍「うん、これは・・・もしかして」

貴「おう、シオンの銃だ。ちょうどいいだろう」

龍「ありがとう、頂いておく」

貴「さて、あいつも転送しちまったことだし、閉まるか。それでは龍賀様どうもありがとうございました。今度は俺をだしてみてください。それではバイバイ」

ブ「結局放置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

第八拾四話（A・S編三十四話）。それぞれの戦い（前書き）

八十四話………終わりが見えない。

第八拾四話（A・S編三十四話）。それぞれの戦い

Side なのは

それから数十分。私達と呼ばれていたときはすでに戦いは終わっていたなの。

「あ、あのう。それで貴一君は？」

「すまんのう、なのは殿、うちの孫は逃げられてしまった。」

「・・・そうですか」

「それで、大丈夫なんですか、クロノも相当やられていたらしいですけど」

「ふむ、大丈夫だぞ、フェイト殿。ワシはのう」

「アルバート提督・・・」

「うむ、リンディ殿。これでワシはもう貴一に言うことはない。後は思いつきし、この子らに任せるとしようぞ。」

そして私達を撫でてくれた。

『またもや、パトロール中の局員から連絡、現在無人世界にて、戦闘、ならびに最重要人物らしき人確認。艦長、たぶん貴一君の仲間です』

通信が入り、そしてリンディさんが私達を見て。

「お願いね。なのはちゃん、フェイトちゃん」

そしてレイジングハート渡してくれた。

「「はい!!」」

そして私達は出動した。

Side out

Side シグナム

我々はあの後帰還を果たし、そして明後日の午後には最終作戦を実行することにした、そのため今日はもう一度蒐集活動に出ることにした。

「それでは今度は私達が「いや、私がもう一度出る。」・・・シグナム・・・了解した、それでは私は主の近くに居るとしよう。それでは次の蒐集活動は、ヴィータ、そして私の変わりにシグナム。これでいいな」

「ああ、すまないな。ザフィーラ、あのテストロッサにはまだ言いたいことがある」

そうだ、彼女は、いや彼女だからこそ私はちゃんと決着をつけなければならぬ。貴一の思いにも／／／／

「どうかしたか、シグナム？顔が赤いぞ？」

「あ、ああ、大丈夫だ、貴一／／／／／。それでは行こう、ウイータ」

「おう。それじゃあ、はやて、貴一、帰ったらうまい飯頼むぜ」

「ほな、きいつけてな」

そして私達は転送した。

Side out

さて、行ったことだし、俺もそろそろ決着をつけに行くでしょう。

「すまん、はやて。見つかったようだ」

「そのようですね、さっきから使い魔さんの反応がビンビンですか  
ら。」

「貴一、お前が行くのか？」

「それ以外無いだろう・・・頼んだぞ、ザフィーラ、シャマル」

「「御意」」

俺はその言葉に思わず嘖いてしまった。

「ぶっ！似合わないぞ、シャマル」

「ひ、酷いです〜」

「貴一君」

そして寂しい顔をしているはやてが居た。

「大丈夫だよ、はやて。今度は俺の友達を紹介して一緒に夏休みにしてやるから、楽しみだろ？」

そしたら、はやては泣いてしまった。

「おいおい、そういうのはこれが終わったらな」

そして涙をふき取り。

「うん、それじゃあ。いつてらっしゃい貴一君」

「行ってきます」

そして俺は外に居る、猫共の正面に出た。

「よう、今回は仮面をつけているんだな」

「今度こそ」

「お父様のために」

「「闇の書の強制発動!!!」」

そして俺の勝負が始まった。

S i d e シグナム

ふむ、今日も始めると「シュート!!」「くっ!

「ん!! ヴィータ!」

そして私は不意の攻撃に回避行動をとった、そして上に居たのは。

「あ、あのボロボロにした白い奴」

そう、そしてあの黒いのは

「・・・テストロッサか・・・」

「ヴィータ」わかってるよ「・・・ん?」

「黒いのと戦いたいんだろ。行って来いよシグナム。そして帰ってはやてと貴一の飯、食おうぜ」

「ああ。」

そして私は、上空に高く飛び、テストロッサそして、白い方の前に立った。

「なのは、お願い」

「うん、フェイトちゃんも気をつけて」

そして白い方はヴィータの方に降りていった。

「久しぶりだな、テストロッサ」

「はい、シグナム」

「この前のようにもう一度、倒す」

そして私は戦闘に入る、最初は、私の接近しかしテストロッサは

「はあっ！」

なんと凌いだ、この前とは大違い。

「腕を上げた・・・違う、根本的違う、これは一体」

「シグナム、この前は確かに負けました、だけど今度は負けない！  
！」

「いいだろう、それならば私に勝って見ろ、テストロッサ！！」

私の攻撃、テストロッサの攻撃、どちらともスピードであり近距離戦。しかし大きく違うのが

「火力・・・」

そうこの前に無かった火力が増している、これではまるでベルガ式だ。

「今、バルディッシュ。」



「イエツサー、ザンバーフォーム」

そして私の目の前でカートリッジが使われた。

「カートリッジシステムか・・・それならば、レヴァンティン」

「ロード、カートリッジ」

私もこれに賭けるしよう。

「行くぞ、テストロッサ」

「はい!!」

「ふ、もし違う場所で会っていたら、良き友人だったろうに」

「はい・・・本当に」

「しかし」「だけど」

「「これだけは譲れない!!」」

そして私は、テストロッサに向けて、放った。

「紫電・・・一閃!!」

s i d e o u t

俺は現在、海鳴の上空で戦闘中。

「ふむ、これでは埒が明かない。FinalモードIX」

「「ツインバスターライフルモード」」

「く、来る「遅い」ぞ」

そして俺は片方を、普通に殴った。

「銃など使う必要が無かったな。」

しかしそこにまたもやKYがやって来た。

「その二人止まりなさい」

「やべっ、なんでクロノが」

「あははは、また落とされに来たか、クロノ執務官!!」

「く、貴一。それに君は一体？」

Side ギル

「さて、どういふ事が説明貰いましょうか、ギル・グレアム提督・  
」

ワシは今、ある管理局の一室に来ている、その理由は。あの貴一との対戦の後に、入っていたメモ。それは貴一の残した、設計図の暗号文の解読方法。そして出てきた答えそれは“猫に気をつけて。彼方と同じ名前の者は違う目的がある”だった、ご丁寧にフィボナッチ数列で書いてあった、そのせいで解読が遅れてしまったが、しか

しこれで確信が着いた、そう現在その一室に出ている映像には、貴  
一とクロノ君、そして使い魔の猫達だった。

「アースラまで、よろしいかな」

「・・・はい・・・」

side out

第八拾四話（A・S編三十四話）。それぞれの戦い（後書き）

ブ「さて、今日はどうしたものか」

貴「まず挨拶しろ、どうも星川貴一だ」

ブ「作者です、ブラックサレナです。」

貴「なぜに区切る。まあいい、それでどうした？」

ブ「ゲストも来ない、話は終わらない。どうしよう」

貴「アホだろ・・・まあいい、それではこの前と同じくゲスト募集でもするか？」

ブ「サー、イエッサー！」

貴「と、言うことなので」

ブ「私の後書きに出てきてもいいですよ、という人またまた大募集します。」

貴「よろしくお願いします。それでは」

貴・ブ「バイバイ」

弟八重後輪（A・S編三十五話）。閃光VS騎士（前書き）

新作もよろしくお願いします。ISです。

第八重後輪（A・S編三十五話）。閃光VS騎士

さて、どうしたものかねこのクロンボさんは。

「貴……君は後だ、それよりも君達は？」

「く、ここは撤退するしか……」

しかし既に時間的には遅かったらしい、なんと既に俺とそしてあいつらの周りにはバインドの魔法陣が現れていた。

「……逃がさない」

そしてあつけなく、俺らは捕まった。

「く、放せ。我々は闇の書の完全破壊を」「それこそがお父様の願い」

「お父様？」

その時クロノが気付いた。さて、そろそろいいだろう。

「それでは行きますかね、俺を捕まえたければ、この十倍は濃い魔力でバインドするんだな。」

俺は力づくでバインドを解きそして

「そろそろ、お前らの計画は……失敗だ!!」

そして俺はある呪文をといた。

「貴様の本当の姿を、今ここで!!」

これは変装などしている相手に本当の姿に戻る強制魔法。ちなみに害は無くただ単に変装を見極めるための貴一オリジナル魔法。

「な、そ、それは!!」

そして仮面野朗は使い魔の猫である姿に戻った。

「な、リーゼロッテ……だと……」

「く、ここは撤退『待ちなさい、リーゼロッテ』……え!？」

そこにリンディさんの通信が入った。

「ギル爺、遅いよ少し。まさかヒントだよりで暗号を読んでいたみたいだね……」

『ふむ、さすがにもう年のようじゃな。そしてその使い魔たちよ、すでにこちらに主は居るが、投降するかのう?』

そして、直ぐに猫達は両手を挙げた。

「それではクロノ執務官、俺は失礼するでしょう。」

「な、貴一。く、バインド」

「遅い」

そして俺は、双銃に切り替えて、クロノ周りに打ち込み、俺は消えた・・・まあ、下の家に帰っただけだが。

Side フェイト

さっきのシグナムの攻撃を、どうにか凌いだけど・・・

「バルディッシュ・・・」

そう、バルディッシュは既にひびが入っている状態だった、それは最初にセフトアップした時にお母さんに言われた、「いい。フェイト、なのはちゃん、あなた達のデバイスは火力もスピードも段違いにパワーアップしているわ。だけどね、これだけは覚えておいて。

これは諸刃の剣なの使えば使うほどデバイスは壊れていくわ、確かに今までよりも段違いに強くはなっているけど・・・たぶん一回きり。それ以上使えばデバイスはもたないわ。元の設計プランが貴君のデバイスのソルジャー専用だったからなんだけどね。だからこの六発で決めて頂戴。それ以上やれば・・・」そんな事を思い出しているときバルディッシュが言ってくれた。

「大丈夫です、さっきの攻撃はこの前は負けましたが今回は押し返せました。」

「わかったそれじゃあ行くよ、バルディッシュ・アサルト!!」

「イエッサー。ロードカートリッジ・・・IX」

「やるな、テストロッサ。まさか私の技を押切るとは・・・しかし。ロードカートリッジ」



「闇の書にはバグがあるんです、なんで「それならばどうに知っている」・・・え!?!?」

私は驚愕した、知らないからこそこんな事をしてるとばかりに・・・じゃ何でこの人たちは・・・

「甘いぞ、テストロッサ。私達はそれでも、それでも主の命の方が大きいのだ。レヴァンイン、一気に決めるぞ。レヴァンテインのもう一つの姿」

そしてシグナムの持っていた、剣とそしてその鞘が合体した。

「行くぞ、テストロッサ」

「バルディッシュユ!!!」

「シュツルムファルケン」「プラズマザンバーブレイカー」

「シュツルムファルケン!!!」「電光一閃!!!」

そしてお互いの魔力がぶつかり合い・・・そしてシグナムの放った矢と私の剣は現在、相殺し有っている状態だが・・・もうバルディッシュユがもたない。 فقط

「それでも、貴一君なら・・・諦めない!」

そして私は押し切りそのままシグナムに当てようとしたが、その前に剣の魔力は無くなった、ようなカートリッジの魔力切れ。さっきのが渾身の一撃、だからもうカートリッジは無い。それにこれ以上

はバルディッシュユにきつい。しかしそれは相手も同じのようだ。

「まさか、私の攻撃を撃ちのけそして攻撃してくるとは・・・テスト  
タロツサ今回はお前の勝ちのようだ」

そしてシグナムは撤退をしていった。その瞬間私も緊張が切れてしまった・・・

「あはは、やったねバルディッシュユ」

「・・・強制スリープモード発動」

バルディッシュユにも無茶させすぎちゃったかな。

S i d e o u t

俺は、家に帰った瞬間に

「あ、シグナムも帰ってきたな・・・あれヴィータは？」

その時シグナムが申し訳なさそうに

「すまない、今回の蒐集活動は失敗だった・・・」

なるほど、あいつらにベルガ式が入ったってことか・・・しかし原作だと相殺でいい勝負のはずだが、なんでシグナムもこんなにボロボロなんだ？

「あ、お帰り！！」

そしてはやてが迎えてくれた。

「申し訳ありません主はやて、自分は……」

「いいんよ、ただ時間が少し延びただけや。それにシグナムの方がボロボロやん。はやくお風呂入りな。そうや今日は一緒に入るうな」

「え、え、あ、主!?!」

そしてシグナムははやてに連れられてお風呂に消えていった。

「シグナムは負けたのか?」

「そうみたいね。だけどシグナムだもの。きっとリベンジはするでしょう」

「そうだシヤマル、ヴィータは?」

その時首を横に振り

「それがまだ……戦闘中のようよ」

このパターンだと不味い。間違いなく魔王は君臨する。

「シヤマル、今すぐにヴィータ達の転送先を教えてくれ。早く!!」

「え、ええ。分かったわ。それにしてもどうかしたの?」

「管理局員はまだ居ると思う、さすがにヴィーター人では危ない。」

「わかったは・・・座標確認ここよ」

そして俺はシャマルの座標どおりの場所に転送した。

そして目に見えたのは原作のあの超遠距離射撃の場面だった。不味い、間に合うか分からないが

「ソニッククムーン!!」

俺は駆け出した。

弟八重後輪（A・S編三十五話）。閃光VS騎士（後書き）

ブ「さて、今日はがんばるぞ、どうも作者のブラックサレナです」

紅「ど、どうも。魔法少女リリカルなのは、紅の主人公の紅 幸夜です」

貴「今回は遅刻はしていないぞ、どうも一応主人公の星川 貴一だ。その幸夜、それは一体？」

紅「え、なんか変ですか？ボク？」

ブ「プククククク（笑いをたえております）」

貴「やはり貴様かのせいか！！」

ブ「違うよ、僕のせいじゃ無いよ」

紅「え、え？」

貴「幸夜、鏡を見て来い・・・」

紅「ぎゃあああああああああああ！！！」

ブ「これは紅 幽鹿様からの伝言でもあるのだよ。幸夜は今度から女物の衣装で出るといふ真理だ」

貴「しかし・・・ゴスロリって・・・ヒルダかよ」

ブ「お、帰ってきた、帰ってきた」

紅「あの作者…あの作者…あの作者…あの作者。そしてその作者！」

ブ「うお！俺に矛先がって、なぜに天の鎖。貴一！？」

貴「すまん、今の幸夜には俺でも逆らえない…あの目はな。」

紅「フッフ、フッフ、さあ貴一君も出して」

ブ「うわわわ！なんですかそのエクスカリバーは！そして貴一、なんでお前も黒いエクスカリバーを！！！」

貴「いや、何。わ、私は悪くない」

ブ「目を逸らしながら言うな！！！」

紅「それじゃあ、行くよ貴一君。エクス」

貴・紅「「カリバー！！！」」

ブ「ゴルフア！！！」

紅「ふー少しはすつきりしたよ」

貴「そうか、お前も災難だな」

紅「うんうん、大丈夫。じゃそろそろ帰るね。まだオワツティナイカラ」

貴「お、おつじゃあな」

貴「……」

貴「えーと紅 幽鹿様、ご武運を。」

ブ「じ、じかい… 『赤对白、紅白じゃないよ』 ……ガクシ」

貴「混沌カオスだな。バイバイ」

第86話) A・S編三十六話)。赤VS白、あ、決して紅白ではありませんよ

はじまり、はじまり。



第86話（A・S編三十六話）。赤VS白、あ、決して紅白ではありませんよ

Side なのは

「ヴィータちゃん、だから闇の書にはバグが」

「うるせい！！そんなの百も承知だつての！！」

そしてヴィータちゃんは、私に接近してきて

「いいか、貴一のおかげであたしらはそれに気がついたんだ。ただどなためえら管理局は信用でねえんだよ。そらっ！！」

「え！？ヴィータちゃん。それってどういう」

しかしヴィータちゃんは転送の魔法を使い離れていった。

「ちっ、シグナムがやられたようだし、ここは撤退した方がいいな。しかしなんなんだあの火力は。普通にパワーだけで負けるぞ。」

離れちゃったけど・・・

「行けます、残り二つのカートリッジで十分にあの距離を狙うことができます」

「うん、だけどレイジングハート大丈夫？」

「大丈夫です。行けます。それにあなたの目的は貴一君とのお話でしよう？」

「うん、それじゃあ行くよう!!」

「ロードカートリッジ。バスター・モードEX」

そしてレイジングハートが形を変えただけど

「いつもより、なんか羽が大きくないレイジングハート、それにもより相手が正確に見えるけど?」

「EXモードですから。さ、行きますよ」

「うん、それじゃあ久しぶりの遠距離砲!!」

「デイベインバスターエクストリーム」

「デイベインバスター!!」

そしてヴィータちゃんを向けて撃ったデイベインだスターはそのままヴィータちゃんに向かって撃たれた・・・けどそこにはいきなり花卉の盾が出た。

S i d e o u t

不味い、完全にあれは発射準備態勢。それにしてもあの魔力量は一体。まるで俺の魔法使用と同じくらいだぞ・・・

「う、嘘だろ。あそから狙ってくる!?!」

そしてあの魔砲が放たれた。そして俺はその瞬間

「我が思い、七天の守りになりて『熾天覆う七つの円環』（ロー・アイアス）」

そしてギリギリのところまで防御に入れたが。一枚、また一枚と敗れていった。

「な、貴一。」

「ヴィータ、お前は早く撤退しろ。なんだかわからんが管理局もパワーアップしている。く、早く」

「き、貴一はどうするんだ？」

「ちっ、しょうがない。」

そして俺は無理やりヴィータの下に魔法陣を展開させて強制転送した。

「な、貴一！！・・・」

これで今回の目的は達成したが・・・く！また一枚。俺の魔力質でこんなにもやられるなんて。カートリッジシステムはこんなに強くなっていたか？原作だとシグナムたちと同等になるぐらいだったぞ・・・なのに今回は完全に押された。そしてまた一枚とやられた。俺はもう片方の手を前に出してこう唱えた。

「しょうがない、ソル。行くぞ」

「」「術式解放その名も」「」

「最強防護」  
アイキス

そして俺はロー・アイアスを消すのと同時に現在俺の持っている最高の防御魔法を唱えた、そして俺はこういった

「この盾に触れることも許されぬ！」

その結果、デイベインバスターは俺の盾に衝突をすることも“出来ず”消滅した。そして俺はソニックムーブで一気に距離を詰めた。

「さて、どんな細工トリックなんだ、なのは？」

「き、貴一君。その姿は……」

そして何かを言いそうになってから、俺にレイジングハートに向けて

「シュート!!」

撃ってきましたよ、はい。されどすでになのはの魔力は無くなっており、俺にダメージを与えるほどの魔弾を出なかった。

「お話してくれる、なんで貴一君がこんなことを？」

「ふん、管理局に語ることに無し。それじゃあなのは。」

そして俺は転送した。

Side なのは



その時急に通信が入った。

『君達、至急に戻ってきてくれ。緊急事態だ。闇の書の主が誰だかわかった』

「え、ホント！クロノ君」

『ああ、それと・・・とにかく速くきてくれ』

「なんなんだ、あいつ？まあいいやそれじゃあなのはとフエイト。行くぞ。おい、ユーノ早く頼みよ」

「久しぶりに来て見れば・・・まあいいやそれじゃあ、転送」

side out

俺が戻るとなぜか風呂上りのシグナムと、はやてが仁王立ちで玄関に居た。

「あれね、なんでしょうか二人とも」

「いやあな」「ああ」

凄く怖い、なんなんだ一体俺が何をしたと言う？

「貴一君ダメですよ。ヴィータちゃんだけ先に返しちゃ」

「え、だってシャルル。戦略的には・・・これが一番」「だから？」

「あ、あれ？」

「だから心配かけちゃダメじゃないですか？ただでさえシグナムもポロポロでしかもヴィータちゃんもそうだったんですよ。まあ今お風呂にはいつていますけどね。もうヴィータちゃんが帰還した際に、貴一に勝手に転送されてしまった、なんて言われればそりゃ心配するでしょう」

「アハハハハ。いや、だからあそこじゃ俺がああ、するしか」

「「聴く耳もたん（な〜）」」

そして俺は

「頼む〜心配かけたことは謝るからって！！なんですかその腕は、てかはやてそんな風に車椅子を使用しては・・・うわああああ！レヴァンティンは不味いだろう、シグナム〜」

その後俺は・・・・・・・・一応、二人の願いを一つ聞くと言うことで収まったのだが・・・・・・・・

「これはどう言う事だ！！」

現在の状況。俺自分のベットに居る、左翼はやて、右翼シグナム。俺が何をした・・・

第86話（A・S編三十六話）。赤VS白、あ、決して紅白ではありませんよ

ブ「今回はがんばります、どうも作者のブラックサレナです」

貴「先ほどに、紅 幽鹿様の作品の後書きにいた、どうも星川貴一です」

ブ「あ、おかえり。それで今回はなんかもらったのかい？」

貴「ん？ああ、確かになんかこの封筒…」

ブ「ほう、また封筒。また例の写真じゃないの？」

貴「！！そうだったら…オモシロイネ」

ブ「それでは俺が最初に見てやろう」

貴「あ、ちよつ。まあいいか」

ブ「……」

貴「どうかしたか？」

ブ「…そのだな、一応幸夜も男の娘なんだから、女装させていじめるのは…どうよ」

貴「はい！？」

ブ「見てみるがいい、貴様が完全に幸夜にしがみつかれていて、さ



らにメイド服で上目でちょいと泣いている、これはどう見ても「チエスト!!」はがしっ!!」

貴「な、なんで俺が慰めていた時の…てか結局写真か!!ちっ、ソル座標固定」

「設定、紅 幽鹿…スタンバイ、OK」

貴「アンロック、並びにFinalモードIX!!」

「「ツインバスターライフルモード」」

貴「破壊する!!」

ブ「までも、撃ち込んでしまった…これは…私が受けたこともあり  
ません。どうかご冥福を…」

貴「ふん、後は幸夜に任せるぞ」

ブ「あ、あゝあ。それでは」

貴・ブ「バイバイ」

廻鉢鏡奈々話（A - S 編三十七話）。ネタばらしっぽいお話（前書き）

いぢぢぢ…… ぼろ ぼろ けろ。 はーん

廻鉢銃奈々話（A・S編三十七話）。ネタばらしっばいお話

どうも初めまして、それともこんにちは？星川貴一です。現在美少女もとい美人さんと一緒に寝ています……誰か助けて！！

「あはは、貴一君、それはダメやで〜」

なにを言っているんですかはやてさん！？

「う〜ん、貴一離れるな〜」

シグナムさんこれでどうやって離れることが出来るんですか？

「マイロード起きてますか？」

「ああ、動けないが話せる。現在何時だ？」

「はい、現在朝の五時半です。昨日のなのは殿達のデバイスについてですが」

「ああ、そうだろうな。俺の魔法が敗れるぐらいのデイベインバスター……それにシグナムと張れるほどのスピードと火力。短時間にしては格段に強くなり過ぎていた。」

「は。それなのですが、ドクターが噛んでいそうですね、それにプレシア殿も……」

「天才が二人か……これは難題だな。俺も術式解放を使うことになるなんてな。しかしあんな魔法を使えば普通デバイス又は魔導師

がもたない筈、しかしなのには疲労は見えなかった。しかし魔力は無かった。カートリッジシステムについては」

「それは後でサンからあるかと。ムーンも昨日の警備では何もなかったと」

「お前らの特製ラインで繋いだのは正解だったかな」

「はい、そのようです。しかし未だにライトアンドダークネスは魔力消耗が激しいようです。我々のAIEも。」

「そうか、あのシステムの調整は・・・まあ付け焼刃が大丈夫だろう」

「う、うん・・・」

「すまんソル。後でだ。そろそろフロイラインと騎士が起きそうだ」

「一緒に寝てらしたのですか・・・お邪魔でしたか」

「お前も後でメンテだな。たく、それじゃあお前はスリープモード」

「イエス・マイロード」

さて、この二人が起きる前に、どうにかするかな。

Side フェイト

私達が帰還した時お母さん達がいそいそとしていたけど、どうかしたのかな？そして私は艦長室に入った。そしてそこにはグレアムさ

んと、あの使い魔の猫さんたちが居ました。

「それで、どういふことかのうギル・グレラム!!」

貴一君のお爺さんが怒っていた、なんだがよく分からないけど、グレラムさんがなにかしたのかな？

「ワシは、ワシはある男からある事を教えて貰いました。それが闇の書の次の主、十年前の事件から二日後です」

そして私達はこの闇の書の本当の事件を聞いた。

Side out

Side ギル・アルバート

「私はあの事件でクライドを、自分の部下を自分の手で失ってしまった。だからこそ今度こそ闇の書の破壊を私は追い求めていく事を決めました。そんな時でした、ある男がこの少女が次の闇の書の主だ、そう言われしました。最初は疑いちゃんと捜査もしましたそしてその結果」

「見つけたんですね、闇の書の主を。しかし何故言わなかったのです？管理局に直ぐに言えばそれで」

「そうでは無さそうなのう。何故報告しなかったのかはワシが言った方が良いかのう、グレラム殿」

ここまでくればワシになら理解できる。管理局の考えならば。

「少女一人の犠牲で、闇の書と言われたロストロギアを破壊できるのだから安いもの。間違いは無いかのう?」

「そんな」「酷い」

なのは殿それにフェイト殿はそう言う。その通りじゃな。

「そ、そんなはず!!」

「クロノ君、黙っていなさい」

「で、ですが艦長」

「黙って!!」

ふむ、やはりリンディ殿ならば分かるようじゃのう。

「あの子は、天涯孤独でした・・・だから私は少ないと決めた人生を少しでも「いい加減にせえい!」・・・んっ」

「何が、少ないじゃ。それはお主が決めたことであろうが。その少女は何も知らない。それは単なるお主の復讐のための道具と一緒にや!!」

「それじゃあ、貴一はもしかして」

「うむ、ワシもそう思っのじゃ。」

「だったらなんで私達にお話してくれなかったんだらう・・・」

「それは」

その時、後ろのに居たクロノ殿がこういった。

「それはたぶん今回の場合は完全に犯罪になるからだと思う・・・  
フェイトの時は事情が事情だから何とかなったけど、今回は完全な  
蒐集活動及び、管理局への攻撃。これはすべて犯罪行為になる。だ  
から貴一はなのはやフェイトたちを巻き込みたくなかったんだろう」  
うちの孫はホントのバカのようじゃな。しかし流石は我が孫じゃ。

「それなら尚更O H A N A S H Iなの!!」

その時なのは殿が大きく手を挙げてフェイト殿も同じようじゃ。ま  
ったくホントにバカな孫のようじゃ。そしてその時通信が入った。

『すいません、アルバート博士。』

ワシを呼んでる様じゃのう。

「うむ、今行こうぞ。それではワシは一介の技術者に戻るとしよう。  
後はお主等で決めるが良いぞ」

ワシはそして出て行った。

Side out

Side リンディ

「それではギル・グレアム提督並びに使い魔の二人を一時的にこの

アースラにて保護。それでよろしいですね？」

「うむ。あ、その前にクロノ」

「はい」

そしてクロノ君にデバイスのようなものを渡し

「私が言えた義理も何も無い、しかし力が必要ならばこれを使うといい。デュランダルだ、これが。」

「はい」

そしてギル・グレアム提督は部屋から違う部屋へと移送された。

「はあくまさが、この事件がこんなことに」

「そうね、エイミィ。だけどグレアム提督の話からだ、貴一君は既に闇の書についてある程度の知識があったことになるわよね」

『それはたぶんサンじゃろう』

そして通信越しからギル・アルバート提督が教えてくれた。

「サンですか」

『そうじゃ、サンにはハッキングの能力が強すぎる。それに貴一の洞察力から導いたようじゃ』

「やはり貴一君は・・・う、う、う」



「貴一はやっぱり私達のこと嫌いになったわけじゃないんだ・・・」  
なのはちゃん泣き始めてしまった、それに釣られてフェイトちゃんもそうだ・・・貴一君これはホントに高くつくわよ。

『はあくそこの泣いてしまっておる二人。プレシア殿からお知らせなのじゃが』

「「うわああああああん」「」

『後にするとしようぞ。それよりもその少女については調べ終わってたかのう』

「あ、は、はい。八神はやて、この地球のさつきクロノ君たちが戦っていたところの真下のお家の子です・・・はい。」

『灯台元暗しじやのう。』

side out

廻鉢銃奈々話（A・S編三十七話）。ネタばらしっぽいお話（後書き）

それでは次回もお楽しみにバイバイ

第八十八羽（A・S編三十八話）。大決戦の前だよ（前書き）

マジコイの続編だと…

第八十八羽（A・S編三十八話）。大決戦の前だよ

Side プレシア

結局あの後二人が泣き止むのを待って話となった。

「二人ともどうだった、システムについては？」

「はい、私達はなんとも無かったんですが」

「バルディツシュ達は・・・」

「そうね、そこで二人に相談なんだけど、あなた達も少しリスクになるかもしれないけど」

「なにか方法があるのお母さん」

「ええ、一つだけ。今現在使用されているCK792。あなた達が使ったのが私達が改良したモノがCK79Xだから、まだCK792は健在なの。だけどこれには貴方たちの様な子供が使用すると発育に問題が」

「お母さん入れて。私のバルディツシュに。たぶんそれが無いとシグナムには勝てない。」

「お願いしますプレシアさん。私達はどうしても貴一君やほかの人たちともお話したいから」

「そう言うと思ってすでに、組み込んでいるわ。それに修理も完了

「してきているし」

「そうなのかよ、相変わらず仕事は速いんだなあんだ」

「うふふ、そうねアルフ。あ、そうだフェイトそれになのはちゃん。どう今からご飯にでも私も丁度休憩時間だし」

「うん」「はい」

「それじゃあ行きましょう、フェイト」

そして私は娘を連れてアースラの食堂に向かった。

Side out

さて、現在俺らは作戦会議中。はやてはザフィーラと共に散歩と買い物だ。

「今回は大きくやられたな」

「ああ、そうだな。すまない」

「いいさ。それにしてもどういう仕組みだったんだ、サン報告を」

「はい、主。それでは昨日の夜にかけてアースラのコンピュータに進入した際の成果です。まず、グレアム提督は保護だそうです」

「気にならない、次」

「はい、あとプレシアさんの所からです・・・CK792とCK7

「9Xです」

「ん、なんだそれ？」

「名前からにしてデバイスの部品かしら？」

「さすがシャマル。その通り、これがミッド式のデバイスにベルガ式のカートリッジシステムを導入させた物のようです。それで使われたのが」

「CK79Xだな」

「はい、そのようです。けどこのシステムにも問題があったみたいです。なんでも魔導師の負担が無い分デバイスが大変なことです」

「だから、テストロッサは・・・」

「なるほど、ご苦労さんだ。サン」

「いえいえ、それでは少し私は寝ます」

「ああ、スリープモード」

「それでどうしますか、貴一君？」

「そつだな、どうする二人とも？」

「貴一・・・すまない私はテストロッサと決着をつけたい。ちょうど一勝一敗だからな」

「ああ、あの高町なんとかにも勝ちたい。一回目をあんなに勝っていたのに。まさかの撤退だしな」

「わかった、それじゃあ。今度作戦を説明する、ザファイラには後で言っといてくれ。それでは作戦だが、今回はヴォルケリッター全員で、出撃してもらう。シャマルは蒐集活動に集中、三人は各自でしかしあくまでも蒐集活動を優先してくれ。」

「ちょっとまってよ貴一、それじゃあここはどうするんだ？」

「ヴィータ、それは俺が残る。だから安心して行って来い。」

「よっしゃあわかったぜ。」

「それでは夜、頼んだぞお前ら」

「」「御意」「」

「だからシャマルは似合わないって」

「酷いです」

Side リンディ

さて、これで終了・・・だけど

「驚きでしたね、艦長。まさかグラム提督がそんなことを考えていたなんて」

「ええ、そうね」

そう貴一君が何故私達に敵対したのか、それはグレアム提督の計画。これに管理局の協力があつたら我々はいいように使われてしまうからだろう。

「だけど貴一君。どの道このまま行けば犯罪者ですよ・・・」

「そうね、確かにグレアム提督の作戦は酷いしかし、一番の闇の書の対する対策でもある。あの無限から離脱する方法・・・」

「艦長、少しはお休みください。クロノは私が見ときますから」

「そうね。お願いねエイミィ」

そして私は仮眠室に入り考えた。貴一君のことだからたぶん蒐集活動させる訳もあるはず。だけどどうやって？確かに蒐集活動をしなければその所有者は段々リンカーコアが汚染されてしまう、だからヴォルケリッターは動く。これはグレアム提督の情報、まさかあの無限図書の中に最高評議会モノがあるとは思わなかったけど・・・。だとすると貴一君はその汚染を止めるために、そうすると貴一君彼方はどれだけ計算高い子供なの。

Side out

さて、それでは始めるとしますか。

「それでは今日の活動を始める。それでは各自転送」

「行って来ます、主はやて、貴一」



「それじゃあな、はやて、貴一」

「頼んだぞ貴一」

「それではですゝはやてちゃん、貴一君」

「みんな、きいつけてな。それからみんなちゃんと帰ってくるように」

「」「」「御意」「」「」

そして各自の転送が終った。

「行っちゃったな」

「そうだな、それじゃあはやて、もう寝るか？」

「う、うえ！！貴一君いきなりどうしたん！」

「は？だってはやてはもう寝る時間だろう？俺はこれから警備だし」

「あ、そういうことね。うんうん、今日は皆帰ってくるまで起きる。それに私、主やし」

「そうか、それじゃあ、っん！！」

「マスター、どうやらこちらにも来たらしいぜ」

「よし、行くか・・・ん？」

行こうとしたら、はやて服を掴まれてしまった。

「どうかしたか、はやて？」

「あつ、えつと、その、貴一君気をつけてな」

「ああ、行ってくるよはやて」

俺ははやての頭を撫でて出撃した、まあこの前と同じ家の真上だが、  
ほう今回は

「正に決戦だな、クロノ！！」

「グレラム提督から聞いたよ、君は彼女のために「何を勘違いして  
いる！！」「え！？」

「いいか、管理局。俺は、俺のために動くそんな男の事なぞ知らん  
しその少女やらも知らん！！ソル！！」

[Set up]

「アンロックー！！」

そして俺はマントをなびかせて、そして俺はこう言った。

「クロノ、それにユーノ、今回はまさか……………プレシアさん  
まで出てくるなんて驚きですが」

「ええ、私もちよつとした調査よ」

「それじゃあ、一つだけ改めて聞こう。彼方達の正義は何だ？」

「僕は・・・信じる事を」

「私はそうね、家族かしら。それを気付かせたのはあなただけど」

「僕は・・・この管理局を！！」

皆が皆、正義を持ち俺を止めに来た。

「八神はやてを重要参考人としてこちらで保護する」

俺は刀を抜きながら

「させねえよ、絶対に。この俺が。連鎖の鎖は俺が破壊する、そしてはやてに日常を教えてやる！！」

「貴一。君は・・・」

「辞めておきましょうクロノ君。今の貴一君は私達が束になって勝てるかどうかですから」

「ああ。いくぞ」

そして俺は三対一の勝負が始まった。

第八十八羽（A・S編三十八話）。大決戦の前だよ（後書き）

前書きは気にしないでください。そして次回で会いましょう

題鉢銃旧話（A・S編三十九話）。大混乱、だから無防備にもなるのだ（前書き

あらら、カオスヘッドがおもしろい。

題鉢銃旧話（A・S編三十九話）。大混乱、だから無防備にもなるのだ

Side シグナム

うむ、今回はまだ気付かれていないようだ。既に蒐集する相手は我々が完全に沈黙させた。これならば後は蒐集するだけだな

「シャマル頼むぞ。ザフィーラはシャマルの援護を」

「ああ」

「それでシグナム、あたいらは？」

「ああ、私達は奴らが来たら迎撃だ。今度は負けられんぞ。」

「ああ、今度こそあの高町なんとかに勝ってやる」

「シグナム、来るわよ・・・数は三」

「よし、行くぞヴィータ！」

「ああ、それじゃあ行ってくるぜ」

そして私達は飛んだ、出来るだけ蒐集ポイントから離して戦闘をすればその分我々は有利だ。そして来たのは。

「へっ。やっぱしお前らか」

「・・・テストロッサ」

やはり彼女だった。テストロッサは直ぐに周りを見て、使い魔を放した。

「あ、お、おい、シグナム!？」

「いいんだ、あっちには我らの盾が居る。」

「シグナム……」

テストロッサが私を呼ぶ。そうか彼女も私との決着を望んでいるらしい。

「テストロッサ、着いてくるがいい」

「それじゃあね、なのは。」

「うん、いつてらっしゃい」

そして私は上空に上がった。

Side out

さて、攻撃でも

「轟きなさい雷よ」

「く、初っ端から飛ばすな、プロテクト」

現在、俺……押され気味。

「今よ、ユーノ君」

「はい、チェーンバインド」

ち、今度は包囲型のバインド。ならば

「開幕を告げる。天の鎖よ」

そして俺は鎖と鎖をからまわした。しかしまだもう一人居るんだよ、これが。

「これでどうだー!! シュート」

俺の上にて魔弾、しかし。

「甘い、ソニックムーブ。さらにEX」

俺は移動しながら、六本の刀を持った。相手はそれに気付いたのか。

「ユーノ君さつきと同じバインドを。私は少し無茶でもしようかしらっ？」

「まだ、病気は完治じゃないんですよ」

「あら、それならおとなしく捕まってくれる？」

「ならば、一撃で終わらしましょう。奥義」

「く、ならば。あんまり得意ではないが。ディバインシュート」



そしてクロノ周りに青く光るものが現れた、これってなのはの魔法だったよな、たしか誘導弾の強化版。

「ちっ、しかし・・・驚掴み!!」

そして最初にユーノの間合いに入り、一太刀で六撃与えて、ユーノはダウンしかしその瞬間。

「落ちなさい、天の怒りよ」

ってそれ使う人が違いますよ、プレシアさんと、思いながら俺はその雷に右手を挙げて。

「コンプレクシオ 掌握・・・術式兵装『アギリタース・フルミニス 疾風迅雷』」

「え、嘘。私の魔法が」

「ギル爺の戦いから何を学んだのですか？」

そしてプレシアさんも直ぐに手刀で気絶、残りは

「やはりお前が最後か？」

「く、君も拘束して、今度こそこの手で闇の書を破壊する!!」

「がちやがちや五月蠅い奴が。いくぞ」

「「シュート」「

二人とも一斉撃つ魔弾。しかしそれでも互いは引かず逆に接近する。

「どうしたクロノ。お前はあまり接近は苦手だろう？」

「ふん、甘く見ないでくれ。はっ！！」

そして俺は押し返した。

「面白い、面白いぞクロノ。お前は確かに俺よりかは遙かに弱い。それに敬意をもって「五月蠅い、シユート」・・・なっお前。」

「ちっ、面倒な奴だな。しかしそれもまたいいか。いくぞクロノ、俺はそんなにやさしくはねえからな。ソル！！」

「「術式解放。Tha・END」」

「すべてをも飲み込め」

そして俺は今の周りについている魔力を外に散布してクロノを吹き飛ばした。そしてクロノの声がすると思えば思いの外それは違う声だった、そして俺は見たのは・・・結界も張らずに戦闘している紅白の魔法少女二人だった。

Side シグナム

やはりこの前のモノでは程の力はないようだが、少なくともスピードならば私と同じなのも知れんな。

「シグナム、なぜ自分の主が滅んでしまう事になるかもしれないのに」

「ふん、そこまで分かっているのか。今も主は闇の書の犯されているのに」

「え!？」

「いいか、テストロッサ。闇の書は蒐集活動をしなかった時間を主の未熟なリンカーコアによって形成されていたのだよ。だからこそ私達は蒐集活動もする。話がすぎたようだな。レヴァンティン」

「く、バルディッシュ」

そして私達は戦い続けていた。

Side シャマル

「あ、来ますねこちらにも、ザフィーラ」

「ふ、そのための私だ」

そして使い魔のような者が現れた

「ちっ、今回はお前か」

「ふん、行くぞ」

そして私は蒐集活動に励んだ。

Side ヴイータ

「ちっ、なんなんだよ。お前・・・はあ、はあ。」

「ヴィータちゃん・・・だから、私はお話できれば、それに貴一君の事」

「うるせい、管理局なんて信用出来るか。私が信用しているのははやてと貴一とそして仲間だ!!」

その時念話が聞こえた

「（ヴィータちゃん。ちゃっかし蒐集成功です。ザフィーラのおかげで完璧です。これから撤退します。シグナムは・・・ほっときます。）」

「（わかったそれじゃあ、後退するけど。こいつ逃がしてくれるかどうか微妙だぞ）」

「（安心して、このポイントに行けば海鳴の空にです。さすがに管理局もこんな所では何も出来ないでしょう）」

そして私は後退運動をとり始めた。

「まだなの。どうしても聞いて欲しいの、レイジングハートってヴィータちゃん!!」

「ふん、今は逃げさせてもらうぞ・・・高町なんか」

「なのは!なのはだよ。それに待って」

「待つかよ、アイゼン飛ばせ」

「Ja」

そしてあたいは転送ポイントに入り、海鳴に着いたが。

「シユート!!」

おいおい、結界まただぞ。あのバカ、くそ、結界のモーションを取ればあたる、しょうがない。

「プロテクト、そして「結界」・・・あ、す、すまねえ貴人」

そこにはちよいと不機嫌の貴人が居た。

Side アリサ

まったくなんなよ。今日も夏休みだっていつのにすずかと一緒に習い事って。

「ねえアリサちゃん、あれ何？」

すずかが指差す方向を見るとそこには、赤と白の何かが追いかけてこしているものだった、しかも空の上で。そして次の瞬間。私達の外に歩いて人たちが消えて、建物もなんか寂しくなった

「一体どうなっているのよおおおおおお!!」

その時私はそう叫ぶしかなかった。

Side out

題鉢銃旧話（A・S編三十九話）。大混乱、だから無防備にもなるのだ（後書き

今回は次回予告をします、次回『その目、誰からの視点？』次回で会いましょうバイバイ

第九十羽（A・S編四十話）。大混乱はまだ終わらなさそう（前書き）

記念すべき九十話、されど終わらなさそう……

第九十羽（A・S編四十話）。大混乱はまだ終わらなさそう

まったく、先に普通結界だろうに、まあさっきの攻撃ならば仕方が無いか

「すまないな、貴一。だけどお前の敵は？」

俺は現在伸びている三人の方向を指差した。

「……………ああ、なるほど」

「まったくしかし「貴一君!!」……………なにかな管理局のお嬢さん」

「……………お話、聞いてもらうのだから、私は全力全開で行く、だから貴一君も来て」

「何言つてやがる、お前の相手はあたいだ！貴一下がっていてくれよ」

「なに言われなくてもそうするさ。それにまだ動けるようだしな。そうだろクロノ？」

そして伸びていた所から一人だけ立ち上がった魔導師が居た。既にリンディさんが他の人を転送しているようだが。

「貴一、君を逮捕する。」

「来いよ。」



そして俺達はなのは達から距離を取った。二人の戦闘はまた再開し始めた。

「クロノ、どうするんだ完全にさっきの勝負ではお前の負けだったか？」

「ああ、だから少し卑怯だけどなのはを見習ったよ」

そう言うと俺の周りにチェインバインドの強化版が俺の手足、さらには首にまで巻かれた

「」「マイロード、これは今までのとは違うようです。魔力の質も濃さも……」「」

「なるほど、さっきのは本気ではなかった。そういうことかクロノ？」

「君がいつもしている事だろう。後は一発でも君に入れればいや、君が気絶すればいいだけだ」

そして俺に近づいてきたとき、いきなり通信が入った、しかもそれはアースラからだった。

『クロノ君、大変民間人の子供が二名この空間に迷い込んでしまっているわ。たぶん結界を張る前なのはちゃん達を目視してしまっ  
たみたい』

俺はその言葉で不意に思った、まさかまさか………あいつらか？

「な、なんだって、か、母さん。それは何処辺りですか、直ぐにでも保護を」

その時爆発音が聞こえた、それはなのはとヴィータの戦いの中でのビルの破壊、しかし俺は見逃さなかったその下に居た、お姫様たちを。

Side アリサ

まったく、一体ここはなんなのよ。携帯も繋がらないし。

「ねえアリサちゃん、さっきの白い何かってあれじゃない？」

「あ、ホント！！それに赤いもの居るわね、だけどなにかしらねあれ？」

「あ、動き出したよ」

私達はそれを追いかけ始めた、そしてあるとき、それが出した光が私達の前にあるビルに当たり崩れてきた。

「え……………」

「きゃ、きゃあああああああつあああああ」

私達は状況が分からずただただ、走ることすら出来ずに居た。そして当たると思っただ瞬間私達は、二人とも空に飛んでいた…………私達の騎士<sup>ナイト</sup>がそこには居た。

Side out

「くそがああああああ！！！」

俺はフルに魔力を上げてすぐに鎖を解き。他の奴らなど見ずにすぐさまソルにチャンジして

「な、なにを。」

そして俺はソニックムーブよりも速いであろうスピードでアリサ達を空へと飛ばした。

「え、え、ええええええええ！！！」

「耳元で騒がないでくれよ、アリサ」

「貴一君だよな？」

「ああ、そつだよすずか、大丈夫か二人、怪我は？」

「ないわよ、それよりもなんで私達飛んでいるのよ！！！」

五月蠅いので俺は近場のビルに降りた。

「あんた、一体……」

「さて、後は管理局に任せるかな。ホントにお前ら怪我はないんだな」

「な、ないわよ／＼／＼／＼／＼」

「ありがとう、助けてくれた／＼／＼／＼」

「なに、“元”お前らの騎士だからな。」

「「え……………」」

俺はそして、すぐクロノところに戻り掴みかかった。

「お前ら、管理局の癖に何やってやがる!!!」

「ま、まで、落ち着いてくれ。今、君が助けた二人は我々が保護するさい……………」

クロノはとっさに俺から離れた、しかし俺は直ぐに天の鎖をクロノに巻いた。

「ま、またこれ!!!く、くそ放れない」

「お前は、後だ。それよりも」

俺はビルを見た、その時なぜかなのはが二人を保護していた、あれヴィータは？

「よ、貴一。」

そして後ろからヴィータが来た。

「どうしたんだ、お前？」

「ああ、なんかあの高町がああ民間人をみたら顔が青ざめたからあ

たいが撤退したように見せた。それにもうシグナムとあの黒い奴の勝負も終わっているみたいだしよ、今回は蒐集活動成功だったようでもみんな今撤退しているから、あたしらも帰ろうぜ」

「そうだな『待つて!!』はあゝ」

「先に帰っているぞ、貴一」

「了解だ。後でな」

そしてヴィータは転送された。さてお話ですかね。

「リンディさん、どうも」

『あなたが助けてくださいった二人をこちらで保護させていただきました、どうもありがとうございます』

「何を勘違いしているんですか、俺は“知人”が居たから助けただけです。それにこれは管理局の局員のせいでもあるんですからね？」

『はい、それは重々承知しております。』

「それでどんな用ですか？クロノなら今必死に鎖を解こうとしていますし、他の二人はそちらが転送したでしょう。他にになにか？」

『グレアム提督の作戦を聞きました、だからあなたはその闇の書の女の子を守るために「なんとも言わせないでくれ」……そうですか。』

「俺は闇の書の主の騎士だ。それではリンディさん。それから本拠

地が分かったからって勝てるを思っているなら甘すぎるよ」

俺はそう言うとしたのはやての家に戻った。

Side リンディ

甘すぎるか……

「エイミイ、その家にアクセスは？」

「難しいですね、貴一君たちが戦闘中に入ろうとしてもあり得ないほどの結界ですし、それに解除の相当難しいですよこれ。」

「そうなのね。後保護した子達は？」

「はい、なのはちゃんがこちらに転送してくれました。なんでもお友達だそうです……」

「そうなのね。わかったわ。それではその子達を艦長室に。勿論なのはちゃんとフェイトちゃんも連れてきてね、と言ってもフェイトちゃんは難しいかな？」

「そうですね、さっきの戦いは負けてしまいましたし、それに身体共にポロポロでしょうから。あ、今通信が、どう大丈夫フェイトちゃん？」

『はい、やっぱりシグナムは私を殺す気は無かったです。今は普通に歩けますけどそのお母さんは？』

「ああ、プレシアさんも貴一君の戦闘で少し、気絶していたぐらい

だから。大丈夫だし、それよりもこの子達知っている?」

『アリサにすずか!?!』

「そうなのね。それじゃあフェイトちゃんも艦長室まで来てくれる」

『はい』

「はあ、まさかフェイトちゃんも友達でもあるなんて・・・」

「ねえエイミィ。それじゃあ貴一君の友達でもあるかもしれないわね」

「そうですね・・・」

そしてその時。

「なのはです。入ります」

さて、これからが大変でしょうけどがんばりますかね。

第九十羽（A・S編四十話）。大混乱はまだ終わらなさそう（後書き）

今回は予告、『それは俺（私）が決める』それではバイバイ



内九拾位置輪（A，S編四十一話）。エンディングが見えてきたぜ！！（前書き

さて、ネタが尽きた。

内九拾位置輪（A's 編四十一話）。エンディングが見えてきたぜ！！

さて、帰って来たもののどうしたんだこの状況？

「ああ、まちい！！シグナム、それは後や！」

「あ！危ない。ありがとうございます主はやて」

うん声がかけにくい、だって今玄関に居るのにここまでシグナムとはやての声が聞こえてくるって。しかもキッチンから。

「ご苦労だったな、貴一よ」

「お、ザフィーラか。どうだ蒐集の結果は？」

「大成功の様だ。我々が帰還して数分でシグナムが帰ってきてな、後はお前とウィータだけだったのだが。シャマルから面倒な状況だと言われてな、直ぐにでも行ける様に準備はしていたがなんと無くてよかった」

「当たり前だぜザフィーラ。あたいと貴一が居るんだからな。ただど……」

俺らが現在ただいまを言えない理由の彼女らを目で見ると。

「……う、これには私は黙秘としよう。されどもう明日には」

「ああ、そうする気だ。飯の後はやてに説明する」

「そうか、我々も期待するぞ。」

「それじゃあ、埒が明かないから………ただいま」

そして見事は慌てたような食器の音が聴こえて、はやては直ぐこちらに来て、もじもじしながらのシグナムの登場。

「お、おかえりなお二人とも」

「あ、ああ、ただいまはやて。それとシグナム？」

「く、い、いや。お、おかえりなさい………// // //」

「お、やっとシグナムと固くなくなってきたな、これは良かった良かった。それで今回の飯は？」

「ほな、今から準備にかかるで」

さつきまでのあれはなんだったんだ？

「（相変わらずの貴一君ですね。お二人とも頑張ってください、あれからシグナム、主だからって引いては勝てませんかんらね）」

一人の参謀が笑っていた。

Side リンディ

さて、来て貰ったのだけど。

「初めまして、私はこのアースラの艦長をしています。管理局、リ

ンディ・ハラオウンです」

「初めまして、アリサ・バニングスよ」

「初めまして、月村すずかです」

「お二人ともにはまず我々から謝罪を、申し訳ありませんでした。我々の事件の戦闘に巻き込んでしまいました」

「ホントにごめんね、二人とも」

「それよりも!」

そしてアリサちゃんがなのはちゃんのほっぺを抓りはじめ

「なんでこんなこと隠していたのよ」

「ふええええええええ! いひゃいよアリシヤちゃん」

「あ、アリサちゃん落ち着いて」

そしてさらにドアが開き

「失礼します、艦長。ってアリサにすずか!」

「え、フェイトも!」

そして私は、管理局についてと魔法についてそして今のなのはちゃんとフェイトちゃんについて説明した。

「ふーんそれじゃあ、なのは魔法の才能があつた、それで今この管理局って言うところに働いているってことでもいいの?」

「うん、アリサちゃん。そのとおりだよってまたほっぺをつねらな  
いでええええ」

「うるさい、こんなこと黙っていた罰よ」

「ふえええええ」

「ねえフェイトちゃん?」

「うん、なにすずか?」

「あのさ、貴一君は。私達貴一君に助けてもらったんだけど・・・」

「「「あ・・・」」」

「「え!?!」」

「そうよ、思い出したわ。あいつ、なのは達と同じような衣装でしかも私達の前に来て元騎士とか言っていたから。」

「「「あ・・・」」」

「どうかしたの二人とも?アリサちゃんの言う通り私も不思議で。それに貴一君はなんでここに居ないの?」

「えっと」「それは」

二人が言えない様な顔をしていた。それもそうだがこれは事件に関わることだけだ。

「アリサちゃんにすずかちゃん、これはね私の独り言だから気にしないでね？」

そして私は独り言の如く今までの事件について話した。彼女達もこの三人の友人である、今現在この事件に事故とは言え入ってしまったのなら話すしかないだろう。

「ふーん、それじゃあ貴一は今、あなたらの敵なんだ・・・」

「アリサ、それは「ふざけないでよ!」「え!?!」

「いいわ、なのは、フェイト、あの阿呆を徹底的に追い詰めて誰か勝手に私達の騎士を辞めて言いなんて言ったかおもいしらせてやるわ。それでいいわね三人とも」

「うん!!」「」

三人で頷いた後すずかちゃんが私に手を挙げた。

「どうしたのすずかちゃん？」

「そのう、今の話で貴一君がやってることは聞いたんですけどなんでそんな事を? 貴一君は私が思っている男の子ならそんな子じゃありませんし・・・」

そして私はその理由も話した、そしたらアリサちゃんが

「そりゃそうでしょ・・・」

「え？」

「考えてみてください、一回何か盗もうとした人がもう二度としませんって言ったって信用なんてしません、それと同じじゃないですか。それにあのバカらしいでしょね、人助けなんて。だけど勝手にしたのは許せないわね」

「そうね・・・これがその子なだけ」「はやてちゃん!?!」・・・  
え、知り合い？」

「すずかちゃんは急にそう言った。」

Side out

飯も食い終わり、明日のラストミッションについての会議を俺らは開始した。

「よし、明日には決行するぞ」

「せやけど・・・一回ヴィータ達を消すって・・・」

「安心しろよ、俺がバックアップをするから。それに一回シグナムたちを闇の書に戻さないと俺とサンがアクセス出来ない。これが成功したら、はやてお前にかけるぞ」

「そうやけど・・・私が失敗したら・・・」

「主はやて我々は貴方を信じています、それに貴一も。大丈夫です、

「一番最初の貴一の説明の時の作戦を覚えていますか？」

「うん、私が管制人格と話をして説得するだよね？」

「ああ、そうだ。その間に俺らはまずお前らの安全確保の道<sup>ルート</sup>を作る。それから闇の書のバクを解析して破壊する。ちなみにはやて、ちよいと」

俺ははやてをちよいとこっちにきさせて。

「どうしたん貴一君」

俺ははやての肩を持ち

「え、急にどうしたん／＼いやうれしいやけど、みんなの前で／＼／＼」

そして、耳元に近づいて

「安心しろ、お前は、いや、お前の家族は俺が必ず守ってやるから。お前はちゃんと管制人格の奴を連れて来い。この連鎖は」

「私が止める」

「はやて・・・」

「そつやな、せやけど貴一君こいつ言つときは・・・そのもつと」

「あ？何言っているだはやて？」



「あははは、なんでもない、なんでもない。」

「（シグナム、そのガッツポーズは辞めなさい）」

「（く………////////）」

「うん、なんか言ったかシャマル？」

「あ、いえいえ何も言っていないですよ。それで明日は朝から？」

「いや、午後の二時からだ。二時にここで俺が転送用の魔法陣を張るからそれで世界を飛ぶ。それではとは」

「私が闇の書を起動させればいいんよね？」

「ああ、後は任せろ。お前らが次にはやての前に現れるときは、夜天の書の主はやての騎士だ」

「……御意」「」

「それじゃあマスター達は明日に備えて寝くれ。このムーンが警備に当たるから。それでは主これでOKだな」

「ああ、頼んだぞムーン」

「イエッサー」

そして俺は部屋に戻りソルの最終チェックを開始した。

内九拾位置輪（A's編四十一話）。エンディングが見えてきたぜ！！（後書き

どうしよう、ネタが尽きた。

第九十二話（A's編四十二話）。今日と言つ朝（前書き）

ユキが降ると道路が凍ってしょうがない。

第九十二話（A's編四十二話）。今日と言つ朝

Side リンディ

「それで、すずかちゃんはその子と話したことがあるの?」

「はい、ですけど一度だけ。海鳴の図書館で一度お話してそれで友達に」

さすが、小さい子だからすぐにお友達になれるわけね。ってことは

「それじゃ、今まで貴一君は一度も海鳴市から出ていないことになるわね。・・・わかった、ありがとうそれじゃあ送りますので住所を「ちよつと待ってください!」なんでしょうアリサちゃん?」

「お願いがあります」

アリサちゃんは私の前に来ると

「そうですね、今回は私達が巻き込んでしまった身ですから出来るだけいいでしょう」

「今日は、このまま帰りますけど、貴一が現れたとき知らせてここに来させて下さい。お願いします」

「お願いします」

アリサちゃんとすずかちゃんが私に一礼した・・・ここにも貴一君の被害者が居たようね。しょうがない

「わかりました。それでは貴一君が現れた時にここに。それでは今日はなのちゃんも帰っていいわよ。」

「あ、はい。それじゃ行こうかユーノ君」

そしてなのちゃん達が部屋を出た後にプレシアさん呼んだ。

「失礼します」

「ええ、いらつしゃい。ごめんなさいね、ホントならフェイトちゃんたちと一緒に有休のはずなのに」

「いいんですよ。それにフェイトも私がここに居る時は部屋で寝てくれていますから・・・贅沢を言うのならフェイトと旅行がしたいけど、フェイトにも言われちゃったのよね。大丈夫それにこれで休むなんて言ったら怒るからね母さんって、それで用件は？」

「ええ貴一君のデスクの解析についてです。」

「それね、今の所分かっているのは貴一君のデバイスに何か新しいものが加わっていることぐらいです。その名も『ザ・ビースト』」

「ザ・ビースト？」

「はい、意味ならば獣。それぐらいですね、アルバート博士からは貴一君のデバイスの個々の資料はありましたが、元々の仕組みはアルバート博士が、応用をそして自分に合わせたのは貴一君。だから分からないものが多い」

「そう……ありがとうございます。」

「クロノ君ですか？」

「ええ、最近休んでいないようで。」

「それは貴方も同じだと思うわよ。貴方もクロノ君も今回に関しては肩を張りすぎているわ。闇の書、これが今回の事件のすべて」

「ええ。それにクロノ君の場合は、グレアムさんの事もあるから」

「うん、そうね。師匠なんですよ」

「ええ、だから余計に、自分がどうにかしないといけないと思っ  
ているのかもしれない。それに私も」

「そう、それじゃあ私は戻るは。それからエイミィに休むよう言っ  
とくから」

そしてプレシアさんは艦長室を出た。

Side out

さて、今日は決戦にもなるかもしれない朝がやってきた。今日で終  
る、いや終わらせる。カレンダーを見れば八月のすでに二十二、案外  
ギリギリの計画だった。俺は最近していなかった朝の鍛錬をするた  
めに外に出て、結界を何十にして張った。これで感知されない。そ  
して俺はこう言う

「トレースオン」  
同調開始

今は自分の体のチャック、そして次にソルジャー、サン・スピリッツ、ムーン・ソールのメンテナンス。家では無いから軽い俺の魔力での回復のみ。

「マイロード、いよいよです」

「今日は私が働きに働かないといけないからね。それにムーンも頼むわよ」

「何を当たり前の事を言っている。今日のための俺の空間魔法の特訓だぞ、まあ確かにこのままうまく行けばプランはBで終わる」

「ああ、そうだ。プランSは俺らだけの作戦。絶対に成功させる。そのためにまず」

「今日は二百ぐらいにしますか主？」

「そうしてくれ、行くぞ。投影開始<sup>トレスオン</sup>」

そして俺は一本の刀を投影する。これはライトアンドダークネスの刀に似ている。最初は最低限の動きでかわしそして受け流す。最初は十人、次は二十人。どんどん相手が増えて動いてくる。それでも俺はそれを止めない。一回でも止まればただの的だ、そして五十になつた時に俺は攻撃を始める

「主、五十人になりました」

「了解、ソル、セットアップ」

「イエス・マイロード」

俺はセットアップして、最初は刀で相手を切り伏せる。それを続けて不意に投げる。そしてさらに投影する。

「トレスオン  
投影開始」

今度は干将・莫耶、これでさらに切り倒す、そして残り百人になった時に俺は右腕を高く上げ

「トレスオン  
投影開始。さらにトリガー・オフ投影装填」

「そして全工程セット投影完了、これこそが『射殺す百頭』（ナインライブズブレイドワークス）！！」

そして瞬時に残りのマネキンが消える。そして俺は気付く。てか、俺って戦闘中は気付かないんだな。

「シグナム、居るのなら挨拶してくれよ」

そこには騎士服のシグナムが居た。

「すまないな、余りにも綺麗だな。声を掛けずらかったんだ。しかし今日は珍しいなこんに朝から早く、しかも家の周りなんて」

「まあ、すでにバれているからな。それに今日が」

「ああ、今日で終わる「違つさ」「うん？」

「今日から始まるだよお前らは。八神家は今日から始まる。」



「ああ、貴一のおかげだな」

「それはどうだろうな。結局の所、最後ははやて、そしてお前らヴオルケリッターだ。お前らに期待するぜ俺は」

「任せろ、だが、そうだ約束してくれないか。成功させるために」

「うん？なんだシグナム改まって」

「これが終わっても、我々は同じ家族だ。それだけは覚えておいてくれ、お前が一人になっても我らが居る。シャマル、ヴィータ、ザフイーラ、主はやてそれに私だ。」

俺は笑ってしまった。

「な！笑うことは無いだろうが」

だってそれは

「何を当たり前の事言っているんだシグナム。俺はそんな大事な事を簡単に忘れるほどバカじゃないよ」

「そうか、そうだよな・・・そうだ貴一、そのよかったら」

「模擬戦か？」

「ああ、最後であり始まる今日の日」

「いいだろう。ならば直ぐに勝負をしよう。後一時間ではやて達も

起きるだろう。」

「ああそれでは行くぞ、レヴァンティン」

「ソル」

「イエス・マイロード。」

そして俺はこれから待っている困難を知らず今日と言つ朝を迎えた。

第九十二話（A's編四十二話）。今日と言つ朝（後書き）

さあ、ここまねやってきました。そろそろ番外編の準備を…

それではバイバイ

第九十三話（A's編四十三話）。プランB始動・・・（前書き）

ちよいとスランプ気味。

第九十三話（A's編四十三話）。プランB始動・・・

そして午後一時五十分になった。これより開幕を告げる。

「これよりプランB最終フェイズに移行。各員準備を」

「私は普段着でええの？」

「ああ、大丈夫だはやて。他も準備完了だな。さてそれでは行きま  
すか。ソル」

「セットアップ」

「Unlock」

俺は今回ばかりはフルにアンサートーカーを解放している。

「続いて、今回だけ限定魔法。」

「」「時空転送魔法解放、ゲート設定完了、座標固定。」「」

「それではお前ら行くぞ、終わらせるぞ、この連鎖を。」

「ああ、我らヴォルケリッターとそして我が名の誇りにかけて」

「はやて達と楽しくいるために」

「主を守るため」

「はやてちゃんと貴一君、そして私達の日常のために」

シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、シャマルの順に覚悟を決め

「私、新たなる主としてやな。」

はやても覚悟を決めて。

「「バルドナドライブ、イグニッション発動」」

そして俺らは世界を渡った。

Side リンディ

『緊急シグナル。高魔力反応、高魔力反応。海鳴市からの反応』

私が仮眠を取っていたときに緊急アラート。私は直ぐにブリッジに戻った、そしてエイミィに現状を聞いた。

「一体どうしたというの？」

「それが八神邸に高魔力反応。これは次元震並みの魔力反応、それなのに次元の乱れありません。これではまるで」

「単独の…転移魔法。それも世界を超えるほどの」

「艦長、八神邸の結界が消失しました。生体反応もありません」

まさか、この前の蒐集活動で闇の書が完成してしまったの・・・それならば何故転移を？

「艦長、これは一体！？もしかして闇の書が発動したんですか？」

その時慌ててクロノ君が入ってきた。

「事が急変しました。直ぐになのはちゃん、フェイトちゃん、プレシアさん、それにアルバート提督、それにあの子達も呼んでエイミィ。クロノ君は戦闘態勢の下待機。これよりアースラは各員が集合したら、貴一君たちを追います。エイミィ」

「既に始めています。頑張ってください」

そして最初に来たのは

「何事じゃ、リンディ殿」

「はい、貴一君たちが転移しました。」

「ふむ…そうかならばエイミィ殿ワシに解析を回すのじゃ。貴一のことじゃジャミングはかけておる。ワシが解読する」

「あ、は、はい」

そしてアルバート提督は尋常では無い速さで解読を始めた。これがアルバート提督の本懐、アースラのメインコンピューターよりも速い解析力。

「リンディさん!!どうしたんですか」

そしてなのはちゃんたちも来た。

「遅れました!それでどうしたんですか?」

「ええ、緊急事態よ。」

テストロツサ家も来た。これで全員集合。

「これより我々は貴一君たち闇の書を追ってアースラを移動させます。魔導師は各員セットアップして待機。アリサちゃん達はここに」

「「「「はい」」」」

「プレシアさんは、お願いできますか？」

「ええ、今すぐにアルバート提督の手伝いを。」

「ありがとうございます。それではこれより我々の任務は終盤に入ると思われます。」

私はそう言って艦長席に座り指示を飛ばし始めた。

Side out

俺らはその世界に到着。ここは何も生物がない出来たばかりの世界、と言っよりも惑星大きさは月位しかない様だ。

「それじゃあはやて、後は頼むぞ。」

「うん、わかってる」

しかしその手は震えている。闇の書に手を伸ばしているが、手は震えている。俺はその手に合わせる、少しは落ち着いてくれている。そこにさらにヴォルケリッター達も手を合わせてくれた



「」安心を主はやて。直ぐに戻ってきます」

「そうだぜはやて、安心しろよ。もし無理でもあたいらが無理やり帰ってきてやる」

こいつら。

「はやて、大丈夫だろう、お前の家族だ。お前は家族を守れ、それが主としての役目だろう、違うか？」

「ううん違わない、そうや私がやるんや。ごめんな貴一君。それじゃ行くで！」

そしてはやては闇の書の前に手を出し

「主。我、闇の書：いや“夜天の書”主八神はやてが命ずる、蒐集」

「蒐集」

「痛みは一瞬だと思う。これよりサン、俺も解析を開始する」

そしてヴォルケリッター達のリンカーコアが出現。てかその時のシグナムの音が：エロかったな：ってそんなこと考えはほっといて。それでヴォルケリッターは消失、はやては一瞬怖がっていたが、すぐに俺がOKマーク出したためほっと一息つきそして気合を入れなおしたようだ。

「サン、掌握できた？」

「成功、コンタクト開始！！」

そして俺の周りにアースラのメインモニターの如く文字が出てくる、俺はさらにアンサーターカーをフルに使い、闇の書のバクの改竄、を永遠と出し続けている。それにしてもこんなことにキーボードの早押しが役に立つとはな。

「はやて、後はお前だけだ。」

「せやな、う、ちょっときついなこれ…」

そして闇の書がこう告げた。

「起動」

そしてはやての下に魔法陣を展開された、そして原作ならあの黒い光が出るはずだが、しかし

「主、ルート確保。これにてユニゾンはありません。」

ギリギリだったが成功した、俺の目の前にあるのは黒い球体しかもはやてをも飲み込んでたぶん夢に入った。さて今度は俺らか

「さて行くぞ。現在、俺らのもとい俺はこんな状態だが、ムーン、結界を頼む、俺の魔力を使いたい放題でも構わない。サンはこのまま俺のバックアップに移れるのなら移れ、ソルは俺の体に注意していてくれ。」

「御意」「イエッサー」「イエス・マイロード」

そして俺は文章を見ているときにバグらしきものを発見した。

「これがバグ？なんなんだこれはただ単なるベルガ式のミス、続いて劣化。それなのにそれを修復しなかった、違うこれは………そう言うことか、くそ脳みそ共め。」

「主、こちらも順調ですそれにしてもこれきつって主？」

「…」

「マイロードは集中しているのだろう。お主もそうだろう。」

「聞いているよ。それでルート固定は成功？」

「はい、現在存在するヴォルケリッターのリンカーコア、そしてその契約をはやてちゃんのリンカーコアに直接接続完了。さて後は」

「こちらのバグだ、行くぞ。古代ベルガ式だからめんどくさい…」

「わかりました、これより私もそっちに入ります。」

そして俺らの戦いが始まった。



? 9重4把 (A's 編四十四話)。終幕 (エピソード) (前書き)

はてさて、今私はアメリカにいますよ。

? 9重4把(A's編四十四話)。終幕(エピソード)

Side リンディ

「艦の動きを私に速く伝えて!!」

「艦長、現在座標の解析が完了します。」

「アルバート提督、大丈夫ですか?」

「まったくあの孫め、こんな老人に無理をさせおつてしかしこれで座標を掴めた。リンディ殿この世界の惑星だ、しかもご丁寧に無人に、生物がない惑星じゃ。」

「わかりました。エイミイすぐに座標を。もうすでに二十五分以上三十分は経っているわ。さいやく闇の書が発動されているかもしれないわ。」

「艦長、座標固定完了。転送します。」

そして私達は転送した、そしてそこで見たのは。

「艦長、このエリアに高密度の魔力結界が張られています。これは八神家と同じです。それにあれは一体?」

そして私達が見た映像は、黒い球体の前で貴一君が何かを操作しているような、そんな絵だった。

「貴一君ね…: けど何をしてるんだらう?」

「お母さん、これって一体？」

「うーん。そうね、あれが闇の書…かしら？」

プレシアさんが画面を見ながら模索していた。

「すみません！！あの球体の下にあるものをズームできますか？」

そのときすずかちゃんが叫んだ、それにあわせて画面もズームしてみたら

「あ、あれ」

「車椅子じゃない。なんであんな所に？それよりもすずかどうしたのよ」

「あれ、たぶんはやてちゃんの手椅子…」

それではやはり闇の書は起動したと言うこと。それではあの球体だけでなく…あの資料のようによればすぐにユニゾンが発生するはずなのに。

「エイミィ、貴一君の所の会話聞けるかしら」

「あ、はい。やってみます」

そして貴一君をズームに写したその時の貴一君の真剣な顔はある意味初めて見た顔であった。

『サン、今の状況でバグの修正率は？』

『「そうですね、現在も自己修正も抑えていますから60パーセントぐらいです」』

『そうか、「マスター、厄介なのが来ましたよ。アースラです」』  
嘘でしょ、感づかれた。

「エイミィ」

「そんな筈は」

『構わない、今はこれを直す。それに今ははやてとそしてヴォルケリッターによる管制人格の説得の時間を稼ぐだけでいい。それにそろそろだろう。』

どういうことかしら、一体？

「どうします艦長？」

「現状では待機で。」

「な、艦長！！」

「クロノ君、今貴一君は私達を察知できたのよ。今は見守るできよ。それに貴一君が何をしているのか見て見ましよう」

「そんなゆうちよに。すでに闇の書が発動しているんですよ！！」



「艦長命令です！黙りなさいクロノ執務官」

「か、母さん!?!」

「クロノ殿、リンディ殿の心ぐらい考えたらどうじゃ。お主と同じよう、いやそれ以上に今気持ちは穏やかでは無いに決まっております」  
アルバート提督がクロノ君を治めてくれた。正直にありがたかった。今私は心が落ち着きそうに無い。それにホントに貴一君は何をしているの？

「艦長!! 現在貴一君の結界外から急速に接近する魔力反応があります!!これは魔導師!?!」

そして次の瞬間、貴一君はよろけた。

S i d e o u t

S i d e はやて

私は一体…

「おい、はやて。ご飯にしようぜ」

…ヴィータ

「そうですね主はやて、早く食べましょう。それに今日から学校なんですから」

…シグナム?それに学校?

「学校やて？」

「そうですね、はやてちゃん。お忘れですか、もう足は治ったんですからね。」

あ、ホンマや私の足動いている。それにシャマル。あ、ザフィーラもあんな所で日向ぼっこしていて、ああ、これが日常なんやな。  
…せやけど彼が居ないやないか。それじゃあそれは私の日常じゃない！！！！

そして私がそう思った瞬間、周りの風景は砕けてしまったそして目の前には銀髪の女の人が見れた。

「また、悲しみを繰り返すのですか？」

それがその女の人の最初の言葉だった。

S i d e シグナム

ああ、主が笑っている。それに私も。

「シグナム先生、これはこうですか？」

この子は、道場の子か。ああ、私はここの道場に勤めているのか？

「シグナム、休憩してごはんにしよう。」

「そうだぜシグナム、こんなにつまそうなんだぞ！」

「ああ、今すぐに」

ああ、これが日常か……だけど彼がいないな。約束したからな、あいつの居場所は我々の所にも作らないといけないのだから。

そして私がそう思った瞬間、周りに我々ヴォルケリッターとさらに目の前に主はやて。そして目の前に一人の女の人が居た、これが管制人格？

「なぜです、なぜ貴方達は自分の夢を見ないので。それに主も」

「そうやな。確かにいい夢やな。せやけど一番居ないといけない人がおらんかったからな。」

「そうですね、確かに一つ足りないものがあつたのだよ」

「「貴一（君）」」

「あああら、二人して同じ事をこれはお熱ですね？」

「ううう／／／／／／」

「こら！シャマル、変な事を言うな／／／／／／」

「それは今、私のこのバグを抑えている者のことか」

「そうよ、私達はそのおかげでここに居られるんや」

「貴方達は何故、ここに？今ならば私もバグを抑えられている。たぶんその人のおかげであろう。今私に管理権が若干戻ってきている、今ならば主、そしてお前ら守護騎士を外にだせるであろう。」

「何いつてるん！！私は貴方を救いにきたんよ。私は主として貴方を迎えにきたんよ」

「何を言っているのです。今ならばこの連鎖を止めることが「そうや」…ん？」

「せやから私は貴方もこの連鎖から救いにきたんや」

「ですが私はすでに罪人です。主、それから守護騎士は私の抑えられていないバグのせいで罪を…ならば私はこのまま抜けては」

「そんなの知らん！！今私は夜天の書、主として言っているよ。私は主やから、みんなすくうんや。もし罪とか言うなら私がせおつたる」

「我々もだ、そうだろう」

私はそう言っただけに出た。

「烈火の将、主…私は」

「そうや、最初に聞くべきやつたな。名前なんて言う？」

「う…私には名前はありません。」

「なら今、決めてあげる。そうやなくお、いいモンがあった！」

「え、え？」

「何おどろいておるん。私は貴方の主、だから改めてよろしく、  
祝福の風、リインフォース」。

「は、はい。ありがとうございます…主」

「はやて、八神はやて。」

「主はやて…」

そして管制人格、いやリインフォースは泣きながら手を握った。しかしその瞬間、この黒い世界が崩れ始めた。

S i d e o u t

？9重4把（A's編四十四話）。終幕（エピソード）（後書き）

私は今、アメリカにいます

第旧中五羽（A's編四十五話）。それは始まりに過ぎない（前書き）

今日、日本に帰ってきます。

第旧中五羽（A's編四十五話）。それは始まりに過ぎない

俺らは三十分抑えに抑えていたら、徐々に修復能力が弱まり始めた。

「主、これならば！」

「ああ、はやて達が頑張ってくれたのだらう。管制人格としての能力も回復しつつ「マスター！危ない！！」…は？」

その瞬間、俺はなのは以上の砲撃魔法を喰らった。嘘だろ、こんなときに…まずい修復される。それよりも誰が？管理局じゃないだらう。糞が！

しかしその瞬間、黒い球体は弾け、中から、はやてが闇の書を持って出てきた。しかし最初に言った言葉は

「リインフォース！！！」

はやての叫び声だった。

俺は直ぐに体制を建て直した。

「く、痛っ。サン！状況は！！！」

「はい、バックアップのおかげではやてちゃん達は脱出しましたが…それがバグその物の反応がありません…」

そして俺が倒れていることにはやても気付くが、足が立てない。しかし次の瞬間に。シグナムたちがはやてと支えていた。



「主、早くセツトアップを、それで中に浮いてください。貴一は私が起こしますから」

そしてはやては知っていたかのように直ぐに騎士服を着てそして普通に飛んでいた。

「すまん、はやて。く、ソル、回復魔法を」

「全力で」

そして俺は回復しながら、シグナムの肩を借りた。

「大丈夫か？貴一よ。」

「俺は大丈夫だが、お前らは？」

「それが…」

「リインフォースがまだあの中や！」

はやてが指す方向にはなんとさつきと同じ黒い球体が存在した。おかしい俺はさつき破裂したのを見たのに。

「どういう」主、あれが闇の書のバグ、いえあれこそが闇の書よ」  
なん…だと」

「私が説明してしますね、はやてちゃん。」

そして既にヴォルケリッターは全員はやての傍に出現しておりシヤマルが俺の前に来た。

「それがですね、私がここに居られるのは貴一君のおかげだと思われ  
れます。現在リンカーコアははやてちゃんにダイレクトに繋がって  
いますから。」

「ああ、俺達が一番最初にやった緊急の脱出ルートだな」

「はい。ですが、先ほどの我々は何かのせいか急に安定していた空  
間が壊れ始めました。」

「たぶんそれは、俺の…」

「そして、闇の書は夜天の書であり続けるためにその管制人格であ  
るリインフォースを捕らえさらにそれははやてちゃんの方まで。で  
すが」

「リインフォースがな、私を押し出してくれたんよ。貴方は私をま  
た夜天の書の管制人格で居させてくれた、私はそれで十分です。外  
に居る方のおかげで道は出来ています、それでは主ははやてって。私  
私…」

そしてはやては今握っているシュベルトクロイツを抱きしめながら  
泣いていた。俺のせいだ。

「はあくまったく面倒くさいことこの上ないね、こういう仕事は。  
クライアント  
客のためだからってまさかロストログアの回収って。」

そして俺らの前に一人の男が現れた。

「貴様が、さっきの魔弾を」

「にひひ、痛かったかなガキ。こんなけつたいな結果作るからだよ。だからあの黒い球体直接じゃなく、お前を狙うことになったよ。」

「貴一、あれはどういう」

「なに、この俺様が邪魔したんだよ、彼の」

「な、なんだと。貴様！！」待て！！「き、貴一？」

俺は直ぐ後ろ向いて、はやての傍に行き。

「お、おい貴一」

「こら、ヴィータちゃん私達は彼を見張るわよ。」

「はやて、諦めているのか？」

「う、うううう、うううう。せやかて」

「それでも貴様はリインフォースの主か！！」

俺ははやての胸倉をおもつきし掴んだ。

「なんかそういう空気嫌いなんだよね、この俺様は「黙れ」は？」

俺のその相手に向かって手を延ばしてさっきのお返しとばかりに砲撃を放った。そして相手は不意打ちのせいか吹き飛んでいった。そして俺ははやてを見て



しかし次の瞬間俺らは目を疑った。

「闇の書起動」

男の言葉にその球体は反応した。

「バカな。あのままいけば」

「私と同じように。だけど私は貴一君が居たから大丈夫やったけど」

「貴一、あいつは一体何しているんだよ？」

「ヴィータ…俺にもわからない。まさか闇の書を発動させる気か」

「そんな、それやとリインフォースが！」

「主、落ち着きください。く、あいつの魔力は異常だ。この私達が吹き飛ばされるなんて。貴一どうする？」

考える、考える。俺が答えを出す前に相手は行動を起こした、それは

「起動」

闇の書の起動だった。

Side リンディ

貴一君が砲撃魔法を当てられた瞬間に私達は、すぐに戦闘態勢に入った。しかし貴一君はそのまま倒れそうになったが、その瞬間にある黒い球体が弾け中から女の子が出てきた

「あ、あれは!？」

「確認、八神はやてちゃんです!!それから魔力反応、一。」

そして次の瞬間には貴一君はあの剣士の子に肩を借りて立っていた、さらに続けて八神はやてちゃんがセットアップをし他のヴォルケリッターも召喚された。

「こ、これは一体？」

闇の書のバグの融合事故が無い。まさか貴一君はそのバグを直していたのかしら…そんなはずは。

「艦長、貴一君を撃つたと思われる魔導師を発見。なんか貴一君達に近づいて来ています。それと黒い球体が再編成されました…」

「今、はやてちゃんが持っている物は何？」

「えーと、闇の書…ですが反応はあの黒い球体です!!」

そして私達が見ているとき、貴一君がその男に砲撃を撃った、あれが片手でできるなんて…

「う、うわー」

アリスちゃんとすずかちゃんは口がアングリ状態。しかし今の私もそれと同じ、現状を把握できて居ない状態。

「エイミィ、直ぐに音声の修復を。」

そして私達は衝撃の言葉を聞いた。

第旧中五羽（A's編四十五話）。それは始まりに過ぎない（後書き）

ただいま、日本!...のはず



醒九十六輪（A，S編四十六話）。獣ノ力（前書き）

ちむい

醒九十六輪（A's編四十六話）。獣ノ力

Side リンディ

「通信回復しました」

そして私は貴一君が何をしていたかやっと分かった。

『貴様が改竄を修復して闇の書を本来の夜天の書に直すことは知っていた。だけどそれだと困るんだよ“こちら”としては』

その男はそう言い、そして今も尚闇の書に吸い込まれていく。私は彼が何をするか分からないためすぐに指令を出した。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、それからユーノ君とアルフちゃんは直ぐに転送を。そしてあの黒い球体に総攻撃する準備。クロノ君は待機。」

「……………はい……………」

そして直ぐに全員用意が出来て居たらしく直ぐに事を運んだしかし、これは…なその男、そして貴一君の目的。それでは無血にての闇の書の連鎖を壊す方法…

side out

さっきの言葉、こちら側とはどっいう意味だ？

「貴様、こちら側とは」

「ふん。五月蠅いぞガキ、俺はな、いつもいつも客のために動いてきた、だけどそれも今日でおしまいだ。行くぞー!!」

「お、おい!!」

そしてその男は球体の中に入って行った、このままだと

「く、闇の書が発動する…それにリインフォースが。」

そして球体に入った後ぐらいになのは達アースラ組が来た。

「な、高町!？」「…テストロッサか」

「今はそれどころじゃないよヴィータちゃん」

「うるせえてめえらは「ヴィータ」え、貴一？」

「何しに、管理局のみなさん？」

「な、あんなねフェイトたちが助けに「アルフ」…ちっ!!」

『ええ、今現在分かっていることについて教えて欲しいのですが?』

現在俺らはいいつが入ってしまったあの闇の書に攻撃が出来ない、すれば何が起こるかかわらないと俺の脳が教えている、それに今のところリインフォースの助け方も出てきていない。ここはしょうがない。

「いいだろう。」

そして俺らはあれについてと、そしてリインフォースについて話した。そしてこう言われた

『それが貴方の本当の目的。無害で終わるはずだった作戦。』

「そつだ、蒐集活動と」あははははあはははは「・・・ん！」

そして俺たちは笑い声のする方へ顔を向けて確認した、ここでリインフォースが出てきているなら原作どおりの闇の書だが…しかし

「これか、これこそが管理局に闇の書と謡われたロストロギアの力か！これならば、もうあんな奴らの言うことなど聞かなくて済むのが最高だ、最高でそして最強だ！」

そう、あの男だ、しかもあのリインフォースの赤いタトゥーやそれにあの黒い羽。まさにはやてが本来なってしまう姿。なるでこれでは闇と光。あの男とはやてのようだった。

「どついうことだ、なぜユニゾンインしない！」

俺は大声でそういう、しかし男は不適に笑った。

「ああ、そうか。なら冥土に教えてやるよ。俺様の稀少<sup>レアスキル</sup>能力をな。

俺様はなぜかユニゾンインしてもそのユニゾンは意識を持たず、ただただ俺に従うものになる。ようはユニゾンデバイスの力だけが俺に備わり、ユニゾンデバイスは俺のリンカーコアで眠っていると  
言うことだよ。」

そしてその男がそう言うと男は胸を叩き、直ぐに右手をこちらに向

き、魔法陣が発生した。これは

「不味い、アンロック、術式解放!!」

俺はすぐさまに皆の前に出て魔法を使用した

「チリと成れ!!」アイキス「「最強防護」」

相手の使用魔法はたぶん、スターライトブレイカーの五十倍に匹敵する威力の砲撃。俺の盾が揺れているぐらいだからな。

「ふん、あのガキ…おもしろいな。少し待ってやろう。最後の慈悲とでも言おうか。」

そして砲撃は止んだ、そしてあの男はなにもせずただこちらをみている。しかしあれが

「闇の書の本来の力だとやはりこうなれば破壊を「待ってや!中にはリインフォースが」しかしこれでどうしろって」

ユーノとはやてが言い合いになってしまっ、相手は俺しか見ていない、俺はだけどこれを読んでいた、そうもし闇の書の発動されてしまった場合の考え。だから俺ははやてに確認を取る

「なあ、はやて」

「うん、何?」

「今はお前が俺の主だ、マスター俺は騎士でしかないからな。確認だ、お前は何を望む、主よ。オーダー命令を」

そしてはやてはこちらを向き、ヴォルケリッターも俺の後ろにつき

「そつやな。リインフォースを助け出す！！なにがなんでもや」

そついうはやての目は凄く生き生きで現在も足が動かないことも忘れるぐらいだった。

「了解！マイマスター！！」

俺はそつ言つと、すぐにヴォルケリッターの方に向き直り。

「お前ら、あいつの動きを止めてくれ。それだけでいい、それだけに集中しろ」

「」「」「御意」「」「」

「な、そんな無茶な」

「うるせい、これはあたいらの問題だ」

「そつだ、我々がこれと決別をする。」

「し、しかし『ユーノ君、少々黙っていてください』…リンディさん」

『貴一君。貴方達の目的は分かりました、それでは管理局はこれより闇の書の破壊を行います、つきましては先に貴方達何かを奪還してください。それが終わるまでの間私達は貴方達の援護に回ります。以上です。』

そして通信が切れた。そういう事がリンディさん。

「それじゃあこれを早く終わらせて、貴一君：O H A N A S  
H I なの。色々なの」

「後でなら…」

「シグナム、今は」

「分かっているテストロツサ。貴様の速さ期待しているぞ。それに  
まだ負けていないからな」

「はい」

そして俺は各員に命令を出した。

「俺はこれより動けなくなる、だからシャマル、はやては俺のカバ  
ー。他の全員はあの野郎の動きを最低でも三秒止めてくれ。いいな」  
そして全員が頷く

「今回は君に任されるぞ。」

ユーノが俺の背中を叩いた、しかも強く。

「ちっ！分かっているさ。それでは全員死ぬなよ、オーバー」

そして全員があつ男に向かって、各自の攻撃に移り始めた。そして  
俺はそれを見て、こつ告げた。

「ホントは未完成なんだけどな、だけどやる価値はあるだろう。いくぞソル。」

「「イエス・マイロード」」

「コード反転。サンとムーンを強制スリープモードに移行。行くぞ、ザ・ビースト」！！」

「「承認、解除します、コード反転：ザ・ビースト発動」」

そして俺は沈黙し意識を手放した。



醒九十六輪（A、S編四十六話）。獣ノ力（後書き）

これからがハンゲキです！！

第97話（A's編四十七話）。〜ゲットバック〜奪還成功（前書き）

ユキがふりすぎで手が凍りそうです。

第97話（A's編四十七話）。くゲットバックく奪還成功

Side シグナム

貴一が沈黙してから我々の戦いは始まった。

「なんだ、俺はあのガキ以外興味ねえんだよ。」

そしてそいつは黒い触手のようなもので我々に攻撃してきた。

「テストロッサ」

「はい、行きます」

私とテストロッサはスピードを生かして相手に近づく、しかし

「バカが、このおぞましい量の魔力の差を知れ。龍の息吹としれ」

そして魔力波にやれるがその時我らは不意に盾を発動させた、これで道は出来た。

「ヴィータ」「なのは」

「おっしゃー、行くぜアイゼン！」

「いくよー」

そして我らが作った道により、あの男に丁度一本道の道が出来る。

「ふん、貴様らの技など!!」

あいつも魔力を溜めて砲撃を出してくるが。

「いいか高町、あの砲撃を逸らすだけでいいからな」

「うん、それじゃ全力全開!! デイバインバスター!!」

高町の砲撃により少し逸れた砲撃は、ヴィータの小柄の体を相手の所まで届かせ。

「な、貴様ら!!」

「ギガントハンマー!!」

そしてヴィータのハンマーが相手を直撃させた。あの技ならバリアは聞かない

「ふ、く、く、く。」

しかしその男はバリアを張らず、素手で抑えた。

「う、嘘だろ!!」

「甘いぞ、どうした!! 貴様らには興味が無いと何度言わせるか!!  
これで終わりしてやる。「ガアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!」 なっ!! なんだこの魔力は」

我々ですらその声の元を見てしまった、そしてそこには沈黙して貴  
一ではなく…一匹の獣だった。貴一のデバイスのソル、ムーン、サ

ンのどれでもなく、あのライトアンドダークネスでもなく、顔をまるで狼の顔のような頭部のメット、そして体はまるで獣のように尻尾とそして足と手には爪。そして驚くほどの殺気。

「く、く、く。面白いぞ、お前を倒せばそれだけで俺様は満たされそうだ！」

しかしその言葉と同時にその男は吹き飛んだ。ヴィータですら止められてしまったあの強さなど微塵も無かった。一瞬だ、一蹴りであそこに行き、そして一蹴りで。

「ガッ、ガハ！」

そこには貴一と思われる獣姿のデバイスを全身に帯びている者の蹴りしかない。私は不意に気付いた

「今だ！！貴一が止めてくれたんだ、すぐにバインドだ」

そして倒れている間にあの男の周りにバインドを張り巡らさせた。

「く、バカめ。この俺様がそんなのに、な、なんだ貴様！！」

そしてバインドで結んだ瞬間に貴一は、その男の胸をあの爪で貫いた…しかしそれは

「な、あれはリンカーコアだと…」

その時、緑のバリアジャケットの男がそう言う。そうあれは我々がしていたもの、そうそれは

「シュ…ウ…シ…ユ…ウ…カイシ」

「く、バカめ。ならば、貴様にも夢を！！」

そして貴一は蒐集活動を開始した、その瞬間、あの男は動かなくなった。我々はそれを見ることしか出来なかった。

Side リンディ

クロノ君をこちらで待機させた理由は、それは

「艦長、調整終了しました。これで大丈夫だと思います。」

「了解、クロノ君。そのデバイスは大丈夫」

「はい、それにしても貴一、君は一体何を？あれは蒐集活動…一体なにを」

「クロノ君、今はあなたのすることは、わかっているわね」

「…はい」

そうその作戦とは、もしものための作戦、それはあのままどうにかあの男を抑えたままクロノ君のデバイス、デュランダルでの凍結魔法、そして次元転送のちにアルシャカスによる完全破壊。しかしそれは奥の手、今は私達は見ることしか出来なかった。そうおの貴一君の姿を見ながら。

Side out

ああ、ここは何処だ？俺はあいつのリンカーコアに接続したはずだ、しかしここは闇の書の中、あの変な夢を見られるのは正直困る、だから俺は外で理性を捨ててここに来た、だがここは暗い。ホントに何も無いな。これがあいつのリンカーコアか？俺はそう思いながら奥に、進んでいったそして、純白の風に俺は会った。

「ふ、無事のようにだな。大丈夫か？」

俺がここに現れることがたいそう意外だった為か少し反応が遅れていた。

「な、お、お前なものだ！！そして何故ここに来れる？」

「俺は…お前の主の頼みでな。お前を救ってくれと言われたんでな来たんだ。さあ、いくぞ」

しかしリンフォースは俺の手を握らなかつた…

「行けない。私は多くの罪を「だからなんだ！！」「ん！」

「はやてになんて言われたんだ、リンフォース！！罪ならば、償えばいいだろう。何を諦めている、貴様はその程度か、その程度なのか夜天の書の管制人格、リンフォース！！主に助けてもらっていながら恩返しもしないで消えると言うのかお前は」

「く、そうだ。たしかに主に私は名前を貰い、そして罪も一緒にと。だがそれではただ単なるお荷物とかわらないじゃ」「ふざけんな！！」  
なっ」

「何がお荷物だ、いいじゃねえか。それでもよ、はやてはお前と一

緒に居たいからそう思ったからここまでしているんだ。」

「く」

そしてリインフォースは泣いた。しかし俺もそろそろ時間が押ししてきた、だから強行に出た

「てめえが出ないなら、俺が出させる！」

そして俺は無理やり、リインフォースの手を掴んだ。

「もし、主の心配があるのなら。お前は一人じゃない事を思い出せ。お前には同じ主を守るうとする騎士が居る。この俺もその一人だ！」

「あ、ああ」

そして俺はおもいつきし、リインフォースを引っ張った。

Side シグナム

そして時間で言うのなら十五分が経過した時、急に貴一が叫んだ

「貴様から、リインフォースを返してもらっぞ！」

そしてリンカーコアからリインフォースは出てきた、貴一の手にかれて。しかしそれと同時にあの男も目が覚め

「何故だ、何故夢を、しかしさせるか！！」



あの零距离での砲撃は避けられない、不味い。私はそう思ったが貴  
一は

「ガアアアアアツアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

貴一の叫びと同時に口の周りに急激な魔法陣を発生させて、砲撃を  
出す前に砲撃を繰り出した。まるで龍の息吹のように。

**第97話（A's編四十七話）。くゲットバックく奪還成功（後書き）**

まだ、学期末試験中ですので定期更新は来週の月曜からなのでよろしくお願ひします。

第九十八羽（A，S編四十八話）。主人公、若干の休憩（前書き）

開始！！



あの男なら数分の間動けないだろうから」

「うんうん。ありがとうな」

そして主が抱きつこうとするが。

「まだだろ？終わってからだ」

貴一の眼はあの男に向いていた。

『貴一君、成功なのかしら？』

「はい、一応ですが。それで管理局としてはどうするんですか？あまり時間はありませんよ」

『これより、あの者を、いえ闇の書の完全破壊をします。それにつきましてはアルバート提督よりお話があります』

そして通信が変わり、ギル爺が出てきた

『うむ、これよりあの者を弱らせる、いや足止めをする、そしてクロノ君のこのデバイス、デュランダルで凍結、その後は我々が指定する時空に飛ばし、そしてアルシヤカスで完全破壊じゃ。貴一にかあるかのう』

「あいつはもうリインフォースが、はあ、いないから既に闇の書を操ることは出来ないはずだ。だからもうあいつの理性は無いに等しい。だからそれを逆手に取ればいけるはずだよ」

『それでは各員、作戦開始じゃ！』

その言葉を聞いて、俺も立ち上がるうとするがリインフォースを地面に置くことで精一杯だった。

「無茶はお止めくださいマイロード。既に体はボロボロですよ」

「そうですね、あとは私達に」

「ダメだよ、シャマル。俺はこれ見届けないと。そうだろうはやて」  
「？」

「うう、ここはアースラに居て欲しいのやけど、貴一君…大丈夫だよね？」

「流れ弾で死ぬような俺ではないよ。それにフェイトになのは、すまないな、こんな状態だ。頼めるか？」

「「うん！！」」

そして俺はリインフォースの上にサンとムーンを置いた。

「何をやる気だ貴一？」

「リインフォースを転送する。さすがに無理やりにユニゾンを解除したからリインフォースのダメージが計り知れない。だからサンとムーンによる座標固定で、どこか安全な『ワシがあずかる』ギル爺…」

『それぐらい、この管理局を頼っても罰は当たらんぞ貴一よ。お前は十分やったぞ、もう十分じゃ。』

「じゃあ、お願いするね。はやて、それでいいかい？」

「うん、それではうちの家族をよろしくお願いします。」

通信越しのギル爺に一礼する、はやて。すでに飛ぶ魔法にも慣れて  
いるようだ、そしてサンとムーン、さらにリインフォースが転送さ  
れた。

「（…マイロード…）」

その時不意に念話が聞こえた、しかも俺限定で。

「（気付いてしまったか…ソル）」

「（はい、あのザ・ビーストの強制解除の際、マイロードの記憶  
に関するモノを見させていただきました。まさかマイロードの過去  
にこんなことが、だから年相応に似合わない言動などがあったので  
すね）」

「（そうか、それでお前は俺の事を）」

「（何を言っているのです。貴方は私のマイロード。それ以上で  
もそれ以下でもありません。これより治療に集中します。）」

「（そうか俺の答えも見たのか）」

「（はい…）」

「（ならば、すまないが。付き合ってくれよ、ソルジャー）」

「（イエス、ユアジャスティ）」

俺らは秘密の、最後の作戦のために力を溜め込んでいた。

Side シグナム

今、我々は敵対していたものが背中を預ける状態であった。それは共通の敵にでくわしたからでもある。そして貴一は後方でザフィーラとシヤマル、あのテストロッサの使い魔が守っている。そしてさつき到着したのが黒い魔導師

「お前が、その凍結の魔法を撃つ者か？」

「ああ、そうだ。」

「私はシグナムだ。これより主の命により貴様を援護する」

「ああわかった。」

「そのよろしくなあ、高町さん、テストロッサさん」

「うん、これが終わったらちゃんと自己紹介なの。ね、フェイトちゃん」

「うん、それに…貴一の事も聞きたいし」

「うん、それは私も同じやから。だからまずは」

「これを」「どうにかした」「後やな」



既に主はあの高町とテストロツサと、話している、そして我々は相手の出方を待ち、攻撃の準備に入った、そしてあの貴一が撃ったクレーターから出てきたのは、すでに形では現せられないような、そんなあの男の姿だった。

「な、なんだあれは！」

「あれが、闇の書？」

黒いのと、緑の奴が驚いているが、我々はそんな悠長なことは出来ない。

「カエスンダ…あの…かん制…ジ…ん…格を、カカカカアカツカカカカエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！」

そして触手なようなものが我々に襲い掛かるが、それは

「レヴァンティン！」「バルディツシュ」

私と、テストロツサで根元から刈り取った。しかし今度は

「これを喰らえエウエエエエエエ！」

今度はあの

「な、これ、高町の砲撃！？」

「それは僕に、マジカ…」



第九十八羽（A's編四十八話）。主人公、若干の休憩（後書き）

デバイスの説明。

ザ・ビースト

質問が多かったので形だけの説明をさせていただきます、形ロックマンエクゼ6のグレイガのまんまです。

それでは次回会いましょう。

第九九話（A's編四十九話）。主人公の計画（前書き）

停電があったのですが、時間通りじゃないことにびっくりしました。  
やはりどこもかしこも混乱状態なんですね。

第九九話（A's編四十九話）。主人公の計画

Side シグナム

貴一の言ったとおり奴は徐々に攻撃にキレがなくなり、何もかもを破壊する行動に移っていった。

「アアアアアアアアアアアア」

さらなる魔法による、攻撃。これは一言で言えば消耗戦なら勝てるはずの敵が消耗しない。しかし我々もそこまでバカではない。

「テストロツサ、そろそろ決めるぞ。ヴィータ、そっちは大丈夫か」

「ああ、あたいはまだ残りのカートリッジがある。高町、お前は？」

「うん、大丈夫だよ。だけどこのままでどうやって抑えるの？」

「一度、凄まじい攻撃さえ当てれば止まると思うよなのは」

「ユーノ君、わかったなの。だけど強い攻撃って、隙が多く出来ちゃっよ」

「ふん、そこら辺はこの盾の守護獣に任せろ」「あたいらの使い魔がどうにかするよ」

「うん、僕もそっちで頑張るよ。」

「シヤマルも頼めるな、行くぞ。」

「任せてください、シグナム。」

「それでは全員で包囲を固めて、一斉に最大魔法を。後は僕が決める」

そして我々は各自、転々と相手を四方八方から囲んだ。

「アガアガアアアアアアアアアアアアアアア」

さらなる雄叫びと共に、さらなる魔法が来た、この魔弾は辛い、しかも進行の早さが…まさか今の貴一が発生させた結界を突破して他の世界に行く気なのか。これはホント早くしないと不味い。

「いくぞ、ヴィータ。」

「了解だぜ！！アイゼン！」

そして我々が先に二方向でカートリッジと最大に使う。

「ギガントハンマアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

「これこそがもう一つの姿！シュツルムファルケン！！」

しかし、我々が魔法陣を発生させたらあいつがそれに合わせた様にこちらに魔弾を撃って来るが

「はあああ！！！」

ザフィーラがカバーに入り、そしてヴィータの方にはあの使い魔が。

そして我々は

「いつけえええええ！」「決まれええ！」

そして、見事に命中。されどそれでも進行は遅くなっただけだ。しかし

「ウ・・・ガ…アアアア…アアアア」

相手に隙が出来た。

「行つてはやてちゃん！」

「うん、行つて来るなシヤマル」

「決めてやれ、高町なのは」

「あ、初めて読んでくれたねヴィーたちさん。それなら全力全開でいつきまーす」

「後は、任せたぞテストロッサ」

「はい、シグナム」

そして我々は三人に任せた。

「行つてくでええええ。夜天の書、起動」

「発動を確認、マスター指令を」

「バルディッシュ一気に行くよ。ロードカトリッジ」

「イエッサー、ザンバーフォーム」

「終わりするなの。それで貴一君にO H A N A S H Iなの！  
ロードカトリッジ」

「オールライト」

そして三方向の魔法陣が大きくなりあいつを囲った。そして

「響け終焉の笛、ラグナロクブレイカー！」

「雷光一閃！！」

「全力全開、スターライトブレイカー」

そして三人の砲撃は見事、闇の書のバグに当たり。

「う、動きが止まった？」

『今です、クロノ君。』

「悠久なる凍土 凍てつく棺のうちにて 永遠の眠りを与えよ 凍てつけ！」

そしてあの黒く、禍々しいものは氷づけにされて、そして魔法陣が引かれ。そして転送された。

S i d e o u t

S i d e リンディ



「艦長、クロノ君成功です」

「それでは、転送魔法座標固定。」

「了解です、さっさと行きますよ」

そして、あの黒いモノは私達が指定した時空に飛ばしそして、後は

「リンディ殿、お主が決めるが良いぞ。」

アルバート提督が私に声をかけてくれた、さっきまで最後までクロノ君の魔法を見ていてくれて、今までずっと見ていた。

「それでは行きます！アルカンシエル！！」

そして私は自分の復讐とも言える思いを消した、うふ。どう、クラウド私達の息子や私達よりも小さい子たちがまさかの貴方の敵討ち。ふふ、それじゃあねクライド。

Side out

Side シグナム

そして我々は、通信を待った。そして

『皆さん！闇の書の反応完全ロスト、やりましたね皆さん！！』

「え、ほんま…それほんまなん？」

『はい、完全に闇の書の反応無しです。えっとそ、それですね』

「すまないが、君達を」

「わかってるで、ほな皆行こうか。」

そして主はやてがそう言う

「はい、主はやて。」

「そうか、ありがとう。君達のおかげでもある」

そして黒い少年が頭を下げた。そして我々は事件が終わったと思いい、休息を向かえようとしていた、しかしそれは早とちりでしかなかった。

S i d e o u t

S i d e すずか

私たちはずっとこの艦の中で今までの戦い見てきた。

「それじゃあ、お終いな。貴方達も」

「」「」

私とアリサちゃんは同じことを言った。

「ふふ、そういうと思ったわ。だからそこで皆を待ちましよう」

あのリンディさんと言う人はやさしい笑顔で言った。さっきまでの緊張感は無くなった、それもそうなのだろう。だけど私は違和感があった、そうそれは

「あのお、貴一君は何をしているんですか？」

そう、画面で私たちは見ていると貴一君が急に魔法陣を張り始め、そして

『転送』

そう言うと、私達と同じ、この場所に“貴一君以外”の皆が転送されてきた、しかも落ちる感じで。そして

「か、艦長！又もや、結界が再発動。それもさっきのとはレベルが違います。えっ！？う、嘘こんな事が…」

「そうしたの、エイミィ」

「闇の書の反応…有り」

そして、私達は目撃することになる、一人で孤高に戦う戦士ソルジャーの姿を。

Side out

さて、そろそろか。

「（ソルジャー、やってくれ）」

そして俺の周りに魔法陣を発生させて、そして目の前に居る全員を

さっき転送したアースラの座標に転送させた。さて始めるとしよう

「マイロード、これでよろしいのですね？」

「ああ、これでいい。さて罪滅ぼしだ、付き合えソル」

「イエス・マイロード」

そして俺は目の前でどんどん纏まっていき始め、そしてそう、まるで影で人を作ったような奴が俺の目前に現れた。

「さ、始めようぜ闇の書のバグ。いや闇の書」

「……そうだな、人間」

そして俺戦いは始まった。

第九九話（A' S編四十九話）。主人公の計画（後書き）

今回は本当にネタがなくなりました、そのため久々の次回予告、それでは次回『始まった戦い』をお送りします。

第100話（A's編五十話）。闇の書（前書き）

とうとうここまで来たか。

第100話（A's編五十話）。闇の書

「ふん、まさか気付いていたとは。やはり今までの奴らとは違うな、人間」

そして、俺の目の前に居る影の男が言った。

「ああ、リインフォースを助け出した時に気付いたんだよ。すでにリインフォース自体に…ユニゾンする力が無くなっていた。それはお前が蒐集した結果だろう？ええ、闇の書さん」

そうするとその影は笑い始めた。

「く、く、く。アハハハハ、やはりそうかそうか。お前はやはり今までとは違う、違いすぎる。しかしお前は一点ミスをしたな」

「ああ、そうだな、唯一の失敗だ。それは」

「お前に（俺に）知性を与えた事だな」

俺と影は、同じ事を言った。そう、そうなのだ、あの『ザ・ピースト』における強制解除の際、俺は無理やり本能と知性のバランスを戻した、それにかこつけて闇の書は一番最初の使命である、そう蒐集をした、俺を。今までは術を、リンカーコアを蒐集していたが今回は訳が違う。今回は闇の書の中にいた俺を蒐集した、だからようは人間そのものを蒐集したことになる。だから俺はさっきまでの戦闘に俺は介入しなかった…出来なかった。

「あははは。それで貴様はなぜ、残ったのだ？」

「罪滅ぼしさ、貴様に知性をやった代償だ。それにお前は俺じゃなきゃ倒せない」

「く、く、く。いいねえそついう自信、だけど私はすでに物でも者でも無い。どうするのか楽しみだ」

そして俺と影の戦いが始まった。

Side リンディ

「どういう事なの？」

私はいえ、私たちは困惑しかしていなかった。それもそつだ、なのはちゃん達はここに転送された、しかも強制的に。されどあの影は

「それは、私が説明します」

そして現れたのは、さつきまでアルバート提督がメンテナンスをしていた闇の書の管制人格、いやこの場合

「リインフォース！！」

そしてはやてちゃんが抱きついた。

「な、な、あ、あ、主はやて！少し落ち着きを…」

「うむ」

「それでアルバート提督…一体何が？」



「うむ、ワシが説明できるのは…彼女はすでにユニゾンデバイスの力が無いとだけ言っておこうぞ。現在はそこにおけるヴォルケリッタ―と同じじゃよ」

そして一同が驚いた。

「はい、主はやて。そしてなぜ、現在彼が戦っているか、も私は知っています」

そして管制人格、いえリインフォースは今の現状について説明した。そこにアリサちゃんが一言

「あいつ、どんだけ一人で背負うきよ！バカじゃないの！！」

「あ、アリサちゃん、落ち着いてね、ね」

「え、すずかちゃん！」

「あはは、どうもはやてちゃん。ああ、だからアリサちゃん落ち着いて」

「なによあいつ、だから何よ、言いじゃないのよ。ここにこの人が居るんだし、どう考えてもあいつのせいじゃないじゃない。いけないのはあの男なんですよ！」

「うむ、あの男。グラム殿にも聞いたが知らないらしい…まあ嘘をついている様子はなかった。」

「それでは一体、貴一君は何を」

「うむ、それを知っていると思って連れて来たぞい」

そしてそこにはサンとムーン

「え、貴方達。なんで」

「リンディ、ごめんなさい。主の考えが読めなかった、私たちは解除された際リインフォースに魔力を渡すよう言われた」

「ああ、マスターの言うとおりリインフォースは弱っていたからな、しかし」

「そう。ありがとう、それでリインフォース、確認したいのだけどすでに闇の書と言われる物は」

「あれだろう。私は既にヴォルケリッターと変わらない身である、それにその夜天の書もすでにただのデバイス。あのようなシステムは一つも入っていない、ただのノートだ。それに私が持つてる魔法はすべて主にあの時に渡してある。」

「だから、私は思い通りに夜天の書が起動したんやな、それにこのデバイスも」

そして持っているのは十字のような金色のペンダントのようなデバイス。

「そうでしたか…わかりました、エイミィ、アルシャカスの再チャージを」

「え、リンディさん！！」

「なのはちゃん……」

「なのは殿、それが最善じゃ。リンディ殿頼むぞい」

「そ、そんな……」

「ま、待ってな、なにそれ、どうするきや……」

「これが最善じゃ。それ以外」

「待って！」 「待ちなさいよ！」

その時、アリスちゃんとフェイトちゃんが叫んだ。

「まだ、貴一は戦っているよ。」

フェイトちゃんが叫ぶ。

「そうよ、まだあいつはバカみたいに戦っているのよ。自分のけじめをつける為にそれを邪魔するの、なら私が「いや、我々が止める」え、あんたら」

その時シグナムが前に出た。

「これで罪が大きくなるのなら好きにするがいい。しかしこれは止めさせてもらう、貴一は戻ってくる、私はそう信じているからな」

「く、ガハハハハハ。そうかそうか、これはワシらが悪者じゃの

う、ならばどうじゃ、準備はするぞい。」

そういうと、不適に笑う、アルバート提督。しかし本心では、この中で一番尋常では無いほどの思いがあるのだらう。変わりたいのなら変わりたいと思うほどの。

「う、いい、準備だけだからね」「ふん」

そして三人は落ち着いたが、しかしシグナムは剣を出したままだ。

Side out

く、こいつ出来る。さっきから攻防を繰り返しているが、やはりスペックの差が出てきた。

「どうした人間、それほどか！」

く、またあの周囲一掃攻撃。これを生身で喰らえばそのまま死と言うほどの高密度の力。これが純粹な闇の書の力。

「く、ソル。」

「いけます、盾ならば花弁で」

「く、『熾天覆う七つの円環』(ロー・アイアス)!!!」

そして防ぐが、しかし花弁は二枚も残らない。しかし相手の攻撃は止まらない

「これならどうだ、貴様からの蒐集したモノだ。俺の足は緑を覆う」

その技はまずい、足元の技か。俺は直ぐに飛んだが、しかし

「く、やっと飛んだか…いけ、我が分身」

そしてなのはたちも戦っていた、あの触手が俺を襲い掛かってきた。俺は手を前にだし

「ちっ、トレスオン 投影開始」

そして出したのは黒鍵、六本を同時に投げて

「爆ぜろ！」

そして爆発させた、しかし。

「ふん、物量の差を教えてやる」

そして俺は、さらなる触手、いやすでに刃物のようなモノに串刺しになるように襲われた。

第100話（A's編五十話）。闇の書（後書き）

とうとう百話まで来ました、これからもいっそう努力していきますのでヨロシクお願いします。

第百巻話（A、S編五十一話）。約束（前書き）

とうとう三ヶ台に突入！！

第百巻話（A's編五十一話）。約束

俺はそして串刺しになった。そう、そうなるはずだった。しかし

「く、面白いな。まさかそんな大剣を片手で持って一瞬で私の触手である分身を切り刻んだとはこれは面白い」

そう俺は現在、同調してなぎ払った。そうあのバーサーカーの本来の姿の技。<sup>トレス</sup>

「行くぞ、これが古来ギリシャ神話の英雄の奥義！『是、射殺す百頭』（ナインライブズブレイドワークス）！！」

「ふ、ふ、ふ。ならばこれでどうだ」

そして、全方位に攻撃をしかれた、されど

「俺に触れるな！」

そんなものは俺は一瞬で消す。その数はたぶん軽く百は超える

「ぐあああああー！！」

しかし限界のようで俺の腕は反動を受けた。<sup>バックファイヤー</sup>しかしあいつは攻撃をしなかった。

「ふむ、お前、なぜそんなにも力を持っているのに。それを自分のためになぜ使わない。この結界魔法を外せば貴様は撤退できるだろうに。うん？」



「それはお前も一緒だろう？へっせつてえ逃がさないからな。」

「まったく、おもしろいにも程がある。ホントここで終わりにしたくないな。ならば先にあいつらでも…そうすれば貴様もとらわれる必要が無いと言っわけだ」

そしてあいつはアースラを見た

「ふ、お前バカだろ。」

「うん？」

「あいつらが死ぬと言っのなら俺の命もそこまでいい。行くぞ闇の書、トレスオン投影開始」

そして俺は剣をだした、すでに宝具と呼べるものも無くただの鉄の塊に近い。

「まだ、立てるか。すでに貴様も貴様のデバイスもボロボロだぞ。だがまあいい、それでこそ人間だ、しかし終わりにしてやる」

そんな言葉を俺は聞きもせず突っ込んだ、剣を振る、すべてを急所にめがけ、現在の力の限りを。

「既にお前の精神はあの獣でボロボロ、砕かれるお前共々」

そしてさっきまで触手で攻撃していたやつが、動き始めた。これからが相手の本領って訳か。

「はあっ」

俺は剣を振る、しかし相手は

「貴様の真似とでも言おうか」

そこには影で出来た剣がそこにはあった。

「さすが、闇の書ってか、おらあ！」

そして俺も剣を振るう。されど相手には効果がない、剣で対峙をしていてもまったく意味など無い。しかも俺の剣は砕かれた。

「さしずめ、ゲームオーバーだな。貴様らの言葉で言うのなら。ならばこれでどうだ？ スターライトブレイカー！！」

そしてなのはの魔法を打ち込んできた、しかも砲撃の色は「丁寧にピンクだ。

「お前に、それは似合わない！」

そして俺は手を出して、そしてこう言った

「術式解放」

「一度きりですよ、出来たとしても…」

俺はソルの警告も無視をして放った、そして

「絶対守護」  
ファイギス

そして盾として最大を出したのだが、しかし

「流石は私が見た人間の中でも上者、しかしその程度。これならどうだ、ラゲナロク」

そして片手を上に上げて、更なる追撃。ならば

「アイギスを二枚にすればいいんだろう!!」

「マイロードそれは、無理な」

「無理でもないさ。」

そして俺は瞬時に出した…あれ、魔力を使わなかった？

「く、く、く。そうでなければつまらないぞ、ぞうだろ人間？」

「マイロード…どうやって」

「行くぞ、残りの魔力なら、まだ剣は出せるだろう？」

そして俺は剣を一本出した、しかも

「な、ナイフかよ…もうそれぐらしか無いのか、俺の魔力」

そして俺は構えた、相手は顔は無いが笑っているように見えた。まあこんな姿ならどうぜんか。

「さて、すでに君の力は元々の半分ぐらいたったわけだ。しかし私

もそろそろ飽きたよ。それではさようならだ人間」

俺は瞬時に足を動かして

「な、なに！」

相手を蹴り飛ばした…何をしたんだ俺？

そして相手は吹き飛んで行った…目だけでも相手は山を二つぐらい越すぐらいの飛ばしが入った、俺の火事場のバカ力つてやつかな？そして俺は、諦めようとした既に退路は自分で断った。のうあのアースラでは今か今かと引き金の準備をしているだろう。これで終わりか…流石は闇の書と言ったところか、まあこれで少しははやても過去の呪縛なく生きていけるだろうからいいか、とそんな事を思っているとき

『なにちんたら、そこで座っているのよ、このバカ！』

その声は懐かしく思える、そうアリサだ、それになのは達もいる、これは

「マイロード、私のラインからです」

ああ、サンとムーンのもどちらかのラインからの通信か。確かにこのラインなら繋がるかな、けどすでに考えるのが面倒だ。

『貴一君、主の命令はどうしたんや…！』

「は・やて…」

『そうだよ、まだ私とのお話も済んでいないよ、貴一君。それにそれに』

そして泣きそうなのは。

『貴一…待ってるから』

「フエイト」

『あんたね、勝手に騎士を辞めるってどういうことよ、あんたは誰の物がまだ分かっていないようね。いいわ早くそんな奴倒して来なさい、もちろん現在のお姫様のはやてだっってそう思っているんだからね』

『アリスちゃんの言うとおりだよ。貴一君…』

「すずか」

『貴一、お前は私との約束も破る気か？』

シグナムもその場にいた。

『私はまだ、お前に恩を返していない、それぐらいはさせてくれ…頼む』

そして頼み込む、リインフォース。

『そうやで、貴一君。戻ってこなかったら許さないで！』

ああ、そうか…そうなのか、まだ俺は生きないといけならしい、

だってこんなに思ってくれる人が居るのだから。

「ソル、切ってくれ。ライン切断ぐらい可能だろう？」

「イエス・マイロード…よろしいのですね？」

そしてラインを切断する、俺は立ち上がり、ナイフを構える既にバリアジャケットはボロボロ、頭はノイズで一杯、だけど

「帰らないとな。」

「そうですね、マイロード、ですが」

そして俺は相手を見た、いや睨んだ。

「く、く、く。諦めが悪いがしかしそれも人間の性か。俺を“想像”で倒すがいい人間」

俺はその言葉にあることに気付いた、いや気付いてしまった。そして相手の魔法が俺の胸を貫いた。

第百巻話（A、S編五十一話）。約束（後書き）

さて、ここまでやってきました。これからもよろしくお願ひします

第珀庭（A's編五十二話）。ZEROモード発動！！（前書き）

スマートフォンって使いにくいねえ



第珀庭（A's編五十二話）。ZEROモード発動！！

Side リンディ

「ライン、消失。通信切断です…艦長」

貴一君との唯一の交信できるものもなく、もう彼ごとあれを破壊することしか行動は無い、我々はそう思ったが。

「まっってください、艦長…貴一君が」

そして私たちは全員でモニターをみた、もう音も聴こえずただ映像しか流れていない。そこには笑っている貴一君。あの顔は何

「あ、あの顔！ふえ、フェイトちゃん」

「うん、あの顔ってなのはお兄ちゃんと勝負していた時に出した、あの」

「「怖い顔」」

二人がそういいながら画面を見ていた、他の女の子達も。

「あの顔は。サン、ムーン。間違いなのいのう」

「ええ、間違いないです」

「マスターの野郎、何かやりだすぜ」

「な、アルバート提督に、貴方達も何を」

そして貴一君があれにやれた、そう胸を貫かれたように見えた。

Side out

やはりそういうことなんだ。なんだ簡単じゃないか。俺は……勝つ！

「うん？手応えが消えただと。どこに！！」

俺はいつの間にかあいつの後ろに居た。

「勘違いだったんだ全て。さあやろうぜ、闇の書。」

「この死にぞこないが！！」

そして闇の書が俺に向かって魔弾を撃った。

Side マリア

「やつほー皆お久しぶり、神様だよ。」

「誰に言っているのですかマリア様。それにしても…彼」

「うん、気付いたみたいね。ホント神様にしとけば良かった。さあ、魅して貰おうかな。貴方の“想像”を」

そしてそこにいる神は、何もかも知っているようなそんな顔をで。

Side out

俺は動かずに、なにもせずして全てを防いだ。いや、なにかしたと言  
うならいつのまにか展開されていた絶対守護アイギスに守られた。

「ま、マイロード。貴方は一体何を」

「ソル、今から接続リンクを開始する。あれを使う、ギル爺が封印せざる  
おえなかったあのシステムを」

「な、大丈夫ですか、既に魔力は…回復してきてる…分かりました、  
やりましょう。マイロード！」

そして俺はあれを見た、そして相手も俺を見た。

「はは、何が出来ると言う。これだから人間は、まだ私が本気では  
無いこと位貴様なら…何魔力が、いやあいつ自身が回復しているだ  
と。どういう魔法だ！」

「勘違いだ、俺はずっと勘違いをしてきたんだ。」

「なにを言い出す、まあいいそれでもこの我には勝てない。スター  
ライトブレイカー！」

そして相手の砲撃が俺に飛んできた、しかし俺は手を前に出して。  
こう告げる

「消える、それを使うのはなのはだ。」

そう言うと、いつのまにか相手のスターライトブレイカーは消えた、  
いや“勝手に発動した”絶対守護アイギスに消されたんだ。

「な、なんだ貴様!!」

そして今度は接近してきた、相手に俺は何も言わず、まるで最初からあったかの様に干将・莫耶を握り応戦した。

「な。魔力が回復したからか。しかし」

そして足場からの攻撃が入るが、俺はすぐに俺をなぎ払いながら相手を吹き飛ばした。

「グハア! さつきとまったく動きが…いや、奴自身が変わっている。なにをしたんだ、貴様!」

俺はそれにこう言った。

「想像したんだ。」

「何を言っている、想像しただと、それだけかふざけるな!!」

そして今度はラグナロクを撃ってくるが、俺はそれを今度は避けた、てかさつきまでもあれとの距離を詰めて、接近して今度は俺からの攻撃。されど相手は触手で回避した。

「なにが、想像だ。所詮それは貴様も妄想とでも言うのか!」

「その通りだ、俺はお前の、破壊、消滅、そして死を想像した。」

「ただ、それだけで我がこの我が追い詰められるわけが無い。ふざけているのか、そんな力は古来から存在などしない、それこそ神で

はないか」

俺はそこ言葉に笑ってしまった、そうかこれは神様マリヤさんがくれた力だったな。

「勘違いしていたんだ、俺はずっと物を“創造”することだと思っていたんだ、違うんだ、結局それは俺の想像が生んだ創造でしかないんだ。」

「く、ふざけやがって!」

そして相手の全砲火、されど俺は歩き続けた。あいつに向かって

「結局、それは想像であり、創造であった。それがただ物から物事に変わったただけだ、だから俺はお前の死を創造（想像）したんだ」

そして俺の視界にはいつのまに至るところに線が見え始めた、いやこれも俺の想像の結果、あいつに死なせるためにはこれが必要と言うこと、その魔眼の名は『直死の魔眼』その線こそが死であり、そして今現在俺がずっと見ているあいつにもそれは存在する。

「そんなことが許されるか!」

そして今度はさっきまでとは格違いの触手の量で俺に迫りが所詮。

「無駄な足掻き」

俺の持っている夫婦剣によって消滅しまっている。

「な、なぜだ我の分身ともいえるこれが消えていくなんで」

「殺しただけだ」

俺がそう言つと

「ば、バカめ、我は既に者とも物とも言える重複の存在、そのような存在をどう殺すと言つのだ」

「死は…万物の結果、あらゆる存在は発現したと同時に死を潜在する」

「そんなバカなことがあるか、いいか生きていなければ命は無いだ。命の源の箇所は生き物でしか有り得ないのだ！」

そしてあいつは今までも見てきたであろう全ての魔法を俺に注ぎ込んできた。

「死ね、死ね、死ね、死ね死ね、死ね死ね死ね、シネシネシネイシネ死ネ！！」

しかし俺はその全てを殺す、自分に来るもの全てを殺した。

「死を視えているのなら…正気でなんかいられない。」

「き、貴様…どう、どうやって」

「死を視えているのならとても立ってなんか居られないんだよ。」

俺はさらに一步、一步とあいつに近づく。

「物事の死が視えると言うことはこの世界が  
あやふやで脆い  
という事実投げ込まれると言うこと。」

「地面なんて無いに等しいし」

「空なんて今にも落ちてきそうだ」

「一秒先にもすべて死んでしまいそうな錯覚をお前は理解できない、  
それこそが死だからだ」

「な、なん…だと…」

「結局、命と死は背中合わせで居るだけで永遠に顔を合わせないものなんだよ」

「ふ、ふざけるな！それが真理ならばなぜ貴様はヒトのカタチを保  
てていられる。貴様、何を見ているんだ。く！」

そして来る、何か。もう俺にはなんでもいい、それは関係ない。

「ソルジャー、行けるな」

「やりましょう、今のマイロードなら勝てます、いや“殺せます”  
もう貴方は戦士だ、一人の子供ではありません、勝つために」

「すべてを排除する。ゼロモード発動」

「ZEROモード」

そして俺は光に包まれた。



第珀庭（A's編五十二話）。ZEROモード発動！！（後書き）

さあてもう少しいでA's編も終了ですのでちよいとした番外編と事件と、それからの学校生活を書いたらとうとう自分作者が待ちにま  
った第三期に移ります、そうStrikerS編に入ります。これ  
からもよろしくですう！

第103輪（A's編五十三話）。闇は消え闇は生まれる（前書き）

題名とちよいと合っていないかもしれませんがご了承ください

第103輪（A's編五十三話）。闇は消え闇は生まれる

そして俺の姿は今までとは違う姿へと進化した。その姿はライトア  
ンドダークネスの鎧のようだが、しかしマントもなく、バイザーも  
無い。変化は腕や足のバリアジャケットの色が白である。

「さあ」

俺がそう言つと闇の書は攻撃を再開してきた。

「そんなことがありえるか、こ、こんなことが！」

魔弾を俺は避けない、その程度の攻撃防ぐ価値も無いからだ。俺は  
剣のネックレスを取り

「行くぞ、ソル。」

「承認」

そう言つと、ソルは光だし、そして一本剣となった。見た目は機械  
の塊のような剣、大きさは普通の大剣に匹敵する、しかしそれより  
も変化があつた。

「貴様、それが本懐か！」

そう、俺の背中からまるではやてのような翼が生えた、しかしそれ  
は光で出来ているようなあやふや物だった。そして闇の書が砲撃や、  
魔弾、様々は魔法を出してくるが。俺は剣を一振りする、そして闇  
の書は吹き飛んだ。

「フザケルナ、ナアアアアアアアアア！」

そして俺に突進してくる。

「この、我、闇の書と謡われた者がこのようなガキにやられるか。」

そして相手は黒々しい剣をだして俺に向かってくる、俺は今までとは違い冷静にそれを裁く、そして相手はさらに魔弾を撃ってくるが。

「く、かき消されるだ。」

そして俺は剣を右手だけで持ち。

「決めるぞ、Finalモード」

アームドシューティングモード  
「最終武装銃砲」

そして今まで大剣だったソルは俺の肘までも武装に変えるデバイスに変わった。そして俺は相手に突進する

「く、まだだ。まだ終わらん、我はヒトの欲、ヒトの業。」

「だからなんだよ、だからって勝手に主を決め、そして要らなくなつたら消すのか！」

「それを決めたもの人間だぞ、人間」

「ならば、ならばその再生を俺は破壊する……！」

そして俺は相手の懐に入った、今なら理解できる。この線の収束、その点がその死そのものだ。俺はそのままソルで相手の心臓の辺りに有る点突き、上に上げて。

「これで終わりだ。貴様には慣れた死（道）だろう？消滅と言う名のな」

俺は上につきあげて完全にロックしている相手が不意に笑い

「貴様の様な者が我の主であればこうならなかったかも知れんな」

「ヒトは過ちを犯す、いつか絶対に。」

「そうだな、貴様もな」

「ああ、だけどそれを止めてくれる奴が居れば違つかもしれないがな。じゃあな、闇の書」

そして俺は引き金を引いた。

「ゼロ・エンド・ギャラクシー」

ソルの言葉と同時にそして闇の書は消滅した。

Side ????

ここはある管理外の世界の一つの地下室、その男は椅子に座り、後ろには白衣を着た男が自分の指を噛んで血を出すほどに噛んでいる。そしてその前には無数のモニターがあった、それに映し出されていたのは、さっきまで闇の書と呼ばれたロストロギアとそしてそれを

“殺した”少年だった。

「申し訳ありません、あのような不義理な者を送ってしまい、しかもロストロギアを失うような事態に。」

そしてその白衣の男はその椅子に座っている男に言う、しかし男は笑った。

「く、く、く。アハハハアハハハハハハハハハハ」

「そ、総帥。どうかなさいましたか？」

自分がもしかしたら撃ち殺されるのではないかとその白衣は心配していた、しかし返ってきた言葉はこうだった。

「視たか。あの強さを、あの管理局ですら恐れたあれを、あんな簡単に消滅させるなんて……」

「そ、総帥」

「素晴らしい、素晴らしい!!!」

そしてさっきまで座っていた男は立ち上がり拍手をし始める。

「そうだ、ドグ。君に質問しよう、科学者としてあれはほしいか？」

そして白衣の言葉はこう答える

「もちろんです、あの力…すべての人類に、平等に。」

「ならばいい。今回のことは不問としよう。それに突撃は戦争の華だ、あのような者が消えただけなにかあるわけでない。しかし、まさかこのような凄惨なものが見つかるとは…これは愉快だ、愉快すぎて壊れそうだ。」

「は、はい」

「ドグ、早速研究を続けるぞ。今度はもっと義理のある者でな。意味はわかるな？」

そして不適笑うその男は怖かった、まるで次は死だ、と宣告しているようだ。

「心得ております総帥。それでさっそく プランから、やり直しを」

「うん、いいね。新しい敵だ、新しい戦争だ、素晴らしいよ。しかしまだ我々はそのような時では無い。後十一年ぐらい経ったら再会しよう、少年、いや怨敵よ。」

そしてその男がなにかを握り締めると画面の映像は消えた。そして立ち上がり、奥へと入っていった。

Side out

俺は闇の書に勝ったようだ。そして徐々に魔力が切れてくるのがわかる、それは俺が願ったのは闇の書の死、それが終われば願いが終わる。その時、今になって気付いた、周りが赤い。なんでだ

「マイロード、眼から出血しております。」

ああ、だからか…ソルの言葉に返すことも出来ない、なんでだろう？

「申し訳ありません、私もすでにボロボロ回復魔法を発動できません、どうか自分で」

もう頭がノイズで一杯で考えることが面倒だ、口を動かす命令を出すことも面倒だ。

「マイロード、マイロード！！」

そしてソルのその言葉を聞いた俺は、倒れるしかなかった。そして自分で作った結界は割れた、そんな感覚の中俺は地面に身を任せた。

「マイロード！！」

S i d e リンディ

それは一瞬のこのように終わった、そこには立っている貴一君とそして

「闇の書の反応、完全にロスト。艦長：貴一君がやりました！！」

エイミイがそう言って立ち上がる、他の皆もさっきの映像を見ていた、まるで奇跡のような戦いを。しかし次の瞬間。それは凍りつく事になる

「あ、結界も解除！？」

貴一君が倒れながら、既に眼から出血をしていた、さながら血の涙。そして倒れ、モニターからはソルの叫び声



「マイロード!」

その声がこのアースラ包んだ。

第103輪（A's編五十三話）。闇は消え闇は生まれる（後書き）

これでほのぼのが書ける!!

第三話（A's編五十四話）。衝突しとくと友達って凄く長い付き合いにな

アンケートをします（予告です）

第二百二話（A's編五十四話）。衝突しとくと友達って凄く長い付き合いにな

Side リンディ

闇の書の完全破壊の後、貴一君は急いで回収され、現在アースラの治療室で集中治療を受けている。出頭医としてアルバート提督が、そして補佐にプレシアさんを。そしてドアが開いた。

「アルバート提督！それで、貴一君は」

現在、なのはちゃん達は別室で待機してもらっている。ヴォルケリッターとはやてちゃんも一緒である、ちなみにユーノはこっちに居る。

「うむ、危機は脱した状態じゃな。身体と言う身体の神経全てが寸断される前の状態じゃった。しかし今は、目覚めれば大丈夫じゃ…  
そう思われる」

「思われるって…」

「リンディさん、実は貴一君の身体は私達がどうにか持ち越したは、  
だけど精神の方が…まだ覚醒してないの、まるで石のように。」

プレシアさんのその言葉に我々は絶句するしかなかった。

「目覚めていないだと…ふ、ふざけるな…！」

激怒したのはクロノ君だった。

「あいつには目覚めてもらわなければいけないんだ、どうあっても僕はあいつに」

「……礼と謝罪がしたいんだ」

その言葉は私にも重く来た、あの後貴一君の集中治療が始まったときにすべての事情をシャマルさんからすべて聞いた、それはある意味完璧で、ある意味歪すぎる物だった。それはそうだろう、どう考えても貴一君が悪者になる可能性がある行動、ある意味自殺なのだから。しかもあのソルは何も言わず、修理は出来ても干渉できない、アルバート提督も悩んでいた。

「とにかく、今は寝かせておいてほしいのじゃが」

アルバート提督がそういう

「わかりました、貴一君は我々が責任を持って預かります」

「それと、貴一は普通の部屋しといてくれるかのう、既に身体は完治しておるのでこのう」

「え、あ、はい。分かりました、それなので……」

「子供達の事かのう？」

「……はい」

現在は別室で待機しているが、全員貴一君が心配でしようがないのだ。それは私達よりも大きいだろう、特にはやてちゃん達は一番大きいだろうに。

「部屋に入れるのは良いじゃろう、まあ大丈夫じゃよ」

そのアルバートの顔はかわいい孫を見る、おじいさんの顔でした。

Side out

Side はやて

貴一君が集中治療にあたっている間にシャマルが今までの事を全部話してくれた、そして

「ふーん、それであんたは貴一を嫌いにならないでって言いたいの？」

そう、私が全ての原因でもあるんや、だから最初に私はそういった、どうか貴一君を嫌いにならないでって、だけど答えは

「ふざけんじやないわよ！そんな事であいつを嫌うはずが無いでしょうが！！なによ、しょうがなかったんでしょ、あんたを助けるためには。だったらいいわよ、あんたが私たちの騎士を辞めるならこっちははやてを取るわよ！」

と、なんか宣言されてしもつた。せやけど

「はやてちゃん、アリサちゃんはね、友達になろうって言っているんだよ」

「な、すずか、変な事言わないでよ。ただ、そのこういうのもなんかの縁かかってああ、もう／＼／＼／＼／」

目の前に居る、アリサちゃんは地団駄を踏んでいた。すでに自己紹介は最初にしたから全員の名前は教えてもらった、こっちも全員の名前を教えたんやけど。

「だから高町なのはだって！」

「ああ、もうめんどくせえな。なんとかだろ！」

ヴィータちゃんはなぜかなのはちゃんに絡んでいるし。他のシゲナム達は身体検査のため他のところに居る、リインフォースも一緒や。

「けど、はやて、でいいかな？」

「あ、うんええよ。こっちもフェイトちゃんって呼ぶから」

「うん、よろしくね。えっとその足はやっぱり」

「せや、闇の書のせいやで。だけど貴一君のおかげでどうにかこれ以上は進行しなかったみたいやし」

「そうなんだ、やっぱり貴一が焦っていたのは「ああ、もうはやて！」「え」

いきなりのアリサちゃんの声に私はびっくりして

「ひゃい！...」

裏返ってしまった。

「今日から、あんたも私たちの友達だからね、いいわね！」

「え、せやけど。私は」

「いいの、そんであのバカに言ってやればいいのよ、はやてを守る騎士なら当然友達の私たちも守るのってね、すずか！」

「もう、アリサちゃん……けど、改めてよろしくねはやてちゃん」

「あ、よろしくなのはやてちゃん」

「よろしく、はやて」

私はうれしくて涙が出てきてしまった

「ありがとうな、ありがとうな」

「違つでしょ、はやて。よろしくよ」

「そつやな、よろしくな。アリサちゃん、すずかちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん」

そして私たちは握手をした、その時通信が入った。

『皆さん、そろそろ帰宅の時間ですよ。はやてちゃんも今日は家に帰ってください、ちなみに家からは出ないでくださいね。料理とか食材は私達が行きますから。』

「エイミィさん、貴一君は？」



フェイトちゃんが聞いてくれた

『なんでも大丈夫のようよ、だけどさすがにあの戦闘からのせいかな今は疲れて眠っている見たい、だから今日はかえってまた今度。いかな皆？』

全員、それに頷いた。私的には会いたかったけど、しょうがないかもしれないと思い頷いた。そして通信で違う女のヒトが現れて

『フェイト〜今日は一緒に帰りましょうね』

「うんお母さん」

そして通信が切れた。あれがフェイトのお母さんか、美人さんやな。そして身体検査をしていたシグナムたちも帰ってきた

「ただいまです〜はやてちゃん」

だけどその腕には、なにかついていた。

「お帰りな、みんなせやけど、それ」

「主はやて、我々は一応今回の事件の重要参考人ですが故に。リミッターのようなものでしょう、主はやてにも魔道書はこのアースラが管理すると言われたでしょう？」

シグナムがそう言ってくれた

「あ、そうやったね。それじゃあ私たちも家に一度帰るで、貴一君は今日は安静のようやし、リインフォースも帰るで？」

「はい、主。」

その時のリインフォースの顔は笑顔だった。

S i d e o u t

知らない天井、もとい知らない空間、いやこの空間はすでに三度目かな。

「どうも神様マリアさんお久しぶりです、俺は死んだんですか？」

そつ目の前にいるのは今回も露出が高い服をしているお姉さんが俺の前に居た。

第三二話（A's編五十四話）。衝突しとくと友達って凄く長い付き合いにな

前書きで書きましたがアンケートを今度したいと思います、それで  
は次回、お会いしましょう、バイバイ

第105輪（A's編五十五話）。神はやはりシヨタコンだった（前書き）

アンケートは後半で！！

第105輪（A's編五十五話）。神はやはりシヨタコンだった

俺が目覚めたその空間は空であろうそんな空間であった、そう思えばここにくるといつもそんな感想をもつな。

「それで、マリアさん、俺って死んだの？それともあたらしい依頼？」

しかしマリアさんはなにも答えずに俺を見るやいな。

「やっぱし、かわいいい！ー！ー！」

抱きついてきた、俺はその大きな山に埋もれることしか出来なかったが、そんなときの助け舟が出た

「マリア様！ー！」

そこにはいつにも増して怒っているテーゼさんでした、たか最初っからいたのなら助けてください。

「あはは、ごめん、ごめん。さて貴一君、あなたは死んでいませんよ。それから新しい依頼でもありませんよ」

「は！？なら俺がなんでここにいるんだ？」

「それはですね、貴一君がとうとう自分の力を完全に把握してしまつたためです。」

勢いよく言うが、分からない。そしていつのまにかコタツが用意さ

れており、俺もそこに入ってみかんを剥きながら話を聞いた。

「貴一君、この言葉知っていますか、生きているのなら「神をも殺せる」そのとおりです。それで今の貴一君は？」

そう思つて俺の思い出す、そう思えばあの闇の書を倒す際俺は直死の魔眼を創造した。

「ああ、そう言うことか。そう思えば俺のこの能力つて出しても消せないんだっけ。あれだけど今の俺の目には線も点も見えないぞ」

「それは私から説明します」

そしてテーゼさんもこたつの中に入って話し始めた。

「貴一様は自分自身でリミッターをつけているのです。そうですね、例えば殺したいと思つて相手を見てみてください、そこにいるニートに」

そして俺はすぐにマリアさんを見た。

「え、私つてニート扱い！！」

そして俺は殺気を当ててみた、そしたらマリアさんから非常に細い、いや大体はないような線が見えた、もちろん点など存在しない、これこそ隙無しという状況だ。

「なるほど、これは凄いな。しかし普通ならデメリットの頭痛があるだろう、ただでさえ死を見ているのだから」

「ふう、貴一様忘れておりますよ。あなたのあのデイケイドのベル  
ト思い出してください。」

「あ、そう思えば俺の想像まま出てきたんだっけ、てことは」

「はい、その眼自体のデメリットはありません。」

「あはは、そうか。それでこの眼のために俺を呼び出したの？」

「うんうん、私が会いたかったから「マリア様！」じよ、冗談よ。  
そうじゃなくてどうだった、私の死を見てみて」

「いや、てかあんたらに死があるのか微妙だろう、まあ線は見えた  
が。それで？」

俺はマリアさんの質問の内容がよく分からなかった。

「だからね、ああもうお偉いさんなんて知らない、ようはね、貴一  
君が想像したことが創造にした事になるんだけど、それがもし、神  
様のいない世界なんて想像したら私達がいなくなっちゃうから、そ  
んな想像するなって忠告だそうよ。どう思う貴一君？」

「どつってマリアさん、俺はねその答えが出てきているんだけど。  
大体にして転生させてくれた貴方たちを消してどうするんだよ、そ  
れじゃあ俺の因果がなくなってしまうだろうが、それにこの能力は  
あなたがくれたものだ、もし消えてしまったら俺自体が消えるかも  
しれないだろうが」

「ねえ、私もそういつたんだけど、念のためとかでさ、ごめんね貴  
一君。あとでお姉さんが叱って「テーゼさんそういうことなので上

にはそう伝えてください」「了解しました」「こらあああ！一人とも無視なんて酷いぞ！！」

「はあ。マリアさんもありがとうね、だけどそれはすでに俺の脳が教えてくれているから」

「もう。いいわ、なら貴一君今日は一緒に寝ま」「せんから」「ぶう、いけずゝ私はこんなに抱きしめたいと思っているのに」

「マリア様、すこし落ち着いてください。それにしてもこんなところでのんびりしてよろしいのですか貴一様」

「はい、どういうこと？」

「あ、そう思えばこの空間に呼んでからあの世界だと七日はたっているよ。なんて言ったらってあんな体だったんだから。」

「それで本当は？」

「貴一君が起きた時に私が会いたかったから？」

「TEEゼさん、神様にクビってないんですか？」

「それがあるのならば、私が使用してクビにしています」

「うわあ、部下と貴一君がいじめる、いいもん貴一君に抱きついてやる」

そしてこたつの中に侵入して俺の近くに來るが、俺は足で肩を抑えた、しかし



「甘いわ、私のほうが大人なんだから」

そして俺は足首をもたれて、逆に引くずりこめれ、そして気を失った。

S i d e    リンディ

「エイミイ、書類大丈夫？」

「は、もう大体の書類は出来ています、しかし大胆な行動に出ましたね艦長」

現在私たちは先の事件闇の書の事件についての書類をまとめている、勿論それにはちよつとした細工がされていた。

「まさか、貴一君の事を、こちら側のスパイにするなんて…」

そう、貴一君の処理はこの書類、ようは形式上私たちの民間協力者はやてちゃん達のお願いであった、「自分達はどんな罪になっても構わない、だけど貴一君だけはどうかお願いします。」そんなことがあってから、すでに数日がたった。と、いうよりも事件が解決して貴一君が眠りについてから一週間がたった。その間に大体の事件の後処理は終わっていた、それはギル・グレアム提督が退職したことが大きいのかもしれない、グレアム提督の計らいのおかげではやてちゃん一行は管理局に勤めこれからの恩返しをと言っていたため我々もそのような手配に勤しんでいた。ちなみになのはちゃんたちは貴一君が心配のようでこの一週間はこのアースラにいる。さすがにアリサちゃんやすずかちゃんのような民間人はもうこれないが、時たまに連絡を取ることは許可をした。二人とも貴一君のこと

が心配のようで一日に十回は連絡がある。

「失礼するぞ、リンディ殿。我々の処分についてだが、少しよろしいか」

「はい、シグナムさん。それでは艦長室に」

そして私は最近では私たちにも話すようになったヴォルケリッターの面々だが、大体はリーダー格のシグナムと私は話をするようになった。

「それでどうかしましたか、確か処分ではあなた方は一時的に我々の士官学校、そして訓練、そして管理局入りでしたね。はやてちゃんには先にあの足のリハビリがありますから。」

「はい、それはいいのですが。お願いでリインフォースについてなんです」

そう、リインフォースの立場が一番、危なかったが。アルバート提督が調べたところ彼女からリンカーコアが発見はもちろんあったが、それとシグナムたちと同じと言うところで新たな騎士と言うことで処分が決定。

「はい、リインフォースさんについてですか？」

「はい、主はやての足が治るまでのボディガードとさせたいのですが」

「うーん、難しいわね。一応管制人格だったと言うことでこちらもさすがにそこまでの自由は。」

「そうですか…わかりました……」

その時、私の画面に映っている映像をシグナムは見ていた。

「どうかしたのシグナ…ああ、貴一君ね」

彼女達はたぶん一番貴一君に救われたものたちではないかと私は勝手に思っているのだが。

「まだ、起きないんですね。貴一は」

「ええ、もうすでに一週間が経ったわ。アルバート提督もプレシアさんも調べているけど分からないらしいわ。それにソルも目覚めな  
いままだそうよ」

「そうですか、それでは私はこれで」

そう言うと、シグナムはいそいそと部屋を出て行った、行く先は勿論貴一君の部屋だが。現在その部屋にはなのはちゃんにフェイトちゃん、はやてちゃんに、リンフォースだ。最初の三人は夏休みが終わるまではここにいたいだそうだ。そしてこれにいつもシグナムも合流する。たまにアルフや、プレシアさん、ヴィータちゃんも来るが常時はこの五人だ。

『艦長!!』

その時エイミイの通信が入った

「どうかしたの?」

そしてエイミィは笑顔でこういいました。

『貴一君が目を覚ましました!!!』

第105輪（A's編五十五話）。神はやはりシヨタコンだった（後書き）

と、言うことで予告していたアンケートしたいと思います、それはなんと！

今後の予定なのですが、このままだとちょっとした短編をした後に、とうとう第三期のにおいやらキャラを出して第三期に突入なのですが、その前に貴一君のもう一つの事件が見たい方は感想に書いてほしいです。それではどちらかでアンケートにご協力ください、お願いいたします。

第百六話（A's編五十六話）。目覚める主人公（前書き）

アンケート継続して募集中

第六十六話（A's編五十六話）。目覚める主人公

さて、現状を確認すると、俺はまずベットで寝ている。うん、これは普通だ、たぶんあの襲われた瞬間にテーゼさんが転送してくれたのだろう。だとするとここは元の世界だ。しかし何も見えない。ホントにも見えない。俺はそう言つと目のほうに手を障ろうとする。

「ダメ！！貴一」

この声は

「フェイトか？えつと」

「……貴一！！（君）……」

目が見えないがこの声からにフェイトと、なのはと、はやてだろうが。しかしそれが聴こえた瞬間、俺は衝撃が体に来た。しかし、温かい、これは抱きつかれた？

「あのう、すまんが……」

そして全員が気付いたのだろうな。そして全員俺から離れるがしかし近くににいるのだろうか……ここはベットの上？

「貴一君、起きたようね。体は大丈夫かしら？」

「ええ。体は大丈夫のようですよ、リンディさん。それで俺は一体どうなっているんですか？」

「あら、今現在、眼を隠されているのにずいぶんと冷静ね。」

「体は動きますから、それにここはたぶんですがアースラですよね？家のおいがしませんしそれにはやても居るって事は。」

そしてさらに足音が聞こえてきた、誰だ？やはりクロノか、しかしその声は意外な人だった。

「相変わらずの観察力じゃのう、貴一よ」

「ギル爺…」

「なに、身構える必要はないぞ。今はお主はアースラの保護下にあるのじゃ。それに現状のお主の立場は面白いものになっておるぞ」

そして、その言葉と同時にリンディさんが説明し出した。内容によればはやて達の処分は大体はあの爺さんのおかげで軽くなっただけだが、俺的には当然だと思っただが。そして俺の立場は

「スパイですか？」

「ええ、そうよ。そして最後のあの映像は処分しましたから」

「はい!?!」

処分したつてもしかして、俺のあのゼロモードの姿で闇の書を破壊したあれを

「なぜです?」



「それは貴一がしっておるのではないか？」

ギル爺が俺をからかう様に言う。

「そうかな、ギル爺？それしても何故にこの包帯を取っちゃいけないの？」

「ふむ、それはのう」「貴一君目が覚めたって」「…ちょうど良い所に来たのう。プレシア殿、説明を頼めるかのう？」

「あ、は、はい。えっと貴一君、あなたのその目はなぜか私たちの魔法が干渉できないのよ、だから治っているかどうか分からないのよ」

あれ〜だけどあの空間の時は普通に見えていたから、大丈夫だろう。

「大丈夫ですよ」

そして俺が包帯を取った。その時、なぜかなのは達から悲鳴に近い声が聞こえたような気がしたが。そして普通に視力は戻っていたし、そしてその景色は。

ベットに俺は寝ているような状態で普通に居たが、目の前にはなのはとはやて、そしてフェイト。続いて、ドア付近にエイミィさん、クロノいたのか…そして、俺の横には左にギル爺と、リンディさん、そしてプレシアさん。そして右には。

「シグナム？」

現在俺のベットに寄っかかっている、シグナムしかもレヴァンティ

ンも持つてる。

「彼女は、あなたのボディガードをしていたのよ。私達が寄りつくとすると凄い眼だったのよ」

リンディさんがそういうに、しかし寝ているのだが。

「今は、はやてちゃんたちが来ているから、安心して寝ているよね。それに」

「あれ、以来だな。革新をもたらしてくれた少年よ」

そして、部屋の隅に居たのは

「リインフォース…」

「うむ、お主のおかげで彼女からは何もバグもなかったぞ。それではワシらは少し外にいるとしようぞ」

そしてギル爺や、プレシアさん、そしてエイミィは、あ、クロノを引っ張って行ったな。

「貴一君、どこの痛くないよね」

「ああ、大丈夫だぞ。それにしても今は何日だ？夏休みは」

「まだ、終わってないよ貴一。アリサちゃんたちも心配していたよ」

「あはは、そうか、心配かけたか。だけど、俺はもう」

「ああ、それは完全解決やで貴一君。」

はやてがなぜか、上機嫌で言っているが？

「実は」

そして俺が寝ている時になにがあつて、どういふことがあつたが聞いた。まあ和解もしてすでに友達らしい。それで

「俺はまた、お前らの騎士なのか？」

「もちろんなの！」

「そうだよ、もう少しで学校なんだから、お願いね貴一」

「いいな、私も早く行きたいな」

そして俺らが話しているとシグナムが起きた、そして俺の顔を見るに目を一瞬合わせて、そしてもう一度俺を見るなりに

「あはは、おはようシグナ「貴一！！」「ノファー！！」

そして抱きしめられた、てか苦しい！しかしこのやわらかいのは…  
考えるのはやめよう。しかし

「「シグナム！！」「」

はやてとフェイトが大声を上げた、そして

「はっ！す、すまん、貴一／＼／＼／」

「あ、ああ、大丈夫だから。ありがとうな、心配してくれて。」

「あ、あ、ああ／＼／＼」

「私も心配していたなの!!」

「そっだよ、貴ー!」

「シグナムだけか？私らも」

「あはは、ありがとな、お前ら。それにリインフォースも」

「なに、主の傍に入れるのはあなたのおかげだからな。これぐらいは当然だ。」

そして俺らは今まで俺が寝ていたときの話をした。

Side ギル

うむ、あの様子だとなんとも無さそうなのう。

「それで、いいかげんお前も起きたのだろう、ソルジャー」

「マイロードの意識確認。再起動、お久しぶりです、ドクター」

「うぬ、目覚めで悪いが。なぜに“あれ”が発動したのじゃ、ソルジャー」

ワシが聞きたかったのは、あのゼロシステムについてだ。『ゼロモ

ード』それはソルジャーの唯一の攻撃魔法兵器。本来のライトアンドダークネスの力をソル一つでしかもオーバーヒートした状態で使用する、一言言えばあれは使用者を破壊する、まさにゼロに変える力、しかし貴一の見せたのはそれを凌駕する存在。

「はて、あのシステムは元よりその所持者<sup>マスター</sup>となったものの許可さえ降りれば、使用できるはずですが？」

「馬鹿者め。あのシステムはワシが封印したものじゃぞ、あれは元より危険すぎるものだ。相手の動きを予想する物になり、さらにお主のもとよりの能力である、身体の強制進化。そんなことをすれば、マスターはもたないはずじゃ。しかし、あの戦いで貴一の体はあの目以外はただの神経断裂に等しい傷のみ。ワシの計算上で出てきた最低限の被害で五感が一つなくなるものじゃった。それもその計算で使用したのは貴一の父親じゃ。しかし貴一は実際は9才で使いこなした。一言言えば異常じゃ。知っておるのじゃのう、ソル？」

「はて、なぜそのような事を」

「おぬしが目覚めたのと同時に貴一が起きた。ようなリンクをしたのじゃろう」

「……黙秘します」

「ふむ、そうか」

その時の老人の顔は、久しく見ていなかった、戦士の顔だった。

Side out

第百六話（A's編五十六話）。目覚める主人公（後書き）

アンケートに継続して募集中

第10七話（A's編五十七話）。残りの休日（前書き）

最近ストックが減るに減っています

第10七話（A's編五十七話）。残りの休日

さて、俺の体の再検査も終了した。ちなみにあの後クロノから土下座されたり、アリサには怒られるは、すずかには泣かれるは。まあ心配させてしまったと思うと罪悪感で一杯なのだが、しかし

「なんであなたも一緒にいるんですか、シヤマル!」

「あら、貴一君。私はいちやいけませんか?」

「ふふ、貴一君、シヤマルは現在私の助手をして貰っているのよ。まあ今の期間限定なんだけどね」

「そうなんです、だからプレシアさんの助手をしています」

「そう、思えばお前らの処分もそんな感じか?」

「はい、貴一君とあのグレアムさんのおかげで私たちの処分はまあ軽いものになりましたよ」

「ふふ、それに貴方たちも最終戦では管理局に協力してくれたし、それにはやてちゃんがああ言う状況ならしょうがないわ。ってリンデイさんが言っていたから」

そして俺は現在、魔眼を封印して検査に入ったため、オールパスでいけた。そして今度はアースラの食堂にて、俺の処分が発表されることになっている、どういうことだよ俺の処分が食堂で発表って。

そして俺は食堂に行くと、リンデイさん一行と、なのは達のお姫さんズ、さらにヴォルケリッターにギル爺。



「貴一君」っちですよ」

そして俺はリンディさんの指示通りに座った。まあ簡単に言つと囲まれているんだがね。

「うむ、それでワシから説明しようぞ。」

「え、ギル爺から!？」

「うむ、それでは星川貴一、以下のもの処分は……本部による決定があるまでは管理者と同じ生活をしてもらう。」

管理者、これはようははやてと同じということだろう。

「そして、もっておる、デバイスはすべて没収じゃ。」

「え!？」

ムーンや、サンも無いのは辛いが、ソルまでもいないとなると、これは本当にきつい。

「なに、安心せい。サンもムーンもソルもワシが管理することになつておる。」

「…そうなんだ」

安心はできるが、相棒達がないことには代わりがない。

「そして、お主についてのちゃんと処分はあと八ヶ月後にきちんと

した処分が決まるぞい」

「は、はい」

「あ、あのう、アルバートさん？」

「うむ、なんじゃ、フェイト殿？」

「デバイスが無いってことは貴一君は魔法も使えないんですか？」

「そうなるのう。まあなのは殿やフェイト殿は既に今回の功績で管理局入りは決定じゃろうな。まあもし貴一が危険になったら、お主らが助けてくれ」

「「はい！」」

「それは私だ」

「し、シグナム。少しは抑えてな？」

「あ、これはすいません、主はやて」

「あ、そうでした。私からも一ついいですか？これははやてちゃんと貴一君に関係することですから」

「なんですかりンディさん」

「えっと、監視するのが面倒ということですので。はやてちゃんのお家に貴一君も当分は一緒に住んでくださいね」

「え!!」

「そうですか、了解です。ようは監視するなら一緒のほうが楽と言うことですね。ですけどもう直ぐで俺学校なんですけど…」

「せやけど、貴一君の制服ってうちに無い？」

「あ、そう思えば俺ってはやての家に居たのって夏休み前からだから…はい、大丈夫です、それじゃあはやての家で」

「え!!」

「それじゃあ、それでよろしくね。ちなみにはやてちゃんのお家には日替わりでヴォルケリッターの人たちが帰ってきますし、それに」

「私は主の傍で待機だそうだ」

「え、それほんまなのリインフォース」

「ええ、そうよはやてちゃん。シグナムさんからの要請でね、確かに今のはやてちゃんを一人にするのは危ないと言うことで、私が申請しちゃいましたから。それに一応皆さんにはリミッターをつけてもらっていますし。まあ貴一君やはやてちゃんには没収という形でそうしておりますけど」

ちなみに、リインフォースの事を聞いたのだが、すでにデバイス、としても様はユニゾン能力はなくなってしまうているが、魔力は闇の書と言われたことだけのある状態だそうだ。しかしまさか、闇の書自身がリインフォース？のフラグを立たせるとは、これも摩訶不思議である。

「それでは今日はこれで終了ですね。貴一君、くれぐれも体に異常を感じたらすぐに知らせてくださいね」

「はい、分かりました。」

「それでは今回の闇の書の事件はこれにて、終了です。なのはちゃんも今日からは当分ゆっくり休みように」

「はい」

「フェイトちゃんは、今日からプレシアさんもお休みにしますので、よい夏休みを」

「はい」

「はやてちゃんは早く、足が歩けるようにしないとね。」

「はい」

「それと、貴一君はこの休みを有効に使うように。まあ魔法は使えないけど」

「はい」

そして俺は食堂を後にした。ちなみに俺らは明日から休日に入る、いや元より休日だったのだが、今は八月の二十三日、あと夏休みは七日ある。ちなみに俺はこれからの五日は予定が入っているようだ、題して「みんな温泉に慰安旅行しに行こう」と、いうのだ、なんでもはやてが俺が最初に行った温泉旅行の話のアリサたちにしたら、

こうなつたらしい。ちなみにメンバーの予定では、俺、なのはファミリー、フェイトファミリー、はやてとリインフォースに、シグナム、すずか一行、アリサ。らしい、なんでもアリサとすずかは習い事だらけでまともな夏休みじゃなく、なのは達も管理局の仕事をしていたらしく、全員の家族は快くOKをだしたそうだ。

「それでは家に帰るといいますか」

そして俺の戦いは一幕終わりを告げた。

Side ギル

今日の食堂にて、今回の事件は幕を閉じることになった。ワシはすでにムーンとサンは元より、弟子達に返すつもりでいる、それは

「く、く、く。ソルよ、お主の主になさわしい状態で今度は会えると思うぞい」

「はい、たのしみにしていますが。本当にこんなことが可能なのでしょうか？」

「なに、ワシに不可能のことはないぞい」

そしてワシはアースラを出て、本部のミッドチルダに向かう、今日は古い友人に会わなければならない、これで今後の貴一の未来が決まるかもしれない

「レジエンオプブルジャー  
…伝説乃戦士…」

「ドクターなにか？」

「なに、なんでもない。それでは行くぞ」

side out

第10七話（A's編五十七話）。残りの休日（後書き）

文化祭が六月にあるとかきちい

第百八把（A's編五十八話）。残りの休日パート2（前書き）

もう、休んでいいいよね、あほか!!……乗り突っ込み……



第八八把（A's編五十八話）。残りの休日パート2

さて、今日は待ちに待った旅行の日なのだが…これは

「ふむ、渋滞というやつだな、これが。そうだろう貴一」

リインフォースが助手席からそんな事を言っている。ちなみに車は三台用意した、まずはなのはファミリーで一台、それとアリサ、すずか一行、フェイトファミリーの大きなバンが一つ、そして俺らが居る軽には、俺とリインフォース、それに後ろにシグナムにはやてである。運転しているのは俺であるが、まあそこは俺一人頑張つて変装魔法をしてどうにかしている。これを発動させるのに三分もかかるとは……ソル、お前が恋しいよ。

「そうだな、箱根だから近いと思つたのだがな。さすがに夏休みの最終日に近づけるほどにこうなるか、はやて達は大丈夫か？」

「うん、大丈夫や。おっと」

その時はやての携帯がなった、たぶんどちらかの車の誰かだろう、ちなみにこの車のメンバー決めは土郎さんがしてくれたのだが、その時なぜかなのはとフェイトが笑っていたのは気のせいだろうか、現在の日付は八月の二十五日である。結局アースラで渡された、命令以外は何もなく、昨日ですでに普段の生活に戻っていった、違うところは八神家にもう一人家族が増えたことぐらいである。

「しかし、貴一よ。お前のその姿はいいものだな／／／／」

「ああ、なんか言つたか、リインフォース？」

「あ、いやいや、なんでもないぞ。それにしても動かないな。烈火の将「シグナム」、む、そうだったな、シグナムは大丈夫なのか？」

「ああ、問題はない。あるといえばなぜお前が貴一の隣なのかだけだ」

「まあまあ、リインフォースにとってははじめての外なんだから助手席のほうがより外が見えるだろう、この二日間俺らつてどこも出れないし、家に居るだけだし鍛錬も出来ないしで大変だったんだから」

「た、たしかにそうだったな。（言えない、貴一の演奏を一日中聞いていたなんていない）」

「うん、ほな。貴一君、貴一君。この渋滞はそろそろ抜けるみたいやで、アリサちゃん情報や。」

はやてが電話での情報を伝えてくれた、直後に渋滞は抜けて最後の休憩所、サービスエリアについた。俺は降りるとなのは達と合流することにした、今日はここで最初の昼食。

「ふう〜疲れましたよ、ホント」

俺はそう言いながらはやての車いすを押し歩いていくと

「……………」

全員が凝視をしてなにも言いませんでした、なぜ？

「どうかしたん、皆？」

「さあ、どうしたんでしょう？貴一、しかし今回はこの前やっていた変装パート2なんだな。」

「うん、ああそつだよシグナム。どうもこつちしか出来なかった。しかし本当にどうかしましたか？」

「あ、いや、すまんすまんな貴一君。なんと言つか、君らが本当に家族にしか見えなくてな」

士郎さんがそう言いながら俺らを指差して

「長女」

まずはリインフォース

「次女」

そしてはやて

「お母さん」

シグナム、そして

「お父さん、さっきからそつやって歩けば誰でもそつ見えるぞ貴一君。」

えっと持ち場を確認すると、俺はまずはやての車椅子を押している、そしてその横にリインフォース、そして俺の横にシグナム…ああ、

確かにこれは家族の絵になる、ただでさえ俺が現在この変装だかな。

「そ、そんなわ、私が…っ、妻だなんて／＼／＼／」

「認めへん、認めへんよ！そんなこと、なあなのはちゃん、アリサちゃん、フェイトちゃん、すずかちゃん」

「……うん（なの）」「」「」「はい」

あれ、なんだか一人多かったような気がするが、まあ気のせいだろうな。しかしそんなに認めてくれないのかこの変装の評価。

「……それでは貴一君たちも注文してきなさい。我々は場所を確保したからそのフードコートでご飯でも買ってきてくれないか、桃子達も。」

「そうですねえ、それじゃあ彼方、よろしくお願いします。それじゃあいきましようか」

そして俺は残ると言ったのだが、あえなく却下されてしまい現状のこのフードコート中華のラーメンを買おうとしていた。ちなみに中華のメンバーは

「だけど、ホントこれが貴一ねえ」

「あ、アリサちゃんもっ」と声は小さくしないと。ごめんね貴一君」

「いや、たぶんお前らのその行動が一番問題があるとおもっぞ……」

リンフォースがハンバーグの定食のプレート持ちながら微笑して

いた、ちなみに今着ているリインフォースの服はすべて忍さんのお古らしい。ちなみに俺らのさつきまでの絵図、俺現在見た目18歳ほかの皆九歳、そして俺のズボンを引つ張りながらの会話。まあ一番後ろのシグナムが居るのでなんとかロリコンと言うような白い目では見られていない。

「あはは、お、来た来た。それじゃあなのはが醤油だな、フェイトがチャーシュー。」

そして俺は来たものをなのは達に渡していった。しかしはやてよ

「これがはやてのだな、バター塩…うまいのか？」

「分からんから試すのがおもしろいんよ、それで貴一君、トレー」

「はいはい、お前の分は俺が持っていくから行った行った、そういうことでリインフォース」

「わかった、主行きましょう」

「う〜う〜病人扱い反〜対〜。まあ貴一君の好意やし、従うかな。」

そしてはやてとなのは、フェイトは先に行った、その後アリサとすずかも先に行き残ったのは俺とシグナムだった。

「主はやてもよく笑うようになられたな。それもこれもお前のおかげか」

「どうだろうな、結局俺はお前らに助けられたからな」

「は？それはどういうことだ」

「どういう意味だろうな。さてお前のも来たぞ、それに今回来れなかった連中の分も楽しもうとしているんだろ、はやてらしい。それとお前はもう少し肩を張るのを辞めろ、まあそれはリインフォースも一緒だろうが」

「うむ、そうはわかっているのだが。どうもな、管理局のやつらが居るとな……確かに最終戦から今までの事を考えればやつらだって悪いやつではないことぐらいわかる」

「それも兼ねての今回の旅行だ。それにしてもあいつらは俺のこの姿をもそのまま俺として扱うからな。」

「ふ、彼女らもお前の本懐は見抜いているのだろう。それにしてもホントにお前は九歳なのか、主はやてと同年とは到底思えないのだが」

「それこそ酷いことを言うなシグナム。」

そして俺らは席にもどった。

第百八把（A's編五十八話）。残りの休日パート2（後書き）

ごめんなさい、題名がもう浮かびません……助けてえええええ

第百九羽（A、S編五十九話）。残りの休日パート3（前書き）

すいまsねん、題名は使い回しです！



第九九羽（A's編五十九話）。残りの休日パート3

そして俺らは席に着くのだが、しかし問題はこっからであった、なぜか俺が座ると、なのは達は一斉にジャンケンをし始めていた、どいう現象だよ。しかもそれをプレシアさん達は微笑ましく見ているし。そしてジャンケンが終了し、席に着き、そして俺の隣は

「やった」「申し訳ありませんが主はやてこれも勝負です」

フェイトとシグナムだった、ちなみに俺の目の前には土郎さんがいる。ちなみに恭也さんは忍さんとイチヤイチャしているので放置。すでに月村家にも俺たちの存在は話してあるのでノエルさんもフアリンさんも普通に接してくれている。

「ねえ、貴一君」

「うん、どうかしたかすずか？」

「うん、確か貴一君達って今回の事件で魔法が使えないようにしてあるんじゃないの？」

「ああ、そのことか。確かに俺には現在デバイスがないが、元々俺はそれ無しでも魔法が行使できるから…まああつたほうが数倍いいが」

「へえ、そうなんだ。けどはやてちゃん使えないんだよね」

「うん私自身、まだ魔法がよくわかってないんよ。」

「大丈夫です、主はやて。我々がサポートいたしますので。」

「あはは、ほな頼むなシグナム」

「だけど、なんで私達の周りってこうも色んなのが居るのよ、なのはお兄さんとかは普通に強いし、それになのはもフェイトも魔法使い、それにはやて、さらにはその馬鹿も」

「おい、こら。誰が馬鹿だ、まあ確かにここまでいろんな奴が居るとな……そんでそこでカメラを構えている桃子さん、どうかしましたか」

「あ、気にしないで。どうぞ食事の続きを」

「それにしてもさ、結局貴一君ははやてちゃんを助けたんでしょ、それで没収って少し酷くない？」

美由希さんがパスタを食べながらそんなことを言ってくれているが。

「さすがに無罪とは行かなかったのよね、これが。なんでも貴一君のデバイスには色々と問題があったから、それに当初は最高評議会が召集をかけたぐらいらしいわ。」

プレシアさんがアルフにご飯をまわしながらそんなことをさらりと言う。

「最高評議会？なんですかそれ、って聞いて大丈夫ですね？」

「ええ、大丈夫よ。まあ管理局のトップって言うのが一番しっくりくるかしらね。まあなぜ呼ばれたのかはわからないけど。」

「それでも現在、俺がこうしていられるのはたぶんアースラの皆のおかげでしょうから文句なんてありませんよ。あるとすれば相棒を早く返して欲しいぐらいですよ。」

俺がそう言いながらラーメンを食べ終わると、そこにさっきまでイチャイチャしていた忍さんが話に入ってきた。

「そうそう、あなた達のそのデバイスってどういうの？」

あ、そう思えばこの人って結構は機械ヲタクだったな、しかし現在あるデバイスって

「えっと私のはこういのです」

なのは自分がしているネックレスを見せ、そしてフェイトはもっているあの三角形のバルディッシュの待機状態を出した。プレシアさんはまあ見せていないが、そう思えばプレシアさんのが一番魔法の杖っぽいな。

「へえ〜これでその変身とかできるんだ……ねえなのはちゃん、これ」だめだよおねえちゃん「う、わかったわよすずか。ありがとうみてくれて」

そして返す忍さん。そしてアリサを俺をじっと見ているが

「どっかしたのかアリサ？」

「……ねえ私達も魔法って使えないの？」

とんでもないことを聞いてきた、なに魔法が使えないかだと…

「あ、それ気になる」

美由希さんも同調して聞いてきた、てかなぜ俺なのだ。そこに天才がいるだろうが

「貴一君はその姿でもモテモテね。」

「プレシアさんわざと言ってますね、それ。しかし魔法ね〜う〜ん」

「なに、もしかして「無理に決まって言うだろうが」な!?!?」

「いいか、大体なのはやはやては例外中の例外に等しいんだぞ。フエイトはある意味遺伝であるから、それにリインフォースもシグナムも魔道書から生まれだし。それに俺の両親も魔導師だし」

「そう思えばあんたおやってどこにいるのよ、一回も見たことないけど」

「そう思えばそうだな。私達も一度ぐらい挨拶はしたいのだが」

「あはは、士郎さん。それは難しいと思いますよ、なんせ…」

「も、もしかして聞いちゃ不味かったかしら?」

桃子さんが聞いてくるがやはり勘違いされるないつも。

「そっじゃなくて、今この地球にいないだけで、ほかの時空にいます」

そういつた瞬間、土郎さん達は非常に驚いていて、プレシアさんはやっぱりみたいな顔をしていた。

「そうだったのか…確かにそれは会うのは難しいかも知れんな、ヒト勝負「あなた」すまん」

「あはは、たぶん父さんなら喜んで了承しますよ。だけど注意してくださいね、剣技なら俺よりも父さんのほうが上ですから。」

「「ほほう」」

ちなみにそれに反応したのは土郎さんと恭也さんだった、そんなに勝負がしたいのか

「確か、正月には一回帰ってくるって言ってましたからその時にも挨拶に」

「あ、ああ。その時はよろしく頼むぞ、貴一君」

そして俺らは程よく飯を終えて車に乗りこんだ。そしてまたその時ジャンケンがありそして今回は

「今日は運がいいようです」

シグナムだった、ちなみに後ろの二人は

「烈火烈火烈火烈火烈火烈火烈火烈火烈火烈火烈火」

これがリインフォース、そしてはやては

「主の命令にしたがわないなんて、これは令呪が必要や」

声は確かにあのヒトだが……いつか白い悪魔って言われるのか、私が一番夜天の書をうまく使えるんや……なりそうで怖い。

「それでは貴一出してくれ」

シグナムは上機嫌だし、そんなに助手席がいいのか？

「あ、ああそれじゃあ後ろの二人もシートベルトはしてくれよ、リインフォースできるか」

「烈火烈火……あ、ああ大丈夫だ」

「違う違う、はやての」

「え、あああ、主のか、う……」

「はあくしょうがない、ちょっとはやて前から失礼するぞ」

「ほえ!？」

俺はそう言つと運転席から後ろにむき車椅子の固定のところからベルトを出してはやてに渡した。

「ほい。これな、つてはやて?」

「ああああはは、そんな近いと……はっ!あ、ありがとうな貴一君」

「よし完了だな、それじゃあ行きますか」

そして俺らは目的地の箱根に向けて出発した。

第九羽（A's編五十九話）。残りの休日パート3（後書き）

作者は、ほのぼのが苦手です。ですががんばります！！それではバイバイ



第百拾話 (A ' S 編六十話)。残りの休日パート4 (前書き)

ブラアアアアアアアアアアア!

第百拾話（A's編六十話）。残りの休日パート4

Side プレシア

「ふう、ホント魔法ってあったんだ。不思議だね〜」

私の後ろに座ってる忍さんがそんなことを言っている、まあこの世界の人から見ればそうなのかもしれない

「それで、すずか。あついう貴一君はどうなのよ?」

「え!？」

「すずか、あなた食事の時ずっと貴一君の方見ていたでしょ。まあそれは他にも居るんだけどね…ね、フェイトちゃん、アリサちゃん」

「な、し、忍さん!私はべつにあいつなんか…」

「ですが、貴一様のあの姿は一種の美しさがありましたね」

そこで一言言っただのはさつきからなにも言わなかった今回の運転手のノエルさんだ、一応助手席にはその妹さんのファリンさんが乗っている。

「ホントね、そうだ、プレシアさん。あの姿ってやっぱり貴一君の未来の姿なんですか?」

「うんそうね、たぶんそうじゃないかしら。今はソルもないみたいだし、高度な変装魔法は出来ないでしょうから。まあそう考え

ていいと思いますよ、だけどフェイトはいつもの貴一君がいいのよね？」

「え！？だってそれは…私の歩いていてその、似合うというか…ゴニョゴニョ」

「プレシアさん、貴一君ってホントに天然の子なんですか？」

「ええ、そうみたいなのよ。他のことなら普通よりもピカイチなんだけどね、特に戦闘とか。だけどそれ以外になると、というより特にこういう事に関しては酷いわね」

side out

“ブルツ”

「なんだ、今の寒気は」

「うん、大丈夫か貴一」

「あ、ああ大丈夫だシグナム。それにしても高速の出口があれだけって、そりゃ渋滞するっての」

現在俺らは高速をぬけて一般道走っている、ちなみに泊まるホテルの名はグランド“バニングス”ホテルin箱根だそうだが、なんでもアリサの両親が夏休みの思い出作りの協力してくれたらしい、しかし夏休みも仕事とはやはり大変だな。そしてホテルに到着ちなみに俺らが一番後ろのため他のみんなは待ってもらっていた。

「すみません、少し遅れました」

「いやいや大丈夫だよ。しかし貴一君、やはりその姿が本当の姿なんだね」

俺は降りる際に子供の本来の姿に戻った理由は簡単、料金が安く済むからである。それにこの姿のほうがいいのは、あとでわかるだろうし。そしてアリサが先頭の元俺ら一行はホテルに入った。そしてホテルの中は

「すげえ〜」「こりゃ、想像以上やな」

俺とはやては口をあけて上を見ていた、理由は大きなシャンデリアである。しかも今回は七月に行った旅館とはスケールが違うほどのでかさだった、てかホテルの敷地内にショッピングモールがあるのはどうよ。

「それじゃあ君達はここにいてくれ。えっと忍君にアリサちゃんと一緒に来てくれるかな」

土郎さんはそうというとロビーの方に向かっていった、俺は何気なくパンフレットを見ていると

「何々、わぁここって温泉なのか…」

俺がそんな事を言うと

「……………混浴はある（あるか）？」「……………」

なのは達が一斉に聞いてきた、てかなぜ全員混浴が気になるんだよ。

「うふふ、あるみたいよ。よかったわねフェイト」

プレシアさんがもう一枚のパンフを開きながらそんなことをいう、そしてフェイトは顔真っ赤。そりやそうだろう、誰が好き好んで混浴などに行くのだろう、とその時はユーノを見てしまった

「きゅ、きゅー！きゅー！」

滅茶苦茶反論しているが、なんとも説得力がない。

「おお、主これはなんですか！」

「どれやリインフォース、お、これな。これはな卓球言うねん、まあ一種の遊びやな。しかし温泉に卓球なんてこの今見てる西洋風からは想像できんなあ」

「はやてちゃんはこう言うホテルは初めてですか？」

「あ、一応あるんですよファリンさん。その時は旅館でしたけど、貴一君が頼んどいてくれました」

「貴一君がですか、ほえ」

「驚いていないであなたも見習いなさい。」

ノエルさんにファリンさんの私服は初めて見たがなんと言うか、ホントメイド服とは違いどこにでもいる女の子だよな。ホント傍から見れば姉妹だもんな。

「みんな終わったぞ」

士郎さんがそう言いながら歩いてきた、ちなみにカードキーのよう  
でキーは三枚用意されていた。

「ふむ、どうやら我々は一番上の階らしいぞ。それでは部屋決めに  
移りたいのだが、男と女とカップル、これでいいだろう。」

「な、父さん……」

「ありがとうございます。それじゃあ私達は二人と云うことで  
の鍵ですね」

そしてルームキーを持っていった、たぶんさっきのロビーの手続き  
でそうしたのだろう。しかしそう考えると俺と士郎さんが、凄くこ  
このへやって広そうなに二人って凄いな。

「あれ、そう思えばアリサちゃんは？」

「ああ、それなのだがどうもこのホテルのオーナーに捕まっ  
て手が離せないらしい。どうも昔からの知り合いのおばあさんのよう  
だ、それでは我々は先にエレベーターに乗るとしよう」

「はあ、ホント俺の周りの友達って異常だよ。あ、ちょっと失礼」

そして俺の携帯がなった発信源は

「どうかしましたか、リンディさん？」

管理局、アースラの艦長リンディさんだった。

『ごめんなさいね、休日中に。えっとそこにはやてちゃん達居ますか？』

「あ、居ますよ。はやて、シグナム、リインフォースお呼びだ」

『貴一君貴方もよ。それじゃあ、はい』

そしてリンディさんが誰かに渡したようで、そして出てきたのは

『おーい、はやて、貴一元気が、あたいだ、ヴィータだ』

「ヴィータか久しいな。そっちはどうだ？」

『今か、今丁度休み時間だ、まあザフィーラはあのクロノとか言う奴の特訓に付き合っているがな。それではやて』

「なに、ヴィータちゃん？」

『楽しんで来いよつてもう着いてるのか。それじゃあ楽しみめ！あたいらの分もよろしく頼むぞ、それじゃあお土産は貴一に頼んだ』

「了解」

そして次に変わったのが

『はいはい、シャマルですう。現在アースラで医務室で色々と習っていますよ、はやてちゃん、それからシグナム、頑張ってくださいね、あとリインフォース』

「なんだ、しゃ、シャマル？」

『あなたも頑張ってくださいね』

「ああ、もちろんだ！」

『これは思わぬ強敵ですね、二人とも。それじゃあ貴一君あとはよろしく願いますよ』

「ああ、まあデバイスがないからそれなりに頑張るさ」

そして通信が切れた、ようは旅行楽しめと言っことだろう。

「みんな、ありがとうな」

「土産か、考えとないとな」

そして俺らはエレベーターに乗った。



第百拾話（A、S編六十話）。残りの休日パート4（後書き）

ブリーメロン

第111話（A S編六十一話）。残りの休日パート5（前書き）

いざ、旅行！

第111話（A's編六十一話）。残りの休日パート5

そして俺らは各自の部屋で最初は荷物整理ということになった、ちなみに女性陣の部屋は広いらしい、まあ俺の場合は土郎さんと二人なのでそれなりの部屋だが……

「貴一君、ここを二人とはなんとも贅沢だな」

「ホントですよ、ここ普通にバスルームもありますし、それで大浴場までもがあるなんて。」

「貴一君、そのなんだ。丁度二人だけだ、聞きたいことがある」

その時土郎さんがいつもの笑顔でなく昔俺が対峙したあの鬼神だった。

「なんですか」

「ふむ、そういうことが、貴一君。君は戦士に変わったようだな。昔のあの兵士ではないようだな」

「そうですかね……今はもう大丈夫だと思います」

「君はあの時からあったのだろう、衝動が……それも強大な、それは今回のあっちの事件で解消したのかな？」

「そうだいいですがね。しかしいつから気がついていたんですか……その俺の」

「闘争本能かね、うゝんそうだねえ、君と勝負してからかな変わったのは一言言えば君は何もかもを凌駕していた、そして今回の事件の概要を聞いた、なのはからね」

「なのはが」

「ああ、そうだよ。貴一君は悪くない、の一点張りだな、ホント君は何をしていたのかね。一応、人助けとは聞いたけど」

「はは、ヒト助けはよすぎる言い方ですよ。俺はたぶんやりたい事をやっただけです。」

「ふ、それでその顔か。今度は君のその君で相手して欲しいね」

「それはいつか、それに今は楽しまないと」

「そうだな、子供はそれが一番だ」

と、俺と土郎さんが話している、そんな時ノックがしたそれはまあ分かっていいるだろうが

「貴一君、お父さん」

ドア越しから声が聞こえた、てかどんだけ大声で…まてよ

「ちよつとなのは、それ何よ。」

「うわわわ、なのは、さすがにレイジングハートは不味いよ」

「だって、これでもしないと声が聞こえないかな〜って」

俺は土郎さんの顔をみた、てかおいおい、魔法をそう簡単に使うなよ……

「すまん、貴一君。それでは行くところか？」

俺は頷くと共にドアを開けて、そして

「このアホ、いきなり魔法を使うやつがあるか」

なのはの額にデコピンした。

「うううう、だってここの部屋のドア、厚くて言っても言っても聞こえなかったんだもん」

「そう言う場合は内線を使ってくれよ…しかしどうかしたのか？お前ら全員も居て」

「えっとね、これから今後の予定をね、決めようと思って貴一君とお父さん呼んできてっってお母さんからの伝言があっつてね」

「そうか桃子からか、それでは行くとしよう。」

そして俺らは隣の部屋に移動した、しかし今の時代の日本のホテルってのはカードキーが主流なのかね。そして俺らは部屋に入った。

「いらっしやい、そしておかえりなさい」

ファリンさんがそう言いながら紅茶を入れていた、なんて言うか抜

けていないのようだな、メイドの仕事が…

「それではみんな揃ったことですし、これより明日からの行動についての話し合いを始めます。まずは今回の司会進行は私、美由希がお送りします、それでは意見のある人手く挙げて」

そして最初に手を挙げたのは、なんとリインフォースだった

「はい、リインフォースちゃん」

「う、うむ。そ、そのこの卓球をして見たい」

「はい、採用！それでは夕食のあとお風呂に入る前に卓球大会と云うことで。異議のあるものは？」

そして全員がそれに納得、そして次の挙手者は

「はい、プレシアさん」

「そうね、明日はショッピングが良いわね。それで貴一君は今の状態だね、どうかしら？」

「いいですねえ〜それで、貴一君はそれで大丈夫かな？」

「はい、ショッピングってこの中にあるやつですよ、それなら大丈夫です」

「じゃあ決定、それでは次はシグナムさん」

「ああ、それでは貴一すまないがこの後すぐにこの体育館で木刀で

のしあ「却下！」な、なぜだ貴一？」

「誰が旅行まで来て稽古しないといけないんだ、はやて！」

「そうやなあ、貴一君のその姿は見てみたいけど今回は旅行に集中や、そのため却下や」

「く、わかりました。それでは今回は諦めます。」

「他には？」

「なあ〜一応確認なんだが、今回って五日の予定だよな。それで今日はこんな感じのダラダラとして明日シヨッピング、それで明後日は確か、前々から言っていたテニスだっけ？」

「そうだよ〜だからその後の計画が白紙なんだよね〜」

「う〜んそれじゃあ、俺はここに行きたいね、一度ぐらい……」

俺が指差したのは、そこは

「日光東照宮。貴一君渋くないか……」

「う、いいですよ〜一人でいきますから」

「なに、貴一は私が着いていこう誰か一緒に居ないと不味いだろう」

その時シグナムが言うが

「な、何言ってるのシグナム！今あなたは魔法使えないんだからこ

ういつのは私が…着いていくよ」

「ふええ、フエイトちゃんずるいなの!」

「そつやで、それにこんなところでそんな自体になるわけ無いやん  
!」

「ああ、すまん、さっきのは無しで。大体一人で出歩きはないから  
安心してくれ、それじゃああとの二日は、まあ帰りの含めると一日  
はその時に決めるでいいですよ、美由希さん」

「うんそうだねえ、それじゃあそれで決定、それじゃあ解散!」

そして解散のとき俺は一つ気付いたことがあった。

「なあユーノは?」

「「「「え?」「」「」

なのは、から士郎さんまでが固まった。俺はあのエレベーターから  
そのまま着たがまったくあいつの姿を見ていない

「あ、な、なのはお前のところに居ないのか?」

「え、だってユーノ君……あっ!!たしか!」

Side ユーノ

「きゅー、きゅー」



あれ、なのは達は確かあっちに行っただかな？

「それでね、あのこっいたら」

「え、それ本当！」

「向こうから歩いてくるのは多分普通のヒトだろっけどどっしりこの姿じゃ」

「あれ、なんかあそこで動いていない？」

あ、まずいきづかれた

「え、あ、ホントね、ねえもしかしてねずみ！」

「それなら早く除去しなくちゃ」

そしてスプレーをもった二人組みが僕に襲い掛かってきた。

「きゅ、きゅううううううううう！」

そしてその後の午後五時半、ユーノは無事発見された。

第111話（A's編六十一話）。残りの休日パート5（後書き）

ユーノがギャクキャラになってしまった……まあいいか

百十二話（A、S編六十二話）。卓球で、サーイツー！（前書き）

S t S 編を組み立て、終了！！

百十二話（A's編六十二話）。卓球で、サーイツ！！

もう夕方の時刻となり俺らは風呂に向かった、ちなみにユーノは無事に発見されて今は人間状態で俺と一緒に風呂に向かっていた。

「災難だったな、ユーノ」

「うん、まさか置いていかれるとは思わなかったよ。うん、うん」

「す、すまなかったな、ユーノ」

ちなみになぜ俺とユーノだけかと言うと、土郎さんと桃子さんは普通に家族風呂に行き、そして恭也さんたちも同じく、と言うことで大浴場に向かうのはそれ以外となっているのだ。そして男子はこれだけという少なさなのでこういうことになった。

「しかし、貸切だと勘違いしそうなほどに人がいないな」

「うん、そうだね」

俺らが風呂に到着すると誰もいない、ホントに貸切の状態だった。

「そう思えば昔もこんなことあったな」

「うん、懐かしいね。」

「それと、管理局の就職おめでとうというべきかな」

「あれ、知っていたんだね」

「ああ、クロノから聞いたよ。今回の事件で無限書庫の活躍が考慮されてなんだっけ無限書庫の」

「司書官候補生としていかしてもらえるらしい。僕もここまでのいい天職があるとは思わなかったし。まあ一族のみんなには一度報告には戻るけどね」

「そうかい、俺はあと八ヶ月はこのままだろうな」

「あはは、まあ今回はしょうがないと思うよ」

「そうだな、それでこのあとのことは聞いているかユーノ？」

「あ、うん。たつきゆう？だっけそれをするんだよね」

「ああ、そうかわからないのが意外といるな、それじゃあ最初にそのレッスんだな。てか、普通に旅館だと思いたいが、まさかの専用の台とそのスペース完備ってさすが、アリサ待遇」

「そうだねえ。それにしても眠くなりそうだよ、ふわあ〜」

「おいおい、ユーノ大丈夫かよ。てか普通に今日は災難だったもんな。そりゃ眠くなるか」

そして俺らが出ると丁度なのは達も上がってきたようで廊下であった。

「お、丁度よかったな。あれ、ユーノ？」

「あ、うん、うん。」

「あれ、ユーノ君どうかしたなの？」

「ああ、どうも今日の災難で眠いらしいのだが。どうしよう？」

「あう、あう……きゅー」

そしてユーノはそのままフェレットモードに移行してしまった。てか寝るときはその状態だったんだなユーノ。

「はあくしょうがない、こいつは俺の頭の上に乗せておいて行くと思いますか、卓球台のあるところに」

そして俺らはそっちに向かった、そして俺の授業がはじまった。

「それでは卓球を知らない人手を挙げてください」

「「「「はい」」」」

挙手したのはシグナム、リインフォース、フェイト、プレシアさんだ。

「ほうほう、それでこの試合などやっているところすら見たことがない人は、プレシアさんとフェイトか、二人はテレビで見ているな」

「「ああ」」

「それでは軽く卓球の説明をします。まず、このボール、ピンポン球が卓球に使うボールです。そして自分と相手の基本一対一、また

は二対二で行うスポーツです。そしてこれがそのラケットとなる板です、ちなみにこれには片面だけにゴムが張つてあるのと両面についている二種類があります、これにも持ち方が決まっているのでそれは各個人で、それじゃあまず持つてみようか」

そして全員が好きなものを選び始めた、ちなみに俺は片面のほうだ。理由は前世からこれしか使ったことがないからだ。そしてリインフォースは早速撃つてみるが。

「あ、あれ!？」

字の如く撃つて見せた。普通にそのまま空中を直線していったピンポン玉はそのまま落ちていった。

「えつとさきのようにリインフォースがしたように簡単に言うとか加減が難しいのがこのスポーツの醍醐味だ、わかったな。それじゃあ最初はラリーの練習からだな。えつとアリサとすずかと、なのは出来るのか？」

「なめないでよ。これでも出来るわよ」

「うん。一応ぐらいかな？」

「全然できません」

「はい、なのははこっちな。それではやては出来るな？」

「できるでえ。せやけどこの台、低く出来ててありがたいな。これならうちにも可能や」

「まあ、そのぶんリインフォースたちは苦労しているようだから。俺は変装してそっちにつくから」

「わかったで……え！？なんやて！？」

そしてはやてが今にも立ちそうな勢いで俺に聞いてきた。

「いや、だからそっちには先生がアリサたちで、俺はプレシアさんとかシグナムの方を教えよう」と

「そ、それはないでええ！それはなしやあああ」

「いや、はやてそこで叫ぶ理由がわからん」

「そうですね、主ははやて。くくく。」

「その騎士、今わろうたやろ！！」

「いえ、そんなことはありませんよ主ははやて」

「それでは貴一よ教えてくれ、手取り足取り」

「な、リインフォースまで！これはどういことや、なのはちゃん！？」

「わからないなの～！」

「く、そうよね。この台ではあっちの大人のほうとで違いが出る。これはあとで鮫島に報告して直してもらいましょう……ちっ」



「あ、今アリサちゃん舌打ちした？」

「し、してないわよすずか／＼／＼それよりもあいつが驚くほどに私達が鍛えればもしかしたらなにかしてくれるかも……な、なんでもないわよ、さ、やりましょすずか」

「うん、アリサちゃん」

「お母さんずるい」

「しょ、しょうがないじゃないフェイト、ね、ね？そのジト目は止めて。それにもかして強くなったら勝負してくれるかもしれないし、それに例の作戦をするんしょ？」

「あ、そうだった。それじゃあお母さんお願いね」

「うふふ、かわいい娘のためですもの」

なんかテストアロツサ親子は俺は見ながら話しているが気にしない方向で行こうっと。

「それで貴一、お前は変装しないのか？」

「あ、そうだなシグナム、それじゃあソル、あ……はあ、変身」

「き、貴一。そ、そのすま」さ、やるぞ」あ、ああ。そうだな、それじゃあ教えてもらおうぞ」

「シグナム、これはわたしが企画したのだ。一番は私に譲ってくれてもいいじゃないのか？」

「リインフォース、こういう言葉があるぞ。先手必勝とな、今回は私の早かったのだから私からだ」

「なにをいう、それならば因果応報と言うことばがある、これは私が言った原因からだ、ならばその報いもいただきたい」

なんか二人して争っているので、俺は普通に浴衣姿で座っているプレシアさんに

「それじゃあ先にプレシアさん、やりましょう」

「そ、そうね。それじゃあよろしくお願いします」

そして二人の言い争い中に大体の俺のレクチャーが終了したのは言うまでもなかった。

百十二話（A、S編六十二話）。卓球で、サアーツ！！（後書き）

最近の遊戯王は……色々と凄いですね。それではバイバイ

第百十三話（A's編六十三話）。混×浴（前書き）

なのは達の小六時代の話って、おもしろいのだろうか？書ける自信が無い作者であった

第百十三話（A's編六十三話）。混×浴

そして現在、俺はリインフォースと戦っている。理由は

「ふっそれではまだ甘いぞ、ほれ！」

俺の攻撃だが、そこにリインフォースはそれをやさしく受け止めて  
そして

「ふん、二度も同じ手は食わない！」

そしてスマッシュで返ってきたが。

「ふ、スマッシュなどその回転ではアウトだ」

「なに!？」

そしてボールは大きく台からそれで、そのまま後ろで待っているシ  
グナムがキャッチした。

「それでは交代だな、リインフォース」

「く、わかった」

現在、小一時間が経過して全員めきめきと上達している模様、まあ  
隣は

「だからなのは!そんなにちから入れたら飛んじゃうでしょ」

「けど、私はいつでも全力全開なの〜」

「うんうん、二人ともいい感じだよ。それでこっちに返して、こう  
いう甘いボールには」

「スマツシュ！やな？」

「はやてちゃんって車椅子だよな？」

「乙女の本気をなめたらあかんで、なあフェイトちゃん？」

「そうだよ、これぐらいできる。次お願いすずか」

「それじゃあ、行くよ〜」

えっと、片方の面ではいい感じだが、片方はたぶんさっきから変化がない。ちなみに俺らのところではすでにプレシアさんは中々の上達で次にシグナム、そしてリインフォースだ。どうもリインフォースはスピンのボールが苦手のようにだ。

「く、交代か…」

「よし、それじゃあシグナムからのサーブね」

「ふん、心得ている」

と、言いやつと浴衣に慣れたのだろう。腕を捲くりそして構える。

「貴一を見て覚えたこのサーブを受ける！」

そして繰り出してきたのは王子サーブ、これは自分の撃ったコートから相手のコートに着地した際にそのあま延長上に飛ぶのではなく、逆に飛ぶ代物、しかし

「それは先に言っただけは翻弄もできないのだ！」

そして俺は構えなおすが、一回考えた。それはシグナムがそんな馬鹿な事をするかと、そして俺の構えが変わった瞬間シグナムは一瞬笑った、ならば

「ふ、奥義、板ばさみ！！！」

そしてそのまま俺は左から右にラケットを立てのままスライスした。その結果、普通に返ってきた球を素晴らしくスピンのかかったボールに変化してそして

「な、決まったと。えいつてあれ！？」

そして普通に打ち返したはずなのにそれは外に出て行ってしまった。

「あらあら、シグナムさんもまだまだね、それじゃあ貴一君いくわよ。それ！」

「ふん！」

「ほれ！」

「おっと」

こんな感じにプレシアさんの場合は長く続くし、うまいこの人。そ

してそれから三十分。すでに風呂に入っているがもう一度入りたいぐらいの状態までに汗をかいてしまった。そして

「それじゃあそろそろ、終わりにしましょう。明日もあることだしそれにお風呂にもは行ったほうがいいでしょう?」

「そうですね、プレシアさん。なのは達も……て……」

「な、なのはも中々じゃない!」

「ふへえ〜アリサちゃんもスパルタなの」

「今回勝負はフェイトちゃんの勝ち〜」

「そんなあほな!私の車椅子奥義が返されるなんて!」

「あはは、勝ったのはうれしいけど汗かいちゃった」

なんとも白熱しているようだったが、そのぶん汗をかいているのはわかる、しかし問題はなぜなのはとアリサは浴衣がそうも乱れているのだ。まったく眼のやり場に困る。

「すずか、そつちもそろそろいいな?」

「はいっ!?!?て、貴一君か。びっくりした大人っぽい声で言うからわからなかったよ。うん、大丈夫だよ。それにもう一度お風呂にも入りたいし」

「ああ、それを考えてこの時間だ。それに土郎さん達とは夕食の宴会場で再集合だからな。まあこれが妥当だろう?それじゃああと三



十分後にここでうんじやな」

そう言うと俺はすぐに風呂に向かった、ユーノは寝ていたのである。卓球場においてきた、え、理由だってまた襲われたらおもしろいじやん。そしてさっきと同じく男湯に俺は入っていった。

Side プレシア

さて、貴一君は混浴のところに入っていったわね、ここまで作戦成功。

「それじゃあ、みんな入りに行きますよう。ここに」

そして指差すところは、男湯

「ぶ、プレシアさん！？一体どうしたんですか？」

「ふふ、アリサちゃん。なにを言っているの、別に大丈夫でしょう？」

「え、だってここ男湯、あれ？え、え、混浴？」

実は先ほどからこの混浴を男湯と魔法をかけておいたのだけど、貴一くんが今回デバイスを持っていなかったのがこの作戦の要、そしてこの立案者は、うちの娘のフェイトそして

「お待ちしておりました、皆様」

「あれ？ノエルさん、どうしてここに？」

「ふふ、私が呼んだのよ。ね、フェイト」

「はい、忍様たちも私達がないほうがいいでしょうし。それに」

「それに？」

「ふふ、ご奉仕したいのよね」

「んっ／＼／＼／＼」

「それじゃあ、入りましょうか？」

「まって、もしかしてここに……貴一君がおるん？」

はやてちゃんがそんな事を聞いてきたが、その顔はまさに笑顔。

「ええ、そうね。さっきまでここは男湯だったのだから、いるんじゃないかしら？」

そしてその言葉に反応を一番したのは意外にも

「な、なんだとー！き、貴一が入っているダトー！」

シグナムさんでした、しかも取り乱しようが

「……………」

うちの娘そっくり、どこか似ている点があるのかしら？

「それでは私たちはこっちに行って来るわね。あ、それからもう魔

法は解いてあるから眼で写っているのがその温泉のところだから。それじゃあいきましようか、フェイト、ノエルさん。ちなみにここには人避けの魔法も使用してるから」

「はい」

「ちょっとまちいな！」

そして私達が入ろうとしたら、そこにはやてちゃんが待ったをかけた。

「ここは八神家も参戦や！異論は！」

「ありません」

「だ、大、大丈夫です。そうだ主をお風呂に入れなければならないからついていっただけだ、そうだ」

「それで、なのはちゃん達は」

「ほらアリサちゃん行こう」

「なのはも、すずかもすぐに入ろうとしないの〜」

聞く必要が無かったみたいね。

「てか、なのはは兎に角すずかは貴一が入っているのに大丈夫なの！？」

「ふふ、アリサちゃん。そういう羞恥心はどこかの犬に食べさせた

ほうがいいよ。それじゃなきゃ人生おもしろくないよ」「

「そうなの、貴一君とお風呂！これは全力全開で行くの！」

side out

そのころの貴一。

「ああ、やっぱり気持ちいいな。温泉はやはり露天に限るなあ。そう思えば今日のご飯何かな。まあこう言うホテルの飯はうまいから大丈夫だろう。」

これこそ正に蚊帳の外だった。

第百十三話（A、S編六十三話）。混×浴（後書き）

大変だああ、試験前だああ

第百銃四話（A's編六十四話）。まあ、結果としては痛みわけだねこれ（前書

これからは定期更新に戻ると思います。

第百銃四話（A's編六十四話）。まあ、結果としては痛みわけだねこれ

俺が露天風呂に入っていると人の気配がしたが、やはりそれはホテルだろう。たぶんお客さんが

「ああ、貴一君だ！ほんまにおった！」

はやて？……はやてだと！！しかもそれを持っているのはシグナム！？俺はパニック状態になったのですぐに確認した、確か俺はちゃんと男湯に

「ふふ、驚いているようね貴一君。じつはさっきの男湯は実際は混浴のところでした。それからすでに人避けの魔法はかけてあるから人は来ないわよ、貴一君」

俺を畏に嵌めた張本人が笑顔だ。しかもそれから続々と声が聞こえてきた

「ほら、アリサちゃん早く！」

「まちなさいよ、ちゃんとタオルを」

「ええ、いらないうつ」

「すずかはちゃんと隠しなさい！」

「え、けどリインフォースさんとノエルさんはそのまま行くつとしているよっ。」

「ちょっとあなた達!!」

まずい、今の声で確認するだけで、確実にさっきまで卓球をしていたメンバーがいる。しかもノエルさんもいるようだ、まずはやく逃げないと、と思い俺は露天風呂から出ようとすがしかし

「な!?なんで動けないんだってバインド!?て、これはプレシアさん、それなら」

「バルディツシュ!」

そしてさらにバインドをかけられた。てかこの色は

「ふえ、フェイトか?お前もか!つてまで、普通にこれ解けないだと、く、く、これが本当に絶体絶命…」

まあ未だに何とかこの場に居れる理由はまだ全員タオルをまいているからだ(この理由は想像した作者がノエルさんとプレシアさんの裸体で鼻血を出したためそれを耐えるための応急処置です、あしからず)

「まあ、まあ。いいじゃん貴一君」

「すすか、いつのまに浴場に入ってきている!?!」

「いや、ホンマ温泉っていいなあ」

「はやてもですか?そしてシグナム……」

「こ、これはそ、その主の好意に甘えたのであって…だな」



「私はお前と入りたくてここに来たのだ、どうだ、うれしいだろう  
貴一」

これはリインフォース、しかしそれを全員がなぜか羨ましそうに見  
ている、てか普通に

「リインフォース、タオルはどこだ!!」

俺は一気に下を向いた、てか一瞬だが白い肌が…考えるのは辞めて  
おこっ

「な、リインフォース!?なにをそんな大胆なことしとんの、シグ  
ナムこれは奥の手や、タオルをパージや!」

「え、で、ですが……貴一が…しかしこれではリインフォースの一  
本、ってテストロッサ!？」

「貴一君と、隣入るからね」

そしてなんか来た、てかフェイトだ。この状況はなんなんだ……ホ  
ント露天風呂って大半が効能によって白く濁っていてからだが見え  
ないとはこの事だ。ホント助かった、てかなのは顔が怖い

「ふふふ、フェイトちゃんとはやてちゃん……それにすずかちゃん、  
なにしているのかな?アリサちゃんもなんか端から入っているし」

「な、なのは!？」

俺はつい目を開けてしまったがこれはまさかの…

「うふふ、私をいることを忘れているわよ貴一君。ふふふ、大成功ねみんな」

そこにいるのは普通に全員入っていたしかも普通に、てことは

「芝居？」

「正解なの〜けど、なんで貴一君は私の声で反応したの？もしかして…」

「ああ、そのもしかしてだ」

「ホントなの！？」

「ああ、もしこんなところで魔法なんて使われたらどうしたものかと……なの」ん？どうかしたかなのは」

「そんなことだ思ったなの！」

そして勢いよく入ってきたのは、てかまでこの距離でダッシュはまずいだろ！

「あ、あゝあ」

「ちっ、馬鹿が」

俺は魔法を使い、どうにかなのはを湯船につからせた。てか普通にジャンプすればこけるだろうが

「にはやは、助かったよ貴一く……ん」

なのは様子が可笑しい、てか全員が固まっている、なんてと思い俺は確認するとそう、タオルがそのまま飛んでいて俺の上に落ちた、て、ことは

「見ないでエエエ貴一君！」

そして俺は非常にも魔弾を喰らいダウンした、そして俺の記憶はここまでだ

Side フェイト

なのはが貴一君を気絶させちゃったので結局私たちは普通のお風呂となりました。貴一君はお母さんとアルフに連れられて介抱されているそうです。

「なのはちゃん、折角のチャンスを……ねえアリサちゃん？」

「すずか、変なことを言わないの！」

「う、ごめんなの皆。だつていきなりだったんだもん……／＼／＼／＼けどこれで貴一君は私の体を見たことに」「……」ならない（わよ）」「……」「うううう」

「まったく、ごめんなさいノエルさん」

「いえ、フェイト様大丈夫でございますから」

「そう思えばなんでノエルさんがここにいるんですか？」

なのはちゃんが質問した、まってノエルさん。それはさすがにまずい

「はい、実はですね「ノエルさん！」そうでした、秘密です」

「フェイトちゃん？なにか隠していない？」

「そ、そんなこと無いよなのは、それでなんでシグナムは構えるの！？」

「なに、今のお前の動作をどう見ても何か隠していたぞ。まさか貴様らだけで当初は貴一との混浴を楽しむ気だったな」

ああ、さすがライバルきづかれちゃったよ、どうしよう……

「まあいいやんシグナム。それよりも今だけの話しやけどと言うよりもこれは確認やで、ここの全員って全員貴一君にホの字やのか？」

はやて！！なんてことくを！そして私を含めて全員が赤くなっただけでまさかノエルさんまで！？

「ちなみに私はホの字やで、これは堂々と言えるわ。それでどうなんや皆は？、ちなみにこの八神家のリインフォースならびにシグナム確認済みやから、まあ二人とも黒やつただけ」

黒、ということは…シグナムも。そう思えば私達が戦っている時にもそんな会話があったな

「それじゃあ、最初はなのはちゃんからやで、なり染から全部や、あとで私も教えてあげるから」

そしてどんどん近づくはやて、そしてそれを怖がり動こうとしない  
なのは。

「にゃ、にゃああああああ」

「ちなみに他の皆もあると思いや？」

その顔は正に鬼だった、しかもここに結界が張られたのはその瞬間、  
たぶんリインフォースとシグナムがしたのだろう……どうでしょう……

第百銃四話（A's編六十四話）。まあ、結果としては痛みわけだねこれ（後書

はあくやっとな書けまして、今回は他の二作品も一気に出していきますのでそちらもよろしければどうぞ。それではバイバ～イ

第115羽（A's編六十五話）。終わりのあとの反省会（前書き）

と、言うわけでまだまだほのぼの編です

第115羽（A's編六十五話）。終わりのあとの反省会

俺が起きると、それは知らない天井であり知らないクッションだったかこれって

「膝枕？」

「あら、起きたかしら貴一君」

プレシアさんの膝だったらしい…てか俺ってどうしてこうなったんだ？確かなのは魔弾をモロに喰らって

「ああ、それでなんで俺はすでに浴衣を着ているんでしょう？」

「あら、不味かったかしら？」

プレシアさんが着せてくれたらしい、ああ恥ずかしい…まあそんなことよりもここはどこだ？

「ああ、それは大丈夫なんですけど、ここはどこ？」

「えつとここは、さっきの卓球場の所よ。だけどよく生身であの魔弾を喰らって怪我をしていないなんてホント貴一君って対魔力が強いよね。私ですら関心したわ」

「そうですか、てか時間的には何分ぐらい経ってます？」

「大丈夫、まだ十分ぐらいだからたぶんあの子達もそろそろ帰ってくると思うわ、それで」



「それで？」

「どうだったかしら混浴の気分は？」

「罨にはまっつてどうだった？は無いんじゃないですか…心臓に悪いですし、まったく俺がデバイスをないこといいように、まったく気がつかないで風呂に入っていましたよ」

「あら、今回の事件じゃ私たちはあなたに振り回されたものよ。それを考えるなら軽いんじゃないかしら」

「それを言いますか、そう思えばプレシアさんは今後？」

「ええ、今はアルバート博士の下にいるけど、アルバート博士の名前の下の研究室に配属だそうよ…まあ一人なんだけどね、それぢやんと週二で休みをくれるみたいだわ」

「なんかギル爺の性格から、あの家の地下室をまた研究室に戻しそうで怖いんだけど…そこで、それではプレシア殿ここで存分に研究を進めるがよいぞ、とか言いそうで怖いんだけど」

そして若干苦笑いのプレシアさん、たぶん思うところがあるのだろう

「ああ！！お母さんなにやっているの！！」

そんな声が廊下から聞こえた、てかフェイトだな、しかしなんでそんなに怒っているだ？

「な、貴一！なぜテストロッサの母親の膝で寝ているのだ！」

これはシグナムだろう、あ、そういうことが

「あらら、私はいいのだけど？」

そっぴいなから俺は起きた、てかお前ら

「おい、お前ら…そこに正座」

「「え？」」

そしてまず二人を確保、そして次々とくるメンバー全員正座

「あ、あんたなにをこれ」「うるさいぞ、アリサ」「うぐっ」「

「さて。私を罠に嵌めたのは褒めてやろう、しかし……く、く、く。あとの事を考えなかったようだな」

「ま、不味いな……貴一君の魔王モードなの」

「さすがにこれはきつそうやな」

さすがにはやては車椅子なのでそのままだが、はやてには

「はやてお前はあとで何かあると思え」

「こ、こわいでえ貴一君」

「あれ、あなた達なにやっているのよ……ノエルまで」

「お、お姉さま。どうしてみなさんと一緒に正座なんかしているの？」

「聞かないでフェアリン」

「ふうん貴一君って結構Sなんだね。あ、そうじゃなくてご飯だよ、みんなもう居るから行きましょう」

「あ、そうですか……うんそれじゃあ不本意だが今回はこれだけで終了とする、それではこれを教訓として今度からは…嵌めるなら、そのあとも考えてね？」

そういうと全員が一斉に頷いていた、俺ってそんなに怖いのかね？

そして俺ら一行がつくとすでに土郎さん達は座っていた、そして俺らも座るのだがなんて言うか今思うと男陣が少なすぎる、てか俺とユーノだけじゃないかよ

「ユーノ、大丈夫だったか？」

「うん、たぶん今日のがれが予想以上に疲れていたみたいだけどどうにか普通の状態にはなったよ。けどこここの料理っておいしい」

そういいながらアーモンドを食べている、なんかホント小動物いたいになっていないか…まあ未来的には普通のイケメンになるからいいのかと思う、てかホントうまいこの料理、現在俺はムニエルを食べているがこのバターがいい味を出している、と思いつながら食べていると

「貴一君、フォークもナイフもちゃんと使えているみたいね……そ

れにすればなのはは」

「う、お母さん言わないでよ。けどフェイトちゃんもちゃんと使えるなの」

「うん、家だとこれが普通だったから逆に著って使いにくいんだよね」

「あんたらねそれ考えたらはやてなんて凄く上品じゃないの……私とかずずかは慣れてるけど、どうみても貴一とはやては慣れすぎの感じがあるわよ」

「まあ私の家も大体がフォークとナイフやからな。それに躡の必要な子がおるし」

「そうだな、ヴィータとか大変だったな」

俺とはやては同じタイミングでため息をついた、それはあの夏休みの前半でのヴィータの教育だった

「そう思えばあんたってまだはやてのうちにいるんだっけ？」

「あ、ああそうだぞアリサ。それが最初の処分だしな……まあ学校は普通に行けるはずだが、それがどうかしたか？」

「いや、そうなるとあんたは朝どうするの？前みたいに集合するにもできないでしょ？」

そうだった、はやての家から通うから前のあの朝の待ち合わせ場所は遠くなる、まあしかし

「それじゃあ朝は俺はパスという「駄目なのそれは」…じゃあどうするんだ？」

「もちろん私達が迎えに行くよ、ね、なのは？」

「そうなの、それでバンジキュースなの」

どこでそんな言葉を覚えたんだこいつは。しかしそれではまた俺は新学期からあんな目を喰らうのか……

「そうや、学校で思い出したんやけど、私も二学期の後半からいけるらしいで」

「え、そうなのはやてちゃん？」

「うん、すずか。なんでもこの足の状態もどんどん良くなってると石井先生が言ってたし、このままりハビリを続ければって言われたで」

「それならフェイトのさっきの案を採用ね、はやてももちろん同じ学校でしょ？」

「うん、それはもちろんやで。それにさき越されるかもしれんからな、油断大敵や」

「まあ、はやてが学校にいけるようになればヴォルケリッターも色々を自由が利くだろうからはやく管理局の研修終えてこれるだろうし」

そういいながらすでにデザートを食べている俺ら。ちなみにユーノはやはり食べ方が少し小動物に似ていた

「そう思えば私はそろそろ論文だわ〜いいな小学生は」

「忍、現実逃避はよくないぞ」

「と、いう恭也だって同じ大学でしょう」

「俺は部が違うからな」

「貴一、そう思えばお前の処分は何月だったんだっけ？」

リインフォースが今回のデザートのにゼリーをほお張りながら聞いてきた

「ああ、確か来年の三月だから、ようはあれだ年度変えの頃だと思えばいいのかな？まあたぶんミッドに行くことになるだろうから俺は春休みないんじゃないかこの地球に」

「そうか」

「リインフォース、口」

「うん？どうかしたのか？」

「どつやったらそんな綺麗に口にゼリーがつくのかね、ちよいと顔を前にだしな」

「うん、こつか？」

そして俺はついたぜリーをとった、そして“カシャ”と、いう変な音が鳴った、はい？

「あの桃子さん、それはなんですか？」

「うんうん、気にしないで気にしないで……」

「気にするなといわれても「貴一君？」うんどうかしたのかはやって！どうかしたのか！？」

なぜか顔が笑っているが眼が笑っていないはやてと、そしてその軍勢が現れた、俺は逃げた、しかしそいつらに回り込まれた

「な、なんでしょうか皆さん」

「お、私も口にツイテシマッタ」

そしてなぜかカタコトの言葉でノエルさんが俺のほつを見ながらそう言った。

「な、ノエル！」

「お、お姉さま！？」

「てる、ついてし、しまったノノノノ」

「ま、不味いわ。ノエルがオーバーフローしているし」

そんな大変な夕食となった

第115羽) A's 編六十五話)。終わりのあとの反省会(後書き)

うん、やはりほのぼのは難しい！



題珀十録話（A's編六十六話）。お買い物（前書き）

と、いうわけでまだまだほのぼのいきますよ！

題珀十録話（A's編六十六話）。お買い物

昨日のノエルさんのフリーズのような騒動起きて今日はすでに朝食も食べて今日のメインイベントである

「ふう、貴一君準備は大丈夫そうだね、しかしホントにそっちの体でいいのかね？」

「はい土郎さん。普段着る服を探そうと思っているので、大人状態だと……タイムカプセルみたいになっちゃいますよ……」

「それもそうだな、それでは行くか」

「はい」

ちなみに、この前のような事が無いように（なのは魔法の使用）俺らは時間を決めてしたのエントランスで合流となった、そして俺らが下にいくとすでに全員がいた

「あ、すみません。遅かったですか？」

「いいのよ、貴一君。みんななぜか焦っていただけだから、それにまだ集合時間には十分早いわよ」

そして俺らはそのショッピングモールに行くこととなった、まあ俺の今回のここでの買い物は特にないというかわではなく、今回はそろそろ冬の服も買わないといけないし、それに最近ギターの弦が錆びてきてしまっているのが現状、しかもエレキもアコギも両方だ。なのでこのところ俺は外出ができなかったのでここで買うのが得

策だと考えているのが今日の買い物だ、しかし

「これはきついな、ユーノ」

「そう、かもね。なんせ僕達以外全員女の子だもんね……」

そうなのだ、しかも土郎さんと桃子さん、美由希さんは一緒に行つてしまい、そしてあの大学カップルはもちろん行つてしまい、そうなる则他の、魔法組みとアリサ、すずか、さらにメイドが俺らと一緒にになる、なんですかこの女性部隊は

「しかし、貴一君も服に興味があつたんやな、それは意外やつたな」

そういうのは俺が現在、車椅子を押しているはやてである

「まあな、確かにはやての家に行つたときって結構最低限の服しか持っていかなかったしな、それに最近あれは小さいような感じがする……」

「それは貴一様も成長期と言うことでしょう、それにしても貴一様その昨日は申し訳まりませんでした。なんでも大変だったと」

ああ、そうだ。あのあとノエルさんは俺の方に倒れてくるはそれを見たのは達が俺を追いかけてくるは、もう死ぬかと思つたぞ

「いいよ別に、と言っている間に目的の場所到着」

そして俺は楽器屋の前で止まる、そして俺は振り返り

「それじゃあ俺はちょっとここに用があるから、適当に回ってきて

よ。」

しかしなぜか全員から睨まれた、プレシアさんですら苦笑いだ……  
なにかしたのか俺？

「貴一君、ここによろしくあったん、服とかちやうん？」

「あ、そうなんだがなはやて。最近のギターの弦が錆びててな、それに自分の買い物もできないだろうからここで買っておかないと、いつもの音が出ないのだが」

「な、なに！貴一のギターの音が変わるのか！」

「まあそうなるな、しかしシグナムにリインフォースどうしたんだ、そんなに俺のよって？」

「テストロッサ、ここは行かせてやって欲しい私からもお願いする」

「え、えつとどうしたのシグナム？」

「我々の唯一の楽しみなんだ、頼む！」

「ああ、私からもお願いする。あの音は非常にいいのだ、なんとも心地よくてな」

「いやいや、ただ適当に引いているだけだぞ。そんな凄いものじゃあ「え、貴一君って楽器出来たの？」あ、ああそうだぞさすがって言っていないかったけ？」

「聞いてないよ、ねえアリサちゃん！」

「ほ、ホントよ！まあいいわ、それじゃあここで待っていてあげからずぐに買ってきたさい、どうせギターの弦なんだがら自分の好きなものとか決まってるんでしよう、なら早いわよね」

「あ、え、けど新作のエフェクター「い・い・わ・ね？」……はい」

そして俺はなぜか背に殺気を感じながらの第一回目のお買い物となり、すぐに会計をすませて外に出た、なんていうか会計の人から「今の子供は進んでいるのね」といわれたのは気のせいだろうか、そして俺らは最初、俺の靴と題してニーケと読めるスポーツ店に来た

「ねえ、貴一って靴とか気にするほうなの？」

「ああ、フェイト一応な。それにそろそろこいつ意外も買わないと……」

そして俺は現在はいっている靴を指す、てか

「ユーノもここら辺でジャージを買っていてもいいかもな、どうせ管理局のあの倉庫漁りで日が暮れそうだしな」

「ジャージ？なにそれ貴一？」

ユーノが俺に聞いてくる

「ああ、そうか知らないのか、それじゃあそれも見てやるか。てかお前もここら辺来るの、アリサ、すずか？」

「あんた、失礼ね。ここも来るわよ……たまたまに、たぶん」

「私は始めてだから貴一君、エスコートよろしく」

「ああ、それは無理だな、すまん。こつちにはこの地球に慣れてないやつらがいるしな。それにある意味お前らを頼ることになるかもしれん。そこら辺はすいませんがノエルさん達もよろしくお願いします」

「了解であります」

「はい」

「一応確認だけど、シグナム。もし知らない人に声をかけられたら？」

「ふん、レヴェンティンの錆びに「こう言うことだから、よろしくねアリサ、すずか」な、ち、違うのか貴一？」

「ああ、なんか分かったような気がするわ。それでよくはやての家で生活できているわね」

「まあうちに居るだけやし、シグナムは道場に行っただけやからな……」

「ちょっと待つてなの。なんで私にはお願いが無いの！」

「それは」「ねえ」「……なのはちゃん」

「ぶう〜三人して酷いの〜私もここの地球人なの！」

「まあ、それじゃあ入るか？」

そして俺らは各自で店を回っていた、まあアリサとすずかにはノエルさんが（ファリンさんもある意味こちらの子供側に近いので）面倒を見ていて、そしてアルフは外でしっぽを振りながら待っていてもらっている、そしてなのははフェイト家と共に回っている、八神家もそんな感じで、そして俺はユーノのジャージ探し

「お、おもしろい見つけ」

そしてユーノそれをわたす、それはユーノのイメージカラーの緑、あの緑ジャージだ、これで「いや、かつたるいですから」を浮かんだ君、天才だ。と、いうわけで芸人とかが着そうなジャージをユーノにわたす。

「いやこれはさすがにやだよ」

「それでもそうだな」

そう言いながら俺らは店を歩いていて、あんなことになるなんて思いもしないで……

題珀十録話（A's編六十六話）。お買い物（後書き）

それでは、緑ジャージに「いや、かったるいですから」これは非常にマッチでしよう？

それではバイバイ



第一百七十七話（A's編六十七話）。ほのぼの（前書き）

更新速度変更……ごめんなさい

第一百七十七話（A's編六十七話）。ほのぼの

俺らが買い物を買って済ませているとノエルさんたちメイドコンビの姿が見えたのだがしかし

「なあ、いいじゃないか」

「いい店知ってるんだけど」

「ああ、いい、いいですから」

「ど、ど、どうしましょうお姉さま」

ナンパに会っているらしくどうも会計ができなくて困っているようだった、しょうがないか

「ユーノ、ちよいと離れるからここに居てくれるか？」

「あ、う、うんいいよ」

そして俺はすぐにはなれると、トイレに直行して変装する。そして

「すまん、そいつら俺の連れなんだけど……ごめん遅れた。」

「えー!？」

「き、貴一君？」

「げっ、こぶつきかよ、ちっ、しゃあねえ引き上げるぞ」

「そうっすね」

そしてナンパ野郎はどこかえと消えていった、そして俺は二人に向き直り

「大変でしたね、ノエルさん、ファリンさん。」

「うわあ、やっぱり貴一君ですか一瞬誰かわからなかったですよ」

「ですが、どうして?」

「あ、俺さっきそこでユーノと買い物していたんですけどね。丁度あなたたちを見つけたらどうも厄介ごとに巻き込まれているようだったので助けに来ました、って感じですかね。それよりも会計しなくていいんですか」

「あ、そうでした、それじゃあお姉さま、ここにいてくださいね」

そういうとファリンさんはなにかリストバンドのようなものを持ってレジに急行していった、そして残ったのは俺とノエルさん

「あ、あのう貴一様」

「うんなに、ノエルさん?」

「ありがとうございます。まさか助けに来てくださるなんて」

「目についたっていったでしょう。それに友達が困っているの見過ごすわけにはいきませんから」

「友達、ですか？」

「ええ、俺はそう思っていますよノエルさん。あ、そろそろ俺は戻りますね、二つの意味で」

「あ、そうでしたね。貴一様はもとの姿にそれにわざわざすいませんでした私がついていながら」

「はは、それだけお二人が綺麗だったのでしょう、それじゃ失礼します」

そして俺は離れてすぐにトイレにいった、そして戻ると

「すまん、遅くなった、ってあれ？なんでお前らがここに居るんだ？」

俺が変装魔法をといて戻るとそこにはフェイトとなのはが居た、しかも息をからしながら

「あ、あれ？さっき魔法の反応があったから貴一君だと思ったんだけど」

「私たちの早とちりかな、なのは？」

「ああそれか、それなら俺が魔法を使ったただけだが」

そう思えばいつもののはソル達が勝手に結界やらなにやらで俺の魔法の行使をジャミングしていたからな、と思っていると

「も、もしかして何か事件？」

「なら貴一君はここにいてなの、私達が「違う違う」「え、そうなの？」」

「ああ、たださっきノエルさん達がナンパされていたから、ちよいと助けに」

と、俺が言うとなのは達は肩の力を落とした、それほど心配させてしまったのだろう

「すまん、心配かけて「貴一！なにかあったのか」……うん、今度からは魔法を使わない努力をしよう」

そしてシグナムも到着、というよりははやて家が到着、さらにプレシアさんも後ろから来た。てか普通にここに全員集合しちゃったよ。そして俺らはそのあと一緒に歩くことにした

そして貴一が行ったあとのノエルさんらは

「お姉さま、終わりましたよ」

「綺麗、綺麗、ふふふ。」

「お、お姉さま？」

「あ、二人ともここに居たんだ。もう探しちゃったよ」

「あ、すずかちゃん。すいません私が買いたいものがあったので」

「うん、それは大丈夫だけど……ノエルどうしたの？」

「分からないです、さっきまで貴一君が居たはずなのですが、なにかあったのでしょうか？」

「え、貴一君ここにいたの!？」

「はい、いたのですよ。それで私たちを助けてくれたんですよ」

「アリサちゃん、これって」

「綺麗だなんて、そ、そんな」

「間違いないわね。あの馬鹿がなにかいったのでしょうか……」

「ねえ、ファリン」

「はいなんです、すずかちゃん？」

「ちょっとその話、くわしく、O H A N A S H I I しよつか？」

「は、はいです」

こんな感じだった……

そして俺ら一行はお昼となったので再集合することとなり、俺らはアリサおすすめのイタリアンに入ることにした

「これはバニングス様、いらっしやいませ」

ウェイターであろう人が綺麗に会釈する、そしてそれに答えるように

「ええ、お久しぶりね。今日は私の学友を連れてきましたので」

「はい、それではこちらへ」

さすがといえはさすがだろう、しかしこういう店にも息がかかっているのは凄いとすべきだろう。普通の金持ちって大体形式ばった所とかだろうし、こういうフランクな店にも知り合いがあるとは恐るべし、アリサカンパニー。そして俺らは席についた、まあ今回はじゃんけんがなく、一斉にというよりも一瞬で全員が席についた…こいつらはなにかあったのか？

「は、早く座りなさいよ！」

「そつだよ、貴一君。ここだよ、ここ」

そして俺らはアリサとすずかの間座った、ちなみにユーノはなのはとフェイトの隣だった。なんか普通に見ているとこれが原作のシーンなんだろうなと、思っている

「あんだ、なにをするの？」

「あ、ああそつだな、パスタのあっさり系か、辛いやつある？」

「あんだね、もう少し絞りなさいよ……まあいいわ、あっさりならこのアサリね、それで辛いだと、ペペロンチーニでいいんじゃないかしら？」

「あはは、アリサちゃんが苦手な奴だもんね。ペペロンチーニ」

「お子様だな」

「う、五月蠅いわね！それであんたはなにをするのよ？」

「ああ、それじゃあペロンチー二で」

俺はそう言うと、全員決まったらしく、すぐに注文となったしが多いな人数的に

「はやては大丈夫そうね」

「車椅子をなめたらあかんよ、アリサちゃん。それにシグナムもリインフォースもおるから大丈夫やて」

ちなみにはやてはちゃんと車椅子での食事となっている

「はやてちゃんも早く足良くなればいいのにね」

「さすが笑いながらいう」

「まあ実際は、貴一君のおかげで悪化もせずにいるからホント二期までには学校に通えるわよ。」

「そうですか、プレシア殿。やはり貴一のおかげか」

「おうい、シグナムこっちを向きながら言わないでくれ……恥ずかしい／＼／＼」

「なにを言う、立派ではないか」



「そう思えば、あんたってこつ言つところとか豆よね。それに新学期はどうなるかしら」

ジューズを飲みながらアリサがそついうが確かにこの旅行が終われば俺は日常に戻るわけだ。

「ああ、学校か……」

俺はそんなことを思いながら食事をした…旅行が終われば学校、しかし相棒はいない

第一百七十七話（A's編六十七話）。ほのぼの（後書き）

とうとう、題名までもネタが付き始めました……だれか私に知恵を  
！！

醍珀拾八羽（A's編六十八話）。家族の印（前書き）

最近なのはを見返しています

醒珀拾八羽（A's 編六十八話）。家族の印

そして俺らは買い物を終わりにしたが、そんなときに不意に思ったことがあった、そう思えばヴィータ達の土産を買わないといけない事を思い出した

「そう思えば、ヴィータたちのお土産なににしよう。はやてなんかある?」

「うんそうやな〜こついう場合は、ヴィータは食べ物だろうし、ザフィーラとシャマルが選びにくいなあ〜」

俺とはやては悩んでいると

「あおう、主に貴一。これなんてどうだろうか?」

リインフォースが、指したものの、それは

「ふむふむ、ガラスのこれはブレスレット?」

「は、はい。どうでしょう?」

「いいんじゃないか、家族のしるしみたいでな。えつとどこだ?」

そしてリインフォースは俺にその地図を渡してくれた

「ここか、それじゃあ直ぐだな。プレシアさん」

「うん、なにかしら?」

「俺、ちよいと土産を買いに行つて来るんでお願いできますか？」

「ええ、はやてちゃんの家族のお土産ね。わかつたわ、それじゃあ貴一君が付き添いでちゃんとエスコートするのよ」

「このメンバーを見ればどうみても、俺はその逆のような気がしますがね」

そして俺らはなのは達と一回離れて、俺らはその場所に行った、意外にも空いているらしくすぐに注文ができた

「それじゃあ、はやて。ちゃんと選べよ」

「あれゝ貴一君のも作るんよ、選んでえな」

「は、なんでだ？」

「忘れたか貴一、お前は我々の家族なのだぞ。忘れたとは言わせないからな」

そういうシグナム、そう思えばあの事件の時にそんなことを言われた、いや忘れちゃいけないかけがえのない、俺の支えの言葉だ。だから

「そうだな、それじゃあ俺のも選ぶか。どれにするかな」

俺も選ぶことにした

Side プレシア

貴一君たちがいったあとのこと

「それじゃあ、フエイトにみんなはどこに……えっと」

「ねえ、あの二人何しにいったのかな？」

「なんか土産とか言っていたけど。だけど、貴一君独占はよくないよね」

「うんうん」

「あんた達、なにをするきよ」

「アリサちゃんも貴一君の独占はよくないよね、そうだよ、そうなの……!」

「な、なのは。じ、自己完結しているわよ。てか普通にフエイトはついていこうとしているし! すぐかまで、てかノエルさん!？」

私もアリサちゃんの言葉で確認すると、そこにはすでに前かがみで貴一君を目を追っているノエルちゃんだった。と、いうか全員気になるのね。アリサちゃんも口ではそう言っているけどまったく気にしていないわけじゃなさそうだし

「お母さん、私「それじゃあ、いこうかしら?」「え、どこに?」

「ふふ、密偵よ。」

そして私たち全員は貴一君たちにバレないようにあとをついていく

ことにした、しかしそこまでの接近はできない、理由はフェイトから

「シグナムの気配の読みは異常だからこれ以上は無理だと思うよ。それに貴一君もいるし」

「シグナムさんってあのポニーテールの？」

「うん、そつだよすずか。」

「まあはやての話だと騎士って言うらしいからわかるけど、なんで貴一までもよ。今は魔法使えないでしょ？」

「え、けどアリサちゃん。貴一君生身で私のお兄ちゃんに勝ったなの」

「う、うそ。あの人を……」

こんな感じだとぶん貴一君の認識がちよいとアリサちゃんとすずかちゃんの中で変わったようだった。しかし貴一君たちはなにをしているのかしら、そつだ

「フェイト、なんて言っているか聴こえるかしら？」

「うん、この距離じゃってお母さんもしかして」

「騎士にばれないように魔法を使うなんてこの大魔導師なら簡単よ」

そして私は、というよりも全員がその会話を聞いた、間違いなく貴一君にばれれば怒られるだろうが。そして聞いてみると

「しかし、貴一と主、そして私はあの家での共同生活となるんですよね」

「そうやでリインフォース。それに日替わりでシグナムたちも帰ってくる、まあ貴一君の場合はいつ解けるかわからんけど」

「そうだな、俺の場合は年度変えの時だからな。まあ夏休み前からはやての家には住んでいたから慣れてはいるんだかな。はあくまたお世話になります」

「うんうん、ええよ、ええよ。それにそっちのほうは私的には都合がええし」

「なんか言っただかはやて」

「な、なんでもないでえ〜それにしてもシグナムもこれから大変やな」

「そうでもありませんよ、主はやて。私は確かに道場の顔出しが少なくなるでしょうが、それでもあの家に帰れるだけでもよいほうですから」

「それに私は、主の足のことに恩返しもしたいので。それと一緒にいる貴一からなら体術を教えてもらおうと思っていますし」

「ああ、そう思えばそうだったな。リインフォースには最初に基礎鍛錬だったな、まあ俺が帰ってからだが」

「ああ、ありがたいことだ」



「“家族”だからな」

貴一君の家族だからな、の言葉に反応したのがやく、五名。順にいうと

「か、家族？」

「どついうことだろうね、なのは？」

「O H A N A S H Iなの！」

「ノエル、わかっているよね」

「はい、すずかお嬢様」

アリサちゃん、フェイト、なのはちゃん、すずかちゃん、ノエルちゃんだった。みんな黒い笑顔だった、私は普通にいられたけど

「ガクガクガクガクガクガクガクガクガクガクガクガクガク」

ユ一ノ君とファリンちゃんは震えが止まらなかった

side out

俺らがい物を買って追えて、というよりもこの職人は凄いな、ザフィーラから俺の分まで普通に二十分で終わらせるあたりさすがだ、それに同調したみたが、結構ちゃんとしていたので壊れることはないだろう、ちなみにブレスレッドの中に入れた言葉は家族最初は、八神家というのがあったのだが、俺はどうなるということが変わった、ちなみに各種色は違う。俺は黒のクリアで、順にシグナムが紫、リ



醍珀拾八羽（A's編六十八話）。家族の印（後書き）

最近ggggggですいません!!

d a i 百十九話 (A s 編六十九話)。テニスの王子様 (前書き)

百十九話め・・・長いものです

d a i百十九話（A's編六十九話）。テニスの王子様

今日は、三日目のテニスだ。ちなみに二日目のは…気にしたら負けだ

「これこそがツイストサーブ！」

「な、また、その上にあがるサーブ。だけどこれならうそさらに回転!？」

この会話で分かるだおるが、現在俺はアリサと勝負している。ちなみに俺がこんな本気な理由は簡単だ、じつはこの前にもすでに俺はずずかと、ノエルさんと戦っている。なぜ俺が連戦なのかと言うと今日の朝食の時に俺が負けた者の言う事を一つ聞くと言うなんと都合コンのようなゲームに巻き込まれたのが原因だ、しかし俺もただで負ける気は無く普通に快勝していた、そして

「ゲームアンドマッチだね、貴一君の勝ち。いやあしかし貴一君つよいねえ、うちの妹とノエルが負けた時はビックリしたけど。それに汗かいてないし」

監督兼審判担当の忍さんがそういった、しかしこれぐらいならまだギル爺の鍛錬の方がきつい。

「もう、なんなのよあんた！私るときになんで負けないのよ!!！」

「アリサ、お前普通に俺が負けると思っているのかよ……まあいいやそれで次は……なのはか」

ちなみにフェイト、シグナム、リインフォースはまだテニスが何か

分からないので、普通に俺が午後教えなければならぬので、いまは普通にベンチにいる。はては俺のマナージャーをしている、そう思えばおれを決めるときこのいつらじゃんけんしていたけど、そんなにジャンケンがおもしろいのかね？

「全力全開なおおお」

「ユーノ、ちゃんと結界張って置けよ。もしかしたら魔弾が飛んでくるかもしれないからな」

「ぶう、貴一君いじわるなの。そんなことたぶんしないなの」

「たぶんって」

俺とユーノの心が一つになったときだった、それと親チームは普通に隣のコートでテニスをしていた、てかこのホテルって普通に凄いな。個人のコートが普通に二つまで大丈夫なんてよ

「あまいなの！」

俺のツイストをまさかの、あのジン流のよけ方はしだしたよ……おい、この世界はなんなんだ！

「これでどうなの」

とそのまま打ち返すと思いきや、まさかの

「あれ？」

空振りになった……もしやなのは



「もちろんや。その時は私にも教えてくれるん？」

「なにを当たり前の事を。はあくしかしお腹空いたな、ホテルのあのレストラン街に行こうぜって言う前にあいつらに休息が必要か？」

「そうみたいよ、みんなダウンしているもん。それにあっちはあっちで普通にテニスしているし」

そういう隣のコートは、普通にテニスをしているが、しかしさすがはシグナムか、普通にできてるじゃないか……まあフェイトは残念なことになっているが。しかもボール取りはアルフかよ。まあユーノも一緒のようだが

そしてそれから時間が経ち、俺らは昼となった。今日はさすがの提案で中華だ、しかしやはり高級店の店ばかりだ……バーミンとかないのかな、ここ

「しかし、テニスって疲れるな。久しぶりの運動つてもあるのだから」

俺はそういいながら、中華の醍醐味の回るテーブルをまわしながら北京ダックをとる。

「なに言っているのよあんた。私たちの連戦で、普通に汗かかないでやっていたじゃない。ね、すずか？」

「そうだよ、貴一君異常だよ……私たちはともかくノエルが負けるなんて」



「けど、疲れているって大丈夫、貴一、このあとは私たちの」

「それは大丈夫だフェイト。シグナムはすぐに終わりそうだが、お前とリインフォースは時間かかりそうだな」

そう言っただけ俺はこんどはフカヒレを食べるのであった。

そして午後のテニス教室のスタートだ、まあ最初は打ち合いをしよ  
うとするのだが

「フェイト、まずボールをみる。それとお前はバルディッシュのよ  
うに振りすぎだ。これは鎌じゃないぞ、それとリインフォースは力  
みすぎだ。それとシグナム、お前はもうあつちに「いやだ」ああ、  
そうですか」

「しかし、貴一よ。これはこの世界のスポーツというものなのだろ  
う」

「ああ、そうだよリインフォース。ちなみにお前が気に入ったあの  
卓球もスポーツだからな」

「ああ、分かっている。卓球と同じルールに近いが、まったく別物  
と言っことぐらいな」

なんか、酷い目にもあったのだろうか、しかし

「ノエルさん、もっと私に力を」

「し、しかしアリサ様。今でも結構重い弾でしたよ」

「まだよ、あの馬鹿においつくんだから」

なんか、隣は隣で燃えているし。そしてそこに大人グループの登場だ。どうも昨日の買い物だけでは買いきれていなかったらしい。しかし恭也さんがそつちにいったのは意外だったけど

「お、やっているな。と、貴一君はまた教えているのかい？」

士郎さんが、俺らのコートに来た

「あ、はい」

「士郎さん、ちなみに貴一君に勝つと、貴一君がお願い事を一つ聞いてくれるんですよ」

忍さん、余計な事を…

「ほう、それはおもしろいな。恭也。やってみないか」

「俺が？」

「ああ、そうだ。もしかしたら再戦できるかもしれないぞ」

士郎さんの声に反応した恭也さんはすぐにラケットを持ち、そして

「すまないな、ここで試合してもいいかな。貴一君こっちのコートでどうかな？」

そういうと、構え出した…おい、俺は平和的にこいつらを教えて

「いつて来い貴一。私たちは待っているから」

シグナムがそういい、他の二人も頷いているし、それに助けになるはずの大人は全員笑っているし。それに一番笑っているのは忍さんだし。まったく

「はあくわかりました、それじゃあ行きますよ、恭也さん」

「…こい」

そして俺と恭也さんの試合が始まった。

d a i 百十九話 ( A ' s 編六十九話 ) 。 テニスの王子様 ( 後書き )

題名からと思いますが……ネタな回です

第二百二十話（A's編七十話）。夏休みが終わる、それは悲しいことだ（前書き

SとS編に入る前に一度、オリジナル達のパラメーターを書きたい  
と思いますのでよろしく、お願いします。

第二百二十話（A's編七十話）。夏休みが終わる、それは悲しいことだ

そして恭也さんとの試合は意外にも泥仕合だった、さすがに大学生を相手しているところっちとしても腕の長さのリーチに問題が出てくる、しかしそれはどうにか足の速さで追いかけているのが現状

「うん。これで連続三十回目のデュース、二人とも休憩は」「いらん（いりません）」「……そう。それじゃあ次のサーブは貴一君よ」

そして俺はボールを持つ、そしてコースギリギリで打ち込みがそれを返すのが恭也さんだ、てか今のは神速だよな……

「まったく、恭也のやつめ。そこまでリベンジがしたいのか？」

士郎さんが観客席からそう言っているがなにを言っているのかは聴こえなかった。

「ふっ」

そして恭也さんは意外にもそこでドロップを打ってきたのでそれは急いで走り、カバーに入った瞬間。

「貰った！」

そして今度こそ完全に俺の頭上を越えてボールは、俺の後ろのネットに直撃した。そしてそれをきりに俺は負けた。

「さ、さすがは恭也さんですね」

「なにをいう貴一君、まさか小学生の君に私がこんなに息をきらしているだけで完全にこちらの負けだ。はあはあはあ」

「そんなになるむきになるからよ、はいタオル」

「すまん、忍」

「はい、貴一君もご苦労様。すごい汗よ」

そして俺にもタオルを渡してくれる忍さん、そしてはやてがすぐに飲み物をくれた

「残念やったな、貴一君。けどかつこよかったでえ」

「あはは、ありがとうはやて。しかしさすがに疲れたよ、今日は、もう休みたいぞ」

「いいんとちゃうっ？士郎さーん」

そしてはやては士郎さんに言いに行った、俺は完全に大の字でコートにねそべっている。しかしこれはつらい、鍛錬をもっときつくして……

「大丈夫か貴一？」

「あ、ああシグナムか。どつちらかというと全然大丈夫じゃない、それに完全に燃え尽きているよ」

「ふ、そうか。それにしても見事な試合だったな」

「うんうんシグナムの言うとおり凄かったよ貴一。けど本当に大丈夫？すごい汗だけど」

フエイトも来たということは、たぶん初心者組も終わったと言うか帰ってきたのだろう。そして恭也さんが近づいてきたの目に見えて俺は体を上げた。そしてこう言われた

「明日、勝負がしたい。場所はこちらが用意する、手加減無の一本勝負。君の特殊な力も使っていていい、真剣に来てくれよ」

そう言うとき恭也さんは忍さんと一緒に消えていってしまい、そしてその後ろから士郎さんが来て

「と、いうことだから頼むよ。たぶんあのときの再戦だと思うから、それと手加減は本当にしないでくれよ」

「ふふ、貴一君の魔法無しの強さ。見せてもらおうよ」

そう言うと士郎さんたち大人連中も行ってしまった、そしてなのは達が近づいてきて

「あんたって、プロテニスプレイヤーにでもなるの？」

「もう、アリサちゃん。それよりも先にいうことがあるでしょ貴一君。苦勞様。まさか恭也さんとあそこまでできるなんて、もしかしたらおねえちゃんともいい勝負ができるかもね」

「なのは、ずっと見はいちゃったよ、さすが貴一君なの」



「貴一君、どうやらこれで今日は終わりらしいで、って！なんでみんなして貴一君の周りにおるんや！今日は私が貴一君のマナージャーやで！！ほれシッシッ」

そして野良の犬を追い払うようにはやてが他の全員にやる、その目はまるで鷹の目だった。しかし、車椅子なのにここまでとく器用に使えるよな、普通座っていないながら上半身以外でも表現が出来るとは思わないよな、まあそれもすぐに終わるだろうけどな

「あはは、はやてもそれぐらいにして。もう終わりだ、俺はシャワーが浴びたいから先に戻っていてくれ」

俺はそういうとラケットとかをはやてに預けてそのままロッカー室のシャワーに直行してた、さすがにこの汗の量はまずい

Side はやて

そして貴一君は私にテニスラケットを預けるとそのままシャワー室に行ってしまった、けど

「頼られているのは悪くないな」

そうなのだ、いつも私はこういう足のせいでもどちらかという迷惑をかけている、しかし今、貴一君は私に頼ってくれたのだ、これはうれしくてしょうがない。

「主、ラケットを」

「いいよ、ラインフォース。これは私がやる、なんて言ったって今日は貴一君のマナージャーさんやもん」

「ぶうくはやてちゃんずるいなの！」

「まあまあ、なのはちゃんも。私たちはその分勝負させてもらっているだから……けど羨ましいよね。ね、ノエル？」

「……はい」

「それでは我々の戻るとしよう。テストロッサ、忘れ物だぞ」

そしてシグナムがフェイトちゃんにわたしたのは

「あ、アルフ!？」

「さっきまでそのベンチで寝ていたのだが、確かに考えてみればずっと我々のボール拾いをしていて走りっぱなしだったのだろうか？」

「あはは、ありがとうね、アルフ」

「お、お肉う」

そして全員が笑ってしまった、そして私たちはホテルに戻った。

しかし全員忘れているだろうが、もう一人ボール拾いをして一苦勞していたフェレットがベンチの下で寝ていた

「あ、あ、ああす、スプレーが襲ってくるう」

この寝言は、まさかの正夢なのだった。

そして今日はある意味この旅行の最終日だ、現在居るのは体育館のようなところ。アリサの計らいで誰も俺ら以外は居ない、というよりもこのホテルなんでもありなのか？まったく和なのか洋なのかわからないが、ここは素直に感謝しておこう、そして恭也さんは木刀ではなく真剣を持ってきた、真剣ってそういうことだったらしいので俺もそれに答えるべく、俺は指を鳴らした、そして後ろの空間から出てくる剣や武器の数々。そして全員が驚愕した。

「な！」

そして俺は一本の西洋剣を取り出す、それはいつもは風の鞘に入れられているあのアーサー王の聖剣

「それではやりましょうか？恭也さん？」

「ああ、いざ、参る！！」

「この剣の名の通りに、勝負！」

そして結局、休みの最終を勝負で終わらせた、それが俺の夏休み最後の思い出だった。

第二百二十話（A's編七十話）。夏休みが終わる、それは悲しいことだ（後書き

バイニー！



## 第二百一十一話 戻った日常

「それじゃあいつてきます」

今日は夏休みも終わり、二学期の始まりの日。いつもと同じ朝だ

「いつてらしゃい、貴一君」

「ああ、きをつけてな」

出迎えにはリインフォースとはやてである、今日は本当はヴィータも家に帰ってきているのだがどうやらまだ寝ているらしい

「ヴィータちゃんは、まだ寝ているからねえ。なんでも忙しいらしいよ」

忙しいと言つのは管理局の仕事だろう、まったくまだヴィータ達は飯だろうに。しかしそれでも誰かが必ず帰ってくるのはやはり主の心配なんだろう

「あいつは寝かせておけ。それでじゃあ行つて来る」

そして俺ははやて邸からの登校となる、そしてすぐに俺は拉致られる、その犯人と言つと、この四人衆だ

「お久しぶりです、貴一殿おはようございます。今日もよろしくお願ひいたします」

鮫島さんが丁寧に挨拶をしてくれて車のドアを開けてくれた

「おはようございます」

俺はそう言つと車の中に入る。そしていつもの面々にも挨拶をする

「おはよう、なのは、アリサ、すずか、フェイト」

「」「」「おはよう」「」

そして車から降りれば

「はあ、夏休みを過ぎてもこの注目度はあるのか……悲しいね」

やはりあの車も目立つことながら女子四人としかも男子一人つてのは目立つ。まああの一軒以来「騎士様」とか言われているのでなんとか嫉妬まがいな目は

「ジイイ」

……若干は引いたと言つことにしておいてほしい。そして久しぶりに感じる教室に俺は入ると、クラスの面々に声をかけられてそれに答えていた。そして

「よ、雄聖。相変わらずの読書か？」

「あ、貴一か。おはようさん……少し焼けたか？」

「あ、ああちよいな」

「夏休みが終わったからって、なにか変わっていると思つて居なか

「ただけど……貴一はなにかあったか？」

「そうだな、まああったよ」

「そうだな、例えばはやてとか、魔道書とか、デバイスがないとか。と、いうことで俺はいつものネックレスをしていない。まあ制服の下にいつもつけているから誰も知らないことではあるのだがな」

「へえ〜貴一がそんなことを言うとは珍しいね、実に面白そうな体験のようだけど、あ、そろそろチャイムのようだね」

「そして雄聖が言うようにチャイムがなり、そして全員が席についた。そして俺は驚愕することとなる」

「はい、みなさん。お久しぶりです」

「担任の先生の挨拶はやはり休み明けだから色々あったようだが、先生は廊下側を気にしているようで、なにかあるのだろうか？」

「……そしてですね、今日はなんと皆さんに新しいお友達が来ました。それでは“八神”さんは入ってきてください」

「……おい、まて担任。今なんて言った？ヤガミだと、そ、そうか矢上さんか。と俺が自己完結しているとそれは脆く一瞬で破壊された。」

「初めまして、八神はやて、いいますよろしくお願いします！」

「それは間違いなく、夜天の魔道書の主だった。」

「えっとみなさん、八神さんは足が不自由で今まで学校に来れませ



んでしたがそのお病気が快方に向かってきているのでこちらに復学となりました、みなさん仲良くしてあげてください」

「「「「「はい」「」「」「」

妙に男子の声が強いような気がしたがきのせいか？しかしこれだけなら俺はたぶん軽症ですんだのだろう

「それでは、八神さんの席は」

と、先生が言い始めると男子が一斉に目を光らせ始めた、全員、なんか怖いな。雄聖は、やはり興味が無いように読書中だ。てかあいつ不良だな、先生の話も聞かずに。と思っていたら雄聖にこちらを向かれて、そして苦笑された。はい？そして俺は前を向くとそこには教卓の上で完全に俺を見ているはやてだった

「あ、先生。私貴一君とお友達なんです、やからできれば貴一君の隣がいいです」

そして男子に一斉に睨まれる俺。

「あら、そうだったの。それならわかりました、星川君の隣にしましょう。それでは席の移動を」

と、先生が指示を飛ばし、そして俺には殺気を飛ばし、そんな感じで朝のHRは終了。ちなみにはやてはまだ車椅子なので、ちよつと特殊な机を使用。そして今はやてと言うと俺の隣で絶賛質問攻めにあった、まあ女子からだが。男子は遠巻きでみながら俺を見ると睨む。俺は蛙か何かか、そして俺はその席から雄聖の方に移動した

「相も変わらず注目を浴びるね、貴一。テストロッサさんのときもこんな感じじゃなかったけ？」

「はあ〜そうだなあ「貴一くん、たすけてえ」……すまん雄聖」

「はいはい、これはお姫様が一人増えるのかな？」

俺がはやての声でいくと女子連中は俺に道を作ってくれて、そのままさっきの席に戻された、そして男子の小声が

「おい、あいつは騎士だよな」

「しかしまたあんなかわいい子なのか！」

「しかもまた下の名前だぞ」

「やはり一回、しめるか？」

普通に聴こえてくる、危ない事だった。

「いやあ〜な貴一君とどういう関係で聞かれてな、それで一緒に住んでいる夫婦みたいやって言うたらみんな、驚いてしまあてな」

「誰でもびっくりするだろうが、それに夫婦のようじゃなくて一緒に住んでいるだけだろうが、まったく」

『一緒に住んでいる！？』

「そうやで、私のお家に貴一君は居候しているんやで、それで色々とお世話しても貰っておるんよ」

そして爆弾が投入されて、痛いですが、殺気が痛いです。しかしそれだけでは爆弾は止まってくれず、今度は地雷が起動した

「「「「はやて(ちゃん)」「」「」

そしてこの四人衆である。

「なんだ、まさか四姉妹とも関係があるのか」

「こうなったら、徹底的に星川の身元を洗え！」

「そうだ、さすがに騎士様といえど五人はずるい」

「…しかし勝てるのか俺らに？」

「「「「「」」」」」」

そしてはやては廊下にいるあいつらに向かってこう言った

「これで、同じ舞台やな。しかも私は同じクラスで一歩リード」

なにがリードなのかわからんが、まあ退屈のしない学園生活になるのかは確定だろう。

## 第二百二十一話 戻った日常（後書き）

ブ「と、言うわけでどうでしたか、日常編。久しぶりのあとがきに登場の作者、ブラックサレナと、そして」

貴「久しぶりなのは、お前がサボっていたからだ。お久しぶりです、星川貴一です。そしてなぜ、今日は後書きがこんなのだという」と

ブ「またまた、皆様にアンケートをしたいと思っています」

貴「ええ、内容は。このまま、この「魔法少女リリカルなのは」少年の願ったり叶ったりの世界！？」のまま章で、StS編に入るか、それとも」

ブ「新しい題名としてStS編をやるうか迷っているためな作者です、本当に」

貴「と、言うことでどちらがいいでしょうか？と、そんな感じなアンケートです。」

ブ「皆さんのご意見、ご要望をお待ちしております」

貴・ブ「バイニー！」



貴「おい、作者。一回ぐらいオリキャラの設定をだせよな？」

ブ「……あっ………」

第二百二十二話 出た、執務官！（前書き）

日常編です！

## 第二百二十二話 出た、執務官！

それから数日が経って、はやてもあのし四姉妹から五姉妹へと進化をとげた、その原因となつてしまひさらに注目が増えた今日この頃だつた、その理由はたぶん

「あはは、貴一君もつとこっちに来てよ。そうじゃないと教科書が見えないよ、私」

未だに届いていない、教科書。そうすると自然的にはやては隣の人に教科書をみしてもらうしかない、そうすると自然的に俺となる。そしてそれと同時に殺気も感じるのがデフォルトだ。そしてそれも終わり、はやてはクラス的女子とお話をしていた、なんでも八神ちゃんも面白いからだそうだ。そして俺は雄聖の前で話す

「君には女難の相でもあるのかな。まったくおもしろいよ、ここ数日で君はまた有名人だ。友達として鼻がたかいよ」

「お前それいやみだろう？」

「他になにに？」

「はあく、そうかいそうかい」

「それに。お呼びのようだぞ」

雄聖が苦笑して廊下を指差した、そしてそこにはなのはとアリサが、なぜかすごい笑顔でそこには居た。



「えっと、なんでしょう?」

「貴一君、さっきの授業、はやてちゃんとずっとくっ付いていたって本当?」

「どつなのよ、あんた!」

女子は情報がはやいと言うがそれは本当らしい、たぶんさっきの授業のことだろうけど、まさかそのすぐの休み時間でこうなるとは

「い、いやあくそれはだな「本当やでえ」は、はやて!?!」

そして俺は後ろ向くと、そこには車椅子に座りながら器用に俺の後ろにつくはやてであった。

「教科書がまだ届かないからしょうがないよ」

「それで、なんでアナタはそんなにうれしそうなのよ、はやて!」

「そうだよお、ずるいよあくただでさえ貴一君と同じクラスなのにしかも席も隣だし、こうなったらこの教室を吹きとバ「やめろ、なのは「ぶう」」

そんな俺と同じでも楽しくはないだろうに、しかしそこにさらにすずかとフェイトも来た

「どつだった、なのはさっきの話」

「本当のようなの!」

「こうなったらバルディッシュで「お前もか、フェイト。辞めなさい」「う、き、貴一」

そして救いのようにチャイムがなった。

「ほら、お前らチャイムだぞ。戻った戻った」

そういうとなのは達はしぶしぶ戻っていったがそこに爆弾を投げ込んできてなのはフェイトだった。

「貴一、今日のお昼も一緒に食べようね。それと今日はお母さんが貴一君を呼んで欲しいって言っていたからねえ、くわしくはお昼にねえ」

「あはは、プレシアさんからか、なんだろう？」

「うーん、プレシアさんからややから間違いなく、あっち関係なんやろうけど……さっぱりやな」

「そうだな、まあそれは昼に聞く……か」

俺は絶句した理由は、簡単だ雄聖以外の男子から全員俺を睨んでいたからだ、俺がなにをした。ちなみに雄聖は腹を抱えて笑っていたがなぜだ？

そして昼の時間となった、ちなみにはやてはどうやって屋上にいくかと言つと

「さすがはバニングス家だな、まさかこんなものを学校につけるなんて」

そう、はやて用の車椅子になりながらも階段を上れる、あの機械だ。俺も前世で一回駅で見たことがあるぐらいだったが、まさか学校につくなんて

「そ、そりゃね！」

「イラン事を」

「うん？なにか言ったかはやて」

「なんでもないよ貴一君、くっ」

最初は俺がはやてをお姫様抱っこしていつていたのだが、さすがに俺も恥ずかしいし、それにアリサがどうかしてくれたので本当にこれには助かった。さすがに教室の廊下からあれは上級生の注目の的だった。

「うん、さすがはまだ九月。心地よいと言うよりも暑い」

そして俺らはいつもの通りの食事となった。ちなみに今日は俺の弁当だ、はやてとの取り決めで交互に弁当を作ることにしたのだ。そして俺は食べながらフェイトに話を聞いた

「それでフェイト、一体どういうことだ？プレシアさんからの話って俺はまだ判決前の者なのだが。」

「うん、私も教えてもらっていないんだけど。なんでも手伝わしてほしいことがあるらしくて今日は帰りにこっちによって欲しいって言うっていたよ、ちなみにリンディさんからも了承受けてるみたい」

「はあくわかったそれじゃあ、帰りにもよってみるとするよ」

俺はそういいながら王子焼きを食べる、そしてそんな感じでいるとアリサがこんな事を言い出した。

「そう思えば最近なのは達は放課後とか忙しいみたいね。この前なんていつ帰ったかわからないぐらい早かったんじゃない？」

「にやははは、最近管理局も本格的になってきてなの」

「まあどうせ、まだちゃんとした役職じゃないだろうけど。大変だろうな、それにしてももつとばれないようにセットアップしろよお前ら」

そうなのだ、A's編の最終回でたしかにはやても混ぜてのセットアップの終わり方をしていたが、普通に今でやっている。しかもあの盛大な光と魔力を出しながら。デバイスはとられているが魔力探知は余裕だ。ちなみにはやてもわかるようで俺を見ると苦笑いしている

「はあくなのは達は忙しそうだし、あんたら家に出れないし」

「寂しいのアリサちゃん？」

「え、そりゃあくってなにを言わせるのすずか!」

「うふふ、アリサちゃんは正直じゃないなく私は寂しいよ。みんながいないのは、まあその分責一君は私たちと一緒に居るからいいかな」

「「むっ」」

「うん、すずかなにか言ったか？」

「うんうん、なんでもないよ、ね、アリスちゃん、はやてちゃん」

「「そう(ね)」」

それから放課後になった。俺は先にはやてを家に帰らせてから行くとしたが、そこに

「お、貴ーははやてー」

手を振っているのいるのは、俺らが旅行で買ってきた土産をつけているヴィータだった。

「あれ、ヴィータちゃん？」

「ヴィータ？どうして学校に？」

「ああ、なんでもリンディさんから、貴ーをはやくプレシアさんに合わせて欲しいってことで私がはやての迎えに来たってわけだ」

「それは助かる。それじゃあ二人ともまたな」

「おう」「あとでなあ〜」

そしてはやて達は帰っていき、俺とフェイトは一緒に帰る事にした。そして家に到着。

「お母さん、ただいま〜貴一、連れてきたよう」

フェイトがそう言うとエプロン姿のエイミーさんが登場

「あ、お帰りなさい、フェイトちゃんに。お久しぶり貴一君。さ、さ、上がって上がって」

なぜここにエイミーさんが居るかはわからないが兎に角居間に行ってみた、そして居たのは

「あ、おかえりなさい、フェイト。それにいらっしやい貴一君」

「お邪魔しているよフェイト。それと貴一」

「俺、帰っていいよね？」

そうそこには、クロノ執務官が座っていたからだ。

第二百二十二話 出た、執務官！（後書き）

それでは次回もお楽しみに

第二百二十三話 厄介ごとを持ってきたのはなんと………(前書き)

と、いうわけでもうすぐ夏休みですね！



第二百二十三話 厄介ことを持ってきたのはなんと……

俺がテストロッサ邸につきりビングに入りそして回り右をして

「俺、帰っていいよね」

そういうがすでに背後はアルフに封鎖されていた、そしてフェイトも苦笑しながら俺を帰す気はないようなので、俺は両手を挙げてそのまま執務官の前に座った。

「君は久しぶりにあって、その態度なのかい？」

「久しぶりにあっても、嬉しくないのなら仕方のないような反応ですが。それで、クロノどうかしたのか？」

俺はすぐに本題を聞いた、こいつがここの地球に来てまで、しかも人の少ない場所に呼ぶということはそういうことだろう。だから俺はすぐに聞くことにした、どうせ俺は今にも出来ない身だからな

「ああ、実はな。君に用があると言うのは違うかもしれないが、君ぐらいしかできないだろうから、君を呼んだのだ」

そういう言い方をするとまるで厄介ことを俺に押し付けようとしているのが見え見えなのだが、執務官

「パス」

「なにも行っていないぞ、僕は」

「パス」

「君は僕の話をして「パス！」もう、君は一体どうしたのだ！僕の話を知ることにはしてくれてもいいじゃないか！？」

「どうせ、面倒なことだろう……絶対パスだ」

「……もし、デバイスが戻ってくるとしても？」

「どうということだ？」

俺は今、クロノが言ったことに疑問しか浮かばなかった。それもそうだ、現在俺のデバイスの三機は全部ギル爺の手元、しかもソルは強化されるらしいが……

「君のその顔は、確実に疑っているだろう、けどどこにある」

そしてクロノが持ってきたが指輪、そして

「ちょっとまで、クロノ！なんで母さんが居るの？」

そうなのだ、問題は指輪とそして通信越しだが、俺の母さんがいるのかだ。

『うふふ、うふふ、うふふ。きいちゃあああああああああ  
あん！！もう会いたくて会いたくて、私、私』

通信なのに完全に画面から飛び出そうな感じた、おいおい。しかも端の方で父さんが居た、しかも遠慮しがちにいるのが目に余った。

『まったく、お前は少しぐらいどうにか「抑えられるわけがないじゃない！」しかもいろんなことに巻き込んでしかもこんなかつこよくなってもうっ！』「あ、あはは、すまん貴一、話をするまで時間をくれ』」

しかし、それをみて、一言言おう俺以外の全員が呆然だった。

「あ、あれが伝説の部隊……の星川隊長ら？」

「こ、これはすごい家族光景だね、クロノ」

「と、いうよりも貴一のお母さんって美人だね」

「いや、フェイト。それを言ってくれるのはありがたいのだが、どうもこれを見てもらっている身としては正直に言えば恥ずかしい」  
そしてそれから十分ちよい

『すまん、リリが落ち着いたので、私から言つとする。貴一、お前のデバイスは現在一つに変わっていると云つ事を最初にいつておくぞ』

「え、どういうことだ、父さん？」

『ふむ、それはまあこっちに確認したほうがいいか、ムーン説明してやれ』

「了解だ、“マスター”」

「マスターってムーン？」

「ああ、“坊ちやま”というのも久しぶりですな。じつは我々はこの主に戻ったのだ」

「え？お、ま、まてムーン、確認するぞ、父さんのコアはないんだよな？」

「そうですね、ですが問題はそこではないのです。実はそれはリリ殿おかげでどうにかなりましたのです。リリ殿が媒体となって私とマスターを繋げたのです。もちろんギル殿の助けもありましたが」

なるほど、そういうことだろう。ないのなら借りればいい。どこかの赤い悪魔が、あ、そう思えばはやての声の人か、その人がいつていたな。なければもってくる、だからムーンもサンも父さん達に戻ったのだろう、ってことは？

「そうすると、ソルは？」

「未だに回収されたままです」

「ああ、そう。それでなぜ俺が呼ばれてしかもムーンだけがこっちにきているんだ？」

『それは私から言おう。じつは現在この地球の時空になにかのゆがみがあったらしいのだ。それで私たちが行こうとしたのだが、まだ我々は時空のゆがみに近づけないのだ、そのため現在地球の近くにいるアースラが今回の事件を』

「ま、待ってくれ父さん。父さんはもう管理局じゃあ『え、ええ、もうすでに通信がきれそうだ、それではな。息子よ』あ、あれ？切

れちゃった。それでムーンをどうしろと」

「ん……貴一、アースラに来てくれるか？」

「いくか、行かないかを聞けば、行くしかないようだな。しかしあの通信のきり方」

何かを隠しているようなそんな感じだったけど。まあそれよりも今は目の前の問題か。

「それで、その時空の乱れやらは、お前らだけではどうにもならないのか？しかもこんな一介の犯罪者に手を借りないといけないほどの」

俺は皮肉そうに言うと

「ああ、その通りだ。今回ばかりは我々ではまったく手がだせないのだ。そして今回の君の推薦はアルバート提督のものだ。しかもなのはやフェイトも今回の件には関わることになるだろうな。アースラもちだからな、そして君の臨時のデバイスがムーンと言っただけだ」

「はあ、ってその前になのは達も！？」

「そっだ」

「ま、まて時空の乱れってのは一体なんなんだ？」

「それは、アースラに来てからだ。これはプレシアさんですらまだわかっていないそんなものだ」

「そういうことよ、ごめんなさいね貴一君。本当は最初にいえばよかつたのだからけど、アナタあんまり管理局好きじゃないでしょう、最近」

俺の今までの拘束をしているのだろう。

「ま、まあ貴一。今度は大丈夫だから。一緒にいこう」

フェイトがそう言いながら俺の手を握った

「あはは、大丈夫だよフェイト。それよりも電話貸してくれないか、はやてに今日は帰れそうにないと言わないとな」

そして電話をかけた、俺だったのだが

『なに！？今日は帰れへんやおおお！どういうことや！もしかやフェイトか、フェイトが』

「い、いやあ、管理局に呼ばれていてだな『そんな無視や！』お  
いおい、はやて」

さすがに無視はまずいだろう

「と、いうことですかまんが帰れそうにない。た、たぶん明後日ぐら  
いにはかえられるから、それじゃあな」

『ちよ、ちよっと待ちいな！“ブチッ” ツウーツウーツウー』

「はあ…まったく「ふふふ、大変ね」げっプレシアさん」

「ふふ、さ、行くわよ」

「は、はい」

そして俺は久しぶりの魔法に触れることとなったのだった。

第二百二十三話 厄介ごとを持ってきたのはなんと………（後書き）

事件だから！

ごめんなさい、もうネタがつき始めました。それではバイニー！



第二百二十四話。えっと、ブランクってなあに？おいしいの？

久しぶりに指輪の感触、そしてこの近未来てきなモデルのアースラの中に来た、そしてあの一件以来、来ていないこの艦長室。

「入ります、クロノ執務官、ならびに今回の魔導師達を連れてきました。」

そういうといつもの通り、ドアが開き、そして今までとは違い、コーヒーを飲んでいるリンディさんがいた、そして俺は挨拶をした

「どうも、リンディ艦長……相も変わらずの甘党のようですね」

まあ、普通にコーヒーの色がその、なんというか白いような感じなのだが。

「ふふ、はいお久しぶりです貴一君。それと今回の協力に感謝するわ。それにしてもリリもいきなりこんなものを私に送ってこなくても……」

「母さんが？」

「ええ、それじゃあなぜアナタを呼んだのか、ちゃんとしたことを言わないといけませんね、こちらを見てください」

そして出てくる映像は、どこかの世界だろう。間違いなく、しかし次の瞬間

「な？あれは龍種？」

そうなのだ、龍だったよ、しかもリオレウスだったぞ。おいおいどういうことだよ、まさかまたあの馬鹿マリアさんのせいか？俺はそんな疑問を思いながらも話を聞いた。

「これは最近、となつてまありリが見つけたものなんだけど、どうも我々もまだ知らない龍種らしいの。まあ龍と言うのも形としての判断なのだかけど。そして問題はそれとその付近の次元の歪みが問題なのよ。私たちのこのアースラのコンピューターを使つても、いまだに解析ができないほどの磁場が発生しているらしいの、それで」

「俺と言うわけですか……ギル爺は？」

「アルバート提督は、まだミッドのようよ。あの一件以来まったくこちらにも顔を見せていないもの、それに仕官学校もあることですし」

まだギル爺はミッドらしい。と、なるとこの場合解析を近くまでいってそして解析、そしてそれが終了次第突入。そしてアースラのコンピューターよりも優れている演算処理となると、俺がギル爺。ってことは

「もしかして、これって俺がないと」

「ええ、作戦そのものが破綻ね」

笑顔でいうリンディさんだが、確実に脅しだろうな。俺、犯罪者、そして裁く人たちおれの周りにいる、これこそが本当の四面楚歌か。しかもこれを発見したの俺の身内となると完全に

「わかりました、それじゃあ作戦の時間を教えてください」

観念するしかないでしょう。本当はこういうことは後半年ぐらいまでおさらばだと思っていたのに、グッバイ日常。

「それでは、これより二時間後に作戦を開始します。作戦内容は、貴一君が解析を完了次第歪みを突破、そしてその世界に着きすだい我々の調査、調査に向かうのはなのはちゃん、フェイトちゃんアルフさん、クロノ執務官、そして貴一君、現場の指揮官はクロノ執務官が当たってください、それと疑っているわけではないのだけど貴一君にはリミッターを就けてもらいます。それでは貴一君は感覚を思い出していてくださいね、一応ブランクがあるでしょうから」

「はあ」

「それでは一時解散とします、貴一君は訓練室の許可を出し解きますのであくまでリミッター付ですが」

「了解です」

そして俺は久しぶりのデバイスを指にはめると、すぐに訓練室に向かった、そしてなぜかなのはとフェイト、さらにユーノやらクロノまで、ついてきた

「なんでお前らがついてきたんだ？」

「にやはは、それは貴一君のトレーニングの協力だよ」

「うん、なのはの言うとおり。貴一、魔法はまったくしていなかったし」

俺はそれをきくと、すぐにセットアップをした

「いくぞ、ムーン。セットアップ!」

「イエッサー」

そして久しぶりの黒い死神の格好へと変わる、そしてそれを見たなのは、フェイト、そしてなぜクロノがセットアップしていた。

「久しぶりだから、少し本気でいくか?リミッターってどれくらいかかっているムーン」

「そうですねえ、なのは殿のあの砲台は避けた方がいいって感じですよ坊ちやま」

「な、砲台じゃないも〜ん」

「はいはい、そうか。それぐらいのリミッターか。まったくそれぐらいなら力づくでも壊せそうだな。ま、しないけど。そうになると、う〜んなのは、フェイト二人で向かってきてくれるか?」

「「え?」「」

俺はそういうと二人から距離を取り

「いくぞ」

そして構える、二人も慌てているがすぐに構えた。確かに管理局の仕事をしているせいかな、確実にこういうのに慣れていているのが分

かる。しかしそれでもまだ俺の殺気には怖がるのだろうか？俺はちよいと遊びで、殺気を飛ばしてみた、その瞬間

「「ひっ！」」

二人して一瞬間をあげてしまった。うん、相変わらずの二人でちよつと安心している俺がいた、しかしこうも睨み合ったままもつまらないので俺は行動を起こした。

「ほら、遅いぞお前ら」

俺はすぐに相手を切りつけるモーションに入る、そして二人は交互に回避するが

「貴一君、ブランクないの!？」

「なのは、驚いていないで「お前らは会話する暇があると思ってるのか?」く、バルディッシュ」

そして二人とも、一発のカートリッジを使う、そして俺は

「ならば、こちら本気でいくぞ、ムーン」

「Finalモード。ツインシザー」

そして俺の鎌の刃は二本に増えた、やはり俺の改造のままできてくれたらしい、これは素直にありがたい。そしてさらに俺は発動する

「さらに、いくぞ。チェーンデストラクション！」

俺は鞭のように、鎌を振る。そして二人の魔弾を一斉に排除した。そしてそれからすぐに俺は鎌で相手を拘束。そして終了

「やはり、完全な復帰までにはじかんがかかりそうだな」

「そのようだな坊ちやま。昔とは違い筋力はあるが、鈍っていたぞ」

「やはり、そうか。しかし二人とも強くなったな」

「そ、それ褒めているの貴一？」

「二人であいてしても完全にまけちゃったなの」

そして次に構えていたのは

「なぜ、おまえなんだクロノ。俺は普通にさっきので感覚を「それでもだ、あの時もそうだが僕だって君に一勝もしていないからな」はあくリベンジってわけか。面倒だ。こうなったら、ムーン解除。そして久しぶりに引き出しをあけるか」

そして俺は自分の後ろに存在する、あの空間をつかい、久しぶりのベルトを出した。

「な、まさかそれは」

「久しぶりにいくとしますか。変身」

俺はカブトゼクターをつけて、あの虫が俺の手の中にくる、そしてつける、そして

<< H E N S I N >>

そして俺はカブトになる、そしてすぐに

「キャフトオフ」

<< C A F T ・ O F F >>

そして俺は構えるがクロノは

「また、その変なものか、くそおおおお」

昔と変わらず、突っ込んできた。俺はそんな感じで時間を潰すのであった

第二百二十四話。えっと、フランクってなあに？おいしいの？（後書き）

と、言うわけで久しぶりの主人公の変身の巻きでした。

それではバイニー！



第二百二十五話 学校生活（前書き）

ほのぼのですう〜

## 第二百二十五話 学校生活

さて、まずは現状の説明が必要のようだ。まず俺はクロノとの模擬戦後、時間となり俺はアースラのいつもエイミーさんが座っている場所に着く、そして俺は久しぶりのアンサートーカーを発動した。

「現座標の固定。さらに次元のゆがみ補正、手動で行いますからアースラのコンピューターから一時離脱、さていきますよリンディさん」

「それではお願いね、貴一君」

そして俺は始める、最初はこの歪みからだ。なぜ歪みがあるのかわからない、プレシアさんから言えば予測できる限りだと、ロストロギアなのかもとか言っていたがどうなのだろう。まあいいそんなものは、そして画面に出るのはコンプリートの文字

「エイミーさん、この座標で固定して一気にいきますよ。そうしないとこちらが次元のごっかに吹き飛ばされます。」

「了解！けど早いね……私も涙眼だ」

「それでは、アースラ発進！」

リンディさんの言葉で艦が動く、そしてちょっとした振動が起きた。やはり歪みに突っ込むのはまずいかな？しかしそのまま艦は進んでいき、そして揺れは収まった。

「艦長、貴一君の言うとおりの進路で、現在歪み中です。ってそ

うじゃなくて新しい次元に到着。間違いなく、次元の歪みを超えてきました。

「わかりました、それでは今回の特別魔導師チーム、出撃してください。分かっていると思いますが慎重にお願いします。ある意味新たな発見ですからね」

そして俺らはその世界のある惑星に入ることにした。

Side ギル

うむ、わが孫ながらさすがだわい

『しかし良かったのですか、師匠』

モニター越しに弟子が先の映像を不安そうに見ている。

「ふむ、貴一はあれぐらいは当然のようにできるぞい。まったくお主らが居ない間にも貴一は大きくそして強く成長しておる。ワシを抜くぐらいにのう。だからこそこの管理局を変えたとわしは信じておるのだ。お主らを態々管理局から辞めさせたのはそのためだぞい、これはあの三人も承諾しておる。」

『レジェンダリオンジャー伝説乃戦士、師匠、しかしまだ貴一には早いような』

「まったく、親バカとはこのことじゃのう。いいか貴一は一人である間の書の連鎖を壊したのじゃぞ、それも今の年たった九歳じゃ、だからこそ、危ないのじゃ、あの三人にも確認をとったのじゃが上がやはり上は貴一の確保に動いているらしい、この意味わかるの」

『はい、いたいほどに……本当にするんですね、管理局を内側から変える、もと俺の任務、それを息子にか』

「ふむ、本当ならばワシらがやらないといけないのじゃがな。本当にすまない、ここまで管理局が腐り出すとは……あの三人も嘆いていた、今の状態ではどうしようもないと」

『わかりました、それは我々は引き続き、違法研究所の調査を』

「うむ、頼むぞい。さすがに管理局を辞めたのじゃからやりやすいじゃろう」

『そうですが、やはり魔法が使えないのは痛いですよ。それでは失礼します』

「うむ、分かったぞい」

さて、ワシはそろそろ貴一の管理局入りの最終調整をあの三人を話すかのう。それとうまいまんじゅうを食べながらのもの

「すまん、こんな大役をお主に押し付けてしまって、貴一よ」

side out

さて、俺があの変な事件からすでに七日がたった、ようは一週間がたった。結局あのはすべて管理局もちと言うことで俺はすぐに解放された。てかあれぐらいなら他もできるだろうに、そして今日もいつもの朝を迎える。

「はやて、おはよう」

「あ、おはよう貴一君」

すでに制服に着替えているはやてが迎えてくれるが今日はもう一人いた、それは

「あら、おはようございすゝ貴一君」

「はやて、キッチンには入れていないだろうな？」

「も、もちろんや」

「ううううう、久しぶりに帰ってきてても酷いですう二人とも」

そう言うてがくりと頂垂れるのはシャマル。そしてキッチンからもう一人出てきた。

「お、貴一か、おはよう。主、それでこれは」

「あ、ちよいとまってえな、リインフォース」

ちなみにリインフォースは本格的にはやてのボディガードになっている、現在は料理などの家事を習っているようだがメキメキと上達中だ、ちなみに魔法の指導は俺が行っているがやはり元古代ベルガと言うことで身体能力が上がりやすいのがよく分かる。そしていつもの通りの朝食となる。

「それで、ですね」

「ほんまなん、シャマル」

はやても学校に通うようになってからは朝のこの時間と夕食が大体の皆の報告会となっていて、ちなみにリンフォースは自分の料理がおいしいといわれると喜ぶ、この前なんてヴィータが言って普通に泣いていたぐらいだからな。てか最近俺が作ることも少なくなつたな今度頼んでなにか作るかな。食べ終わる、リンフォースはそのまま洗物をしてシャマルは大体は家事をしていた。そしてインターホンがなる。

「それじゃあ、リンフォース、シャマルいつてくるでえ」

「はい、いつてらっしゃいはやてちゃん、貴一君」

「気をつけてください、主、貴一」

そして俺らは玄関を開けるとそこにはすでにスタンバイが済んでいる、鮫島さんが居た。はやてが転校してから二日の間にいつも間にか集合場所はやての家に変わっていた、まあ確かに車椅子での登校は面倒だからな、しかしなんで初めてはやての家に来た時の鮫島さんは俺を見てため息をついんだらうか？

「おはようございます、はやて様、貴一殿」

「おはようございます、鮫島さん。いつもすいません、はやてそれじゃあ行くぞ」

「えいつ」

ちなみにはやての車椅子は後ろだが、そうするとはやては乗れないのでしょうがなく、俺に抱っこ言う形になる。てかなんでお前ら

はいつもそんなに睨むんだ。そしてはやてはなんで離れない。

「はやて、離れて」

「ああ、ごめんごめん、匂いを」

「なにか言ったはやて？」

「あ、なんでもないよう」

「……ジイイイイイイイイイイ」

そして四人から睨まれる俺。

「……そ、それで発進しますよ」

鮫島さん、俺には今、あなたが神様に見えるよ。そして学校につく  
といつもの通りの視線だ、もうこれは慣れた。そして俺はいつも通  
り席につく、そしていつも通り

「よ、おはようさん雄聖」

雄聖のところに行く、まあ簡単にいうと未だに俺は男子からは嫌わ  
れているので、理由は以下略。

「おはよう、貴一。そう思えばそろそろだね、この秋のなんとかっ  
ていうモノ」

「何とかって……そう思えば今日、アリサが言っていた児童祭のこ  
とだろう。たぶん今日ぐらいにでも出し物が決まるんだろうな」

「はあく僕には関係なそうだね」

「俺も関係したくないよ」

そう言って今日の日常が始まった。



第二百二十五話。 学校生活（後書き）

S t S 編に入る前に一度、設定を書くことと思います。

第二百二十六話。クリスマスなんて、リア充だけが楽しめばいい、俺は画面のク

題名が長いですが、これが私の思いですw

第二百二十六話 クリスマスなんて、リア充だけが楽しめばいい、俺は画面のク

「寒い」

俺がそう思うのはやはり、今日の天候のせいだろう。今日はもうすでに十二月の二十四日だ。俺はすでにはやての家のほうが自分の家に近いような感じになり、この前の十一月に一度リンディさん達の立会いで家に帰ったのだが、逆に客のような感じでいやだったのが印象だった。そして俺の居る場所は、体育館だ。

「寒い」

「貴一、お前はそれ以外言っていないぞ」

「雄聖、考えてみる。こんな体育館にドンだけ人が集まろうが今日は確か雪が降るとかいつていたじゃないか、知っているか雪が降るときは寒いんだぞ」

「それぐらい知っているさ。てか貴一のほうが大変だろうな、今日」

「ああ、今日が、なんで？」

俺は普通に聞いてしまった、てかなんで今日なんだ、今日の予定は……なんだっけ？

「はあ、その顔だと自覚がないのかい、今日の朝一にいつもの五姉妹に言われていただろう、今日はパーティとか言っていたじゃないか？」

「ああ、そう思えばそうだな、けどただのクリスマス会だろう？ア  
リサとかすずかとかはこう言うのよりも豪華の方がいいだろうにな  
」

「（貴一、それはそれで違う魅力があるんだよ……君のそれは長所  
なのか短所なのか？）」

「それではこれで、終業式を終わりにします。みなさんも良い冬休  
みをお過ごしください」

先生の放送があり、そして今日この日の式。終業式が終わった、そ  
してクラスでの成績表の配布だ。ちなみに俺はオールAだ、まあ成  
績はいいだろうなそして俺らは終わり、普通に解散となったが

「あ、貴一君。今日は先に帰っていていいよ」私はアリサちゃん達  
と話があるから」

はやてがそういうのは珍しいが女の子同士の話というのもあるのだ  
ろう。だから俺は

「了解。それじゃあ先に帰っているよ」

「あ、それから今日の予定わすれんといてなあ、六時半になのは  
ちやんちの翠屋」

「分かっているさそれぐらい。それじゃあ先に帰っているよ」

そして俺は先に帰る事にした、ちなみに今日はなんでもヴォルケリ  
ッターは全員での休暇らしい、さすがにこの数週間働き続けていた  
からな。しかし家に帰るとそこには意外な人物、いやこの場合は狼

だけが居た。

「ただいま〜ってザフィーラ、久しぶりだな」

「うむ、久しいな貴一。主の守りとして感謝するぞ、我が居ない間もここを守ってくれていたことに」

「なにを言うかと思えば、そんなこと。当然だろう、ここは家に等しいんだからな。っとそれよりも他の連中は？シャマルとかヴィータも休みだろう？」

「ああ、そうなのだが。我らの女性陣はどうもなにかあるらしくそのままたに出てしまっていてな。それで我がここを守っていたと言っただけだ」

なるほどな、しかしどうせ全員今日のクリスマス会の出席だろうけどなんでこうもないんだ、一緒に行ったほうがらくだろうに。

「なるほどな。それじゃあザフィーラ、時間までここにいるか、どうせお前も翠屋に行くんだろう？」

「ああ、なんでもそこでなにかやるらしくてな。もちろん参加させてもらうぞ」

そして俺は普段着に着替えながらいつもの通りに着替えを洗濯機に入れるのであった

Side はやて

さて、貴一君は帰ったことだし、私らも準備をはじめへんと

「それで、なのは。それは本当なの？」

「うん、ね。フェイトちゃん、今回のクリスマス会に貴一君のお父さん達帰ってくるんだよね」

「うん、リンディさんが言っていたから。貴一には言わないでって言っていたけど」

「貴一君のお父さんとかどう言う人なんだろうね？」

「すずかちゃん、貴一君が言うには結構強いひとらしいで。それよりもなのはちゃん、会場にぬかりはないの？」

「ないなの。だってノエルさんたちも手伝ってくれているし、それにはやてちゃん自身のヴィータちゃんたちも今回は協力してくれているんでしょ」

「はあ、私はさすがにお父さんも急がしいらしいし、お母さんはそれに付き添いだから今回は鮫島ぐらいしか呼べなかったのに、とくにはやてのところはってあの艦長さんか……」

「うん、そうらしいよ。けどなんでもみんな一生懸命働いたから褒美っていうっていたで」

「まあなにはともわれ、私たちも準備するなの」

「なのは確認だけど、本当にこれ着るの？」

「フェイトちゃん、引いたらあかんよ。こういうときは押しでいか

んど。まあ私的には敵が減る、なんでもないでえ〜」

「……………着る」

そしてフェイトちゃん、すずかちゃんと、アリサちゃん。順にとつていく今日のための衣装をそして

「……………よし、頑張るぞ(で)!!」「……………」

私たち五人は気合を入れるのであった。

Side out

そして時間が過ぎるのは意外と早く、俺とザフィーラは時間となったので翠屋に向かうことにしたのだが、てか、おい

「結界だな、これ」

「(ああ、そのようだな。これはたぶんシャマルだろう)」

すでに外に居るのでザフィーラは念話で俺に会話をしてくれる、たぶんこれって間違いなくこの前の……………襲撃事件の布石だろうか？まああなたにはともあれ、俺はクローズと書いてあるドアに手をかけた。

「失礼します」

「ああ、貴一君かい。こつちこつち」

そして俺を呼ぶのは土郎さん、ちなみにザフィーラは狼のフォームから、すでに人に変わっていた。そして俺らはそつちに向かうと、

そこには他にユーノ、恭也さんがいた。

「やあ、貴一君」

「久しぶり」

恭也さんとはあの旅行の最終に勝負をしたのだが、あの時はあんまり思い出したくない、理由は俺もどれだけ本気だったかでわかるだろう、なんだ木刀で肌が切れるって。

「お久しぶりです、恭也さんに。大丈夫か？ユーノ、隈があるぞ」

「あはは、最近結構仕事が溜まってね。休暇のはずが、仕事だったりしたから、とくにクロノからの」

あのあほが。まあしかし今日はクロノも来るのだろうか？

「そう思えば、クロノとかアースラ組も来るのか？そろそろ時間だろう、このパーティの開幕時間」

「そうだよねえ〜けどなのは達もなんか裏でやっているようだよ、僕達はここで待機って桃子さんに言われていてね」

ああ、あの人のせいだ。高町家の男性がこんなな感じで座っているのか……そして

「貴一君〜きてる〜」

「あ、ああ。はやてか、来ているぞちゃんと全員いるぞ」



そして、車椅子で引かれながらはやてを先頭に……っておい！

「な。お、お前らその格好!?!」

そう全員があのかリスマス……サンタの格好……おい、全員ミニスカって…

「シグナム……」「こ、これはだな!そ、その…変か?」「いや、似合っ  
つてはいるのだが……てか、全員か…よ」

ストッパーのノエルさんなどのメイドも完全に着替えているし、て  
か桃子さんだけが普通の格好って間違いなく、貴方でしょ!

「お久しぶりに失礼します」

そしてそこにアースラ組が登場し、そして

「いいじゃないそれ!エイミー、私たちもあれに着替えましょう!  
!桃子さん、あります?」

この人も、だめだった。と、言うことでこんな感じでクリスマス会  
が始まった。

第二百二十六話。クリスマスなんて、リア充だけが楽しめばいい、俺は画面のクリスマス、お前はがんばっているよ！

それでは次回、会いましょう

第二百二十七話 待ってました!! (前書き)

と、いうわけでももう少しで第三期入りますのでもう少しこのほのほのお付き合いですてくさい!

## 第二百二十七話 待ってました！！

さて、クリスマス会も順調に進んでいる今日の翠屋。しかしなんでリンディさんは仕切りに時間を気にしているんだ？

「リンディさん、もしかしてこの後仕事ですか？そんなに時間なんか気にして」

「あ、うんうん違うのよ貴一君。今日はお休みを貰っているもの。ちなみに俺の席はシグナムとフェイトが挟んでいる。これはじゃんけんて事前に決めていたらしい、しかしなんだろっ、今日のこいつらはなぜかソワソワしていると言っか落ち着きがないというか。」

「シグナム、どうかしたのか？飯はうまいのに。なあ〜ヴィータ？」

「ああ、今のシグナムはへんだな。だけどよこの肉うまいなあ〜まあ、貴一とはやてには劣るけどな」

「あはは、ありがとうヴィータ。てかシャルですらそのサンタのコスプレだし……ザフィーラ、お前はいつのまに、その帽子を」

「開始直後に主に付けられたものだ。「似合っているからいいんだよ、貴一。それよりもザフィーラよお」待て！アルフ、お前は酔いすぎだ」

なんか、ザフィーラは使い魔の中でも硬い感じでなんかFateのアーチャーだな。とそんなのいいがこんなに豪勢にして大丈夫なのだろうか、まあ今言っのは無粋なのだろうか。

「うーん、しかしこの一年振り返るといろんなことがあったな」

士郎さんがそう言いながらワインを飲んでいた、確かにそうかもしれない、この一年でいろんな奴にもであったし、そして出会えた事だし。

「そうですねえ、なのはちゃんか魔導師になり」

「私は、なのはと貴一で会えた」

「そう考えると、私たちってあんたたちとまだ一年も一緒にいないのね。はやてなんて半年もまだよ」

「そうやったなあ、けどなんかこの一年は濃厚やったな、とくに貴一君もおったしな」

「なんだはやて、俺はそこまで濃い人じゃないぞ」

そして全員から受けるのは、完全に疑われている目だった。おいおい、俺はそんなに濃くないよそれよりも

「それより、この一年で起きた事件の方が濃いような気がするがな、まずはシードだろ」

「ふふ、それは私に言ってるのかしら？」

「冗談が言える時点で、十分ですよねえ、次に闇の書だし」

「そう思えば、貴一君は私たちの前にもこれがあつたんやな、話に

は聞いていたけど」

「そう考えると貴一、お前はどれだけ事件に関わってきたんだ？」

シグナムがそんなことを聞きながら俺に新しいパンをとってくれた

「ああ、ありがとうシグナム。確かにそう考えると俺って意外とでしゃばっていったんだな」

「あら、そうかしら。私から言わせれば貴一君がいなければこの二つの事件もこんなにハッピーエンドには行かなかったと思うわよ。とくにここにリインフォースがいることに関してはね」

「そうだぞ、艦長さんの言うとおりだ、私と主を助けてくれたのは貴一と言っても過言ではないぞ」

「それが過言だ。それに途中は完全になのは達に助けてもらったし、それに」

「どうかしたの、貴一？」

俺が言葉を詰めたことにフェイトが疑問を聞いてきた、そうそれにあの時はここにいるメンバーが俺を支えてくれたんだな、と俺は思うと同時にこんなことはさすがに言えるわけもなく

「いや、なんでもないよ」

と、俺が言った時に不意に店の扉が開いた。俺らは一斉にそつちを向くとそこには

「えっと……どちら様ですか？」

「いや、俺に言われても。プレシアさん？」

「私の知り合いではないわね、となると」

そして、俺以外は全員リンディさんに注目をされていて、そして俺はその来客者をずっと見ていた。そうそれは

「遅いわよ、勇士君」

「すまない、リリの奴がちよっと「きいちやああああああああああああああん！！」く、こうなると思って前もって写真を「きいちやああああああああああああん！！」貴一、よける！」

いきなりの父さんの指示に俺はきよどつてしまい、そして父さんの背後から勢いよく登場したのは母さんだ、間違いなく。そして

「生きいちやあああああんだあああああ！！！」

抱きつかれた、てかこのままだと俺死にそう……

「え、えっとリンディさん、この方達は？」

桃子さんの声があるが俺は完全にこの胸の中だ……くるしい

「あははは、これが貴一君の両親です……」

『はあああああ！！？』

全員からのこれだ、それもそうだろうけど

「え、えっと初めまして息子の貴一がお世話になっているようで。貴一の父の星川勇士です、そしてそこで貴一に抱きついてほお擦りしているのが妻であり貴一の母である星川リリです」

そしてそれから十分が過ぎて、完全に親の方は自分の息子、娘の自慢に代わり、お母さん連中もこれに参戦。俺は現在父さんや母さんの説明、おもに管理局組からの

「貴一、本当に勇士さんは君のお父さん」これで四回目だぞクロノ「いいかい、貴一、それとなのはやフェイト、とそれと管理局の入ろうとしている人たちよ、彼らは伝説にも近いバディなのだ、そう死神の勇士、そして天使のリリ。これこそがあの人方のだな」

と、クロノは熱弁するし、けどフェイトは母さんと少し話した方がいいのかもしれないな。

「フェイト、お前は母さんと話してみればどうだ？」

「え、なんで？」

「お前は執務官志望だろ？」

「う、うん。だからこれから勉強しながら仕事かな？」

「だったら、うちの母さんがその元執務官なんだよ。もう管理局は辞めちゃったけどね、それで今時空のたびに出ているのになぜここにいるのやら？」



「それはな貴一簡単だ、お前にクリスマスプレゼントを渡そうとおもってた。今日の日のために帰ってきたのだ」

「それでお正月までは一緒にいましょうね、きいちゃん。ギルさんから聞いたけど今、はやてちゃんって言うのが家に居るんだって。もう」

「そう思えば闇の書についても色々と聞いているぞ……よく頑張ったな」

「……うん」

「そろそろクリスマスプレゼントをやるうと思うが、親チーム大丈夫だろうか？」

『OK』

そして今日、このパーティに親がいないアリサやすずかは意外にも、鮫島さんや、ノエルさんたちが預かっていたらしく、それで泣いていた……感動だね。そしてなのは高町家は

「今回はこんなのです、まずは恭也ね、恭也はいい加減に婚姻届けを出してもらおうのが私たちのプレゼントだからね」

「……善処しよう」

そしてセーターを貰っていた

「大丈夫ですよおば様」

忍さんはそう笑い、あつちはカップルでの交換らしい。そしてなのはと美由希さんは同じくセーターだった。そして次はテストロッサ家

「アルフはこれね、フェイトと一緒に選んだのよ」

そういう手には首輪があつた、てかちゃんとアルフ・テストロッサつて彫つてあるんだなこれは豪華だ

「ぐうっ、ぐっ、フェイト〜プレシア〜」

泣き上戸のようにアルフは泣いていたし、そして

「フェイトにはこれね」

それはあのジュエルシード事件でもつけていたプレシアさんのプレスレッドのあの金のリングの一つだ

「ふふ、これね、私とアリシアのお父さんのものなのよ。だからフェイトのお父さんのもの。」

「ありがとう、お母さん／＼／＼／」

うれしそうだ、そして次に八神家は……

「いやあ〜つくるんに結構くろうしたで、な？リインフォース」

「ええ、結構大変でしたね騎士の分となると」

そこにはなのはと同じくセーターだったのだが、さっきの会話を聞く限り完全にはやてがお母さんのようだ、まあ確かに主だから間違

っていないのかもしれないが……そして俺はと言つと、母さんが出したのは随分と小さい箱、まるでキーホルダーのようなもの。

「これはギルさんからのクリスマスプレゼントよ、開けて見なさい」

俺はそういわれてその箱を開けた、そしてそこには

「お久しぶりです、マイロード」

そう、そこには剣の形をしたネックレス、その名も

「ああ、久しぶりだな、ソルジャー」

俺の一番の相棒だった。

第二百二十七話 待ってました！！（後書き）

相棒が戻りました！

第二百二十八話 準備（前書き）

てなわけでstssにどんどん近づいてきました！

## 第二百二十八話 準備

「で、ソル。お帰りといいたいところだが、なぜ俺のもとに帰ってきたんだ？」

「申し訳ありませんが私にも理解できませんね、リリと勇士にそしてドグの考えていることには理解不能の点多いので。」

「それで、リンディさんこれは？」

「ふふ、忘れていいのかしら貴一君は。この前のあの新しい世界の発見を」

そう思えば俺はあのときに管理局に協力はしたがしかし、

「けどあれって、父さんと母さんが見つつけちゃったからじゃないの、ねえ父さん？」

「ああ、そのなんだ、簡単に言うとな。あそこの世界が意外にも貴重ななんたらでな、その功績でお前のデバイスを返すと言うことが決まったらしいぞ。師匠が、ごり押しをしていたからな。ワシの孫！とかなんとかで」

「ギル爺……けどサンは？」

そうムーンは父さんの下にあるのはこの前のことで知っているがそれではサンはというと

「ええ、私が持っているわよ。まあ簡単に言うときいちゃんのデバ

イスはソルだけになったてことね」

母さんがそう言いながら笑っていた、ということとは簡単に言うとな俺の装備は完全になくなり、ソルだけの単体となったというわけか。

「そうなんだ、サンにも会いたかったんだけどって皆どうかしたの？」

なぜか全員が黙って俺らの家族の話をしている。そしてこうリンディ言われた

「貴一君のデバイスの返還は、この前のことそのまま管理局からのお礼だから気にしないでね。それよりもリリ、いい加減渡したらどうクリスマスプレゼント、私たちはもう終わったのよ」

「もう！リンディは少しは家族の団欒させとよ、本当はずっときいちちゃんを頼ずりしたいんだから。」

「え、だってこれがクリスマス？」

「なにを言っているのだ息子。これは師匠からのクリスマスプレゼントだぞ。我々のはこれだ」

そして母さんがなんかの魔法を唱えると、そこには新品のギターケースがあった。

「まさかきいちちゃんにもこんなかつこいい趣味が出来たなんて、もうお母さんうれしくてうれしくて、お父さんに頼んで色々見たのよ。それでお父さんがこれがいいんじゃないってことでこれが、私たちのプレゼント」

そう言って手渡されたのは、意外にも重くそしてしっかりしているこの感じは。俺は確信をもちギターケースを開けた、そして出てきたのは真っ黒のギター。それもエレキ

「あ、これ貴一君がうちに持ってきた奴ににてるなあ〜」

はやてがそういうのもそうだ、結局あの闇の書の時から俺はアコギをずっとはやての家に置いてある。だけどエレキか、う〜ん新品のこの感覚はいいな。そう思えば昔に俺が暇で最初に買ったのもこんな感じだったな。

「ねえ貴一、引いてみてよ」

フェイトがそういうがしかし

「あはは、フェイト。これはアンプって言うのが必要だから「あるぞ、それぐらい」え、あるんですか恭也さん」

そういうと恭也さんは頷きそのまま上に行ってしまった。

「ああ、そう思えば恭也も昔に一度だけやっていたっけ。ねえ美由希ちゃん」

「はいはい、そう思えばありましたそんな時期が。けどなんでそんなにシグナムさん達は目が輝いているんですか？」

「それはですね、貴一君とのあの時はこの音で何回癒されたか、ねえ〜シグナム？」



「な、なぜそこで私に振るんだシャル／＼／＼それにヴィータなど、一緒歌っていたじゃないか！」

「あ、ああそれは貴一の許可も取っていたもんな」

「そ、そうだったのか……」

「ねえ、貴一。一応聞くけどそれってあの夏休みのときよね」

「う、うんそうだけど」

「きいちゃんの演奏、演奏」

「リリ、お願いだから。元管理局員としての品格を持ってちょうだい」

「うんそれ無理」

「すまない、リンディさん。それにしても貴一も随分と友達が増えたな……まあ女の子ばっかしだが」

「あら、勇士君。それをいうならあなたに似たのではなくて？」

「……師匠にもそんなことを言われてしまったが、そんなことはないぞ」

『（ああ、貴一（君）のこの鈍感な遺伝だ）』

そう思ったのはこの鈍感親子以外の全員であろう。そして恭也さんのアンプが届く、しかも大きい。さらにエフェクターも完全装備。

俺はすぐにチューニングをすると、音を出す。

「へえ、恭也。また負けてるじゃない。それで貴一君はなにか弾けるの？」

そして結局その後は俺たちによるカラオケ大会と変わった。

Side ギル

「それではこの件にかんしてはこれで頼むぞい」

「はい、わかっておりますわ」

ワシはそう言うとその部屋から出て行った、さっきまではずっとあの三人とお茶会、そしてこれからの貴一の処分を決めていた。そして通信が入る、このコードは間違いなく弟子のだったので、ワシはすぐに留守モードにし、研究室に戻る。ソルをすでに改良済み、そしてあのシステムも入れておる。あとは貴一次第ということじゃのう。そして研究室に戻り通信の確認に移ると、やはり弟子、そう勇士からであった。ワシはかけなおす

「うむ、すまんのさっきまで本部におったのでな、それでちゃんと渡したのか勇士？」

『はい、だいじょうぶです、師匠。貴一にはソルを渡しました。あ、あのそれで……確認なのですが、やはり本気ですか？』

「確かにワシも引つかかるところはある、これは本当ならワシらの代で決着をつける出来所を、お主にまかせ、そしてお主に重大な怪我をさせてしまったののう」

『自分は大丈夫ですから。それに師匠の改良によってムーンも戻ってきたので。しかし管理局は相も変わりませんな』

そう実は彼らが管理局を辞めてなぜ旅に出たか、それは確かに休暇と言っ感じであつたがそれは表である、実際はもう片方のことが重要であつた。

「うむ、あの三方も言つておつたよ。管理局が管理局を裁くとはのう」

そうなのである、管理局の裏。それは法などなくまるで無法地帯だ。そしてその関係者や、研究所の破壊または捕獲。それが彼らの仕事、いやワシが与えた仕事<sup>ミッション</sup>。彼らはそれをすぐに受け入れた、やはり思うところがあつたのじゃろう。しかしなんと情けないことじゃのう、自分が小さすぎることにため息をし、そして私はこういつた。

「貴一にはこの話をするぞい。もちろん、本当の姿を。リンディ殿などの善者もある、しかし自分の欲に正直なものもある。それを教えるのじゃ、まあこの理由は……」

『分かっています。貴一がまさか単体で闇の書のそう、ロストロギア……を倒したと言つことがやはり上に？』

「うむ、ワシが隠したのじゃがな。最高評議会にはばれているような感じじゃツタ。なので緊急の処置じゃ」

『伝説の三提督とそして師匠の推薦による、新しい部隊』

「まあまだ一人ジャがのう後は貴一次第じゃ。おぬし達と同じその

名は「

『レジェンオブザシルジャー  
伝説乃戦士』』

そしてワシは通信を終了し、そして地球の三月、そう貴一の処置の準備に入った。

第三百二十八話 準備（後書き）

ふう〜コミケ、今回はいけなかったな……

第三百二十九話 始まりの時（前書き）

と、言うわけで始まります！

## 第二百二十九話 始まりの時

今日は、何の日かと言うとそれは……修了式だ。あの闇の書事件からすでに半月が経とうとしていた、なのはもフェイトも管理局にしながらも忙しそうに、そして楽しそうに頑張っていた、俺は俺で、リインフォースに体術を教えていたり、はやてのリハビリに付き添っていたりと意外と有意義な時間をすごしてきた。そして今日、おれは小学三年生を終える。

「はあくしかしここの校長の話は長くてしょうがないな」

俺はそう言いながら校長先生の頭を見ていた、やはりまぶしい。

「そうだねえ、けど、これで僕らも四年生だぞ」

そして俺の前にいる雄聖が答えてくれた、俺はとうとういつもの通りの視線を受ける毎日であり、そして雄聖と普通に過ごす毎日ばかりだった、そして式は終わった。

教室に戻り成績表を受け取る。そして解散、俺はすぐにはやての後ろに行く

「ほな、貴一君。たのむでえ」

「りようかい、姫」

いつもの通りにはやてをエスコートしながら帰る、いつもののはもフェイトもすぐに屋上に向かってそのままセットアップを。そしてアリサとすずかは普通に習い事で鮫島さんの車で帰っていく。と、

いうことで自然的に俺らは二人で帰ることとなる。しかし今日はなぜか全員いる。

「それにしても、もうこれで半年なんやね、貴一君と会ってから  
はやてはそんな事を言いながら俺を見る、そしてアリサもこんなことを言う」

「ホントよねえ〜このバカになのはから紹介されてやっと一年たったのよね。そう思うとこの一年って充実していたわね」

「そうだね、アリサちゃん。けどそれって一番はなのはちゃんじゃないかな、その、色々とあったわけだしね」

「確かにそうなの、けど一番は貴一君と出会えたことなの」

「あ、それ私もかも」「私もや」

この三人の魔法少女は俺を見ながらうなずいていた。

「そうなのよねえ〜、貴一ってなんかどこか、事件をつれてくれるわよね。はやての時なんかすごかったし」

「私の時もすごったんだよ、アリサちゃん」

「貴一君って結構お節介さんだね」

「すずか、それはどうかと思うぞ。俺だって俺がしたい事をしてい  
るだけであってだな、別にそれ以外は」



「だから、それがお節介なのよ。少しは自覚しなさいよ、けどまあんたらしいわよね、そう言うところも」

「そうだね、そう思えば貴一。シグナムから聴いたけど、そろそろなんだって判決」

フェイトがなにげなく聴いているが全員が一瞬目を見開いたのは全員気になっているのだろうな、確かに俺の現状ではなものもないのだから、デバイスも帰ってきているし。それにはやての家に居るだけ。リインフォースも普通に魔法を使えるようになってきている、はやては足のリハビリ、俺はその教育係。

「そうだな、このまま現状が続くわけもないからな。たぶん今日とか、明日には来ると思うよギル爺が」

「あの貴一のお父さんのお師匠さんなんだよね。お母さんからよく話にはでてくるよ、私の憧れのヒトだって」

「そうかもしれないけど……まあそれはおいおいかな、つてそろそろ分かれ道だな、じゃな、なのは、フェイト、アリサ、すずか」

「……バイバイ(なの)」「」「」

「そうだな、あれからもう半年か……月日は長いのだろうか、短いのだろうか?」

「なんか貴一君、おじいちゃんっぽい。もっと若くいかな、それにしても私の足はもうすこしやなあ」

そうなのだ、すでにはやては立つ事は出来るようになったのだが、

さすがに筋力の衰えは恐ろしくまだ歩くことは難しいようだ、しかしこの前主治医の石井先生からはあともう半年ぐらいで完全に完治し走れるだろうといってくれた。と、なるとはやての管理局入りはもう少し後なのだろうな。ヴォルケリッターはすでに管理局入りは決まったらしい、これはシャルマル情報。そして今日はヴィータが帰ってくる日だ、そしてドアを開けるとそこには物々しい人が一人いた、それは

「ホ、ホ、ホ。どうじゃ、これで」

「ちつ、これはギガまずいぜえ！貴一の師匠つてのは強ち間違いでもないのかもしれねえな」

「そうじゃぞ、それに貴一の父親もワシが育てたのじゃ。」

この声は間違いないだろうな……

「ただいまヴィータ、お客さん？」

はやてはいつものように器用に靴を脱ぎ、最近での特訓で立ち上がる、そして俺も靴をおくとそのままはやてを車椅子に座らせる。そしてリビングにいくと、案の定ヴィータ、そしてギル爺が将棋をしていた。

「おお、貴一にはやてお帰り！」

「うむ、久しく見ない内にさらに大きくなったのう、貴一。それにいつも内の孫が世話になっているのうはやて殿」

「あ、いえいえ。とんでもありません」

はやてでさえ恐縮してしまうギル爺。やはり侮れない。そしてギル爺が来た理由は簡単だ、間違いなく

「今日なんだね、ギル爺」

「うむ、それでは貴一よ一緒に来てもらおうぞ……ミッドへ」

そして俺はギル爺の引かれるまま魔法陣に入る。

「あれ？一応俺って犯罪者じゃないの、ギル爺、拘束とか？」

「そんなものは必要などないじやろう。それに行き先はミッドの管理局ではあるが、ちと特殊の場所じや」

俺は疑問に思いながらもそのまま光につつまれてある場所にでる、そこがどこだがはわからない、けどここはたぶん管理局だ。俺はそう思うとそのままギル爺に連れられて歩く、そしてその時歩く人々がギル爺を見ると一礼したり、挨拶を交わす。そしてそれにギル爺はそのまま「うむ」というだけでいつもとは違う。そしてある一室の前で止まる

「それではいくぞ、貴一。これからはお主にワシらは頼ることになりそうじや」

「え？ギル爺、それって……どう言う意味」

ギル爺は俺の質問には答えず、そのまま部屋を開ける。そして俺は部屋に入ると部屋に居た女性からこう言われる

「あなたが星川貴一君？」

そして俺はこれから新しい物語が急激に加速して始まるとは思って  
もみなかった。

第三百二十九話 始まりの時（後書き）

と、言うわけでこれでA、S編終了です。

第三百三十話。原作と原作の間の始まりでござる……誰だよ、これ？（前書き）

新章のはじまりです

第三百三十話。原作と原作の間の始まりでござる……誰だよ、これ？

今日は学校の終わりにいつもの依頼が入り、俺はすぐに学校の屋上にあがった。すでに小学五年生になった俺らは普通に管理局に勤めていた、まあ俺の場合は表が普通に勤めているが、裏は

「まったく、これで今月になって三つ目か……ギル爺、これは結構俺には荷が重い仕事だよ」

「ですが、マイロード。殺さずに生かしたまま気絶させそして研究室だけ破壊するとなるとマイロードが適任かと」

そういうのは俺のデバイスことソルだ、今はライトアンドダークネス状態でしかもバイザーでまったく顔が見えない。そう、俺は今日の依頼と言うのは正確では管理局ではなく、あの伝説の三提督からの依頼である、結局俺はあのギル爺に呼ばれたあとの事を少し説明知ると、実は俺の父さんと母さんのあのたびは唯の旅ではなく、管理局の不正な研究室やらならの破壊であった、本当はギル爺の任務だったらしいが、さすがにあの最高評議会もバカではなく、ギル爺は目を付けられてしまつたらしく、そしてそれを引き継いだのが父さんたちだつたらしいが、その直後のあの父さんの事故で。なにかしらの裏があつたのは俺でも分かる。しかしギル爺は俺が分からないと思つてあえてそんな感じで話してくれて、そしてあのギル爺に俺は土下座をされて、こう頼まれた「この管理局を変えてくれ！」と、俺はそれに強く頷いた。そしてそれからすでに一年。俺は研究室を破壊すると、証拠のデータと共にそのままギル爺に送り、俺は家に帰還するもちろん俺の家だ。しかしこのデータにも管理局に繋がるものは無い。そして俺が帰ると

「あ、お帰りなさい。きいちゃん」

俺もこの任務をするようになり、母さん達も家に居ることが多くなつた、さすがに倒産はあの改良されたムーンを使いまくっているよのだが。そして急に衝撃が来た、それは母さんに抱きしめられたからである

「か、母さん、どうして？」

「きいちゃん、今日はそんなに酷かったの？ねえ、きいちゃん、いいのよここなら泣いても」

そういわれる、これは俺が最初の任務と一緒に。そうこつちの任務での最初だ、あれは俺がまだ小四のなりたての春先のこと。そこではヒトがまるでパーツのようにされていた、俺は前世でもそんな経験はなく、そして俺は怒り干将莫耶を振るつたそれも怒りのままに。そしてその帰り俺は家に帰るとそのまま泣いた。そしてそれと同じぐらいに母さんが帰ってきて慌てて俺を抱きしめた。ちなみにそのあとすぐに父さんもギル爺も飛んできたのはいつものことだ。

「大丈夫だよ母さん……今日はそんなでもなかったから」

俺はそういつと母さんは抱きしめるのを止めて俺の頭を撫でてくれた

「きいちゃん、たった一年でこんなに大人になっちゃって。お母さんなんだが寂しいけど、うれしいな。あ、早々、今日、なんかシグナムちゃんが来たからなにかあったみたいなのよね、だから後できいちゃんから連絡お願いね、LOSのリーダーさん」

「か、母さん！／／／／その名前は辞めてよもつ……」



俺は無事に管理局員になったのだが、さすがにこういう裏の任務もあるんで特別な部隊の方がいいと言うことで、ちなみにこれは母さん達がもとした部隊そのまままで最高評議愛には怪しまれずにいる、ちなみに俺はこの前の任務で無事に二等空尉になった、てか俺が階級をあげると同時にパーティを家族でしないほしい。そして俺は現在一人でこの任務に当たっているが一応隊のリーダー、そうLOSの隊長なのだ、ちなみにLOSとはレジェンド・オブ・ソルジャーの略だ。まあ表は緊急非常用の特別チームだがしかし実際は裏を滅ぼしている、そんな感じだ。そしてこの裏はなのは達には誰にも言っていない理由はこれでもし、なのは達が危険になったら俺は俺を殺しそうなのでだ。

「それじゃあ、お風呂できているからはいっちなさい、それとも一緒に「入ってきます」うん、いけず」

母さんのいつもののは置いといて俺はすぐにソルに頼む

「すぐにシグナムに繋いでくれるか？」

「イエス・マイロード。しかし何事でしょうね？」

「さあな、まあなにかあったのだろうか？」

そして俺がそう言っているときに連絡が繋がった。

『あ、貴一か、久しぶりだな。元気そうだな、お互い仕事で忙しそうだな』

「久しぶりってたったの三日あっていないだけだぞ『三日もだ!』」

あ、そう、そう大きな声をあげるな……確かに一年前は結構局内であっていたが、それでどうかしたのか、態々うちに来るぐらいだからなにかあったのか？」

『ああ、じつはな今最近、戦闘機人事件と言つのがあつてだな』

俺はそう思い、ある二人を思い出す、それはナカジマ家だ。

「あ、ああそれでそれがどうかしたのか？」

『ああ、それで私の同僚というのでないが、ゲンヤ・ナカジマというこの前一緒に任務をしたものからの頼みでな。』

そして俺はその話を聞いた、なんでもその戦闘機人事件での大本を今度攻めるらしく、それには自分の上司さんがいて、お前ぐらい強い奴も一緒に連れて行って欲しいと、なんでも悪い予感がしているらしくと、言うことだ。そして俺はそれを心よく受け入れた、そして日時を聞いて俺は切った。

「マイロード、この件に一体なにか？さっきの了承の仕方だとやはり昔の記憶からですか？」

「ああ、たぶんこれをつまぐ利用できれば誰も死なないかもしれない  
い」

俺はそういうと風呂に入りながら、久しぶりのアンサートーカーを発動して今回の件の作戦を練るのであった。

そして約束の日になり、この日は丁度アースラが近くに来ているらしく俺はそのまま乗せて貰った。

「久しぶりだな、クロノ」

「ああ、まさか君がああ隊に入っているとは……まあ君の実力なら当然かもしれないな。そうだ、今度執務官の試験があるのだが君も受けてみないか、どうもフェイトは受けるらしいぞ」

「ああ、パスかな。俺も結構忙しいしな」

「それがお前の部隊の信頼だろうさ。この前の犯罪者の一斉摘発も一役かつたらしいじゃないか、僕でもあれば出来ないよ」

「そりゃ、どうも」

と、こんな感じに俺はクロノと世間話をしながら、本局入りをした。そしてそこに居たのはあのヒトだった。

「君が……LOSなのか？」

そう、それは

「はい、私は星川貴一です、LOSの者です」

「そうか、一応その紋章をみればわかるのだが君の目をみて確信したよ。それでは改めて言わせて貰おう、私はゼスト・グランガイッだ。今回のゼスト隊の隊長だ、よろしく頼むぞ、少年」

そう言われると握手をされた、そして俺はそのままゼスト隊のメンバーを紹介された

「あなたが、ゲンヤが言っていた助っ人の子？」

「こら、クイント。彼はLOSだ」

その言葉で全員が黙る、そう最近になってこのLOSは非常に優れた隊と思われているらしい、確かにあの三提督にさらにギル爺が推す隊だもんな、しかも初代が父さんに母さんだもんな。そりゃ有名なるわ

「よろしくね、私はメガーヌ・アルピーノよ」

これで、俺はわかった。そうか、今日だ。今日なんだ、今日この日に起こるんだ、クイントさんが殉職、そしてゲンヤさんとそしてメガーヌさんが改造される、そうあのガジェット？の実験、そしてレジアスのおっさんが道を外す日だ。

俺は気合を入れなおした、そう俺は転生者としてもSetSの初めての原作ブレイクがはじまったのだ

第三百三十話。原作と原作の間の始まりでござる……誰だよ、これ？（後書き）

今回は遅くなってしまったので二日続けて投稿します！

第三百三十一話 出てきたよ、あの変態科学者。(前書き)

なにかの諸事情で消えてしまったので再アップです

### 第三百一十一話 出てきたよ、あの変態科学者。

俺はゼスト隊と挨拶を済ませると、そのままある研究室に向かった。

「ひさしぶりですね、プレシアさん、そしてギル爺」

そう、そこはプレシアさんの研究室だった。そしてなぜか普通にここでなにかしているギル爺がいた

「あら、貴一君いらっしやい」

「うむ、貴一よ久しいな」

「普通に挨拶を返さないでよギル爺。ギル爺は普通なら士官学校に居ないといけないでしょ。まったく」

俺はそう言いながら呆れていたが、しかしギル爺はそれよりも

「貴一よ、それよりもソルの調子はどうじゃ？」

やはり科学者の端くれのようで、まあすごい研究者なんだけど……ソルの様子を気にしているようだ、ちなみにこのソルなのだがなんとさらに改良をされて、今ではソルジャー・ソニックと名前を変えていた

「ソル自身の単体でのライトアンドダークネス、そして貴一、お主自身で改良したゼロモード……まあ大丈夫そうじゃな」

「うん、それよりも普通にソルがムーンにもサンにもなる、このト

レースシステムって言うほうが凄いやと思うよギル爺」

そう、このソルジャー・ソニックなのだが普通にこのソル一つで今まで変わらないデバイスの使い方が出来る、近距離ならムーンの鎌、遠距離ならサンノ銃。普通にチート兵器にプラスして俺の知識も少しして、今では俺の本気では世界が普通に一気に七個壊れることが俺の答えだった。なので俺はいつも自分にリミッターをかける始末だ。ちなみにここによったのは理由があった、それは

「あ、それと例の件は？」

俺はこの前のデータを送ったが

「進展は無じや」

と、いつもの通りだった。そしてなぜ俺らはすぐにその最高評議会を攻撃しないかと言うと居場所がわからないからである、だから必死で探しているのだが見つからないのが現状。そして俺はプレシアさんにちゃんとギル爺を学校に戻すように言って、その場を後にする。そして俺は本局より、出発をした。そして着いた場所は、薄暗く洞窟のようなところだった。

「それではこれより、二手に別れて調査の開始だ。それでは私と少年。そしてメガーヌ、クイント、そして各自はいつもの通りだいな」

『了解！！』

そして俺はゼストさんと行動を共にすることにした、そして俺らがこの洞窟にはいり、五分動きがあった



『隊長、こちら、く！来たぞ！、な、なんだ、グアアアアアアアアアアア！』

「おい、おい、く、何か居るだと……あたりか……少年、どうかし……っ！」

俺が向く方向、そうそこには何かがいた、さっきから俺を見ているであろうこの殺気。俺はそれを気付いてずっと警戒をしていた、しかも気配を読み取るうにもここではなにかが邪魔をして無理だ。く、これならば俺が先行したほうがよかった。たぶん間違いない、さっきのヒトはもうダメだろう。

「ソル、サンモード」

そして俺は今までのバリアジャケットからサンに変える。双銃を構えて、そして放つ。それが合図のように出てきたのはガジェットだ。

「く、なんだこいつらは」

周りに出てくるのは無数のガジェット。ゼストさんは自分のデバイスであるう檜でこれを応戦する。俺は一発で全ての敵を倒す、しかしこいつらは間違いなくAMFを張っている。これだとまずい

「ゼストさん、こいつら魔法を消すフィールド張っています!!」

「なんだと！ならば、すぐに連絡を」

と、その時ゼストさん目がけて動き出すガジェット、間違いなくあれはガジェット？。俺はすぐに銃を仕舞うと、そのままらしくない

が干将莫耶をだしてそのままきる。

「す、すまない」

「フォローしますので、早く！」

俺はそういいながらまた双銃に持ち替えてガジェットを応戦。そしてゼストさんは連絡をとる、しかし帰ってきたのはたった一つだけだった。

『ゼスト、そっちは無事！？』

そう、あのクイントさんたち以外は全員反応がない……間違いないだろう……この一年での体験で俺は一緒に組んだ隊の何にも死んでいるヒトを見てきた、しかしやはりこれは慣れなかった。

「ああ、こっちはどうにかなっている、今お前らはどこにいるこちらはたぶん」

そして俺はそのままゼストさんを守るように戦闘。しかしやはり数の差ありすぎるので、俺はすぐに銃を構えるのを止めてすぐにソルに戻る

「ソル、一気に終わりにする」

「ソードバレルフルオープン」

「トレース、  
投影、開始」

「憑依経験、共感終了」

「ロールアウト 工程完了。バレット 全投影、クリア 待機」

俺はここまで言うのと俺の上空を埋めるように、剣を生成する。そしてすべてがガジェットを狙っている。そしてそのまま

「フリーズアウト 停止解凍、ソードパレルフルオープン 全投影連続層写！！」

振り下ろす手と同時に剣の雨を降らせた、これにはゼストさんも驚いていた、そして洞窟なのでそのまま壁なども破壊してしまったが運良く丁度、クイントさんと合流に成功したが、いい事ばかりとは限らなかった、まずはクイントさん達が重体ということ、そしてさらに。

「あら、まさかあの名無しの鉄屑のAMFに勝っちゃうなんてねえ、これはドクに渡したらおもしろうじゃない？ チンク」

「……そうかもな」

そう、そこにはあの戦闘機人のクアットロに、チンクが居たからである。

「まあ、最初はここから逃げる奴らを殺すはずだったんですけどね、まさか残っているのがあなた達だけとは」

そして相手が構えた瞬間、俺は構えを解きそして指を鳴らした、その瞬間には剣が夥しい量が空間に出る。簡単にいうとゲートオブバピロンをしようしていた、理由は簡単だ、クイントさんもメガーヌさんもすでにボロボロで、下手をすれば急所に近い、このまま脱出も、そして回復魔術もしようすればただの的だ。だから俺はこう叫

んだ

「みているのだろう、ドクタースカリエッティ。このままいけば貴様らの娘は完全に破壊されるぞ、さあどうする?」

俺がそう言つと、ゼストさんは叫んだ

「なにを言っているのだ少年、あなたは黙っていてください!」なにを、なにを」

「今の状態ではクイントさん達が持ちません!」

そしてゼストさんは気付いたのだろう、この用意周到の敵に。だれが居るということを、そしてすぐに返答は来た、そうあの笑い声だ!

『アハハハハハ、まさか君のような少年がこの私と交渉するとは、管理局は何をかんがえているのだが、しかし……面白い、ならば、これでどうだ?私のアジトに案内しようじゃないか。そこにいる私の作品なら拘束しようがなにをしようが勝手にするがいい。どうだね少年君』

ゼストさんが言う感じに俺の事を少年というこの変体科学者。そして俺はすぐにバインドを二人につけた。

「ふん、このようなものなら……くっ!」

「辞めなさい、チンク。それにドグが誘っているんだからいいじゃない、それじゃあいきましようか?少年ちゃん」

そして俺はスカリエッティの研究所に入ることに成功した。

第三百三十一話。出てきたよ、あの変態科学者。(後書き)

ニコニコみたいな前書きになってしまった！

第三百三十二話 ぐ都合は当たり前です！（前書き）

夏休みに終わり、初めての投稿

## 第三百二十二話、ご都合は当たり前です！

Side スカリエッティ

「ドグ、これはどういうことでしょうか」

私に質問するのは私の最初の作品である、いや娘と言った方が正しいのかもしれない。その名はウーノ。最初のナンバーズだ、そして私の助手でもある。そして彼女のこの言い分にも分かる、確かにこの私も彼以外ならこんなことはしないだろうな、しかし彼だからこそ私は話したいと思い、今に至っているのだ

「なに、ウーノ。ただの私の好奇心さ、それにどの道なのままだったらクアットロにチンクはゴミになっていただろうからね、私の大事な作品だからね」

「そうですね……来たようです」

そして私は彼を向かえることにした、そう……私のこの夢と同じくらい夢中になれそうな存在を

side out

俺はクアットロの指示にしたがいそのまますぐにレポートする、俺のその速さに全員が驚いていたが、畏とも考えられたので、その瞬間、すぐにこいつらを殺そうとしたがしかしそれは考えすぎで、目の前にはあの白衣を来た変体と、そしてその秘書であろう確か、ウーノがその場に座っていた。

「初めまして、と言っべきかな。管理局のみなさん」

俺はその前に

「挨拶の前に彼女達の」

「ああ、そうだね、だったらこここの「いや、さすがにそれは危険すぎる」ほう、どうするのだね」

スカリエツテイの指示の場所はたぶん罫ではないだろうが、さすがに相手の懐の中でそんな危険なことは出来ない、だから俺の目の届く範囲でどうにかしたかったので、俺はこう言った

「ここを借りる」

俺はそう言つと魔法で線を引く。そしてその円形の中にメガーヌさんとクイントさんを入れると。

「ソル。お前に任せるぞ」

「イエス・マイロード。セット、ケアルガ」

そして回復魔法と同時にクイントさん達は結界内に入れた。危険でもあるしな、一応だ。

「まあ、信用されていないかと思っていたがここまでとは。この私も嫌われたものだ……ふっ、それでどうするかね？LOSの少年、そして君はゼスト隊の隊長さん？」

「なぜ、私達の事を!？」



「ふ、まあそうだね。簡単に言うと君たちはねえ、実験体だったんだよ……まあその子は分かっているようだけど。」

その言葉に俺は怒りを覚えた、やはりこれをまわしたのはあの脳髓だった

「な、なん……だと……」

ゼストさんはすでに意気消沈だ。それもそうだ、管理局の任務のはずがまさかの犯罪者の協力、矛盾しているはずのこの現実、俺はゼストさんにそのままソルの結界の中にいれた、今の状態でもし戦闘になったら確実にゼストさんは的だ。

「ふ、まあいい判断だと思うよ少年」

「少年は辞めて欲しいね、無限の欲望の具現者……ドクタージエイル。俺の名はスターリヴァーだ。」

そしてさっきまでどこに居たか分からないが、戦闘機人がなぜか全員この広い空間にいた。やはりここで一戦闘かと思いきや

「ククククク、アハハハハアハッハハハハ」

白衣の変態は笑い出した、本当に変態だった。俺は構える、そしてその声でゼストさんも構えてこっちも戻ってくる。

「安心したまえ、今の私には君達と戦闘、そして殺す気も無い」

そう言うがゼストさんはほえる

「嘘を言え」

「ふむ、捨て駒になったのはかわいそうだが、しかしこれも事実だよ…まあ君は逃がす予定だったのだけどね、スターリヴァー」

「やはり、そうか……ゼストさん、俺のせいかもしれない、これは」

「そ、それはどう言う意味だ少年」

「く、く、く。やはり君のような存在は素晴らしいな、そうだろう、ええLOSの隊長殿」

「な、隊長!？」

「お前、なぜそれを」

そう、俺は確かにこのLOSに所属していることにはなっているが隊長という情報は漏れてないはずだ。

「私のまえでは管理局の情報など手に取るように分かるのだよ。しかし安心したまえ“上”には報告していないのだよ。なんて言っただって、若干の九歳であの管理局から恐れられていたロストログア、闇の書を一人で改竄、そして破壊した天才。それが君の本当姿だろう?星川貴一君」

俺は驚愕した、そうこの男はまるで俺の今までのことを全て知っているように言うのだ……

「……お前……」

俺はそのまま無手で構える。しかしスカリエッツィはそのまま手を挙げる

「だから言つたら、君と戦う気なんてさらさらないのだよ、こちらとしては。それに分かっているのではないのか？この世界の仕組みを」

「しよ、少年。いや、この場合は貴一！一体どういうことだ」

俺は、ここまで来たらと思ひ、しよがなくゼストさんにこの部隊の本当の目的をいう、そうこの管理局の腐っている部分の俺は切除、それが俺の役目と

「そ、そんな管理局が……確かに闇の部分はあつたが、しかし」

「部分ではないのだよ、隊長さん。君達の一番上の最高評議会がその闇そのものなのだからね」

まるで笑つかのように言うスカリエッツィ。

「それで、一体これは何のまねだ？」

俺は質問した。そうさっきのあの交渉は一種の賭けだった。そして俺は成功したがこいつは紛れも無く天才だ、そう天才なのだ。だから俺はその理由を聞いた

「ウーノ、どうだ彼はまだ十歳前だぞ。普通のヒトとはまったく違う、これだからこそ私は惹かれたのだと思うよ。ふふ、そうだねスカリエツァー。私は君と交渉がしたくてこの場を設けたのだ……」

「なんだと？」

「もし、この条件を飲んでくれるのなら、彼と彼女達の保護を我々がそれこそ命を賭けてしようじゃないか、分かっていると思うが、すでに彼らの部隊は全て「抹消されている」その通りだ、そう君を残してね……それでどうするんだい」

「なにが望みだ？」

「き、貴一！！」

「今の状況、確かにあいつの言うとおりあなたたちは、申し訳ありませんが……死んでいるという扱いです、そしてもし帰れば確実に今度は殺されます、ならば一度死んだ存在となったほうが……周りの家族から守れます……く」

「き、貴一」

俺は拳を握り締めながら、そういう。しかしその拳からは強く握りすぎたせいで血が出ていた。そしてスカリエッティはこう言った

「簡単だよ、私の最高評議会の殺害の黙認、そしてその後の処理を君に頼みたいだけだ。そう私のような存在を生まないためにね……それに私はね、君を発見するまではこの世界を変えるために聖王の研究をしていたが、君を見て私は思ったよ……これでは私の作戦はそれこそ一瞬で砕けるとね……だから先に君と交渉と言うわけだ、どうだ悪い話ではあるまい、なんていたってこっちはあの最高評議会からの監視がない。これだけを言えば君には通じるね？」

俺は、そして返事を下した。

第三百三十二話。いご都合は当たり前です！（後書き）

それでは次回会いましょう

第三百三十三話 意外と負けず嫌い？（前書き）

ブレイブルーの新作楽しみです

### 第三百三十三話 意外と負けず嫌い？

あの、スカリエツティとの接触から半月がたった。あ後は俺は管理局に戻ると、やはりゼスト隊のデータが消えていた。そして俺は……今日、ナカジマ家にお邪魔している。理由は

「お久しぶりですね、ゲンヤさん」

「ああ、貴一くんかい……今回は「申し訳ありませんでした！」……」

俺は結局あの後、条件を飲んだのだ。そして全員が殉職という扱いとなつてしまった。ゲンヤさんはこの事情を知っている唯一の人だ。ギル爺にもこの事は伝えていない、それに俺自身が伝えたのではなくてクイントさん本人が伝えたらしい、その際はクアットロのISに非常に感謝だ。まさかあういう幻術も出来るとは思っていなかった。そして俺はあの事件後、クイントさんのデバイスをゲンヤさんに渡すとどうしていいか分からずすぐに逃げてしまい、あの事件後初めて対面していた

「許してくれるはずがないのは重々に承知してしまっ！」

そう、どう足掻こうと自分の奥さんを社会的に抹殺してしまったも同じである、しかしゲンヤさんはこう言った

「顔を上げてくれるか、貴一君。私はね、君のことも、そしてこの管理局のことも全てクイントから聞いているんだよ……だからね、私には君がああとき最善の判断をしたと私だっと思っただけだ。だから顔を上げてくれ、確かに娘達は今シヨックで泣いてばっかだが、あ



いつの娘だ。すぐに立ち直るさ、君だつてつらいのだろう？」

俺はなににも答えられずただ、そのまま座っていた。今娘さん達は学校だそうだ、俺も今日は本当なら学校なのだが、この件を最重要と考えている俺にとってはどうでもいいのだ。

「それで、今日呼んだ理由とは？」

俺はそれを聞くとゲンヤさんはわらった

「なに？あははは。今がその話だよ、君には感謝はしているが怒つてなどいないとそう言わないと君が潰れそうだとクイントに言われてな。それにもしかしたら私達だつて危なかったのだろう？ならば君は私達家族を救ったのだ、ほこればいい。以上だよ」

そして俺はナカジマ家を後にした、ちなみにメガー又さんなのだが、驚きのことに未亡人で、子供がいたのだがどうもまだ一歳で最高評議会も気にしていなかったらしく俺は、それをすぐにメガー又さんに渡した、そしてその時彼女の名をしまった「ルーテシア」そう、彼女こそがルーテシア本人だった、しかも今は一歳とのこと。そして俺は今のこのままあるところに転移した、それはここだ

「あら〜いらっしやいすね、貴一ちゃん？」

迎えてくれたのはクアットロだ、そして

「おお、貴一だな！！久しいな！」

そして何気にテンションの高いチンク。そしてその後ろから

「あら、貴一じゃない……どうも」

「あれ、ドゥーエがいる、珍しいね。」

あの変装の天才のドゥーエだ。最近ではロールアップもドンドンしているようで、もっぱら今、あの天才が興味を持っていることは

「やあ、貴一。どうだね一局」

そう、将棋ではなく、チェスだ。成績は俺の全勝でスカリエッティはどうか勝ちたいのか、その研究をしていた。まあ暇つぶしなのだろうが、そして戦闘機人たちの現在の保護者が来た

「いらっしやい、貴一君。ゲンヤに会ってきた？」

そう、クイントさんだ。スカリエッティはこの最高評議会の復讐さえ終えれば自首するということで自分の娘達はそのあとは自由にさせるらしく、今クイントさんはそのために常識をこのナンバーズに教えているじょうたいだ、メガーヌさんは子育て中らしく、そしてゼストは

「トーレ、まだ踏み込みが甘いぞ！」

「はい、師匠！！」

と、なんともナンバーズの戦闘での教育係であった。てか、この人たち普通にこの生活に一週間で慣れてるのは恐ろしいところだ。そしてナンバーズなのだが、クイントさんのおかげなのか最近では普通に接してくれるし、チンクは俺がくると喜んでくれる、てかなぜドゥーエとそこで睨みあっているんだ、チンクは？

「それで、どうかしたのかい、貴一？」

チエスをしながら俺らは最近の話を、まあ世間話だ。

「ああ、今日はちょいと暇になってしまつてな。それで来たんだよ、ここつてお前とかナンバーズもいるし、退屈しないんだよ」

「ふむ、確かにこの半月で私の生活も一変したよ、それはたぶん娘達も一緒だろうがね。それに君だつて楽にはなつてはいるはずだ、裏の仕事はあのゼストが引き受けているのだからね。まあ君みたいな部隊には関係ないかな？」

「まあ違法研究所つぶしは変わらないけど、まあ数は減つたからな。けどいいのか、お前もそんなことに加担して」

「私は加担などしてないよ、ただゼスト、そして娘達が勝手にしているだけのことだよ、それにあの評議会もそこまで私には関わりたくないようだ、これでどうかな」

そう言つて、俺のルークをナイトで食うスカリエッティ、しかしそれは俺の同じで

「これでチェックだな、ええ天才？」

「ふう、君に言われると本当に癪だね天才と言う言葉は。まったくあの評議会が作り上げた天才を簡単に倒すとはさすがは私と同じくらい天才と思われるあのギル・アルバートの弟子にして孫と、言うべきかね」

「あはは、ありがとうよ。おっとそろそろ戻るな」

「あ、なら一応娘達が丁度食堂にいるだろうから、挨拶をしていってくれないか、この前、君が帰ったのをしらなくてこっちにチンク達に来てな……死ぬかと思ったよ」

「ウーノは？」

「率先していたが」

「なんで、ナンバーズはあそこまで俺のことを気に入っているのだろうか、まあいいやいってくる」

そして俺はラボを出て、クイントさんがオーダーした食堂に足を急がした。そして一人残ったスカリエッティが独り言のように

「わかっていないね、貴一。彼女らは君に始めてヒトとしてもらい、そして守ってくれる存在が現れたのだぞ、君は彼女達と最初にちゃんとあったときにこう言っただろう「お前らは今日から俺の仲間だ、だから俺はお前らを守ってやるよ」とな、これで十分すぎるだろう、あの人がかかる不治の病にかかるのは、そうだろうクアットロ」

「そうですねえ〜けど、貴一ちゃんまったく気付いていないですよドグ？」

「ふむ、問題だねえ。まあ彼なら娘達を頼めそうだよ、それではクアットロすまないが研究を始めるぞ」

「はい、今回はさっきの試合をデータしましたので」

「ふむ、やはり彼のほうが」

そしてスカリエッティとクアットロはさっきのチェスの試合をそれは真剣な目で考察し意見を出し合っていた。

第三百三十三話 意外と負けず嫌い？（後書き）

最近、ゲーセンの格ゲーにはまっている作者でした

第三百二十四話。カロオーメイトは私の主食ですby作者(前書き)

リライト、おもしろいです！

第三百三十四話 カロリーメイトは私の主食ですby作者

そして俺が帰ろうとして食堂によると、そこには普通にご飯を食べているナンバーズであった、ちなみに俺らが来る前の食事はカロリーメイトだった、そのあとあのスカリエッティはクイントさんとメガーヌさんに怒られたそうだ。

「お、貴一。どうかしたのか、それともお前も食事か？」

そういうのはチンクだ。しかしチンクよ普通にハンバーグを食べないでくれ……似合いまするぞ。それにすでにドワーエはもういない、そしてセインはラーメンのようだ

「クイントさん、色んなものを造りすぎです……まったく普通に食堂じゃないんですから」

「あああ私としたことが……まあストレス発散よ。愛娘達にあえないんだから……あつ貴一君のせいじゃないから、そんな顔しないの！そしてチンクちゃん、ナイフを私に構えないで」

「それにしても貴一の旦那？」

「いや、まてセイン。俺はゼストさんみたいな大人でもないぞ……」

「私よりも強いんだからいいんだよ、それにゼストの旦那だって貴一の旦那の事を普通に呼び捨てじゃないか、私なんて嬢ちゃんだけ」

やはり一番人間臭いセインは最近もっと人間臭くなったと思う。ちなみに食堂にいるのは俺、クイントさん、チンク、セイン。



「それで、貴一？食事か？」

「いや、帰ろうと思ってな。スカリエッティがお前らに挨拶をしていけとか言っていたからな」

「あゝあ、ドクターさん……予防策をだしたのね」

クイントさんがなぜか呆れながら俺を見てため息をついていた。

「なに！帰るのが貴一！？」

「もう帰りですか、旦那！？」

「ああ、そろそろってなんでお前らはそんな怒るんだ？」

「ウーノ姉、すぐに来て！貴一が帰る〜」

そしてなぜかセインが叫んでいた、そして普通にその声から数秒でくるウーノ。お前はスカリエッティの助手じゃないのか？

「貴一さん、帰るのですか？」

「あ、ああそろそろな」

「そうですね、残念です……ですが、しょうがありませんね。貴一さんを困らせるのは私も本意ではありませんからね。」

「く、ここでポイント上げた……ウーノ姉め、やるな」

なんかチンクが言ったようだが俺には聴こえなかった。そして俺はその近くに魔法陣をはる。

「貴一君って普通に可笑しいわよね、それで管理局にいるのならもつと上の位じゃないのかしら？私でも普通にわかるぐらいの魔力の多さね。単体で転送魔法が使えるのだから」

「まあ、仕様ですから。それでは」

そして俺は自室に転送した。ちなみに今日は休日、そして家には誰にもいない。

「はあくまったく、母さんはどこにいったんだ？」

そして俺がそのまま二階から一階におりると丁度チャイムが鳴った。

「あれ？誰だ？」

そして俺がそのままドアを開けるとそこには、久しぶりに見る父さんの顔だった。てかなんで普通に玄関から来るんだ？

「おお、貴一か。久しぶりの再会だが、話はあとだ。」

そして部屋に入る、父さんその手にはなにか持っていたがなんだろう？

「それではっあ、すまんな麦茶か、うんうんうまいなあ。それでは話に入るが母さんはどうしたんだ？」

「うん俺もさっき帰ってきたから分からないよ」

「うん、なんだお前も仕事だったのか……貴一も大変だなあ〜」

「そう言いながら笑わないでよ。てかLOSってそんなに凄いの？俺だけの部隊なのに、なぜかその名前を挙げるだけでみんな気後れしているし」

「まあそれだけあのバッチには意味もありそして功績もあるのだ。まあそれに母さんがいないのはある意味都合がいいのでちょうどいいのだが」

そして父さんは真剣な顔になり、さっき持っていたものを俺にみしてくれた。それはなにかの契約書のような紙切れだった。

「今日、あるところの研究室にあったものだ」

「けど父さん、なんでこんなものを？俺もよくこう言うのは見つかるけど基本無視しているよ」

「確かに今までと同じものならば私も無視していたさ。しかしこの文、いやマークが気になっただけ」

そして父さんがみせてくれたマークは、なにかわからないが鳥の顔が二つ、そしてグリフのような胴体。それがそのマークだ、確かに今までの俺からもここまで印象あるマークは見たことがない

「まあ私の考えすぎでなければいいのだが。一応な、お前のかかわったあの闇の書の事件の時のあの途中乱入のあの者が頭に浮かんでな」

そう、俺も思い出した。それはあのときのレアスキルをもっていた者……そして闇の書に喰われた者。スカリエッティにも聞いたが彼でもさっぱりらしい」

「まあ、確かに気にしすぎなのかもしれないな、私も。それとも一つ、お前に言いたいことがあってな」

「うん？」

「最近、私達と同じことを、いや私達よりも早く研究室を破壊し、そして管理局に知らせているもの達がいるようなのだ、今日の事もそれがあってな私はなにもしていないのだ。それで貴一の知り合いかと思つてな？」

たぶんゼストさん達だろうが、俺は首を横に振った。

「うんうん、それに俺だって情報を貰うのは父さんと同じ元なんだあらか時差はないでしょう？」

「そうだな、すまん。それだけだ、しかし貴一も管理局入りしてから随分と大人になったなあ〜どうだ、稽古といわれないが木刀で私と試合でも？」

「いいよ、ソル」

「すぐに用意を」

そして木刀を出して、俺と父さんは家の庭に出る。そしてお互いに構える

「ふむ、やはり師匠の言うとおり私よりも腕をあげているようだな、息子よ」

そしてその言葉と同時に俺に一閃入れる父さん

「って！普通にマジかよ!？」

俺は回避すると同時に構えなおし、そして相手の武器を奪おうとするがさすがに父さんだけあって中々捕まえられない、なので俺は構える

「ん？なんだその構えは」

「構えよ……さもなくば死ぬぞ！」

そして俺は一瞬で三撃を決め手父さんから木刀を奪った、しかし俺は驚いたまさか初見で二撃まで弾かれたとは

「ははは、まさか三撃目が有るとは……父親ながら驚いてしまったぞ、貴一。それにしてもまったく、いい腕だな」

「そうかな」

そして勝負が終わると、そこに母さんが帰ってきたようだ、なぜか走ってた

「あ、母さんおかえ」「きいちゃああああああん!」「ゴフッ!」

俺はなぜか抱きしめられた、なぜ？

「ど、どうかしたのかりり？」

「どうかしたのじゃありませんよ！なにをしているのですか、子供に……」

「い、いやこれはだな。親子の稽古というか、そのなんと云うか「サン、いくわよ」な、こんなところでは「もうソルにお願いして境界は張りました」ああ、そうかって……！そういうことじゃ「戦慄の……」だから」

そして父さんは逃げようとするが俺を抱きしめながらそのままサンの銃を構える母さんの顔は本気で

ストライク  
「一閃！」

そして父さんが吹き飛んだのは言うまでも無く、そしてそのあとにアースラから緊急通信が入ったのも言うまでもなかった。

第三百二十四話。カロオーメイトは私の主食ですby作者（後書き）

最近、ネタにつまっています。

バイニー！

第百三十五話。 中学卒業で就職って、いまだとそんなにありませんよね？ (前書

秋ですねぇ)



第三百三十五話 中学卒業で就職って、いまだとそんなにありませんよね

「今日と言う別れと、そして新たな高みに皆様が行く事を望み…  
私の話とします、それでは卒業生の皆さん、おめでとつ」

今日は、そう卒業式だ。しかも中学生だ、まあエレベーターで上がるだけのだが、俺や、そしてなのはは違う。なのはは教官となり、フェイトは執務官、そしてはやては調査官と全員違う道のようにだった。ちなみになのはの大怪我の件だが、俺の“仲間”がそれを救い回避したが、俺がそのあと色々と激怒したためになのはも、というよりも他の二人も無理をしないようにしている。

「ふう、これでお仕舞いだな、守」

「そうだな、貴一。お前サンは進学しないんだろう？」

今、俺は体育館から廊下にて、自分のクラスの教室に向かっている。となりにいるのは守、そう雄聖守だ。こいつとはなにかの腐れ縁なのかあの小学三年生からずっと同じクラスでいい友達だった。俺も途中から名前前で呼ぶように成っていたくらいだ。

「ああ、確か守はこのまま高校か」

「おう、まあやりたい事もあるしな。まさかと思うが、あの姫さんたちと同じ所に行くのか？どうもあの三人姫も進学しないらしいが……」

そしてジト目で見られる、俺。ある意味当たっていて怖いのが現状だ。

「あはは……まあお互い頑張れだな」

「ふ、そうだな。あ、そうだ貴……握手でもしとくか？こう言うときぐらい」

俺はその差し出された手を握りながら

「ふむ、中学の入りたてから天下の殿とのと言われ続けた雄聖守と握手ができるとは俺も幸せかね」

「ふん、小学校から変わらず騎士と呼ばれ続けたお前には適わないよ……」

そして、俺らは教室に戻る。そして後は淡々と過ぎていった、先生の言葉、そして一人一人の卒業証書。ちなみになのは達とは中学に入ると一度も同じクラスではなく、フェイトとはやて、そしてなのはが本気で理事長室に行こうとしていたのは予談だがな、と、言うことであいつらはいないのだ。そして先生の終わりの言葉で俺らの中学生生活は終わった。そして俺は廊下からのアリサのお呼び出し、守は最近ファンクラブが出来たらしく、その女の子たちの相手、と言うことで俺らは最後にこう言っ別れた。

「「またな」」

そして俺は廊下、守は外へと出て行った。そして目の前にいるこのお姫様ズ

「まったく、親友との最後ぐらい邪魔しないでほしいなアリサ」

「う、うるさいわねあんたは！！それでちゃんとあんたも卒業したんでしょね？」

「中学までは義務教育だよ…アリサちゃん」

相変わらずのすずかとアリサ、この二人は高校に進学するだそうだ。まあ二人ともお嬢様だしな。

「う、すずか／＼／＼ま、まあいいわ、それであんたのそれは誰にあげるのよ？」

そして指さされるのは、第二ボタン。こんなボタンになにか意味があったか？（転生前はこんなイベントが起きらず悲しい青春時代だった貴一のため、知りません）

「く、そうだったわね……今日は、なのは達がないからっていい感じだと思ったのに、一番の敵がいたわ」

「ま、まあまあ。それで貴一君、それって誰かにあげるの？」

「いや、もう制服は着ないだろうしな……なんだほしいのか？」

俺が聞くと二人は大きくうなずいた

「うん！！え！？アリサちゃん（すずか）！？」「」

「二人して、仲いいな……そうだな……」

そして俺はボタンを取ると、そのまま

「えい」

「え!?!」

真つ二つにおり、そしてそのまま二人に渡した。

「これでいいだろう……まあボタンなんて何かあるのか?」

「あ、うんうん別に別に!ただ、思い出にってことだよねアリサちゃん!」

「そ、そうよ…私が貰ってあげるんだからありがたいと思いなさいよね!……まあ稀を見ないほどに見事に割っているけどね」

そして二人とも、そのボタンを貰うとそのまま大事そうに仕舞っていった。そしてさすが屋上を指しながら言った

「貴一君はいいの?三人が居ないのは今、さっきお仕事ですぐに行っちゃったよ?」

「そうなのか……あいつらも大変だな。本当にここ最近と言うか中三は忙しそうだったしな」

「そう言うあなたはいいの?あんだだって結構居なくなっていたようじゃない、あの殿とかいうあなたの親友がノートの中で嘆いていたわよ」

そして俺のペンダントのソルからもこちらに念話が来た

「(主、こちらにも指令が)」

「そうか……」

俺がそう言つと二人は分かつたように道を開けて

「あんたも、行くんでしょ？」

「気をつけてね貴一君」

「ああ、あ、そうだお前らに言つのを忘れていたな……卒業おめでとつ」

「「ありがとう」「」

俺はそれを聞きながら上へと上がって行つた。そして久しぶりの声が聞こえた

『お久しぶり〜貴一君、元気そうだね？』

「はい、元気ですよエイミーさん。そして久しぶりだな、クロノ艦長」

『君に言われるとなにか癪だが……それにエイミー、一応敬語の方がいいと思うぞ彼はもうすでに』

「「こらこら、そう言う面倒な話は無しだ。それで俺に依頼と言つのは？」

『ああ、君にはなのは達を追ってもらい合流してもらつ』

「あの三人が出張っているのにか？」

『まあ物がロストロギアらしくてな。油断も禁物と言うことでさっき三提督から直々に君へと、と言うことでこちらが中継地点を取らせてもらった』

「了解した。それでは開いてくれるか？」

そして俺は出てきた魔法陣の中へと姿を消した。そして来たのはどこかの世界

「ソル、セットアップ」

「イエスマイロード」

そして小三から変わらない赤い身に包んでそしてクロノの指令をま

った。  
『それじゃあ、君にはここの近くの基地に行ってもらいそして状況をなのは達と一緒に聞いてくれ、目的は「分かっている、ロストロギアの回収又は破壊だろ？」君の場合だけだがな破壊は……まあしかし大体そうだ、ちなみにもう片方にはシグナム、ザフィーラ、そして君の部隊から“ジン”を貸してもらっている』

「そうか“ジン”か。わかったそれじゃあひとつ走りしていくとしよう」

そして俺は空を駆けた。そして到着し俺はいつもの服装に変える、さすがに学生服とはいかないのでそして降りると迎えてくれたのは

「遠路から態々ありがとうございます！本局管理補佐官、グリフィス・ロウランです」

「シャリオ・フィノーノ、通信士です」

「ほう、ロウランというとレティ提督の」

「はい、母をご存知でしたか……」

「まあな、それでは一応こちらも挨拶したほうがいいのか？クロノからなんていわれている？」

「はい、先ほど八神調査官達が到着し、そしてあなたが合流するまで待機ということですよ。」

「なるほどね、それじゃあ改めて……LOS隊長、キイチ・スターリヴァーだ。まあ階級は面倒なので覚えていない。それじゃあどうせあいつらも暇そうだからすぐにでも出るとしよう、そのロストロギアに会う為には」

Side グリフィス

「……見たかシャーリー、あれが伝説の部隊の隊長だ」

「私達とそんなに変わらないはずなのに、なんだか安心できる感じがですね。しかもあの制服も……そしてあのバッチも」

「それが彼らの部隊、LOSだからな」

side out





第三百二十五話。 中学卒業で就職って、いまだとそんなにありませんよね？（後書

と、言うわけでコミックスでのお話です。 それでは次回会いましょ  
う！

第三百三十六話 久しぶりだね、淫獣フェレットW(前書き)

題名にセンスが無くて本当にすみません

## 第三百三十六話 久しぶりだね、淫獣フェレットw

そして俺はさっきまで卒業式と一緒に居たやつらに挨拶をした

「すまん、待っていてくれていたようだな、なのは、フェイト、はやて」

「あはは、いいんよ貴一君。それにしても貴一君のその制服姿は新鮮やな。いつも違う任務ばっかやし。それに今日で終わりやしな、学生生活も」

「あはは、はやて、それを言うのはなんか早いような気がするよ…  
…だけど貴一も大変そうだね」

「まあ一応LOSだしな」

「けど、貴一さん個人での名前もよくお聞きするのです」

そして出てきたのははやてのユニゾンデバイスことリインフォース？。まあリインフォースのコアとはやてのリンカーコアを混ぜて作り上げたユニゾンデバイスだが、俺もこれには協力していた。

「はは、久しぶりだなリイン。お姉さんの方も元気か？」

「はい、お姉さまも最近ははやてちゃんのサポートならびに補佐をがんばっていますですう」

はやての騎士達、ようはヴォルケリッター達は、それぞれいろんな道に分かれた、まあ管理局に入っているのは変わらないが、それで

もザフィーラははやてのボディガード、そしてリインフォースははやての補佐で現在、調査官補佐である。

「そうか、まあ俺も最近やっと部隊としての活動も出来てきたしな」  
「けど貴一君の噂は結構教導隊でも有名なんだよ。エリート、そして若き切り札って」

「それはありがたいような、歯がゆいような。それでは話もいいが行くとしますか？」

「了解」

そして俺らはシャリオの指示で現在、そのロストログアを回収ポイントに向かっていた、そう、そしてそこで俺は初めてわかった……すでに原作ブレイクによる違った未来になっていた事を

「ねえ、あれ！」

なのは指をさしながら言うのは、間違いなく指定されたポイント、しかしそこに居たのは

「なんだ、あれ？」

それは間違いなく、ガジヨットだ。

「先にやることは救助だ。なのはと、フェイトは援護に回ってくれ、はやてはさきに本部に連絡」

「リイン、いくでえ！」

「ユイゾンイン」

俺指示を出すと、そのまま襲われそうな人の前、ようは発掘班の前に立ち

「プロテクト」

そしてガジェットの無数の魔弾を守る。そして話を聞いた

「これはどこから？」

「そ、それが分からなくてこれを運ぼうとしたら急に」

そして出てきたのは、やはりこの近くからみれば分かるがガジェットだ。そしてはやてからの通信で

「本部からや、危険分子と判断し即時の破壊許可が出たで。なのはちゃんフェイトちゃん、お願いな」

そして二人が一瞬でそいつらを攻撃する、しかし

「な、なんでなの！？」

「高域なジャミングを確認」

レイジングハートが言うように、これは間違いないな。

「AMFだ。ここは離れている、お前ら。ソル、バビロンで終わりにする……」一機は回収してスカリエッティに贈るぞ」

「イエスマイロード」

そして俺は指を弾くと同時に剣ですべてを貫いた、そしてそれに唾然する現在管理局のスリートップ。

「相変わらず貴一君は規格外やな……リインこれが貴一君の本領だよ」

「これは驚きで言葉がでないです」

そして俺らはそのままロストロギアを回収して、そのまま本部に戻る事になった。

Side クロノ

「はい、それではこれで。はい、騎士カリム」

今、俺は先の事件のロストロギアの件を教会のカリムに報告していた。

『それで、現場の方は？』

「ええ、片方は完全に暴走が起きてしまったようで……LOSの副隊長の手で被害を縮小、そしてもう片方は捕獲できました、怪我人の報告はありません」

『そうですか……それでは』

「はい」

そして通信をきる、そして次の通信が入る

『クロノ艦長、それでは私は先に戻ると隊長に言っておいてくれま  
すか？』

彼はジン「ヒイラギ、LOSの副隊長だ。俺もそれ以外はなにも知  
らない、貴一の部隊であるLOSは現在四人所属しているが、まっ  
たく情報がない。あるのは貴一の情報のみだ。だから俺はこのジン  
も通信越しでしかあったことがなかった

「あ、いいのかい、ジン？一応この後アースラでちょっとした打ち  
上げがあるのだけど……君の隊長と、そしてフェイト達の卒業パー  
ティが」

『それならば尚更ですね。隊長には我々でなにかあったら対処する  
と言っておいていただけると助かります』

「わかった、それでは」

そして通信をきった。そして俺は今日の同窓会の準備を始めた。

S i d e o u t

そして俺がアースラに久しぶりに入った。あのレリックは管理局の  
本部が預かると言うことで、俺はバリアジャケットからLOSの制  
服を着ながらアースラでゆっくりすることにした、理由はアースラ  
の皆が俺らの卒業パーティをしてくれるということだそうだ。そし  
てそこに通信が入った。

「うん？どつかしたのかクロノ？」

『ああ、君のところの副隊長からの伝言だ、とその前にもう聞いていたのか？』

「ああ、パーティのことだろう」

『ならば、言うておこう。伝言は我々でなにかあれば対処しますの  
で隊長はゆっくりしててくださいだそうだ』

「わかった」

そして通信をきる。あいつらにも後でなにかお土産でも買っていてこ  
うと思う、俺がいた。LOS、俺が部隊長を勤める部隊。そしてそ  
のメンバーは四人だ、俺、そしてジン、そして俺の義妹二人だ……  
そう、俺以外の全員がこのふざけた管理局の影の犠牲者で俺のやる  
うとしていることに賛同した者達。まあその俺の義妹達はまだ見習  
いのような感じだがな。しかしジンは俺よりも二歳年上なのに、俺  
にはずっと敬語だ。と、そんなことを思っていると、そこには久し  
ぶりにみる顔がいた。

「ユーノじゃないか！久しぶりだな」

そこにはメガネをかけて最近では書庫の脳と言われていたユーノが  
いた

「わあ貴一だ。久しぶり！！」

そして俺らは固い握手をした。



「メガネなんかかけやがって、それと無限の図書の希望が！」

そして俺はユーノの頭をぐりぐりとしている。そしてユーノはメガネをかけなおして

「あはは、それにしても貴一……なんか変わっていないね、いろんな噂を聞くけど……制服も他の皆と違うし」

「噂ねえ〜どんな？それにこの制服は俺の部隊のだ」

まあデザインしたのは俺だが、黒を起用し、まあ簡単に言うと艦長などのひとが着る服をもう少しラフにしてさらに金でラインを整えたような感じで、そして胸にはLOSのバッヂ。

「噂って言っても、なんでもキイチ・スターリヴァーは若き切り札とかだよ」

「ユーノ君、貴一君、準備できたよ〜」

なのはの声が聞こえて俺らはアースラの食堂に久しぶりに入るとした。

第三百三十六話 久しぶりだね、淫獣フェレットW（後書き）

と、言うわけで次回はパーティィの話です

第三百二十七話 レッツパーティー (前書き)

テイルズウィーバー、やっています

## 第三百三十七話 レッツパーティ

そして俺がその会場に入ると、そこには俺には結構懐かしい人たちが多かった。それは

「き、貴一！？久しぶりだな」

そうやって歩いてくるのはシグナムだ、そして俺と握手をする。そして後ろから出てくるのは

「貴一か……ツヴァイから聞いていたかが、本当に来ていたとはな」

「リインフォースか。お前さんも補佐、頑張っているようじゃないか。それにヴィータは相変わらずかよ……」

そして俺の登場に気付かずにこの目の前にあるご馳走を食べているヴィータ、そしてこの犬のアルフ

「ん？お、貴一じゃん、久しぶりだな。なんだその制服は？」

「やあ貴一。随分と大きくなったな」

ちなみにアルフは最近ではプレシアさんの手伝い兼、ホラウン家の手伝いをしているらしい、理由は恩返しと、そしてフェイトが強くなってきたからだそうだ。そしてヴィータは俺の制服を奇妙な目で見っていた。

そしてそこに出てくるのはこのちびっ子こと、リインだ。ちなみに俺はリインフォース、リインで分けている。俺のところに来るとジ

ユースと一緒に俺に話しかけてきた

「そう思えばヴィータちゃんと同じで、なんで貴一君は皆と制服が違うんですか？」

「それはね、私から説明しようか」

そして出てきたのはエイミィさん、と、ここでクロノも居ないので俺はこう言った

「あ、そうそうさっきのテレポートの時に言えば良かったのですが、婚約おめでとございますね」

「う／＼／＼あ、ありがとう……ゴホン、それじゃあね、まずは貴一君の部隊からの説明した方がいいかな？」

「お願いしますですう」

「まずは貴一君の部隊の名前はLOS。これは正式名所の頭文字をもって私たちのような局員がつけたのだけど、正式部隊名『レジエンド・オブ・ソルジャーズ』これが貴一君が所属する部隊の名前、そして活動内容はもっぱら緊急事態の、それこそ世界を救うぐらいの任務とかを専用にする部隊だよ、ね？貴一君」

「世界を救うって、まあ犯罪者との一騎打ちとかが最近はおおいですが、まあそうですね、調査任務というよりも俺らはどちらかと言えばエイミィさんの言うとおりの部隊だね」

「そしてそして、ここが普通の部隊と違うところなんだけど、LOSは要請があれば、本局だろうがミッドの地上本部だろうがお構い

無しに事件の統制権を握る事もできるの。それとこれには地上部隊のあのレジアス中將も助けたいらしいし。聞いたよ貴一君、貸しを作ったみたいだね」

「ははは、どこからそんな情報が。まあリイン、そういうことで俺は、その一応隊長をしているんだよ」

「わわわ、隊長って凄いです！けどそれなら貴一君は階級が凄く上じゃないんですか？」

そして俺は一瞬痛い顔をした。そう今、現在俺の階級はへたすればこの中で一番高いことになる、シグナムや、ヴィータとも比較にならないほどの上になってしまったからな。

「まあ、それはおいおいな……それよりも俺は飯が食いたい」

そして俺は飯を食べながらの談笑となった、最近はなのはたちと会うことも減っていたのでいい気分転換だ。

「けど貴一君が違う名前だった時は私もおどろいたなあ」

「え、はやて？貴一が名前を変えていたときってどういうこと……」

「ああ、フェイト、それは俺のミッドの方の名前のことだよ。まあなのはや、はやてはそのまま名前を使っているようだけど俺はこの管理局だと名前が、キイチ・スターリヴァーって言うんだよ。これは俺の父さんも母さんも一緒な」

「スターリヴァー？」

なのはがそんな感じで復唱しているとフェイトは気付いたようだ

「それって、貴一の星川を英語にしたの？」

「ああ、そうらしいぞ父さんにも聞いたら笑いながらいいセンスだろって言うていたし。あ、そうだ学校でも最近会わなくて言うていなかったがフェイト、執務官の試験受かったらしいな一発で、おめでとう」

「あ、うん、知っていたんだありがとう貴一／＼／＼／」

「そう思えばお前が保護したあいつは元気か？」

「あ、うんエリオのことでしょ。うん元気になって最近やっと普通の笑みができているよ」

まあ、このときの任務も俺が入ったのは言うまでもないのだがな。最近の管理局の間は減少傾向だ、理由はゼスト隊の三人、プラスのうちの両親、そして俺とまあ簡単に言うところ潰しに潰しでいて、俺は表の仕事が最近では多くなった。

「むう、フェイトちゃんばかりずるいよ！私だって卒業したから本格的に教導隊入りだもん」

「そうやで、私はまだやけど……今、研修中やもん」

そして俺らがそんな感じで話しているとそこに登場したのは、クロノ、そしてもう一人の人物。それは

「いやあ〜すまん、遅れた。もう始めているな……」

「遅いよクロノ君。貴一君からも一応祝福の言葉貰ったからね」

そう言うと俺を見ながら苦笑いをしていた。

「く、く、く。クロノがそんな顔をするとはな、とその前にその隣にいるのは」

「ああ、紹介しよう。彼はヴェロッサ・アコース、この管理局の査察官だ。それとあの聖王教会の騎士カリムの義理だが弟だ」

「よろしく」

「あ、ああよろしく」

「そうになるとヴェロッサも初めてか「まあそうだけど色々と聞いているよ」「……そうか」

「ああ、LOSの部隊長にしてあの地上本部のお偉いさん達に唯一意見を言えると言っていいほどの実力者、階級はたったの15歳だが、二等空佐。間違っていないかね、キイチ・スターリヴァー殿」

「……さすがは査察官と言うことでしょうか、さすがに観察されるのはあまり」

そして茂みにかくれていた、彼の緑の分身を俺は睨み消した。

「気付かれていたとは、クロノ君の言うとおり、君は大物のようだね」



「それはどうも、それとあまり階級とこの部隊は気にしないでください。飾りですから所詮」

「君とは仲良くなれそうだ、姉さんにも紹介したいね」

「機会あったらぜひ。騎士カリムは俺も聞いた事もあるしな」

そして俺はヴェロツサと握手をした

「なあ、貴一、お前そんなに偉くなったらわたしたちを助けれるよ」

炒飯を食べながらヴィータが言っている

「どうかしたのか？助けろって、俺はそんなに権力は無いっての」

「ああ、実はですねえ」

そしてシャマルが言ってくれた。どうも八神家は全員とも地球からミッドに移り住むらしい。確かにここまでの大人数の家族が全員管理局住まいならミッドのほうが交通や緊急の時便利だろうな。しかし、現在、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、リインフォース、さらにザフィーラとなると意外と広い家の方がいいだろうな。

「ははは、引越しかよ。って言うてもな、俺は実際の所ミッドを拠点に置いていないからな。さすがにいい物件ってのはわからんな」

「そうか、すまないな貴一。それとムーンは元気か？」

「ああ、ザフィーラ。あいつらなら元気だよ、俺がこう言うことで

母さん達もまた旅に出たよ、まあ帰る頻度は多くなっただけだね」

そんな俺らのパーティは終了した、そして俺は帰る前にある所によった、それは

「ゼストさん、久しぶりですね」

「ああ、貴一か。すでにスカリエッティは待っている、今回の件についてだそうだ」

「わかった」

そして俺はスカリエッティのラボに入ることにした。そして待っていたのはナンバーズを含めて全員だった、ナンバーズのお母さんとクイントさん、そしてメガーヌ、そしてその娘のルーテシア、そしてげんなり顔でいるスカリエッティ

「はあゝまあ、座ってくれ貴一」

そして俺は座った。そしてスカリエッティからこういわれた

「これは誰のつくった鉄屑だい？」

第三百二十七話 レッツパーティー (後書き)

ネットゲってはまると時間がすぐに消えますね W W

第三百三十八話 暗躍と書いてタークヒーローと読む(前書き)

ISのOVA期待しています!どうも作者です

### 第三百三十八話 暗躍と書いてタークヒーローと読む

「さて、貴一。君にこれを転送されてきた時はなにかのいたずらだと思っていたのだけど、これはどこで手に入れたんだい」

スカリエツティは座りながら聞いてきた、もちろんその机の上には紅茶もおいてある。

「ああ、今日実はな、アースラでの緊急の任務でロストログアの回収を頼まれたんだよ」

「それはもしかして、北部かい？」

「なぜ、それを？」

「忘れてるよ貴一。僕は元々、レリックを探していたのだからね……聖王をよみがえらし、そして世界のひっくり返そうとしたのを忘れているよ。そして今日はそのレリックが見つかる最初の日だったはずだよ、僕の計画では。まあ君という存在でこれは破綻して僕は軒並み、レリックなんかに興味はなくなっただけだね」

「その通り、と言うべきであろう。だがそこで問題が起きた、それがこれだ。この鉄屑どもが急に現れて、そしてレリックを持って行くこととしたらしい。これはどういうことか分かるか？」

「君も察しはついているようだね……僕と同じ事をしようとしているもの、もしくはそれに近い事をしようとしているものが居る、だね？」

「ああ、しかもお前がこの鉄屑を出したのは過去で言うところの五年も前でいいんだよね？」

「ああ、君との接触を最後に僕は小細工をしながらどうにか、娘達をロールアップさせてそして君からチエスで一本とる研究以外は軒並み、なにもしていないよ。まあよく管理局の方にはハッキングしていたがね」

「そうか……ならすまんが、こいつの解析を頼む「もうやっているよ」仕事が速くて助かる、それとゼストさん、お願いが」

「なんだ、貴一」

「ちよつと工作まがいですが、今度から破壊する研究所なのだからありましたら、データを出来るだけとってきてください、それとどちらかと言うと穩便に殲滅を」

「……善処しよう。しかし我と、そしてクイント以外は軒並み、その訓練はしていないからな。今度から入れるように言っておこう、トーレ」

「はい、師匠。わかっております」

そしてナンバーズの、クアットロ、ウーノ以外は全員、そのままゼストに連れられていった。そしてこの場に残っているのは俺と、クイントさん、そしてメガーヌさん、そしてルーテシア、スカリエツティ、ウーノ、クアットロ、セインだ。

「しかし、貴一。君は僕を疑わないのかい？それでもこれを作った張本人なのだけど？」

「ふん、そう言っている時点でそれはないよ、それにお前ならこれよりも優れているものを作れるだろう？」

俺はそんな挑発じみたことをいう、そして笑うスカリエツィ

「そうだったな、君は疑い深い性格だったな」

「それに現在、クイントさん、初めにいろんな人の目がある以上、そんな簡単には起こせないでしょう？」

「……最近、私が更正されてきているのだが」

「それは良いことではないですか……ドクター」

「見ての通り、ウーノまでが君の味方だ。まったく、それにしてもはやく娘達をロールアップしてあの脳髄どもと縁を切りたいものだよ」

「そうね、まだこれから娘が増えるとなると、大変ね……メガーヌも手伝ってよ」

「分かっているわよ、ね、ルーちゃん」

「うん、がんばる。ねえ……きいちおにいちゃん、暇？」

「うん、そうだな。ああ、暇だぞ、ルーテシア？」

「ならあそんで……」

「……しょうがない、それじゃあメガー又さん、ちよつとルーテシアを借りますよ。それじゃあ、クアットロ、ナンバーズの誰かをよんでくれるか？あいつらも久しぶりの外にでも出すさ、まあ森林浴だが」

「はい、少年君」

「ごめんなさいね、貴一君」

「うちの娘達もお願いしたいぐらいね……」

「この前、人のここのラボを普通に使用して大画面で娘二人を見ていた君がなにを言うかい」

「いいでしょう！夫にはたまに会うけど、娘には会えないの！！もう、はやくあの脳髓達を切り捨ててほしいぐらいなんだがら」

「……クイントさん、それはテロリストまがいですよ……まあもう少しの間お待ちください、まだこちらもそれが消えた後の作業の計画もありますし、それに」

「それに、君も“あの事件”をきっかけに、二人の義兄になってしまったからね「おにいちゃん！いこう！」……大変そうだね、それではクアットロ、解析を急ぐぞ、それとウーノ、君の外に出ていざ。最近君も疲れているだろう、すこしは気分転換でもしれくればいい」

「ありがとうございます、ドクター」

そして俺は外世界の森林にでた、ちなみに着いてきたのは、チンク



とウーノ、そしてルーテシア。そして俺らは普通に自然と触れていた、その時ルーテシアの手を見てみると、そこには昆虫がいた

「な、ルーお嬢……よく触れるなあ〜」

セインがそう言いながら、若干引いていた、そしてルーテシアが意外そうな顔をしていた。

「え、なにが？」

「ふ、セイン。お前、虫が苦手なのか……随分と女の子っぽいな、中身が男勝りなのに」

「な、貴一の旦那！それは酷いですよ、これでも女の子なんですよ〜ねえ、チンク姉、ウーノ姉？」

「……意外です（だな）……」

「私に味方はいないのかあああ！」

「まあそういうな。ちゃんとお前さんだつて女の子さ、そう思えば、この前町に出てこつ酷くクイントさんに怒られたらしいが、どうかしたのか？」

「う、それが……ウーノ姉が。」

「わ、私のせいではありません……ちょっとドゥーエと口論になっただけです」

「ああ、そう思えばドゥーエねえ〜。管理局に見かけて話しかけた

ら急に抱きついてきたな。あいつはスキンシップが激しいからな」  
そして一気に不機嫌になったのは、チンクとウーノであったが、貴一はまったく気付いていないのはご愛嬌、そしてそれを見ているセインは、やれやれとルーテシアの手を引きながらお花畑に出る、大きな広場に行った。

「いやあ〜いつ来てもここは綺麗だねえ〜チンク姉？」

「そうだな……それにしてもあのスパイ姉は、管理局に混じり貴一と接触……ブツブツブツ……」

「ああ、だめだ。完全にさっきの言葉で動いていないよ」

「それにしてもきいちおにいちゃん、今日はいつものお洋服じゃないんだねえ」

ルーテシアが俺に聞いてきたので答えた

「あはは、俺も仕事の終わりに寄ってみたからね、制服のまんまなんだよ……あ、ルーテシアが相手だから……おにいちゃんの仕事用の服だよ、これが」

「おおー!」

そして俺の周りを歩き出す、ルーテシア。たしかに普通の管理局、または地上本部とも違うからな。珍しいのだろう。

「そう思えば、今日は確か貴一の義務教育が終わり日だったのでありませんか？」

「あ、ウーノ覚えておいてくれたんだ……そうだよ、と言ってももうあっちの地球の時間帯なら過ぎていくけどね」

「そうでしたか、もうしわけありません。なにも祝いの用意もしていません」

そして律儀に謝るウーノ

「いいよ、いいよ。それに俺にとってここは結構気が楽な所なんだから、最近は管理局に居ようが本部に居ようがお構い無しに視線があるからな、こういうゆっくり出来るところとかが俺にとってのプレゼントだよ」

「そう言っていただけでも助かります。しかしそうなるときまで管理局にいたようですが？」

「ああ、俺らの卒業パーティだったんだよ。そしてその帰りにここに寄ったんだ、だから俺はいつもの制服なんだよ」

そしてルーテシアが駆け回り、それを追いかけるチンク、そしてセイイン。俺はそれを見ながらゆっくりしていたら、急に通信が入った。

『隊長……そろそろ、お戻りを願いたいのですが』

相手はジンからだった。

「そうか、すぐに帰る。あと十五分ほどしたら家に戻るとする、ジンも大変だな、どうせエリスからの苦情だろうに」

『……わかっていらっしやるのならお早めにおもどりください、それでは』

「ああ」

そして通信を切る。

「すまんが、俺はそろそろ帰るから終わりだぞ」

そして俺の声に反論がやく二名

「ええええええええ」

ルーテシアならびにセインだ。

「はいはい、ルーテシアは今度また一緒に来て上げるから。それにセイン、お前はガキか。それじゃあ転送魔法を発生させるな」

そして俺は全員をラボへと連れて帰った。そして出迎えたのはスカリエッツィだ。

「相変わらず、単機での転送魔法とは、君は一体それだけの魔力を秘めているのだろうね。まあこの話は今度だ。君が帰ってきたのは言うまでもなく表の世界だろう？」

「すまん、ドゥーエにあつたらちよくちよくは帰るようにと伝えておくからな」

「ああ、それは頼みたいね。娘達、そしてクアットロが会いたくしてほしいよね。ああ、それと貴一、チェスのリベンジを申

し込もう」

「りょうかいだ、それじゃあな」

「ああ、今度な。今度来たら娘が増えていいるだろうから、挨拶をさせるさ」

そして俺は、自分の家。そう地球の星川家と戻るのであった、そして玄関を開けるとそこには

「「兄さん（おにいちゃん）！遅い！！」」

俺の卒業パーティを考えていたのは、アースラだけでなく、うちもそうだったようだ、確かそれが被るから家のほうは一日あとと言われていたが、現在、午後の六時、ギリギリだったらしい、そして今度は家のパーティが始まりを告げたのであった。

第三百三十八話。暗躍と書いてタークヒーローと読む（後書き）

オリジナル妹キャラがやっと出せた!!

第三百二十九話 ふ、これは始まりですよ？（前書き）

第三百二十九話 始まります

### 第三百二十九話 ふ、これは始まりですよ？

今日は、久しぶりのオフの日だった。俺は普通に義妹と、そしてジーンで家でのんびりとしていた。

ジン・ヒイラギ、LOSの副隊長にして俺が管理局の影との最初に出会った改造魔導師。今までは子供などを收容されていたのが多かったが、初めて実験されている人を見た。俺はそれを見てすぐにそいつらを倒し救出した、そして俺の事を説明した。そして自ら自分をあなたの傍につかせてほしいと言われ、ギル爺に頼み、短期の士官学校に入学させてもらい、すぐに俺の部隊に配属させた。俺に助けてもらった恩義からか俺よりも二つ年上なのに、敬語である。

「兄さん！今日はギター、弾いてくれないの？ね、フォルテ」

「ぴよ？」

こいつは、エリス・スターリヴァー。俺の義妹にあたるアリスの双子の姉である、こいつは先天的な魔法能力を管理局に無理やり引き出されてしまった、そのせいで当初、俺にさえ攻撃的だったが、俺や父さん達が家族と言っていたら自然と普通になっただけでいき現在は、こんな感じだ。ちなみに見つけたときはまだ6歳だった。そしてエリスの肩にいつもいるこの鳥はフォルテ、まあこいつも研究室から連れてきたのだがエリスのペットである。

「もうおねえちゃん！お兄ちゃんだって困っているよ」

そういうのはさっきのエリスの双子の妹、アリス・スターリヴァーだ。リンカーコアのない彼女がなぜ、姉と一緒に違法研究施設に居



たかというと、理由は彼女の演算能力にある。彼女の演算能力は一言言えば異常だ。この地球のスーパーコンピューターの倍の速さで計算することが出来る、そのため非常に頭がいい。しかしこの二人とも特質だったせいで、逆に管理局に狙われたのだろう。ちなみにエリスと違いアリスは最初のほうは塞ぎきっていたが、姉と同じく序々に普通となった。

これが俺のLOSの隊員だ。隊長の俺、副隊長のジン、隊員のエリス、通信、指揮系統担当のアリス。一言言えばこれは俺の仕事を分配しているに過ぎないように思える、最近はずストさん達のおかげで減っては来ているが、それでも表の世界でも色々大変である。ちなみにエリスもアリスも今は義務教育の身であり、まだ本格的な任務につけたことはない。しかし鍛錬だけならエリスの魔法は俺と同じくらい強い、そしてアリスの体術は俺が本気でないと負けそうになるほどだ。だから今度の休みの任務はいつしよに行こうと前々から言っているのが、最近だ。そう、それが今日になるとも知れずに

「隊長！」

「おい、ジン。ここでは俺は隊長じゃないぞ、そして母さん笑わないでくれよ、恥ずかしい／＼／＼」

「い、いや私のきいちゃんが本当に偉くなっただけかも今じゃ隊長なんて言われているとねえ」

「あ、これは失礼しました貴一様」

「……はあ〜それでどうかしたのか？」

「はい、緊急のようですよ、リインフォースからです……」

俺はそれを言われた瞬間に、すぐに顔を変えた

「そうか、すぐにできるとしよう。エリス・アリス」

と、俺が声をかける前から二人は準備をしていた

「兄さん、とうとう私たちの始めての任務ですか」

「そうなる、“覚悟”はいいか？」

俺はそう聞いた、俺はこいつらを最初に拾ったときにこう言った、

「俺はこの管理局を変えようとしている、バカだ。それでも着いてくるのか？」それでもあの時二人は頷いた、まあその後の反抗が酷かったけど。そして俺の今の覚悟は、ようはもう戻れないぞという最終通告だ。しかし二人はこう言った。

「出来てるよ、兄さん（お兄ちゃん）」

俺はそれを聞くと、リビングで座っている母さんに

「すぐに行くぞ……母さん行ってきます」

そう言うと、俺はすぐに転送魔法を使い、転送した。そう、これがあの火災だったと言うのは俺はまだ知らない。

Side はやて

今日は研修途中の休みのなのはちゃんやフェイトちゃんが遊びにきていたそんな日の事件が起きた、それは今のこの火災だ。

「ちっ、回線が繋がらん！これじゃあ上からのモンも使い物にならん」

そういうのは私の研修先の部隊長、ゲンヤ・ナカジマ部隊長。

「そ、それじゃあどうするんですっ」

ラインが慌てていた、ちなみにラインフォースも一緒に来たはずなのやけど、どこにいるんやろうか？それよりも先にこの状況を、そんなときにこんな声がかかった

「主、援軍が来ました」

「え、せやけどラインフォース。この混乱やと無利や」これより、こちらの指揮は我々、LOSがします」え……」

その声と共に出てきたのは私よりも全然、たぶんまだ小学生である少女であった。しかしその制服はあのLOSやった。

「き、君がか？」

「はい、隊長よりここの通信をバックアップに使用するようにと。それでは失礼します」

そして彼女が座った瞬間、それこそ一瞬だ。すぐに空港の設計図がらいるであろう取り残されてしまった人々の場所まで細かく測定して、割り出していた。

「さすがに、魔法が使えないとここまですね……すいません、ここ

の部隊長さんですか？」

「あ、ああ俺がこの部隊長のゲンヤ・ナカジマだ。それでどうかしたかい？」

「すいませんが、ここからの経路から飛行可能の魔導師を。そうすればたぶんこの近くに避難した人たちがいると思いますので。爆発した場所が分かっているのでこれは間違いないかと」

「了解だ！こちら本部 1に通達」

そして彼女の指揮の元動き始める、そして私は痛感した。これが指揮だと、一瞬での場をしきりそして持ち直す、今回はLOSや。間違いないこの統制感覚や、そしてこのはやさや、どんなことにも冷静やけどそれでも早い。

『アリス〜どんな感じ？』

「あ、お姉ちゃん。うん大丈夫ほぼ制圧完了だから、それとそちらにも送つとくから、このままいけば三分でおねえちゃんの出番だよ」

『けど、この火災じゃ、私でもたぶん消し残りそうよ。そっちにだれかいなかしら？』

そしてその女の子は私をみてそして私は頼まれる前に

「私にいかせてくれますか？」

「えっと、あなたの所属は？」

「一応、今は研修で108隊です。名前は八神はやてっぺいいます」

「あ、あなたが？お兄ちゃんからよく聞く……分りました、それではこのポイントに私のお姉ちゃんが居ますので、たぶんすぐに分かると思います。まだ空にはお姉ちゃんしか居ないみたいですから」

「わ、わかりました」

やはりここまで指示を飛ばせるのは素直に凄いと思った。

「それじゃアリン、いくでえ。アリンフォースはLOSの隊員さんのアシストや」

「分かりました、ツヴァイ、主、お気をつけて」

「それじゃあ、アリン」

「はいはやてちゃん！」

「ユニゾンイン」

そして私は空にあがった。

Side out

まさか今日とは思っていなかった。俺はすぐにアリスに指示を出す、ちなみにアリスはリンカーコアが無いのがちで走りでのあの部隊本部に入っていき、そしてすぐに空港の設計図ならびにいろんな情報が入る。いつも思うがスカリエッティにも負けないハック能力が

ありそうだった。そして俺は確認すると、すぐに確率の低いところに行くことに決めた、そして俺は指示を飛ばす

「エリスは、後処理だ。ジン、お前は東から行け。俺は西からだ、それではいくぞ」

「「イエツサーー!!」」

そして俺らは各自の確認事項に入る

そしてそれから数分後……沈静化された空港。やはり原作どおり残されていたのはナカジマ姉妹だけでそれは無事なのは達が救った模様、そして他は先に帰らせて俺は現場の本部に来た。

「今回の協力感謝します……LOS。と、堅苦しいのはここまでで助かったぞ貴一」

「こちららも緊急での要請だったのですね。どっかの管理局の調査官補佐からの要請だね」

「う………すみません貴一………」

「構わないさ、それよりも俺は一応報告のために来ただけでねそろそろ撤退するよ」

「言いのかい、一週間ぐらいあっていないのだろう、お前の同級生達に」

「ゲンヤさん、お忘れですか、俺の部隊は………」

「おっとそうだった。それじゃあな」

そして俺は闇に消えていった。

Side ゲンヤ

あのガキはそう言うとすぐに消えて言ってしまった、本当に正義の味方のような。そして帰ってくるのは今回のエースたち。

「あ、あれ？LOSの人は？」

「ああ、帰っていったよ。さすがに忙しいようで」

「そうなんですか……貴一に会えると思っていたのに」

「ま、貴一君も忙しいもんフェイトちゃん」

「……………」

「はやてちゃん、どうかしましたか？」

「あ、なんでもあらへんよりイン。それとリインフォースもご苦労やったな」

嬢ちゃんの目が一瞬、なにか決めたような目だったのを俺は見逃さなかった

「（ま、頑張りなよ、ちび狸）」

side out

第三百二十九話 ふ、これは始まりですよ？（後書き）

と、言うことで次回から新章に入ります！

と、言うかStS編になります。それではバイー



S t S 第一話 機動六課にいつてみよう(前書き)

新章、はじまります

## StS 第一話 機動六課についてみよう

あの火災からさらに時が経つこと……四年。俺らLOSは幾度とない事件の活躍及び成果により、確実に名を上げていった。そしてとあるある日、俺は呼び出された。

「LOSより召喚されました、LOS隊長、キイチ・スターリヴァーです……それでどうしましたか、お三方」

俺の目の前にいるのは伝説の三提督だ、今日はなぜかお呼び出しがかかったので俺はすぐに来たのだが

「ええ、座ってください。それにしてもまたもや階級が上がったようね、私達を知るあの頃から随分と経つものね。ああ、年のようね私も」

「ミゼットのばあさん……その言い方がすでに年寄りだ……で、なんのようだ？裏か」

俺はそう聞くが、彼女らは首を横に振り、そしてこう言った

「あなたには彼女達のサポートをしてもらいます。これは我々の命令です、LOSはその本部を、試験運用予定の機動六課に移し、そして任務を受けること。これが今回の命令です、それに部隊長は彼女ですからあなたと友人でもありますし。それにすでに手続きは済ませておりますから」

「なるほど、それと俺がこの部隊に入るのは地上本部への牽制か。まったくあのレジアスのおっさんと話せばいいのに、あのおっさん。」

酒入るとただの親バカだぞ」

「あなたは一体レジアス中将とどうやってそんな場所を……まあいいです、これでああなたの呼び出した理由は終わりですので」

「了解した、こちらにも準備があるから。日にち的にはたぶん少し設立よりも遅れると思うぞ」

「それも承知しております。あなたが最近非常に忙しい事も、あなたのお父様達の頃よりも数倍」

そして俺はその部屋から出て行った、そして俺はすぐにジンに連絡を告げる。

Side はやて

私の初めての部隊、それはこの機動六課。設立が終わったのだが、かしまだメンバーは足りていない、あの伝説の三提督の推薦により我々にはサポートがつくと聞いていた、ちなみにどこの部隊かは知らない、クロノ君にも聞いてみたが知らないそうだ。そして今日ある一報でその部隊が来る言うことで私ら機動六課は全員ロビーに集めた。

「なあはやて、なにも聞いていないのか？」

「そうや、ヴィータ。それにしても到着時刻がここまではつきり書いてあるとは」

「まさか、地上からとかじゃないよね？」

「それは……あんまし考えたくないな〜フェイト」

そしてロビーのドアが開いた、そして来たのは黒に制服の人たち。けどこの制服は誰もがこの管理局員ならびに地上本部ならば知らないものはない、黒の制服に金の刺繍。裏の首元にはコットンがついている。そして胸に光るバッチ。人数は三人にして、先頭には白髪だが私らよりも少し上ぐらいの男性、そして後ろにつづくようにポニーテール、ツインテールとスバルぐらいの子たち、しかも二人の顔がそっくりなためたぶん双子あるう。そしてポニーテールの子の方には鳥が肩にとまっていた。そして私の目の前に来て、こう告げた

「本日より、ここ機動六課に配属となりました…… LOS です」

そして私ら隊長陣はあっけに取られ、そして周り

「え、LOS ってあの LOS ー!!」

「隊長のほかはトップシークレットで、なんでも一人で世界が一つ救えるほどの力がある、あの!？」

「唯一、指揮権を絶対とした組織」

「……伝説の部隊」

そして私はすぐに戻り、挨拶をする。

「初めまして、私がこの部隊長となっております。八神はやてです。えっと」

「ああ、申し訳ありません。まだ隊長は緊急任務に赴いてしまっているのです」

「あ、そうですね。わかりました。それではこちらは先に隊長陣の紹介をさせてもらいます。まずは機動六課は三部隊に分かれております。まずスターズの隊長、高町なのは一等空尉。そして副隊長のヴィータ三等空尉」

「よろしく、おねがします」

「よろしく」

そしてなのはちゃんとヴィータは一礼し

「それでは次はライトニングの隊長、フェイト・ハラOWN執務官、副隊長のシグナム二等空尉です。そしてこれら二つが実行部隊で、情報処理などのデスクワークが主であるロングアーチの隊長、私八神はやてとそして私の補佐のラインフォースです」

「よろしく」

「紹介をありがとうございます。それでは先にこちらの紹介も、隊長はみなさんの事を知っていますしね。それでは私から」

そして彼は全員を見るように見て

「LOS副隊長のジン＝ヒイラギです。階級は一等空佐、ですが我らの隊長は階級を気にしない方なので私の階級も飾りと思って欲しい。これより同じ仲間として気軽に話しかけてもらえるをありがとう」

そして彼は引き隣のポニーテールの子にかわった。

「どの顔して気軽なのよ……え、えつと初めまして、LOS隊員のエリス・スターリヴァーです。階級は二等空佐ですが、さっきのこの堅物と同じく気にしないでください、それと「ぴよ?」「この子は私のペットのフォルテなので両者共にお問い合わせします」

そして礼をするこの子やが、すぐ変わる

「え、ええと「アリス、もっとリラックス」は、はひ！LOSで通信担当をしています、アリス・スターリヴァーです、名前で分かる人もいると思いますが、お姉ちゃんとは双子なので、よろしくお願ひします。ちなみに顔もそっくりつてよく言われるので髪形で判断してもらえると助かります…えつとあとあと「階級」あ、そうだ。ありがとうおねえちゃん、階級は二等陸佐です。よろしくお願ひします」

そして彼らはそういつとそのまま普通に立っているが

「……申し訳ない隊長がまだなので。隊長からも隊長陣の紹介はされてもよいといわれているのですが」

「あはは、さすがやね。そこら辺は」

そう、このLOSの隊長にして若き切り札。それは私ら隊長の幼馴染にして好きな人、それが

「すみません、遅れました!」

六課のロビーをダッシュで入ってくるのは彼やった

side out

俺は急いでここまで来た、そう映像ではよく見ていたここ機動六課だ。バイクで急いできたのだがさすがに遅刻であろう。そしてすぐに入ると本当にアニメ通り全員が居てそして隊長陣が前、フォアードがその塊の前。そして違うのは俺の部隊LOSが前の真ん中にあることぐらいだ。そして俺が入ると全員の注目を浴びた

「あれが？」

「そうだよ、確か一回だけ私も見たことあるよ」

などまあ、いつもの感じだ。そして

「ジン、どこまで言っている？」

「丁度、我々の紹介が終わりました。ちなみにこちらの隊長陣も終わっています」

「本当にギリギリだったんだな。それじゃあ改めて……LOS隊長、キイチ・スターリヴァーだ。一応、こいつらの兄でもあるんで。よろしく」

「兄さん、もう少しちゃんとして階級とか……さ」

「堅苦しいのは嫌いなんだけどね、エリス。まあいいや、えっと階級は少将だ、以上」

「え、ええつと……そういうわけでLOSが私らと同じ……機動六課に来ました……ほな、解散」

そして全員が解散となったが、まあ奇妙な目で見られるだろうな、

これでも有名なだし。そして俺の周りにくるのは隊長陣だ。



S t S 第一話 機動六課についてみよう(後書き)

てな、わけでこれから本格的にS t S 編に入ります。よろしく願  
いします

S t S 第二話 再会はいつもこんなのだ (前書き)

休み明けナノでガンバリマシタ！

## S t S 第二話。再会はいつもこんなのだ

そして俺は完全に囲まれた。

「久しぶりだな、お前」「キイチ（君）！！」「なっ！お前から急に抱きつくな！！」

そして、なのはとフェイトに抱きつかれるし、はやては遠巻きの方から睨んでくるし……なんとか落ち着かせること数分。最初はなのはだった

「キイチ君、本当に久しぶりだったんだもん。会えても数ヶ月に一回だし。それに前なんて一年も会えていなかったこともあったんだよ〜」

「まあお互い忙しい身だしな。それに若きエースオブエースの高町教官だもんな」

「もうからかわないでよ／＼／＼」

「けど、それならキイチの名前だって凄く有名だと思うよ。それと遅いだろうけど執務官就任おめでとう」

そういうのはフェイトだ。

「あはは、そうかい？それにしても俺が執務官の試験受けていた事を知っていたのか？」

「うんクロノからちよくちよく。それに一応、キイチはエリオとキ

ヤロの事でお世話にもなっているし。」

「あの二人か。そうだ、なのは俺らにフォワード連中を紹介してくれ。こっちも改めて紹介するから。おい、ジン、エリス、アリスこっちこい」

そして全員を並べた、まあさっきのように礼儀正しいわけでもないのだが。しかし前にいるフォワード連中は完全に緊張していた。

「緊張しすぎだよ……エリオもキャラも知っているでしょう?」

「え、なんでフェイトちゃん、知っているって」

「リンデイさんを後見人として推薦したのが俺なんだよ、本当はプレシアさんなんだけど、その時ちよいとあつてな。まあ形上な、だからある意味顔は知っているんだよなフェイト?」

「あ、うんそうだね。それじゃあ、まずはエリオからいってみようか」

そして来るのは小さいながらも戦士の感じをした子。俺も写真で見ただけだがプロジェクトFの遺産。

「初めまして！エリオ・モンディアルです。スターリヴァー隊長のことはよく聞いています。それにフェイトさんからも「ちょ、エリオ！／／／」それに憧れですから、僕の」

そう言うと俺は手をだして

「硬いのは無しの方がいい。俺的にな、よろしくなエリオ、俺はキ

イチでいい。そのほうが楽だな。」

「はい、よろしく願いしますキイチさん」

そしてお互いに握手した。そして次はピンクの髪の子。この子もフエイトが保護者をしている子

「え、えっと初めましてキャロ・ル・ルシエです。それとこれはフリードリヒです」

「ふむ、使役竜か。うちにも竜ではなく鳥がいるんだかね、それはおいおいだ。よろしくキャロ。俺はキイチさんとかでお願いできるかな？」

「はい！」

そして握手をした。

「これが私たちライトニング部隊だ。テストロツサが隊長で私が副隊長だ。それと挨拶が遅れたが久しぶりだなキイチ。随分と背も伸びて……かつこよくもなつたな／＼／＼／＼」

「おおシグナム久しぶり。それで最後のほうが聴こえなかったが」

「気にするな！」

そして次に小さい教官が出てきた

「よう、キイチ」

「ああ、久しぶりだなヴィータ。“あの時”からの約束は守っているようだしな」

「ふん、当たり前だ。それじゃあ今度はこっちのフォワードもいくぞ」

そして前に出てくるのは、この二人

「は、初めまして！ティアナ・ランスターです。」

「お久しぶりです、キイチさん。スバル・ナカジマです！」

「え、スバル！？久しぶりってどういうことよ？」

「え、テイ、ティアどうしたの、そんなに興奮して？」

「分かってないのここにいるこのひと達のすごさを。いい？LOSS  
って言えば唯一無二の絶対組織でしかもロストログアの破壊を申請  
せずに後処理として処分できるほどの部隊よ。それは今日の前にあ  
るなんて」

「アハハ、そう言ってくれるのはうれしいがこれからは同じ部隊だ、  
よろしく頼むぞティアナ・ランスター君」

「は、はい！お会いできて光栄です！！」

「スバルは、もう少し緊張しろよ。一応上官なんだから俺。今度ギ  
ンガとゲンヤさんでも言つて「わあ、ごめんなさいキイチさん、だ  
からギン姉だけは」わかればいいさ、お前もよろしくな」

そして二人ともに握手をした。そして

「スバルとも知り合いだっただねキイチ君」

「ああ、ゲンヤさんとの部隊とよく会っていたからな。それじゃあ今度はこっちに行くか。まずは俺の右腕のジン〓ヒイラギだ、硬そうに見えるが実際硬い男だから気にするな」

「よろしく」

「それじゃあ、次な。次はこいつらだ、俺の義妹たちだ。ちよつと訳ありでな俺の母さん達が保護者になってそれで俺がアニなんだ。」

「よろしくです!!」

「うんじゃあ、それじゃあ質問とかあるか、お前ら？給料以外なら答えてやるぞ」

と、俺の言葉にフォワード連中が手を挙げたのではなくのはが挙げたのであった

「はい、ならお願いがあります、キイチ君」

「うん、なんだ？」

「この子たちと試合をしてほしいんだけど」

「「「「え!?!」」」」

その言葉に驚くフォワード。そして

「ま、まってなのは、さすがにそれはまだ……」

「いいじゃねえか、フェイト。それにこいつらにも教えておきたいしな、上の存在を」

「グイータまで、シグナムもなんとか」

「高町、それが終わった場合私も戦っているのか？」

「そっちの事を先に聞かないの？」

「隊長がするのですか、私でも十分だと「ジン」…申し訳ありません出過ぎた真似を」

「まったく、それじゃあすぐにでもやるか？俺は全然いいぞ、それにキャラの場合は俺じゃあなく、エリスの方がいいだろう。同じ使役の戦闘スタイルだしな。エリスもいいなそれで。まあ暇ならばだが」

「いいよ、兄さん。それじゃあキャラちゃん改めて、エリス・スターリヴァーです。こっちはフォルテね、フォルテ挨拶」

「ピョー！」

「あ、はいこっちはフリードリヒです」

「キュル！」

そしてあつちはあつちで交流をしているようで、そして俺はそのまま



まトレーニングの舞台に足を向けた。

そしてキイチとその副官ジンがさったあとでは

「あはは、お兄ちゃん、適當すぎるよ……え、えっと改めてアリス・スターリヴァーです。基本私は戦闘ではなく通信なのでロングアーチに居ると思いますので」

「ああ、それは丁寧に。私はシグナムだ、ロングアーチなら主はやってやリインフォースにも挨拶しに行ったほうがいいだろう。今、ちようどグリフィスと会話しているから行って来るといい」

「は、はいそれでは！」

そしてかけていく、アリス

「あ、あのうシグナム副隊長、質問が」

「どうしたエリオ」

「あのう、キイチさんってどれ位強いんですか？」

「そうだな、九歳の時我々ヴォルケリッターを一人で相手して圧勝した奴だよ」

そしてその言葉に、フォアードが震え上がったのは言うまでもなかった。

S t S 第二話。再会はいつもこんなのだ（後書き）

と、言うわけで久しぶりの戦闘模写となりそうです……大丈夫かな？

StS 第三話。 模擬戦は慎ましく

Side アリス

私はそしてシグナムさんの勧めでそのまま八神部隊長の所へ向かった。そしてちょうど八神さんと、ほかに三人ほど話しているところに私は入った。

「そうや、そんな感じで…あれ？あなたは確か、アリスさん？」

「あ、は、はい。初めまして八神部隊長、改めてアリス・スターリヴァーです」

「これはご丁寧になんか返して、私はこの機動六課の部隊長、それとロンググーチの部隊長でもあるんよ。それと、私の補佐がこのリインフォース」

「よろしく」

そして八神部隊長の隣にいる白い髪の綺麗な女性が一礼し、私も礼をした。

「よろしくです、アリスさん……私ははやてちゃんのデバイスにして、お姉さまの妹ですうゝ名前はリインフォースツヴァイ。なのでツヴァイとかリインって呼んでください」

そういうのは、ユニゾンデバイスであろう、彼女。

「よろしくね、リインちゃん」

「それで、どうしたの?」

「あ、あの私の担当なのですが、私LOSでは通信とか補助が担当なので……そのロングアーチに配属しようかと」

「なる。キイチ君の部隊の子やから、安心できるけど。それじゃあこっちに案内しようかな、リインフォース、リイン、行くで」

「はい(ですう〜)」「」

そして私は、そのまま機動六課の中に入っていった。

S i d e o u t

S i d e エリス

兄さんのお願いで、私はそのままキャロを連れてまずはトレーニン  
グルームを借りた。しかしさすがは機動六課、今までとは違い綺麗  
な部署だ。

「それじゃあ。まずはお互いにセットアップしましょうか?」

「は、はい。セットアップ!」

そしてキャロは、ピンクの帽子を被り、セットアップを完了した。  
そして見てわかるように

「なるほど、キャロちゃんのデバイスもブーストタイプのデバイス  
なのね。私と一緒に、兄さんこれも分かって私に任せたのかな?な

「やはり兄さんらしいな……セツトアップとしますか、行くよセレナード！」

「OK、レディ」

そして私もセツトアップをする。ちなみに私のバリアジャケットは白を強調としたなんと言うか、兄さんのサンモードにちょっと似せた感じで出来ている。

「それじゃあ、まずは……あなたがなんでそんなに、自分の竜を好きでいるのに怖がっているのか、教えてもらおうかしら？」

「え？」

そして私は弟子が出来たように、そんな気持ちでキャロちゃんを見つめた。

Side out

なのはのお願いで、俺はそのまま先にあのシュミレートされた廃墟に向かっている。隣にいるのは現在、盛大に呆れているジンだ

「そう怒るなジン。いいだろう、こういうのも」

「い、いえ隊長に文句があるわけではなく隊長が相手するほどの者達でしょうか？私から見ても、彼女……高町教官に任せておいても大丈夫ではないでしょうか……一度だけですが彼女の教官ぶりも見ていますが中々のものでしたし。それにここにはあの烈火の将もいるのですぞ」

「ああ、そう思えばお前はシグナムと一戦していたな……一昔に。まあボコボコに」

「う、お忘れください隊長」

「なに、アリスはたぶん今頃自分のポディションを確認しているだろうし。それにエリスは間違いなくあのキャロの問題点を指摘するだろうからな……兄としても少しは働かないと」

「……アリス殿にすべての書類仕事を任せている隊長が言うことでは「ジ・ン」……申し訳ありません」

そして俺は廃墟の中に、そしてジンはなのは達を待つように待機していた。

Side out

Side フェイト

私達が行くと、そこにはさっきキイチ君の隣にいた、ジンさんだけがその場に居た。

「隊長はすでに廃墟にいますので」

「はい、それじゃあ。スバル・ティアナ・エリオ、準備しだい、いつてらっしゅい」

「「「はい!」「」」

そしてフォアードの皆はそのまま廃墟に向かうそして私たちはそれ

をモニターで確認していた。

「久しぶりだなヒイラギ。随分と強くなったらしいな」

「……お久しぶりです、シグナム副隊長殿」

「あ、あれ？シグナムは顔見知りなの？」

「ああ、テストロッサ。彼は私と同じで古代ベルガ式の使いでな、キイチと同じで私に魔力無しならば勝ってしまうような力の持ち主だ。」

シグナムの実力で魔力無しなら彼は勝てる。それは簡単に言うこと非常に強いと言うことだろう。

「あ、あのう、質問なんですけど」

その時、シャーリーが聞いてきた。

「どうかしたの、シャーリー？」

「はい、フェイトさん。そ、そのスターリヴァーさんなんですけど

……魔力反応が非常に薄いのですが……これは一体？」

「え、それってどういうこと？」

そしてそこにジンさんが説明してくれた

「そこは私が説明しましょう。高町教官、テストロッサ執務官、八神調査官などはランクが高いのでリミッターをつけてらっしゃいま

すよね」

「あ、う、うん」

なのはがそう答える

「我々、LOSの場合は少数と言うことでリミッターが存在しないのですが……我々、とくに隊長の場合は日常生活において支障がきたす場合がありますので、我らは自分にトリガーあるのです、私の場合は刀を抜かなければ……エリス殿は髪飾りを外すと、アリス殿はありません、彼女は非戦闘員ですので……そして隊長は」

「……キイチ（君）は？」

「自身の術式を解放するですね。見ていれば分かると思います」  
そして私たちは、画面にめを向けた。

Side out

俺が待つことすぐに、三人が来た。全員まだちゃんとしたバリアジヤケットが無いので訓練生のままの格好だ。そして

「それじゃあ、まずは一人ずつ相手してみようか……まずはエリオ、次にスバル、最後にティアナだ。いいな。ちなみに一人を相手するときは、今なのは達のいる所で待機だ。いいな」

「……はい！！！！」

そして指示通り、スバルとティアナは戻っていき、いるのは俺とエ



リオだけだ。エリオはすでに槍をもって俺を見ている。

「それじゃあ、エリオ。こい」

俺はそういいながら、構えた

「え、で、ですけどバリアジャケットとか……デバイスは？」

「ふん、居るかどうかをまずは決める……こい！」

そして俺はエリオとの勝負が始まった。

S t S 第四話 約束は、守れ主人公！！（前書き）

と、言うわけで始まります

## StS 第四話 約束は、守れ主人公！！

Side フェイト

「嘘……」

なのはがそう言いながらずっと画面を見ている、それはシャーリーも一緒だ。もちろんフォワードの子達など口を開けてしまっている、シグナムはまるで早く対戦がしたような目で。そしてヒイラギさんは、まるで何を当たり前の事を、のように全員を見ていた。そう、それはエリオの攻撃がまったく当たらず、そしてキイチがまったく動いてない、そんな絵だ。

Side out

Side エリオ

なにが起きているのだろうか？現在、僕の攻撃がすべてかわされている。それもなにもかもだ。ストラーダでの槍の攻撃から魔弾の攻撃、すべてが、避けられている。しかもキイチさんはまるで動いていない

「はあ、はあ、はあ」

「どうした、エリオ。まだ、お前は出来るだろう？」

「は、はい！」

そして構えなおす。そして右から左にふるが、なぜか避けられる。

しかも完全にあたるはずのこの間合いで、まるで雲を攻撃しているとようだった。

Side out

Side フェイト

「これは一体？フェイトさん、どういうことなんですか？エリオ君の攻撃が一回も当たっていないなんて」

シャーリーは画面の操作をしながら聞いてくる、なのははすでに何かを分かっただらしくそれをじっと見ていた。

「軸……か」

シグナムがそういう

「軸？」

私は聞きなおした、そしてシグナムはこう言った

「注目するのはキイチの足元だ。よく見る」

そして私らは注目する、そしてエリオの攻撃に対処しているキイチの足元をみるとキイチは半歩以外動いていないのだ。片足を軸にして攻撃をよけて、またもとの位置へ。完全に当たる射程ライズはそのまま飛んで、そのまま同じ場所に着地する。

「う、うそ」



「く、く！」

「ふむ、無駄だ。それともう一つ。さっきの突撃の攻撃は見事だが……半分やけくその感じはよくないぞ」

「あ……は、はい」

そしてエリオは武器を納める。

「まあ本当は避けているだけでただの消耗戦に持ち込む気だったのだがな。意外にさっきの攻撃が早くてな。それじゃあ、もう一度構えろ……今度は俺も武器を使うから」

「はい？」

そして俺はエリオから離れると、すぐに自分の後ろから空間を出して一本の槍を取る、その名はゲイボルグ。

「キイチさん、それはデバイス？」

「いや、俺のスキルだと思ってくれ。それじゃあいくぞ、エリオ」

「はい」

そして今度は攻防が始まった、俺はゲイボルグとエリオのストラダが交差する。俺は払いのように相手と距離をとる、しかし相手はそれを見越してのバックステップ、そしてそのままの突撃。しかし俺はそれを許さず、突きの動きに変わる

S i d e    フェイト

さっきのキイチの避ける戦闘からいっぺんして、今度はちゃんとした攻防となっているように見えるが

「フェイトちゃん、これ全然攻防とかじゃないからね……凄い、ここまで一気に上げてきているなんて」

なのはがそういう。

「確かにな、これではエリオもつらそうだな」

シグナムがそういう、しかしエリオもキイチも未だに打ち合っているが、キイチが払いをした瞬間、エリオが突進のモーションにはいった。

「あ、エリオ今だ！」

スバルがそう叫ぶがしかし

「まずい」

シグナムがそういう、そしてヒイラギさんとはいうと

「終わりのようですね」

そして画面に目を戻すと次の瞬間、キイチはその払いを終えてそのまま突きの形に入った。そしてエリオがそのまま突進。

「ふむ、やはり隊長はそういう事を考えていたのですか……まったく

くお人よしですね」

ヒイラギさんがそう言うとそのまま機動六課の方に帰ってしまった、映像は、キイチの槍がエリオの首元に触れているか触れていないかギリギリの感じで止まっていて、そして試合が終わった。

Side out

エリオとの勝負が終わり、俺は軽い体操をした。そして通信が入った

『貴一君！もつとやさしくしてよ！あれじゃあ、私の訓練よりもきついじゃない!?!』

「なのは、そういうがエリオは結構いいセンスがあつたからちよつとだな……その……すまん」

『もう、分かればいいけど。それじゃあ次はスバルだね、スバルはもうそつちに向かっているから。それとフェイトちゃんか一言あるそつです』

俺は一瞬ドキツとした。まあ一応保護者、というかお母さんなので俺が怒られるかと思いきや

『キイチ、エリオは二人で育て「フェイトちゃああん！それを言うために！」もうなのは、邪魔しないで!』

俺はその通信をすぐに切った

『あ、キイチ“プツ”』



「はあ、あいつらはよくわからん。それに次はスバルか」

スバルは、まあクイントさんの事もあってか俺はナカジマ家に名前を覚えられているし、ギンガは俺のようになりたいなどと言っていたのが昔の事だった。ちなみに俺を聞いたゲンヤさんが「俺じゃないのかよ」と、俺を睨んでいたのは別の話だ。と、言うことで俺はスバル、そしてギンガの秘密を知っている数少ない人の一人である、まあこの問題は俺の場合は教えてもらっただけどねギンガに。

「ふう、そう思えば、キイチさんにこうやって魔法の戦闘をして貰うのは初めてのよような気がする」

そして目の間に居るのはまだちゃんとしたバリアジャケットでない、訓練用の服装のスバルが居た。

「そうかな？そう思えばさっき、資料で見たがお前、ランクB受かったらしいな」

「あはは、見てくれたんだありがとうキイチさん」

「それじゃあ、まあ稽古つてことで行くぞ、スバル。お前はどんな手を使ってもいい、そして俺に一発確実に決めてみる！」

そしてスバル相手の戦闘が始まった。

S t S 第四話 約束は、守れ主人公！！（後書き）

デバイスすら、使わないチート。久しぶりに書きました！

StS第五話、いめんね、強くなってっさー！(前書き)

ガンダムの再放送をするらしい。うむ、いいことだ

StS第五話。いじめんね、強くってっさー！

俺はさっきの武器をしまい、そして目の前に居るスバルを見る。俺はさっきと同じように構え、そしてスバルは完全に構えてそしてはじまった。

「はぁぁー！」

スバルの攻撃は近距離戦、しかも肉弾戦だ。だから俺はそれに合わせるように相手の拳を受け流しながらそしてスバルの顔を見る。

「どうしたスバル？」

「く、行くよ相棒！」

そして今度はウィングロードを使い、上に上がり出す。これを見て思うのだが空を飛んでいる魔導師よりもこの先天の方が使い勝手が良さそうなのはきのせいだろうか。と考えていると俺の周りから魔弾、そして死角から拳が飛んできた。俺はそれを見ないでそのままかわし、そしてスバルの腕をとり、そのまま背負い投げを決めた。

「あれ？」

「甘いんだよ、スバル。それじゃあそろそろこっちも行くかな？」

そして俺はあの空間からあれを出した、そうカブトムシの形をした、あれだ。

Side フェイト

スバルとの攻防。最初はスバルの攻撃を受け流していただけのキイチだけど、あのスバルの先天性の魔法を行使した辺りからちよつと動きが変わり始めて、そして一撃目の魔弾のかく乱からの死角からの攻撃をなんとも思わずそのまま背負って投げてしまった。その姿を見ているのはは苦い顔をしていた。けど私は思う、キイチが異常なだけだと思う。そしてキイチはスバルを投げた後、またあの空間、今度は

「な、キイチまさかあれを！」

「ちよつと、止めてきた方がいいかなのは？」

「うーん、一応お願いしている身だからそれはちよつと難しいかな？つてライダー！？」

そんなときにエリオがさっきの戦いから休憩して帰ってきた

「どうかしたんですか？そんなに慌てて。あ、キイチさんまたあの空間だ今度はどんなつて？あれ？あれつて虫？」

そして画面ではあの機械を握っているキイチが居た。そして

「あのう、あれつてなんなんですか？」

シャーリーが聞いてきたので私はこう答えた。

「うーん、簡単にいうとクロノですら未だに勝ったことのない……兵器？」

「あのう、さつきから思っていたのですが、もしかしてキイチさんってロストロギアの所持とか認められているんですか？あの空間にしてもそうですが……結構危険ですよね？」

シャーリーは冷や汗をかきながら言ってきた。ちなみに私たち幼馴染グループは……無言であった。そしてそこで声をだしたのが

「隊長はロストロギアを所持する必要などありませんよ……そうです、ね、あえて言うのならあれもちゃんと攻略はありますよ。ただなぜ隊長があそこまで、彼女に、いえこの場合は新人フォワード達に力を入れているのか、不明なだけで」

そして画面が動き出す、いや実際は終わってしまっているのかもしれない。そしてキイチは姿を変えた

side out

「いくぞ、スバル」

俺がそう言つとスバルは構えなおした、そしてそのまま俺は変身した

「変身」

<<HENSHIN>>

そして俺は仮面ライダーに変身した。そしてスバルは一回警戒をするがなにも来ないと踏んで俺に拳を飛ばすために接近してくる、俺はそれをみながら……こう言った

「キャフトオフ」

<<CAFFT・OFF>>

そして俺の装甲は外される。そして出てくるのはスタイリッシュな装甲。

<<CHANGE・BEETLE>>

「行くぞ」

俺はそういうとスバルに攻撃を始めた。最初は普通の肉弾戦、しかしスバルは俺の攻撃をガードするのが精一杯のようだ……やはりまだ四月の終わりのフォワード、劇中よりも弱く見えるのは時間のせいか、それとも俺の力は異常なのか 後者です（作者）

「（く、く、これじゃあ一回も攻撃に回れない。どうすれば。しようがない、これは一回離れて、ヒットアンドアウェイだ）」

俺の攻撃をちよつとくらいながらもそのまま上に逃げるスバル、動きがまるで電童だな。俺はそう思いながら魔弾の攻撃を避けていた。そして拳が飛んできたので俺は教えた、こいつの力を

<<クロックアップ>>

<<クロックオーバー>>

そして俺はスバルの後ろに回避する。そして俺はそのままにもせずスバルを見る。当のスバルは対象が消えたことに驚き回りを見て自分の後ろにいることを驚愕する

「スバル、いいか？教えてやるいつでも自分よりも弱い敵ばかりでは無い。お前らは今確かチームワークを鍛えているのは知っている、だからこそ、1+1=2で無い事を学べ。そしていつか全員でこの俺に一撃で入れてみる、行くぞ」

「はあっ!!」

スバルは俺がなにかすると気付きすぐにこっちに一直線にウィングロードを伸ばしてくるが、しかし

<<クロツクアップ>>

俺はそれをして、そして無常な攻撃だ、それは

<<1、2、3……>>

「ライダーキック」

<<ライダーキック>>

そして俺はカブトゼクターを引き戻し、そしてスバルを蹴った。そして結果は

「なのは、すまないがスバルに早めに救護班かな？まあ大丈夫だろうが、手加減したし」

俺の目の前には廃墟とかしたビルの壁にスバルが埋まっていた。そして通信が入る、こんどは完全に怒られる事を覚悟した、理由は

『キイチ君！なに、本気になっているの！！仮面ライダーを使うな



んて思っていないかったよ！しかもライダーキック決めているし。だめって言っていたでしょう！！もう、もう少し私をお願いした意味をわかって欲しいんだけど」

「一応それを理解してのエリオにもスバルにも俺の本気で当たっているのだが？」

『……それが問題なんだよキイチ君。それとさっきからシグナムが疼いちゃっているんだけどどうするのキイチ君』

「ジンにでも頼んでくれ」

『隊長、それはどうかなものかと』

『あ、あのうキイチさん』

そしてそこに出てきたのはエリオだった

「どうかしたのかエリオ」

『それ、すごくかっこいいです！』

と、まあ確かに今の姿ってあ、そうか仮面ライダーはこういう子供受けがいいのを忘れていた。

「そうか、後でこれでも戦ってみるか」

と、言うところエリオは少し考えて頷いた。そしてすぐになのはに変わり

『だから、だめでしょ！このままじゃあ今日の訓練も出来なくなる

「！！もうキイチ君はこう少し考えてよ。って、あれエリスさん、どうしてここにつてえ、兄さん？ああ、キイチ君ね、うんわかっついていよ。ちよつど私は今“お話中”だったし」

そして変わって出てくるのはエリスだ

「おお、エリス。どうかしたのか？」

『ええ、兄さん。一体どういふことか教えて欲しいのだけど？なんでナカジマさんの娘さんの一人をボコボコにしているのかしら？』

「訓練だアホ。それよりもお前の方はどうだった、キャラ口は？」

『色々大変だったわよ。今は寝ているわ、私も結構気合入れてやつちやったし。それに彼女、暴走したわよ』

「……そうか」

『もちろん、完膚なきまでに氷漬けにしたけど、ね、フォルテ』

『……』

「……そうか、後で行かないとな、医務室に。スバルのこともあるし」

『それで、こっちはそうなっちゃったからこっちにきたの。そしてら兄さんが虐めをしているからどうかしたのかと思つて』

「虐めてないぞ俺は、それにあと一人の訓練だ。それに……まあいいか、これが終わつたら今度は隊長陣と、ちよつとお話だ、それじ

「やあ切るぞ」

『は、はい、それじゃあ私も観客としてみているから』

そして通信を切る。そしてそれからすぐに現れたのはティアナだった。

「それじゃあよろしく、ティアナ・ランスター君？」

「は、はい！」

そして新人連中最後との俺の対戦が始まった。

S t S 第五話。いじめんね、強くなってっさー！(後書き)

久しぶりのベルトでした。と、言うかオーズとフォーゼをどうしたものか、悩んでいます。どうも作者でした。

それでは次回会いましょう

S t S 第六話 保健室の先生が袖ねえのわけが無い（前書き）

寒いですが、そして今回はちょっと長いですが

## S t S 第六話 保健室の先生が袖ねえのわけが無い

そして最後の訓練が始まった。俺は今まで全員の問題点を洗っているのだが、スバルはあの無頓着の突進な所。エリオはもう少し魔法を使わないでの技法。そして一番の問題であろう彼女。

「く、シュート!」

さっきまではずっと撃ってくる魔弾を、俺の手で弾いていた。やはりあの三人の中で一番魔法をうまく使っているように見えるがしかし

「この!」

少し焦っているように見える。俺はそれを見越して、ちよいと面白い事してみた。俺は相手の魔弾を取り、そして投げ返した

「え!?!」

「どうした、ランスター君?」

「私の魔弾をキャッチして、そして投げ返したなんて……ありえない。く、ならば」

そしてティアナは後方に下がる、そして魔弾をさらに連打しながら俺に接近してくる。しかし俺はそのまま待機、そして後ろを向いて、そして魔弾を造り撃ち出した

「ばぁん」

そしてその衝撃で出てきたのはティアナだった。その眼は驚愕の眼でしかなかった、それもそうだろう自分の出した幻術に確かに引っかけた俺が、まさかその幻術を見越していたとは思っていなかったようだ。そして俺はそのまま吹き飛んだティアナの着地点に一瞬で行き、そして相手が体制を整える前に

「お仕舞いだね、ランスター君」

「……あ……はい」

そして試合は終わった、俺はそのままティアナを連れて行き、そしてエリオと一緒に医務室にいるように指示を出した。そして俺に待っていたのは冷たい目だけだった。

「キイチ、さすがに俺はやりすぎだと思っぞ」

シグナムがやれやれとそんな感じで俺を見ている、そしてなのはは完全に立腹である

「キイチ君！あれは、どういうことなのかはつきりと説明を貰いましょうか？その前にO H A N A S H I、久しぶりにスル？スルヨネ？フェイトちゃんも一緒にドウ？」

「な、なのはちょっと怖いよ……けどなのはの言っとおりだよ、あんなに苛めなくても」

「苛めていないって言うているだろう、それにこれで大体分かったしな」

「なにがですか？」

シャリオがそんな事を聞きながらさっきの戦闘データを収集していた。

「フォワードたちの弱いところかな？ 実際、俺はこの部隊に来た理由なんて地上本部の牽制とそれと新人の面倒だもんな。それじゃあ、ここからは真面目な話なのは。あとで話しくらいならいくらでも聞いてやる、だから今は教官モードな」

「え、う、うんわかった」

「それじゃあ、まずエリオについてだが、もう少し筋力トレーニング、ならびに眼をならせることだな。まあそれぐらいだな、あとは魔力変換資質の電気は……フェイトがうまく活用する方法をおしえてやれ。」

俺の言葉に全員が驚愕している、なぜ？

「なんだキイチ、お前ただ苛めていたわけじゃないんだな」

「グイータ、お前は失礼すぎる………続き行くぞ、スバルはまだ指示を聞いて動かした方がいいだろうが、もつと判断力をつけることとそれとあの突進をどうにかしないと。あとは……ランスター君は、どっちかって言うと、ここだな」

そして俺は胸を指した

「え、えつとそれは？」

「心だよなのは……まあ、そこら辺はお前らさんに任せるさ、それ



にチームプレーの訓練は基本お前が作るんだろう?」

「あ、うん。そうだよ」

「それじゃあ、それぐらいさ。俺が言えることはな、それじゃあちよつと医務室に行つて来る。さすがに俺もやりすぎたしな」

そして俺は歩き出した。

Side フェイト

キイチが言った事をなのは考え込んでいた。しかしヴィータは

「キイチって相変わらずなんでも出来るんだな……たった一回での模擬戦であれだけ、どんだけだよ」

「ふむ、確かにそうだな。しかし私との試合を忘れてしまっているな……ヒイラギ、どうだ一曲でも……キイチには後で一緒にご飯でも「シグナム」……テストロッサ、そう睨むな、いいだろうそれくらい／＼／＼」

「なら、私もですからね」

「ああ、フェイトちゃんずるい!」

そしてこの会話に入っていない、メンバーは

「キイチさんってもしかして天然なんですか?」

「うむ……私が思うには隊長は非常に鈍感だと思つが」

「右に同じくだな。はあくこうも月日がたつのにこいつらも、キイチも変わらないな……まあ変わるわけでもないか」

「それで私はいつ勝負に？」

「だから、キイチがほッポリ出すから、これは正当で」

「なにが正当なのよシグナム！ただ単にキイチと食事がしたいだけでしょ！」

「そうだよ、そうだよ。私だって久しぶりにお話したいもん……私の部屋で、ふたりつきりで／＼／＼」

「それは絶対だめ」

「……いつだろうなヒイラギ」

そんな感じ。

Side out

俺はそして医務室に入る、キャロはちよつと怪我をしているのか包帯を腕に巻いていた。そしてスバルは軽い打撲のようでシップが貼ってあった。

「うーい、新人諸君、ボコボコにしてしまった張本人のお通りだぞ」

「キイチ君、普通そうというのは控えるのが普通よ、それとお久しぶりねキイチ君」

そして医務室にいるのはシャマルだ。

「ああ、久しぶりだなシャマル。そしてお前らなんで固まっている？」

「あ、いえ、そのどうしたのですかスターリヴァー隊長？」

「硬いな、俺のことはキイチでいいよつただらランスター君…  
…それとどうしてつて、そりゃもちろん、君達を見に来たんだよ」

「私たちを？」

「ああ、もし落ち込んでいるようなら渴をいれよう思ったが。すでに四人で作戦会議かな、その様子だと」

「…ギクっ！」「」

俺と戦った三人はそんな感じだった。そしてキャロは俺の事を凝視していた。

「ああ、それとキャロだったね」

「あ、はい！」

「すまん、うちの妹が随分と強くやっただよつて」

「あ、いえ。私がまだ未熟だから…だからエリスさんは厳しかったのだと思いますし。それに私もフリードリヒもまだ負けていませんから。これからエリスさんやなのは隊長、フェイト隊長に教えて

もらいながら自分でいつかがんばって見ます」

「それは結構だ。それでその作戦会議をしていた三人、ちゃんとキャラも入れてやれよ」

「あ、うんキイチさんが来た直後に作戦会議を始めていて「こら、スバル！」あ、ごめんティア」

「なに、構わんさ。それにしても恨むかと思っていたのだがな？ここまでボコボコにしたのにな」

「と、言ってもキイチさんが私らを思ってたのことぐらい誰でも分かりますよさっきの戦い。だって戦っている途中で普通にアドバイスいれるんですもん」

「スバル……お前はそんなことに耳を傾けていたのか」

俺はそう言つとスバルにアイアンクローを決めていた。

「あうあう！痛い〜」

「あ、あのキイチさん！」

「うん、なんだねランスター君？ちなみに今の呼び方で固定ね、これは命令だよ」

「は、はあ〜。その、今度もまた模擬戦してくれますか？」

「ああ、いいとも。だがまたさっきと同じような事がないようにな」

「はい！今度はもつと作戦を練っていつか、バリアジャケットを着させてみせます」

その時のティアナの顔は笑顔で、まるで新しい目標が出来たようであった。ちなみにエリオはキャラと一緒に談笑していた。

「キャラも大変だったんだね」

「うん、けどエリスさんからキイチさんの方が大変かもね、とか聞いていたから」

「うん、確かに大変って言うか結構がっかりとかもしたんだけどね、けど新しい目標みたいなのが見つかったかな？」

「へえ、私と一緒にだね／＼」

「うん／＼／」

「それにしても、キイチさんって本当に噂どおりだったんですね。局の人からLOSの隊長は化け物のような強さだった」

「あ、それ私も聞いたことある、なんでも管理局の規定では収まらないとか。けど本当に戦ってみて分かりました、私たちもまだまだつてことが」

このスバル・ティアナコンビはそういうがしかし補足のようにシヤマルがこう言った

「と、言ってもキイチ君に本気を出させるなんて、たぶんうちの隊長陣でも無理なんじゃないかしら」

そしてその言葉に、さっきまで話していたキャラたちすら黙り俺を見た。

「「「「え……………」」」」

「シヤマル」

「…………え、えつとキイチ君？」

「空気読め、あほ」

「はっっ！」

そして俺はその場を離れて、今度は食堂に向かった、理由は腹が減った以外になにもないが。

S t S 第六話。保健室の先生が柚ねえのわけが無い（後書き）

なのはのゲームを再度復習しています。

S t S 第七話。狸が動いた!?(前書き)

題名って考えるのって難しいです



StS第七話 狸が動いた!?

そして俺が食堂にいくと居たのは、ロングアーチチーム事、はやて、リイン、リインフォース、そしてアリスだった。

「あ、お兄ちゃん!」

アリスが手をふってきたので俺は振り返しながらはやて達の席に付いた。

「お邪魔するよ」

「どうぞどうぞ、キイチ君なら大歓迎や!それにしても新人連中の特訓はええんか?」

「ああ、大体分かったからな。あ、すまんがアリス、俺にもそのケキくれ」

「はいはい、あ〜ん」

「あ〜ん。それにしてもこの食堂はなんだかアースラみたいだな。もしかしてそれを模範にしたのか?ってどうかしたのかお前ら?」

なぜか、呆然としているはやて、そしてリインフォース

「キイチ、質問するがアリスとは、兄弟なのだよな?」

「あ、ああ言っていないのかアリス?」

「うんうん、ちゃんと説明したよ。私とおねえちゃんはお兄ちゃんとは血は繋がっていないけど兄弟っていつてあるよ」

「だよな、それと血なんて些細なことだから別にそれは言わなくてもいいだろう」

「……関係大有りだよおにいちゃん」

「なんか言ったか、アリス？」

「うんうん、なんでも」

「……マスター」

「分かっているで、リインフォース。またライバルが増えただけや。もうそれは慣れたさすがに。まあそれは追いつきにせなな。他にも隊長陣にも知らせないと」

「それがよろしいかと」

「お姉さまにはやてちゃん、どうかしたのですか？」

「いや、なんでもないぞツヴァイ。それにしてもキイチ、彼女は凄いな。我々が説明しただけですぐに機械を使いこなして見せたぞ」

「いえいえ／＼／＼」

「まあ俺の妹だしな。こいつは俺よりも頭の回転速くてな、まあそれは事件が起きてから見てくれればいいさ。」

「なんやキイチ君、随分と褒められてもうれしそうにないな？」

「ああ、そうか。まあLOSだからかもな」

そして俺は注文した、それはコーラだ。そしてそこに現れたのはジンだ。しかしなぜかジン一人だった。

「あれ、ジンさん？お姉ちゃんや他の皆さんは？」

「ああアリス殿。エリス殿と、そして隊長陣なのですが、ちょっと今問題が発生しているの……私は退散して来た次第でして……隊長、シグナム殿との模擬戦をしてください。そうしないとここがなくなりそうです」

「はあ？つてそう思えばシグナムとは約束していたな。それじゃあこれ飲んだらいくから」

「早めをお願いします。それと自分には緑茶を」

そしてジンは同じテーブルにつく。

「そう思えばヒイラギさんは、古代ベルガ式なんですよね？」

「え、ええそうですけど八神部隊長殿。それがなにか？」

「あ、私の事ははやてでお願いします。年のヒイラギさんの方が上のようですし」

「ああはやてこいつのこの口調は元だから気にしていたらきりが無いぞ、それでジンがベルガ式でどうかしたのか？」

「あ、いやな。それならシグナムの相手とかできるんちゃうかとおもってな」

「…遠慮願いたいのですが……」

「え、どうして？」

「あはは、はやて。ジンは昔シグナムと戦ってボコボコにされてな、それはそれは酷いものだったんだよ」

「隊長、ですからその話は「いいじゃないか……それに今なら……」  
…確かにそうですが」

「なんや、なんや。今の会話じゃまるでうちのシグナムが負けてしまつみたいな感じやなあ」

そのはやての反論に俺は笑顔でこう言った

「ああ、そりやもう盛大に負けるぜシグナムがな。なんせここにいらぬこのジンは俺の本気を出すことの出来る数少ない人間の一人だからな」

「語戯れを。隊長が真剣になればそれこそ一瞬のはずですよ私など」

「そんなにつよいのか、お主は」

「あなたは、確か「リインフォースだ。マスターの補佐を担当していて、そしてキイチに助けてもらったものだ」……そうでしたか」

「まあ、ジンの本気はおいおいだな。それじゃあちよいと久しぶりに俺もリミッター外した勝負してみるか」

そついうと俺はコーラを飲み終えて、そして食堂を出た。

Side はやて

キイチ君が出て行ったあと私はすぐにシャマルに連絡をとった。

「シャマル、今暇か？」

『あれ、はやてちゃんですか？はい、暇ですよ。丁度フォワードの皆も大体回復しましたから』

「あ、そこに新人フォワード諸君もいるんやな、それはちょうどええ。すぐに食堂に連れてくるように言ってくれるか？」

『了解ですけど、どうしたんですか』

「キイチ君の本当の戦いが見えるでつと伝えればくるんとちゃうかな」

『はやてちゃん……りょうかいです！』

そして通信をきり、今度は食堂のモニターで模擬戦の様子を見えるようにした。

「マスター、これは一体？」

「なに、ちょっとした好奇心や。キイチ君がどれだけ強くなってい

るかも見てみたいと思っただけや。昔からキイチ君は強かったけど最近まったくあつていないし。と、言うわけで部隊長として実力をみときたいんや」

「はやてさん」

「なんやアリスさん？」

「あのう……おにいちゃんの実力が見たいんですしたら……ジンさんとおねえちゃんがいないとたぶん見れませんよ？」

そしてそんな事をいうアリスちゃん

「アリスさん、うちのシグナムやて強いんやでだって「ベルガの騎士ですもんね」……なんで知っているや？」

「え、えつと一応全員の魔導師レベルは覚えていきますので。」

「す、すごいですう〜」

「それで、アリスさんどうしてうちのシグナムじゃキイチ君の本気が出せへんのかな？」

「え、えつとそれは」

「……それは」

私ら三人で一緒にハモってしまった。そしてアリスちゃんはもう言  
った

「お兄ちゃんのリミッターを外すことが出来るのは魔導師ランク空戦でSSSオーバーなんです、統計でも。だから今までの事件では一度も本気になったことがないんです」

私はその言葉に驚愕した。キイチ君の実績ならこの管理局に居ればだれでも聞いたことがる、難事件や、それからロストログアの破壊など様々な伝説級な事が言われている、しかしそれが全て本気じゃなかった……

「あの、たぶん見ていればわかると思います。お兄ちゃんは今までずっと自分を追い詰めて鍛錬を今でも続けている人ですから」

side out

俺がさっきの場所に戻ると、そこはカオスだった。なぜか、理由は簡単だ、なのは、フェイト、シグナム三人でほっぺを抓りありもめているからだ

「お前ら何をしているんだ？」

「「「キイチ（君）！！」「」」

「お、キイチなんだ、戻ってきたのか？」

「あ、ヴィータ。ああ、ジンに言われてな」

「兄さん遅いです、もう少しで大変なことになりそうでしたからね」  
エリスがそういうが一体何が大変になったのだろうか？

「き、キイチどうしてここに?」

「あ、ああシグナムすまん、お前との模擬戦をジンに言われて思  
い出してな。すまんすまん、それじゃあさっきと同じくあの廃墟で  
やるか?」

「あ、ああ」

「通わけだ」

「なるほどね……ま、兄さん頑張れ」

「おう」

俺はそう言つとそのまま廃墟のステージに向かった。今度はちゃんと戦つ心構えをしながら。



S t S 第七話 狸が動いた!?(後書き)

さ、次にシグナムが来ましたよ。どんどん進化チートした主人公のお披露目です

ではでは次回、会いましょう

StS第八話 騎士とバグがぶつかり合う(前書き)

逮捕しちゃござ、面白いですー!!

## StS第八話 騎士とバグがぶつかり合う

Side ティアナ

私たちは、シャマルさんの指示で食堂に向かうことになった。そして食堂に言ってみるとそこには大勢の人たちがモニターを見ていた。そして周りの声を聞いてみると

「なんでもLOSの隊長さんがシグナム副隊長と戦うらしいぜ」

「嘘っ！それって凄い戦いになるんじゃない!？」

など、様々だ。私たちはそのままはやて隊長らが座っている席まで手招きされた。

「はいはい、フォワードのみなさんこっちです」

ラインがそう言いながら誘導してくれた。私はラインフォーエス補佐官に聞いた

「あのう、これは一体？」

「あ、ああ実はなマスターの指示でキイチとシグナムの模擬戦をライブ中継することになったのだ。そしたらこうなってしまった。な。お、始まるぞ。お前らはさっき随分ともまれたらしいからな、見ているといい」

確かにさっきの私らの戦いは完全に、キイチさんの胸をかりた感じではしかなかった。だから今度はキイチさんの本気が見れると思いい私は画面を注目した、それは他のみんなも同じようだった。

S i d e o u t

俺が着てからほんの数分でシグナムも到着。

「さて、それじゃあいくかシグナム」

「そうだな、それでは行くとするか」

そして俺は構えた、リミッターを外す構えだ。

「拘束制御術式解放。第三号を限定解除として……ここに宣言する、  
ソル久しぶりの出番だ」

「イエス・マイロード、セットアップ」

そして俺はそのまま、弓兵の姿に変わる。すでに昔のような身長ではないのでピツ足といった感じた。そして俺はいつも通り双剣を構える。相手もバリアジャケットに身を包み俺を見ている、そして合図もなく、それは急に始まった。

S i d e    ティアナ

「嘘」

隣のスバルがそう言いながら画面に喰らいついていた。それもそうだろう、今日の前にいるキイチさんはまるでさっきのとは“次元”違う。

「キイチ君、本当に強くなりすぎやで」

はやて部隊長がそんな事を言っている、現在の戦況は互角のように見える今の戦い。しかしどうしてもキイチさんが負ける可能性がゼロにしか見えないのがなぞだ。

「これがキイチさんの本気なんですか……」

今はまだただたんなる近距離の攻防、しかしそれでも分かるまだなにもお互いに出していない事ぐらい。そして先に動いたのはシグナム副隊長だ。カートリッジを使いさきに大技を決めた、そして起こる爆風。しかしシグナムさんは構えを解かない、警戒をしている今の攻撃が当たっていないと思っっているのだ。それこそが異常、さっきの魔法を見る限りでは確実にあたったはずだ。しかしシグナムさんは合っていた、だって無傷で悠々と立っているキイチさんが爆風から歩いて来ているのだから。

Side out

「シグナム、いきなりの大技かよ。まったくこっちに色々あるんだけどな」

「そう言いながら無傷か。さすがにへこむぞ私でもな」

「それじゃあ俺から行くとしますか、今度はソル」

「ソニックムーブ」

そして俺はシグナムの背後に回る、相手はそれに気付き対処をする、そしてその瞬間に俺は双剣から弓に持ち替えて、そして

「我が骨子は捻れ狂う……螺旋剣？！カロードホルゲ！」

撃ち出した、矢はシグナムに当たる直前で

「ブロークンファントズム」

ソルによって爆破される、シグナムは矢が攻撃の主体だと思い回避行動に入っていたがまさかの爆破に対処しきれずに吹き飛ば、俺はそれに追撃をかけるように

「かわせるかな？」

フルンディング  
「赤原猟犬」

放ち、すかさず双剣に持ち替えて相手に接近。シグナムは俺の撃った矢をレヴァンティンに払い俺に突撃をかける、しかし

「なに！？」

フルンディングの特性である相手を追い続ける魔剣の効果を知らずに俺に突撃、そうなれば俺とフルンディングの挟み撃ち、しかも

「ブロークンファントズム」

又もやの爆破、そしてシグナムはその爆風でこちらにさらに加速して接近、そして

「チェックだ、シグナム」

「く、ソルの状態でこれとは……完敗だキイチ」

そして俺らの模擬戦は終わった。

Side フェイト

私らはさっきと同じところでみていたが、キイチはまるでさっきと動きが違った。正に一瞬で勝負が決まった、シグナムがあつたソニックムーブの反応にちゃんと対処できなかった時点でシグナムの負けは決定していた。

「ほええ、これがLOS隊長さんの実力なんですか、魔力もそうですけど早くてこっちの機械が追いつきませんよ」

シャーリーが嘆きながらそんなことを言っていた、しかし肉眼でこれを確認するのはたぶん、私のように同じソニックムーブが出来る魔導師ぐらいだろう、それにキイチはまるでソニックムーブのモーションが無い。だから錯覚としては消えるのだ、普通ならデバイスなりなにか反応があるがそれが無い。ちなみになのはは

「キイチ君のこれが本懐……けどかつこいい／＼／＼／＼」

こんな感じで、ヴィータは

「……………」

無言だった、これでフォワードのトレーニングがさらに過酷になるのは見えた。そしてエリスさんは

「うわあ、えげつない兄さん。ま、けど普通にあれぐらいならフォルテだけでも十分よね、ねフォルテ？」

「ピュッ!」

なんとも怖い事を言っていた、そしてなんとそこに来客が、それは

「ジン!？」

エリスさんが叫んだ、そうそこにはヒイラギさんが居たのだから

side out

Side はやて

シグナムとの模擬戦は終始、それこそ会場は誰もしゃべらなかつた、いやしゃべれなかつた、理由は簡単。それこそ一瞬で勝負のつく世界だったからや。

「キイチさんってこんなにすごいんですね」

「てかスバル、あの魔法って一体なんなのよ？魔法陣も出ていないし」

「と、いうよりもあのシグナム副隊長がまったく手出しが出来ないのが凄いですよね……普通に考えてあの距離からの射撃を正確性とか。フェイトさんが昔手も足もでなかつたって言っていましたがど本当なんですね」

「ふえ〜」

すでに画面のキイチ君に釘付けや、そして周りからもそれこそさらに尊敬の眼差しが増えている感じや、女の子なんて完全に惚れてし



まっているんとちゃうか？まあそれは私もやけど。しかしさらに画面に動きがあった、それは

「あれ、あれってLOSの副隊長さんじゃない？」

誰がそういう、そうそこにはあのヒイラギさんが居た。そしてキイチ君は笑った、そうまるで新しいおもちゃを手に入れたように。そして画面越しに聞こえる声

『なんだジン、お前も来るか？』

『ええ、どうでしょうか、ここはエリス殿も呼んで二対一でも』

『うわ、最低……だけど面白そうだな、いいぞ相手になってやる、それじゃあ先になのは達は食堂にもどっていてくれ、たぶんそこも危ないから』

そう言う声は聞こえてくる、こっちはライブ中継なのでなのはちやん達の声は聞こえへん、けどあつちまで被害が出るほどの戦闘ってどれぐらいなんやろうか？そしてLOSの対戦が始まるのはこの後五分前だ。

Side out

なのは達は俺の指示に渋々従ってくれた。そして今居るのは俺とジン、そしてエリスにフォルテ

「それじゃあ、いつものようにお前らは俺を倒せ。」

「は（はい）……」

そして俺はこう言う

「拘束制御術式第三号、第二号、第一号を限定解除……目前の完全沈黙を……ソル、解放だ」

「ライトアンドダークネス」

そして俺は黒い鎧に白いマント、そしてバイザーを装備して構えた。

S t S 第八話 騎士とバグがぶつかり合う（後書き）

と、言うことで久しぶりの主人公の本気です。あ、それとリミッタの件については分かる人にはわかるネタですのであしからず。

それでは次回会いましょう！

**S t S 第九話 現状の主人公の大体の本気？（前書き）**

今回は主人公の大体の本気です。

ではどうぞ

## StS第九話 現状の主人公の大体の本気？

Side フェイト

私たちはキイチの指示で先に機動六課の舎にもどることにした、そして食堂ではさっきのライブが流れていた、そして今の映像も。

「な、これは……はやて!？」

「ああ、フェイトちゃんか？今、丁度始まるところやで、シグナムもそんなところにいないでこっちに」

そしてはやてが手招くテーブルにはフォワード達、そしてアリスさんがそこにはいた。

「みんなしてここに？」

「え、ええフェイトさん。僕達もキイチさんの本気を見たかったの  
で」

エリオがそう言う、そしてスバルが

「けど、キイチさんって本当に規格外なんですわ〜お父さんが、キイチが居れば俺は必要ねえとかいっていましたが強ち間違っていないような気が」

「それは違うと思うよ、スバル」

その言葉に反論したのはなのはだ。

「皆勘違いしているよ、キイチ君は確かに強いし、頭もいい。けどそれでも一人なんだよ、一人じゃ限界があるの……昔にキイチ君に言われたんだけどね。だから皆も一人じゃなく、皆で何かをやることに意味があるんだよ」

「そうですね、みなさん。それにお兄ちゃんだってミスもします」  
なのはの言葉に同調してかアリスさんもそういう。

「そうだな、あいつ一人で……なんて癪だもんなヴィータ」

「あたりまえだぜシグナム」

副隊長達はそういう、そして私たち隊長陣も目をみて全員で頷きあう。これはキイチにも言っていないこと。それは、いつかキイチの支えになる事、これが私らの今の夢。

「お、模擬戦が始まるみたいですよ」

ラインの言葉に全員が画面をみる、そう思えば今思うところの食堂に全機動六課職員いないのかな？仕事大丈夫かな？

Side out

俺はバリアジャケット纏うとそのまま相手を見た。二人とも俺のバリアジャケットを見て驚愕する

「な、兄さんいきなり本気！？もうならこっちだって、セレナード  
セットアップ。そして同時に、飛鳥<sup>アスカ</sup>降臨」

エリスがそう言うと、エリスのバリアジャケットである、どこかのロククマンの裏ランキング一位のあの人の格好で、まあ顔は普通なのだが……そして肩に止まっていたフォルテは完全な怪鳥に変わる。どちらかと言うとフェニックスだが、エリスはキャロと同じく召喚師、そして今度は

「我らも呑気にしては居られないようだ、ユキアネサ！」

ジンの声に答えるように地面から剣が出てきてそしてジンが触った瞬間にバリアジャケットの装備が完了している、格好はまるでどこかのサムライだ。エリスのデバイスはブースト、ジンは古代ベルガ式。さて、今回はどう来るかな？

そして俺らの演奏会<sup>セントウ</sup>が今、始まった

Side なのは

私たちは今の戦闘から眼を離すことが出来なかった、なぜか、それは私が思っているようなフォワード達の最終的な成長が、まるで模範のように思えるそんな戦闘が繰り広げられていたからだ。キャロちゃんは完全にエリスさんの動き、そしてスバル、エリオ君の動きをジンさん、そして決定的なのは

『クロスファイヤー！さらに、てめえらには手向けだ……ゲート・オブ・バビロンー！』

キイチ君の戦闘方法……全ての攻撃を避けてそして隙を見ては大技を叩き込む、単純にして最も難しい戦術。それにさっきの魔弾でもそう、狙いが際どい所ばかり、たぶんこの魔弾を撃ち込むの役は

「……」

呆然と見ているティアナだろう。

『もう、兄さん！完全に本気じゃん！！もういいもん、いくよフオルテ……幻想攻撃！！』  
ミラーージュ・フラスト

エリスさんの攻撃、鳥に乗りながらの魔弾、バインド、など完全にフルバツクの動きだけど、今は違う、ジンさんがバツクに下がり、そして起こす魔法は……自分の前に魔法陣を展開させてそして出てきたのは、炎の

「……魔人？」

フワード達が口にしながら言う、そうその魔法陣から出てきたのは魔人、というか炎の塊のような人、しかも巨人。そしてその魔人が手を挙げた瞬間……廃墟の一部は炭と化した

『危なっ！おい、エリスお前、俺も殺す気か！？』

『こうでもしないと兄さんに攻撃が当たらないのよ、いきなさい、そして燃やしてきなさい、ジンも使っちゃえ』

そしてカメラはジンさんを捕らえる、そして見るとさっきの大技の間にジンさんはカートリッジを三つも装填していた。

「なにをしているんだ、あいつは！？」

声をあげたのはシグナムだ。それもそうかも、カートリッジシステ



ムは私やフェイトちゃん、そして近代ベルガ式などに使われているけど、あれは最大でも二発が限界、三発なんて使えば体を壊す、そしてそれをして私は盛大にキイチ君に怒られた、さすがに一週間会っても無視なんて死んじやうかと思っただよ

「なのはさん……」

「なに、ティアナ」

そんな時ティアナが私に話しかけてきた

「これが、ヴィータ副隊長の言っていた、上ですか……」

「うーん、まあそうなんだろうけど……けどこれでびっくりしているとたぶんもうすぐ、更にビックリしちゃうと思うよ」

「え？」

そして画面では終わりが近づいていた

side out

「おい、ジン今日は随分とインファイトしないな……」

相手がカートリッジを装填しながら、俺の場合は普通にこの幻想を相手にしながら、操作はもちろんエリスがしているが

「もうなんでこいつ相手にも兄さんは普通に涼しい顔しているのよ、フォルテも援護！」

「ヒャーっ!!」

そしてこの魔人の腕を吹き飛ばし、そのままその腕をフォルテに当てる。そして俺は双銃を構えて

「FinalモードIXツインバスターライフルモード」

「セット……消える、幻想が」

そして俺の放つバスターで魔人が消滅、そしてこの魔法に使う魔力が異常のせいでそのままエリスもダウン、そして今までずっと構えをしていたジン。俺は放たれる前にそのまま片方のこのバスターで迎撃、しかしそれは一瞬で凍った

「遅かったか……完成か？ジン」

そしてそこに居るのは、氷のオーラを纏ったジンが居た。

「セットコンプリート…術式兵装『絶対零度』」

「まさか待っていただけとは、それでは!」

ジンがそういうとすぐに消えた、いや正確には違う縮地だ。俺はそれに答えるように脇の刀、二本で牽制する。

「くっ、やはり見切られましたか」

「ギル爺のほつがまだ早いぞジン。いくぞソルこっちも本気で」

「FinalモードIX」

そして俺の刀は六本に変わる。俺の構えはそれこそフリーだ。まったく緊張などない、だが一方のジンの構えは一瞬の間でもあれば打ち込まれるようなそんな錯覚があるぐらいの構えだ。ジンが完成させたこの魔法。俺の魔法に似ているが俺のように相手の魔法を自分に取り込むのではなく、自分のデバイスに一定の魔力を取り込みそして一気にそれを兵装として装備をする、上、中、下での三段階の兵装のためあいつは一気に三つのカートリッジを使用した。だから体には早々害は無い。そして、俺らは動いた、俺は一瞬で相手の後ろに、それと同時にジンは俺の居たであろう場所に

「秘剣……驚掴み！」

「嵐三連改！」

俺は六本の剣で、あいつは氷でさらに刃を増やした刀で。

「これは一本とられたな」

俺はそういう、その理由は簡単だ。俺の六本の刀は四本になり、二本吹き飛んでいるからだ。

「しかし、まだ四本！秘剣……燕落し！！」

俺の一瞬の動きにジンは鞘に刀を収めた、その瞬間

「氷撃……絶対零度！」

氷が全てを被った。俺はそれを瞬時に回避するべく、二本の刀をまた犠牲にした。ジンのさっきの技は居合いの一種なのだが、居合い

は自分の視点があるが、あの技は正に居合い。球体の範囲でそれを凍りつかせることができる技。まあ教えたのがギル爺だからそれもそうか

「ちっ、いきなりかよ……」

俺は刀をその場で指して、現在一本だ。

「それでも隊長には避けられてしまう。まだまだ精進がたりませんが、今回一本取らせていただきます！ロードカートリッジ」

そしてカートリッジを二本導入し

「ロードカートリッジ……オーバーロード！」

そしてジンは構える、そうその構えはギル爺の必殺技

「……氷激……爆砕氷点下！！」

俺は氷の刃が発生する前にジンの後ろに刀を投げた、もちろんそんなわるあがきはジンの喰らうはずも無くそのまま虚しく後ろに刺さる。そうこれで……いい

「だからな、ジン。お前は爪が甘いんだよ……俺をフリーにさせている時点でお前は、その技を出すべきではなかったのだからな」

「なんですと？……まさか！？」

俺はそのまま向かってくる刃を……片手で押さえ、そして

「コンプレクショ  
掌握」

「終わりにしようか、ジン？」

「術式兵装……銀髪碧眼」

俺はそう言い終わると、ジンを倒しにかかった。

S t S 第九話 現状の主人公の大体の本気？（後書き）

A ' S 編での技をもう一度使ってみました！

SetS十話。一応これで一日目の主なことは終了ですよ、たぶん(前書き)

題名どおり、予定ではこんな感じですよ。最近話の進む速度が遅くて  
もうしわけありません。

StS十話。一応これで一日目の主なことは終了ですよ、たぶん

Side ティアナ

なんなのだ、あれは？ 私らの特訓など、まるで子供遊びのようだ。  
エリスさんは私と同じ年のはず、はずなのに、さっきの魔法の規模をみても桁が違う。そして今の戦闘、ヒイラギさんとキイチさんの戦い。まるで剣が見えない、そしていつのまにかキイチさんの剣が吹き飛んだ、そして今の状態だ

『さて、ジン。終わりにしようか？』

キイチさんがヒイラギさんの魔法を消して、そしてキイチさんの姿を変貌させてそしてキイチさんの不敵な笑み。

「ふむ、やはり今の私ではジンにすら勝てそうに無いのか……精進のしなおしか」

シグナム副隊長がそんなことをいう、そしてフェイト隊長、なのは隊長、はやて隊長は完全にみはいつていた、いや正確にはこの食堂にいる全員が視ているのだ……いや、一人だけ違う

「　　」

アリスさんだ。アリスさんだけがまるで何を当たり前の事を、みたいなそんな顔で今の戦いを見ている。そうこれがLOSなのだ、私は思った。

戦闘で動きがあった、それは一瞬だ。ヒイラギさんが動いた瞬間、



ヒイラギさんは動けなくなった。

『な、なんだ!?!』

それは、もつとも簡単な魔法。ただどここんな事を通常はしない、それは

「バインド?しかも典型的な設置型。」

フエイト副隊長がそういいながら顔を傾けていた。そう、キイチさんはイツ、それをしたのだ?

『甘いなジン。俺がなぜ剣を飛ばしたとおもっていやがる』

『な、まさか!?!』

そう私たちもキイチさんの言葉で気付いた、それはあの六本の刀の落下地点から全て魔法陣でつながれているのだ、そう刀を基点にして発生させたんだ。こんな発想力は尋常じゃない。それも戦闘中に使用するなんて

『さて、あとは同調開始』  
トレスオン

キイチさんはそう言うつと無手で構えていた拳を、瞬間的に出した剣を握り、そして

『これで俺の勝ちだ?それとももう一回カートリッジ使うか?』

『すでに三つをこの装備、そして今あなたの装備で二つ、あと二つでこの環境を打破するのは無理でしょう……降参です』

『そう』

そして戦闘は終わった。スバルは興奮気味だった。こんなスバルはたぶんあのなのはさんに会った時以来であろう、まあそのときは泣いていたけど……

「それじゃあ、みんな解散ね。キイチ君たちの戦闘も見れたことだし、さ、みんな仕事に戻るで……なのはちゃん、フェイトちゃんは部隊長室に」

「はい」

そして皆が解散し、私たちも今日は解散となった。

Side out

俺は完全に伸びているエリスをおぶり、そしてジンと共に帰路を辿っていた。

「やはりまだ隊長には及びませんか。これではまだ“第二号”で互角でしょうね」

「まあ精進しろ。こいつもな……まったく一度の幻想攻撃とフォルテミラージュイラストの制御だろ、それだけでこれとは。もう少し特訓させるかな？ フォワードと一緒に」

「……………それはどうかと」

「ふん、冗談だよ。まあアリスならフォワードたちとタメはれるだ

ろうけどな」

「しかし、アリス殿は……確かにあの身体能力なら可能でしょうが……」

そんな時通信が入った。

『こちらはやてですう〜キイチ君ですか？』

「それ以外に通信が出てきたらどうする気だったんだはやて？まあいい、それでどうかしたのか？」

『ちよいとキイチ君はこの後部隊長室に来てくれるか？部屋割りの事もあるし、それに今後の動きとかもあるんよ』

「わかった」

そして通信を切る、そしてそれと良いタイミングでアリスの登場だ。

「お、丁度良いところに来てくれたなアリス」

「どうせ、お姉ちゃんを運んでおけでしょ……それぐらい分かっているよ、けどお兄ちゃん、まだ私たちの部屋割り聞いていないんだけど、それにまだ荷物は食堂におきっぱだし」

「安心しろ、それを今から聞きに行くんだよ。ちなみにお前らは同室でいいんだよな」

「うん、お姉ちゃんも私もそれがいいってことになっているから」

俺は背負っているエリス、そしてフォルテをアリスに頼んで、俺は先に戻ることにした。まあ簡単に言うとな面倒なので、普通に転送した。もちろんさすがに部屋の中ではなく、部屋の目の前だ。俺は扉をノックした

「失礼するぞ、LOS隊長のキイチ・スターリヴァーだ」

「あ、キイチ君？そんな堅苦しいのは無しでええよ、ささ、入って入って」

扉の向こうからはやての声がしたので俺はそのまま扉を開けると、  
またもさっきあの場で再会したような衝撃が走った。

「……今度は、はやてとリインフォースかよ」

まあ簡単に言うとな……また抱きつかれた。

「いやあくなのはちゃん達だけはずるいからなあ〜これもこれで再会のしるしや、ああ、ええ匂い」

「ああああ！ずるいよはやてちゃん！匂いなんて！」

「そつだよはやて、それにリインフォース」

それから数秒、俺はこの二人を引き離れた。はやてはなぜか満足した顔で部隊長のデスクに座った。そして後ろにはリインフォースが立ってる。ちなみにリインは今はお昼寝だそつだ。

「それではやて、俺らの部屋割りを教えてくれないか、それと他の伝達事項も」

「OKや、まずは部屋割りな。それはなのはちゃん達に後で案内してもらいなはれ。ちなみにキイチ君の部屋は一番大きくて私とリンフォースの部屋となのはちゃん達の部屋の間やから、いつでも夜這いに来て「殴るぞ」……それじゃあ、次は注意事項やな……なんかあったかりんフォース」

「いえ、まだ我々も発足したばかりですのでマスター。それにLOSのメンバーは皆礼儀正しいかと。なにか問題がでればすぐにでも対処するでしょう」

「と、言うわけなので問題ありません。それよりもこれからキイチ君の話を聞きたいな？」

「は？俺の話、なんかあったか？」

「あつたも何も、今の階級忘れてるよキイチ」

フェイトがなぜか呆れながらそんな事を言っている。

「そうだよ、キイチ君。さっきのあの歓迎式でもそうだけど大体の管理局員はみんな憧れなんだよLOSに。噂からも一杯聞いているし、それになによりもキイチ君がトップだし」

「俺がトップなのが変なのかなのは？それにしても一応、これでも色々と隠して行っているはずだが、だって俺以外の隊員情報は非公開のはずだが」

「それでもだよ……それにキイチは私たちに無茶するな言っておいて自分が一番無茶しているでしょ……」

「ぐ、そ、それはだなフェイトって、もしかして呼んだ理由って」

「そうや、キイチ君がまた一人ですべてやろうとしているのを止め  
にきたんよ……それじゃあまずは何なんであそこまで強いのか……そ  
れからちゃんと義妹についてもな」

「え？え？」

「なのは、バインド」

「了解、それじゃあO H A N A S H Iなの〜」

「ぎゃあああああああああ」

俺の声が部隊長室から広がったのは誰も知らない、理由はリインフ  
ォースが結界を張ったからだ。

S t S t 十話。一応これで一日目の主なことは終了ですよ、たぶん（後書き）

もう、私これを書いているのに一年以上なんですか

これからもがんばっていきますのでヨロシクお願いします

StS十一話 LOSが良く分かる解説(前書き)

格ゲーでいつも主人公の敵をマイキャラにしています。ブラックサレナです



## StS十一話 LOSが良く分かる解説

Side スバル

みなんであの試合を見た後、今日は後で行われる歓迎パーティーに合わせるためにみんな急ピッチで仕事をしていた、私らフォワードと言うとさっきの映像を渡されてシグナム、ヴィータ副隊長による講義を受けていた。解散されてオフと思ったらその後すぐに収集がかかった。なのはさん達は現在、隊長だけの会議の様。

「どうだ、お前らは……あいつの動き、魔法、そして顔、一つ一つがお前らにはいい勉強になっただろう？」

ヴィータ副隊長がそう言いながら腕を組んでいる。

「しかし、我らが教えてまだ数週だが、しかしこれはな……まさかキイチがバリアジャケットを着ないで勝負するとは、しかし的確な注意だったな。キャラもどうだったのだ、エリス殿の指導は」

「は、はい！その、なんていうか……凄く暖かくて、それで……凄く冷たかったです」

キャラは何を言っているのだろうか？私はよくわからないが、シグナム副隊長は「ふ、そうか」と、笑っているし。

「おめえら、明日からはもっと厳しいトレーニングだからな、覚悟しろよ！」

「」「」「はい」「」「」

「ふん、返事だけは一人前だな」

「ヴィータ、そういうな。お前らも今の映像で質問があるのなら、私たちに聞いてくれ。まあキイチに質問するのが一番なのだろうが……」

私は意を決して質問した。

「あ、あのう質問良いでしょうかシグナム副隊長」

「あ、ああいいぞ」

「あのう、さつきキイチさんとヒイラギさんが剣で打ち合っていたのは、あれって魔法の補助は、やはり」

「そうだ、あれはあの二人の剣技だ。スバル、そしてエリオなどの近代ベルガ式では魔法のレベルも上げなければならないが、それと同時に自分の武器の体術も一緒に学ばなければな。スバルの場合は格闘技だろつな、エリオの場合は槍の使いだ。まあ両方ともキイチに聞けばいいだろうな」

「はい」

隣のティアナが手を挙げた

「おう、どうしたティアナ」

次はヴィータ副隊長が答えてくれるようだ。

「あのう、私らの教導はなのは隊長ですよ。さっきの言い方だと」

「はあく、キイチに聞いたらお前らの教育もするそうだ、良かったな。キイチから教育なんて滅多に受けられるもんじゃねえし。私が受けたいぐらいだ」

「は、はあく。す、凄い！凄い！凄い！」

「てい、ティアナ」

「もう少し喜びなさいよ、スバル！あのLOSの隊長から教えてもらえるのよ」

「ま、まあうれしいよ、うれしいけど……なんかティアナ、興奮しすぎ」

「え……あ……」

ティアナも周りを確認すると、今まで無いティアナにエリオ達は目が点でそしてヴィータ副隊長は

「てめえはそんなにキイチに教えてもらいたかったのかよ!？」

久しぶりにティアナが怒られるのを見た。

Side out

「さて、そろそろ本題にはいるつか」

俺は拷問を終えて、そしてその首謀者がそんなことを呑気に言いや

がった。

「本題ね……それで、本当はなんで呼んだんだ？まさかただ単に部屋割りの話じゃないだろう？もうすでに部屋割りの情報はアリスに送ったしな。」

「まあこれは簡単に言っと私のお願いみたいなもんかな」

「はやてらしくないな、随分と謙虚じゃないか」

「一応な、これでもこの部隊長さんやもの。それじゃLOS隊長さんに聞くで……部隊のプロファイルの詳細、教えてくれますか？これは私的ではなく、機動六課の行動範囲などのために」

そんな真面目な対応のはやて、そして周りにいるのは、フェイト。俺は、申し訳ないが

「く、く、く。あはははははははははは」

大声で笑ってしまった。

「くくくえ？」「」「」

この場にいた四人が全員が驚愕した。

「まったくそんな堅苦しくしなくても…ああ、だめだ、はやてがそんな完璧なんて、ああ腹が可笑しい、あははははは！それにお前らもそんな緊張した顔で。あははははは」

「もう、キイチ君！こっちは本気なんよ！？」

「まったく四人揃ってそんな面持ちで、可愛い顔が台無しだな……」

「もう、キイチ君そういう、ふざけたことは」

「そうだよ、キイチ」

「はあ……だから、俺がいつふざけた？」

俺はそう言つとはやては黙った。いや、正確に言つと全員が静かになつた。

「ふ、はやて俺はお前の友達として今回俺の所有物であるLOSを持ってきただけだ。だからお前さんが欲しいデータぐらい別に見せてやるよ」と、言つてもそんな正式なもんは無いから、俺の口頭となるがいいか？」

「キイチ君？」

「はやて、俺はな、たぶんお前よりも十分に修羅場を抜けているんだ、もつと気負い無くしようぜ。はやてらしくないぞ」

「はあ、キイチ君にはかなわへんな。それじゃあ、お願いできるかなLOSのメンバーの紹介、今度は中身の方を」

「了解、了解。それじゃあまずはアリスからいこうかな。アリス・スターリヴァー、とある理由で俺の母さんが保護を申請しているから実質俺の妹だ。まあその理由はさすがにいけないが、それはあいつらから聞いてくれ。それじゃあ次にパラメーターだが、あいつに

はリンカーコアがない」

「え、ないの？」

「ああ、なのは無いぞ。と、言っても戦闘なら無手で相手となると俺と互角ぐらいの強さはあるからな」

「キイチと無手で同等。今のフォワードじゃあ」

「まあ勝てないだろうな……ちなみに恭也さんにも勝っているからな、腕は保証しよう。」

「え、えつとそれがアリスさんの「いや、まだ一つある」……まだあるんか、私は普通に恭也さんよりも強い子で十分やけど」

「あいつの稀少能力レアスキルを言っておく、あいつの持っているスキルは、演算処理、ようは頭の中の回転が異常なんだよ、簡単な計算ならたぶん、今の管理局の大型のそれこそアースラ級の船のコンピュータよりも早い、これがアリスについてだ」

「凄いな、キイチの部隊は……これで非戦闘員なのか？」

「まあ、魔法が使えないしな。それじゃあ次はその姉と行くのか、まあエリス・スターリヴァー、さっきと同じな俺と苗字が一緒なのは。それと理由も一緒、それじゃああいつの魔法はミッド式でサポート型。けどいつも肩にいるフォルテ、あいつは魔鳥でな。あいつの力の解放、それとさらに強化が出来る」

「ああ、それなら私たちも見たからさっきの戦闘を」

「そうか、ならばあとはあいつの独自魔法の幻想攻撃ミリージュブラストの説明か。まずはあの魔法は俺が作り上げたミッド式だが……まあ魔力量が異常に高くないと使えない代物だ。ちなみに今回は炎だったけど場合にに応じて属性を変えてあいつは召喚する、まあ言わばうちの召喚師だ」

「もうなんか驚くことしか出来ないよわたし」

「なんか酷くないかフェイト。それじゃあ次はジンか、LOSの副隊長ジン」ヒイラギ。あいつは、過去は面倒なので省く。ただあいつのあの口調はどうやっても直らなかつた。それじゃあ魔法は見たってさっきの戦闘を見たら分かるだろうけど古代ベルガ式だ、カートリッジも装備しているが、六つだ。まあシグナムと同じだと思ってくれ。ちなみにあいつのデバイスの出はマジで古代からの継承だからな。」

「それじゃあシグナムとか一緒なのか？それなら今度はそれを含めてトレーニングを」

「ああ、なのは。トレーニングは俺だけだ参加するのは」

「ふえっ!?!」

「そうなのか……それはどうしてだキイチ」

リインフォースがああの秘書もっていきそうな板をだしながら聞いてきた。おいはやてこれはお前のシユミか。まあいい

「まず、お前らわすれているけど俺らはLOSだぞ、緊急の依頼、まあぶっちゃければミゼットのばあさんらの三提督からの任務と、そして上からの任務さらにSランク以上の極秘任務の担当なんだか

ら、隊の一、二人はすぐに出撃できるようにしないといけないからな。これのおかげで俺らはリミッターが強制ではないんだから」

「そ、そうだったねキイチ君。それじゃあトレーニングにはキイチ君だけだね、くるのは」

「ああ、大体のデスクワークはアリスが担当だしな。俺は単なる突撃隊長だからな、それとお前ら指導も一応考えているからな」

「私たちの？」

「ああ、フェイト、なのは、はやて、シグナム、ヴィータ、それとリンフォース。お前らのトレーニングは俺がしようと思っていたのだが」

「……絶対に参加!!」「……」

「い、いやそんなに力強く言わなくても……まあそれだけ気合があればいいけどさ。そう思えばシャマルは視たけど、ザフィーラは？」

「あ、ザフィーラはな……アルフと一緒に今はハラオウンとテストロッサ家に居候しているで。理由は、まあ言うならば家族の番人やそうや」

「けどたぶん一番の理由は、あれだと思うけどね」

「あれ？」

俺はフェイトに聞くと笑いながらこう答えた



「あ、そうかキイチは知らないのか……実はね、ザフィーラとアルフ、夫婦になったんだ。それでもうかれこれ二年、それでこの前判明したんだけど……赤ちゃんできたみたいなの、だからザフィーラは簡単に言うところうちにこないのはそれも原因の一つなんだよ」

「それでマスターには私もついているからな、安心していいのだろ  
う」

はあくあいつら、当初からいい関係だと思っていたけどそうやって  
いたとは。

StS十一話 LOSが良く分かる解説(後書き)

最近、筆がもとい手が進みません。

それでは次回会いましょう。バイー

StS十二話 引越して時間がかかりますよね(前書き)

更新が遅れてすみません

StS十二話 引越して時間かかりますよね

さて、そんな感じでの俺らの世間話は終了。

「それでじゃあ解散や。キイチ君は見学とか、してきいな。私はまだここらへんの書類が終わっていないくて……」

「さ、マスター。やりますよ」

はやての勧めあり、俺はそうすることにした。てか、その前に俺の部屋の案内だな。俺はなのは達と一緒に部屋を出て

「すまんが、なのは、フエイトこの後暇か？」

俺の質問になぜか、二人して大きく頷いた。

「も、もちろんだよ」

「うんうん、たぶんエリオ達はシグナムたちが見てくれているから。ささ、一緒に行こうキイチ」

「誰が、エリオ達と一緒にいると？」

「「え!?!」」

俺らの会話にいきなり入ってきた声の主は、まあ簡単に言うと俺らの後ろの廊下から歩いてきているのだが、それは

「お、シグナム。さっきぶりだな」

「ああ、キイチ。それでそこにいる隊長陣らは一体これからどうしようとしていたのだ？」

「あ、ああ俺がまだ部屋が分からないから。隣のなのは達以案内してもらおうと思ってな。それがどうかしたか？まさか仕事とかあったりしたのなら、別に無理につき合わせる気はないのだが」

「う、仕事は無いぞ。それとお前の部屋は、そうなる……なあキイチ、私も案内に加わっても？」

「仕事がなければな、別に」

「と、言うことだテストロッサ、高町。……抜け駆けはご法度だぞ」

「おい、お前ら行くぞ」

三人してなにか話していたが、なんだろう？まあ気にしなければいいだけか。

Side ジン

我々は主の情報により部屋割りがさきほど、アリス殿の通信機から送られてきた。ちなみにこの通信機は、我が師でもある隊長の祖父、ギル・アルバート様を作ってくださいったお手製だそうだ、なんでもリンカーコアがなくて、デバイスがあっても意味がないだろう、と言うことでデバイスとは違う端末らしい。そしてさつき起きたエリス殿なのだが

「兄さんも完全に手加減無しで。鬼か、私の兄は」

「もうおねえちゃん、お兄ちゃんだってお姉ちゃんミラージュ・フロストが幻想攻撃を使  
うから、お兄ちゃんだってお本気になっちゃったんだよ……たぶん」

「いいえ、兄さんは絶対遊び半分でお本気になつたわよ、どう思うジ  
ン？」

「隊長が本気でも真面目ではありませんからね、さっきの戦闘でも  
私達に隊長は本気だったでしょうが、それでも真剣ではありません  
でしたから。まだまだ精進が足りませんな」

「ジンさんもそんな事を言わないでください。はあくまた報告書を  
書き直さないと」

「なに、アリス。今度はどんなのが来たのよ、どうせ嫌がらせでし  
よ、本部からの」

「うんうん、今回は三提督のが二通に、ミッド政府の督励が一通、  
それと管理局からの嫌がらせが三通。」

「同じ、所なのに嫌がらせて。どんだけこの部隊は上から嫌われ  
ているのよ」

「ふむ、それは仕方ないでしょう。隊長は我々の身元を隠すために  
色々との弱みに付け込んで誤魔化していますからね。たぶん管理  
局の味方と言うのなら……三提督、それとナカジマ部隊長、ハラオ  
ウン家、そしてここでしょうね。ここの偉いポディションはすべて  
隊長の幼馴染のようですし」

「ああ、それはあの会ってからの抱きつきでわかったわ……アリス

も大変よね、ああいう鈍感な“義兄ちゃん”だとさ」

「な、お姉ちゃん！／＼／＼／」

「ふむ、私はここのようだ。隊長とは少々離れているようだが……」

「まあそれはしょうがないでしょう。私らは居候の身でもあるんだから、それと私とアリスは一緒ってお願ひしてあるから……この大きな所か」

「相も変わらず姉妹仲がいいな。それでは失礼しよう」

「はいはい、それじゃねあんたも」

「それでは」

そして私はこれから一年使う自分の部屋に自分の私物を出し始めた。

Side out

俺は自分の部屋を前にして言いたいことが一つあった……ドアがデカイ！なんなのだ、このドアは。ちなみにロックはカードというハitek。そして俺らはそのまま中に入ると

「なんじゃこりゃ！？」

そこに広がるのは間違いなくスイートルームのような広さで、しかもデスクは一言言えばでかいしこれなら軽くまらデバイスの調整も出来そうだ。そしてそのデスクには何か金属の物が置かれていたのだが

「これはなんだ？」

それは鍵だったのだが……これはどこの鍵だ？

「な……主、これはどうかと」

シグナムがそんな声を挙げてきた、と言うことは

「これはやてのかよ……なんでここにあるんだよ」

そして俺はその鍵を取るとそこには紙があった、何々。なにかあると問題やから一応、部隊長の八神はやてとリインフォース、リインの部屋の鍵を渡しておきます、追伸、夜這いは大歓迎や。俺は最後の分を見た瞬間に破り捨てた。しかしなにかあると不味いのは確かなので俺は鍵を貰っておくことにした

「不味いことねえ、まあリインフォースが居る時点でそれは大丈夫だろうけど……そしてなのは、それはなんだ……俺には鍵にしか見えないのだが？」

「もちろん、私とフェイトちゃんの部屋の鍵だよ」

なにを笑顔でいうこの娘は。

「なにかあると不味いしね」

手紙で書いてある事と同じ事をいうなフェイト。

「どちらかと言うと、俺みたいな男に鍵を渡すのもどうかと思うぞ、



間違いとかあったら、どうするきだ、お前ら？」

「キイチ君がそういうことしないのはわかってるもん、それに一番頼りになるのは本当だし。なにか有った時の頼りにもなるし（本音は、その間違いとかなんだけどね／＼／＼けどそのばあいはフェイトちゃんと一緒、けどフェイトちゃんだしOKかな）」

「はあ、まあ貰ってくよ、さてそれじゃあこの部屋を俺ように変えるか」

「キイチ、先ほどから気になっていたのだが……」

シグナムがそんな事を言いながらデスクに置いてある、なのは達の鍵、はやて達の鍵の隣にさらに鍵を置いているがもうスルーだ。

「どうかしたのかシグナム？」

「ああ、その……他の隊員はなにかしらの荷物はあつたがキイチは」

「ああ、俺の荷物だろう、俺のは」

俺はそう言いながら指ばっちんをして王の財宝の空間を出す。そして俺の荷物を取り出した。

「相変わらず便利だなその空間は。そして相変わらずのギターか」

「ああ、こいつがないとどうも狂っちまうんでな。それにここはミッドだから、ギターも無いしな。丁度いいと言えば丁度良いんだよ、それじゃあ俺はここで整理するから、ありがとな、お前ら案内」

「あ、うんそれじゃあねキイチ」

「隣だから、遊びに来てもいいからね」

「私の部屋は……そのキーに書いてあるそれではな」

そして全員が部屋から出て行くのを確認して、俺はすぐに取り掛かった。やはり俺の階級、まあ少将のせいかな部屋がこうなるのは、まあしょうがないかと思いつつもすぐにある装置を取り付けた。それは

「これでいいかな？クアットロどんな感じだ」

『うんキイチ隊長君、OKのようです。電波の状況もいいようですし、それにログも残らないようになっていきますから』

この装置は簡単に言うとスカリエッティのラボに繋がっている伝達機器の一つなのだが、大部分は俺がラボに赴けばいい話なのだが、念には念を入れてのこれだ。ちなみにこれは普通の人じゃ触ってもなにも反省しないただの箱となっている、立案者は俺で、製作者はクアットロとスカリエッティだ。てか、こいつは毎回俺の言い方が違うのはなんでだ？

「今現在、俺は機動六課にいるよ」

『ああ、例のロストログギア専門の……もしかしたら私たちの敵になっていたかもしれない部署ですね』

「相変わらず耳が早いな。スカリエッティは？」

『なにか言ったかい？キイチ』

「居たのなら返事ぐらい欲しいものなのだがね」

『君のことだ、どの道私には話しかけてくると思っていたからね、それでどうかしたのかい？』

「簡単な質問さ。今度のレリックの出現ポイントの割り当てをお願いしたいのだが、大丈夫か」

『すでに調査済みだ、君の方にもそれはもう送ってある』

「すまないな、それじゃあ『ちょっと待ってくれ』……なんだ」

『今度の機会にと思っていただけだが、さすがに君も機動六課に入つたのならばあまりこちらに来れないだろうから、先に言っておきたいことがあった』

「どうした改まって」

『うむ、ゼスト隊からの情報なのだが。どうも最近教会の方が何かいざこざがあったらしくてね、現在、あのルーテシアならびに彼女の執事、そしてアギトが探っているのだが』

「……子供になにをさせているんだよお前は」

『そういうな、これは彼女、そして彼女の母親からのお願いなのだ。自分達もキイチの力になりたいといってな、君が魔法の基礎を彼女に叩き込むから』

ちなみに彼女の執事とは、ルーテシアのガリユーのこと。アギトは

原作どおりゼストさんがとある研究室から助け出していた。まあ原作と違うのはそのときのメンバーがクイントさんに、メガー又とゼストだったのは言うまでも無く、俺がちよくちよくルーテシアに魔法を教えていたのもまた事実。まさかあそこまで才能があるとは

「それで、なにか分かったのか？」

『それがまったく。まあただの教会内の論争なら言いだけでも、過激派なんてものもいるらしいからな』

「……そうか、情報、感謝する。それとルーテシアにありがとうと  
『そういうのは娘本人に言って欲しいものね』メガー又さん」

そして今度はメガー又さんが登場

『もううちのルーちゃんなんて素であなたのことをお兄ちゃんと呼んでいるのよ。それに今回の事だってルーちゃんがやりたいって言ったんだモノ。もちろん私は反対したのだけど、まあガリユも居ることだし、それにゼストもクイントも良いじゃないかなんていうだもの。まあそんな感じだからお礼ならちゃんと来て言ってねキイチ君？』

「……善処しましょう。けどさすがに一週間はいけないかと」

と、俺がそんな事を言うとスカリエツティは笑い出した

『ク、ク、ク。キイチ、普通管理局員が犯罪者の基地に一週間のうち一回来る方が可笑しいと思うぞ。まあ私たちも君が来てくれるのは大いに結構なのだな』

「はあ、それじゃあ一回切るぞ」

『ああ、それではな』

そして俺の機動六課への移転は本格的に始まった。

StS十二話。引越して時間がかかりますよね(後書き)

最近、タイピングが進みません。

StS十二話。盗み聞きは恋する乙女なら無罪です（前書き）

更新が遅れました。

StS十三話 盗み聞きは恋する乙女なら無罪です

俺はある程度の荷物整理を済ませて、現在俺は機動六課の散歩中だ。まずは施設内、俺らのまずは社宅、そしてそれに属する敷地内にある機動六課。俺は最初に言ったのだがロビーに食堂、シユミレーシヨンス室、そして保健室だ。俺はそれ以外の施設を見ていないので俺はまあそれを見るように徘徊をしていた。そしてここでやはり問題が起きた、それは

「あ、お、お疲れ様です！」

会う人、会う人、全員敬礼をする。非常に調子が悪い。本局ならば少しなれようと努力をしたのだが、これは無理だ。そして次は

「あれがああの伝説の」

「イケメンだし、しかもかつこいいー！」

「けど、隊長陣が凄かったよね」

「なんで幼馴染らしいよ」

「……スターリヴァー少将……」

「……はあ……」

これだ、噂をされるのは悪くないのだが、さすがに女性からの影の噂は怖いものがあると思うのだが。そして俺が最初に着いたのは

「これが、管理局推奨、最新のへりか」

「ああ、まだ点検中なんで、触らないでください」

俺がへりを見ていると後ろから声が聞こえた



「ああ、すまないな」

「うおっ！？す、スターリヴァー少将でしたか、こ、これは失礼を」

「なに、俺が悪いのだからそちらには非は無いだろつ。えっと君は」

「あ、挨拶が遅れました。ヴァイス・グランセニックって言います。へりの操縦を担当させていただいています」

「ありがとう、俺はキイチだ。少将なんて呼ぶのは辞めてくれ、非常に背中が痒いのでな」

「そ、そうなんですか「おい、ヴァイス」……あれ、姐さん？」

「ちょっと、この資料でつて！キイチ、どうしてここに？」

「ね、姐さん？」

「あ、ああシグナムか。俺はタダ単に散歩、徘徊って感じだな。まだ機動六課の全体を知らないからな、自分の目で確認しようと思っ  
てな」

「そ、そうなのか……それではヴァイス、これを頼んだぞ。それではな」

そしてせかせかと、消えていったシグナム

「あんな姐さん、初めてみた……」

「どうかしたのかな、シグナムは？てか姐さんとは？」

「あ、そうでしたね、実は自分姐さんとはこの機動六課になる前に  
なにか仕事で一緒になりました、それで愛称って感じで」

「なるほどな。まあそれじゃあ仕事の邪魔になってもしょうがない、  
俺は消えるでしょう、それではヴァイス」

「あ、はい（この人、めちゃくちや、噂どおりのかつこいい人だぞ。  
もつと話してちよつとぐらい仲良くなりたいなあ、てか憧れるな  
あ）」

俺はヘリポートを後にして、今度は少し外に出ることにした。それ  
は海の近く、それがこの機動六課の敷地である。

「……海鳴のようだな、ここは」

今はもう、すでに二年以上言っていない実家。メールや通信などで  
母さん達とは連絡を取るのだが、さすがに帰っていないな。アリサ  
なんて、このまえ連絡したら怒られたし、すずかは泣いていたし…  
…なんだかカオスだったな、なんでだろう？

「あれ？キイチ？」

俺が海を見ているとそこにある人がやってきた、それは

「フェイトか……どうかしたのかこんなところに」

「それはキイチも同じだと思っけど。それに今日はキイチの部隊が  
来た事もあって、フォワードのみんなはさっきの戦闘の反省会を開

いているし、それに私もさつき書類のほうの仕事が終わったから。それであそこからキイチが見えてね」

そして指差す方向は、たしかに隊舎だった。

「なんか、キイチって少し変わった気がする私は？」

「うん、それってどういう意味だフェイト？なんかひねくれたか？」

「うんうん、そうじゃなくてもつとかつこよくなつたって感じかな」

「ありがとよ。そう言ってくれるのは素直にうれしいがな、と言ってもお前らも一年みないぐらいで出世はしているし、綺麗にはなっているしで俺もびっくりはしているんだけどな」

「き、綺麗って／＼／＼／＼キイチ。まあ出世って言うならキイチのほうが凄いでしょ、この前クロノに聞いたら化け物って言っていたよ」

「あいつからの任務、キャンセルでもしてやるかな」

「もう、そういうのは相変わらずなんだから……ねえ、キイチ。私たちを鍛えなおしてくれるんでしょ？」

「まあな、それも一応目的だし」

「……それってなにか」スターリヴァー隊長、至急お戻りください。地上本部よりお客様が来ております』……あ」

「すまん、フェイト。また今度」

そして俺はこのタイミングに感謝されながらも隊舎にむかった。もし、スカリエツティの代わりのようなイレギュラーに備えておきたいなぞは、俺も言えないしな、それにお前らの過度のカートリッジの反動の軽減ってことも言えん。そして俺がロビーに着くと、そこには地上の制服を来た

「ドゥーエか……久しぶりだな」

「はい、少将様。少し時間でも？」

俺はロビーの子に礼を言うと俺は食堂に案内することにした。

S i d e    フェイト

キイチが海を見ていたとき、少し悲しそうな顔をしていたのは気のせいだったのか、けどキイチはまたなにか隠している。これは分かる、これでも執務官の長い私。だからこそキイチがなにかをしようとして“また”無茶をするに決まっている、だから私はその力になりたいんだけど

「……まだ及ばないかなキイチ？」

と、そんなときにバルディッシュから通信が入る。

『フェイトちゃん、大変大変』

なのはが慌てたように出てきた

「……どうかしたの、なのは？」

『どうかしたの？じゃないよ！キイチ君のお客さんが地上本部の方で、しかも凄く綺麗な人で、しかも今、楽しく談笑しているの！？』

「それは本当！？」

『間違いないよ、今、私とはやてちゃんて食堂にいるんだけど……  
フェイトちゃんもってフェイトちゃん！？』

すでに私はかけだしていた

「マスター、なのは殿の話は」

「うるさい、バルディッシュ！そんなの後」

「……イエッサー……」

私、なのは、はやて、シグナムは一定の協力をしていた。それはキイチにアタックする時は、報告。返事を報告など様々だが。私はキイチが好きだ、もうこれは小学生の時から、そうあの事件で私の家族を救ってくれたときからずっと。私のバルディッシュの画像データはエリオとキャロ、そしてキイチだ。キイチの画像は小学生から、中学まで。それ以降はあまり会わず、それに仕事も忙しくのせいで。

そして私が到着すると、ドアに張り付いている四人

「テストロツサ、随分とはやいな……さすがと言っべきか？」

「シグナム、そんなの後だよ。今は」

「そうだな、今はあれだな」

そして物陰から私たちはキイチと、そしてその前に居る女性に目を向けていた、確かにキイチも笑っているし、彼女も笑っている……  
一体、キイチと彼女はと言う関係なんだ？

S i d e o u t

StS十三話 盗み聞きは恋する乙女なら無罪です(後書き)

バイトをしていると、更新速度は落ちてしまってますいません

ショーケースのためがんばりって居ます。今日この頃のブラックサ  
レナでした。

次回もよろしくおねがいします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8551/>

---

魔法少女リリカルなのは～少年の願ったり叶ったりの世界！？～

2012年1月13日23時58分発行